

---

# 青色吐息

かいとーこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青色吐息

### 【Nコード】

N2509S

### 【作者名】

かいとーこ

### 【あらすじ】

生贄になるために魔術結社に召喚された聖良は、自分を食べるはずだった竜に助けられる。その竜は、聖良以上に不運な元人間の魔術師だった。

生傷の絶えない童顔少女と運以外には恵まれたロリコン魔術師の、不運で青色な日々。

# 1話 生贄と竜 1

「ごうごうと耳を塞ぐ風の音で、聖良は風の強い日に屋上に閉じこめられた日の事を思い出した。

あの時も辛かったが、まだよかった。自分の立場、なぜそうなったのか、そこがどこなのか、いつ助かるかが分かっていたのだ。それさえはつきりしていれば、耐えられない事ではなかった。

しかし今は違う。先も分ならず、絶望のみが目の前に広がっていた。

気付けば知らぬ場所にいた。

家への近道だと、神社の中を通り抜けたのがいけなかったのだろうか、ぼんやり思った。神社に悪さはしたことも無く、それ以外でも悪い事など何もしていない。もしもあえて何か悪い事をしたと言うなら、夕べご飯を残したぐらいだ。それとも、ずっと前に買い物を買ったとき、釣り銭をほんの百円ばかりちよるまかしたのがいけなかったのだろうか。しかしそれは元々は彼女の財産であり、搾取された被害者なのだから悪いことの内には入らない。

そんな取り留めのないことを考えるのは、現状を認めたく無いからだ。

夢なら覚めてくれればいいと何度も思ったが、これは現実だと頭はどこかで分かっていた。

神社の境内で突然目眩がしたと思えば、知らぬ場所において、知らぬ男達に囲まれ、よく分からないうちに動くことが出来ないようにされて、今に至る。

ああ死ぬんだ、と、霞んだ意識の下で思う。

寒く、手足が氷のようだった。血がたくさん流れたから、このまま下ろしてもらっても、きっと死ぬのだろう。

手足のように、心まで凍ってしまったように動かない。考えることを放棄しないと、気が狂ってしまう。

死ぬという現実には鈍い心をまだ動かしていない。しかし現状を直視してしまうと、無駄に騒いで死期を早めてしまいそうだ。

なぜこうなったのかよく分からないが、彼女を押さえつけた男達は、決して楽しげではなく、むしろ謝罪しているように見えた。言葉が理解できなかったのも、本当は何を言っていたのか分からないが。

それでも彼らは彼女を犠牲にして、それに少なからず罪悪感を覚えていたのは確かである。

今、彼女は巨大な生物の前足に捕らわれて、広大な森の上空を飛行して、どこかに運ばれている。

その前足の鋭い爪が、獲物を逃さぬようにがちりと食い込んでいく。身体をナイフで刺されているようなものだ。爪が食い込んでまだ死するほどでは無いが、これが抜ければ大量出血は間違いない。

聖良には、なぜ自分がこのようなファンタジー映画のような世界にいるのかは理解できなかったが、このよく分からないこの怪物の餌として、あそこに転がされたのだという事だけは理解できた。

だからできるだけ考えないように考えないようにと、ずっと目を閉じている。それでもあの男達に対する恨みと、理解を超えた現状に対する呪わしさは湧いてくるが、今のところは吹き出す事なく、ぼんやりとしている。

しかし不安と恐怖というのは、本人の意志にかかわらず、爆発するように全身に広がるものだ。広がれば自分の意志ではどうにもならない。

爪が食い込み、息をするのも怖い。

この後どうなるかは、考えるだけで恐ろしい。今の内に暴れて死んでおいた方がいいのではないかとすら思ったが、その勇気も気力も無い。それにまだ希望はあるのだ。

獲物を巣に持ち帰る理由として考えられる大きな可能性が、一つある。

子供がいるのだ。

自分で獲物を捕らえられない小さな子供。そうでなければ、その場で食べてしまえばいい。

この巨大な化け物の子供なら、大きさは聖良と同じほどありそうだが、それでもこれよりはずっと相手をしやすいだろう。

その前に、この爪が抜かれた時の事は、考えないようにした。不思議とそれが上手くいく。今の心はかなり鈍くなっていて、ちょうど寝起きの時のような感覚が続いている。考えることが出来ないわけではない。しかし鈍いのだ。それが寝起きと似ている。

そんなことを考えていた彼女は、突然まぶた越しに感じていた光が薄れたことに気付く。

化け物が咆哮した。

キンキンと耳の奥までかき回すような、恐ろしい咆哮。そして彼女を掴んでいた前足に力が入れられ、締め付けられ、爪がより深く突き刺さる。

内臓にまで届いたのか、血を吐いた。力なく垂れ下がった手足から、血が滴り落ちる。

遠のく意識に、彼女は安堵すら覚えた。どうせ死ぬのなら、意識などいらぬ。

しかし直後に背中に衝撃を受け、せつかく意識が遠のいてくれたのに、彼女は覚醒してしまった。

薄暗い中、視界の片隅のある光のおかげで、ここがどういった場所なのか、ほんの少しだけ知ることが出来た。天井はどうみても岩だ。かなり広い洞窟のようである。下には色とりどりの布が敷いてある。赤いのは彼女の血が広がっているからかもしれない。

それでも恐怖はまだ爆発していない。動悸が激しくなれば、出血も増えて死期が近づくだらう。ショック死でも出来れば楽だが、現実には死んでいないし意識がある。

何かが近づいてくる気配がある。小動物の感じではない。大人が歩くような感じだ。敷かれた布の下には柔らかい草のような物が敷いてあり、その沈み方で分かる。

聖良は恐る恐るそちらを見て、後悔した。

自分と同じほどの大きさの生物が、つぶらな瞳で彼女を見つめていた。おとぎ話に出てくるような竜が彼女を見つめていた。

親の方はいきなり飛びかかって、大きすぎたのでその正体に気付かなかったが、これは竜だったのだ。

「ああ……」

鈍い傷の痛みすら忘れて跳び退り、柔らかい壁に背を打った。どうやら、鳥の巣のようになっていているようだ。

これはこの小さな竜の揺りかごで、聖良はこれの餌だった。

「うっ……あっちいけ……」

彼女はしっしつと手を振った。

この傷ではもう言葉も話せないかと思っていたが、それでもなかった。引きつっていたし傷が開くのではないかという不快感はあったが、声は出た。

「るうぐ。るるあすてい」

竜は彼女を見て、鳴き声というよりも、言葉のようなものを発した。

「くるなって……おいしくないって」

じりじりと逃げる彼女に近づくその竜は、左右に手を振る動作をした。もっと小さければ愛らしいだろうが、なにせ大きいので恐怖しかない。

あたまがぼーっとして、目がかすんだ。

「るうぐ。るうぐ。るるあすてい」

竜はまるで子供を思わせる舌つ足らずな調子で彼女に話しかけた。さっぱり意味が分からないが、何かの言語を話しているのだろうかと思えた。

「るあるうなあ」

顔が近づき、聖良はじりじりと横に移動する。それを見て、竜は人間がするように腕を組んだ。

どうやら今は飢えていないのか、食べる気はないようだった。そ



竜は彼女の傷ついた腹や胸に触れ、それから押さえつけていた頭を解放する。満足したのか身を低くして、彼女を見つめていた。

「な……何がしたかったんだろう」

竜は身を伏せたまま敵意はないとばかりに上目づかいで見つめてきた。そうしていると、少し趣味の悪い巨大なぬいぐるみのようないや、着ぐるみと言った方がいいだろう。怪獣映画に出てくるような、しかしバランス的には人が入るなど不可能な体型。

見つめられ、不自然な体勢に疲れて座り直す。と、そこで気付いた。

「あれ……」

痛みがないのだ。傷口がどくどくと鼓動に合わせて引きつるような感覚があったのに、今はそれが無い。

体操着の前をめくり上げて腹に触れるが、血で濡れていても傷口がなかった。そう、全くない。慌てて、散らばっている布で腹を拭いてみるが、血を拭いても傷口など出てこなかった。確かにここにあった傷が、綺麗に塞がっていた。血まみれでなければ、怪我をしたのは錯覚だったと思うほど、綺麗だった。

「なんで……」

呟いてから、彼女をじつと見つめてくる竜を見た。竜は嬉しそうに何度も頷くような仕草をした。

あの血。

物語の中でよくあるではないか。竜の血を浴びると無敵になるとか、そういう話が。この竜の血は、傷を癒すのではないかと、結論づけた。

突然大自然の中にいたり、聞いた事もない言葉を話す外国人がいたり、このような空想の世界の生物がいるのだから、不思議に思うこともない。

「……………助けてくれたの？」

竜は起き上がったから再び頷いた。

空腹ではなかったからの気まぐれか、もしくはこんな小さな人間



など不味そうと思ったのか。

「あどいす」

「私、君の言葉は分からないよ」

「あでいす」

と、血で濡れた爪で自分自身の顔を差す。

「あでいす」

何度も、何度もその言葉を繰り返した。

「アデイス？」

彼女は呟いて、竜を指さした。それに竜はこくこくと頷く。

「アデイスっていうのかな？ 名前からして、男の子っぽい？」

大きいとはいえ、子供ならではの丸っこいラインに、つぶらな瞳をしている。その瞳を見ていると、少しだけ可愛いと思えるようになっていた。爪も牙も恐ろしいが、仕草はとても可愛いらしい。助けてくれて、食べないでくれた上に、自己紹介までしてくれた。

今のところは、害を加える気はないのだと判断し、聖良は自分の胸に手を置いた。

「私は森聖良。せいら」

「せーら？」

こくと頷くと、アデイスは喜んで何度もせーらと口にした。少しではなく、本当に可愛いと感じるようになった。映画の悪役のドラゴンと違い、少し優しい顔をしている。子供だからだろうか。

「せーら、どうーる らふいあと いーりす」

「わからないよ」

アデイスは困ったと腕を組み、

「だーる らふいあと いーりす」

求めるように彼は言う。聖良は首をかしげてその様を見ると、再び「だーる らふいあと いーりす」

と繰り返した。それから何度も何度も繰り返すものだから、聖良は思わずそれを口にした。

「ダール ラファイアト イーリス？」

それに頷き、同時に首を横に振った。

「だ……どうーる らふいらと いーりす」

一生懸命発音を頑張るアデイス。上手く発音できないから、聖良も発音できていないのだろう。

「ドウール ラファイラト イーリス？」

こくこくと頷き、じゃれてくる。言葉遊びをしているのかもしれない。食べられるのも嫌なので、聖良は遊びに付き合う事にした。彼が喜ぶように、彼が納得するまで彼の後に続いて音を発した。

意味は分からないが、アデイスが嬉しそうならそれで良かった。それをしばらく続けて、長い言葉を始めから続けて口にすると、とうとうアデイスは跳び上がって小躍りした。

「可愛い」

聖良は目を細めて呟いた。身体がとても大きい事を忘れれば、一挙一動がとても可愛い。

「貴方の方が可愛いですよ」

突然、はっきりとした言葉でアデイスが話した。驚いて思わず後ずさり、再び巢の壁に背が当たる。

彼はつぶらな瞳で聖良を見つめ、可愛らしく首を傾げた。

1話 生贄と竜 1 (後書き)

タイトルは桃色吐息 + 青息吐息の造語です。

1話 生贄と竜 2

アデイスがすらすらと胡散臭い台詞を吐いた。

今まで意味の分からぬ舌つ足らずな調子で話していたのにと、理解できぬ事態に動転して、身を引いた。

「ああ、驚かせてしまって申し訳ありません。これは意思疎通のための魔術ですよ。実際の所、私はまだ幼児の口調です。生まれて間もないので、舌が上手く回らないのです」

「ま……魔術？」

驚いたが、自分の目の前にいる生物が驚きの対象であるため、それほど驚くこともないと思直す。彼はつぶらな瞳で聖良を見つめ、驚いて固まる彼女の頬を舐めた。

「驚かせてしまつてすみません。あなたはひよつとして、召喚された生贄の方でしょうか」

「い……生贄!？」

確かにその通りなのだが、おそらく自分を食べてしまつ予定だった相手に言われるとショックだった。しかも、わざわざ召喚されたのだという。

理解を超えるが、物語ではよくある話だ。

「自分たちの仲間から生贄を出したくないから、召喚したんですか？」

「違いますよ。言葉が理解できない、魔術を知らぬ者なら誰でも良かったんです。外国人をさらうにしても、ひよつとしたら相手が魔術の知識を持っているかも知れないから、魔術の発達していない世界から、差し障りのない人間を召喚する古い狩りの手法です。そうすれば竜の子供が魔術に関する知恵を付けるのを防げます」

小さな竜に差し障りのない人間呼ばわりされて、聖良はさすがに傷ついた。

その通りだが、言われると辛い。

「私……差し障りがないからここにいますか？」

「言葉は悪いですが、その通りです。いなくなっても周囲がそれを不審に思わない、世間と縁の薄い無力な人間なら、設定しやすいのです。逆に世間と縁の強い人間や、力のある人間を呼び込むのは、人間の器では不可能です。」

セーラは身内の方とは相性が良くなかったんですね。あなたのような可愛らしい方を疎遠にするなんて、信じられません」

子供故か、彼ははつきりと教えてくれた。

世の中には異世界に迷い込んで王様になったり、勇者になったり、伝説になったりするパターンも多いのに、よりによっていらぬから小さな竜への生贄。

まだ神の生贄というならともかく、こんな小さな竜を捕まえるための餌。

しかも服装は体操服とジャージ。ため息が出る。

「その……今更ですが、ここって、どこ……ですか？」

「私もこの洞窟にはあなたと同じ方法で連れてこられたのでよく分かりません。おそらくグリーディア王国のデイルニス山脈でしょう」

聞いた自分が馬鹿だったと頭を抱えた。やはりここは聖良の知る世界ではないため、聞いたこともない国名だ。全ての国の名前を知っているわけではないが、聞いたこともないというのは、さすがにそれはあり得ない。

「セーラには、言っても分からないでしょうね。とにかく、私が生まれた国の隅っこにある山脈の入り口付近の崖の上とを考えてください」

聖良はこめかみを押さえてため息をついた。人里離れた崖の上。助けなど期待するだけ無駄だった。

「さつき連れてこられたって……アデイスはここで生まれたんじゃないの？」

「それは……話すと長くなりますが……まずは竜の特質について話しましょう。それがあなたがここに理由でもあるので」

聖良はこくりと頷いた。小さいくせにやたらと理知的な竜は満足したように腕を組む。

「セーラ、あなたの世界に竜はいますか？」

「いません。魔法とかそういうのもありません。空を飛ぶ生き物は鳥とか虫だけです」

聖良は正座をして答えた。アデイスは丸めていた尻尾をパタパタと上下させる。

「やはりそうですか。どうやら設定は完璧だったようですね」

聖良は竜がどういう理由で興奮しているのか理解できずに、少し困った。彼が怒っているのか喜んでいるのかも分からなかったのだ。「この世界の竜というのは、悪魔に次ぐ寿命を持つ、個体によっては悪魔に勝る強大な魔力と、頑丈な肉体と高い再生能力を持つ生物です。ほら、傷がもうない」

彼は自ら傷つけた手を見せて、傷跡すらないことを確認させた。

「竜というのは、妖精に近い悪魔と違い、生殖行為によって母胎からのみ生まれる生物です。しかし、長寿の種族の例に漏れず、とても繁殖力が低く人間が生きている内にちらと姿を見ることがですら稀な生き物です」

「……自分のことなのに、とつても客観的ですね」

聖良は人間についてこれほど客観的に語れるかどうか怪しいものだ。

「この認識の理由も後で話します。竜という生物の特性を聞けば、おおよそ理解できるでしょうから、聞いてください」

彼は苦笑して肩をすくめる。竜の表情など犬猫の感情よりも分からないが、雰囲気からして、おそらく今のは苦笑するようなニュアンスだ。

「竜の赤ん坊というのは、先ほど説明したように滅多に生まれません。その竜の赤ん坊というのは、生まれて初めて食べた知能の高い生物の知識を吸収できるんです」

聖良は理解できずにアデイスを見上げた。

「食べた相手の知識を取り込むんです。だから母親は頭が良く捕ま  
えやすい『人間』を初めての動物性の餌とする事があります」

やはり聖良はアデイスの餌になる予定だった。しかしアデイスは  
先に良心的な人間を食べていた。それ以上説明されなくても、彼女  
と彼の立場を理解する事が出来た。

そのおかげで聖良は助かったが、その食べられてしまった人間が  
可哀想だった。

「まあ、想像できると思いますが、私はこの身体が初めて食べた人  
間の人格ですよ」

「……………それは……………それは壮絶な人生の終焉を」

これほど知識があるという事は、聖良のようにわけも分からない  
場所に呼び出されて食べられたわけではない、専門家か何かのよう  
だ。彼は普通に誘拐されて食べられ、そのように壮絶な最期を迎え  
たのだ。

「まあ私の場合は、なるようになったので、いいと思うんですよ。

セーラも落ち込まず、前向きにこれからの事を考えましょう。こ  
の世界も悪くはないですよ」

自分が死んだのに、他人の事を慰められる。落ち着いた大人の男  
性だったのだろう。

「私の身体がもう少し大きくなったら、街に連れて行ってあげまし  
ょう。セーラが口を貸してくれば、人間だった頃のように魔術が  
使えます。元の世界に戻すことは出来ませんが」

「……………戻れないんですか？」

「無理です。自在に行き来できるような大魔術は存在しません。先  
ほど申し上げた、繋がりも力も弱い、無力な人間を呼び出すので  
すら、かなりの事前準備が必要な大魔術です」

聖良は俯いた。そこまでしてまで呼び出したのが、当たり障りの  
ない人間。同じ世界で調達した方がはるかに安く確実だ。そこまで  
しなければならぬのかと首を傾げる。

「今は目の前の事に集中しましょう。少なくとも、セーラがお母さ

んに食べられることはないようにします。おかげで意志が伝わりやすくなりましたから、食べられる事だけは無いでしょう」

「お母……さん……？」

引っかかりのある言葉が聞こえ、呟いた。

「先ほど貴女を運んできた大きな竜のことですよ。彼女は今の私の母です。賢い子が欲しかったらしく、人間に賢い人間を差し出せと言った矢先、私の噂を聞きつけて私を誘拐してくれた方です」

彼は複雑そうに笑う。このようになってしまえば、笑うしかないだろう。

「……………自分を殺した人が、母ですか」

「複雑な心境ですが、とりあえず悪い方ではありませんよ。頭は足りませんが、操りやすいですから」

「操りやすいですか……………」

彼のいい人の基準は、少し変わっている。

「素直なんですよ」

彼はのっそりと起き上がり、聖良へと近づいた。

「とりあえず、現状は理解していただけだと思いますから、身体を洗いませんか？ 血だらけです」

「……………」

淡いグリーンของ ジャージと紺色のハーフパンツは無惨に赤黒く染まっている。中に着ている白い体操着は、もつと悲惨だ。しかも乾きかけているので今の内に落とさないと手遅れになる。

「ちよつと降りると川があるんですよ」

「川？ 下に行けるんですか？」

「いえ、洞窟内に川が出来ているんです。水浴びが出来る程度には水量がありますよ。冷たいでしょうが、私はまだ火はあまり吹けないので」

聖良は言葉に詰まり、こめかみを押さえた。

「火、吹けるんですか」

尋ねると彼は天井を向き息を吸い込み、口をすぼめて息を吐く。



するとガスバーナーのように火が飛び出た。

「この程度なら吹けるんですが、水を温めるほどの火力はありません。お母さんならせき止めた水を湯に出来るような火を吹けるんでしょうけど」

と言つて、アデイスは聖良を抱えて翼を広げる。聖良一人ではかなり苦勞して登らなければならぬ巢の壁に足をかけ、翼を動かしながら駆け上がった。母親と違って爪を立てずに運んでくれたので抱えられても痛みはない。

「あ、布を持つていった方がいいですね」

アデイスは聖良を地面に立たせると、中に戻つて敷かれた布を引っ張り出し、切り裂いて巢の外に出る。

「服の替えはないので、当分はそれを巻き付けていてください」

少し大きめの黒い布と、身体を拭きやすい大きさの白い布が何枚かあつた。それを抱えて聖良はアデイスに続く。彼は途中床に置いてある淡く光る石を拾いそれを聖良に手渡した。

「これは……」

「よく分かりませんが、お母さんがばらまいたようです。便利ですよ」

よく分からないのだと思ひながら、それを掲げる。直視すると眩しいが、電球のような強烈な光ではない。白い薄布で包めば、提灯のようになつた。このまま棒の先にくくり付けて暗いところを歩けば人魂が飛んでいるように見えそうだ。日本の人魂と言うよりも、オーブとかいう光に近いだろう。

「大丈夫ですか？ 足下がふらついていますか」

「ちよつと貧血です」

「ああ、傷は塞がっても血は戻りませんか。少し下り坂になつているので気をつけて下さい」

「はい」

素晴らしく効能がありそうな竜の血でも、貧血は治らないのだと思ひながらよたよたと歩く。徐々に道が細くなり、大人の竜の巨体

では通れない、一車線道路ぐらいは幅のある坂をしばらく下ると、さらさらと流れる水音が聞こえてきた。暗く初めて通る道だから時間が掛かったような気がするが、実際はかなり近いのだろう。空気は冷たく、水も冷たそうだ。洗濯をしてから身体を洗った方がいいだろうが、汚れた身体にせっかくもらった布を巻き付けるわけにもいかないの、先に身体を洗ってから洗濯しなければならぬ。とは言っても、ジャージと中の体操着は腹の所に穴が空いている。滑るから気をつけて」

アデイスの忠告を受け、聖良はゆつくりと川に近づく。そこからは広くなっていて、アデイスの母でもくつろいでいられる程には天井が高かった。川に指をつけると冷たく、聖良は思わず手を引いた。どうにかならぬものかと周囲を見渡し、川の脇にくぼみが出来て水が溜まっているのを見つけた。

「何かな、この穴」

「さあ、自然にあいた穴じゃあない感じですが……。お母さんがここまで来て、大きくなって暴れたのかも知れません」

「お母さんはここまでこられるの？」

「どう考えても、途中で胴体が引つかかるはずだ。」

「竜は身体のサイズを変えられるようです。私は赤ん坊なので、まだ出来ませんが」

近くを見ると、えぐられた岩の破片が転がっている。なんとか抱えられそうなサイズのそれを見て、アデイスに尋ねてみる。

「これを少し暖められませんか？ お湯まで行かなくても、少し暖められたら有り難いんですけど」

肌寒い洞窟の中で、冷たい水を使って身体を拭く。都会育ちの聖良では、風邪をひいてしまいかねない。

「やってみましょう。さすがにこのままでは冷たいですからね」

アデイスは快く承諾して、聖良の手から石を受け取り、重そうな岩をいくつかくぼみの近くまで運ぶと、炎を吹きかけた。息が途切れるとまた吸って吐き、何度か繰り返すとアデイスはそれを素手で

くぼみに落とす。水がじゅつと音を立てて水蒸気を上げた。何度かそれを繰り返すと、手を入れるとほんのり暖かくなっていた。お湯とも言えないが、これでも十分だ。

「アデイスさんありがとうございます」

「いえいえ。私は少し離れていますね。何かあるといけないので、あまり離れられません」

と言つて、アデイスは来た道を少し戻る。光る石に黒い布を掛けると、かなり薄暗くなり向こうからは見えないほどになった。

光を少し離れたところに置いてから服を脱ぎ、そつとぬるい水の中に足を入れる。プール開きの頃を思うと、ずっと入りやすい温度だ。

身体に付着した血を流し、顔や髪にもついているので頭を水に突っ込んだ。息を止めて顔をこすり、髪を手でとく。持っていた鞆を落としてこなければ、制服も櫛も鏡もあつたのにと、少し悔しく思う。しかしあの極限では鞆を抱えていたとしても落としていた。

そのまま捨て置かれていたら、いつか取りに行ける日が来るかも知れない。しかし彼等にとって珍しい物が多いだろうから、持ち帰られている可能性もあつた。

生きているだけで十分すぎるほど運が強かつたと思わなければならぬのだ。警沢を望んではいけない。

聖良はいつも不運だったが、不思議とまだ生きている。非業の死をで終わる者も多い中、それだけでも十分恵まれていると思わなければならぬ。

「はあ」

思い込むというのは強い力だ。思い込みでとんでもない事をしてかす人間がいるぐらいだから、効果がないわけではない。しかしこの世界で最後には白馬の王子様とハッピーエンド、などと思いつくほど、夢見る乙女でも、恥知らずではない。

背は低く、太めで、前向きで明るい素直な性格でも無く、ついでに運動神経も無く友達も少ない。

取り柄を考えてみたが、何も無い。

「……………だからか」

家族がいない事もそうだが、秀でた部分がなく、注目されるような要素が何一つ無い。

身体を洗い終わると黒い布を少し持ち上げ、近くに置いた白い布を探す。布を見つけると、身体と髪を拭く。すんとした癖がないストレートの生乾きの髪は、ぺったりと顔や身体に張り付く。再び黒い布を持ち上げて石を白い布で覆うと、黒い布を身体に巻き付けた。後でもう一枚もらって、もう少し服らしくないと不安だった。鞆があれば針と糸もあったのにと、また無駄なことを考えてしまった。

「よし、洗濯しよう」

下着類を身につけていないので少し不安を感じながら、川の方で洗う。くぼみは川とつながって少しずつ中身が入れ替わっているが、わざわざこれ以上血で汚すこともない。

大量にこびりついた血が自分の物だと思つと悲しくなるが、水につけて少しこすればあつという間に元の色に戻っていく。血は放置すると落ちにくい、すぐに洗えば落ちる。

「よし」

明かりを近づけてみるが、血はほとんど落ちていた。さらに丁寧にもみ洗いしたら、完全に落ちた。あまり乱暴にすると、穴が広がるので丁寧に。あとで火を貰って、裂けた部分をあぶれば、化学繊維でできたこれは焦げだ部分が固まってほつれにくくなるはずだ。

「落ちたようですね」

背後にのそりと現れたアデイスに驚き、聖良は尻もちをついた。前がはだけかけたので慌てて押さえ、風呂上がりのようにしっかりと布を巻き付ける。

「巢の近くの岩に置いて乾かしましょう。入り口付近ならすぐに乾きますよ」

「はい」

下着をジャージに包んで隠しながら、聖良は慌てて立ち上がる。  
考える事は山のようにあるが、前のようにややこしくない分、気が  
楽かも知れないと気楽に思った。  
どうせ、自分などいなくなっても差し障りのない人間なのだから。

## 1話 生贄と竜 3

坂を上り巢に戻ると、ぎょっとしてそれを見上げた。

一度見たにもかかわらず、思わずぽかんと大口を開いて、聖良はただただそれを見上げ、喉から声を絞り出す。

「でか……」

赤黒い皮膚の竜は、アデイスとは比べものにならないほどの巨体であった。さすがに歩いてビルを破壊しまくる大怪獣規模ではないが、家と比べられるような生物である。キリンもけっこう背は高いが、あれは細い縦長だ。しかしこの生物、背はもつと高くその上どつしりとした重量級。

「坊や、また好き嫌いをして残したのかい」

その竜は聖良を見て呆れたように言う。

アデイスの顔がその言葉で引きつった。今は聖良の事だが、またと言うなら以前にも食事を残しているのだ。どんな餌を持ってこられたのか、考えるだけでアデイスが可哀相になる。

「お母さんお帰りなさい」

アデイスの言葉に母竜は目を見開いた。

「どうしたんだい坊や。さっきまでは何を言っているか分からなかったのに！」

「この人間に協力してもらったんですよ。この人間に魔術を掛けてもらったんです」

「魔術」

そう言って、興味深げに聖良を見る母竜。

「私はこの人が気に入って、血を与えました。死にかけていたので血を与え……お前はそんなチビのくせに、もう血を与えてしまったのか！ なんておませな子なんだろうね！」

これはませた行為なのだ、半ば感心しながら竜を見上げる。広いと思っていたこの空間も、彼女のサイズだと狭く感じられた。彼

女自身もそう思ったのか、身体を小さくした。そのままの意味で、一階建ての建物ぐらいのサイズまで縮まった。身体のサイズが本当に変化したのだ。それでも彼女が大きいことに変わりない。

「だから彼女は私の大切な人なんです。彼女がいればもつと色々なことが出来ます。だから食べないでください」

「そうかそうかい。お前は向上心があるねえ」

よく見ても、彼女とアデイスはあまり似ていない気がした。彼女は赤っぽいが、アデイスの身体は真っ白だ。目つきもアデイスの方が優しく、顔つきもすっきりしている。アデイスはきつと父親に似たのだ。

「お母さん。彼女はセーラです。魔術的な発音が素晴らしいんです。普通は詰まる部分でも、まるで何事もないようにさらりと口にするんですよ。発音が難解で滅多に使える者がいない術を見事に唱えるんです」

「え……」

べた寝している中に、変なほめ方をされなかつただろうかと首を傾げた。発音が魔術的だと、聞こえた気がしたのだ。

「日常会話も魔術的な発音になるほどすごいですよ」

日常会話が魔術的。

聖良は考え、はたと気付く。

「ジャパニーズイングリッシュが魔術的？」

よく聞けば、アデイスも彼の母も、難解極まりない、日本語とはかけ離れた発音の言語を口にしてている。これでは日本語英語的な発音は難しいはずだ。長く日本に住んでいる外国人も、完全な発音をしている者はほとんどいない。日常的にそれが溢れていても、癖がついていると難しいのだから、呪文だけでしか発音しなければ習得は困難を極めるだろう。

「へえ、魔術師かい。それは坊やにとつても益になるね」

「あ……アデイス。わ、私はそんな……」

セーラは話を進めるアデイスへと声を掛けた。

何かしてみると言われると困るのだが、そのことは考えているのだろうか。

「アデイス？」

母竜が首をかしげて言う。

「私の名前です。私が食べた人間の名前ですが、知識をもらったのでこれが一番しっくり来るので彼女にそう名乗りました」

「自分でもう名前を決めてしまったのかい。ませた子だねえ。まあ、長老の所に行く手間が省けていいけどね」

彼にはまだ名前がなかったようだ。普通は勝手に人間の名前などもらったなら怒りそうなものなのに、彼女はあっさりと納得してしまった。

アデイスの言う通り、操りやすいほど素直な竜だ。見た目も力も恐ろしいが、そればかりではないようである。

「じゃあ、セーラをここに置いてもいいですか？」

「血を与えてしまったんならしょうがない。人間は坊やが賢くなるにはちょうどいいペットだ。じゃあ、明日からは人間が食べる物も持ってこないとね」

食べ物と言われ、不安に思う。この巨体で運んでくる食べ物。ろくでもないに違いない。

「私も人間の食べるような物を食べたいです」

「どうしてだい？ オオトカゲは口に合わなかったかい？」

聖良は乾いた声で笑った。

この母竜の中でどんな物を人間が食べていることになっているのか、無性に気になった。

「あのお母さん」

「お母さん？」

聖良は睨まれて、びくりと震えた。

「あ、いや、アデイスのお母さん？ えと、何とお呼びすればいいでしょうか？」

突然なんだこの女はというような雰囲気で見られ、恐くなり腰を



引いて恐る恐る尋ねた。

「あたしはネルフィアだ。まあ、ペットも家族と言うからお母さんでもいいけどね」

ああ、ペットなんだと思いながら、体格差を思うと仕方がないと納得する。彼女からしたら、聖良など犬や猫のようなサイズだろう。

「あのお母さん」

「なんだい」

「お母さんの人間の食料のイメージってどんなものですか？」

聖良は野菜が好きだった。長年ダイエットをしてもまったく痩せないが、野菜好きだ。

「柵の中で飼っている家畜だろう」

やはり肉だ。肉なのだ。しかも、おそらく生きてたま。

「お母さん、今度は牛とかを一匹持つてくるつもりだったんですね」

「そうだよ」

言葉も出なかった。

言葉を出そうにも、無理である。彼女に野菜を持つてくる繊細さなどなさそうだし、愚鈍な家畜を空から引っさらう事が数少ないまともな食料確保になるだろう。

「それでもまあ……オオトカゲよりは食べられますよ」

「ああ……そうですね」

アデイスの言葉に同意して頷くしかない聖良。

「そうかい。じゃああたしは疲れたから寝るよ」

「はい、お休みなさい」

「お休みなさい」

ネルフィアはのしのしと歩いて、アデイスの寝床とは違いベッドという雰囲気の高い固まりの上に身を丸め、あっという間に寝息を立てた。寝ている姿は少しだけ乙女チック。

「……寝ていると女性らしいんですねえ」

意外なほど可愛い寝息を立てる彼女を見て、アデイスは肩をすくめた。彼を見ていると、確かにませている感じがする。それを

希望したのはネルフィア自身なのだから、彼女にとってはこれがい  
いのだろう。

「私ともう少し飛行が上達したら、下の森に行きましょう。果物も  
あると思いますよ」

「だと嬉しいです。ダイエット中だから」

「肉ばかりだと健康によくないですからね。でも、セーラはとても  
健康的で素敵ですよ」

アデイスという人間の男は、きっとフェミニストだったのだろう。  
この人間の知識を手に入れた竜のアデイスは、どこまで人間らし  
さを持っているのか、まだ分からない。本能的には獣なのかも知れ  
ないし、どこまでも人間っぽいのかも知れない。聖良にとっては、  
どちらでも構わない。

アデイスは聖良を抱えて巣の中へと飛んだ。このように空を飛ぶ  
というのは、痛くなければ悪くないかも知れない。

「セーラ、実は一つ解決しなければならぬ事があります」

巣に戻って別な布を羽織り身体を温める聖良へと、アデイスは改  
まって切り出した。

ここには布が山のようにある。木や藁や草を敷いてその周りを高  
く囲み固めて大量の布を敷き詰めるという、かなり風変わりの巣で  
ある。

「どうしたんですか？」

アデイスは身動き、尻尾を布に叩き付けるように下ろした。力は  
入れていないが、身体が大きいのですんと音を立てた。人間で言  
うなら姿勢を変えただけなのだろうが、竜だけかなり強烈であ  
る。彼が紳士的な竜で良かったと思った。少しでも乱暴だったら、

再び流血だっただろう。

「何から話していいのやら……」

「何が問題なんですか？」

「お気を悪くしないで下さいね。私も被害者なので」

アデイスは尻尾の先を振りながら、首を下げて顔を覗き込み、上目づかいで見ている。慣れてくるとますます可愛く見えた。

「この世界を理解しない生贄を出すには、意味があるんですよ」

聖良から顔を離すと、困ったように腕を組んだ。よく動く人だと思いつながら、それをじっと見上げる。

「獲物を食べさせた後は、母親が一番油断するんですよ。食べさせたモノの意味に気付かなければ知能が低かったと勘違いしてまた獲物を捕りに行きますし、気付けば怒り狂って人里に乗り込みます。そして子供は知識が無く無防備です」

「子供が目当てなんですか？」

目の前の自分よりも大きな、しかし小さな竜が目当てなど、信じられない。しかし先ほど彼女が体験した事を考えれば、理屈は分かる。

「血、ですか？」

「そうですね。でも、もう無駄なんですよね」

「無駄？」

「はい。竜という生き物は初めて食べた知能の高い生物の知識の一部を取り込む事が出来ます。逆に初めて食べられてしまった相手に、竜のような再生能力と寿命を与えるんですよ。竜は傷がすぐに再生して、数千年生きるんです。変な生き物でしょう。なぜそのような現象が起こるのかはまだ説明されていないので、説明できませんが」

聖良は考えた。考えに考え……。

「……あの」

「ええ、私はもうセーラに食べられたので、いくら私を食べても人間が長命を手に入れることは不可能です」

聖良は頭を抱えて床に転がった。

当事者だった。聖良はどう聞いても餌やペットどころではないほど当事者の一人だった。今の発言を信じるなら、聖良の傷が癒えたのは、血で癒えたのではなく、血を飲んで超人的な再生能力を手に入れたから癒えたのだ。

「竜というのは、自発的に血肉を与えた相手を一生大切にしますから、安心してくださいね。お母さんも簡単に納得してくれたので、噂は間違いないでしょう」

アデイスは聖良を置いて、話し続けた。

「かなり長く生きてしまうので、寿命が違う種族相手でも家族として迎えるそうです。本当は同族で血を交換して、永遠の愛や友情を誓うらしいですが、人間相手にするのも少ないですが、例はあるそうです」

彼の気遣いは違う方向に向いていた。

「そ……そんな大切なこと」

「ああ……成長が遅くなってしまうからね。でもセーラは今でも十分可愛らしくて魅力的ですよ。見た目よりも実年齢は上なんでしょうね」

ひくりと聖良の頬が引きつる。

「いくつぐらいに見えますか？」

「十二歳ぐらいかな？」

「……」

「あ、十三……十四歳でしたか？」

「……正直に、見た目はいくつぐらいに見えるんですか？」

彼はこくと首をかしげ、

「小さいから十歳ぐらいかなと思ったけど、体つきが大人びているから、もう少し上かなと」

聖良は打ちのめされて敷き布を握りしめた。今まで小学生に間違えられたことは多々あるが、そこまで下に見られると、さすがに強烈だった。

「十八」

「は？」

「私は十八歳です」

「……………そんなに年増なんですか!？」

子供扱いから年増とは、極端な言語センスの男である。態度が異様に優しいと思ったら、子供扱いしていたのだ。

なぜか彼まで打ちひしがれた。

「そんな……………永遠の幼女が手に入ったと思ったのに！ 道理で無駄に胸があると思ったら！」

息を呑み、硬直が溶けると、聖良は細く短い息を吐いた。

人の印象というのは、こうも一瞬で様変わりしてしまう物だと、聖良は初めて知った。

「……………ロリコンだったんですね」

「ロリコンとは失礼な。ただ子供が大好きなだけです」

「いやさっきの台詞の後でそんなこと言われても……………」

明らかにその本性はロリコンの変態である。

「私は別に、年端もいかない幼女を見て興奮するような事や、襲いかかるような事はありませんよ」

「その言い訳をしている時点でヤバいです。っていうか、お母さん選んじやいけない人選んだんじや……………」

「失礼な。私は大賢者ハーネスの生まれ変わりと言われたほどの魔力と頭脳の持ち主ですよ」

「何ですか、その人」

「なんだか突然態度が変わってふんぞり返るアデイスに、冷たく言い返す。」

「ハーネスといえば、かつてこの国を数世紀に渡り支配していた大魔術師です。」

悪魔すら手を出さない、絶対なる影の支配者。英雄であると同時に、死と恐怖と絶望を生む魔術師」

「いや……………それ……………」

どう聞いても悪役であり、自慢できる事ではない。悪人の生まれ

変わりと言われるぐらいだと考えると、聖良の顔が自然と引きつる。「現にこうして、死にかけているところをしつかり肉体を乗っ取り生きています。天才たる私だからこそです」

「……………」  
きつと、これほどまでに影響が出てしまうほど、強烈な人格だったのだろう。なんて可哀想な竜だろうと、幼くしてこのようになってしまった竜に同情した。初めて食べた人間の個性が強烈すぎて、ろくでもない竜になってしまつとは、ネルフィアも考えてすらいなかつたはずだ。

「信じてませんね。私は本当に乗っ取つたんですよ。」

これはハーネスが作り出した術なのですが、肉体を乗っ取り己の物とする魔術があるんです。禁呪とされ書物にすらない術ですが、私は自分で理論だけは完成させていたんですよ。

本来は肉体が老いたときに若い肉体を得るための術だったんですが、私もまさか若くしてこの術を使うことになるとは「

聖良は聞いてはいけない事を聞いたのではないかと、頭を抱えた。どう聞いても犯罪を行うための魔法を使って生き延びたように聞こえた。相手が幼い竜だったから問題にならないが、人間だったら大変な事になっている。

「…………… 将来、若い人の身体を乗っ取る予定があつたんですか」  
それは人殺しだ。

「それはありません。この術を封じ、唯一正しい構造式を知る女性がいるんですが、やったら彼女に殺されそうなので。老いてからは若い精神に負けてしまう可能性もありますし」

「そーですか」

「あ、彼女は恋人ではないですよ。並んでいると間違えられますが、あんな子持ちの鬼ババアは私の趣味ではありません。きつと老化を緩やかにする術を使っているんですよ。四十過ぎのくせにまだ若いふりをしたがるんです。私がいなくなつても、きつと心配もしていませんよ。身内以外には薄情な女なんです」

「そーなんですか」

「そうなんですよ。きつと死んだなって諦めて終わりなんです。ああ憎らしいあのクソババア。今度会ったら新しく得た竜の魔力できやふんと言わせてみせましょう」

くつくつ笑う彼は、何かが吹っ切れたようで実に自然な邪悪さがないにじみ出ていた。今までは本性を押さえていたのだなと、可愛らしい姿に惑わされて信じていた己を恥じた。本当に人間だと知っていれば信じなかったのに、竜だと思っていたからすべて信じてしまった。聖良はため息をついて、相づちをうつ。

「そーなんですか」

「話をちゃんと聞いてますか？ さっきからそればかりじゃないですか」

面倒臭い男だと思いながら、聖良は聞いていた話の中の疑問点を口にする。

「でも、ぎやふんと言わせるのはいいけど、あなたは今、舌つ足らずな子供ですよ？」

何を言っているかははっきり分かるが、彼が口になっているのは舌つ足らずな言葉である。

現実を突きつけたら、アデイスは意気消沈して、ぱたりと腹ばいに寝そべった。

「そうなんですよ。このままじゃどうにもならないですよ。子供だから竜独自の力はろくに使えないし、舌は回らないからセーラの口を借りないと術も使えない」

尻尾が弧を書いて右から左へと移動する。その仕草は相変わらず可愛い。

聖良はうつむくと、視界に赤い布の切れ端が飛び込んできた。ひも状のそれを見て、また動いた尻尾の先端を見る。

「……どうしたんですか。人の尻尾を凝視して……って、なんですかその布は」

「え……可愛いなって」

「そんなものつけないでくださいよ。尻尾はけっこう敏感なんですから」

「切り捨てられないの？」

「トカゲじゃないんですよ。切り捨てられますか。いや、ひよっとしたら生えてくるかもしれないませんが。噂では腕も生えてくるという話ですし……」

「すごいんですね」

「セーラの腕も生えてくるかもしれないよ」  
「うっ」

そんな身体は嫌だった。それ以前に、腕が取れるような生活は嫌だ。

「って、そんなことよりも、話を戻しましょう」

「ああ、アデイスをさらいに来る人がいるって話ですか」

「そうです」

こんな大きな生物、どうやってここから運ぶのか、不思議に思ったが、聖良は黙って続きを待つ。

「竜を生け捕りにするつもりですから、それなりの手練れが来るんですよ。で、私が用無しだと知れば、狙われるのはセーラです」

セーラは突然身に降りかかってきた驚愕の事実には思わず立ち上がった。

「な、なんで!?!」

「私は竜ですから、危険を冒して連れ帰るにはリスクが高いんです。それに比べて女性で子供のように小さいあなたなら連れ帰りやすいでしょう」

「でも、私なんて連れ帰ってどうするんですか？ 私なんてどーせ見た目ガキの年増ですよ」

「何を言っんです。見た目が幼いというのは最重要ですよ！ 可愛いじゃないですか！」

「そんな事を考えるのはアデイスだけです」

聖良には、世の中にそれほど変態が多いとは思えなかった。いて



もごく一部である。

「それに女で傷が付いてもすぐに回復するなんて、使い道はいくらでもありますよ」

「……じ、人体実験ですか？」

「そんなの生きた人間いくらでも使えばいいんですよ」

「いいんですか!？」

「当然です。そんなものは、粗悪な安物で十分です」

やはりこの男は非道である。人を人とも思っておらず、幼女以外は死んでもいいと思っっているのだ。

聖良は怯えて少し後ろにさがった。

「まあ、それはいいとして、奴隷人形とかにされたくなければ、今から練習です」

「ど……」

彼の中で、聖良はどんな扱いを受けることになっているのかは、知りたくもないので続く言葉を飲む。

「練習って?」

「術ですよ。正確に言えば、呪文の」

「どうするの?」

「もちろん、私をもう少し使えるようにするんですよ。あ、隅の方に私が着ていた服があるんですけど、包んである物を取ってください」

聖良は周囲を見回し、黒ずんだ布の固まりを見つけて恐る恐る近づいた。どう見ても血で汚れたそれを嫌々ながら指先でつまんで持ち上げて、なにかが包まれている事を確認すると、中身を確認せずにアデイスの元へと運んだ。

「洗濯ぐらいすればいいのに」

「この爪でどうやってたら洗濯が出来るんですか。しゃばしゃばと揺するだけで落ちるならともかく、こびりついているから雑巾以下の代物になって終わりです」

「それもそうですね」

かといって、捨てられない気持ちも分かる。穴が開こうが、色気  
がなかるうが、濡れたジャージを捨てる気にはならない。それが人  
間というものだ。とくに人間をやめてしまった彼には、すぎるべき  
数少ない物品である。

「中の物を私の前に置いてください」

「中ですか……って、うわっ、骨っ!？」

服の中から、骨、頭蓋骨が転がり出た。聖良は驚きと恐怖のあま  
り腰を抜かして後ずさる。

「私のです」

アデイスの声には哀愁が込められており、変態といえどもさすが  
に哀れで慰めの言葉も見つからなくなった。助かった聖良は、変態  
に少女と間違えられようが、運がよかったのだ。彼より先に食べら  
れていれば、身体も心も死んでいたのだから。

「これを使っんですよ。儀式魔法ですが、特殊な儀式も今の私の魔  
力なら、全て省いても行えます。呪文さえ正確に発音できれば」

「ああ、発音できないんでしたね」

だから『お母さん』との会話もろくに成立せず、聖良がここに  
いるのだ。

「じゃあ、先ほどのような調子で続けてください。少し長いですが、  
明日の朝、お母さんが狩りに出かけたなら奴らは来ます」

「そんなまどろっこしいことしないで、お母さんに言えばいいんじ  
やないですか？」

「そんなことをしたら、説明しなくちゃいけなくなります。そう  
なると、あの人のことだから人里に行つて破壊活動を行うでしょう」  
目を伏せれば、破壊の限りを尽くすあの竜の姿が易々と浮かんで  
くる。

自分の息子を、可愛い息子を、賢く育てたいと本人は一生懸命餌  
を運んでやっている。その可愛い息子を狙っている人間がいるのだ。  
同じ立場なら、聖良も息子を守るために行動していた。

「さすがにそんな事になれば、多く死ぬのは罪も無い子供達です。

幼子が無駄に死に行くなど、私には耐えられませんっ！」

「とても立派な台詞なのに、言う人によってはこんなにも不純に聞こえるんですね……」

世の中には、王様になるために異世界に招かれた女子高生の話もあるのに、自分は変態と一緒に、彼の母親の暴走を止めるべく努力しなくてはならない。

多少の苦勞があっても、救われるのならいい。しかし救われないのなら、どうしようもない。白馬の王子様など夢見るほど、容姿に優れていない自覚があった。近所の子供にプロポーズされたことはあるが、同世代以上では、この手の変態にしか声を掛けられたことはない。

それでも他に道はない。

「……………練習、しましうか」

真剣に考えると悲しくなるので、今は子供達を救うつもりで、練習に精を出す方が前向きだと、聖良は自分に言い聞かせた。

## 1話 生贄と竜 4

夜が明けた頃だ。

長い長い呪文を覚え、ようやく一言もつつかえずに呪文が終わろうとしていた。

聖良の発音に問題ないとはいえ、聞いたこともないカタカナの羅列が相手である。言いにくい単語も多く、間違えずに唱えるのが大変だった。アデイスの口にした言葉を聖良風に『正しい』発音にするのも骨が折れた。必要なのは意味ではなく、音なのだ。

アデイス曰く、何の道具もないから長いだけで、道具さえ揃えればあつという間に終わるし発音もそこまで重要ではないらしい。何もないから長く正確な発音の呪文が必要なのだ。

アデイスはわくわくとした様子で頭蓋骨を頭に乗せてちよこんと座っている。頭蓋骨は下手に持つと壊れそうなので頭の上に載せて欲しいと言ってきたためにそうしたのだ。異様だが、そんな姿も可愛いので、頭蓋骨に触れるのを耐えた。他の色々なことに耐えて、ここまで来た。あとワンフレーズで終わる。

「ラド ラクトス」

最後の最後の言葉を無事口にすると、安堵の息をつく間もなく、アデイスの身体が光に包まれる。頭の上に乗っていた頭蓋骨が、アデイスと一体化していく。

少し気色悪いと思いつながら、光に包まれる彼を見つめた。

光っていてよく見えないが、アデイスの姿が不気味にぼこぼこ盛り上がり、小さくなったりと怪物が変身でもするかのような変化があった。

失敗したのだろうか少し緊張しながら目を凝らして見ていると、突然光が強くなり、聖良の目が眩む。目を伏せて手をかざした時、  
「ああっ！」

喜びの声が聞こえて目を開けると、目の前に大人の男の人が立つ

ていた。銀髪の美男子が 全裸で。

「ひいつ」

聖良はあんまりな光景に、布を投げつけ背を向けた。いくら何でもあんな物を見せるなど、ひどいではないかと憤慨する。

何よりも、なぜあんな変態が、あれほどの美男子に化けているのか。

「ああ、失礼。そういえば裸でした。裸の生活に慣れていたので、すっかり失念していましたよ。ここには布がいっぱいあって助かりましたね。針もあつたらよかつたんですけどね。ああ、もういいですよ。隠しました」

安心して振り向くと、確かに下半身は隠していたが、上半身は裸だった。聖良は恥ずかしくて視線を下げると、割れた腹筋が目に入り、さらに下に行こうとして横にそらした。バスタオルを巻き付けるように、布を巻いているだけで、いつ落ちてしまつか分からない。それは聖良にも言えるが、お互い様だからといって、見るのは恥ずかしい。

「おや、ウブな反応ですね。安心しました」

「……………は？」

気色の悪い事を言われて、聖良の声に棘が混じる。

「その見た目で、男の裸には動じませんってのは、さすがに落ち込みますよ」

「子供っぽくて悪かったですね」

「何を言っんですか。それは美点じゃないですか」

変態に常識を求めたのが間違いであった。

アデイスは適度なサイズの布を切り裂いて二枚にし、端を結びつけて頭から被る。即席の貫頭衣だ。腰にも紐を結びつけ、それで彼は手を広げて見せた。

「これで平気ですか？」

「はい」

アデイスは聖良の前に座り込んで、甘いマスクで、蕩けそうなほど甘い笑みを浮かべた。

「一見、心優しそうな男性だ。ハンサムで、子供も安心して懐きそうだ。」

「……犯罪には向いた姿をしていたんですね」

「失礼なことを言いますね。私は子供には優しいですよ。嫌われたくありませんから」

つまり少女を物陰から見つめるだけなのだろうか。それなら害はないので幾分マシだ。人様に迷惑をかけなければ、聖良はどんなマイノリティにも一定の理解をするように努めている。自分がチビと言われ続けたのだ。なぜ他人に迷惑をかけていない少数派を責められようか。

「しかし、セーラは本当に小さいですね。てっきり自分の身体が人間じゃないからだと思っていました。戻っても小さい」

「ち、小さくないっ」

「そちらの世界では皆セーラのように小さいのですか？ いい世界ですね」

「み……みんなってわけじゃ。私より小さな人だっていますし……近所のおばあちゃんとか」

「……つまり、腰の曲がったおばあちゃん並みに特別小さいんですね」

聖良は否定できずに押し黙る。

いつもクラスで一番小さかった。治療を受けるほどではないが、小さいというのは否定できない。

「でも、アデイスさんは私の国の男の人よりもずっと大きいです」

「私は平均より少し高い程度ですよ」

男の人の身長など、背の高い知り合いがないのでよく分からないうが、彼は背が高い。肌色も髪も、聖良では生まれ変わらないうと真似できないほど色素が薄い。

人種の壁は、どこの世界に行っても高い。

「異世界に興味の尽きることはありませんが、少し寝ておきましょうか。もしも私が寝ている間にお母さんが騒いだら、魔法を試してみたと行ってください。起きるつもりではありませんが、私は朝が弱いんです」

アデイスはくあつとあくびをする。身体が子供だから、余計につらいだろう。

「分かりました」

ネルフィアと一人で向き合つのは恐ろしいが、子供に起きているとは言えない。

アデイスは布を丸めて枕を作り、厚めの布を被って目を伏せる。

聖良は光る石を布に包んでから、アデイスを真似て横になり、眠い目をこすった。

なんて無茶苦茶な一日だったのかと、思い出すと目が回った。今まで不運だと思っていたが、まさかここまで不運とは思ってもいなかった。

それとも、聖良のような奇異な運命を持つ人間はこの世に何人もいるのだろうか。

そんなことを考えているうちに、聖良は眠りの世界に沈み込んだ。

物音がして目を開くと、高い巢の壁の上に、黒い物が見えた。しばらくぼーっと眺めて、それが覆面をかぶった人の顔であることに気付く。誰かが覗いているのだ。

慣れぬ光景に一瞬夢かとも思ったが、昨日のことを思い出して身が強張る。後ずさり、巻いていた布が取れかけて、毛布にしていた布を引っ張り身体を隠す。こちらは暗いので向こうからはあまり見

えないだろうが、恥ずかしいものは恥ずかしい。

動いている内に光を向けられ、聖良はまぶしさに目をつぶった。

「餌の……」

「なぜ生きている」

人間達は囁き合い、聖良と背を向けて眠りこけているアデイスを見比べた。

「なぜ人間が二人も……」

「竜のガキがないぞ」

二人は少し殺気立っている。当たり前だ。彼らは命がけで仕込んだ仕掛けを確認しに来たのだから。

「お、起きてください！」

隣で暢気に眠るアデイスを揺り起こし、必死にぺしぺし叩く。それに気付いた人間達は、巢の壁を少し苦勞してよじ登り、侵入してくる。

「うっ……なんですか」

「何ですかじゃなくて、来ましたよ！」

「ああ、女の子」

「って、寝ぼけて抱きつかないでください！　ちよ、何するんですかつ！　やめてくださいっ！」

こんな時にのしかかれて、聖良は必死で抵抗する。寝ぼけているからタチが悪い。朝に弱いどころでは無い。仕方がないので、頭突きをして身を守った。

「……って、ああ、セーラですか」

彼は落胆した様子で肩を落とし、それから様子をうかがっていた男達を振り返った。岩肌にとけ込みそうな色の迷彩服を着た男達は二人とも長身で、アデイスが言っていたことが嘘でないことを実感した。皆、背が高い。

男達を確認すると、アデイスは問答無用で呪文を唱えた。

「アグス・ドゥーヌ」

今までと違いはつきりとした発音で呪文を唱え、アデイスは手を



前に出した。

男は飛び退き、先ほどいた場所を光が貫き巢の壁に穴を開けていた。アデイスはそれを見ると矢継ぎ早に魔法を放つ。それらをことごとく避ける二人の脅威の身体能力に、聖良は驚き目を丸くした。

二人は覆面を外して慌てた様子の顔を見せる。

「お、長！？　ちょ、私です、ジェロンです！　寝ぼけないでくださいっ！」

「なんでアデイス様が何でこんな所に！？」

聖良はしまったとばかりに顔を顰めたアデイスを見た。見てしまった。

彼はその視線に気付き、はっとして引きつった笑みを浮かべた。

「知り合いなんですか？」

「きゅ……救出部隊でしょうか？」

霧困気からして絶対に違う。大きな生物を捕らえるための、縄や投網を持っている時点で、絶対に違う。何よりも、今のは絶対に始末しようとしていた。

「アデイス様、最近見かけないと思ったら、童女目当てにこんな所に！？」

「それは餌ですよ！　確かに長のいないところで始めたのは悪かったです、何も邪魔をすることはないじゃないですか！　いなかっただから仕方がないですよ！」

彼らの言葉から、普段のアデイスが窺い知れる。

アデイスからじりじりと離れ、距離を置いて問う。

「長……って。アデイスさん……やけに事情に詳しいと思ったら、まさか私を召喚した組織の……ボスみたいな感じの何かなんですか？」

捕獲部隊の二人は、口を押さえて顔を背けた。

「う……まあ、確かに一つの組織を作ったりはしました」

「私が今ここでこうしているのは、全部アデイスさんのせいなんですか？」

「ほら、こついうのは男のロマンというか、せつかく星の並びも良かったので、魔術師なら一度は古の竜狩りを試してみたいと思うのは当然の事です！」

聖良はくだらない言い訳をする男を見て、目を細めた。

「つまり、本当はいらないけどチャンスだからやってみたかったと？」

「……………皆がやってみたいと言うものですから」

「で、なぜか自分が誘拐されてしまったと……………」

どこまで皮肉な運命のイタズラなのだろうか。聖良は息を吸い、思い切り怒鳴った。

「もう、自業自得じゃないですか！　ここまで見事な因果応報を見たのは初めてです！」

聖良はきつと前世で何か悪いことをしていたから運に見放されているのだと諦めていたら、この男は現世で悪事を働いていた。法では裁けないのかもしれないが、天は見ているのだ。

今は彼も不幸のまっただ中であり報いは受けている以上、責める意味はあまりないが、後できっちり嫌みを言い倒してやると心に決めた。

アデイスは不機嫌を丸出しにして、部下二人に目を向けた。

「お前達のせいでバレちゃったじゃないですか。どう責任を取ってくれるんですか？」

それを防ぐために相手を殺そうというのも、恐ろしいボスである。

「いや、だって、その……………結局、なんでここに？」

八つ当たりを受けながらも、彼らは冷静に問う。

「竜にさらわれてきたんですよ。天才といえども、空から巨大生物が来たらどうしようもないですからねえ」

「……………私はてつきり、クレア様に地下牢にでも閉じこめられているのかと思っていました」

「前々から思ってたんですけど、運が悪い割にいつも変なところで運がいいですねえ。ぴんぴんしてる上に童女までゲットしちゃってま

あ……」

童女と聖良を見る二人の目に浮かぶのは、生贄に対する哀れみ。自分達で差し出しておいて、実に身勝手な感情だ。

「彼女は童女じゃありませんよ。立派な成人女性です」

「はあっ!？」

ジェロンは聖良を信じられないとばかりに凝視する。成人女性はいい響きだと、聖良は満足した。この世界では、十八歳は成人女性なのだ。

「冗談でしょう?」

「本人がそう言ってるんですよ」

「一年が半分とか」

彼らにしてみれば、東洋人の小柄な女性など、子供に見えてしまうのだろう。

しかし半分とまで言われるなどは思いもしなかった。

「一年は三百六十五日。一日は二十四時間。一時間は六十分。一分は六十秒です」

「同じだな……」

同じなのだと、聖良自身も驚いた。世界が違っても時間は同じということは、違う星ではなく、パラレルワールドのようなものなのだろうか。どちらにしても、異世界にいるという現実には変わりない。命があるだけ幸運なのだ。

「ま、魔女なのですか?」

「でも、召還条件は無力な社会的にいらなくなってもおかしくない人間だぞ。何のために馬鹿高い材料そろえて、ややこしい準備をしたと思ってるんだ。魔女なんて出てきたら失敗もいい所じゃないか」

好奇心のためなら、金も労力も惜しまない人達のようなだ。聖良には理解できない人種である。

「資金を稼いだのは私でしょう。しかし、すべて無駄でしたね」

こんな無駄遣いも珍しいほどの、見事な無駄遣いだ。

「アデイス様、ところで肝心の竜は?」

「いますよ、目の前に」

「どこにですか。小さくても、こんなところに隠れられるサイズじゃないでしょう」

アデイスは頭をかいて小さくうなる。それから自分で呪文を唱えて竜の姿に戻った。あれだけ苦労したのに、母に披露することなく戻るとは、何を考えているのだろうか。

当たり前だが、アデイスの変わり果てた姿を見て、二人の人間はあぐりと大口を開き、呆然と彼を見つめた。

「まさかお前たちが先行して出向いてくるとは思っていなかったから化けていましたけど、実は竜の体に乗っ取りました」

あっけらかんと笑うボスを、二人はしばし無言で見つめていた。

やはり彼のしたことは、同じ世界の間人から見ても異常なのだとし安心した。これが基準の世界など、生きていく自信がない。

彼らが正気を取り戻したのは、しばらくたつてから。アデイスが巢の中からほじくり出した木の枝で二人をつついて、ようやく二人は我に返り、アデイスを質問攻めにした。

巢の中で、腰を据えて話をした。彼らが納得しなくとも、理解するのには時間は掛からなかった。さらわれて食べられそうになったから身体を乗っ取った、だけで終わるのだから時間など必要ない。それでもアデイスは話をあちこちに飛ばすので、簡単な話なのに時間がかかった。

どちらにしても、彼らが呆然としていた時間の方が長かった。

なにせ目の前で竜になって、竜のまま話しているのだ。有無を言わさぬ威力がある。

「……そう言えば、アンに薬を使って悪さをした挙げ句に消えたとか、クレア様がお怒りでしたよ」

「薬など使っていません！ 子供にそんな事するはずがないでしょう！ ああ、可哀想なアン。現実に見たことを幻覚呼ばわりされたのですね。きつと深く傷ついているはずですよ」

彼は胸に手を当ててため息をついた。

「へえ、幼女といっしょだったんだ……」

聖良の呟きが聞こえたのか、アデイスは人間の時のように首をぶんぶん横に振って手を握ってきた。

「ただ、湖が見たいという子供の我が儘を聞いていただけで、何もしていませんよ！」

「所詮は未遂つてだけでどうでもいいです。そんな事より、血が出てるんですけど」

「ああ、すみません。爪が当たってしまいましたね」

アデイスがぺろりと聖良の手の甲を舐める。血がなくなると、その下にはつるりとした肌が見えた。かなり深く切ったはずなのに、傷跡すらない。

「血を……分けたんですか」

「当たり前でしょう。こんな可愛らしい顔で苦しまれて、見捨てる

なんて人間じゃ……ああ、ないですねえ。慣れませんか」

彼は自分で人間を捨ててしまった。

慣れてもらわないと人間側が困る。手加減無しで触れられれば、人間など簡単に死んでしまうのだ。いくらすぐに治るといつても、痛みは以前と同じようにある。こんな事ばかりされては、血がいくらあっても足りない。

「俺達なら、迷わず見捨ててるんでしょうねえ」

「当たり前じゃないですか。男は自分で何とかするしかないんですよ。私も何とかしました」

「女でも大人なら見捨てるくせに」

「当たり前です。いい年していつも他人に助けてもらえると思ってはいけません」

聖良は小さくため息をついた。

その通りだ。まったくもって、その通りだ。子供であつても自分の力でどうにかしなければならなかった。

子供のようだからと手を貸してくれる人はほとんどいなかったし、大きくなつても子供のようだと侮られた。

「なんでこんなことになつたんだろう……」。

もう少して財産を取り戻して、大学に進学できそうなきだつたのに……」

「財産を取られていたんですか？」

「はい。アルバイト先のご夫婦に、弁護士さんの知り合いがいて、相談していたんです」

アデイスはふむと頷いた。

「そういう解釈もあるんですね」

「解釈？」

「遺産問題で殺されそうになっていたとか」

聖良は頭を抱えた。階段から突き落とすなど、方法はいくらでもある。

こめかみを押さえて、めまいに耐えた。

彼らは身寄りのない人間を想像していたのだろうが、解釈は無限にあるようだ。

「あのまま帰ってたら、私は殺されていたかも知れないと言いたいですか？」

「だとしたら、私達は命の恩人ですね。感謝して下さい」

「開き直らないで下さい」

いい人達ではなかったが、殺されそうだった可能性があるというのは、少しショックだった。

彼等は自分達が一番可愛くて、姪に残されていた遺産で全て奪い取り、車を買ったりと使い込み、それが発覚することを恐れ、そして周囲の視線を恐れていた。

「弁護士さんにも相談していたし、もし私が死んだら疑われてそこに住めなくなるから、そんな事にはならなかったと思います」

話が大きくなれば仕事はクビ、家は元々聖良の遺産。もし聖良が死んだら、遺産の事で他の親戚も食いついてくる。警察にも疑われる。

メリットは無い。

「そう思われても仕方がない状況という見方もありますか……興味深い」

彼は尻尾を振って、楽しげに言った。今の彼は、好奇心に支配されている。それが聖良の癪にさわった。

「自立しようと思ってたのに、アデイスがろくでもない計画を立てたから、痛くて怖い思いして、こんな格好をしてるんですよ！」

「お前達、何を見てるんですか。レディに着ている物を差し出そうという気持ちはないのですか」

アデイスに迫られ、彼らは少し脅えながら、迷彩柄の上着を差し出した。

「下も」

アデイスは当然とばかりに要求する。

「いや、それは無理です。帰れません」

「まあ、仕方ありませんね。じゃあ、今週中に食料と調味料と衣服を持ってきなさい。服がないとさすがに外には出られませんからね」

聖良もごくごく頷いた。こんな格好で人里に行くなんて無理だ。ジャージには穴が空いているし、変な目で見られるだろう。

聖良はぶかぶかの上着を着込んで、生臭さに顔を顰めた。汗と泥と草を潰したような匂いがする。

「セーラ、着ていた上着が乾くまでの我慢ですよ。それにとっても可愛いですから」

「は？」

「子供が大人の服を着ているようでとても愛らしいです」

「そーですか」

彼の特殊な趣味は聖良には理解できない。理解を示そうとするだけ無駄なのだ。

聖良は上着をかき寄せ、冷えた手足をさする。洞窟は布の一枚巻き付けただけでは寒く、寝ていても風邪をひきそうだった。

「毛布も欲しいです」

「ああ、そうですね。日用品もいりますし　まあ、運ぶのはこの二人ですから、少しずつになると思いますが」

「そうですね。大勢で来ても、見つかったら食べられちゃいますね。もちろんネルフィアにだ。」

「今も下には人はたくさんいますよ」

デイロンが地面を指さして言う。

捕縛だけならともかく、運ぶのには人数がいる。親が探しに来る前に遠くへ逃げなければならぬ。

アデイスは聖良に向けていた笑みのまま、二人に顔を向けた。

「というわけで、竜のことは適当にうやむやにしておきなさい。」

竜の中でも、彼女　母はかなり特殊です。人が手を出していい相手ではありません。彼女を敵に回せば、都が一夜で火の海に変わるでしょう。彼女の力は高位の悪魔に匹敵するものです」



それがどんなレベルなのか分からないが、魔王クラスのすごいドラゴンなのだと仮定し、ゲームのラスボスが似合いそうな外見思い出して身震いした。

「では、ずっとここに居るつもりなんですか？」

「致し方ありません。」

家出などしたら心配して母が探しに来ますよ。

いいんですか？ 傷を付けても見る見る間に回復する鋼の肉体を持つ竜が、あの巨体のまま息子を捜して火を吐きながら飛び回り、腹が減ってはそこらの人間をつまんで食う、という事態になっても、そこまでいくと、一種の災害である。

「どうぞ好きなだけいてください」

「ようやく私の自己犠牲の心を理解しましたか。ならばお前達は、こつそりとセーラに似合う服を見繕って持ってきてなさい。もう少ししたら、母を説得して少しは戻れるようになります。それまで、くれぐれもクレアには私のことを話さず誤魔化してください」

「誤魔化すんですか」

「素直に言ったら怒るじゃないですか。あの術を私が完成させていたなんて知ったら」

アデイスのようなタイプが恐れるなら、厳しく常識的な大人の女性のようない気がした。アデイスが怒られるような事をしているから悪いのだ。

「じゃあ、いつものように口では説明しにくい不幸な目に合っています、って言うっておきましょう。クレア様はそれで納得してくださいるでしょうから」

聖良は耳に飛び込んだ言葉を噛みしめて、眉間を押さええつつむいた。

彼も、普段から不運なのだ。それで納得されるほど不運なのだ。

聖良は呆れながらも哀れみの目を向けた。不運だからマイノリティに走ったのか、変態だから不運になったのか、考えるのは馬鹿らしい。

そんな事を考えたら、聖良はなぜここまで運に見放されているかを考えなければならぬ。

「あの、し、下着も持ってきてください」

恥ずかしながら勇気を出して言ったのだが、二人の青年は聖良をじつと見つめて、嫌な感じの笑みを浮かべた。

「誰の許可なくセーラを見ていますか。子供扱いをしておいて、乳にだけは見入って恥ずかしい男達ですね」

アデイスの言葉を聞いて、聖良は上着のボタンを首元までかけた。年増扱いして見た目だけは好みだという男と、胸元だけ見てくる男はどっちもどっちである。

「セーラもそんな格好で前屈みになってはいけません。私は紳士だからいいものの、世間の下卑た男などに一瞬でも気を抜いてはいけません。私にとって貴方は大切なパートナーですから」

「……………」

竜に戻ると自力で人間になれない彼にとって、それはそれは大切なパートナーだろう。かと言ってずっと人間の姿というわけにはいかない。彼はもう、人間ではないのだから。

「アデイス様、人間の姿になっていたのは、どうやって？ よく聞けば、翻訳術かかっているみたいですが」

「もちろんセーラですよ。彼女は魔道の女神の申し子の様な女性ですからね」

あまりにも不幸ぶりに、小公女とまで言われた聖良が女神の申し子とは滑稽だ。青年達は聖良に疑いの目を向けた。それらしいのは発音だけで、教えられた言葉を口にしたただけとは言ふ必要はない。聖良も嗜虐趣味の人間に売られたくはないから、無力を自ら訴えるようなまねはできない。なにせ相手はアデイスの部下である。平然と裏切りそうだ。

「しかし、術に失敗は……………」

「失敗ではありませんよ。彼女がそれを特殊だとは認識していなかったからですから」

日本人が完璧な発音の日本語を話すことに、特殊性を見出す日本人はいない。英語の発音まで日本語の発音なのは情けないことだが、学校では常識だ。外国人教師を見ればつい逃げてしまうのも普通だ。「彼女の世界では、恐ろしい事にあれが普通なんですよ。やはり廃れたには理由があつたようですね。ちゃんと記録しておかねば、その内誰かがうつかり無自覚の化け物呼び出しますよ。セーラは少し年増ですが純情で可愛いからよかつたもの」

「計画を立てたのは自分じゃないですか。俺ら従っただけですよ。あと、その女神様はいくつなんですか。伝説の時を操る力なんて当たり前を持つてる世界があるんですか？」

その言葉に、聖良は頭を殴られたような衝撃を受けた。

そんな大層な魔法を使つてまで子供の姿を保っていると、この男は言いたいのだ。

「ひどいつ。」

私は普通に背が低いだけなのに、そこまで言うなんて……」

「あ、いや、別にそんなつもりは」

そんなつもりがなかったら、どんなつもりで言ったのかと、聖良の目尻はますます吊り上がる。

「いいんですよ。私なんて当たり前のように小学生と間違えられて止められるんですから。成長なんて期待できる年齢も過ぎたし、私より小さなおばあさんとお話するのが心の支えだったチビですか」

それに、少ないとはいえ、聖良よりも小さな人はいるのだ。もつと大きな問題が家庭にあつて、外見の事など考えている時間もなかったのだ。生きるのに必死だった。小さいことで虐められもしたが、それ以上に生きるのに必死だった。

「うつ……」

今までたまっていた物があふれ出すように、涙が落ちた。

嫌な目に遭うのは慣れているのに、涙が出て止まらなくなっていた。

こんな恐い世界で、高い崖の上で、大きな巢の中で、知らない人達の前で、聖良はぼろぼろと泣いている。夢であれば良いが、夢ではないと分かっていた。

「ああ、泣かないでください。その顔で泣かれるとどうしていいか……」

アデイスが手を伸ばし、しかし竜の手ではうかつに触れられないと引つ込める。

「いいじゃないか。小さい代わりに胸が成長してんだし」

「そうだよ。ほら、縦にでかくて色気のない女よりはいいよ」

「バランス悪くて悪かったですね！」

フォーローにもならない人間二人の言葉に、聖良は叫んで布を頭から被った。

「もうやだ」

帰りたい、とは思わない。帰ってもいいことなどない。殺されそうになつていたのかもしれないのだ。どうでもいい、いなくなつても当たり障りのない人間なのだ。だったら、どこにいても同じだ。

そう思うと涙が出てきた。

小さな頃　両親がいて幸せだった頃や、優しい祖父母に引き取られた頃ばかりが頭に浮かんだ。

「なあ、わるかつ………うわっ」

男の一人が変な声を出した。

「ひっ」

もう一人は小さな悲鳴を上げた。

聖良はゆっくり頭を上げて、彼らの視線を追うように上を見る。

「あ、おはようお母さん」

アデイスが媚びを売るように母の近くに駆け寄った。ずいぶんと母親を慕う子供の振りが上手い。ネルフィアはそんなアデイスにキスをした。

「ただいまアデイス。これから餌を捕りに行く予定だったけど、自分で餌をとってきたのかい」

二人が巨大なネルフィアを顔面蒼白になって見上げていた。恐いのだろう。

それにここまで連れられた聖良の気持ち少しは知るといい。

「セーラ、どうして泣いてるんだい。餌に苛められたのかい？」

聖良は素直に頷いた。

「なんて餌だろうね。小さいからって、うちのペットを苛めるなんて！」

火でも吐きそうな雰囲気二人を睨み付けるネルフィア。恐いが、ペットとして認識されている聖良に対する害はない。

彼女ほど規格の違う大きい生物に言われると、小さいというのも腹は立たない。

「ちよ、なんてことを！」

「訂正しろよ！」

聖良はぷいと横を向き無視する。

「お母さん。この人達は餌じゃありませんよ。セーラを迎えに来た人達です」

「セーラを？ 何で？」

「人間の女の子は、色々とあるんですよ。嫁入り道具とか」

おい、とは口には出さなかった。

「セーラを嫁にするつもりなのかお前。なんて気の早い」

「ははは……」

このままでは、彼女の娘にされてしまう。

「冗談ですよ。冗談」

聖良は自分の保身のために否定した。嫁よりはペットの方がマシだ。

「心配して来てくれたんです」

「じゃあ、なんで苛められてたんだい？」

「意地悪を言うんです」

意地悪だ。言わなくていいことばかり言う。身体的特徴は本人ではどうしようもないし、中途半端に小さな人間が背を伸ばすには、

とにかくお金がかかるのだ。

「セーラを連れ戻しに来たんですが、帰らないと言うから意地悪を言ったんですよ。セーラはもう私の血を飲んでいいるから人間とは相容れませんが、見た目は変わりませんからね」

アデイスは聖良の後頭部に頬をすりつけて言う。

「で、帰れない代わりに、聖良に必要な日用品を持ってきてもらうことになったんですよ。人間の女の子には、いろいろと準備が必要ですから」

立場は逆で、しかも別に連れ戻しに来たわけではないが、そう言うておくのが一番自然な流れだ。ネルフィアは大きな目を瞬きさせ、すつと顔を近づけた。

「そうかい。いい子だねセーラ」

ネルフィアの顎が聖良の頭部に激突する。

痛みを覚えて頭をさするが、衝撃に比べるとそれほど痛みは後に引かなかった。

ネルフィアはアデイスにもまた同じ事をして、聖良はあれがキスなのだとうやく悟った。見ているだけなら動物同士で可愛いのが、実際には印象よりも激しいものだった。

「じゃあ、狩りに行ってくるよ。人間ども、今度うちの子を苛めたら丸焼きにしてくれるから覚悟おし」

のっしのっしときびすを返し、光へと向かい飛び立つのが、アデイスが魔法で開けた穴から見えた。

その後ろ姿は、とても綺麗で一瞬にして心が溶けるように軽くなる。見ているだけなら、竜というのは荘厳である。

「すっかり家族として認められましたね、セーラ」

「……そうみたいです」

人ではないしとても乱暴だ。昨日も痛かったし恐かった。

しかし、家族という響きは、少しだけ胸をくすぐった。現金な物だと、聖良は自嘲した。

## 2話 幸せと不幸せ 1

聖良はぬるい湯から上がり身体を拭き終わると、下着を身につけ、体操服とハーフパンツを身につけ、グリーンのジャージを羽織った。臭い男の上着よりも、洗い立てのジャージの方が落ち着く。

替わりに、奪い取ったに等しい迷彩服を冷たい川で洗濯をして、ぎゅっとしぼり立ち上がる。洗濯石鹸もないが、少しは匂いと泥が落ちたはずだ。この世界の文明は分らないが、中世ぐらいなら石鹸があつたとしても高級品のはずだから、代案を考えなければならぬ。植物を使つていたというのは聞いた事はあつたが、この世界に元の世界と同じ植物があるとは限らない。アデイスは寮住まいであつたらしく、生活的な事は何も知らない。

聖良が文明的な生活を手に入れるには、まずは文明のある場所まで出ていくしかない。

「終わりましたか」

アデイスが聖良の背後から近づき、鼻面を押しつけてきた。

聖良が密かに思っている事だが、彼はだんだん竜らしい行動をするようになっていた。人間だとすれば、まずしないだろう事をするのだ。傷を付けないように気を使つたために考えられたスキンシップ方法なのだが、ネルフィアの動きとよく似ている。本人に自覚はまだ無いため実に哀れで涙を誘う。

「さあ、行きましょう。今日はお母さんに下まで連れていってもらうんですから」

彼は浮かれた様子で聖良の背に額を当てた。

そう、今日はネルフィアに崖の下にある、湖まで連れて行って貰う予定なのだ。狩りを終えたら帰りに拾ってもらう事になっている。アデイスが飛ぶ練習をするためだ。

彼が飛べるようになるのが、人里へ行くための最低条件だ。赤ん坊の長期旅行を、母親であるネルフィアが許可を出すはずがない。

都会育ちの聖良も、サバイバルな旅はしたくなかった。舗装もされていない道を歩くのがどれだけ困難か、実際に歩かなくてもどれだけの苦行であるか分かるのだ。

飛んで短時間で人里に行けるようになるしか道はない。

それを分かっているから、狭く退屈な場所に閉じこめられてストレスがたまっているアデイスは、努力を惜しむつもりはないようだ。今日も外に行けるだけで嬉しいらしい。聖良という「お姉さん」が出来たから、許可が出たらしく、アデイスが迷子にならないようにしっかりと見張るようにといいつけられていた。

子供のように喜ぶ彼を見れば、ネルフィアがアデイスを子供扱いして心配するのも無理はない。アデイスはただ、童心に返るほど退屈していただけだが、本人のその自覚はあまりないようだった。

早く早くと坂を押されて上り、光が見えるところまで来ると、ネルフィアが振り返って言った。

「準備はすんだね」

「はい」

布を巻いた格好では外出する勇氣は出ず、汗を軽く流してから着替えたのだ。来たときと同じ格好でなると安心した。下着を身につけるといつ当たり前のことが、これほど安らぐとは思いもしなかった。今までは本当に贅沢をして暮らしていたのだ。文明から距離を置くと、文明について理解していたつもりになっていただけだった事がよく分かった。

聖良はアデイスの背に乗って、切り裂いた布で固定し、首にしがみつく。アデイスはネルフィアの背の上に移動する。そのままネルフィアは起きあがり、のっそのっそと前進した。洞窟の外に近づくとつれ明るくなり、暗がりには慣れた目が痛み細めた時、ネルフィアは崖から身を投げた。聖良は絶叫マシーンが好きだったので、アデイスの首に回した腕に力を込めると、何とか耐えられた。

ネルフィアの赤みがかった大きな翼が、優美に広がりふわりと浮いく。風に乗った事が聖良にも分かった。



湖は崖からも見える位置にあり、キラキラしてとても綺麗だった。アデイスも暇な時は巣から出て眺めていたらしく、いつも見ていた美しい湖に行く事が出来るので喜びも一入だ。

あの部下二人が帰る時に、竿と針を置いていつてくれたので、聖良は暇な間に魚を釣ることにしている。

「すごいですね。見ていますか、セーラ」

アデイスは空から見る景色に興奮し、危なっかしくきよるきよるしながら身を乗り出し、眼下に広がる景色を眺めた。憂鬱な巣ごもり生活のせいか、彼は本当の子供のようだった。彼が身を乗り出すと、聖良も前に出るので胆が冷えた。

「見てますから、身を乗り出さないでくださいっ」

アデイスの首にしがみついて苦情を言う。

それでも、ネルフィアの飛行は想像よりはずっと安定していて、聖良も景色を見る余裕があった。

来るときは景色を見る余裕など無かったが、こうして見るとこの森はとても美しかった。山だと聞いていたが、思ったよりは平坦だった。上から見ているから、なだらかな斜面は分かりにくいだけかもしれない。聖良は何気なく振り返ると、そびえ立つような山が視界に飛び込んできて息を飲んだ。

ここから先は人間の行く場所ではなさそうだ。聖良では自力で巣に戻るのも不可能な断崖絶壁である。

「ここからどれくらい行くと人里なんです？」

「それほど離れてはいません。あの湖から流れる川が王都にまで伸びています。こんなところに巣を作るなんて、お母さんも大胆だ」

ここまでなら人が簡単に踏み入る事が出来る場所、という意味だ。難関は巢の前にある切り立った崖である。簡単ではないが、頑丈な大人の男には侵入可能である。あの二人も普通に来ていて、普通に帰って行ったのだ。ファンタジーの世界で生きる男性は実に逞しい。そんな話をしている間に、空の散歩はあっという間に終わってしまい、湖の一角にある開けた場所に降り立った。

ひらけていると思ったのだが、よく見れば木がなぎ倒されて無理矢理作られた空間であった。つまりは、ネルフィアが事前に地ならしをしたのだ。おそらく途中で水を飲むために。

「ほら、遊んでおいで。時々魔物が来るだろうけど、子供といえど竜を襲う馬鹿はいないから安心おし。みんなお前達の玩具だよ」

なんて規模の大きいおもちゃ箱だ。

襲われないのだけは感謝しなければならないと、聖良は身を堅くした。

「いつてらっしやい」

出稼ぎに行く母を見送るように、無邪気を装い手を振るアデイス。聖良も負けじと手を振ると、ネルフィアは二人にキスをしてから飛び立った。

相変わらず頭突きをされているようで後ろにころんと転がってしまふ。ついた手に木片が刺さって痛かった。木片を抜いて吸い出すと、すぐに回復して綺麗になる。便利な体質と言えばそうなのだが、こうでもない人間が竜と一緒に生活など出来ない。

「彼女はあれでも手加減しているつもりなんですよ」

「お母さんに本気でやられたらぺちゃんこですよ」  
ペットとして可愛がられている実感はあった。

この扱いは人として情けない限りだが、相手が相手なので仕方がない。ネルフィアは人間を圧倒している。生き物としての格が違うので、多少のことなら目をつぶれる。

「じゃあ、練習しますからセーラは昼食でも釣っててください。」

「はい」

ネルフィアと違って小さな身体のアデイスなら、湖の周辺の木によじ登り、飛び降りれば飛行練習が出来る。それほど離れることもなく、聖良も安心して釣りが出来る。

アデイスが満腹になるほど釣れるはずもないが、お弁当として昨日の残りの肉を持ってきている。牛とアデイスは言うが、聖良の知

る牛とは大きく違っていた。もう少し、羊を混ぜたようなものもここの可愛らしさがあり、息絶えたそれを見て少し切なくなつたものだ。釣り竿を組み立てると、それに糸を結びつける。それから近くの石をひっくり返し、その下にいた正体不明のミミズ系の生物を捕まえると針に刺して湖に垂らす。本当はルアーなどの疑似餌がいいのだが、こればかりは仕方がない。

聖良の知る釣り糸とは違うが、釣りの方法は変わらない。

幼い頃に父に連れられて釣りをしたことがこんな所で役に立つとは思ひもしなかつた。亡くなつた父に感謝する。

しばらくすると、手応えを感じ、そつと竿を上げる。

「よかつた！」

普通の魚だつた。見たことはないが、普通の魚だ。少し気持ち悪いが、それなりに普通の魚だ。許容範囲内。

釣れた魚は石の上に置いて、また餌を付けて釣り糸を垂らす。部下二人が置いていつた塩とナイフがあるので、調理に困る事は無い。火はアデイスが吐けるし、乾いた木材はネルフィアが踏み荒らしたものがたくさんある。手頃なサイズの石も転がっているから、並べて簡単なかまども作れる。

ただそれだけの事が幸せだつた。

「美味しいかなあ。たくさん釣れるといいなあ」

淡水魚は淡泊で生臭い物だが、多少ひどくても食べられないことはないのだ。香草もあるので、臭かつたら次からは考えて料理すればいい。まずはシンプルに塩焼きを食べてみないことには分からない。いい。

アデイスは必死に翼を動かしていた。飛ばうというよりも、身体を慣らしている感じだ。

しばらくすると本格的に翼を動かし、ぴよんと跳んでは滑空し、どすんと着地する。飛ぶと言うよりも、翼で空気を受けて紙飛行機のように浮いているように見えた。胴体着陸することもあるが、それほど痛くはないようだ。

これならすぐに飛べるようになる。彼は知能のない子供ではなく、創意工夫できる大人だから、多少の無茶をしてもすぐに回復するから成長は早い。

聖良はのんびりと竿を支え、飛行練習を眺めて釣りをした。

釣りの成果は悪くはなく、人間であれば腹がふくれる数の魚が釣れた。ナイフではらわたと鱗を取り、きれいに洗った木の枝で串刺しにする。薪を集め、魚を焼きやすいように石を積んだ。あとはアデイスの火を貰うだけだが、彼がまだ頑張っているのでもう少し魚を釣ろうか悩んだ。アデイスはあの巨体のためよく食べる。昨日のあまりの肉も持つてきたが、足りるかどうかが自信がなかった。

「あ、お昼ですか？」

釣り竿を持つて悩んでいると、聖良の様子に気付いてアデイスが声をかけた。すっかり薄汚れ、疲れた顔をして近づいてくる。

「火がいらいます」

「はいはい」

アデイスは集めた薪に火を噴いた。便利な力だが、聖良も欲しいとは思わなかった。

薪を足して火を安定させ、石で作った土台に魚の串を刺した。肉も串に通して火にかけて、塩をふって焼けるのを待つ。

「これだけですか？ これでも育ち盛りなんですよねえ。竜になったんだから、できれば立派で大きな竜になりたいんですけど」

他人が苦勞して用意した物に文句を言うとは許し難い男である。

無神経な事を言つて恋人に捨てられるタイプだ。

「文句を言わないでください。肉はまだあります」

「そうですか」

「いいですねえ育つて。育ち盛りにもほとんど育たなかった私とは大違いですねえ」

「いい年していじけないでください。その顔でそんな表情をされると、慰めなくなるじゃないですか」

聖良は自分が童顔で良かったのか悪かったのか、この状況になっ

ても分からなかった。部下二人は幼く見えるから助けたような事を言っていたが、彼は年齢どおりの見た目でも助けてくれたはずだ。男性にでも血を分けていただろう。それほど彼は他人との接触到に飢えていた。

違いがあるとしたら、乱暴な扱いを受けるかどうかとか、その程度の差だ。

「やっぱりお魚だけじゃ、アデイスが満足できるほど獲れませんね。かと言って家畜を盗ませ続けるのも……」。

魔物とかなければ食べ物を探してくるんですけど」

ネルフィアのような化け物でなくとも、聖良にとっては野犬一匹でも危険だ。磁石もないので、戻って来られない可能性も高い。

「じゃあ、午後からは食料探しに行きましょうか。今の時期ならいろいろとあるでしょうから、果物とか食べられるかもしれませんよ。魔物がいなくても、セーラー人では食べられる物と食べられない物の区別が付かないでしょう」

「そうですね。植物も見た事もない物ばかりですし」

見た事がある植物というのももちろん無いが、聖良に雑草の区別などつかないので、見た事があるかどうかは、実はあまり問題にならない。見た事あるような植物がある事、その植物とこの世界の植物が、どれほど違うのかが大切だ。

「果物があったら嬉しいですよ。木の実でもいいですけど」

「今の時期なら何かしらありますよ」

聖良は肉や魚よりも、野菜や果物の方が好きだ。もちろん野菜は調味料が揃っていればの話で、塩だけなら肉の方が食は進む。しかし連日ともなれば飽き飽きするのだ。アデイスが飛べるようになるまで時間が掛かり、アデイスの部下達がここに来るのも時間が掛かる。部下達も最短で一週間。それまでずっと肉ばかりだと、多彩な味になれている聖良には辛いのだ。肉ばかりではニキビが出来たり、肌も荒れそうだ。ここには石鹸もないので、皮脂が落ちた気がしない。現代っ子には辛い日々だった。出来ればシャンプーをしてリン

スをして、トリートメントもしたかった。

「人里に出たら、洗髪料とか洗顔料とか欲しいです」

聖良は試しにおねだりを試してみた。

「化粧品でもなんでも買ってさしあげます。セーラが幼く可愛くいてくれれば、私も嬉しいですからね。せつかく綺麗な黒髪が、痛んでしまつては私も耐えられません。髪にいい油も買いますよ。服も仕立てましょう。その服はユニークだけど、それで歩いては目立ちますからね」

デザイン以前に、大穴の空いた服など着ていたら目立って当然だ。

「これは体操着なんです」

「何かスポーツを？」

「意地悪な人に、制服を汚されたんで着替えてたんです。家で色々あるから茶化したり、ちよっかいを出して面白がったりする人がいるんです。いとこの友人とか」

彼女は聖良と違って、大人びた美人だったから、人気があった。

小公女だの、王子様の現れないシンデレラなど陰で言われて、本当に腹が立った。しかしもう彼女たちには文句を言う事も出来ないのだ。

遺産を取り戻して高笑いという理想があつたのに、今は生きていくだけでありがたいという状況だ。人生が上向きになると、別の何かが起こる。聖良の人生は、そんな事の繰り返しだった。

元の世界にいた時は、色々なものを食べて、髪を洗えた。今やそれすら叶わない。

しかし変態でも、口が軽くても、親切なひとに拾われた事は、幸運だった。例えそれが、諸悪の根源だとしても。

そう思ってしまう状況なのだ。次を考えるとぞつとするため、話を逸らすようにアデイスに問う。

「ところで調子はどうです？ 飛べそうですか？」

「あの木の上までは飛び上がれるようになりましたよ」

「すごいじゃないですか」

とりあえず褒めておいた。彼は天才肌なので、持ち上げておけば伸びるタイプだろうと見ている。

「まあ、そこが下等な畜生と違うところですよ。」

まずは巢まで自力で戻れるようになるのが目標ですが、先にまともな食料の確保の方が大切でしょう」

「そうですね」

脱出するのでもいいが、生活基盤も大切だ。ここで聖良よりも長く暮らしているアデイスの方が、その重要性を理解していた。

「何にしても、私が巣立つ日はそう遠くありません」

「え、巣立てるんですか？」

旅行と巣立ちとはまったく別物だ。

「巣立つだけなら、飛べるようにさえなればすぐにでも出来ますが……問題はお母さんですね。過保護ではないですが、執着はあるようなので、手放してくれない気がします」

ネルフィアは見た目に反して教育熱心な母親だ。

子の活躍を影から見守るタイプなのか、それとも、自由にしていけど側において欲しいタイプなのかまだ分からない。かなりいい加減な性格だが、母親なのだから、子供は出来るだけ側に置いておきたいはずだ。賢く育てたかったということは、自慢したいということもあるに違いない。

「他の竜は、どういう生活をしてるんですか？」

魚をひっくり返しながら問う。重みで元に戻ってしまうので、串に石を積んで固定させた。網でもあったらいいのだが、なくてもどうにでもなる。

こうしていると、意外と順応性が高いのだと、聖良は自分に感心した。

アデイスという（一応）ボディガードがいるからこそ落ち着いているが、一人で森をさ迷っていたら、かなり脅えていたはずだ。アデイスが不運で有能な人間で本当に助かった。そうでなければ餌として彼の腹の中に収まっていたのだから。

「さあ。人が辿り着けないような場所に集落があり、小人と共存しているようです。私も詳しくは知りません。お母さんが帰ってきたら聞いてみましょうか。知的好奇心を見せれば、きつと喜びますよ」  
「そうですね」

アデイスはほどよく焼けた魚を一匹手にし、それを一口でぺろりと食べてしまう。

「我ながら、物悲しくなりますね。今はまだ大食いの人間に比べて少し食欲がある程度ですけど、大人になったらどれだけ食べるんでしょうか。これでも美食家だったんですが、不安です」

そう言いながら、二匹目の魚を口にする。

「なるようにしかありませんよ。私もう大きくなれないし」

十八歳。女。諦めるしかない年齢だ。男ならまだ伸びる年頃だが、女は絶望的だ。

「いいじゃないですか。人間から見れば永遠の少女。ご婦人方に嫉妬の目を向けられます」

「私も大人の女になりたかったです」

「そのまま成長しても無駄でしょう」

どうせ大人の魅力など身につけることなく年を取っていたのだが、他人に言われると腹が立った。

苛立ちをぶつけるように、聖良は焼けた魚を食べた。塩味だけが、肉だけの昨夜を思えば、ずいぶんとさっぱりしている。少し生臭いが、水は比較的綺麗なので、思ったほどではない。

食べられるのは幸せ。自分が食べられないのも幸せ。

そう思うほどのギリギリのこの生活は、幸せとは言えないが、最悪というわけでもない。

きつと、恵まれている方なのだと、自分に言い聞かせた。



## 2話 幸せと不幸せ 2

アデイスの頭の上に乗る、高いところにあつた見たこともない果物を、白い布の端を結んで作った袋に入れていく。試しに一つ食べたが、酸味は強くも無く、口に合わなくはなかった。甘い果実に慣れた聖良にとっては物足りなく感じたが、自然になつていいる果物なのだから仕方がない。こんな所に日本人好みの、糖度の高い果物などあるはずがない。

今までの生活が贅沢だったのだ。テレビが無くとも、冷蔵庫が無くとも、コンビニが無くとも、食べられる事に怯える必要の無い、平穏な日常は幸せだ。

「アデイス、そろそろ限界です」

「はいはい」

聖良はアデイスの頭の上に座り、かがんだ彼の首を滑り落ちるようにして降りた。

竜といえども雑食で、艶のよい肌を作るには果物のような栄養も必要だと主張し、彼は既にけっこうな量を腹に収めている。残ったのが少し高いところばかりになつて、聖良が彼の頭の上に登つたのだ。

「私にはいっぱいだけど、アデイスには少しですね」

「少しでいいですよ。量を食べるなら、肉を食べますから。口直しとして食べるだけで十分です。先ほどはつい食べ過ぎましたが」

「つい……ねえ」

人間の感覚だとつい食べ過ぎたという量ではないが、悲惨な食生活の後では、つい夢中になつて食べ過ぎるのも仕方がない。

彼は今まで一人で耐えてきたのだ。

「それよりも、この禁欲生活が辛いですよ。酒やたばこなどは言いませんが、温かいスープや煮込んだ肉や野菜が食べたいですね」

「調味料が少ないので、スープは……」

肉に振り掛けて味付けするだけでも、控えているほどだ。スープに使うなど、夢のまた夢。部下の二人が調味料を持ってきてくれるのを待つしか無い。

「ああ、テーブルにいたら勝手に料理が出てくる暮らしが懐かしい」

彼は尻尾で地面を叩いて哀愁に浸る。

「前は裕福な生活をしてたんですね」

部下がいるぐらいなので、庶民の聖良とは違う世界に生きていたのは間違いない。ボロボロになった服も、かなりいい生地と仕立てだった。

「これでも表の身分は王室付魔術師ですからね。金に困った事だけはありません」

「そーなんですか」

金に困った事がないという言葉に、聖良は少し呆れ、妬んだ。人間の頃は彼好みの童女も騙せそうな美男子だ。彼が持っていなかったのは運と無口という言葉だけだろう。

「私が生まれた時に大きな国の改革があつたのですが、その時に幼い内から魔術師の育成に力を入れるようになり、私が第一号なんですよ。」

物心ついた頃には宮殿で生活し、溢れんばかりの才能で、このよくな天才に成長しました。まあ、目立つ容姿と才能のおかげでこんな目に合ってますけれど」

「目立つんですか？」

「そりゃあ銀髪ですからね」

彼は物憂げに何も無い頭部に触れる。

「あの髪、やっぱり珍しかったんですか。てつきりこの世界では普通の色なのかと」

「もちろんです。自慢の髪でした、ええ、自慢の」

今はすっかり禿げてしまっているのだ、切なくもなる。

「でもつ、ついてないですね。せつかく成り上がったのに」  
ハゲを誤魔化すように、聖良は話題を変えた。

そのまま国に仕えていれば、彼はもつと偉くてお金持ちになっていたのだ。落ちぶれ具合は聖良よりもはるかにひどい。親の記憶がある分、彼よりはきつと救いがある。

そう考えると聖良は優しい気持ちになる事が出来た。人間とは、自分よりも悲惨な人間を見ると少し元気が出てくるものだ。

「きつといいことがありますよ。成長すれば前よりも強くなるんですよ」

「そうですね。生まれ持った資質だけは変えられません。私の知識と、この力を使いこなせば、あのクソババア共だつてひとひねりです。そう思うと、力が湧いてきます」

尊大に構えた自信家の彼が、一捻りできないと思っている老人が複数形もいるらしく、聖良は少し驚いた。彼は自分より上の存在を認められる人間のようなだ。

絶対に他人を自分よりも上だと認めないタイプではなくらしく、聖良は少し安堵した。そういう難しいタイプの男と一緒にいるのは難しい。聖良は難しいタイプとは関わり合いになりたくない。

「一捻りできるといいですね」

そう言うつと、布をアデイスの背に、袈裟懸けに縛り付けた。

聖良は非力なので、こんな物を持って歩いてはすぐに疲れて、腕が上がらなくなってしまう。

「他は何があるでしょうか」

「もう少ししたら、もつと木の実とかも落ちてそうなんですけどね。まだ少し早いですね」

「木の実ですか。今は秋なんですか？」

上の方は夜は肌寒いほど涼しいが、下はずいぶんと暑く、木々に遮られて太陽も光も優しいので、腕まくりをしている。

「そろそろ秋といっていい季節でしょうね。だから防寒具だけは早急に手に入れておかなければなりません」

その言葉を聞いて、聖良は周囲を見回した。真上にある広葉樹の葉は色めいている。少ししたらこの木の葉もすべて地面に落ちるのだろう。

「そっか。冬かあ。やだなあ」

聖良は冷え性だ。しかもあの洞窟はよく冷える。しかし鍾乳洞は年中温度が変わらないから、逆に外よりは暖かい可能性もある。

アデイスがもっと毛皮でふかふかだったら助かったのだが、現実はどう見ても、夏場に抱いたら涼しそうな外観だ。部下二人が暖かい毛皮でも持ってきてくれることを祈るしかない。

薪も集めておいた方がいいかもしれない。もしも雪がよく降るなら、食料よりも優先して集めなければならぬ。

「大丈夫ですよ。暖を取るだけなら、最悪魔術でどうにでもなります」

「そうですね。でもやっぱり毛布とかは欲しいですよね」

寒さ対策ができるなら、最悪の心配をする必要は無い。食べ物があつて、寒くなければ幸せな事だ。

聖良は安心したところでスキップなどしながら前へと進む。幸いな事に聖良は運動靴をはいているので、日本の山ほど険しくないなららかな獣道を下るぐらいなら、意外と都会っ子でも苦はない。運動神経がある方では無いが、新聞配達のおかげで、体力はそこそこあるのだ。

「ここら、はしゃぐと転びますよ」

確かにそうだと足を止める。足下はよくないし、いつ木の根に躓いたり、何かで滑るとも限らない。足を止めた時、その足下でキノコを見つけて聖良は座り込んだ。

キノコは聖良の好物だ。

「キノコ！ ああ、でも毒とかあつたら……竜つて毒とか効くのかな？」

ねえアデイス、これ食べられるかギヤ」

突然に襲った衝撃で、聖良はみっともない悲鳴を上げた。

体が痛い。打った部分も痛い。覚えのある違う痛みに閉じていた目を開く。

景色が動いている。痛い。何か腹と背中に刺さっている。嫌なのだが、自分の状況を理解した。

聖良は今、何かの口の中にいる。

この前は爪で、今度は牙。

立て続けでこんな痛みを味わうなど、と考えて意識が薄れ行く。遠くで、アデイスの悲鳴が聞こえたような気がした。気を失えた方が、起きていてるよりも幸せだ。

セーラがさらわれて一人残されたアデイスは、慌てて追いかけたものの、竜が森の中で獣の足に敵うはずが無く、すぐに見失ってしまった。

獣 魔獣だ。

ただの獣ならともかく、魔獣が竜の連れをさらうとは考えられない。彼等には知恵と本能があるため、自分よりも上位の存在から得物を引つさらうような真似はしない。

アデイスの知識では、子供であろうが竜とは最も格の高い生き物だ。ネルフィアもそう思っていたから、認識が現実とずれているなどという事は無い。

しかし現実に事は起きていて、啜えられていった。

何か理由があるかも知れない。

何の理由か

「馬鹿馬鹿しい！」

それが分かるほど魔獣に詳しくもなく、竜生活は長くない。この森の事も知らない。

だから考えるだけ無駄だ。一分一秒でも早く彼女を助け出すことが先決である。

幸いな事に、どちらの方角にいるかは、なんとなく分かる。血のつながりというのは、こういう事なのかと、アデイスは感動すら覚えていた。

このつながりで、あれは自分の物なのだと実感する。彼女はまだ生きている。

完全に四つ足の獣の姿をしていたため、性的な乱暴を受けることもないだろう。なら生きていれば何とかなる。

後はどうにか間に合うのを祈るしかない。

今の彼は竜の子供。竜は地上を走って速い生物ではない。だから森の中を走るなど竜にとっては有り得ない事だ。しかし空などろくに飛べない彼には、せいぜい走るしかない。

「いや、まて」

アデイスは目の前の高い木を見上げると、翼を使い木の枝に飛び乗り、それを繰り返して一番高い場所まで登る。その高い木の枝から飛び、翼を使って滑空する。

練習してなんとななくコツを掴んだため、午後からは本格的な練習をしようと思っていたことだ。高所から飛び降りるのは、翼があっても足が竦んだが、勇気を出して飛び出せば、思ったよりも上手いきき、手頃な木の枝に降り立っては飛ぶと繰り返す。

地上を走るよりはずいぶんと早い。しかも数回繰り返すうちに慣れてきて、翼を動かせば上昇し、木の枝に止まる回数が減る。

必要があれば人間嫌でも上達するものだが、竜になってからそれを実感するとは思わなかった。

## 2話 幸せと不幸せ 3

聖良が目を開くと、緑が見えた。

地面に投げ出され、草の上に腹ばいになっているのだ。力が出ずにそのまましていると、誰かに身体を転がされ、仰向けになった。

木々の枝の向こうに見える、青い空が遠い。

その空を、獣の頭が遮った。

「ひいつ」

怪我の事を忘れて跳び退ると、変な所に力が入り、身体の痛みを思い出して呻いた。

「大丈夫？」

思いも寄らぬ、男の子の涼やかな声が聖良の耳に入る。

肉食獣がしゃべるとは、恐るべしファンタジーの世界。

「脅えなくても大丈夫だよ。この子はいい子だから」

犬科とも猫科ともつかない獣が離れ、少年が顔を覗き込んでくる。声は彼の物のようだった。獣の声で無いと分かり、聖良は少し安心した。

綺麗な少年で、透けるような白い肌に、少し尖った耳をしてる。

「ここは……」

「起きないで。血が出ているから」

また服に穴が増えた。この世界に来てから着る物に恵まれず、あり得ない怪我をする。一度目は竜の爪、二度目は獣の牙。その他に岩場で滑って頭を打ったが、日常的に良くある事のため数には入らない。

「ごめんね。本当はもっと丁寧に助けたかったのですが、相手が竜ではこうするしかなかったんだ」

少年は聖良の傍らに膝をついた。少年よりも大きな獣は、その斜め後ろで大人しくちょこんとお座りしている。

聖良は現状を理解した。

親切な彼等に助けられたのだ。

「すぐに手当をするね。失礼するよ」

呆れと感動が半々な状態に、どうしていいのか分からず黙っていると、少年は聖良のジャージを脱がせようと手を伸ばしてきた。

「ちょ、待って！ いいから！」

子供といえど、もう小学校の高学年か、中学生ぐらいの男の子だ。どうせすぐに直ってしまうのに、脱がせられるのはごめんだった。

「こつ見えても僕は見た目の三倍は生きているから大丈夫。子供じゃ無いよ」

「もつと冗談じゃないですよそれ」

子供ならともかく、中身が大人なら必要もないのに見られるなどとんでもない。

「しかし、治療をしてはやく移動しないと他の魔物が来ちゃうよ」

「う……」

聖良は渋々立ち上がる。血は思ったほど出ていないので助かった。ジャージの中に手を入れて傷口を確かめると、傷はあるが皮膚がうごめいている。怖くて手を離し、傷口に服が巻き込まれないように裾の前後を持ち上げる。

「無理をしないで」

「もう大丈夫です。今治ってます」

痛いがすぐに通り過ぎる。

ネルフィアにやられたときに比べればずっと軽傷なのだ。

すぐに治ると分かっている痛みになら耐えられる。

「じゃあ、とりあえずこちらに」

支えてくれようとするのを遠慮して、聖良は自分の足で歩く。

アデイスが側にいない以上、血の臭いをさせて一カ所に留まるのは危険だ。何せアデイスは熊除けの鈴のような物である。

「僕はアルテ。この子はリーザ」

「どうやらこの獣は女の子のようだ。」

「私は聖良です」



苗字ではなく名前を名乗るのに違和感はあるが、この世界では名前だけを名乗るのが普通らしい。アデイスは孤児だから、苗字がないだけかもしれないが。

「君は人間の魔術師？」

「え？」

「魔女ではないようだし……傷もすぐに治してしまった。それに言葉も」

なんと説明していいのか分からない。

アデイスのこともなんと説明していいのか分からない。

「君……あなたは何なんですか？」

「僕はこの森に住んでいるエルフだよ」

さすがはファンタジー。竜の次はエルフだ。牛の時のように、聖良の知っている一番近い言葉に当てはめられているだけで、聖良の知っているエルフとは別物だろうが、美形の代名詞が美形であった事に少し感動した。

「あの、どうしてこんな事を？」

念のために確認を取らないといけない。

「君は竜に狙われていたんだよ」

やはりアデイスが原因のようだ。他人から見ると、あれは無防備に歩く少女と忍び寄り寄る竜に見えたのだろう。

「いや、あの……」

「しっ」

突然口を押さえられ、足を止める。見た目が子供相手なのでこうして触れられても恐くはないが、安心も出来ない。彼は強そうには見えないから。

リーザは低く唸り威嚇する。

何かが近くに潜んでいるのだろうか。

「来る」

女性の声でリーザが呟き、頭上を睨む。

木陰に隠れるように潜んでいると、頭上を大きな何かが一瞬で通

り過ぎる。

ずいぶんと大きくて見たことがあるようなシルエットだった気がした。

「よかった、行った。とにかくここを離れよう」

聖良は空を見上げる、が、今は何も見えない。先ほどの何かアデイスなのも確認できなかった。彼はまだ飛ぶには至っていないかったが、コツを掴んで飛んでいる可能性も否定は出来ない。

「ただだよ。戻ってくる」

リーザが女性の声で言う。声は思ったよりも可愛らしい。

「この子が狙いか？」

言われてもう一度上を見ると、アデイスが旋回に失敗して墜落するのが見えた。

木の幹にぶつかり聖良は目を背けた。音がしなかったため恐る恐る見上げれば、しっかりと木の幹にしがみつくとアデイスの姿が見えた。聖良はほっと胸をなで下ろすと、アデイスは翼を広げて少し離れた場所に降りた。彼は聖良達の場所を見失っているようだ。

「どうする」

「逃げるしかない」

聖良がアデイスと声をかけようとすると、腰を掴まれ抱き上げられる。そしてそのままアルテはセーラを抱えてリーザの背に乗った。

「うわわわわっ」

「しっ」

聖良は恐怖でアルテにしがみついて目を閉じる。

揺れていた。

動物に乗るなど、幼い頃にポニーの背に乗って小さな広場を一週、もしくは竜の口と背で大空という極端な経験しかない。それが四足歩行の獣の背に乗って走っているのだ。

衝撃は激しく、絶叫マシンとは比べものにならないほど恐ろしく、口を開くと舌を噛みそうになった。

歯を食いしばりながら目を開けると、聖良に気付いたアデイスが

こちらに向かっできていた。しかし人を二人乗せている獣の方が速く、どんどん離されていく。

どうにかしようにも声を出したら舌を噛む。それ以前に声を出す余裕もない。恐くて声など出る気がしなかった。

泣きながらアデイスに目で助けを求めると、思いが通じたのか、今までのんびりしている姿しか見たことのなかった彼が、形相を変えてかなりの勢いで追いかけてきてくれた。

「てつめえ、人の女をどうする気だあああ!？」

可愛い声で怒鳴り始めた。怒鳴るのはいいが、今まで取り澄ましてしゃべっていたのに、今はすっかり崩れている。

「しつこい。あの凶悪竜の子供が何でこんな所に……」

凶悪竜とはネルフィアのことだ。ネルフィアの息子だから、アルテ達はアデイスを恐れているのだ。ネルフィアはこの森で無法の限りを尽くしているらしい。

「セーラをかえせええっ!!」

アデイスは必死で追いかけてくれている。彼の女というのは納得いかないが、必死なのは本当だ。聖良の事で必死になってくれる誰かがいるという事が、少しだけ嬉しかった。

「アルテ、名指してその子と呼んでいるよ。ひょっとして危害を加えるつもりはないんじゃないか」

「まさか」

聖良は今しかないと、アルテの背を叩く。

「セーラ! 今助けますっ!」

「んんっ」

恐いから早く助けて。

言いたいと言えない現状が悲しい。

しかしアデイスが追いつく前に、リーザの足が止まった。

「リーザ!？」

「今逃げても、また空を飛んで追いつかれるよ。私ももう疲れた」

聖良は深呼吸して自分を落ち着かせる。ほとんど呼吸を止めてい

たため、動悸と息切れが激しかった。

そうしている内に、アデイスがどんどん近づいてくる。

「アデイスっ」

「セーラ！」

聖良はアルテの腕から抜け出し、アデイスへと駆け寄った。

これほど誰かとの抱擁が嬉しかったことはない。誰かをこれほど必要としたこともない。

「こ、恐かった」

絶叫系の乗り物ならともかく、これは恐くて仕方がなかった。

「可哀想にセーラ。普通に生きていただけで、立て続けにこんな目にあうなんて、とても他人事とは思えません」

「変な親近感持たないください」

彼も日常のかなり不運な目にあっているようで、聖良自身もアデイスと自分を重ねなくもないのだが、今はその時ではない。

「そうですね。」

その少年、私のセーラを拐かすとはいいい度胸です」

アデイスはセーラを後ろ手に隠し、爪を見せつけ前が出る。まさか自分のせいで聖良が『助けられた』とは思っておらず、しかも相手は男であるために容赦なく斬りつけそうな雰囲気だった。

「ちよ、待ってください。この人はなんか勘違いして、私を助けようとしてくれたんです」

「助けるとは失礼な。それでは私がセーラを無理矢理連れ回してたみたいじゃないですか！」

「きつと、お母さんが森で無茶をしたんですよっ！」

「あ……」

アデイスも聖良と似たようなことを思い浮かべているのだろう。

この森の女王様は、遠慮も何もなく、したいようにして他人に迷惑をかけている。それを否定できる要素はまるでなかった。それどころか、その光景が目には浮かぶのだ。

「ああ、そう考えるとしかたがない気も」

「でしょう」

アデイスは納得して、爪を引つ込めた。簡単に怒りが収まり尻尾を丸めた事から、勢いで怒っていたのが分かる。

「でも無事でよかったって……また怪我してるじゃないですか！小僧、そこに直りなさいっ！可愛いからといって何でも許されると思ったら大間違いです！」

アデイスは再びアルテに指を突きつけた。アルテは子供だ。自称子供好きという言葉信じて、聖良は今の言葉を受け流す事にした。「なんなんだ、この竜」

「なんなんだじゃありません！女性に傷を付けるなんて、子供と言えども許せません！しかも子供と言ってもエルフなら年上じゃないですか！というか、なぜこんな所にエルフが生息しているのですか！？」

血を見て興奮したアデイスは、再びアルテに爪を向けた。今度は切り裂くためではないので間に入るような真似はしない。

怒りと同時に疑問をぶつけているため、我を忘れるような事はないだろう。

「手当をしようとしたらお前が来たんだ！お前達が来てから、この森がどれだけ被害を受けているかっ！」

「そんなこと私は知りませんよ。竜が住み処と選んだんです。弱者は安穩を祈って生きるしか道はありません。それは人間にすら言えることです」

竜を見たら逆らうな逃げると言いたいようだ。

ネルフィアの場合はそれが正しい。

「お人好しなエルフなど聞いた事もない。

私だからよかったものの、うちの母だったらどうなっていたか。母は竜の中でもかなり特殊な部類に入ります。逆らうことはもちろん、関わりと必然的に不幸になるような女性です。

生きていたければ、関係のない事に首を突っ込むのはやめなさい。

なぜこんな場所に移住したかは知りませんが、せつかく生きているのだからもつと賢く生きなさい」

いつの間にか説教になつていた。男としては問題外だが、根はい人なのかも知れない。アデイスには部下が一応はついてきているようなので、人望はあるのだ。

「なんで竜が人間の女の子を連れてきているんだ！？　こんな小さな子、食べる所なんてないだろ！？」

「食べませんよ。セーラは家族です」

「なんで人間が家族なんだ！？」

アデイスは考えるように腕を組んで聖良を見つめる。

何だと尋ねられると、なかなか言いにくい事情だ。捕食されてしまった元人間と、捕食されそうになつた人間仲間です、と言えば余計に理解に苦しむはずだ。

「お嫁さんみたいなものです」

「なんで嫁扱いなんですか」

唐突な言葉に、聖良はアデイスを睨み付けた。

「養女の方がよかつたですか？　お兄ちゃんと呼んでくださるならそれでもいいんですか」

「なんで私が生まれたばかりの身体のお兄ちゃん呼ばわりしないといけないんですか」

アデイスはよく分からない男だ。

年増呼ばわりしたり、子供扱いしたり、人を見てため息をついたり、何を考えているかだけは分かりすぎて不愉快になる。何を考えているかも分からないなら救いはあるが、嫌でも分かってしまうのだ。

分からないのはその性癖全般についてだ。

変態が存在するだけならいいのだが、それが聖良の殺生与奪権を握っているとなると話は別だ。いつか餌食にされるのではと、気が気でならない。

「まあ、それはいいとして。

君は生きていたかったら、今後竜に関わらない方が懸命です。私のような理知的な竜ばかりとは限りませんから」

「お前は人間を食らって知識を得たんだろ」

「ちなみに、一番初めの候補は年増のエルフ女でしたよ。どこにエルフがいるのかと思つてたのですが、まさかこんな所にいたとは……」

「人間の方が賢そうだから諦めたようですが」

アルテが青ざめた。彼らはこの不運な男の運のなさに助けられたことになる。

「あなたに食べられる記憶がある者の気持ちは理解できますか？

連れさらわれるときの気持ちとか理解できますか？ 育てられてるんですよ？ 一番初めは子熊を一頭目の前に運んできました。しかも半死半生。殺すに殺せないでいると、目の前で解体を始めるし、それに慣れてきたら次は人間の女の子をお食べですよ。生まれて一ヶ月でこんな生活を強いられる者の気持ちが理解できますか！？ しかも人間の教養を持つて！」

聖良はアデイスの後頭部を撫でる。彼もずいぶんと悲惨な生まれ変わり方をしたものだ。吹っ切れたように見えて、心の傷は深いようである。

アデイスは聖良に擦り寄り、それから地面に伏せるようにしゃがみ込む。

「セーラ、帰りましょう。ここから歩いて帰ると時間が掛かってお母さんが探しながら暴れるかもしれません」

「あり得そうで恐いですね……」。

でも、飛ぶんですか？」

「人を乗せて自力で飛べるほど慣れていませんよ。時間短縮のために少し高いところを行きますが、上達したので大丈夫です」

聖良はびくびくしながらその背に乗って首にしがみつく。背負つ

ていた果物は捨ててきたらしく見あたらなかった。仕方がないので諦める事にした。命あつての物種だ。

「ああ、そうだ。一つだけ言っておかなきゃいけないことがあります」

アデイスは聖良を背負ったままアルテへと向き直る。

「うちの母は他人の命なんてゴミ同然ですが、存在を認められればけっこういい人です。この前遊びに来た人間も、生かして返しました。これからも彼らは襲わないでしょう」

アデイスは何だかんだと言って、身体の本能が、ネルフィアの事を好いている。

聖良も彼女のことは恐いが、好きだ。

知ってしまうと憎めない。彼女が彼女なりの愛情をくれるから、冷たい人間達よりは好きだ。

「ああ、聞き忘れるところだった。

君、妹か年の近い姉はいますか？」

聖良はない力を振り絞り、アデイスの首を絞めた。

「え、いるけど」

「じゃあ、その子も連れて明日うちの巢の近くにある湖に来るといいい。

お母さんに襲わないように言っておきます」

「どうして……」

「人型の生物を食べさせられるのも、残して母を悲しませるのも嫌ですからね」

彼は絶対に妹目当てだ。本物の童女万歳と思っている。内心は小躍りしているだろう。しかも彼の妹なら、美少女に違いない。

「それじゃあ」

アデイスは身体を起こし、地を蹴った。翼を動かした木の枝を足場にさらに上へと跳び、木の高さを超えるとグライダーのように飛ぶ。高度が下がると適当な足場を見つけては同じ事を繰り返す。

本当に、少しは成長したようだ。



「時々落ちるんで死ぬ気で掴まっついていてくださいね」  
聖良は目をつぶって死にものぐるいでしがみついた。

翌朝、聖良はネルフィアの背に乗り湖のほとりに降り立った。

アデイスの方は飛べるのが楽しいらしく自力で崖を降りた。竜の再生能力があるので、万が一落ちても死ぬ事はないと、ネルフィアに太鼓判を押されて、勇気を出して飛び出したのだ。あとは戻れるようになれば、だいぶ生活も変わってくる。

息子の成長ぶりにネルフィアは大変満足し、上機嫌だ。今度はもつとしっかりと飛べるよう、身体を大きくする方法を教えてくださいなという。

竜というのは、身体のサイズを変化させることができるのだ。それを聞いた時、聖良は規格外ぶりに呆れた。しかし魔術などという物が実在する世界である。もうどんな不思議な体質を持つ生物が現れても、聖良は驚かないだろう。

ネルフィアは水を飲みに行くときに少し小さくなって奥へ行っているらしい。聖良が風呂に使っているあの穴は、本当にネルフィアの手による物だったようで、少しぞっとした。

「あ、いたいた。お母さん、昨日できたオトモダチです」

アデイスが白々しいことを言っただけで木陰に座っていたアルテへと駆け寄った。

母親らしき女性と、昨日も見た獣がいる。妹らしき姿はない。

「妹さんは？」

アデイスは見回して、アルテよりも幼い少女を探した。

「え、この子、リーザっていうんだけど」

アルテは自分の傍らにお座りする獣を指さした。紹介されると、

リーザは猫のように伸びをする。伸びをして

「おおっ」

聖良は驚愕におののき身を乗り出す。

リーザが人間の姿になった。いや、人間ではない。体毛が生えていて、狼男を思い出す女の子。彼女は女の子だから、狼女だ。

「僕の妹」

「まて！」

アデイスが手を伸ばす。

「どこが妹！？ 似てないし、しかも年増！」

そう。アデイスからしてみれば年増。聖良と同年代ぐらいの女の子だ。

「妹は父親違いだから。獣人はエルフよりも成長が早いし。でも、年増って言うのは……」

「ああ、気にしないで下さい。お子様だから、お子様のオトモダチが欲しかったんですよきつと」

そう言うておいた方が、彼らのためだ。どうせこの森にアデイス好みの童女はいない。アデイスは聖良が人間の姿にでもしないかぎり、幼い少女達にイタズラは出来ない。竜の姿でセクハラ出来るような頑丈な女の子は、きつと彼の好みではない姿をしているだろうから。

だから言う必要もない。この森で被害者は出ないのだから。

「やっぱり街に出るしかないんですね」

くだらないことで彼の中の決意がより強固になっていた。

欲望とは前へと進む原動力の中でもかなり強いものだ。欲望のために人は努力し、のし上がろうとする。

「……せいぜい頑張ってください」

恋愛は自由だ。彼が誰と恋愛をしようとも、聖良には関係のないことだ。

悪ささえしなければ。

それを見張るのは、聖良がしなければならないことだろう。



### 3話 異世界の醍醐味 1

ホットケーキは安くて手早くできて簡単な主婦の味方な安心おやつ。

主婦じゃないけど聖良は大好き。

バターのコクと塩気、シロップの甘さが絶妙で大好き。

何枚も何枚も焼いて、何枚も何枚も何枚も焼く。

アデイスはそれを次々食べる。

ネルフィアもそれを次々食べる。

だから聖良は何枚も焼く。

誰かが喜んで食べてくれると嬉しい。不味いと文句を言いながら無理な物を作らせる人達よりも、ずっと好き。

「セーラ、もつと」

アデイスが聖良の肩を揺さぶる。

「そんなにいつぺんに出来ないですよ」

「もつともつと」

アデイスが聖良を揺さぶる。

アデイスがガクガクと。

アデイスが

「おい、起きろっ!」

聖良は目を開き、男の手を感じてとりあえず、ここ最近はいつもの傍らに置いてある、棒にくくり付けた石で殴る。石器時代の石斧のような物だ。研磨すればまともな石斧になるだろうが、目的はアデイス撃退であるため、落ちいてたままを使っている。

「ぐおえっ」

聖良は撃退したことに満足して再び目を伏せた。アデイスは退屈するとすぐこれで、困った自称二十四歳のお子様だ。

それに聖良はまだホットケーキを一枚も食べていない。一枚だけ

でも食べなければ気が済まない。

「セーラさん、起きてください。私達ですよ。ジェロンです。衣料と食料を持ってきたんですよ」

「そんなことアデイスにいつてえ」

朦朧とした意識の中、聖良はなんとかそれだけを言い再び眠りにつこうとする。

「起きてくださいって」

「もお……なんですか」

手を払い、布を頭にかけて耳を覆う。口元はむき出しなので息苦しくはない。

「何ですかって、また来いって言われたから来たんだろう」

「じゃあアデイスを起こしてくださいよ。まだ日の出前じゃないですかあ。」

いつもは朝日が巢の中を照らし、暗い洞窟の中が明るくなってから起きる。そうすると、ああ朝だよく寝たと、すっきり爽快に起きられるのだ。

「こ、声が大きい」

口を押さえられ、聖良は寝起きの不機嫌さと、もう慣れた巢の中という安心感からその手を払ってそのまま寝返りを打つ。

「だから、アデイスに言ってくださいって。私まだ眠いです」

「それはこっちも同じなんだよ！」

「うう……」

寝起きにいきなり、しかも久々に怒られて、考えがまとまらず泣けてきた。

「ちょ、泣くなよ。長に見つかったら殺されるだろっ」

「うう……大丈夫ですよ。アデイスは竜の姿だとちよっと叩いたぐらいじゃ起きません。お母さんも」

剛胆なネルフィアの遺伝なのか、竜という生物が鈍感すぎて触れても気づかないのかは分からないが、突然起きる事をおびえる必要はない。

「無理言わないでくださいっ！ あんなの起こせませんっ！」

「大丈夫ですって。見た目はちょっと迫力ありますが」

聖良は布を頭からかぶって再び夢の世界に行こうとする。それをジェロンが揺り起こし引き戻す。

「もう、何なんですかあっ」

「しい。起きたらどうするんです」

ジェロンは指を立ててちらと眠るネルフィアの方を見た。巢の壁で見えないが、慣れた聖良でも向こう側に威圧感を覚えるほどだ。

唇の前で指を立てる仕草は、この世界でも同じ意味なのだ、寝ぼけ頭でふと思った。このまま倒れたくなつたが、怯える彼等をそのままにするとまた睡眠の妨害を受けるのは間違いなく、何とか堪えて、頬を二度手の平で叩いて目を覚ます。

「だからあ、お母さんは起きませんよ。アデイスは自分で起こしてください」

「起こそうと試してみたんですが、起きないんですよ」

「がつんと殴ってください」

「出来るはずがないでしょうっ。竜でなくとも、相手はうちの長

アデイス様ですよ」

気の小さい男だ。

聖良とアデイスは対等ということになっているが、彼らは部下だから仕方がない。

アデイスも女の子がすること笑っているが、同性がやったと知れば痛くなくても怒るかもしれない。

聖良は渋々起きあがり、再び石斧を構えて振り下ろす。

「ちょ……」

二人は何か言いたそうに手を伸ばすが、聖良は無視して再び振り下ろす。

三度目でアデイスは目を覚まし、頭を撫でて聖良を見上げた。

「痛いんですが……なにもこんなに殴らなくても」

「優しくしていたら起きないでしょう。この人達が何か用らしいで

す。じゃあお休みなさっ」

眠ろうとした聖良を両脇から伸びた手が阻む。眠気が勝手に閉じようとする瞼を、なんとか薄く開いたまま、唇をとがらせる。

「何ですか」

「この状態で寝ないでくださいっ！」

「そうだ！ 恐いだろっ！」

上司と分かっているにも相手は竜。聖良はすっかり慣れてしまい平気だったが、他人はそうではない。

「なんだ。ジエロンとディアスじゃないですか。どうしてこんな時間？」

「あの竜が起きている時に来る度胸はありません。下手に出かけてから行っても、間違えて捕食される可能性がありますし」

アデイスはため息をついて尻尾を丸める。

二人とも、ネルフィアが気になって仕方がないらしく、意識は左斜め後ろだ。

「一度紹介したら襲いませんよ。むしろ寝起きの方が危険です。竜がうっかり動くと人間は大けがをします」

「そうですね。私もよくアデイスに引つかかれます。人間の身だから生傷が絶えないんですよ」

しばらくすれば傷も痛みもなくなるのだが、普通の身体なら何度も死んでいる。

聖良は本格的に目が覚めてきたので、伸びをして腕を回す。瞼は重い、いざ眠ろうとしたらなかなか寝付けそうにもない。

「セーラ、おはよう」

アデイスがネルフィアのように顔を近づけてきたので、持ったままの石斧を振り下ろす。力では勝てず、手で殴れば痛い思いをするのは聖良の方で、素手は抑止力がないに等しい。人として知恵を絞った結果、考えついたのがこれだ。

「痛い。ひどい。どうしていつまでたっても私の挨拶を受け入れてくれないんです？」

「お母さんはいいけどアデイスはいや。なんかいやらしい」

「ひどい。差別です」

「差別と区別の違いが分からない人は嫌いです」

ぷんとそっぽを向いて、ふと目に入ったアデイスの部下達の持つ荷物を見た。

食料と衣服。

「そつえば服！」

服があると言っていた。

「セーラも女の子ですね。食べ物よりは服なんですか」

空腹はないのでまずは服だ。穴が増えた服や大きすぎる服は嫌だった。

ジェロンに袋を貰い、中から女物らしき服を引きずり出す。広げてみて

「……………なんか、寒そうなんですけど」

「ふつーの服だとサイズが大きすぎるし、子供サイズだと胸囲が足りないだろ。とりあえずそれを持ってきた」

「っいうか、セクシーですね」

まるで踊り子が着るような服ばかりで、聖良はほんの少し腹が立った。

現在は虫の多い季節の森の中、これから雪も降る時期に向かっている山の中、こんな服を着ている馬鹿を見たら、誰もが指をさして笑うだろう。

「何を考えているんですかお前達。私のセーラにこんなはしたない格好をしろと？ セーラの愛らしい顔立ちに、こんな淫売の着るような服が似合うものですか！」

「アデイスは言い過ぎ」

元の世界でも、胸元出し腹出しというのは当たり前だ。これを否定されたら、聖良の世界の女の子達の多くは否定されることになる。聖良もキャミソールぐらいは着ていた。

「でもこれ着るなら男物の方がマシです」



「そうですね。大きな服をちんまり着る姿は愛らしいですね」

「アデイスの変態的意見はどうでもいいです」

彼は黙っていればとても可愛いか格好いいのに、口を開くと変態で困る。しかも口数が多い、とてもおしゃべりな男性だ。

「あ、アデイスの服もありますよ。ほら」

見たこともないような異国情緒溢れる服ではなく、なんとなく日本にもありそうな雰囲気シャツとズボンだ。人型のアデイスならよく似合いそうだった。

「お前達、私の部屋に入ったんですか」

「入り用な物を持ってきて欲しいんでしょう。別にコレクションには触れてませんから」

「当たり前です」

怒ったような態度を取ったアデイスは、服を見る目は上機嫌で、触れることが出来ずにもどかしそうだ。

「アデイスの服借りようかな」

「いいですよ。セーラの肌を二郎共に拝ませることなんてありません。女の子は大切な人以外に肌を見せるべきではありません」

アデイスの言葉を聞いて、聖良に悪寒が走った。言っていることは正しいのだが、しかし気味が悪いと感じてしまう。

聖良の場合は年増のため、顔だけ観賞用として見られているらしく、寝ぼけているとき以外に身の危険を感じることはないのだが、どうしても寒気がする。それとも彼がノーマルだったら、照れて頬でも赤らめていたのだろう。

「あ、そういえばこいつも持ってきたんだった」

アデイスが荷物の中から手提げ袋を取り出した。

校章入りの、紺の手提げ鞆。

「わ、私の鞆っ！」

聖良はそれを手にして感動に打ち震えた。

「使い方わけわかんねえ光るのとかあって、気になるんなら本人に聞いた方が早いってことになってさ。呪われたらこえし」

携帯電話のことだ。新聞配達のバイトをしていたのだが、そのときにもしもの事があるといけないと、親切な店のおじさんが用意してくれたものだ。思えば、あの優しい夫婦が一番親切な大人だった。「あ、あった」

聖良は中に入っていたそれを見て喜びで跳び上がる。

これが必要なのだ。これがあるとないのでは、雰囲気がいふんと違ってくる。

聖良は制服を取り出しぎゅっと抱きしめた。

「何ですかそれ」

「学校の制服です」

セーラー服。

やはりこういう身の上には、こういう服が似合うのだ。今更だが。「可愛い服ですね。風変わりですが、聖良の顔立ちが異国風です。すから違和感を持たれませんよ」

「やっぱり異世界に来たらセーラー服ですよ。とってもヒロインって感じですよ。」

あ、着替えてきますね」

聖良は巢の壁をよじ登ってその向こうの影で着替えをする。彼女の制服は前開きのもので、スカートの丈はちょうど膝あたり。リボンを結んでできあがり。乾かしてあった靴下をはくと、これぞ女子高生という姿となった。

着替え終わると巢によじ登り、スカートの裾を押さえて飛び降りる。

「ああ、可愛いです。なんて愛らしいんでしょうか。いいですよその服。異国のお姫様って感じですね」

アデイスは喜んで聖良にすり寄ってくる。しかしお姫様というのは言い過ぎだ。黒っぽいので分かりにくい、何年も着て薄汚れている。こんな古い服を着る姫君がどの世界にいるというのだろうか。「でも口を開くと数千年生きた魔女が無理してますって雰囲気出るよな」

ディアスの言葉に聖良はかちんときたが、服を持ってきてもらった手前強くは言えない。

しかしこの怨みは忘れないだろう。

「セーラ、お母さんが起きるまでに準備をしましょう」

「何のですか？」

「せっかくだから、今日行きましょう」

「行くつて、人里にですか？」

まさかこれほど早く出発する事になるとは思ったおらず、聖良は胸を押さえた。不安と期待が入り交じり、心臓が早鐘を打つ。

「そうです。下手に先に帰して彼らがへまをしないか不安ですからね。お母さんは話せば許してくれると思います」

アデイスはここ数日で少しサイズを変える事に成功し、聖良と重りに乗せて無事着陸まで出来るようになった。一度墜落して聖良は死にかけたが、いつものように回復して事なきを得た。

他にも普通の人間なら死んでいるような事に巻き込まれたが生きている。ただし痛い事に変わりなく、死ぬ事の辛さなどを痛感した。聖良はこの先こうして、何度も死ぬ痛みを味わって生きていかなければならないのだ。そう考えると恐ろしい。

しかしそれでも、人類が作り上げた文明に触れるためだと思えば、耐えられた。

「まずは朝食です。栄養を付けないといけませんからね。三人も乗せて飛ぶのは初めてですから、力を付けないと」

飛行初体験の二人が、無言で身を強ばらせる。

生後間もない竜が、人に乗せて空を飛ぶ。その無謀さは、聖良が一番よく知っていた。

### 3話 異世界の醍醐味 2

「大丈夫ですか」

聖良は地面に転げ落ちた二人に問う。

目的地付近の草原に降り立ったのはいいが、アデイスは疲労から着地で足をもつれさせて転び、乗っていた三人は地面に放り出された。

幸い、草が覆い茂っていたので服は汚れなかった。腕を痛めた気がしたが、すぐに治ったので問題は無い。まだ完治していないのか、触れると痛い、触れなければ痛くない。

痛みは急にはやって来ない人体の仕組みに感謝する。

問題は普通の身体の二人である。

「聖良、治療をかけてやってください」

「はい」

聖良は丸暗記した呪文を唱え、頭から血を流すディアスへと手を向ける。アデイスが電気で、聖良が機械本体。そんな関係のため、魔力はアデイスの物でも魔法が放たれるのはちゃんと聖良の手から。ディアスが治ると、ジェロンにも同じように回復魔法をかける。包帯など巻いたことのないので、お手軽で助かっている。立派に人を助けられますという感じがして、気分が良いのだ。

「ほら、起きなさい。この魔力でこの呪文かけられたら全快しているでしょう」

元の大きさに戻ったアデイスは爪でつついて二人をせつつく。二人も同時に手足を動かし、起きる意志があるのを示す。

聖良は頭蓋骨と服を取り出し、服を地面に置き、頭蓋骨をアデイスの頭に乘せた。

準備が出来ると、背を向けてさんざん練習した長い呪文を唱えた。忘れてもいいように手帳にメモしてまとめようと考えた。なにせ筆記用具が手に入ったのだ。カバンの存在がとても有り難かった。

呪文が終わると、衣擦れの音が聞こえた。

「ここから歩いてどれくらい掛かりますか？」

聖良は空から見た町を思い出して言う。

「二、三時間といったところですね。セーラ、着替えました。行きましょうか」

着替えたアデイスは聖良に手を差し出し、手を取ると横抱きにしてくれた。お姫様だつこだ。美形にされると悪い気はしないが、こんな事をされる必要はない。

「……あの」

「聖良は足を出しているから、こんな所を歩いたら擦り傷だらけになりますよ。傷は治りますが、ヒルにかみつかれたり、変な菌が入ったらいけませんからね」

人間の姿になり上機嫌のアデイスは、荷物を部下に任せてとつと歩いていく。不安になって二人を見ると、違和感なく歩いていたので安心した。歩きながらジェロンはディアスの頭についた血をぬぐっている。

草原を抜けて街道までたどり着くと、アデイスは聖良を地面におろした。竜になってから腕力がついたらしく、人の姿で重い物を持ち上げるのが好きなのだ。だからこそその親切である。

「アデイス、前から馬が来ますよ。私、馬が道を走るの初めて見ます」

「馬が走っているのを見た事が無い？」

アデイスが首を傾げた。

「セーラのいた世界では、動物以外の動力で動く乗り物が主流だったようです」

二人が話している間も、遠目では聖良の知っている馬とどこか違う馬を見て、観光気分が強くなってきた。何が違うのか、馬をマジマジと見た事が無いので聖良には分からなかった。少しだけ顔つきが違うのかもしれない。

乗っているのは鎧に身を包んだ兵士のような人達で、何か急ぎの

用があるらしい。彼らはこちらを確認すると、馬の足をゆるめて近づいてくる。

「おい、この辺りに竜が来なかったか」

「あれなら問題ありません」

訪ねる兵士にアデイスは微笑みで答える。

「何を根拠……あなたはもしや、宮廷魔術師のアデイス殿？」

アデイスの容姿は目立つため、知られていてもおかしくはない。自分で言うだけあり、生前はとも格好良かった。生前は。現在は、とても可愛らしい。

「ええ。トラブルに巻き込まれて、ようやく戻れました。もしよければ、馬を貸していただけませんか。竜のことでの報告と、この方を安全な場所へお連れするため」

この方とは、聖良の事らしい。

この国の人間ではないの一目で分かるため、他国の要人と思いついてしまったのか、兵士の一人が馬を下りた。

「かしこまりました。こいつをお使い下さい」

「ありがとうございます。セーラ、行きましょう」

「え、でも……悪いんじゃない」

「何を言っているんです。ほら、行きましょう」

アデイスに馬の上へと乗せられる。その後ろにアデイスが乗り、聖良は緊張して身体を強張らせた。

「私、馬は初めてで……」

「竜の背の上よりはずっと安全ですよ」

「そりゃあそうですね」

心の準備をしていないのに、アデイスは馬を走らせた。思った以上の揺れに胆が冷える。それに気付いたアデイスが腰に手を回し、耳元に唇を寄せて呟く。

「竜の背よりも恐いですか？」

「さすがにそれはないけど」

落ちてもよほどのことがないと死なないし、安全だ。

「私、竜の背の方が好きです」

ネルフィアの背の上が好きだ。

安定していて、それでいて気持ちがいい。

「セーラ、なんて可愛い事を言うんですかっ」

背後から抱きつかれ、聖良はその腕をばしばしと叩く。

「アデイスじゃなくてお母さんです」

「可愛くない事を言わないでください。せっかく可愛いと思ったのに」

可愛いなどと思われなくてもよいどころか、迷惑だった。彼の可愛いは、幼さが可愛いという意味なのだから。

「おいアデイス様達、二人だけ楽しそうにいちやつくなよ。俺等は男二人で相乗りなのに」

振り返ると、確かに二人で馬に乗っている。

「お前達が生意気にも便乗するなんて。可哀想でしょう彼らが」

一頭だけならともかく、二頭いなくなったら残りは一頭。どうしても歩いてこなければならなくなる。

「服を持ってきてやったのは誰だと思ってるんすか」

「ジェロン」

ディアスはふてくされて馬に鞭打ち先に行く。

子供っぽい態度だが、アデイスに比べるとまともなで分かりやすい。しかしアデイスでよかったとも思った。アデイスは何だかんだと言つて、聖良に見返りなく優しくしてくれる。きっと普通の男の人よりも優しい。

見た目が可愛くて変な人だから、緊張感もなくなったのだ。ディアスだったら、おそらくもっと緊張していた。だから、運が良かったとも言える。

ここにいる事が最大級の不幸なのだが……。

ファンタジーの世界だからと、石や煉瓦造りの町並みを想像していた。現実には木造住宅が多く、コンクリートのような素材も使われていて、聖良の想像とは少し違った。しかし建物の様式は初めて見る物ばかりで、嫌いではない。海外旅行気分が楽しい。

アデイスが言っていたように、男性女性共に日本人の感覚で言うと、皆がかなりの長身で聖良は少し落ち込む。日本でも小柄な部類に入る聖良はここでは子供以下の身長である。子供扱いも仕方がない。

「どうしました、ため息などついて」

「なんでもありません」

銀髪的美青年という容姿のアデイスはかなり目立つらしく、人々の視線が向けられる。人種が違う聖良が珍しいのもあるのかも知れない。悪い具合にアデイスが有名だとは、思わないようにする。もしそうなら、この姿でこんな目立つ大通りを通る事はない。彼は外面は保つタイプのようなので、ここは信じる事にしたい。

聖良は前方に見える城を見つめた。

「お城、街のど真ん中にあるのに大きいですねえ」

「そりゃあ国の要ですから。というか、昔ほど真ん中では無かったです、街が勝手にそう発展していったんです」

白っぽい立派なお城だ。城など日本の城しか見たことのない聖良の中にあるのは、所詮はイメージであり、こんなものかと納得する立派な外観だ。お城だと思ってしまう外観で、それ以上のことは分からない。聖良が知る異国風の城は、某テーマパークの顔的な、メルヘンな城だけだ。あれに比べると現実的だというのが印象である。

城門にたどり着くと、顔パスで門番に許可され、堀に掛かった跳ね橋を渡った。

城の敷地内に入ると聖良は少し尻込みした。聞いてはいたが、ここはお城だ。貴族や王族がいるのだ。下手なことをして不敬罪に問われたらどうしようと悩む。

「怖がらなくても大丈夫ですよ。国王陛下は、私にとって父親のよ



うな方です」

「アデイス、そんなに偉かったの？」

「育てられたんですよ。色々と思入れがあっただんでしょね。彼におしめを取り替えられた事もあるそうです。彼も元々は王になれるほどの継承順位ではなかったんですが、ハーネスが倒れてから、この国の影の支配者が今の王を王に据えて操っているんですよ。だから王は気さくな方です」

その影の支配者というのが恐ろしげに聞こえるが、フォローはない。本当に大丈夫だろうか、元々不法な上にこの国の作法など爪の先ほども知らない聖良はますます悩む。

「セーラは竜を殴る度胸はあるのに、王が怖いのですか？」

「アデイスは殴りたくて殴ってるんじゃないです。揺り起こして起きない方が悪いんです」

ネルフィアを殴る度胸はない。アデイスだから出来るのだ。

アデイスは背後でクスクス笑いながら、すれ違う人達に挨拶をする。彼はやはり社交的な性格らしく、心配していたとか、大変でしたねと言ってもらっていた。嫌われていないのだと安心する。

「ところでジェロン。姿を消していたとはいえ、やたらと声をかけられるんですが、私は一体何をしていた事になっているんですか？アデイスは部下二人に問いかける。

「ただ言葉には言い表しにくい不幸な目にあっていると伝えてあります」

「やたらと可愛い女の子に看病されているって言うつといた」

聖良は顔を顰め、振り返る。

「やっぱりみんな、アデイスの変態ぶりを知ってるんですか？」

そんな雰囲気はなかったのに。

それともこれは普通なのか。

「知りませんよ。隠してますから。私だって世間からそんな偏見の目で見られたくはありません」

「ならよかった」

変態に捕まったかわいそうな子と、哀れみの目を向けられるのは嫌だ。

しかし女性達に「なんだ子供か」と安心されている。

深く考えては負けだと、聖良は思考を追い出し馬が止まるのを待つ。やがて憤怒の表情でこちらに歩いてくる茶髪の女性を見て、アデイスは馬を止めた。

まずは自分が先に降り、聖良の手を取り下ろしてくれろ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

聖良はスカート裾を正して向かってくる女性を見た。

三十代前半ほどの綺麗な女性だった。しかも他の人達に比べると小柄で、聖良は少し嬉しくなる。聖良が見慣れた普通サイズの女性なのだ。

「アデイス、連絡もよこさずにどこで何をしていたの!？」

「ただいま戻りました、エイダ。連絡したくても出来なかったんですよ」

アデイスはいい笑顔で女性の手を取りキスをする。

エイダという名前、アデイスの口から聞いたことがある。

無口なくせに、自分に対しては口喧しい年増女。呪文を唱えない魔術を得意とするから、発動が早いのが厄介。でも呪文無しでは高度な術を使おうと思うと、それはそれで時間がかかるし難しい。呪文に比べて精度も落ちて、メリットはその発動の早さだけ。普通の人間は扱おうとするだけ無駄。

エイダに関しては、そんなような事を言っていた。

「暢気なことを言うんじゃないの! 国仕えしているという自覚はあるの!？」

「あ、待つてください。連絡できなかったのは本当ですから」

聖良はエイダへと弁明する。アデイスが誤解されては、それと一緒にいた聖良が悪いことにもなる。

「アデイス、この子どうしたの。あなたどこまで行ってたの?」

「それが……よく記憶がないんですね。頭を打ったのかぽっかり記憶がなくて」

当たり前障りない対応だ。下手に作るよりも、覚えていないという方が都合がいい。彼の不幸体質は有名らしく、そんな都合のいいことがあるはずがないとは、言い切れない。実際に彼は、記憶喪失以上に稀な経験をしたのだ。

「アンに変な薬を与えたでしょう。貴方が竜にさらわれたと言っているのよ」

「それ本当のことですよっ！」

アデイスに信用がないのか、竜がアデイスをさらったというのがそこまで信じられなかったのか。

聖良は女の子が信じてもらえずにいたことを嘆くアデイスを横目で睨む。

「本当に竜にさらわれたの？」

「そうですよ。よく覚えていませんが。で、しばらく彼女に厄介になっていたんですよ。偶然ディアス達と会って記憶が戻って」

その間の生活の事を聖良に聞かれたら、答えるすべなどないのだが、彼はそれを理解しているのだろうか。

「なぜすぐに帰って来なかったの。ジェロン達と一緒に帰ってくればよかったでしょう」

「事情があるんですよ。私、これからもあちらで生活するつもりですから」

「何を馬鹿なことを言っているの」

「婿に行きます」

聖良は反射的にアデイスの腕を引いていた。婿とは、婿だ。花婿だ。

「だ……誰と結婚するの」

「この子」

聖良の肩を抱き、爽やかに微笑み言い切った。

「何馬鹿なこと言ってるの。こんな小さな子と」

「でも、年齢的には王子よりも年上ですよ。小柄で童顔なだけで慣れたこととはいえ、慣れたこととはいえ

「またくだらない冗談を」

「本当ですよ。立派なご婦人です。ねえ」

頭を撫でながら婦人というのも説得力がない。聖良はその手を払い、睨み上げた。

「いい加減な事を言わないでください。簡単にボロの出るような言い訳は見苦しいですよ」

「そんな身も蓋もないこと言わないでくださいよ」

アデイスがしつこく頭に触れてくる。手を置きやすい位置なのかも知れないが、屈辱的だ。やはり竜のアデイスの方が好きだった。

人間の時は自信に溢れすぎている。竜の時は、少ししょんぼりしている感じが可愛い。

「そつよアデイス。こんな小さな子と結婚するなんて言い訳は少し無理があるでしょう」

「年齢の事じゃなくて、婿だけが嘘なんです」

エイダは聖良を見ていぶかしげに顔を歪める。信じてない。絶対に嘘だと思っている。

「エイダ、セーラが傷ついているじゃないですか。小さくなりたくて小さいわけじゃないんですよ」

「魔女なの？」

「悪魔との関わりはありません。普通に小さくて普通に玄人口調なだけです」

アデイスは意味深にくすくすと笑う。

「何者なの」

「ちょっと事情があつて、私はこの方から離れられなくなつたんですよ。自由はなくなりますが、まあ、あのまま死んでいたよりはすつといいでしょう」

聖良は静かに目を伏せ頷いた。

魔女とか悪魔とかの細かな意味は分からないが、今は聞き流す事

にした。結婚する以外の理由なら何でもいい。結婚は嫌だ。恋愛もしていないのに、結婚していると思われるのは嫌だ。

「セーラというの」

「はい」

「どこの国の生まれ」

聖良はちらとアデイスを見上げる。

「生まれなんてどうでもいいじゃないですか。どこの国にも属していませんから」

とりあえず頷く。

「埒があかないわ。クレアの所に行きましょう」

「クレアの所ですか。ガミガミ言われるのは嫌なのですが」

「拒否権はないから」

アデイスは肩をすくめ、聖良の背に手を添えて歩き出す。

クレアというのは、この国を牛耳るアデイスが苦手と言うほどとても恐い人だという。

怒らせやしないかと少し恐くなって、アデイスの服の裾をつかんだ。

### 3話 異世界の醍醐味 3

椅子やテーブルの脚には彫刻が施されているが、華美と言うほどでも無い落ち着いた家具が揃えられた部屋で待つ事しばし。

どんな恐そうな女性が出てくるかと思えば、淑やかな雰囲気のプロンド美人だった。

優しそうだけどどこか艶めいて、歳はエイダよりも少し年上だろうが歳など関係ない美女だ。

その隣には穏やかな雰囲気の男性がいた。お似合いの恋人か、夫婦か。

「すごい、綺麗な人……」

「あら、可愛い」

ものすごい美女に微笑みを向けられて、聖良は少しドキドキした。彼女は向かい側の席に着き、優しく目を細めて聖良を見つめた。「アデイス、いけない子ね」

やんわりと美女に叱られ、アデイスは視線をそらして拗ねる。兄と呼べと言つわりに、幼い事をしている。

「その子に助けられたのですって？」

「ええ。記憶にありませんが」

聖良は小さく頭を下げる。男の人が聖良を見て、安心させるように優しく笑う。

見た目はとても雰囲気がいい。アデイスという前例があるため、その雰囲気も全て信じていることなど到底不可能だが、ほんわかとしてしまう雰囲気も彼は持っていた。

「セーラです。セーラ、こちら二人は魔術師長のクレアと夫のハロイド陛下」

耳に覚えのある言葉の意味を思い出し、口の中が乾いた。

王様がいるとは聞いていたが、まさかいきなり目の前に出てくるとは予想外だった。

「この方が……。すごくお若いんですね」

王様というのは、もつと年を取った者だと思っていた。先代が死んでから次の代が継ぐため、若くて素敵な格好いい王様というのは少ないはずだ。彼はまだ三十代に見えた。アデイスのように作り物めいた美形では無いが、とても魅力的な笑顔の男性だ。

「アデイス、可愛らしい子だけど……どうしたんだい」

ハロイドの頬がわずかに引きつっている。

この微妙な表情から、彼が知っているのが分かった。彼は絶対にアデイスの性癖に感づいている。

「そうですね。可愛らしいでしょう。これでエリオットよりも年上なんですよ」

ハロイドが立ち上がり、聖良を凝視する。

「……いくつなんだ？」

「ご婦人にそんな事を聞くのは失礼ですよ、ハロイド様」

彼は戸惑った様子で聖良を見つめる。

聖良の胸は悲しみの余り締め付けられるようだった。

「魔女ではないと聞きましたけど、変わった話し方をされるのね。

それは何語？」

クレアに問われ、聖良は戸惑った。

「えっと、日本語です」

「ニホン語？」

「大したことじゃないので、気にしないで下さい」

「大した事です。私にはそんな知識はありません」

「こんな話し方をするのはこの国で私だけですから、知らなくても仕方ありませんよ」

クレアは頬に手を当てて首をかしげ、アデイスを見た。

「彼女はちよつとした事故で遠い所からこの国に来てしまったようです」

「事故？」

「本人にも分かっているないので、私にも分かりません」

諸悪の根元が、と罵りながら首を絞めたい衝動に駆られ、聖良は必死に耐えた。

「そう。なら質問を次に移すわね。」

どうしてすぐに戻ってこなかったの？」

「今の私は、セーラと一蓮托生なんですよ。つながっているんです。ですから離れる事は出来ません」

嘘では無い。詳しい事を省いているだけで、すべて本当の事だ。

「何をしたの？」

「死にかけまして、色々」と

「話しなさい」

「話せませんよ。クリアだって、私に教えてくれない術があるでしょう。これは私達だけの秘密です。自分の秘術を他人に教える馬鹿はいませんよ。」

セーラは私のご主人様。だから私は彼女と共にいなきやいけません」

婿の次はご主人様とは、一気に卑屈になった。呆れて物も言えない。

「ああ、でも、定期的に戻って来ます。山奥で仙人のような生活をしているので、買い出しとかありますし。持っていく物は持っていますので用があればディアス達を使って呼び出してくださいませんか。ただ、彼女のお母様が恐ろしい方で、長期滞在は無理です」

恐ろしいのはアデイスの母なのだが、聖良にとっても母である。ペットとして。

聖良は口寂しくなり、青みの付いた花形の甘いお菓子を口にした。久々の甘みなので、とても美味しく感じる。ただ独特の甘味が強く、数は食べられない。

「嬉しそうに食べますね。セーラは甘い物が好きですか？」

「好きですが、少し甘味が強く感じます。アデイスは甘い物は嫌いですか」



「好きではありませんでしたが、味覚が変わったのか好きになりました。これは慣れないと癖のある味ですね。慣れれば意外と癖になるんですよ。」

「今まで質素な生活を続けたから、よけいに食べにくいかもしれませんね」

「ああ、そうか」

しばらくの間続いた食生活のせいで、薄味に慣れたから、甘みを強く感じるのだ。最近は味の薄い果物と薄味の魚や肉ばかり食べていた。

一緒に出されたブドウジュースのような物もおいしかった。少し柑橘系の味がするため、ミックスジュースか、ブドウとは違う果物だろう。

「この国に害をなさないのなら、お前がそこまで言うんなら認めるけど……」

ハロイドが言って自分の菓子をアデイスに差し出す。

「好きになったんならもつと食べる。俺が焼いたんだ」

「王様がお菓子を!？」

聖良は思わず声をあげた。

「この国では男性がお菓子を作るのは一般的なんですか？」

「いや、まったく。あの人の趣味です。男性で料理を作るのは専門職の方ばかりです」

菓子作りの趣味がある男性というだけなら、一般的ではないが、珍しいわけではない。しかし、菓子作りが趣味の王様は、珍しい。

「クレアが酒に走らないように、甘い物を作り始めたそうですよ。」

クレアは甘い物で酒を飲むのも大好きだと発覚して、それ以降は本人の趣味になったそうですよが

人は見かけによらない。

アデイスというとんでもなく見た目からかけ離れた男もいるので、これぐらいは可愛いと思わなければならぬ。

「君はもう少し癖の無い物が好きなのかな。今度はもつと違つお菓

子を焼くよ」

「いえ、数は食べられませんが、おいしいですよ。とっても綺麗ですし。」

私の住んでいたところには、こんな焼き菓子はありませんでした。とても綺麗なお菓子だ。お菓子が好きだった亡くなった聖良の祖母が見たら、乙女のように目を輝かせていた事だろう。

「セーラ？」

「何でもありません」

「そうだセーラ、今夜は何が食べたいですか？ 久々でしょう」

「この国の料理分かります」

昼は街に入つたばかりの所に売っていたタコスのような物を食べた。聖良はあれを何というのかすら知らない。

「じゃあ、二人で美味しい店に行きましょうか」

二人きりというのは、アデイスが知っている、聖良が知らない人に囲まれているよりも安心する。

「こらアデイス勝手に決めるな。彼女の食事も部屋も用意させるし、そんな風変わりな格好で出歩いたら、変なのに目をつけられるぞ」

「この服は可愛くて気に入ってるんですよ。お人形さんみたいに小さくて本当に可愛い」

聖良はアデイスを睨み見上げる。

可愛い可愛いというのが聖良を怒らせることを、彼はまだ理解していない。もしくは怒らせて楽しんでる。

「それに、食事というのもあなた方との同席でしょう。この国の作法を知らないセーラでは、緊張して味わうことも出来ません。今日は私と二人きりのディナーでお勉強です」

聖良もこれには素直に深く頷いた。

王様とディナーなどとても無い話だ。この国ではどんな食器で、どのように食べるのかも聞いてもない。異国人だからという以前の問題だ。

「それに服も仕立てないと。背丈なら子供服サイズですが、子供服

は胸が入らないんですよ」

「……………あらまあ」

クレアが聖良の胸を見つめて呟いた。

「セーラさんのお国の方は、小柄な方が多いんですか？」

「セーラは腰の曲がったおばあさんよりは大きかったと言っていましたか」

「……………」

クレアはそれ以上何も言わなかった。

その沈黙が、とてもとても痛かった。

場が気まづくなり、ようやくクレア達から逃れ、アデイスに連れられたのは、城の外ではなく敷地内の別の建物。

まだ時間は早いし、久々に友人と会ったりするのだろう。

「アデイス」

「変な所には行きませんかから安心して下さいね」

アデイスは聖良の手を取り歩いている。

そんな心配はしていない。ただ、知らない人がたくさんいるのが少し嫌だ。みんな背が高いし、見下ろされるし、少し恐そうに見える。

アデイスが建物の中に入ると、玄関ホールにいた子供達が振り向いた。

子供達なら、あまり見下ろされなくてすむ。

「アデイスにい！」

「本当に生きてたんだっ」

子供達が寄って集まり、聖良はそれから逃げるようにアデイスの手をふりほどいて離れる。子供達はそれ幸いとアデイスを囲み、その騒ぎが別の子供を呼び寄せ、いつの間にか十人を超える子供達がアデイスに群がっていた。

そのほとんどが女の子である。男の子もいるようだが、女の子のように可愛い子ばかり。

どんな子を可愛がっていたか、よく分かる面子だ。アデイスは顔が可愛ければ、男の子でも可愛がるらしい。

子供をどう扱っていいのか分からない聖良は後ずさりして彼らから離れた。落ち着いたら声をかけてくれるだろうと、壁ぎわに立つ。「ああ、本当にあいつ帰ってきた！」

快く思わぬような調子の声を聞き、聖良は部屋の中に入ってきた少年達を見る。可愛い顔とはほど遠い少年達で、十代半ばと聖良よりも下だが年は近い。

「くそっ、せつかくいなくなつたと思つたのに！」

彼等はアデイスに良くない扱いを受けていたようだ。それとも彼にとつての好きな子が、あの輪の中にいるのかもしれない。

少年らを観察していると、地団駄踏んでいた子が聖良に目を向けた。一瞬戸惑い、無難に微笑んだ。引きつっているかも知れないが、無愛想にしているよりはいいはずだ。

「お前、新入りか？ 外国から来たのか？」

聖良はふるふると首を横に振る。

「この国で生まれたのか」

違う意味に取つたらしい。どのように受け取られようとも問題ない。自分でそんなことを言つた覚えはないのだ。想像してくれるならそれでいい。

「お前、胸に何入れてるんだ」

何も入れていない。そう言おうと思つたとき、近づいてきた少年が聖良の胸に触れた。触られた。握られた。

「いやっ！」

少年の手を払い、胸を庇って壁沿いに後退する。

「ほ、本物！？」

「当たり前じゃないですか！ こんな所に何で物詰めなきゃいけないんですっ！？」

涙目になって怒鳴りつけると、少年は顔を赤らめて後ずさる。逃げるかと思つたとき、その首根っこを背後から捕らえられた。

「こら。セーラを泣かしてるんじゃないよ。アデイス様が切れるぞ」  
着替えたアデイスが、少年を背後から揺さぶつた

「もう切れてますよ」

子供達の間を縫つて出てきたアデイスは、少年を睨み付ける。

「女性の胸に触れるなんて、そんな風に教育した覚えはありませんよ」

「てめえには折檻された覚えはあつても、教育された覚えはねえ！」

「愛の鞭が理解できないなんて、可哀相な子ですね」

可愛らしくない男の子には、理不尽な事をしているのだろう。何が行われてきたか、想像もつかない。

聖良は自分が女であつたことには少し感謝した。

「セーラ、驚いたでしょう。すみません、懐かしくて貴方のことに気をかけるのを忘れていました。まさか痴漢が出るとは思いもせず……。」

わざとではないようですし、一日食事抜きぐらいで許してやってください」

「いや、食べ盛りの子にそれは可哀相ですよ」

たくさん食べて、大きくならなければならぬ。

彼はまだ聖良と違つてもっと大きくなれるのだ。

「じゃあ、馬小屋の大掃除にしましょう」

「別に罰なんて与えなくてもいいですよ。悪気もなかったみたいだし、子供のしたことですし」

子供と言つても、聖良とそう年は違わないが。

「セーラ、私にはすぐ殴るのに……」

「心から子供に戻つてから言つてください」

「つれないこと言わないでください」

頬を突かれ、その手を払う。

竜の時にはあまり触れられることはないので、アデイスにこうし

て触れられるのはそれなりに緊張する。聖良も年頃の娘で、相手は見た目だけなら素敵な男性だ。彼はそれを理解してくれずに触れてくる。

「アデイス様、その子新しい子？」

「違いますよ」

「分かった、魔女でしょ。どうしてお兄ちゃんが魔女なんかと一緒にいるの？ この国には入っていけないんだよ」

「魔女ではありませんよ。普通の人間です。少し、特殊ですが」

子供達に問われ、アデイスは普通の優しいお兄さんの顔をして答える。これが彼女たちを下心たつぷりの、淫猥な目で見ている変態だとは、知っていても信じられないほどだ。長年被り続けてきた猫は、彼女達の前では完璧のようである。

「でも変な話し方」

「外国の方ですから。一応身体の年齢は十八歳だそうです」

聖良はアデイスの腕を叩いた。今の言い方では、何らかの詐称をしているようだ。

「何をふくれているんですか。セーラの話し方は羨ましいですよ」

「呪われそう」

アデイスに続いて小さな幼稚園児ぐらいの女の子が言った。

この世界の人にとって、聖良の話し方は印象的なのだろう。子供ならではの素直さが辛い。

聖良はアデイスの腕を押し、行けと手で追い払う仕草をした。

「好きなだけ可愛い女の子達を堪能してきてください」

「何を拗ねているんですか」

「拗ねていません。傷ついているだけです。一人でいたいからほっといてください」

拗ねているのとは違う。一緒にされるのは腹立たしい。皆から子供扱いされて、聖良の繊細な心は風穴だらけだ。アデイスはそれを助長するようなことを言うし、ここを出る気配はないし、一人でいた方が気が楽だ。

「セーラ、待つて下さい。これから服を作りに行くんですから。夕飯を食べたら帰ってくるから、みんないい子にしているんですよ」

アデイスは子供達に言い含め、聖良の背を押した。服が必要なのは確かだ。

制服は丈夫に出来ているが、あのサバイバル生活を続けていれば、すぐに穴が空いてしまう。数少ない自分の持ち物を、そんな事で駄目にしてしまいたくは無い。

「じゃあ外で、子供扱いするのはやめてくださいよ」

「していませんよ。でも可愛いからこうなるんです」

普通でない彼に、普通の態度を求めるのが間違っているのだろうか。聖良は、自分が無駄な抵抗をしているのだろうかと悩んだ。

### 3話 異世界の醍醐味 4

仕立屋というから、お針子がいて忙しく仕事をしているのだと聖良は思っていた。それが大通りにあるブティックに連れられ、大人びた雰囲気の店内に戸惑いを覚えた。

並べられた服と雰囲気、そして立地からして高級店である事は、この世界の金銭感覚が分からない聖良にですら理解できた。

背中を汗が伝う。

あまりにも場違いだった。

「こ、ここで買っんですか？ この世界の普通の服、大きいと思っんですけど」

背も低いから、肉がついていると言っても肩幅も狭いし、手足も短い。なまじ身体は大人の女として出来上がっているから、子供服は体格に合わない。

「作るんですよ」

「とても……高そうなお店なんですけど」

「セーラはそんな事を気にしないでいいですよ。ジェロン達に押しつけた荷物、中に貴重な薬草が入ってます。売ればおつりがきますよ」

「二人で集めたアレ、そんなに高いんですか？」

「ええ」

それなら気兼ねすることはないと、騒ぐ胸を押さえた。持ちつ持たれつというやつだ。聖良はアデイスに人の身体を、アデイスは聖良に人間らしい生活を、互いに差し出しあって生きている。

「アデイス様、本日はこちらのお嬢様のお仕立てでございますか」

見たことのないタイプのスーツに身を包む中年男性が、恭しく礼をした。聖良の感覚では若い人が着そうな紺色のスーツで、落ち着いたその人が着ているのが少し意外だ。

「アデイス、そんなに仕立てをお願いしているんですか？」



「クレアとエイダの荷物持ちですよ。コーデイナーをさせられたり」

「センスがいいって事ですか？」

「まあそうなります」

聖良は店にディスプレイされた既製品を見て、もう一度アデイスを見上げた。

「じゃあ、お願いしますね。元の国の服ならともかく、この国のスタイルいまいちよくわからないので。自分流に着たら目立つことになりそうですし」

アデイスは自信満々に頷き、聖良を伴い奥へと向かう。動きやすそうな可愛いドレスを着た女性達が待ち構えていて、深々とお辞儀をした。

お辞儀は普通に通用する挨拶のようだ。

「まあ、なんて可愛らしいお召し物」

店の女性達が聖良の服を見て褒めてくれた。

セーラー服は、初めて見るとかなり斬新だろう。

彼女たちは白いビショップ・スリーブのワンピースドレスに、青いベストを羽織った出で立ちだ。日本で見かけても驚くようなことはない、普通に可愛い服装である。

他にも職業の雰囲気薄いような衣服は、聖良が驚くような形はなかった。元の世界のファッションについては、既に色々な文化が入り交じり、民族的なデザインも取り入れられている。たがらこの国の服もアレンジの仕方によっては、普通に元の世界の街を歩いても目立たないだろう。

「失礼ですが、そちらの服のデザイナーは」

「さあ。セーラー服っていうんですけど」

いるのだろうが、セーラー服のデザイナーなど知らない。

「セーラーの名前が付いているんですか」

「私の名前とは関係ありません。セーラーは水夫で、私の名前は聖しい子って意味です」

自分の名前を服に付けるなど馬鹿らしい。

「民族衣装のような、昔からある物です」

「まあ、民族衣装。素敵」

お針子なのか、女性従業員達が物珍しげに聖良の服を見ている。

これに関しては、日本でも特殊な位置にあるデザインだ。珍しくはないが、普段着に取り入れるには珍しい。

「普段着からよそ行きの服まで、とりあえず十着ぐらい用意してください。これから寒くなるので防寒着も。靴もいりますね。身一つでいらした方なので、女性に必要な物を全て揃えてくださると有り難いのですが。」

少なくとも、一週間で最低限の物は頼みます。今はこの服しか無いんです」

「かしこまりました。では先に採寸をいたしましょう。その間に何かご要望があれば伺いいたしますわ」

採寸などしたことの無い聖良は、どきまぎしてアデイスを見上げた。

「セーラ、ここからはついて行けないので、一人でいってらっしゃい」

聖良は自分が小さな子供のような事をしていたのに気付いて、頬を赤く染めた。

アデイスが手を振り、聖良はお針子達に連れられ奥の部屋に行く。大きな姿見が何枚もある部屋で、本当に高そうなお店だなどつい考えてしまい、後が恐くなる。

こんな風に知らない人に囲まれて恭しく扱われたことなどない聖良は、緊張で固まっていた。

聖良の様子を察して、お針子達が背もたれの低い椅子を用意し、暖かいお茶を出してくれた。カモミールのような匂いがして落ち着く。聖良は家でハーブを栽培していたので、こういうのが懐かしく感じるのだ。

アデイスと違いまだそれほど時間は経っていないのに、こつも感

傷に浸つては、先が思いやられる。

「失礼いたします。お足の採寸を致します」

「はいっ」

汚れている靴と靴下を脱がされ、毎日洗っている足に触れられる。臭くないだろうかと心配になるが、彼女は顔色一つ変えずにサイズを測る。

「お嬢様、お手数ですが、一度お立ちください」

聖良がカップを置いて立ち上がると、足を計られながら、別の針子さんに身体のサイズを測られた。

「お召し物をお預かりいたします」

お針子さんが聖良の服を脱がせようとしたが、脱がせ方がわからないらしく困惑した様子で首を傾げた。他人に脱がされるのも気分が悪いので、自分で前あきのセーラー服を脱ぐ。ファスナーを下げると、彼女たちは驚きの声を上げた。

「まあ、そちらの留め具は初めて拝見いたしますわ」

「……そうですね」

改めて見るとすごい発明だ。考えた人物は天才だ。

「あの、どのようになっているのでしょうか」

「下をこうやってかまして、滑らせるんです。歯車みたいにかみ合わせているんですよ」

「歯車、ですか」

想像が出来ないのか、首をひねるお針子達。アデイスなら理解してくれるだろうか。よくよく説明すればそれほど難しい原理ではないので、理解して貰うことは出来るが、作るのは難しいだろう。

「ここら。お客様を置いて何を夢中になっているの。」

「ところでお客様、こちらの肌着もめずらしいものですね」

ブラジャーを見て一番年長の針子が言う。古代でも使われていたらしいので、ブラジャーぐらいはあるはずだ。ただ、現在の完成されたブラジャーの形と素材が珍しいのだ。

「ここにワイヤーが入っていて、部位によって締め付けたり寄せた

りするんですよ。胸を綺麗に見せられるし、垂れたりしたら嫌ですから。これはつけたままでいいですか？」

「正確なサイズを測るために、外させていただきます」

「じ、自分で」

恥ずかしいが女性ばかりなのでしぶしぶ外し、立ち上がって採寸して貰う。

ブラジャーが玩具にされているのは気になるが、文化の違いと我慢した。

スカートを脱げばパンティのデザインが素敵だのとまた騒がれ、聖良は頭痛を覚えた。サテン生地のスーツがついた、激安店で購入したものだ。ブラジャーとセットのもっと可愛い下着が欲しかったが、残念ながら聖良に合うサイズで、可愛いデザインは無い。

ため息を吐く。その間にも、採寸されていく。

ストレスで胃が痛くなりそうだ。

店を出て聖良は何度目かのため息をついた。採寸されていた時は、人として生きた心地がしなかった。

「恥ずかしかったです」

「皆珍しがっていましたからね。セーラの服の金具や下着のことをもっと知りたがっていましたよ」

「そうですねえ」

「どうやって作っているんですか？」

「さあ。機械で作っているのは確かですけど……」。

あると便利です。色々なことに使えます。ブーツの紐を結ばなくてもよくなりますし」

「へえ」

「私のカバンとお財布にも使われてるんですよ」

鞆の中から取りだして、小銭入れのファスナーを開いてみせる。

「これが聖良の国のお金ですか」

「はい。この五百円玉は面白いですよ。角度を変えると円の中心にまた文字が見えるでしょう」

「本当だ」

「お札にもあるんですよ。ふちっこのキラキラしている部分、角度で棒と楕円が見えるでしょう」

「どうやってるんですか」

「私は知りません」

「この紙幣が一般的なんですか」

「そうですね。硬貨が小さなお金で、大きなお金が紙幣です。真ん中に透かしが入っていたり、色々と偽造されないような細かい仕掛けがされてるんですよ。もう無用の長物ですけどね」

鞆の中にしまい、記念の品として取っておくことにした。

「そういえばこの国では貨幣が一般的なんですか？」

「紙は破損しやすいですから」

「そうですね」

紙幣というのはかさは少ないが、燃えやすく破れやすい。

「そっだセーラ。帰るときまでにお母さんへのお土産を買いましゅうね。人間を少しは意識してもらえるように」

土産と聞き顔こうとして、最後の言葉の重さに首をもたげた。

「そうですね。人間は賢い食べ物じゃないってもっと知ってもらいたいですね」

「ええ。あの方があまりに色々すぎて、下手に攻めてこられても困りますからね。軍とか」

「洒落になりませんよね」

臉をよじれば目は浮かぶ光景。

大怪獣のようなネルフィアに立ち向かうちっぽけな人間達。なぜかその光景は、某玩具メーカーのブロックで出来ていた。リアルに

想像したくないのだろうか。

「しかも地形的に考えるとお母さんが負ける要素がないところがさらに問題です。返り討ちにしてしまつたら、面倒な事が増えますよ。怯えた近隣の住民に餌とか差し出されたり。実際に一度求めていまずからね。私達が何とかすると行って、黙ってもらっています」「うっわぁ」

相手への同情よりも、気色悪さに背筋に悪寒が走る。

人間は強大な相手に対して、勝手に生贄を差し出す生き物である。聖良は自分のことの方が可愛いので他人が自分から犠牲になりに来るのはそれほど気にならないのだが、それをお食べと言われたら、気にならないはずがない。

「……本気で阻止しないと恐いんですけど」

「そうですね」

二人は頷き合い、どんな土産だと喜ぶか考えて、人間の手作り食品にしようと決着がついた。

### 3話 異世界の醍醐味 5

食事についてはあまり不自由しなかった。

スプーンとナイフが混じったようなもので切ったりすくったりして、二股のフォークでそれを押さえたり刺したりする。細かなマナーはあまりないらしく、フォークナイフがずらりと並ぶようなこともなかった。おそらくあの光景が異常なのだ。日本だと箸で何でも食べてしまうし、素手で食べる国もある。

食事の味もやや薄味にもらったので、美味しく食べられた。凝った料理は少なく、シンプルな調理法が多い。ブイヨンスープは少し癖があったが、美味しかった。

それなりに楽しい食事を終えると二人で城に帰り、聖良は客室へと通された。アデイスのすすめで部屋についていたシャワーを浴びた。髪を洗うとさっぱりしたが、リンスをしても髪がキシキシして絡んだ。石鹸はどうしてもこうなる。手櫛でときながら風呂から上がると、待ち構えていたアデイスが手招きした。テーブルと椅子が移動しており、聖良にはアデイスに背を向ける形で置かれた椅子に座れと、椅子の背を叩いて指示している。

「何ですか？」

「髪の綺麗な女性に譲ってもらいました。塗ってあげます」

アデイスは瓶を見せる。テーブルには櫛も置いてあった。

「自分でやります」

「いいからいいから。さあ座って」

聖良が椅子に腰掛けると、アデイスは手のひらに瓶の中身を出し、髪に触れた。絡んだ髪に塗り込み、櫛を通しながら魔術で髪を乾かす。

他人に髪をとかれるのは気持ちがいい。小さなころ、母に髪をといてもらったのを思い出す。しかし手は母とは違い、男の筋張った手だ。

良い香りがして、気持ちよくて、部屋は広くて綺麗で、どこかの高級ホテルに来ているような感覚に陥る。

「さあ、これで髪に最初の艶が戻りましたね」

アデイスの手が止まると、少し眠くなっていた聖良は、名残惜しさを覚えた。あのまま眠ることができたら、最高に心地よかつただろう。

「明日はこういった身の回りの物を買に行きましょう」

「そうですね」

「おや、おねむですか？」

アデイスは眠そうにしている聖良の顔をのぞき込み、子供相手にするように笑った。

「今日は疲れましたからね。では、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

アデイスが部屋から出ると、部屋が静まりかえった。部屋が広いからか、ぽかぽかしていたのに急に冷えてきた。

聖良はすることもないからベッドに潜り込んで、まだ暖まっていない清潔なシーツの中で、ぶるりと震える。

至れり尽くせりの一日だった。

「ここもかなり上等な客室に違いない。そう考えると、

「……落ち着かない」

知らないところに一人でぼつんと居ると、少し かなり不安になった。しかも高級な香りのする王宮の客室。

意識をしてしまうと、先ほどまではあれほどあった眠気がどこかに行ってしまった。

それでも目を伏せるが、最近はずっかり慣れてきたアデイスの気配と、ネルフィアの見た目に反して可愛い息づかいを感じない。

明かりを消して暗くすると恐いし、自分が作る光は明るすぎて落ち着かない。

時々誰かが部屋の前を足音が通り過ぎる。

目が冴えて眠れないのに、テレビもラジオもないので退屈だ。本



棚はあるが、読めないので問題外。

人がまた部屋の前を通る。響くほど大きい音なわけではないが、静寂の中では耳に残る。

枕に顔を埋めて足音が通り過ぎ、遠ざかるのを待つ。

ベッドが柔らかくて、煎餅布団や、布を敷き詰めただけの床に慣れた彼女には合わない。そのせいでよけいに寝付けない。

この部屋は、聖良には豪華すぎるのだ。

「うう、私の貧乏性」

染みついた物は、数時間で抜けるとは思えなかった。

「……アデイス起きてるかな」

もう寝ているかもしれない。しかし起きているかもしれない。

「……………んしょ」

足を絡めつつ、大きなベッドからなんとか抜け出し、パジャマの上に、貸してもらった上着を羽織ると廊下に出る。魔法の薄明かりで照らされる廊下をゆっくり歩き、そう遠くないアデイスの部屋へとたどり着いた。

耳を澄ますと、中から少し声が聞こえる。潜めたような声で、複数。アデイスといつもの部下二人だろう。

聖良は恐る恐るドアをノックした。

「取り込み中です」

「……………ならいいです」

部屋に帰ろうとした瞬間、ドアが開いて聖良は中に引きずり込まれた。

アデイスと分かっているのが怖くないが、そうでなかったらどれだけ怖い思いをするか、彼は理解しているのだろうか、疑問を抱いた。

「セーラならいいんですよ。どうしたんですかこんな夜中に」

抱きしめられて頬ずりされて、聖良はじたばたともがく。体格が違いすぎて、彼の冗談は聖良にとっては恐怖だ。

寂しいという思いは吹き飛んだが、今度は鬱陶しいという思いに

支配される。

「だから私は人形じゃないんですから抱きつかないでください」

アデイスの腕から抜け出して彼を見上げると、予想と違い知らない人がいて後ずさる。そういえば声もアデイスではなかった気がする。アデイスとはタイプが違う、影のある美男子だ。たとえば格好良かろうと、知らない男性だ。

「だれ……」

ここはアデイスの部屋で、彼はアデイスそのものの行動をした。まさかこの国にはアデイスの他にもう一人似たようにタイプの間がいたのかと恐怖した後ずさった。

怖い所に来てしまった。

「部屋は間違えていませんよ」

黒髪の男性は、陰のある綺麗な顔を笑みにする。するととても優しそつに見えるのだ。

「あ……でいです？」

彼は見慣れた仕草で二度頷く。確かにこの仕草はアデイスだ。

「怯えるセーラも可愛いですね。でも、女性がそんな格好で出歩い  
てはいけませんよ。途中で万が一の事があつたらどうするんですか  
」でも、お城の中ですよ」

「ここには男の方が多いんです。無防備にうろついていたら暗がり  
に連れ込まれて襲われることもあります」

「……………」

お城の中がそれほど危険だとは思わなかった。

聖良が考えていると、部屋の前を足音が通ってびくりと震えた。

「だから、もう夜中に部屋の外に出てはいけませんよ」

頭を撫でられ、聖良は少し落ち着いた。

いつもの手ではないが、撫で方は同じ。

「その格好……どうしたんですか？ 二人は……あれ、さつきと違  
うような……見た事あるような」

「そりゃあ、最初に来た時の姿ですから、見覚えがあるでしょう」

聖良はまじまじと二人を見つめた。

「そっか。外国人の顔って区別つかないから分らなかったです。ああ、アデイスは見分けがつかますよ」

「ふふ、私のような美しい人間を見た後では、彼等は没個性的に見えるのでしょ。仕方がありません」

彼は肩までの中途半端な長さの黒髪を掻き上げた。

聖良は改めて彼等の姿を眺める。部下二人は茶色の髪で、顔立ちがジェロンが気の良さそうな好青年で、アデイスが少し悪そうな格好良い青年。元の姿も同じほどの容姿レベルで、街ですれ違って名乗られれば、間違っついても本物の方だと勘違いしてしまう。

聖良は三人の容姿よりも、格好が気になった。

「なんでみんなそんなに暗い格好なんですか？」

暗色系の服と紺色のマントを羽織っている。

「今から出かけるんですよ。聖良は寂しくなつたんですか？」

「ね……眠れなくて退屈だったんですっ」

凶星を指され、聖良は不機嫌に視線をそらした。知らないところで一人になると寂しいし怖い。そう思うのは仕方がないことだ。聖良は子供扱いするなどは言っても、未成年の少女である。怖い物は怖く、不安な物は不安なのだ。

部下二人がぷつと吹き出し、聖良は頬が熱くなるのを感じた。

「ああ、なんて可愛いらしい」

アデイスが抱きついてこようとすることを避けてから、聖良はもう一度問う。

「出かけるってどこに行くんです？ わざわざ変装して。いつもの頭蓋骨はどうしたんですか？」

わざわざ別の人間に化けたのだから、理由があるはずだ。

「あれは万が一の時のために持って行きます。」

これから私がやっているサークルのようなものに顔を出しに行くんですよ」

聖良は試験に皺を寄せた。

「サークル？ こんな時間にですか？」

「ほら、大人の付き合いというか」

「変装して？」

「前に言いませんでしたか。組織のこと」

「それならそうと言えればいいのに……」

下手に隠し立てするから怪しく見える。アデイスがろくでもない事をしているのは、今更隠すような事ではない。何せ竜を捕獲するために、何の恨みもない他の世界の人間を食べさせようとした男だ。彼がどんな卑劣な犯罪行為に手を染めていても、今更驚くことは何もない。

「その頭蓋骨はどうしたんですか？」

「私ほどではないですが、なかなかの美形でしょう。ずいぶん昔の有名な俳優のもですよ」

「お墓を暴いたんですか。悪趣味な」

「そういうときもあります。これは買ったんです。誰も本物を知らなくて、とびきり美形となるとなかなか見つかりません」

それでも私には劣っているのですから、どれだけ自分が恵まれて生まれてきたのかと思うと恐ろしくなりますよ」

聖良はため息をついて、倫理観の乏しい、これからの人生における相棒を仰ぎ見た。自信家だとは思っていたが、ここまでナルシストだとは思っていなかった。

「セーラもまげて欲しいんですね。セーラは強がっていますが、意外と寂しがり屋なんですよね」

彼は嬉しそうに姿の違う二人の部下に言う。反論しようと思ったが、彼が夜な夜な何をしているのか、知らっておいた方がいいと思いい口をへの字に曲げた。しかし知るのもまた怖い。暗い世界に足を踏み入れるのは、恐いというか不安だ。だが、ネルフィアにはアデイスをよろしく頼まれている。竜のアデイスはまだ穢れなき身体だ。アデイスの思うまま汚してはならない気もする。

「お前さんも行きたいのか。そうかそうか」

ディアスが荷物の中から何かを探り出して、差し出した。いつも見るよりもずいぶん小さい、頭蓋骨だ。

「用意しといたから、これ使え」

「……こんな物を、ずいぶん簡単に用意できるんですね」

頭蓋骨など、普通の社会なら簡単に手に入るものではない。

「墓に行けばいくらでもあるだろ。色々と変装できる種類があった方がいいんだ」

「こんなに頭蓋骨泥棒して、平気なんですか？ ばれないんですか？」

「バレるも何も、この術は封じられた古い術をアデイス様が解読してアレンジしたんだ。古い理論を元に、ほとんど新たに作ったような術だから、知っているのはお前さんも含めて俺達四人だけだ。クレアですら知らない。万が一の時も、何か怪しい研究に使っている馬鹿がいるとも思うだろう」

聖良はその小さな頭蓋骨を眺め、きつと小さな女の子の物だと確信しながら呪文を唱えた。自分にこれをかけるのは複雑な心境だが、このまま部屋に戻っても眠れないし、きつと巢に戻っても気になつて眠れなくなる。

ちよこんと頭蓋骨を頭に上に載せたまま呪文を唱え終わると、聖良は手の平を見た。呪文を唱え終えたときに実感はなかったが、いざ見てみると、自分の手では無く、色白の子供の手になっていた。そして視界の隅に映った髪は金髪。ジエロンが壁の鏡を指さしたので、聖良は恐る恐るそれを覗く。

見知らぬ美少女がいて目を丸くしていた。

まるで人形のように綺麗な女の子で、聖良は少し呆れた。間違はなくアデイスの趣味だ。

「ああ、なんて綺麗な子なんでしょうか。死んでしまったとはもつたない。あ、もちろんセラも同じぐらい可愛いですよ」

「こんな小さな子と比べられても嬉しくくないです」

それから隣の寝室でディアスが用意した子供用のローブを身につ

け、フード付きのマントを羽織った。胸がないので普通に子供服が着られる。肩も軽い。首が楽。

「……胸がないのって、こんなに楽だったんだ」

小学生の頃からの付き合いなので、ずっと忘れていた。

聖良の胸など、アデイスに彼女が大人だと思い出させるぐらいの視覚効果ぐらいしかないので、胸だけはこのままでいたいと思った。

### 3話 異世界の醍醐味 6

アデイスの部屋は元々要人が使用していた場所らしく、脱出用の隠し通路があった。

「おおおっ、すごいっ！」

聖良は興奮して手を叩いた。

「気に入りましたか？」

「こつこつ、一回見てみたかったです！　すごい！　どこに繋がってるんですか？」

聖良はぼつかり口を開けた暗い隠し通路に首を突っ込んだ。

「色々な場所に出られますよ。最終的には下水道に繋がっていますから」

「下水道なんてあるんですか？」

「はい。今夜はとりあえず、一番無難な道を通ります」

アデイスが手を差し出した。

「危ないので、手をつないでいきましょう。セーラはすっかり階段から転げ落ちてしまいかもしれません」

否定出来ずに、聖良はアデイスの手を握った。

一瞬、へらりと笑い、呆れ半分見上げていると、真顔になる。そうしているといかにも悪の組織のボスといった雰囲気だ。

聖良は冒険をしているようで少しウキウキしながら、アデイスと手をつないで暗い地下通路への階段を下りた。

一人なら楽しむどころでは無かったはずだが、慣れている様子のアデイスと手をつないでいると、安心して今を楽しむ事が出来た。

テレビでしか見たことのないような石造りの地下通路だ。

こつこつ所をこのように歩くなど信じられない。一生見ることもないと思っていた光景を、見るだけでは無く実際に触れているのだから。

暗所、閉所恐怖症の人だったら半狂乱になりそうだが、聖良はまっ暗が好きでないだけで閉所はむしろ好きだ。夢見心地で狭い地下通路を歩いていると、アデイスが足を止め上方を指さした。

はしごが上へと伸びており、ディアスが先に登って行く。あつという間に姿が見えなくなつた。天井は出口も何も無い。次にアデイスが登り、天井をすり抜けてどこかに消えた。

「えっと……」

「ほら、心配しないでいいから。落ちても下で受け止めて上げるよ」  
「は、はい」

ジェロンに促され、聖良はゆっくりとはしごを登り天井に突き当たる。天井には、うっすらと奇妙な模様の描かれていた。恐いが恐る恐る手を伸ばし、天井に手をつこうとした瞬間、天井から腕が生えてきて聖良の手首を身体を掴んで引き上げる。

天井を、すり抜けた。

心臓が口から飛び出そうな程驚いたが、手の主がアデイスだと分かるのと深呼吸して自分を落ち着かせた。その間にジェロンも外に出てくる。

誰も明かりを持っていないので暗くてよく見えないが、目が慣れてくると月明かりに照らされて石が並んでいるのが分かった。

「……………墓場……ですか？」

石が並ぶ場合、文化が違ってもそれが墓場である場合が多い。

「ええ。ある意味最も安全な出入り口です」

公園などにあるようなモニュメントによく似た形の墓石を指さす。

「この石は呪文に反応してすり抜けるようになるんですよ」

アデイスは墓石を叩いてもう入り口が閉じたことを示した。

隣の墓には、本当に人が入っているのだろう。一つだけが秘密の出入り口。ゲームではよくあるが、現実に目の前になるととにかく不気味だった。

「……………罰当たりですね」

「だからこそいいんですよ」



アデイスは聖良の前に跪き、服の裾についた土を払うと、立ち上がり手を差し出した。さすがに墓場は恐いので、再び素直にその手を取って身を寄せる。

「女性をお連れする場所ではありませんでしたね。」

「ああ、そうだ。その前に一つだけ。私のことはご主人様もしくはアーネスと呼んでください。ああ、お兄ちゃんでも可です。」

馬鹿らしいと思ったが、ご主人様というのもあながち冗談ではないのかも知れない。彼は長なのだから、そう呼ばれていても普通なのだろう。

「アーネスっていう偽名を使っているんですか？」

「ええ。組織の中でお互いを知っているのは私達だけだから。デイスは『デイ』とジェロンは『ジェイ』と呼んでください。」

下手に凝った名前よりも元々の音に近い分分かりやすい。気安く呼んだ感じにすればいいのだ。

「セーラはどうしましょうね。言葉遣いが目立つのに、本名で呼んでいたら意味がないですよ。」

「森って呼んでればいいんじゃないですか。私の名字ですけど、どうせ国が違うから名前も名字も区別つかないでしょう。」

「モリイ？ それも可愛いですね。」

平凡な名字がずいぶんとハイカラになってしまった。しかし今、

聖良はハイカラな名前が似合う超美少女なのだと思います。笑った。金髪美少女に森はないだろうから、これでいいのだが、複雑な気持ちになった。

「絶対に本名は呼ぶなよ。とくに長の本名。名前が咄嗟に出てこないだったら、ご主人様とか長とか、お兄ちゃんにしておけ。」

デイスに釘を刺され、聖良は首をかしげる。

「……間違えそうになるから長なんですか？」

「俺はそう。元の姿の時に間違えて長って呼ぶのは誤魔化せるからな。」

デイスは。周囲を警戒しながら言う。

「アーネスですね。分かりました」

「ご主人様と呼ぶよりはいいだろう。出てこなかったらお兄ちゃんを採用する事にした。」

アデイスに手を引かれ暗い墓場から出て、暗い道に行く。

墓場から出てもまた暗く、他人を値踏みするような浮浪者がいる分、この方が墓よりも恐いと思った。幽霊よりも人間の方が恐い。

「モリイ、大丈夫ですよ」

脅えているのが伝わるのかアデイスが声をかけてくる。聖良はいつもより背が低く、アデイスはいつもより背が高いので、身長差がさらに広がっている。彼を見上げ続けると首が痛くなりそうだ。

顔を見るのは諦めてアデイスにひつついて、うつむいて歩いた。

アデイスはちらりと聖良を見て、マントでくるんでくれる。彼の身体が竜の時よりも温かく、落ち着いた。

落ち着くと少し眠くなり、歩きながらまぶたが自然と重くなる。

うつらうつらとし始めると、ふいにふいにアデイスが足を止めて、聖良は転びそうになった。

顔を上げると、酒場らしきガラの悪そうな場所の前に立っていた。アデイスが入るのでついて行くが、こんな場所は元の世界でも経験が無く、動きがぎこちなくなる。

中に入ると飲んでいた者達の半数に緊張が走る。従業員含めて十人ぐらいただが、その半数はアデイスを見て何らかの反応を示した。半数はちらと見ただけで特に驚いた様子もない。

「奥を借りますよ」

アデイスはバーテンらしき男性に声をかけた。

「どうぞ。何をお持ちいたしましょう」

「適当に」

「かしこまりました」

聖良はアデイスの手を両手で握り、恐る恐る奥へと向かう。

客層が悪いので恐かった。クラブにも居酒屋にも行った事がない聖良にとって、ここはとても場違いであった。

「脅えなくても大丈夫ですよ」

アデイスは奥の部屋ではなく、廊下をさらにまっすぐ行き、突き当たりの壁の前に立ち壁に手を当てた。

「開け」

置かれていた手は壁へと埋もれていく。

先ほどと同じ原理の入り口だと分かっても、壁に突っ込むのは勇気がいる。

手を引かれるがまま、恐る恐る一步前が出る。アデイスとつないだ手が、豆腐にでも腕を突っ込んだような感覚で進んでいく。

感触はあるのだと驚きながら、目をつぶって歩いた。顔に触れたとき恐くなり、目をつぶり、思い切って前へと飛んだ。

目を開き、頭や顔に触れるが何もついていない。アデイスを見上げて、見慣れぬ美男子の顔で微笑むだけで、何か変な物が絡みついてはいない。

「ようこそ、モリイ。『青の箱庭』へ」

アデイスが振り返り、手の甲にキスをしてきた。

「青？ 黒じゃなくて？」

「黒は黒魔道士　つまりの悪魔と契約した魔道士や魔女の色です。青は私達のような己の魔力と技術を研究する魔術師　神も悪魔もなく、己の知と魔力を磨く者の色です。ここは私達のささやかな研究施設。だから青の箱庭」

「物は言いようですね」

今までの道筋から考えて、悪の秘密結社以外の何物でもないとして、聖良は確信している。

「はなから信じていないんですか」

「だって、アデイスがただの研究施設を作るとは思えませんもん」

「アーネスです」

「そうでした」

聖良は自分の口を押さえる。名を呼んではいけない。名を呼ぶぐらいなら、あんたやお前の方がいい。

「ここからは絶対ですよ」

「分かりました、アーネス」

聖良が頷くと彼は地下へと続く階段を下りた。城にあった秘密の通路も地下を通って墓地に出た。地下が多い国なのか、アデイスが地下を好きなのか。

ゆっくりゆっくり階段を下りて、下にたどり着くとスーツを着た男性が待ち構えていた。

「お帰りなさいませ、アーネス様」

「久しいな。変わりはないか」

「もちろんでございます」

扉が開かれ奥へ行くと、ちょっとしたホールに出た。知人を呼んでホームパーティが開けそうな広さだが、雰囲気は怪しく卑猥な儀式がされていてもおかしくない。聖良は思わずアデイスを睨み上げる。

信じられる要素など、端からほとんどなかったが、これで残りわずかながらにもあったそれは打ち砕かれた。

「何するんですか、ここは」

「集会ですよ。研究の成果発表やら色々」

「変なことはしていないんですか？」

「何を想像しているんですか？ モリイは可愛いですね」

想像しているのはとても可愛いとは言えない内容だと分かっているが、彼は言う。

言葉遣いは若干差があるが、いつもと大差ない態度だ。顔を変えれば中身が多少似ていても、誰も同一人物だとは思わない。彼が内緒で作った魔法だというならなおさらだ。アーネスとアデイスは、変装でどうにかなるレベルでないほど、顔と体格が違うのだ。

「モリイ、こちらです。いらっしやい」

聖良はさらに奥へ奥へと向かい、豪華なリビングのような部屋に案内された。宮殿の客室よりもこちらの部屋の方が派手だった。

中には十代前半の女の子が二人待機しており、アデイスが姿を見

せるやいなや顔を輝かせて跳び上がった。

「長っ」

「おかえりなさいっ」

少女達はアデイスに抱きつき、アデイスは二人の頬にキスをした。それはもう可愛らしくて、女の聖良もぽつぺたにキスをしたくなりそうな美少女達だった。

ずいぶんと可愛らしい恋人達のお出ましである。

「変わりありませんか」

「はい。長が行方不明になったぐらいです」

「急に消息不明になったって聞いて、すごく心配しました」

二人はアデイスに甘えに甘え、ぎゅうっと抱きついた。そして身がかがめて抱擁を受けるアデイスの肩越しに、二人は聖良を睨み付けてきた。暗く鋭い女の目をしていた。

聖良は迫力に負けて近くにいたディアスの背に隠れた。あんな子供でも、彼女たちは立派に女だった。

「長が来たって聞いて飛び起きてきたんですよ」

「心配をかけました」

三人はソファに腰掛け、少女の一人がキセルを用意して差し出す。アデイスはそれを受け取り、一口すって顔を顰めた。

「やはりいい」

「どうされたんですか？」

「しばらく健康的な生活をしていたので、久々に吸うとそれほど美味く感じなくなりました」

味覚が子供に戻ったからだと言った。聖良は思った。

食事の時も大人が好みそうな苦みのある物を食べては顔を顰めて子供が好きそうな物を食べては美味しいと喜んでい。つまり今の彼は根っから子供なのだ。たばこなど吸ってもむせるだけである。

「長、今夜は泊まってくださいね。長が心配で、ずっと寝不足だったんですよ」

「私も長が生きていると聞くまでは、夜も眠れなくて、食事も喉を

通らなかつたんです」

少女二人は可愛らしく甘えながら、争い合っている。

アーネスはあれだけハンサムな容姿で、組織の長だ。彼女たちが寵愛を乞うのは当然だと、聖良は自分に言い聞かせる。

あれはあの少女達の意志である。無理強いしているので無ければいいのだ。

しかし、と聖良はあらためて思う。

「……非常識ですよね」

「今更何を……」

長に常識を求めても無駄だつて」

ディアスがしゃがみ込んで耳元で囁く。部下に常識が通じないと思われているほど、普段からアデイスらしい言動をしているのだ。

聖良が異世界の人間だからではなく、一般的に彼の思考は少し特殊であると再認識した。ロリコンである事以前に、素人に意味の分からない魔法の話をしたり、知らない人の名前を出されたりと、かなり自己中心的な話し方をするから、分かっていた。

「モリイ、何を突っ立っているんですか。座りなさい」

アデイスに呼ばれ、聖良は硬直する。

少女達は恐いが、立っているのは間抜けだ。聖良はどうしたものかと迷ったが、考えても仕方が無いと諦め、アデイスの向かい側にあるソファに腰掛けた。

何かの革で出来ている高そうなソファだ。

テーブルには、大きなガラスの器に、果物が盛られている。森の中でも見た果実もある。壁には魔術的な絵が飾られ、棚には芸術的な用途不明の何かが飾られている。

「長、酒いるか？」

「ええ。モリイはどうしますか？」

「ジューズで」

酒は飲んだことがない。贅沢だし、未成年だ。成長のためにも、酒たばこ類は絶対によくない。

「ミリでもいいから伸びて欲しいと、心の底から願っている聖良は、それに矛盾する行為をする気はなかった。」

「アーネスもお酒はやめておいた方がいいと思います。味覚が変わっているはずです。」

「身体にどんな作用があるか分かりませんし」

彼は出された酒をじっと見つめた。手に取り一口だけ舐めると、それをテーブルに戻す。

「それもそうですね」

毒になるとも思えないが、竜が酒に弱いかどうかは、彼自身でも分からない。しかし置いたのは美味しくないと感じたからだろう。

「長、この子は……」

少女の一人がアデイスに尋ねた。

「モリイです。なんとというか……そうですねえ。恩人というのが近いですね」

聖良が来なければ、彼は言葉が伝えられずにジェロンとディアスに捕らえられていた可能性がある。聖良が竜を捕らえるなら、間違いなく手足と口を拘束するからだ。

だから恩人というのも間違いではない。

少女二人に疑わしげな目を向けられ、聖良は出されたジュースを飲んだ。彼女たちも必死なのだ。アデイスは彼女たちのご主人様である。

### 3話 異世界の醍醐味 7

少女達はぴったりとくっついていたアデイスから身を離すと、先ほどの視線が嘘だったように朗らかに微笑む。

「新しい子ですか？ とつても可愛い方」

「どんなお部屋にしましょうか。壁紙は白がいいかしら、ピンクがいいかしら」

二人は無邪気に新しいお友達を迎えるようにはしゃいで聖良を囲んで手を取った。

「いいえ、彼女は客人。一度ここに案内をと思ってね」

「森……モリイです。よろしくおねがいます」

頭を下げると、二人は戸惑った様子で聖良を見た。

「すごい話し方でしょう？」

今後から彼女独特の話し方をするモリイと名乗る者が尋ねてきたら、老若男女を問わず招き入れるように通達しなさい。迷ったならお前達が聞けば分かるでしょう。

いいですか、どんな姿をしてもです」

アデイスは念を押し、うっすらと笑う。

「どんな姿をしても老若男女問わず、ですか？」

「ええ、ひよっとしたらデイの姿をしているかも知れません」

可能性がないとは限らないが、頻繁に頭蓋骨を頭上に掲げて呪文を唱えたくない。普通の女性は頭蓋骨など見たら脅えるものだ。

巢の中に普通に転がっているので聖良はすっかり慣れたが、この慣れこそ異常なのだ。

しかし彼女たちの視線が普通ではなく、聖良は自分が珍獣の用に見られているのを自覚し、憂鬱になった。しかしそれを否定するのはやぶ蛇で、聖良に出来ることは何一つない。

「ただし、この話し方をするモリイを名乗る者だけ。彼女のような話し方をする者は他にもいますから」



「他にも!？」

少女達は聖良を見て信じられないとばかりに首を振る。

もう一人とはもちろんアデイスと一緒にいる『聖良』の事だ。

「モリイも、何かあつたら彼らに頼るといいでしょう。私がいる限りはそのようなことはありませんが……なにぶんモリイの事です。歩いているだけで散々な目に合う事もあるだろうから」

否定できないほど頻繁に死にかけているため、彼の言うことに反論などできなかった。アデイスと離れたら危ないのは、十分に理解している。聖良はアデイスの側を離れると魔力が届かず魔術を使えない。その時の彼女は、異様に回復力があるだけの無力な少女。もしもの時に助けしてくれる人がいるのは有り難い。

しかしあの暗い路地を通り、上にいた恐そうな人達に耐えてここまで来るぐらいなら、素直にお城に行つて助けを求めた方がいい。

「あの……アーンネスにだけは言われたくないんですけど。私はあなたほどは運悪くないし」

確かに道を歩いていたら突然召喚されたのだが、彼もデートをしていたら竜に連れさらわれたのだ。話を聞く限りでは日常的にさんざんな目にあっているらしい。聖良もそこまでひどくなかった。こちらに来てから悪化したが、アデイスよりはいいはずだ。

「長……今度はどんな不運な目に？」

「今回は長かつたから本当に心配しました」

恋人達が彼を心配そうに見つめた。

聖良はため息をついて出されたジュースを飲んだ。自然になつている果物よりも甘く、それが少し懐かしい。匂いもいい。さっぱりしていて、ほんのりと甘みのある香り。アロマとかの事はよく分からないので、これがどんな系統の香りか分からないが、とても飲みやすい。もちろん今食べたりしたら太ることは間違いなく、このジュースも飲まない方がいいのだが、少し歩いて喉が渴いたため、つい飲んでしまう。

己の自制心にうんざりしていると、扉が開いて男が入ってきた。

撫で付けた髭が滑稽な、痩せた中年男である。

「お帰りなさいませ、アーネス様」

「ウィル。早いな」

「もちろんですとも。アーネス様がお戻りになったとお聞きして、飛んで参りました」

聖良はきよんととしてその男を眺めた。あまりセンスの良い男性ではない。

「実は明日売りに出す予定の、いい娘がいるのですよ。ですから、ぜひアーネス様にとお思いまして」

「ほう」

「礼儀も何も知らぬ田舎娘ではありますが、純朴な愛らしさはアーネス様が必ず気に入ること間違いなしでございます、はい」

「お前がそこまで薦めるとは珍しい」

「ええ、それだけ上等な娘でございます。アーネス様以外に売るのは忍びないほどに」

「ほう。それほどいい子なのですね」

聖良は音を立ててグラスをテーブルに置いた。

アデイスがびくりと震え、ゆっくりと聖良を見た。その様子から、一瞬彼女の存在を忘れてしまっていたのが分かった。

幼い女の子のこととなると、彼は周囲が見えなくなるタイプなのだ。

「せ……モリイ？」

アデイスの声が少し震えていた。聖良が睨み付けると顔が引きつる。

「モリイ。ひよっとしてものすごく怒ってます？」

アデイスが立ち上がり、テーブルを迂回して聖良へと近づいてくる。

「モリイが妬いてくれるなんて、思いもしませんでした」

「妬いてません。ただデリカシーのなさに呆れて怒っているんです」

部下二人が頷き合っているところを見ると、一般的に見ても彼の

行いは非常識なのだ。自分で女の子を連れてきておいて、その目の前で人買いの話をする。どんな世界でも非常識である。

「モリイ、怒った顔も可愛いですけど、女の子は笑顔が一番ですよ」  
頬を突かれ、その手を叩き落とす。

目が据わっているのが分かる。不愉快極まりなかった。

「そういうことは、私の目の届かない場所でやってくださいね。まあ、私の目の届かない場所へ行けると思ったら大間違いですが」

「ご、誤解ですよ。ただ、魔力の高い小さな子を引き取ってそだてるのが生き甲斐なんです」

「へえ、誤解？」

「ええ、誤解」

「それで誤魔化せると思ってるんですか」

アデイスの肩にディアスが手を置いた。

「長、素直に二度としませんって謝った方がいいんじゃないですか、今後のために」

「そうですね。二度と戻って来れなくなりますよ」

「うう」

アデイスは呻き、ちらと聖良を見る。

「モリイも機嫌を直してやれって。この人は自分のハーレムを作るためにこの組織作ったぐらいなんだから」

「何ですかその最悪な組織は。まだ悪の秘密結社って言われた方がマシなんですけど」

「ははは。何事にも金がいるからな。金を作るには地下に潜るのが一番。裏の世界の偉いさんになれば、周りが好みの少女を献上してくれるしいいいいいい」

ディアスはアデイスの電撃を身に受け、パタリと倒れる。

部下に対してなんて乱暴なんだろうかと、憤慨してアデイスを睨んだ。

「火に油を注ぐようなことをっ」

「それは分かってるんですけどね」

なら初めから我を忘れなければよいのだが、彼はとても欲望に弱く、口が軽い。

「や、本当にこれからはモリイ一筋になりますから」

「それは求めてませんよ、気色悪い」

「気色悪いとは何ですか」

「ロリコンなんて最悪じゃないですか。彼女達が大人になったらどうするんですか」

二人の少女を指さして問うと、皆が口を閉ざした。

二人は手を取り合い、不安げにうつむいている。

彼女たちも理解しているはずだ。

「遊び人は嫌いです」

「やっぱりモリイ一筋になれと？」

「実家の里に行つて、可愛い女の子を捜したらどうですか」

竜の里に行つて、竜の恋人を探す。今のアデイスにとって、これが一番正しい道だ。

「それだけは……ちよつと。」

モリイ、機嫌を直してください。モリイのふくれ面も愛らしいですが、やはり笑顔が一番です」

頭をなで、火に油を注ぐアデイス。

何度やったか分からないが、またその手を払い睨み付ける。

「何でも買つてあげますから」

「別に欲しいものはありません」

長く我慢しすぎたためか、買えるだけの金銭を手にして、欲しいと思つた物が目の前にあつても、買おうとは思わなくなった。見て想像しているのが一番楽しい。

「そう言わずに」

「私のような年増のことは構わず、好きなだけ本物の幼い女の子と戯れてくればいいじゃないですか。私なんてどうせ可愛げもないチビでデブで生意気な年増ですよ」

初対面で年増と言われ、小さい小さいとけなされ、肉が付きすぎ

ていると馬鹿にされた。なぜそんなことを言われなければならないのかと、怒りが沸々と湧いてきた。

今まで気にしないようにしていたのは真実だし、養われている身だったからだが、よくよく考えれば彼は聖良がいないとこうして人間になつて遊びに来ることも出来ないのだ。

感謝されるならともかく、さりげなく胸をえぐられる言葉ばかりかけられなければならない覚えはない。

「長、あんた普段からどんなひどい事を……」

「い、言つてませんよ」

「言いました。言葉は多少違つても、意味的に同じ事を全部言われました！ 毎日のように言つてます！」

自覚がないから夕チが悪い。相手は子供ではないと思うと遠慮がなく、本当にさらりとひどいことを言うのだ。

「長、あんまり怒らせない方が……」

「怒らせているつもりはないんですが」

「たぶんそれに一番腹を立てているんじゃないでしょうか。紛れもなく本音だから」

ジェロンの常識人ぶりには涙が出てきそうになる。この世界の人間が皆アデイスのようでなくてよかった。中身だけでいいから二人を取り替えたいと、聖良は本気で思った。

「あの……アーン様。今日の所はお預けということで、よろしゅうございますか」

今まで黙っていた商人が、手をすりあわせてアデイスに問う。

「ウィル。お流れです。お流れ」

「左様でございますか。しかし可愛らしいお嬢様でございますねえ。

アーン様が夢中になられるのも無理はございません」

「そういう関係ではありませんよ。強いて言うなら……姉のような方です」

身体は子供と言つたことを根に持ったのか、人には散々言つておいて、少し反撃したらこれだ。聖良はぶすつとふくれた。

「だから長、怒らせてどうするんだよ」

「そうですね。ますます不機嫌になってますよ」

アデイスは不思議そうに聖良を見る。

「どうしたんですか。今日は本当に機嫌が悪いですね。」

ああ、ひよつとしてホームシックですか？

「一晩もたつてないのにホームシックになるほど可愛くできていません」

「寂しくて私の部屋に来たくせに」

「知らない所で、少し不安だっただけです」

知らない所で、近くに人の気配がないと怖くて眠れなかっただけだ

「私、帰ります」

「おねむですか」

「だから、子供扱いするか大人扱いするか、一体どちらなんですかって」

どちらかに統一してくれば苛立ちも減るが、彼はどちらともとれる扱いをする。聖良は立ち上がり、来た道を戻る。

「ああ、待ってください。やる事があるんですよ。少し待ってください」

聖良は無視して出口に向かう。

彼女は紛れもなく無力だが、鞆の中に入っていたスタンガンは持ってきている。バイトをしていた新聞屋さんの奥さんがくれた物だ。珍しいものなので、きつと怯んでくれるだろう。距離的にも墓場までは魔力がまったく届かなくなるほどではない。きつとなんとかする。

「せつ、モーリイ。危ないから待ちなさい。送っていきますから」

「お待ち下さい。長が送っては逆効果です。私が責任を持って送り届けますので、長は溜まった仕事を片付けてください」

聖良は足を止めた。

追おうとしていたジェロンが動きを止めて聖良を見る。

「本当にお仕事なんですか？」

「そうです。まあ、悪い癖はありますが、基本的にこの組織を作り維持しているのは、長が自発的にしている事です。ずいぶんと行方不明でしたから、久々に再会した養い子達とゆっくりしたいという気持ちだけは、理解して上げてください」

行方不明になっていた期間を考えると、彼の仕事はたまっているもおかしくはない。彼一人がいなくなつてまつたく動かなくなるような腐れた組織ではないだろうが、いなければいけないで大きな事は出来ない。諦めて次の頭を探すには短い期間であつたし、それに関しては納得した。

「でも、人買ひする気満々だつた気がしますけど」

「……ほら、自分に素直な方ですから」

聖良にもそれは分かつていたことだ。怒つても仕方がない。

アデイスは足を止めた聖良に、苦笑しながら声を掛けた。

「モリイ、いい子ですね。一時間ほどで終わらせますから待っていてなさい」

そう言われると、ここで帰るのはとても我が儘で子供っぽい事のように思えた。

「ほら、お前達も遅いから寝なさい。子供はもう寝る時間です。

明後日にでも昼間に来ますから」

「本当ですか？」

「ええ、本当です」

彼は二人の少女に笑みを向け、頭を撫でて納得させた。さすがに今から女の子に何か悪さをしようという気はなくなったようだ。

「……本当に一時間で終わるんですか」

「ええ。終わつたらすぐに帰りますから。

寂しかったら私の部屋で待っていてください。暗いところが怖いのでしたら、持続性がある明かりを用意させましょう」

アデイスは子供に向ける笑みを聖良に向けた。一時間なら、仕事以外に何か悪さをする事もないだろう。

「……………一時間ぐらいなら、待っていてあげます」

聖良は部屋の中に戻り、ソファに腰をおろした。

「あと、べつに暗いところが嫌いなわけじゃありませんから」  
暗い部屋に一人でいるのが恐いのだ。

それでも彼が気付いていたのには驚いた。明かりもあつたし、ア  
デイスが側にいるから分かるような行動や態度をとつたつもりはな  
かった。

何だかんだと言って、見るべき所はちゃんと見ているのだ。  
少し、嬉しかった。

今までこれほど気にかけてくれる他人はいなかったから。



### 3話 異世界の醍醐味 8

朝、目を覚ますと、服を着ていない『銀髪のアデイス』に抱きかかえられて眠っていた。内装とガラス窓がある事から、宮殿内のアデイスの部屋のベッドだと分かった。

「えと……」

目の前にある整った顔と、細身ながらも引き締まった男性的な肩から目をそらし、聖良は昨夜のことを思い出す。

アデイスが部屋を出て行って暇な間、ついうとうとして眠ってしまった。

起きたら朝で、アデイスの腕の中。

聖良の髪の色は黒に戻っていることから、アデイスによって勝手に解呪されたようだ。しかし着ているのは子供服のままで、胸元が大きく開かれているのに気付いて、聖良はアデイスの腕から抜けだし、毛布を身体に巻き付けて、アデイスを揺さぶった。

「ちょっと、なんで私こんな格好しているんです!？」

ボタンが引きちぎれていないから、アデイスが外したのだと思われた。そして彼は着ていた服を脱いでそのまま寝た。

アデイスが聖良の身体に興味ないのは分かっているが、黙って許せる事ではない。アデイスだからいいものの、他の男とこの状況になっただけなら、どれだけ女がパニックになるか。

「起きてくださいっ」

「あうう」

毛布を取られたアデイスは、上半身裸で寒いのか、身体を丸めて呻いた。

今日は巨体でないため安心して起こせる。道具はないが人型なので下手な物で殴れば血が出てきてしまうため、道具は探さずゆさゆさとゆすると、彼はゆっくりと瞼を開き、目を手の平で覆い欠伸ばした。

「んー、どうしました」

「どうもこうもありません。なんで私こんな格好なんです!？」

「元に戻さないわけにはいきませんし、全部脱がしたら後が恐いですし、そのままだと苦しそうですし」

「アデイスはなんで裸なんです?」

「ん……いつも全裸じゃないですか。全裸生活のせいで、服がどうにも窮屈で。下は穿いてるからいいじゃ無いですか」

「よ、よくないです。ビックリしたんですから!」

「この程度もまだ見慣れないんですか? なんて可愛らしい」

アデイスは逃げようとした聖良の腰に、後ろから腕を巻き付けてきた。

「ああ、やっぱりセーラの方が抱き心地がいい」

アデイスは聖良を抱きしめ、頬にキスをしようとする。その顔面に頭突きを食らわせ、聖良はベッドの上から裸足で下りた。

あの華奢で、無駄な贅肉のない美少女に比べれば、肉も付いていて、抱きかかえる分にはいいだろう。抱き枕としても。

「こんな事せずに、起こしてくれればいいじゃないですか」

「可愛い寝顔だったから」

「いつも一緒に寝てるでしょう!」

「セーラは何度見ても可愛らしいですよ」

アデイスは上半身裸のまま、聖良を追ってくる。

「何なんですかっ!?! 気色悪い!」

聖良は隣の部屋に逃げると、彼は「まてえ」とふざけて追ってくる。いつもと違って朝からテンションが高い。それほどベッドで寝たのがよかったのだろう。

しつこく追いかけてくるアデイスから逃げるため、部屋のドアを開いて外に飛び出ようとしたところ、向こうからドアが迫ってきて、鼻っ柱をぶつけた。

「あつうっ」

尻もちをついて見上げると、王様      ハロイドが目を見開いて聖

良を見下ろしていた。

「だいじよ……………アデイスっ！」

ハロイドは聖良に手を伸ばし掛け、アデイスに向かって怒鳴った。「なんですか。こんな朝っぱらから大声を出して」

ハロイドは顔を上げ、恐いほど引きつた顔をしてアデイスに言う。「しっかりと責任を取るんだぞ」

聖良は自分のはしたない格好に気付き、立ち上がって毛布をしっかりと巻き付ける。

「責任？」

アデイスが顔を顰めて問い返す。

責任。聖良の知る責任。

「……………セーラ、君のご両親に挨拶をしたいんだけど」

聖良とアデイスは顔を見合わせて、真剣な顔をして言うハロイドをもう一度見る。

「ハロイド様、私とセーラはまだそういう関係ではありません」

「そうです。まだじゃなくて、そんな予定は一切ありません」

一緒に寝ただけで、それ以上はありません。私はどちらかというと、普通の人が好きです。こういう変な人は嫌です。これの事で挨拶に来られても困ります迷惑です」

アデイスの変わり者ぶりは昨夜でよく分かった。友人としてはいいが、ハロイドの考えるような関係になるのは嫌だ。

「セーラ……………昨日の夜はあんなに可愛かったのに、どうしてまたそんなにトゲトゲしてるんです？」

「だから、そういう誤解を招く言い方はやめてくださいっ！」

背後から抱き撫でられ、また誤解を招くことをする。

昨日の反省はなく、子供扱いで、玩具に等しい。

「……………アデイス、ものすごく怒ってそうだが」

「どーして怒るんですかあ。ほっぺたはこんなにふにふにしてるのに、心は堅木のように私は寂しいですよ」

「太ってません！」

「誰が太っているなんて言いました」

「まだ垂れてません」

「いや、誰がそんなことを言いました。セーラの肌はこんなに綺麗なのに。年増と違って」

アデイスの発言にハロイドは戸惑い、腕を組む。

「そりゃあ年齢差だけはとうしようもないだろ。クレアだって昔はこれぐらい肌がきめ細やかだったんだぞ」

「ははは、あのババアが若くても、セーラの肌には勝てないでしょう。お腹や太股の滑らかさいたっ」

聖良はアデイスのスネを蹴り飛ばす。

思い返せば、抱き上げられた時に腹や太股には触れているはずだ。そんなことを考えながら抱き上げられていたと知っていれば、全力で逃げたのだが、まだまだ彼のことを理解し切れていなかった。

肌は痩せているよりは、多少の脂肪があつた方が綺麗なものだ。

「太りやすい体質で悪かったですね」

「だからセーラは太って何ていませんよ。今ぐらいが一番可愛いです。すべすべでぶにぶにで、小さな子供の肌みたいですよ」

聖良はため息をつく。

朝からなぜセクハラを受けなければならないのか。昨日からずっとそう思っている気がした。

「アデイス、本当に何もしていないのか」

「していませんよ。こうして抱きしめる以上のことはしていません。何かして嫌われたら立ち直れないじゃないですか」

「嫌われていないと思っっているのか。というか、なんで裸なんだ」

「嫌われていませんよ。いつも二人きりの時は、可愛いって言うてくれますから。」

あ、最近裸で寝てるんです」

それは竜の時限定だ。人間のアデイスは格好いいが可愛くはない。

「呆れてるような気がするけどな。ああ、朝食はどうする」

「いただきますよ」

聖良は毛布を身体に巻き付けた自分を見下ろし、これでは朝食に  
など行けないと顔を顰める。

「服を脱いだまま置いてきたから部屋に取りに行ってください」

「あ、メイドがセーラを起こしに行っていないから、服だけ洗  
濯しておくって言ってたぞ。裾が汚れてたから」

聖良はその言葉に固まった。

制服を洗われたら、着る服がない。

「服を買いに行っただろ。君は可愛いから何でも似合うだろうな」

「買ってませんよ」

「え……」

「他に一着もないですし」

「……………」

ハロイドはアデイスを睨み付けた。

「買えなかったんですよ。身体に合う服もなかなかないですし、上  
着類はオーダーメイドです。胸が入る服だと彼女にはちょっと大き  
いんですよ」

聖良はこくこくと頷いた。彼女がよく着ていたのは、ストレッチ  
素材の服ばかりだ。伸びない服はほとんど着たことがない。

「…………… ないのか、服」

「はい。大きくてもいいので、とりあえず着られる服を貸していた  
だけると有り難いのですが」

アデイスの服を借りるよりは、大きめの女性用の服を借りる方が  
いい。

「…………… じゃあ、クレアの衣装部屋の服を適当に着てくれ。ハー  
ネスの時からあるから、無駄にたくさん色々な衣装がある。日に日  
に増えてるし」

王妃の衣装部屋。気は引けるが、見てみたいという気持ちもある。  
クレアが着ていた服は仕事着のようで、真っ白なワンピースに凝っ  
た装飾が施されたものだった。彼女の服なら、着られる物もありそ  
うだ。袖は長そうだが、我が儘は言えない。

「ありがとうございます」

「アデイスに案内してもらうつといい。俺はそろそろクリアの所に行かないと叱られるから」

さらりと尻に敷かれていた発言をして、彼は部屋を出て行った。

どこの世界でもああいう男性はいるらしい。

通り過ぎる人が、ちらと聖良達を見る。それが何度か繰り返された。

城でもそうだったが、城の中は噂があるだろうから理解できる。しかし街に出ても続くと少しへこむ。

「やっぱり変なんですか？」

聖良は自分が選んで着た服を見下ろして呟いた。

男性が入ると怒られるからと、聖良一人で衣装部屋に入った。ドレスから、なぜか着ぐるみまで、種多様な衣服が置かれた部屋の中から、高そうでなくて可愛いものを見繕った。

聖良としてはそれらしくコーディネートしたつもりなのだ。

しかしファッションというのは、材料が揃っていても作りたい系統にするのが難しいように、よく知りもしない文化の衣装を目の前に、現地人になじめるような雰囲気、素人が作れるはずもない。

もっと分かりやすければともかく、聖良にはまだ特色が理解できていないのだ。それに可愛いからと、好きなように着た部分もある。

まあいいかと思って部屋から出て、アデイスが一目見て言ったのは「セーラは変わった取り合わせを好むんですね」

だった。

つまりは普通ではあまり選ばない物を選んで着ているのだ。

「変わった着こなし方ですが、レトロな感じで可愛いですよ」

古いデザインの服も混じっていたらしい。あれだけあるのだから、流行の品ばかりがあるとも限らない。

「やっぱりアデイスが選り直してくれたらよかったですよ」

「私的にはありますよ。おかしくはないですし、何より可愛いです。裾を出すのもいいものですね」

服の裾をスカートの中に入れる習慣がないため、聖良はつい『日本的』な服の着方をしてしまった。

薄手の服を何枚か重ねて着ているし、それらしい服を選んだだけではだめなのだと思います。

これなら昨日は町の人の服装をよく見ておけばよかったと後悔した。

聖良は自分に観察力がないことを知っている。歩いていると知り合いとすれ違っても気付かない事も多い。

「お城の中でもちらちら見られてましたし」

「それは聖良が珍しいからです。噂が広まっているはずですからね昨日よりは普通の格好ですし」

聖良はうつむいて歩く。

疎外感があった。

ここはいるべき場所ではない。何も分からず、何一つ出来ない。

「どうしたんですか？ 今朝のことまだ怒っているんですか」

「違います。ただのホームシックです」

そう、きっとこれはホームシックの一種だ。ネルフィアは恐いが、疎外感はない。

「元の世界の事を考えていたんですか」

「いえ、お母さんのところを」

「……………実家の方は」

「あそこに未練はありません。関係が断ち切られてせいせいしています」

「そんなに虐げられていたんですか……………。可哀相なセーラ。これからはうんと優しくしてあげますからね」

彼が言うと、あまりいい意味に聞こえなかった。

「べつに虐待されていたわけじゃないですよ。財産とられて下働き扱いされただけで」

「それを世間では虐げられてるって言うんだと思いますが、そちらでは言わないんですか？」

「親が聞き分けのない子を殴るのも虐待扱いされるんですが、暴力がないと虐待扱いされないのが現状です。嫌な世の中ですよ」

「よく分からないところですね」

「ええ。分からないところですよ」

あの国は実におかしな所だったと聖良は改めて思う。この国も国王からおかしいし、アデイスが変な組織の長だったり、墓地に抜け道があったりするが、異世界だと思えばそれほどでもない気がするのだ。

「ところで、今日はどうするんですか？」

「また昨日の店に行きますよ。あれだけ急がせたので、一着ぐらい形は出来ているでしょうから、本縫いする前に一度着てみないと」

「服ってそんな簡単にできるんですか？」

「新しいデザインをおこせて言っているわけじゃないですからね。なにしろあのクレアの我が儘に付き合っている方々ですよ」

「クレアさん、注文が多いんですか？」

「あれでもハロイド様にぞっこんなのはクレアの方なんですよ。彼女が着飾るのもすべてハロイド様のため。」

女性のそういうところは、どんなに年を取ろうといじらしく可愛いいものです」

少し意外な台詞だった。

彼なら少女を越えてしまえばどんなに美しい人のいじらしさも、鼻で笑って切り捨てるのかと思っていた。

アデイスにもそのようなまともな気持ちがあるのは、少し嬉しかった。

彼は小さな女の子が好きだけで、それ以外の人を否定するタイ



プではないらしい。

「じゃあ、私が恥をかかないようにアドバイスとかしてくれればいいのに」

「セーラは私のために着飾ってくれるんですか。だとしたら、とても嬉しいですね」

「なんでそうなるんですか」

誰かのために着飾ったことは一度もない。したいからするのだ。

「そういうところも可愛いんだから」

アデイスはついに聖良の反抗的な言葉にまで可愛いと言いだした。聖良だって子供の素直でない態度は可愛いと思う。それと同じ扱いを受けているのだと思うと、腹が立った。

彼に大人として扱われるようになる事は、この先あるのかすら怪しいものである。

「アデイスはそういう馬鹿な事を言う所がなければ、いい人なんですけどねえ」

「男が女性に愛を囁くのは当然のことですよ」

聖良はため息をついて肩を落とす。

昨日今日で理解したのだが、彼は小さな女の子には特別優しいが、大人の女性にも普通に優しい。カモフラージュなのか元幼女に対する敬意なのかは知らないが、フェミニストだ。

もちろん大人の女性を口説くとか、勘違いさせるようなことは一切しないが、聖良に対するような暴言は吐かない。そういう相手はクレア達だけだ。

ため息は尽きないので、考えることをやめた。

歩いているうちに目的の場所に到着する。店内に入ると、昨日の中年男性に出迎えられ、奥からお針子達の主任らしき女性が出てきた。

彼女は聖良を見ると、目を見開いて固まった。彼女のような人には、よい服を着崩されているのが耐えられないのだろうか。

「どうしました」

「いえ、何でもありませんわ。ところでセーラ様。斬新な着こなし方をされていますね」

聖良は視線をそらした。

元の世界での斬新を思い出して、少しげんなりした。

「セーラ様、よろしければこの店にある服で気に入った物があればお選び下さい。ボトムなら丈を直すだけですむかも知れませんし。お好きなようにコーディネートしてください」

聖良はしぶしぶと店の服を手にとってみる。

可愛い刺繍のついたカットソーがあるのだが、ラインが少しババくさい。

「これがキヤミだったらこれと合いそうで可愛いのに」  
少し変わった感じの白くて可愛いジャケットと見比べて言う。

この世界ではそういう組み合わせはないのだろう。

「きゃみ？」

「キヤミソールってありませんか？ 私が着ていた肌着みたいなの」  
「ああ、あの。この素材を下着にしたいのですか？」

「いえ、普通に服として着るんです。上着を羽織ったら可愛いなあって。」

この国では肩や胸元はあまり出さないんですか？」

「そうですね。昔は流行っていたけど、今は隠す方が主流です」  
流行の問題なのだ。

聖良の知る流行は、勝手に先の先まで作られたものであるが、この国はどうなのだろうか。

「あ、このスカート可愛い。もう少し丈が短かったらいいのに」  
「短くですか？ セーラ様でも十分はけると思いますが」

普通の人がいいたら膝下になりそうな丈のスカートだ。聖良でもひきずる事は無い。

「ミニスカートってないんですか？」

彼等の服装は中世よりは現代に近いため、あってもおかしくないと思ったのだ。

「これよりも短いスカートですか？　あまりございませんわ」

「そうですか。合わせるにはちよつと長いかなって」

「確かに　このデザインなら、短くても可愛らしいですね。そうするとキャミソールにも確かに……」

彼女はしげしげとスカートと聖良が選んだカットソーを見比べた。聖良は他にもいくつか自分で欲しいと思った物の目星をつける。

サイズ直しが出来る物と出来ない物があるが、聞いてみないと分からない。

「セーラも服が好きなんですね」

「嫌いな女の人なんていませんよ」

「プレゼントのしがいがあつて嬉しいですね。何でも欲しい物があつたら言つてください。

セーラのためなら、部屋を一面ぬいぐるみで埋めて見せましょう」  
「いや、せめて花とか」

「花は枯れますよ。ぬいぐるみはセーラが抱けばいつそう可愛いですし」

彼の頭の中には、小さな女の子へのプレゼントしかないようだ。

聖良の容姿がある限り、彼はこの扱いをやめないのだろう。

「セーラ、実際に服を合わせてみたらどうですか。スカートなら大丈夫でしょう」

「そうですね」

この丈でも可愛いので、スカートをはいてみたい。フリルがたくさん使われていて、とても高そうだが。機械化が進んでいないのなら、布がたくさん使われた服は高いはずである。レースも高いはずだ。数字と貨幣価値が分からないので、これが日本円換算だといくらほどのかさっぱり分らないが、安い物では無い。可愛いからと手をかけたが、王妃が来るような店で聖良の金銭感覚で買えるような物など置いてあるはずが無い。

「でも私には似合わなそうだし……」

「さあそうおっしゃらずに、セーラ様、さあさあこちらへどうぞ」

手を引かれ、聖良は再び昨日の部屋に案内された。  
客とはつまり、カモである。

### 3話 異世界の醍醐味 9

手直しできる服を手直しして貰い、借りた服よりは身体に合うようにしてもらった。もともと多少の伸縮性がある布なので苦しくない。手触りはいいし、不思議な繊維だ。

「今日も昨夜の所に行くんですか？」

彼のアジトに。

「行きませんよ。毎日行くのは危険です。あれでも秘密結社ですから」

彼は歩きながら腰を曲げ聖良の耳元へと囁き、再び背を伸ばす。

「そうなんですか」

では、安心して眠れる。

「今夜の夕食は子供達と食べましょうか」

「……はい」

大勢がいる所での食事は久しぶりだ。学校で机を集めて弁当を食べるのは、あまり好きでは無かった。しかし一人で食べると目立つ。城が近づき、聖良はアデイスの手を握った。城は聖良の知らないアデイスの知り合いが多いので、少し不安になる。何も分からない場所にいれば必死になるが、アデイスがいるという安心感があるからこそ、自分が知らない場所であることに気が向いてしまう。アデイスが子供達と話していれば、聖良は一人だ。

「ん……どうかしました？」

「何でも……」

何でもないではおかしい。そう思い、彼女は気になっていた事を尋ねた。

「昨日……あの男の人が言っていた女の子はどうなるんですか？」

「どうもしませんよ。セーラがいるのに新しい子をもらうわけがないでしょう。今の私にとっては、セーラが一番大切な女性なのでから」

「嘘くさい事を言わないでください。今までどれだけその顔に頼って生きてるんですか？」

誤魔化すために、聖良の意図と違う言葉を返してきたアデイスを睨み上げた。

彼は聖良が見ていなければ買っていった。聖良がへそを曲げたから彼は買わなかった。そして質問の答えにはなっていない。

聖良も最初からこの顔で、ロリコンである事を知らなければ、流される女になっていたかもしれない。しかし聖良は知っている。彼が実は年端もいかない少女が好きで、おしゃべりで、文句が多い、変態な駄目男である事を。

だから何を言われてものぼせ上がる事は無い。

「可愛い顔してさらっと言いますねえ。まあ、セーラのそういう所も気に入っていますよ。馬鹿な子も可愛いですが、私は小聡い子も好きです」

彼はそこまで言うところとよそを見て、誰かに話しかけて手を振った。知り合いらしき人が離れると、彼は再び言う。

「私が買わなければどうなるかは分かりませんよ。娼館に売られるのが妥当でしょうね」

「小さな子を？」

「私の所には、売りに出せないほど小さな子は来ませんよ。小さな子は、将来使い物になるかどうかで判断しますから、ああいった魔術の使えない商人から買う事はほぼありません。箱庭は魔術結社なんです」

聖良は話がずれていくのを感じて、こめかみを押さえた。

「じゃあ、その子は娼婦になるんですか？」

「さあ。運が良ければ金持ちの愛人。最悪の場合は剥製にされるか、生きたまま食われるか」

聖良は足を止めて固まった。

アデイスの言葉を反芻する。

「……………人食文化があるんですか？」

「あるわけが無いでしょう。」

ただ、いるらしいんですよ。どうしようもないのが、何人か。

若い娘を人形にしてしまう究極の変態や、若くて美しい娘の胆を食らう鬼婆とか」

「え……ちよ、ど、どうしましょう!？」

アデイスには買って欲しくなかったが、そんな狂気の世界に罪の無い少女を放り込みたかったわけでは無い。

「だから、最悪の場合ですよ。」

女の子にとって一番条件のいい客がうちだったのは間違いありませんが、私が断ったからといって、いきなり最悪の所には行きませんよ。セーラが気に病む事はありません」

「……そんなのが野放しになってるんですか？ 犯罪じゃ無いんですか？」

「犯罪ですが、裏の世界の事ですからね。うちは裏とは言っても研究的な意味での裏ですから、根っからの犯罪者の事はよく分かりません」

根っからの犯罪者で無くとも、赤の他人を餌にするような事をしてしまうのだから、聖良の目から見ると大差は無い。

「でも、アデイスのどこが一番いい条件なんですか？ 最悪ではないみたいですけど」

少なくとも殺される事はないという意味で。

「そりゃあ、無理強いもしなければ、傷を付けたりもせず、教育までしてもらえます。」

それに主はハンサムな方がいいに決まってるじゃないですか」

「まあ、そりゃあそうですね」

好色ジジイなどに比べれば、アデイスの方がはるかにマシである。もしこれが、本人の口から出ている言葉でなければ、もっと納得できただろう。

「無理強いなんてしたことはないですし、嫌がったら絶対に何もしませんし、用無しになったからとまた売られる事もないですし、大

きくなつても使えるように育てますからね」

「……昨日の、あの女の子達もですか？」

「ロゼとシファですか」

「名前は知りませんが、愛人の二人」

子供なのに、どうすれば世の中を上手く渡っていけるのか知って  
いそうな、あの二人の少女の事だ。

「その可愛い口から、そんな言葉を発しないでください」

「事実ですらでしょう。自分の幻想を押しつけないで下さい」

彼は後ろ頭をかいてため息をつく。

「これ以上は、今夜も私の部屋で寝るんだつたら、その時にゆつくりお話ししましょうか。発言する度に腰を曲げているのも疲れます。セーラは暗いところに一人でいるのが苦手なんでしょう。初めから言えば一緒に寝たのに水くさい」

「……そうですね」

話す時間はいくらでもある。二人にはどれだけでも時間がある。嫌でも一緒にいなければならぬ。当面は聖良がいないと彼は困り、聖良はずっと彼がいないと困りそうだ。

しかし聖良は、アデイスがいなければ、何が出来るわけでも無い。悪いのはアデイスだが、そうだとしても良くしてもらっているのは事実だ。

「どうしたんですか？ いつもなら、小さくて悪かったですね、って食ってかかる所なのに」

「っ……なんでもありません」

聖良は拳を握り締めた。

「何でもないのに、そんな風に力を入れたりしないでしょ」

「そんなに不愉快でしたか？」

「いいえ。個人的なことです。アデイスの趣味にとやかく言うつもりはありませんし」

これは個人的な悩みだ。

誰かに依存などしたくないが、今はどうしようもない。特技もな



ければ、賢さもない。アデイスに文句を言う事しか出来ていない。

自分が何も出来ない駄目人間である事に呆れ、ため息が出る。

もつ少し自立できるように、何か特技を見つけようと心に決めた。それにはまず己を知ることが大切だ。

「アデイス、帰ったら距離を測りませんか？」

「距離？」

「ほら、離れると魔力が届かなくなんでしょう？ だったら一定距離ごとに試しておいた方がいいかなって。お互いのスペックを知らない、いざという時に使えませんか？」

アデイスにとっては役に立つ知識のはずだ。

「それもそうですねえ。でも、あの森で距離を置くと危険ですよ」

「あ……うーん……崖の高さを計れば距離は計算できると思いますけど」

巢のある場所でも、そこその高さがあればそれなりに安全だ。

「計算？」

「……えと」

アデイスが魔術馬鹿なのか、数学は特殊な分野なのか、そもそも聖良が習ってきた数式は存在するのか。

「個人的に気になるんですけど、経緯儀とかってあるんですか？」

「けい……？」

「三角測量とかしますか」

「測量はしたことがないからよく分かりません。セーラはそんな事をしていたんですか？」

「いや、無いですけど常識として」

「常識なんですか？」

「………なんでこんな知識があるんだろうとは思いますが。すつごく長いヒモとか縄とかでいいです」

五十か百メートル置きぐらいに計った方がいいから、長いヒモを使う方が効率がいい。

少しだけ疑問に思ったただけだ。この世界の水準を知らなければ、  
いらぬ恥をかくことになる。

少なくともアデイスのようなタイプが分からないのであれば、測  
量技術やそれに必要な数学の知識がこの世界に有る無しは置いてお  
くとしても、それが常識でない事が分かっただけ収穫である。

「帰ったら、色々と聞いていいですか？ 私の常識非常識と、こち  
らの常識非常識を知らないと生活に差し障りがありますから」

ネルフィアの庇護の下に一生あそこで過ごすなら別だが、竜と言  
えどもいつかは親元を離れる。それから考えているのでは遅い。

「セーラは熱心ですねえ」

「恥をかくのはいやですし、何かしないと不安ですよ」

一芸を身につける前に、まずは常識を身につける必要がある。ア  
デイスの言葉を信じるのなら、聖良は常識外れに長生きする事にな  
る。いつまでもアデイスの世話になれるかは分からない。もしもの  
ためにも、一人で生きていける自信が欲しかった。それが身に付く  
程度の時間は一緒にいるだろう。

こうして学ぶ機会があるのは運がいい。誰かに売られないのも運  
がいい。

何も知らずに一人でこんな所にいたら、きっと何も出来ずに暗が  
りで立ちつくしていただろうから。

書かれた数字を見て、聖良は懸命に頭を働かせる。

十進法なので数字を覚えるだけでいい。文字を覚えるのは大変だ  
が、数字と単位だけに絞れば簡単だ。

「セーラちゃん、数字も読めないと不便だろ」

「もう覚えたから不便じゃないですよ」

理解するには時間が掛かるだろうが、あとは物価を把握すれば騙されることもない。

聖良が持参した鞆からメモ帳を取り出し数字と単位を書き写す。書き慣れていないので下手だが、とりあえず大切なのは覚えて慣れることだ。

アデイスがいるからか、聖良が珍しいだけか、子供達がわらわらと集まってきているのでかなり緊張する。

「その変なペンなあに？ 可愛い」

「シャープペンのこと？ この細い芯をこうやって押し出して書くんです」

可愛いと言ったのは、上についているキャラクタのことだ。アルバイトをしていた新聞屋の奥さんが、保険に入ったら貰ったらしい仕事に使うには可愛すぎるので、日頃から金銭的に苦労していた聖良にくれたのだ。

「どうなってるんだそれ？」

聖良はシャープペンを可能な限りバラして見せてやる。バラしたところで分からないだろうが、好奇心は満足するだろう。

「エリオットにーちゃんも見てみなよ」

部屋の隅の方で静かに本を読んでいた少年が、子供に呼ばれてびくりと震えた。アデイスとは違い物静かな、常にうつむいているため暗い雰囲気、度のきつそうな眼鏡が印象的な少年だ。彼は目を合わせないように視線をそらしながら聖良のボールペンを手にした。しばらく観察してから自分の手に円を描く。

「何これ」

「ボールペンです。先端にボールがついていて、それが回転してインクを紙につけるんですよ」

「これインク？」

彼は振ってもびくともしないインクを見て呟く。

「粘度が高いインクです」

「ふうん。こんなの売ってるんだ。どこの国の言葉だろう」

側面に書かれた日本語を見て彼は目を細めた。

この国の主流は万年筆のような物で、羽ペンをインクにつけるなどという不便極まりないことはしていないらしい。あれとは原理が違うので珍しいのだろう。

「こちらの押し出しのペンも面白い。この黒いのはなんだろう」

「確か黒鉛です。鉛筆とかはないんですか？ 作り方は違いますけど、あれと似たようなものです」

「君の鉛筆見せて」

「はい」

聖良の筆袋の中に、一本だけ鉛筆が混じっている。美術などで絵を描くときは、鉛筆の方が便利だ。

「芯がとれない……どうやって出すの？」

「木ごと削るんですよ」

「使い捨てなのか。書きやすい。いいな」

彼は喜んで鉛筆を見つめた。他の子よりも大きいのに、その様子がずいぶん可愛くて、思わず顔を覗き込むと、彼は後ずさって顔を背ける。

照れているのなら可愛いのだが、どちらかということ本気で嫌がっていた。

「セーラちゃんごめんな。エリオットにーちゃん対人恐怖症気味だから、人と目を合わせるとパニックになるんだ」

暗いどころか対人恐怖症だった。

その割には人の多い場所で生活している。つまりは軽度ということだろう。目を合わせなければいいのだ。

「エリオット、それはセーラにとって大切な物です。欲しがるのではなく、自分で作りなさい」

「分かった」

アデイスにクギを刺されると、エリオットはちらと聖良を見て、再びうつむいた。作るにしても参考にする物が欲しいのだろう。

簡単に複製ができるとは思わないが、大切な物でもない。それに

彼が持っているのは鉛筆だ。シャープペンならともかく、すぐになくなる物なのでケチケチしていても仕方がない。

「一本しかないですけど、よければどうぞ」

「……………ありがとう」

彼は鉛筆で机に試し書きをした。突き詰めていけばあのような形になるのではないらしい。

「書きやすいし、綺麗に書ける。」

その紙はずいぶんと薄いんだね。それに手提げも変わっている」

「……………見たければどうぞ」

許可を出すと、エリオットは鞆を手にして、決して視線は合わせずに少し離れて中身を見る。

「入ってるのは教科書ばかりですけど」

「学生だったんだ。読めないけど何の本？」

「それは数学です」

「他所の国なら、やっぱり魔術はないよね」

「ありません」

エリオットは残念そうにため息をつく。しかし教科書は持ったままで、ぺらぺらとページをめくる。

「そういえばセーラはどんな事を学んでいたんですか？ 女性なのに数学なんて珍しい」

アデイスに尋ねられ、聖良は首をひねった。

「誰でも知ってなきゃいけない基礎的なものですよ」

「測量とか習うんでしょう。基礎的なことなんですか？」

「測量の方法は習いませんよ。ただその考え方の元となる事は勉強します。でもつまらないですよね。それが何の役に立つか教えてくれないんです。で、必要になったときにああこれはここで使うのかって気付いて、その時には忘れててまた勉強をし直すんです」

だから意味がない。どんな時に使うのか知らないし、使い道が分からないのに教えられるのだ。

「測量って……………どんな風に？」

「いえ、私にできそうなのはただ三角形を使ってやる単純なのですよ。正確に角度とか測れば基底の長さだけで距離が出ますから」

なぜか社会科の先生が教えてくれた知識だ。それでようやく数学で習う知識の意味を知った。それまでは考えたこともなかった。考えてみればわかりそうなものだが、考える事すらしていなかったのだ。聖良はテストの点数さえ取ればよかったからだ。

「そんな事を習っていたんだ。アデイス兄さん、どこからこんな子連れてきたの」

「誘拐してきたみたいに言わないでください。強いて言えば私並についていない女性です」

「……………兄さん並み。小さいのにそんな苦勞を……………」

「アデイス達の一つ下ですよ。つまり、エリオットよりも年上の女性です」

アデイスはにやりと笑って言う。

「……………冗談でしょう」

「本当ですよ。人よりも成長が早く止まってしまったんです。いい年の女性なのに、お人形さんみたいで可愛らしいでしょう」

心の底から悪気のない微笑みを向けられ、聖良は反論するのにもむなしくなりため息をついた。エリオットは聖良を横目で見ていたが、たまらなくなつて彼へと顔を向けると視線は外された。

「ここには住まないの？」

エリオットは視線を逸らしたまま言う。

「彼女のお母さんは心配性でね。私も数年は彼女の実家に居なきゃならないから、次に遊びに来るのはしばらく先です」

「兄さんまた行くの？ どうして？」

子供達には説明した事だが、彼は参加していなかった。聖良が居たからか、人がたくさんいたからか。

「ちよつと身体に問題が発生しまして、彼女の母君の所にいなきやいけないんですよ。自然以外何もありませんが、命は惜しいので」

「何があつたの？」

「まあ、色々。詳しくは話せないんですが、こうしてここにも帰れますし、不自由はしていません」

「……兄さん、さすがに今回は色々とすませられる内容じゃないと思うけど」

「いいじゃないですか。国内にはいますから。それとも一緒に来てみたいですか？」

「い、行かない」

やはり外に出るのは怖いのだろう。世間一般で言う引きこもりという奴だ。幸いにもここが住居兼職場らしく、二トというものはなっていない。

「明後日まではいますし、来週にはまた来ますよ」

「この子と一緒に？」

「ええ」

「ふうん」

そう言つて、彼は聖良の鞆を持って近くの席に着く。近すぎず離れすぎない微妙な距離。電卓など気になることがあると近寄つてきて、説明を聞くとまた離れて。それを繰り返す内に日が暮れた。

大勢での食事は、苦痛では無かった。

#### 4話 竜の里 1

羽ばたきの音が聞こえ、聖良はアデイスと置いていたカードを置いて洞窟の外へと走り出した。

家長を迎え出るのは居候の身としては当然だ。

しかし見上げてから、いつもと違う気がして後ずさる。

竜であるのは間違いない。しかしシルエットが少し違う。ネルフィアよりも少し小柄だし、角の生え方も少し横に広がっている。逆光で分かるのはそれだけだが、それだけ分かれば逃げ帰るには十分だった。

「あ、あでい」

後からゆつたりとした足取りでついてきたアデイスへと飛びつき、声にならぬ声をあげて外を指さす。

「どうし……誰です？」

アデイスは巢の前にとまった姿を見て顔をしかめる。

「人間？」

それは聖良達を見て呟いた。

「ち、違いますっ」

聖良はアデイスの背に隠れ、アデイスは呪文を唱えて元の姿に戻る。

竜の姿をしたアデイスの背に触れながら、そつと顔を出してその知らない竜を見る。

「人化の術!？」

竜はネルフィアとは違って静かに洞窟内に入ってくる。

「生まれたばかりの子供に出来る術じゃないぞ。あいつ、一体何を食べさせたんだ……」

自分よりも弱い竜を捕まえて食べさせた、というような可能性でも思い浮かべたような様子だ。



ネルファイアよりもスマートで、白っぽい皮膚の竜だった。アデイスの色と似ている。シルエットや顔立ちもネルファイアよりは、はるかに似ている。並べば親子にしか見えないだろう。

「……ひよつとして、アデイスのお父さん？」

「さあ。ここを誰かが訪ねてきたのは初めてで……」

聖良はじつとその竜を見つめる。襲つて来ないので怖くなくなると、とても格好いいと思えてきた。アデイスは身体が大きくなって、なんとなく幼い雰囲気だ。しかし彼はいかにも大人の竜といった雰囲気がある。ネルファイアのような精悍な顔立ちではなく、気品すら感じる格好良さである。

アデイスも大人になったらああなるのだろうか、将来が少し楽しみになった。

「どちら様ですか？ 母は外出中ですが」

「僕のことは聞いていないのか？」

「はい」

彼は落ち込んだ様子でうつむいた。ネルファイアの口からアデイスの父親のことはあまり聞かない。数少ない情報は、頭と顔がいいから選んだという事だけだ。

「違つたら失礼ですが、ひよつとして私の父なんですか？」

竜はこくりと頷く。

「格好いいお父さんですね」

「お母さんが頭と顔で選んだって言うぐらいですからね」

「顔も重要ですもんね。アデイスも大きくなつたらあんな風に格好良くなつてくださいね」

人間にしても動物にしても美形であるに越したことはない。

その竜はじつと二人を見つめて、ため息をついた。

「坊や、名前は決まったのかい？」

「アデイスです。お父さんは？」

「ラゼスだ。あともう二つほど聞きたいんだが、何を食べたんだい？」

「私の知識の元になっている者という意味でしたら、この国で一番優秀だと噂の人間の魔術師を」

「その人間は？ まだ子供のようだけど」

「私が血を与えた人間です。お母さんがさらってきて死にかけていたので助けました」

「あともう一つ聞きたいんだけど、どうやって人間の姿に？」

「こちらのセーラに術をかけてもらうんです。お母さんのことだから、賢い餌をたくさん食べさせようと思ったんだと思います」

ラゼスはうづくまって尻尾を抱える。その様子は可愛らしいが、彼の今までの苦悩が窺い知れた。ネルフィアには振り回されてきたのだと、この様子だけで分かる。

「お父…さん？ どうかしました？」

アデイスは父の様子を見て、不安げに問う。

「いや、すまない。本当はもっと早くに来て君を取り上げようと思っただけけど、長老達に止められてね」

迎えに来ようとして止められる。

ネルフィアは、竜の中でも変わり者の部類に入るのが確定した。

アデイスが振り返り聖良を少しのあいだ見つめてから、再び前を見る。彼にも色々と不安があるのだ。竜というものをネルフィアし  
か知らなかったから、かなり戸惑っている。

「大変だっただろう」

「ちよつと大変でしたけど、私はお母さんとの生活に満足していますよ」

「本気で言っているのか？」

ラゼスはアデイスにずっと顔を寄せた。

「……お父さんがお母さんをどんな風に見ているかは知りませんが、悪くはない生活ですよ。」

こうして人間の女の子が普通に生きていますし」

聖良はこくこくと頷く。

食事も出来るし、腹の弱い日本人が飲んでも下さないような綺麗

な水もある、寝床もある、と住めない場所ではない。

「そんな馬鹿な。あのネルフィが……」

「そんな風に思ってるのに今まで放置してたんですか」

ひどい話だ。アデイスは皆から見捨てられていたということになる。

「で、ようやくその長老達とやらを説得をしてここまで来たんですか？」

「いや、もうすぐネルフィの祖母の百周年だから、さすがに彼女も来てくれるだろうと思ってね」

竜というのは気が長いにもほどがある生物のようだ。百年したら墓参りも忘れてしまうそうなのに、彼らは覚えているらしい。

彼等の時間感覚については、恐ろしいので深くは考えないことにする。

「待たせてもらってもいいかな」

「何もないところですがどうぞ」

「本当に何も無いね、相変わらず」

竜でも家具を置くのだろうかと聖良は困惑した。

服は着ないため、ベッドが考えられる。ネルフィアは巢に使っているような、藁や布を敷き詰めただけのところに寝ているのだが、これよりも文明的な寝床があるのだろう。

「このベッドだって僕が整えたんだよネルフィは盗んでくるだけだし」

「そうなんですか。その節はお世話になりました。おかげで快適に過ごしています」

アデイスが父親似向かって頭を下げた。

これがなかったら、厳しい毎日だったはずだ。地面で寝たら腰は痛めるし寒いし最悪だった。

「……………ちゃんともな人間を選べたんだ」

礼を言うアデイスを見て呟くラゼス。

ネルフィアの見えない目がないと言うなら、彼を選んだことも見る目

がないということになるが、本人は自分をどう評価しているのから  
からない。

彼は日陰になる場所まで来ると、身を震わせてアデイスよりも一  
回り大きいほどのサイズになる。アデイスが大きくなれるのだから、  
彼が小さくなるのも不思議ではない。

「お茶を出したいんですけど、買ってこくるのを忘れてしまいました」  
「買ってこくるって……人間の姿で？」

「はい。人間の記憶が強いから、無いと不便に感じる物が多かった  
ので買い物に行きました。それに女の子は必要な物がいっぱいあり  
ますし」

たくさん買った。化粧水や色々使える軟膏、可愛い匂い袋に香水  
に石けんに洗髪剤に、月に一度必要なあれにと、色々だ。聖良には  
当たり前の物も、この世界では高価なので、かなりの贅沢である。

ただ、下着はあまり好みではなかった。カボチャパンツに近い物  
で、フィット感がなくて少し心許ない。もちろんない物はしょうが  
ないので贅沢は言えない。

「どんな人間を喰わせたら、生後三ヶ月でこんなにしっかりするん  
だ……」

「人間の知識があれば、普通こうじゃないんですか？」

アデイスはこくりと首をかしげた。その仕草が人間の時と違って  
可愛い。

「そもそも人間を食べようとも、そこまでしっかりする子供なんて  
初めて見たよ。」

普通はすべて身につけられる物じゃないし、混乱してなかなか使  
いこなせないんだ。大きくなるにつれて奥の方に眠っていた知識が  
少しずつ出てくる事はあっても、すぐに使いこなせたりはしない」

それはアデイスの中身は完全に人間であるという証拠になるだろ  
う。今までは少しだけ、彼は自分というものに不安を感じている様  
子もあつたが、それが解決した。

おめでとうと心の中で祝ってやる。

「セーラの影響ですかねえ。頭のいい人とお話しするのは、刺激が大きいですから」

ネルフィアには聖良はすぐ頭のいい人間だということを通じている。この世界のことをほとんど知らないというのに、皮肉な話だ。ラゼスはじつと聖良を見つめて、アデイスに似たしぐさで尻尾を丸めて首をかしげる。

「人間だから十歳くらいだよな」

「十八です」

「いやいや。竜だからって、人間の年齢ぐらい分かるさ。僕はけっこう人里に行くしね」

「冗談ではなく十八歳です」

「……魔女？」

「普通に十八歳です」

「大人をからかつちゃダメだよ」

聖良は悲しくて、巢に隠れて背を丸めて泣いた。

竜にすら信じてもらえない。たかが数年のことなのに、信じてもらえない。

「え、泣いてるの？ どうして？」

「本当に十八歳らしいんですよ。異国の人だから、人種的にこの大陸の人間よりも平均身長が低くて、その中でも下の方らしいので子供のように見えますが」

「でも泣く事ないじゃないか」

「大人扱いされた事がないからじゃないですか？ セーラ、そんなところで落ち込んでないで戻って来てください。大人気ないですよ」

聖良は白い布で涙を拭い、それをそのまま抱えて彼らの元へ行く。床に敷いてその上に座ると少しだけマシだと思える。

正座をして二人を見上げると、小さいと言ってもやはり竜だから大きい。

「本当に人間がこんなところで生活して不自由はないの？」

「不自由は自分でどうにか出来ますから」

「わざわざこんな場所に住む必要はないんだよ。血でつながっていたら一緒にいたいと思うらしいけど、この子が独り立ち出来るようになるまで人として里で暮らせばいいんじゃないか」

それも考えなくてもないのだが、生活力も常識もない聖良がそんなことをして、生きていけるかどうか分からない。養ってもらっても、ボロを出さない自信はない。

「この国には知り合いもいないので」

「親御さんは？」

「事故で」

「事故……ネルフィに殺されたわけじゃないんだね。よかった」

聖良はそれを想像して、ある意味自然災害的な被害だなど思えた。「この国にも、悪い人に無理矢理連れてこられて、帰り方も分からないので。おか……ネルフィアさんはとても親切にしてくれますし」

「あの女が、親切？」

彼は少しも信じていない様子で言う。

「いや……あなたの中で彼女はどんな扱いなんですか」

「通り過ぎるのをただ待つしかない天災」

同じ種族のはずなのに、人間視点と同じ印象というのは一体何なのだろうか。

「あの……お父さんは、どうしてお母さんとつがいになったんです？」

アデイスは恐る恐る問う。結婚と言わないのは、二人の雰囲気夫婦に見えなかったからだろう。

「なりたくてなったわけじゃ……ここにだって無理矢理連れ込……」

「いや、何でもないよ。気にしないでくれ」

「……………え、それって逆し」

聖良は何か言おうとしたアデイスの足をぱしりと叩いて立ち上がる。

「じつー！」

聖良はアデイスを引っ張って巢の裏側に回り込み、二人で布をか

ぶって顔をつきあわせる。

「そういうときはきょとんとしてナニソレーな顔をしてるのが子心つてものですよ」

「そういうものですか？」

「そういうものでしょう。いかにも華奢な人ですよ。さすがにそういうことは、子供に知られたくないでしょう。」

生まれたばかりの子供だっていう油断があるからぼろっと言っちゃったんですよ。」

この場合は、子供らしくしてた方がいいですよ」

「でもなんというか……男として情けないというか……」

「お母さん相手じゃどうにもならないでしょ。アデイスは抵抗できるんですか？」

「……………それもそうですね」

聖良達は元の位置に戻ると、同じ位置に腰を下ろす。座布団代わりになっている布だが、さすがに折りたたんで使っても冷たいし固い。今度は平たいクッションを買って貰おうと思った。

ラゼスに胡乱げな視線を向けられながら、二人は誤魔化す笑顔を向ける。

それからいかにも子供らしい旺盛な好奇心を発揮したアデイスの、可愛らしい質問攻めにあい、ラゼスはほんの少し嬉しそうだった。

どんな経緯があったとしても、自分の子供というのは可愛いらしい。アデイスは可愛い息子を演じる義務がある。

そんな事していると、羽ばたく音が聞こえて聖良は外へと走る。今度こそ間違いなくネルフィアで、いつものように獲物を捕らえていた。

「お母さんっ、ラゼスさんが来てます」

「ラゼス……ああ、あいつかい。何の用で」

「何の用でって、自分の息子を見に来たとか理由はいっぱいありますよ」

「せっかく賢くて男らしい子に育ちつつあるのに、弱々しいのが移

「つても困るんだよ」

だから遠ざけられているらしい。利用するだけ利用して、用がなくなる」といっているのは、さすがに彼が可哀相だ。

「お母さん。親の不仲は子供の成長に悪影響を及ぼしますよ。アデイスがグレちゃうかもしれません。」

両親は仲良く、明るい家庭が理想です」

「そうなのかい？」

「そうです。父親とは尊敬できる人でないとダメです」

「そうかい。でもあれじゃあちよつと難しいねえ……」

確かにネルフィアとラゼスの相性はあまりよくなさそうだ。

しかし子供可愛いという共通点はある。

「お父さん、どうしたんですか」

突然アデイスが、ラゼスの背をさすりながら心配して問うた。

「いや、ネルフィアの声を聞いたら胃が」

ラゼスは絶望的にネルフィアと相性が悪いらしい。



## 4話 竜の里 2

竜の集落にたどり着くと、聖良は想像と違う様子に驚いた。

皆が小さいのだ。ネルフィアのように大きな姿をしている者がいない。常識的に考えて、大きな姿では生活しにくいだろうから、自然とそうなっていった事は分かるのだが、やはり意外だった。

聖良と人間の姿をしたアデイスは、ネルフィアの背から降りて、集まる竜達を見回した。皆は心なしか脅えている気がする。

「ら、ラゼス、お帰り。息子さんは？ それだれ？」

内の一人が周囲を見回し、子供の竜が見あたらないので尋ねてくる。脅えていても仲間であるため、物陰に隠れてちらちらこちらを見ているということではなく、かなり緊張しながらラゼスの方に話しかける。

ネルフィアとは視線を合わせない事から、脅えられているのは間違いないようだ。

アデイスは背負っていたザックを聖良に手渡し、マントに隠れて服を脱ぐと、聖良が呪文を唱えて元の姿に戻る。元に戻るなら自力で出来るのだが、さすがにそれを皆の前で見せるのはよくないという事で全て聖良がすることにした。服は脱ぎやすく着やすいものを選んできている。

聖良は頭蓋骨をザックの中に入れる。街に行ったときにコーティングして竜が踏んでも割れないほどの強度になっているらしいので、思う存分乱暴に扱える。

アデイスが人の姿になったのは、ネルフィアに長い時間乗っていると、途中で聖良の力が尽きて落ちるといけないからだ。竜の姿ではうっかり聖良を傷つけてしまう。

「人間に化けさせられてたのか」

「あれ？ あれって他人にかけられるの？」

「っというか、もう一人誰？」

離れたところで話し合う竜達を横目に、ラゼスに案内されてたくさんある石造りの家の一つに向かう。そう、家があるのだ。なんでもそういうのが得意な種族の者に作ってもらい、おかえしに外敵から守っているらしい。

竜というのは人間が思っているほど凶悪な種族ではない。凶悪と思われるのは、人間の中にもよくいる凶悪なタイプが力に任せて暴れ回る事が稀にあるからだ。

つまり、ネルフィアのようなタイプが一人で竜の評判を落とすのである。

「セーラ、悪いんだけどここで待つてくれるかな」

「え……」

ラゼスに止められ、聖良は周囲を見回す。竜がこちらを見ている。ここに連れてきて貰ったのは、人間が一人であんな所にいると危ないからという理由だったはずだが、知らない竜ばかりというのは危なくないのだろうか。

「ネルフィアみたいのはいないから、襲われたりはしない。安心して」

「……はあ」

人間も知り合いが家畜を家の前に置いておいたって、いきなり取って食べてしまう者はそういない。

聖良は緊張しながら家の中に入る皆へと手を振り、玄関の横の壁にもたれ掛かって待つことにした。

そっとしておいて欲しいと思っていたのだが、ネルフィアの姿がなくなった瞬間、彼らは群がってきた。

「ひっ」

アデイス一人なら可愛いと思う。

ラゼス一人なら格好いいと思う。

しかし群れで来られると、竜を見て始めに感じた恐怖が蘇る。

「お前、ひよっとして人間か？」

「は、はい」

「なんでこんな所にいるんだ」

「さあ、なんででしょうね」

「よくネルファイアに食われなかったな」

「とりあえず今は食べようとしません」

「さっきあのチビちゃんに変な術をかけていたのはあなたよね。どうやったの？」

「襲われはしないが、怖いものは怖い。しかし皆、意外と好奇心旺盛だ。目をつぶると人間とそれほど変わらない。」

「頭蓋骨を使ってその骨の生前の姿に化けるんです」

「何にでも化けられるのか？」

「変な物に化けると元に戻れなくなるので、人間並みに舌が回る生物なら」

「すげえ。人間ってやっぱり器用だなあ」

人間の数少ない美点の一つだ。竜達に比べれば、小さな子供でも器用になるだろう。

竜についてはまだあまりよく分からないのだが、今聖良を囲んでいる彼らは全体的に丸っこく、まだ若い竜に見えた。もっと大人の竜は、遠くの方で子供達の様子を見守っている。

子供達は珍しい動物を見つけた気分なのだろう。

「なあなあ、さっきの俺にもやって。俺も人間に化けてみたい」

「ダメですよ。アデイスがいいと言わないと」

「ケチ。じゃああいつがいろいろ言ったらいいんだな？」

「まあ、いろいろ言ったら？」

「よしっ！」

子供達は顔を見合わせ、ガッツポーズのような仕草をした。

聖良はやはり拒否しようと思った瞬間、子供達は蜘蛛の子を散らすように、一斉に去っていった。

「え、ちよっ!？」

止める間もなかった。

何を持ってくる気なのか、少しだけ不安になった。

子供達が一斉に同じ事を考えて行動する。行動原理は人間も竜も一緒のはずだ。子供らしい発想。

問題は頭蓋骨だ。子供が変身してみたい頭蓋骨。

「まさか……今から狩りに……はないか」

子供では街まで行けないだろう。だからアデイスもネルフィアの背に乗ったのだ。竜の子供といえば人間に狙われることぐらい、親なら教えているだろうから、誰かが止める。

考えられるのは、何か身近な頭蓋骨。

何かを殺してくるのでなければいいのだが、行ってしまったし、大人達がのんびりしているのできつと問題ないだろう。

「うう……きつと大丈夫」

「何が大丈夫なんですか？」

横を見ると、アデイスがドアから身体半分を外に出して立っていた。

「あれ、お話しは？」

「子供には退屈な話なので、ご挨拶だけして逃げてきました」

「……別にいいんですけどね」

子供の振りをしたいならすればいいし、一人では少し不安だったところだ。

「近くに綺麗な湖があるそうです。見たいですか？」

「えと……見てみたいです」

どうせ退屈なのだ。子供達に何をさせられるかも分かったものではないし、観光も悪くない。

「じゃあ行きましょう。歩いていくと大変ですから、背中に乗ってください」

聖良はアデイスの背にヒモを付けてから、ぎゅっとしがみつく。

竜の背に乗って空を飛ぶのは、初めのうちは恐かったが、今では一番の楽しみになっている。

ネルフィアの広い背中からはよく見えなかったが、アデイスの

背中の上からだ、この場所がよく見える。空気が乾燥しているのか、いつも以上に唇が乾き、まだ秋の入り口のこの季節にコートを着ていても寒いほどだが、日差しそのものは暖かく癒される。

湖とやらは、日の光を浴びて輝き、巢の近くにある湖とは違うその姿に聖良は魅入った。

旅行などほとんど行ったことはないし、世界の旅番組も見ていると空しくなるからほとんど見たことがないので、元の世界なら何とか自然公園とかに指定されていそうな景観だという発想しか出て来ないが、それほど美しい景色だった。自然の美しさに、言葉で表現できるような際立った物は必要ない。ただ自然豊かで、水が綺麗で、湖面が輝いている。それだけで見入ってしまうには十分だった。

それでも、例える場所が分からないほど、自分の世界のことほとんど知らずに過ごしていた事に、少しだけ後悔した。

湖の傍らに降り立つと、聖良は何をするでもなく景色を眺めた。

「せえらっ」

アデイスがちよこんと座って聖良を見つめてくる。

「セーラあ」

「人が景色を堪能しているのに邪魔しないでください」

感傷に浸っていたのに、空気の読めない男だ。

「景色なんて見てもつまらないじゃないですか」

「つまらないと思うところに連れてきたんですか」

「だって竜ばかりの中にいるのは嫌じゃないですか。本当は部外者なのに」

「……………それもそうですけど、もう少しなんて言うか……………」

聖良はため息をついてしゃがみ込む。アデイスを風よけにすれば、日向ぼっこしているのは気持ちがいい。

「退屈ですう」

「ちよ、のしかからなくてくださいっ！ 貴方、中身は大人なんですから！」

「私はゼロ歳児でいいですから、座ってないで遊びましょうよお。」

探険ごっこか」

しがみつかれて、聖良は近いその顔を押し離そうと、身をねじって腕を突き出したとき、太陽の光が遮られその向こうに輝くものが見えた。

次の瞬間、バチバチと、ものすごい音とともに火花が発生した。散るなどという生やさしいものではなく、今すぐに逃げなければと生存本能に訴えるほどの光と音である。

「なっ、なっ」

聖良が腰を抜かしていると、アデイスが彼女を抱え上げてその場から翼を使い飛び退る。

高鳴る胸を押さえて顔を上げると、人間の女の人が首をかしげて手に持つ剣を見つめていた。手入れのされていない長い髪と、簡単に確認できるだけで二本の剣と三本のナイフを帯び、薄汚れた白い外套を羽織った、二十歳前後の女性だ。

「なんでこんなところに女の人が!？」

「竜でも狩って一攫千金狙ってるんでしょ」

アデイスは聖良を後ろ手に隠すようにして立ち、目配せしてきた。聖良は頭蓋骨を取り出してアデイスの後頭部にそれを押しつけて小さく呪文を唱える。

「今の結界。竜、こんなもの使わないのに、なぜ？」

彼女はこくと首をかしげた。その姿だけ見ていると普通の綺麗な女の人なのだが、竜を狩りに来たのだと思うと恐くなる。

竜を狩る自信がある実力者だということなのだから。

「まあいい」

彼女は疑問を投げ捨てて、剣を構えずに前に出た。

呪文など間に合うはずがない。聖良はどうするか少し迷ったが、女性の動きを見てアデイスの背後から飛び退いた。転んで膝を擦りむいたが、どうせすぐに治ると気にせず振り向けば、アデイスは聖良のいた場所で翼を広げてさらに後ろへと下がっている。

本能に従ってよかった。

そう思った瞬間、浮き上がっていたアデイスの翼が切りつけられ、地面に落ちる。

「アデイスっ」

聖良は頭蓋骨を取り落とす。

結界が一度しか持たなかった。

いつも自信過剰なほどだが、それは人としてのアデイスだ。

竜になったと聞くと強くなっているように思うだろうが、彼の場合は弱くなっている。彼は人間の時の方が人間としての経験があるため強いのだ。

「もう再生する？ 再生能力の高い個体なのか、前のが特別劣っていたのか」

女は剣を振り上げもう一度翼を傷つける。観察するように、その再生を見る。アデイスは肩を踏みつけにされて、動けないで呻いている。女の人に踏まれたからと、動けなくなるほど非力ではないのに、なぜ抵抗しないのか。

「頭をつぶしても生きていられる生物はいるか？」

彼女は恐ろしい疑問を口にして、無表情に剣を逆手に持ち上げる。考えるまでもなく、考えるのも恐ろしく、聖良は自分の思考をひどく鈍く感じて、自分が走っていることに気付いたのも、それが終わった後だった。

無駄にある魔力を有効利用しようと、二人とも結界を張っていた。アデイスだけではなく、聖良にも。

アデイスの頭の上へと倒れ込んだ瞬間、彼女に仕込んであった結界が過剰反応して火花を散らす。

「だ、だめっ」

首をかしげるその女性を睨み上げ、聖良はうわずった声を出す。

「どうして殺そうとするんですか！？ 生きて捕まえなきゃ意味ないんじゃないですかっ!？」

彼女は明らかに殺すことを目当てとしていた。こんな所まで竜を狩りに来て、殺してしまっただけは意味がない。

「……………どうして？」

彼女は頬に手を当て、逆に尋ねてきた。

「ええと……………殺してもいいって言われたから。でも人間は殺しちゃダメ。命令。逆らえない。どうしよう」

自問自答した彼女は、心底困ったという雰囲気の後退する。

変な人だった。アデイスなど比べものにならないほど変な人だ。変な人ほど何をするか分からなくて恐いのだが、とりあえず人間である聖良は殺せないらしい。

聖良はアデイスの頭を抱えて彼女を睨んだ。

「ミラっ！」

甲高い少年の声が響き、女は声の主をすぐに見つけて不服そうな顔をした。

その視線を追い、人間らしき少年と青年が走り寄ってくるのが見えた。

「邪魔された」

「邪魔されたって言うか、どう見ても襲われてるんじゃないのに、なんで続けて殺そうとしてるんだっ!？」

聖良はわけが分からずアデイスの頭を膝に乗せ抱え込み、その様子を見る。

これ以上襲ってくる雰囲気ではなくなった。

「でも、殺していいってユイが」

「僕は襲われてるから助けてこいって言ったんだろ!？ 最悪殺してしまっても仕方がないとは言ったけど、極力穏便にすませとも言っただろっ」

聖良はアルテの事を思いだした。

二人でいる所を他人に見られると、いつもこのように誤解を受ける。

「竜相手に手加減する、馬鹿。竜は人も食べる。対処を間違つと危険」

「だから、状況を見れば判断がつくよねっ!？」



彼女は首をかしげ、

「面白かったから忘れていた。竜が結界張っていたと思った。でも人間の魔術師だった。つまらない」

「忘れっ……」

少年は頭を抱えて地団駄踏む。

本当に理解に苦しむが、とりあえず不幸な誤解がこの悲劇を生んだようである。アデイスも回復して、半眼閉じて呆れ眼を二人に向けている。

生きていると実感すると、聖良は脱力してため息をつく。

新しい服を着てきたのに、もう土と嫌な汗で汚してしまった。

「君は普段何にも興味を示さないで人間としてのあらゆるものを捨てているのに、変なことだけにだけ興味を持って僕の命令を本気で忘れるぐらい暴走するのはなんでかな？ 僕の言葉ってそんなに軽い？ どうでもいい？ 刃物よりもどうでもいい？」

そもそもねえ、僕が口うるさく言うのは君のためなんだよ。君が人としてまっとうに生きるための」

聖良は延々と続くその説教を、アデイスと並んで眺めていた。

ミラという女と、もう一人の年長の男はおそろいの外套を羽織っている。細長い菱形を斜めに交差させたような紋章が胸元についている。どこかの制服だろう。

基本的にユイという少年も同じようなデザインなのだが、根本的に違っているというか、間違っている。

他の二人は山に入るのにそれほど問題はない格好なのに、彼だけが外套の丈が長く、その下には太股までむき出しの半ズボンをはいているのだ。

一昔前に小学生がはいていたような、とにかく短いズボン。ホットパンツ。

そのむき出しの白い太股には、奇妙な入れ墨が彫られていて、なんとなくそれ系のバンドマンだと思っただ方がしっくりくるような、今まで見た中で一番アニメ的なファンタジー衣装だった。

そして長い長いほんの少し緑がかった金髪を、三つ編みにして肩に垂らしている。実にアニメチックで現実味がない。

この世界がますます分からなくなった。

「……アデイス、私この世界のファッションセンスって分からなくなりました」

「いや、あれは違いますよ。あんな短いズボン普通ありません。神

殿の連中は変人揃いで有名だから、そつとしておいた方がいいですよ」

「よく分からないけど分かりました」

「分からないでっ!」

説教をしていたはずのユイが、聖良達へと怒鳴りつけてきた。

囁き合っていたのに聞こえたのだ。

「僕だつてこんなイカれた格好したくないよっ! でもこのアザを見せるために上が勝手にデザインしてくれたんだから仕方ないだろっ!」

これでも機能的には防刃、防火、防寒、防熱と、金がかかっているから、捨てるに捨てられないし、高いから作り直させるのもできないし、丈夫だから当分は破れないんだから仕方ないだろっ」

彼は泣きそうな顔をして吼えた。

聖良はその足にある、入れ墨ではなくアザだというそれを見る。

男の子の生足をマジマジと見るのは恥ずかしかったが、好奇心が打ち勝ったのだ。

文字のような模様のような、足に絡みつく植物のような、不思議なアザ。細身の少年なのでまだ見栄えはいいが、大人になってあれをしていたらかなり引く。太ったらそれで終わりだ。恥ずかしくて外を出歩けない。

「アザ……あっ……ああ、ああ、そうですか。貴方が噂に聞く神子」

アデイスが口にした知らない言葉の意味を考える。便利な物で、漢字は勝手に当てはまる。しかし肝心の意味が分からない。神殿と言っていた。神様の子。救世主だろうか。

非現実的な言葉にますます混乱する。

「何ですか、それ」

「神子つてのは、神殿が集めている神の加護を持っていると言われている人達です。」

神の加護が本当かどうかは知りませんが、特徴的なのは人間とは比べものにならない強い種族を従属させる能力です。

契約は強制的で、される側に自由はありません。契約できる魔物の数は、本人の器と支配する魔物の力の関係によって決まり、自分の器を示すのがアザで、支配することに色が濃くなっていくそうです。彼の場合はかなり埋まっているようですね」

はつきりと見えるアザを見て、アデイスは得意げに言う。

「へえ。さすがにアデイスはそういうことには詳しいですね」

知識を披露する時の彼は、とても生き生きする。

神殿というのがどういった宗教のことなのか知らないので、正しく把握できていないのだが、必要最低限のことは理解した。

聖良はユイを見て、ふと気付く。

「支配された魔物はどこにいるんですか？」

「近くにいるんじゃないですか？ 一人はその青年のようですが」

聖良は男性を見る。優しげで目鼻立ちの整った二十歳前後の青年だ。

顔にはユイのアザとは雰囲気が違う、奇妙な入れ墨はあるが、人間に見える。化けているのかも知れない。

「この国にはあんなアザのある人が多いんですか？」

「あんな不自然なアザがあるのは神子と半悪魔ぐらいですよ。悪魔は自分の模様を隠せますけど、他種族の血が混じるとそれが難しくなるみたいですね。つまり彼は人間ではないから、支配対象になるんですよ」

聖良はふむと頷き納得する。悪魔というのがよく分からないが、アデイスが気軽に語ると言う事は、聖良が想像するような、神話的な存在ではなく、竜と同じ一つの『種族』と思っただけのいい態度だ。

「じゃあ、あのミラって女の人は？」

「あれは人間ですよ。剣に魔力を乗せて結界を破り、踏みつける足に魔力を込めて身動きを封じていました。事前にそういう術を用意していたんでしょう。まさに人間だからこそその繊細な技術です。」

まさか魔術を禁じているはずの神殿に、これほどの魔術師がいるとは思いませんでしたよ。魔術大国であるグリーディアでも珍

しい、腕の良い術者です。」

以前アデイスは個々の戦闘力でなら神殿が一番だと言っていた。しかし神殿は侵略戦争など絶対にしないので、脅威ではないと。

「でも、さっき命令がどうの言っていましたよ」

「……………」

アデイスはミラを見て、すっかり黙って視線をそらすユイへと視線を移す。

「人間を従属させたんですか？」

「不可抗力だよ」

「試すこと自体どうかと思いますよ。半悪魔だって人間とのハーフでしょう」

他の生物を無理矢理従属させるなどひどい話だ。しかも同じ人の姿をして、同じように話す生き物だから、本当に人間のする事ではない。

「ハノは幼い頃からの知り合いなんだよ」

その言葉を聞いて、アデイスは頷いた。

「ああ、かくまうために支配したんですか。半悪魔は差別がひどいと聞きます」

「半悪魔ってのは、どうして差別されるんです？」

「悪魔というのは、人を誘惑し、墮落させる生き物だと言われています。不相应な力を与えて魔女にしたりするんです。

半悪魔は墮落した人間と悪魔の間の子だから差別されます。

神殿は悪魔と接触するきっかけを作るため、魔術を禁止しています。半悪魔は魔術が使えるため、積極的に狩る場合があると聞きます。

グリーディアには悪魔が入ってこないのです、半悪魔への差別を実際に見た事はありませんが」

仮にも神官が従属させているならおおっぴらに差別できないので、ユイがした事も理解できた。

ではあのアデイスが褒めるほどの魔術師で、剣を振り回していた

ミラは何なのだろうか。

「それよりも、どうして君みたいな子供の竜がそんなに人間の事情に詳しいんだ。普通は知らない事ばかりだよ」

「竜は初めて食べた強い意識のある生物の記憶を得ますから」

「竜の知識取得はそんなにはつきりしたものじゃないはずだよ。まるで人間の知識ある……魔術師と話しているみたいだ。そっちの女の子も話し方すごいし、なのに君の方がよく知っている」

「色々あるんですよ」

アデイスは聖良に頬ずりをして言う。今更無邪気を装っても意味はないのだが、彼なりに誤魔化しているつもりなのだろう。相手も人には言えないことをしているようだし、お互い様だ。

「竜が人間と一緒にいる。珍しい。なぜ？」

ミラが先ほどの事は無かったかのように、何食わぬ顔で尋ねた。

「……セーラは私の血を分けているし、身寄りがないので一緒に生活をしています」

ユイが聖良に哀れみの目を向ける。

人間ですらない者に育てられている、哀れな少女だと思われるのであるのだ。

「そうだ、そういえば謝罪がまだだったね。ミラ、謝って」

「なぜ？」

「……まあ、とにかく謝って。こんな小さな子達に悪い思いをさせたんだから」

彼女は一瞬むっとして、

「ごめんなさい」

おざなりに言っただけで剣についた血糊を拭いて鞘に収める。久々に、本当にファンタジーだなと感心した。異形に慣れてみると、現実的なことが多かったので、少しだけときめいた。女性が強いというのは、格好いい。

「本当にごめんね。恐かったよね」

「や、過ぎたことですし」

喉元を過ぎれば気にするのも無駄だ。とくにこういう人知を越えた悪意なき人達のでかした事は、気にするだけ損をする。

「セーラ、その年で悟りすぎるのもどうかと思いますよ。もう少し恐かったって泣くとか」

「怖い目になら散々あつてるから、過ぎたことを気にかけても仕方がないですよ。痛いのが続くなら恨みもしますけど、すぐに治るから忘れられます。だいたい、その度にウジウジネットネットしてるのって、鬱陶しいじゃないですか。悩むべき所は悩むべきだけど、悩んでいても仕方がない事には悩まないんです」

「悩むべき事？」

「お金がないとか……友人が犯罪に走ってるとか」

「ああ……いや、そうだけど、もう少しだけ可愛らしく」

「だからそんなことを私に求めないでくださいって何度も言ってるじゃないですか」

アデイスはしゅんとして尻尾で石ころをはねとばす。最近尻尾の扱いが上手くなってきて、尻尾で物を取ることもある。

そんな聖良達を見て、ユイが笑みを向けた。

「小さいのにしっかりしてるんだね」

「小さ……って、私、たぶんあなたよりは年上です」

ユイは理解できないという顔をして聖良を見る。

「私はもう十八です。竜の血とか関係なく、私は身も心も十八歳なんです」

彼はぎよつとしたように身を引いた。本当に失礼だ。

「私と同じだ」

ミラが初めて笑って言った。もっと年上だと思っていたから意外だ。アデイスも年下の女の子に足蹴にされたのでは、男としての面子も丸つぶれである。

当のアデイスは周囲を見回し、空を見上げて手を振った。ネルフイアとラゼスが飛んでくる。

二人は並んで地上に降り立つと、部外者三人を見た。

ミラが前に出て、剣に手をかける。害がないのは、アデイスや聖良の様子を見ていれば分かるはずだ。

「お前は……」

地上に降り立ったネルフィアはミラを見て、その目が険しくなっていた。

瞬間、二人は動いた。

「お前達、逃げろっ」

ラゼスが叫び、アデイスが聖良を抱えてその場から離れる。

アデイスで見えないのだが、背後からものすごい音がして、空気の温度が一気に上昇する。

なぜか、アデイスの向こう側がとても明るい。

「な、何なんですかつ!? あの女性はっ」

少し離れたところで聖良を地面に下ろしたアデイスは、ネルフィアと喧嘩を始めたミラを見てユイに怒鳴りつける。

「アデイス、もっと離れないと危険だ。前にあの二人、山を一つ丸裸にしたんだぞ」

ラゼスの言葉に聖良は呆れた。

ネルフィアはいい。理解できる。

問題はミラだ。

炎を魔術で弾き、ネルフィアに比べると針のような剣で彼女の肌を傷つけている。竜の皮膚を普通に傷つけている。あんな細身の剣で。動きが早く、距離があるため、何が起きているのかさっぱり分からない。

「ああ、ミラ、ちょっとミラ!? やめなっ！ 何樂しげにしてるんだ!? 話を聞けええええ」

ミラがちらと振り向いた。

「ミラ、やめなさああい！」

ユイが金切り声に近い声を振り絞る、人間の脚力では不可能な高さまで跳んでいたミラが、渋々と言った様子でネルフィアから離れる。それを見たネルフィアは、やる気を無くした相手ではつまらな



いのか大人しくなった。

ラゼスはミラがこちらに歩いてくるのを見て、脅えて後ずさる。

「お父さん、あの二人はお友達同士なんですか？」

「アデイス、あれのどこが友人の再会に見えるんだ」

「喧嘩友達という分類かなあと。血の気が多そうな二人だから、ありのような気もして」

「会ったのは一度だけ。痛み分けで互いにか引いてくれたから良かったものの、続けられていたらどうなっていた事やら」

本当に苦労している男性だ。責任感が強くて不幸になるという生き見本である。完全に他人と切り捨てられたら、彼は今よりは幸せになれそうだ。

「ミラ……突然切り掛かるなって言っているだろ。あの雰囲気どうしていきなり攻撃を仕掛けるんだ！ しかもここは竜の里なのに、竜がいるのは当たり前だろっ」

「あれ、赤の魔王。賞金もかかっている。問題か？」

ミラがネルフィアを指さして言う。

「ちょ……ミラ、赤の魔王ってあの？」

隣でアデイスが頭を抱えて蹲っている。

魔王とはまたすごい。アデイスも知っているのだから。だから母とイコールされて衝撃を受けた。

「ミラ、その赤の魔王と何があったの？」

「前にやりあった。火傷して大変だった。さすがに強かった。火傷は後が痛い」

ユイはミラの焦げた髪に触れ、火傷した手に触れる。女の子が髪を焦がしているのに、さして気にしていない。

「あたしもあの時はびっくりしたよ。怪我なんてしたのは初めてだったからねえ」

ミラに続いてやってきたネルフィアが言う。

生まれて初めて傷つけられたというのも、すごい。

双方すごい。

聖良は少し引いた。

「うつかり忘れていたけど、どうしてお前がいるんだい。人間も魔物も竜も悪魔も構わず殺して回っているんじゃないかなかったのか？」

「そんなことはしていない。降りかかる火の粉、放置すると火事になる。手遅れ。その前になぎ払うだけ」

聖良は生まれて初めて人間に対して、ネルフィアに向けるような『畏怖』を覚えた。彼女の中で、ミラはネルフィアと同じ天災ポジシオンへと昇格された。

「悪魔も……まさか、殲滅の悪魔」

アデイスがかなり身を引いて呟いた。

「なんですかそれ」

「行く先々で殺戮の限りを尽くす少女のことです。今まで都市伝説の類だと思ってました」

「……………はあ。それで」

「驚かないんですか？」

聖良は悩む。驚くが、あまりにも大層なので驚くに驚けない。ネルフィアと喧嘩してほとんど怪我もなく生きている方がよほど驚きだ。

「その噂についてよく知りませんし、危害を加える人が悪いんじゃないですか？ 今はユイクンの命令は絶対なんでしょう？」

人間は餌であるネルフィア相手では、喧嘩になるのも理解できる。

「その暴走の最中に仕方なく使い魔にしたんだよ」

ユイが言っ。

では、本当に人を殺して回っていたのだろうか。それはなぜか。考えて分かるはずがない。何かありそうなので、本人には聞きにくい。

「お前は どうしてここに いるんだい」

「ギセル族に会いに来た。一番近かったのこの集落」

「なんで」

「薬。彼らの作る薬は素晴らしい。分けて欲しい」

「なんで」

「病人」

「そうかい。じゃあ、うちに来るかい」

「うん」

あつさりと喧嘩をした垣根を跳び越えて家に招き、招かれる。

清々しいまでに何も気にしていない。後腐れのなさは、世の中のスポーツマンと、そのファン達も見習うべきだと思っただけ。

「ミラさんって……お母さんに似てますね」

「ええっ！？ 君はお母さんまでそんな人なの！？」

ユイが驚きと哀れみとの入り交じる目で見ってくる。

「ネルフィアさんのことですよ。私の実母はこれでもかかってぐらい普通の人でした」

ネルフィアを指さすと、ユイはしばし悩んで沈痛な面持ちで頷いた。

誰が見ても、二人は似たもの同士である。

#### 4話 竜の里 4

「まったく、どこに行つたんだろうねえ、家をほつといて」

「そりやいつ戻つてくるとも知れない君を待つてるはずないだろ。」

あの夫婦は活発なんだから」

両親の言葉を聞きながら、アデイスは初めて踏み入ったネルフィアの実家とやらを、感心しながら見回した。

彼にとってはここも我が家である。人の暮らしを捨てる気はないが、竜の暮らしも捨てる気はない。これから長くなるのは、竜としての自分なのだ。

この村では一つの家にギセル族が一家族住んでいるらしい。ギセル族が独立して新しい家を建てると、そこに独立したい竜が住む。住居に関して発言力があるのは、建てて管理するギセル族の方だ。だから彼らの趣味で家は造られ、彼等の好きなように家は管理される。

この家に住むギセル族の夫婦は現在は森に入つてしばらく戻つてきていないようだ。なら他のギセル族に頼ればいいのだが、その夫婦が一番薬師としての腕がいいのだという。

その夫婦はこの家を綺麗に維持してくれていて、室内の清潔で可愛らしい様子にセーラが喜んだ。セーラには少し大きすぎる家具が、彼女を実際よりも小さく見せている。

そしてどういふわけか、好奇心旺盛らしいミラと一緒に家中を探索し、現在はなにやら気が合うところがあるのか熱心に話し合っている。

ネルフィアとまともに戦えるような人間の範疇を越えた恐ろしい女相手に、何の気が合うのか理解を超えるが、彼女が恐ろしい存在にも慣れてしまえば脅えないのを目撃するのにはもう慣れた。

竜達もミラも、彼女にとっては大差ないのだろつ。

それを横目に、アデイスは大きなソファに腰掛けてくつろいでいる。竜が爪を立てても破れない素材で出来ていて、アデイスは少し感心した。

ネルフィアの生活が竜と比べてすら文明とほど遠いのだと知り、ラゼスが心配した理由が理解できた。

「ああ、見てよハノ。あのミラが女の子とおしゃべりしているよっ！ 普通で無力な女の子と！」

普通でなく無力でない場合、ネルフィアとのようなことが起こるのだろう。恐ろしいと思いつながら、はしゃぐユイに同情の目を向けると、彼の目尻には涙が浮かんでいた。

「いや、泣いて喜ばなくとも」

「ミラが何かに興味を示すなんてどれほどぶりか。前に興味を示したのは、確かコックが新しく仕入れたよく切れる肉切り包丁だったよ」

「もういくらでも感動してください」

肉切り包丁レベルの扱いをセーラがされているというのも悲しい話だが、喜ぶ少年を止める権利はない。もしもネルフィアが花を愛でるようなことがあったら、アデイスもきつと感涙にむせぶ。彼は可愛らしい美少年なので、涙する姿も女の子のようで鬱陶しくは無い。

もう一人の客人、半悪魔のハノはそんな主と少女を暖かく見つめている。半悪魔のくせに彼が一番まともそうだ。

「ユイ、恥ずかしいから涙を拭いて。呆れられているよ」

「分かっているけど、ミラの女の子らしいところを見るのは初めてで」

「料理はしているじゃないか」

「刃物を使いたければせめて料理でしてくれって言った結果だよ？ しかも切るだけ！」

ハノは微笑みで曖昧に返す。彼の苦勞が透けて見える笑みだ。親は悪魔で彼がここにいるなら、自分の子に興味のない悪魔の子とい

うことになる。

半悪魔は庇護者がいなければ、人間よりも多少優れているだけで人間とさほど変わらない者ばかり。悪魔と契約しているだけでしかない魔女の方が強いことも多い。

なのに人間は彼らを迫害するため、長くは生きられないことがほとんどだ。だから彼は苦勞しているはずで、そのために得た大人の態度であろう。

「ところで、他の使い魔はどこにいるんです？」

「僕の使い魔は二人だけだよ」

「……器ちっさっ」

思わず本音が口から漏れる。

その言葉を聞いて、反論したのはハノだった。

「違います。ユイは期待されていたほど器は大きい神子です。ただ、同族に近い私や、同族のミラさんを支配したら、無理があつたらしくて埋まってしまっただけです。」

もう一匹ぐらいなら可能なんでしょうが、うちはミラさんで手一杯で、他の使い魔なんて面倒見られません」

ハノが拳を握り締めて主を弁護した。

相手はネルフィアと引き分けた女だ。支配するには、それなりの器が必要だろう。竜を一匹支配できるような神子は、かなり器の大きな神子である。

「ところで彼女は本当に人間ですか。何か混じってるんじゃないですか」

「ミラは人間だよ。魔術も肉弾戦も前例がないほど天才的な上、持っている武器が必要以上に強力な魔力を持っているだけの、どこまでも普通の人間」

そんな説得力のないことを強調されても、もちろん誰も納得しない。

「だけって……それで対抗できるほどネルフィアは甘くないし、人間の身じゃ、山が裸になるような炎の中で生きていたりしないよ」

ラゼスが呆れた様子で言う。

「ミラは……規格外なんだよ。人間が使い魔になるなんて、いわば神様に魔物扱いを受けるようなものだから」

ユイは足を組んで膝の上に肘をつき、突然響いた『じゃきんっ！』という音に崩れる。

セーラがなにやら長い棒を持っていた。

「わーすごおい。伸びましたっ！」

「地面とか固定された物について伸ばすと、人間なら打ち所が悪ければ死ぬぐらいの勢いある。でも竜なら死なないから大丈夫」

「へえ」

「支える物がないときは、腹とかに固い物を当てて、その中心に柄をついて伸ばすといい。ちゃんと踏ん張っていけば痛いのも倒れるのは相手。セーラじゃ竜だと負けるかも知れないから慣れるまでは気をつける。伸びる長さは二段階だから、一気に伸ばさない方が安全」

アデイスは考える。

何の話をしていただろうか。

「こっちの先端の方が重いですね」

「こっこう回すと刃が飛び出る。この刃が重りになっている。簡単には飛び出ないから安心して使うといい。

振り回されたくないときは刃の出る方を手元に、勢いをつけて殴りたいときは刃のある方を先にして振り下ろす。女は力がないから頭を使って闘う。力任せの馬鹿な男、女と侮ってくるから簡単」

「ミラさん、格好いいです」

可愛く無力なセーラが毒されていく。

「ミラ、なんで武器解説なんて女の子らしくないことを」

「セーラが身を守る手が欲しいと言った」

ユイの問いにミラは彼に目も向けずに答える。

他人に頼るのが苦手なセーラらしい発想だ。そんなセーラが、泣きついてくる一歩手前の強がり可愛いのだ。本当に頼らなくても

生きていけるようになったら、寂しいではないかと、アデイスは憤慨した。

「セーラ、下手に武器を持っている方が危険ですよ」

「素人が武器なんて持つてもあまり意味がないことぐらい分かります。」

私はアデイスから身を守りたくて相談してたんです」

セーラは伸びた杖を元に戻し、麵棒ぐらいの長さになったそれを抱きしめる。

「セーラ、私が何をしたんですっ!？」

「寝ぼけて襲いかかって来るじゃないですか。悪意はなくてもアデイスに手加減無しで抱きつかれると痛いんです。服も寝床も血で汚れるし。手作りの石斧は重くてとっさに振り回せません」

確かに、目が覚めたらセーラが血を流していたことはある。だから最近石で殴られることも多々あるのだが、それをもっと効率よくやろうというつもりらしい。

アデイスはいじけてソファアをかりかり引つ掻いた。それでも破れる様子はない。

「武器の話が振られたからおしゃべりしてたのか……」

「馬鹿な竜に寝ぼけて襲われて痛い。すぐに治っても、痛みはない方がいい。」

それに女は自衛できることがとても大切。これは一見刃物でないから、相手も油断する。刃物を持つよりも有効。杖としても使える便利」

ユイは大きいため息をついて、両膝を腕に抱えてつま先を交互に動かす。期待して損をした気分なのだろう。

そしてハノは立ち上がり、ミラの前に膝をついた。

「ミラさん、彼女にそれをプレゼントするの？」

「ああ」

「そう。だったら、危険がないように機能は全て伝えるんだよ」  
「分かった」



ネルフィアと喧嘩出来たのだから彼女が噂の本人であることは確信できたが、とても噂に聞くほどとんでもない女性には見えない。

噂というのは、誇張されるものだ。

彼女は血も涙も心もない命を命と思わず悪魔よりも冷たい血を持つている、と言われているが、感情をあまり表に出さないだけなのだろう。不器用そうだが、興味のあることについて尋ねられると喜んで話し出すなど、方向性は特殊でも普通に女の子だ。

「そうだ。とてもお礼になんてならないんですけどミラさんにこれを差し上げます」

セーラは荷物の中から何か取り出してミラの背後に回り、彼女の手入れされているとはほど遠い髪に櫛を入れた。

聖良は一部焦げた髪を痛々しく見つめている。

不揃いなのは焼け焦げたからではなく、おそらく邪魔になったら自分で切っているためだろう。髪の手入れを怠っているのは、彼女が老けて見える原因の一つでもある。聖良は荷物の中から髪に塗る油を取り出して、それを丹念にすり込んだ。何をするかと思えば、彼女がいくつも持っている髪留めの一つで中央よりもずいぶんと右側に寄せて結った。金属に光る石がはめられた飾りのついたもので、可愛らしい。

「ミラさん髪が鬱陶しそうだから、こうするといいですよ。ゴムだから外すのも留めるのもとっても簡単です。あ、でも乱暴に引っ張ると干切れますからね」

セーラは鏡を見せて、とっても可愛いと褒める。ミラは髪留めを外し、伸ばして遊び、再び髪を結う。

「簡単」

「でしょう。他の人がしてるみたいに、ヒモとか布で留めるのは難しそうだけど、これなら小さな子供でも出来ますから。あと、髪が傷んでますよ。乾かしてから寝ないとダメです。ちょっと焦げてるから、髪も少し切らないと」

ミラは顔を顰める。嫌がっていると言うよりも、難しいことを言

われたときの子供のような表情だ。

「簡単ですよ。ミラさんは魔術が得意だったら、髪は乾かせるですよ。」

「……うう……うん」

ミラは困惑した様子で頷いた。

セーラのように無力で害意のない　傷つけようとしたのに恨むことなく笑みを向ける相手に、彼女は手を出さないだろうから、今のところは安心して見ていられる。

彼女が噂の通り行く先々の街を殲滅していたら、もっと大変なことになっている。

何かのきっかけでそれは実際に起きたのかもしれないが、きっかけになるほどの脅威も敵意もないセーラでは、それが起きない。

「僕が何をしても鬱陶しがったのに……なんで」

セーラがいつも簡単にミラを女の子として扱うものだから、ユイは困惑した様子で彼女たちを見つめた。

「思うに、女性の育て方がなっていないんですよ、貴方達は」

アデイスは戸惑うユイに忠告した。

彼等は腫れ物に触るようなやり方をしてきたのだろう。

「で、でも、頑張ってるんだよ。ドレスを着せたり、化粧をしたりしたけど、全部嫌がった」

「極端なんですよ。彼女はまだ化粧をする必要はありません。荒れた肌にクリームを塗るぐらいで十分でしょう。」

ドレスだってそうです。着たい物を着たいように着せさせて、少しだけこうすると可愛いよってアドバイスをするのが、彼女みたいな活発なタイプには向いてるんですよ。セーラがしたように」

おしゃれに興味がない子にいきなりドレスを持ってきても、反発するに決まっています。邪魔になっただけいそうな髪を簡単な結び方を教えるぐらいから始めなければならぬ。いきなり髪を結い上げたら違和感を感じるに決まっています。

「アデイス……お前は子供のくせに何で女の子を育てるとか語って

るんだ」

ラゼスが息子の将来に不安を抱いて尻尾でつついてくる。アデイスは適当にあしらおうとしたが、その前にセーラが口を開いた。

「アデイスが食べたのは、生前とっても女性にもてる、女性のあしらい方の上手い男性だったんですよ。記憶がほとんどあるからたちが悪いです」

セーラの告げ口でミラが睨んでくる。

「違いますよ。確かに女性のあしらい方は上達したかも知れませんが、アデイスはたくさんの子供達の面倒を見ていたからです。セーラ、そんな言い方じゃ変な誤解をされるじゃないですか」

セーラは薄ら笑い、責めるような目を向けてくる。

殺されかけても気にしない彼女が、何をそんなに気にしているのか。やはり奴隷商がいけなかったのだろうか。

「まあ、アデイスの将来が心配なのは置いておくとしても、ユイくんの住んでいる所は、世話焼きな女の人がいらないんですか？ 噂で初めは怖がっても、長くいれば世話を焼きたくなるのが女の人の性なのに」

「神殿内に女性は使い魔しかいないんだ。だから人間の女性はミラだけ」

聖良はきょとんとしてミラを見つめた。ミラも見つめられている理由が分からないのか、きょとんとして見つめ返す。

賢いがこの世界の知識はない聖良と、知識はあるようだがずれているミラ。ちょうど良い組み合わせなのかも知れない。

「神殿には男神殿と女神殿つてのがあるんですよ。男神殿のある街は十二歳以上の未婚の女性は入れませんし、既婚女性はいてもほとんど外に出ず、顔を隠しています」

「宗教つて、女性に顔隠させるのはやっぱり多いんですね」

「その街だけです。隣の女神殿がある街は逆に男性が肩身の狭い思いをします。」

だから主が男性のミラさんは、女性と会う機会が少なくなっても

仕方がないんですよ。外に行くとき使い魔ですしね。セーラのように話しかける人は珍しいんじゃないですかね」

セーラは納得したようで、小さく何度も頷いた。

せめてユイが女性だったら、もう少し細やかな部分にまで気を配れたのだろうが、変な格好をした、まだあどけなさの残る少年と、悪魔と差別されるために女性ともろくな交友などないだろう半悪魔の青年。細やかさを要求するのは酷である。

「ミラさんはオシヤレとかには興味ないんですか？」

セーラはミラを見上げて問う。

「よくわからない」

「そうですね。世間に合わせるとよく分かりませんよね。難しいです」

「そうなの？」

「ええ。普段は人間なんて迷い込みもしない場所にいますから。流行とか気にしているときりがないですよ。次行ったときには様子が変わってますし」

「そうか」

「最低限人間らしくしていればいいんですよ。あ、髪は人に切つて貰った方がいいですよ。私も前に自分で切つて後悔したことがありますから。髪が不揃いだとなんな人に見えます」

「髪は人に切つて貰う物なの？」

「そうですね。男の人だつて他人の髪を揃えるぐらい出来ますから、やって貰えばいいんですよ。自分でやるとバランスが難しいですし、危ないです」

「そうか。そういうえば小さな頃は切つて貰っていた」

「大人になつても普通は切つてもらいません。スキンヘッドならともかく」

「あれは頭が寒くないのか？」

「さあ。したことないからわかりません」

「髪は頭を守るから、ないと困る。冬になると少し暖かい。あります」

ぎても面倒で目にかかって鬱陶しい。難しい」

「首を温かくしたいなら、こつやって」

セーラは髪留めを外し、櫛で整えてから髪の上辺だけを取り結んだ。

「こつすると横の髪が邪魔にならないけど、髪は首を覆って暖かいですよ。それに可愛いです」

「……可愛い？」

「ミラさんはちゃんとすれば美人だから、手を入れないのはもったいないです。まだ若いから、化粧とかしなくても、髪を綺麗にして肌を清潔にしているだけで綺麗になれるんですから」

セーラは同年代の女の子に構うのが楽しいのだろう。今までは男か子供か大人の女性ばかりを相手にしていたのだ。

鏡を見ていたミラは、突然びっくりと震えてユイを見た。

「ユイ、なぜまた泣く？」

言われて見れば、彼は声もなく泣いていた。涙もろい男だ。可愛いらしい美少年なので気にならないが、もしもこれでむさ苦しければ殴っていた所である。

「いや、今度こそミラが女の子らしく会話して、見た目まで気にし始めたと思ったら……」

ハンカチで拭い、ユイは立ち上がりセーラの手をがしりと握った。熱に浮かされたような瞳に浮かんでいる感情は一体何なのだろうか。あのやりとりの後でなかったら殴り倒しているところだが、ここで殴り倒すのは可哀相だと思ってしまった。

「今後とも、ミラをよろしくお願いします」

「え……違う国に住んでるんじゃないですか？」

「どうせ神子なんて放浪していれば仕事をしていると認められるんだ。君の所に遊びに行くよ。おおよその場所を教えてもらえれば、どこにでも行く」

「いや……あの……来られるんじゃないですけど」

ここまで来た人間だ。問題なく来てしまうだろう。普通はここま

で来る事すら普通の人間には不可能なのだ。

ここで場所を教えなかったとしても、街で聞き込みをすれば、竜が住み着いたという噂は聞くはずだ。

あの様子だと、ミラと聖良を会わせるための努力は惜しまないため、本当にやって来る可能性がある。

だったら聞き込みをされるよりは、そのまま来てもらう方がいい。「デイルニス山脈の麓に広がる森の崖に住んでいます。分かりやすい場所ですよ。お母さんは基本的に人間が来るのを気にしないで、来なければ来ればいいんじゃないですか。どうせ私達は退屈ですし」

アデイスは諦めて場所を教えた。

セーラと毎日遊んでいるが、飽きるものは飽きる。セーラは字の勉強を始めたのであまり退屈ではないかもしれないが、アデイスは退屈だ。表音文字は覚えやすいと、彼女は絵本を読む事に専念するのだ。単語を口にすれば意味が分かるため、覚えるのは速い。読みにくい単語意外はほとんど聞いてこないの、アデイスはその間退屈だ。もう飛べるし、短時間なら大きくなれるし、火も吹ける。竜の子供が練習すべきことはマスターしている。あとは人化の法やらの難しいことしかない。

さすがにこればかりは一人では無理だし、ネルフィアに聞いても大ざっぱなことしか言わないのだ。ラゼスがいれば勉強にもなるのだが、ネルフィアが嫌がるだろう。

「知識がある子供なんて、遊ぶことしかすることがないんですけど、毎日同じ事をしてると退屈なんですよね」

アデイスの言葉を聞いて、ラゼスがその頭に頬をすり寄せた。

「学ぶべき事を全部その年で身につけてると確かに退屈だろうな。ネルフィア、この村に住めばいいのに。アデイスも人間の友達じゃないってのは問題だろ」

可愛い息子のためという気持ちは理解できるが、かなり迷惑な話だ。竜よりも可愛い人間の女の子とお友達でいたい。

「嫌だね。誰が好き好んで口うるさいジジババどもがいる所に住むかい。アデイスはエルフとも友達になってるんだよ。交友の輪は自分で広げていくだろ」

ネルフィアは案の定拒否した。彼女のように乱暴なら、周りはずとうとう口うるさい事だろう。

「……まあ、そうだけども。でも、君は用もないのに行く怒るだろう。僕だって息子と会いたいんだ。

それに君に育てさせるのはやっぱり不安だ。賢いと悪賢いは違うんだぞ。人間の記憶が強くあるなら、その人間の影響をどれだけ受けるか。人間ってのは賢い代わりにずるさもある。まあ見た感じだとそれほど深刻な人間じゃなかったみたいだからいいけど」

「だったらいいじゃないか。アデイスはいい子だよ。反抗期なんてなさそうだし」

「反抗期はないかも知れないけど……君だけに任せておくのは不安だ。偏った子に育ちそうぞ」

夫婦とも言えない男女が、アデイスの将来について本人の前で語る。

それを何となく見ていると、ドアがノックされた。

アデイスは暇なので立ち上がってドアを開けると、走り去る竜の子供達の姿が見えた。

そして木の陰に隠れてから、おっかなびっくりこちらを眺めてくる。

ネルフィアだったときのために逃げたようだ。

「何ですか？」

「ね、ネルフィアはっ？」

「お父さんとお話していますよ。何か用ですか？ もうすぐ日が暮れますよ」

「頭蓋骨持ってきた！」

アデイスは振り返り、セーラを見る。

「頭蓋骨持ってきたそうぞすけど」

「やっぱり」

目の前で人の姿になったから、彼らは興味を持ってセーラに問いつめたのだろう。

子供というのは、種族にかかわらず笑えるほど素直なところがあり、可愛いものである。



ラゼスが夕飯の支度をしているから遊んでおいでと言い、少しばかり聖良は戸惑いを覚えながらも、夫婦で話したいこともあるだろうと思いい子供達について外に出た。竜の作る料理だから、期待はしない。

外にはだいぶ暗くなってきたのに子供達は大勢いる。もっともこの村に不審者などいるはずもなく、いても返り討ちにしような子供達ばかりで、危ないから帰るといような発想はないのだろう。火も吹けるので、暗くてここがどこなのか分からなくなることもない。竜というのはつくづく心配するだけ損をする種族だ。

「オレをこいつにしてくれ」  
浮かれた様子の子供が、聖良に竜のものと思われる頭蓋骨を差し出した。

人間の頭蓋骨よりは大きいが、思ったよりも小さな頭蓋骨である。アデイスを見ると、首を横に振る。

「あの術は波長が近くないと他人にかけるのは難しいんですよ。セーラは私の血を飲んでいいるから魔力が届きますが、異種族では無理です」

子供達は不満らしく、ピイイと威嚇するように高い音を出す。ネルフィアも時々出す音だが、アデイスはしない。コツがあるのだろうか。聖良はちょっと可愛いと思っている。

「じゃあ、代わりに人間がこれに化けてくれよ」

聖良は竜の頭蓋骨を手渡され、戸惑ってアデイスを見た。

竜に化ける。少し楽しそう。

アデイスを見ると、彼は困ったような顔をして子供達に問う。

「どうしてその子の姿がいるんですか？ 竜と人間は身体の構造が違っているので、人間がばけても上手く動けませんよ」

「立ってるだけでいいんだ。

そいつが死んでから、そいつの兄貴のトロアがずっと落ち込んでるんだ。幽霊の振りして慰めれば、きっと元気が出るだろ」

「ああ、そういうことですか」

アデイスは子供達の理由に納得した。純粋な動機を聞いて、聖良も手を貸してやりたくなかった。

「でもしゃべるとばれますよ」

「え？ 幽霊はしゃべらないだろ」

子供達は不思議そうに見下ろしてくる。聖良とは逆に、人間の幽霊はしゃべるのかと思っているのだらう。

聖良はもう一度アデイスを見た。

「元に戻るのが大変になるかも知れないから、私が人の姿になっておきますよ」

「うん」

聖良は荷物の中からアデイスのマントと頭蓋骨を取りだした。彼の肩にマントを引っかけて、頭に頭蓋骨を乗せる。準備が整うと、長いだけの呪文を唱えた。

終わると彼は銀髪的美青年へと変身し、マントで身体を隠す。

「おおっ」

ミラが声を出してアデイスの前に立ち、その顔をぺたぺた触る。

聖良にとってアデイスの顔に触れるのは大変だが、この世界の平均的な身長よりもさらに少し高そうなミラにとっては難しい事でもないらしい。

「ちょ、手を突っ込まないでくださいっ！」

マントの中も気になるらしいミラは、アデイスの抵抗を受けて不服そうにする。聖良が服を渡すと、彼は背を向けて手早くそれを身につけた。

「今のどうやるんだ？ 早口で呪文が聞き取れなかった」

ミラが好奇心一杯の目で聖良を見る。

「ダメです。これはアデイスが秘密裏に作ったものですから、世間

に知れては困るんです」

アデイスは戸惑いながら拒絶する。彼等がグリーディアとは無関係な外国人だから、目の前で変身したのだから、迂闊だった。

「……アデイス……アデイスか。確かグリーディアの魔術師長か何かの名前だよな？」

ユイが顎に手を当てて言った。

アデイスは偉いのだろうとは思っていたが、そこまで偉かったとは思っていなかった。それはいなくなったら大騒ぎにもなる。

「まだ長ではなかったですよ。強い反対がありましたから。」

私は外国でもそんなに有名なんですか？」

「うーん……僕も魔術師だから、興味があるから知っているだけかな？」

「使い魔だけじゃなくて、ご自分も魔術師？」

アデイスはちらりとハノを見た。

「ずいぶん複雑な身の上ですね」

アデイスはそれ以上追求しなかった。

「ああ、そうそう。今『アデイス』が完全にいなくなっても問題がありそうなので、この事は神殿に報告しないでくれませんか？ 権力には興味ありませんが、知識欲はあるので今後も利用したいんです」

竜の姿も聖良の姿も見られた以上、隠しても仕方がない。なら下手に街で会って変な事を言われる前に、変な事を言われないため、こうしてお願いするのがベストだ。

「別に他国の要人の事なんて、報告する義務は無いからいいよ」

「有り難うございます。」

この格好じゃないとセーラを一人で街に行かせることになるので、報告されるとすごく困るんですよ。珍しい毛色の女の子が一人で歩くななんて危険ですし、買い物に行かないと、女の子は困るでしょう」

「困るのか？」

ミラは理解できないらしく呟く。

「困るんですよ。あなたも女性なら困ってください」

「ああ、鍛冶屋に行かないと困る」

彼女は、本当に武器が好きようだ。

アデイスは最後の方は諦めて、聖良の頭頂部をなで始めた。

撫でられて撫でられて、聖良はむくれる。

竜の時は可愛いのに、人間になると腹が立つのはなぜだろうか。

「セーラ、またむくれて」

「だから上から見下ろして頭を撫でないでください」

その見下ろし方が、聖良の背後から頭の上を越えて覗き込むという身長差があるからこそ出来るものだ。

「どうしてですか？ セーラの髪はサラサラで撫でがいがあるのに」

「鬱陶しいっ」

貰ったばかりの仕込み杖で殴る。ミラはこれを杖だと言っていた。

聖良は子供達から頭蓋骨を受け取ると頭に乗せる。聖良の頭よりも大きくて、すぽと被ってしまった。複雑な心境になりつつも目のない場所にまで移動して、コートの下で服を脱いで呪文を唱える。

竜になると思うと、聖良の心が躍った。アデイスの背に乗り、少しだけ憧れていたのだ。

呪文を唱え終わると、視界が明るく、うんと高くなった。明るいというか、暗いのによく見える。人間とは比べものにならないほど目が良くて、遠くまで見える。

人間とは感覚が違った。

腕を動かしてみると、身体の構造も人間とは違うので、転びそうになった。少し歩くと、とりあえずは転ぶほどではなくなる。

「わあ、面白い」

と、ふと気付いた。

明るい。よく見える。

「セーラ可愛……」

寄ってきたアデイスは聖良の爪を突きつけられて沈黙する。

「ちょっとお伺いしますけど、いつも人がお風呂にはいるときに何で隅の方に居座ってこっち見てたんですか」

「あ……」

気付いて視線をそらすアデイス。

覗いていたのだ。人が信頼していたのに、卑劣にも覗いていたのだこの変態は。

「ほら、鉄砲水とかでセーラが濡れたら危ないですし。セーラが心配で心配で」

「その事は、帰ったらゆっくり話しましょうねえ」

アデイスがこくこくと頷き、媚びるようにへらへら笑って誤魔化す。睨み付けていると、気まづくなつたのか手招きをした。

「セーラ、屈んでください」

アデイスがほらほらと手を差し出すのでしぶしぶ従うと、彼が頭部に触れる。撫でるわけではなく、不思議な感じが流れ込んでくる。

「ほら、いいですよ。もっと可愛いサイズになりました」

身を起こすと皆と同じほどの大きさになっていた。彼がコントロールしてくれたらしい。

「ありがとうございます」

「女の子の童ですね。可愛らしいですよ。普通に舌も回ってますし、心配する必要はなかったようですね」

「そっといえば」

問題は舌が回らなかったときだ。元に戻れないというのは悲惨である。

聖良は自分の身体を見下ろして、アデイス達よりも少し濃い青の身体だと認識した。アデイスは白に近いが、聖良の身体は少し青みが強い。

「で、私は誰を慰めればいいんです？」

尋ねると聖良を見ていた少年達ははっと我に返り、こっちだと尻尾で招きながら歩き出す。

時折ちらちらと見る目は、珍しさというよりももっと別の感情の

ように見えた。どこか、ぼーっとみとれるような。

ひよっとしたら、本当に可愛い女の子なのかも知れない。化けるのは美少女ばかりとは、聖良は元の自分のを思うと、少しだけむなしくなる。

アデイスは聖良を可愛いというが、二重といっても奥二重の、日本人らしい癖のない顔をしている。悪くもなく、取りたてて褒められる部分も無い。そんな顔だ。

だからこのように見られるのは悪い気はしないが、少しばかり情けない。

「でも、慰めた後どうするんですか？ 逃げる方法とか用意しても  
られないと、さすがにちよっと……」

「ええと……こっそり忍び込んで後ろから殴り倒す」

「……………竜つてのがネルフィアさんと同じ生物だとようやく実感  
しました」

「うえっ…………と、眠らせるっ！」

よほどショックだったのか、少年竜は慌てた様子で、多少穏やかな方法を提案する。

「どうやって？」

「睡眠薬があるんだ。誰か取ってこい」

「はあい、と言ってアデイスよりもっと白い竜が飛んでいく。」

ここの竜には赤、白、青といるらしい。白が一番少なく、赤が多い。もちろん赤と言っても原色の派手な色ではない。もう少しくすんだ、落ち着きのある色をしている。

「竜に効く薬があるんだ…………」

「ユイが小さく呟き、子供達ははっとして彼を見る。」

「人間はダメだ！ 人間が知ると悪用する！」

「しないよ、悪用なんて。する必要もないし。」

再生能力はないし竜ほどではないけど、僕は普通の人間と違って寿命はけっこう長いからね」

それはもう人間と言えるのか疑問だ。

人間の腹から生まれたのに普通の人間とは違うなど、理解できない世界である。

「君たちが始末される覚悟のあることをしてない限りは、僕らは何もしないよ。」

ネルフィアさんだっけ？ 彼女ぐらいのバケモノになるつもりがないなら、もし下に降りても、人間は襲わない方がいいよ。人間は特に復讐心の強い生き物だからね。偉い人から仕事として依頼されたら、僕らは基本的に断れないんだ」

「魔物狩りなのか？」

「神殿の神子だよ。個体にもよるけど、稀に徒党を組んで悪魔も狩るような凄腕がいるから、人間は怖いものと思ってた方がいい。君らみたいな竜なら、嫌でも使役されることになって大変だし」

「使役？」

「人間の中には強い魔物を支配できる連中がいるんだよ。悪魔とか竜は滅多に見ないけど、いるにはいるからね。そういう強い使い魔を得て、さらに強い魔物を使役したり狩ったりするんだ。中には『空き』を作るために、今まで使役していた使い魔を殺す場合もあるから、運が悪い中でもさらに運が悪いと、生きている心地がしないよ」

子供達は人間って恐いなと囁き合う。

かなり珍しいごく一部の例外の話だが、素直な子供達は信じてしまった。危険は犯さないに越したことはないので、彼らが脅えてくれるならその方がいい。

ネルフィアのような無謀な竜にならないのは、彼らにとってよい未来だ。

「っと、戻ってきた。おお、これこれ」

竜の少年は薬を確認して可愛い仕草で頷く。

「たぶん沈んでると思うから、適当に慰めてくれ。頃合いを見て眠らせる。事前に合図するから息を止めておけよ」

「……まあ、やれるだけのことはやってみますけど」

聖良は妹を亡くして落ち込む兄を、どうすれば慰められるか考えた。

やはり泣いてすがつてくるところを、優しく抱き留めるべきだろうか。

それで起きたらいなくなっていれば少しは心が軽くなるかもしれない。

引きこもっているならこれ以上ひどくもならないだろうし、試してみる価値はある。

鍵のないドアを開いてそつと入ると、本当に明日はこの世の終わりかと言つぐらいの様子で固まって動かない竜がいた。こんな暗いところに一人でいたら、誰だって嫌なことを思い出し鬱々としてしまふ。

そつと近づくと、彼は気だるげに顔を上げ、突然立ち上がった。

聖良は思わず声を出しそつになつたが、何とか堪えて微笑みでみる。

笑い方が人間と同じなのか分からないが、努力はした。彼は硬直している。しかし、やがてふるふるると身を震わせ

「み……ミリアアアアアア」

そこから覚えているのは、突撃されて抱きしめられたことまで。気付くと、巨大なソファの上で寝ていた。



#### 4話 竜の里 6

「なんか……食べると気持ち悪い」

聖良は着た覚えの無いワンピース姿で、ベッドのようなソファに横になりながら、ギセル族の夫婦が作ってくれた、固いパンとスープの朝食を取りながら呟いた。

パンが固いので、今時の日本人らしく顎がそれほど強くない聖良は、スープにひたして食べている。ベーコンと野菜のダシが出ていて美味しいはずなのだが、食欲が湧かない。

「ねえ……何で誰も何も言わないんですか？」

身体がろくに動かない、しかも見知らぬ服を着ているこの状況で、誰も何も言わない。しかもいつも鬱陶しいほどひっついてくるアデイスが、触れてこない。

聖良の問い掛けに対して、アデイスやユイ達が目を反らす。ネルフィアの姿はないが、彼女はきつと自分で朝食を狩りに行っているのだろう。

そして、朝食を終えたミラと目が合った。

「あの竜が喜びすぎて大変だった。普通の人間だったら死んでいる。腰の骨も折れて、千切れかけた。よく生きていた。不思議」

聖良には、何がどう千切れかけたのか、聞く勇氣は無かった。

「ミラ、こう言うときは黙っているべきだよ」

「なぜ？ 死んでいないのに」

記憶がないのは幸いだが、聞いただけで気分が悪くなる。

ダメージが残っているということは、相当だったのだろう。本当に死にかけたのだ。

起き上がれないのも当然だった。

「……………痛み、取れるんでしょうか」

「あそこまでなれば、一週間は続きましょう」

ギセル族の夫の方、デテルが言う。

「致命傷に関しては一見すると治ったように見えるけれど、身体の中の小さな怪我はそのままになるの。いつもならすぐに治ってしまっ怪我也、大きすぎる怪我が治ってしまっくと、身体は正常になったと勘違いしてそのままになっってしまうのよ。血を飲んだだけだと、竜ほど回復は早くないし、竜にですら回復力に個体差があるから、仕方が無いわ」

妻の方、ルルトが言う。

いい加減な身体である。

「それでも普通の人間よりは早く回復するから安心なさいな。

でも、子供達のいたずらに付き合わされた挙げ句にあんな目に合っうなんて、なんてついてない子でしょうねえ」

聖良よりも背丈がやや低い小さな人達で、小人族だという。小人族の中では大柄な種族らしく、若い内は人間の子供でも通るらしい。小人に属する存在と身長差がないという事実になっただけ傷ついたが、視線が合う人がいるのは、純粹に嬉しかった。

聖良にとってはちようどいい、人型のアデイスにとっては少し小さなテーブルで、人間達はため息をついた。ソファに横になったまま、聖良はパンを千切って口に含む。

「……私、最近よく死にかけるんですよね」

「私も胆が冷えることばかりです」  
またため息。

覚えていないのは幸運だが、例えようのない腰痛と、内側の違和感な辛かった。食欲もないし、食べると気分が悪い。水を飲むと胃のあたりが気になる。

原因を考えるのが恐くて、考えるのを放棄した。

「まあ……過ぎた事ですね」

「セーラのその過去の事を気にしないところは魅力ですけど、同時に恐ろしくありますよ。もう少しだけ気にしてください」

アデイスが心配そうに言うが、聖良自身でもそう思うことがある。

もう少し恨んでもいいはずだ。しかし怨みはない。力の弱い聖良が悪いという結論に達する。

そうやって我慢するのに慣れて、それが当たり前になった。どうにかしたかったら、聖良が強くなればいいのだ。

もちろん肉体的に強くなるのは無理だ。ミラを見て、心の底から確信した。この世界の人間には、聖良ではどうやっても勝てないと。何にしても怒りはない。怨みはない。竜に対する恐れもそれほどない。

故意ではないというのが、大きいだろう。

痛めつけるために殴る手は憎いが、そうでないなら憎くはなれない。心に傷を負った人に、付け入るようなまねをした自分が悪いのだ。

「何にせよ覚えてないんで」

覚えていないって幸せだ。

身体の不調の原因が分かったところで、食べることを諦めアデイスに食べて貰おうとした時だった。

玄関で激しい破壊音がして　それが現れた。

「つきあああああつ」

聖良は突撃してくる鬼気迫る青い竜を見て悲鳴を上げて、痛みも忘れて立ち上がる。

「暴漢は切っいいい」

腰を抜かし、覚悟をして目をつぶったその横で、ミラが呟いて動く気配を感じた。

来るべき衝撃はなく、恐る恐る目を開くと、眩きの通り剣でその竜を串刺しにするミラがいた。

驚いていると外に出ていたネルフィア達が飛び込んできて、その様子を目撃する。

「ああ、ミラ、よくセーラを守ったね」

串刺しにして怒るかと思えば、逆に寝めるネルフィア。ミラは竜の胴を蹴り、グウウと呻く彼を踏みつけて剣を抜く。

昨日の竜だ。区別はつかないはずだが、なぜだか聖良にははつきりと確信できた。

大切な人に化けたから、怒っているのだと恐怖する。

怒りや恨みは無いが、恐怖だけは消えなかったようである。

「み、りあっ」

人間の姿をした聖良に、妹の名を呼んで手を伸ばす。驚いて後ろに下がると這って追いかけてこようとするので、その尻尾をネルフイアが掴む。それでも少しずつ前へ前へと這い進む。

「お前の妹はもう死んだ。情けない男だねっ。うちの子に何するんだいっ」

「離してくれっ。そ、その子はきつとミリアの生まれ変わりなんだっ」

どうやら彼の中で、聖良は妹続行中のようだ。

さすがに冗談ではないと、近くにきてくれたアデイスの背に隠れる。

「ミリアが死んだのは五年前だろう」

「年齢的にちょうど合うじゃないかっ」

聖良はあまりの言われように泣いた。

五歳。

五歳だと思われている。

「セーラ、若く見られる記録更新しましたね」

「なんて屈辱っ……」

涙が止まらなかった。あまりにもひどすぎる。

「この子はうちのセーラだ。お前の妹じゃないよ」

「生まれ変わって、記憶がないんだ、きつと」

「まったく困った男だね。ああ、ラゼス、持ってきたかい」

「ああ」

ラゼスは首輪のようなものを持って近づき首にはめる。そしてそれについた鎖を引っ張った。

「ほら、こいって」

「待ってくれ。ミア、これを、これはお前のものだっ」

ミアの可哀相な兄トロアは、小さな竜の頭蓋骨を差し出す。昨日よりも明らかに小さい頭蓋骨だ。

「お前が持っているんだ。そしていつか兄さんのことを思い出してくれっ」

ずると引きずられ、何度も何度も同じ言葉を叫びながら、その声が遠くなっていく。聖良は恐る恐る頭蓋骨を持ち上げた。

「人間の頭蓋骨と同じぐらいですよ、これ」

「竜は死んだときに小さかったら、死体は小さいままで」

そうミアが言った。明らかに竜を殺した事があるような言い方だった。聖良は極力それを気にせずに、言葉の意味だけを考える。

「昨日は竜に化けて小さくなったから、頭蓋骨も小さくなったって事ですか？」

「おそらくそう。竜は変な生き物」

ミアはポケットから取り出した布で剣についた血を拭い、手元を見ることもなく鞘に戻す。出来る女という雰囲気で格好いい。

こんなことをアデイスに言ったら、すがりついてこんな風にはなるなど言いそうだ。彼は肉体的には無力なぐらいの女の子が好きだろっ。

「ミアさん、ありがとございました」

「物切るの、好きだからかまわない」

「……………そうですか。切る物は選んでくださいね」

「でも死角から触れてこようとすると勝手に身体が動く。ユイの命令は身体を縛るけど、無意識の行動は縛れない。

剣を持つ者には声かけはとても大切。セーラなら死なないけど、人間は死ぬ」

「気をつけます」

そんな人間はあまりいないだろうが、他にもいるかも知れないので肝に銘じる。なにせ聖良は最近ついていない。

しかし彼女の場合なら付き合い方さえ気をつければ、どろどろし

た本音を抱えているような女性よりもずつと付き合いやすい。

綺麗に着飾って、自分より下だと思つ相手を見下すような連中をたくさん知っているから、いっそ気持ちがいいくらいだ。

「セーラも変な男に気をつけるといい。正気を失つた人間は何をやるか分からない」

「そうします」

ユイが複雑そうにミラを見つめている。彼は本当にミラを心配しているようだ。彼女はそれに気付いておらず、ユイが少し可哀相だ。

「ユイくんは心配性ですね」

「ええ！？」

「ミラさんのことが好きなんです」

彼は力一杯首を横に振る。振り続ける。それはそれで失礼だ。

「ミラのは好きか嫌いかで言ったら、身内だから好きだけど、世間ずれした世話がやける姉というか、感覚的には妹というか」

必死になつて否定する彼をハノが止める。

「ユイ、そこまで否定しなくても。ミラに失礼だよ。誤解されたくないのは分かるけど」

「ミラのことは、普通に好きだから。でも普通に好きただけだから。当のミラはきよとんとして首をかしげた。彼の好意も何も興味がなさそうだ。そんな彼女を見てハノが苦笑いした。

彼らの間柄は面白い。

目当ての夫婦が帰ってきたから、薬を受け取つたらもう帰つてしまふのだから。

彼等がもしも本当に遊びに来たのなら、喜んでもてなすだろう。

何も無い所だが、お茶ぐらいは出せる。

「それにしても、散らかってしまったわねえ」

ルルトが腰に手を当てて部屋の中を見回した。

ドアは完全に破壊されて、その破片が部屋中に散らばっている。

ドアは作り直さなければならぬと思いだろうと思ひながら玄関を見れば、入り口に昨日の子供達が立っていた。

「あら、お客さん」

聖良が笑みを向けると、彼等は脅えたように後ろにさがった。

「どうしたんですか？ あのお兄さんとネルフィアさんはいませんよ」

「知ってる」

彼らはうつむいて、しかしちらちらと聖良の顔をうかがう。

「昨日は、ごめんなさい。まさかにーちゃんがあんなに我を無くすなんて、思ってたなかった」

「別にいいですよ」

「でも……」

泣きそうな顔をしているような気がした。

皆の様子から、聖良がよっぽどひどい目にあっただけは分かる。

それを目撃していた彼らが罪悪感を持つのも仕方がない。

聖良も自分の計画で他人がそんな目にあっただら居たたまれなくなるだろう。

「気にしなくてもいいよ。でも、世の中には何でぶち切れるかわからない人がいっぱいいるから、相手を観察することは大切だよ」

「わ、わかった」

「うん、いい子ですね」

子供達は許しを得ると、やはりトロアも気になるらしく、ネルフィアが去っていった方へと走っていく。

本物の子供は無邪気で可愛い。

そんな気分に浸っている聖良の前に、身体だけ幼児が立ちふさが

る。  
「セーラ……あんないい笑顔を私には向けてくれたことないじゃないですか」

「え、子供扱いして欲しいんですか？ リボンつけますよ」

「それとこれとは別です」

「そう、別なんですよ」

彼を子供扱いなんてしないし、されたくもない。

アデイスがため息をついてから、聖良をソファに横たえた。

聖良は腰が抜けたからか、無理をして動いたためか、先ほどは何とか起き上がる事は出来たのに、身を起こす事も出来なくなっていた。

自分の腹を見て、抱えていた頭蓋骨が目に入る。

竜の頭蓋骨。

「……アデイス、この頭蓋骨どうしましょう」

「貰っておいたらどうです。竜になれるんですよ。竜相手だからひどい目に合いましたけど、確実にセーラよりは頑丈ですから、役に立つ事もあるんじゃないですか？」

「そうですね。置いていって押しかけられても迷惑ですし……」  
持っていったらそれはそれで押しかけられそうなので、これから用心するに越したことはない。深く考えると恐ろしくて眠れなくなりそうだ。

「セーラ、本当に大丈夫？」

いくら死ななかつたとしても、あんな目にあって平気なはずがないよ」

昨日の惨劇を見ていたユイは、聖良の手を取って言った。視線が聖良の腕から腰のあたりを往復する。そこが悲惨な事になっていた部位だ。

「アデイスはまだ子供だからあまり頼りにならないし、もしも不安だったら僕らと一緒に神殿に来る？ ミラがいるから絶対安全だし、アデイスが君を守る程度に大人になるまでさ」

「え……」

聖良には頼る相手が他にいないため、保身のためにアデイスと一緒にいるのは確かだ。彼がいなければ言葉も通じなかつただろうこの世界で、一人生きていけるはずがない。だから彼が大きくなるまで一緒にいるのは決定したことだと思っていた。

「君みたいな女の子が魔物が跋扈するような場所で暮らすのも不安



だし、ミラをさらに野生化したような竜と一緒に暮らすのも不安だし」  
まさにその通りである。聖良もそれは不安だ。

「セーラならばしくは十歳で通ると思うし」

十二歳からは、未婚の女性に入れないという言葉を出した。

「私、人の多いところは好きじゃないんで」

彼はきよとんとして聖良を見つめてくる。

十歳。冗談ではない。

それに今はアデイスやネルフィアがいるから安心だし、ユイ達も結局はよく知らない他人だ。アデイスがいなくなったら、きつと不安になるだろう。

男の子は苦手だし、何よりも屈辱的な扱いは嫌だ。

「セーラはとつても繊細な女の子なんですから、あなたたちのように女性の扱いを心得ない男に預けられますか。人間の姿だったら守る自信はありますから、ほつといてください」

不機嫌丸出しのアデイスが聖良の足下に座った。

彼も一人では寂しい。いろいろ悪さはしていても、幼い頃から大勢に囲まれて暮らしてきたのだ。その悪さも一人ではしていない。一人になる事に慣れていないだ。

「人間の時の方が強いってのも……」

「仕方がないでしょう。生まれたばかりだから、身体の方が出来上がってないんです。しかし魔術だけならミラさんに負けるつもりもありません」

ミラは剣を使うからアデイスでは絶対に勝てないだろうが、魔術師としての意地から魔術だけは上だと言い張りたいらしい。ミラのすごいところは、あれだけ動きながら呪文を唱えているところだ。

聖良は口を押さえて苦笑する。

「ちよつと恐いですけど、私はたぶん大丈夫ですよ。トロアさんのことも、もう油断してつかまつりしませんから」

トロアに関してはかなり不安はあったが、楽観的に先を見ることにした。きつと何とかなる。落ち着いてくれれば、押しかけてきて

もきつと冷静に話し合ってくれろと信じている。

「……そっか。  
分かった。」

でもこの薬を届けたら、いつかまた様子を見に来るよ」

赤の他人のユイがここまで言うほど、聖良はひどい目にあつたのかと、考えれば考えるほど自分の身体が恐ろしくなつた。

骨は歪んでくっついていないだろうか。

咄嗟の時は動けたので、大丈夫だろうと今は目をつぶる。

「心配してくれてありがとうございます」

不安はあるが、まずは心配してくれる礼を言う。

赤の他人なのにここまで言うってくれるなんて、さすがは聖職者だ。こつという事で人間の本质というのは見えるので、彼は本当にいい人だ。

「ところで今急に思い出したんですけどアデイス」

「はい？」

聖良は傍らにあつたミラに貰つた杖の柄を、アデイスに気付かれないようにソファに添えた。

「この変態！」

不意打ちを額に食らつた彼は悶絶する。

ソファで支えているので、そこまでの威力は無いはずだ。額だから、少しは痛いだろうが。

「い、いきなり何を」

「紳士ぶって覗きしてたなんて最低ですっ」

聖良はアデイスの頭をぽかぽか殴つた。

「痛いです」

「痛くしてるんです」

「傷つけられても怒らないのに、ひどいです」

「悪意があれば怒りますっ」

「だって退屈なんですもん」

「退屈だからって……痛い」

怒鳴りすぎたせいか、聖良は腹を抱えて悶絶する。

「大丈夫ですか。もう覗きませんから、今日は静かに寝てましょ  
うね」

「もう覗かないとか、そういう問題じゃ……」

「でも、一人しておくのは危ないでしょう。鉄砲水はともかく、  
ありえないことで怪我をする、そういう運のなさがセーラらしいん  
ところなんですから」

強く否定しきれない自分が情けない。

自分らしさって何と天に問いたかった。

「うっ……」

「セーラ、今ので納得するの？」

ユイが頬を引きつらせて言った。

「だって、今までの体験からそれぐらいはあっても……」

「セーラ、本当に大丈夫？」

「大丈夫です。雪解け水だと思うんで、一気に流れ出るなんてない  
と思います。お母さんが変な風に山で暴れなきゃ」

話を聞く限りでは、本気で暴れたらありえて恐い。

気をつけよう。

「……………覗かなかつたら、側にいてもいいですよ」

「セーラは暗いところが苦手なんですから、素直にそういつていれ  
ば良いんですよ」

「……………覗くのは問題外ですよ」

「何を今更」

「覗いたらクレアさんに泣いて訴えますよ」

「……………覗きませんから。セーラは服を着ていた方が好きですし  
「太ってて悪かったですね」

現代人は、貧乏人が太りやすいのだ。

「だから太ってませんって。ただ身長割にはいらぬところばか  
り育ってるだけじゃないですか。セーラはとっても可愛いですよ。  
ねえ」

「ぜんぜん太ってないよ。えと、身長割にはスタイルがいいだけで。いらなくないし」

「これ本物か。よく育ったな。邪魔じゃないのか」

アデイスにけなされ、ユイが可愛い顔に反して男らしい発言をし、ミラに胸を突かれ、聖良はため息をついた。

なんだか悲しくなる。

大人しく寝ようと、毛布を身体に絡めた。

「私もう一度寝ます。おやすみなさい」

聖良は毛布を頭まで被り、身体を少しでも回復させるために目を伏せた。

## 5話 あべこべのヒロイン気分 1

空をゆったりと泳ぐように飛ぶアデイスの背にしがみつき、頬を撫でる小気味よい風を感じる。

いつもと違いこうしてしがみついているのが楽だ。握力の違いを感じた。

「セーラ、下に降りたら返してくださいよ」

「分かってますよお」

聖良はアーネスの白い手を見て、にやにやと笑う。

現在彼女はアーネスの姿をしている。ふと男の方が力が強くてしがつきやすいのではないかと思いつき、アーネスの姿を借りたのだ。アデイスよりもアーネスの方が身長が高いので、こちらにした。視界がうんと高くて慣れるまでは少し恐かったが、少しどころかなり嬉しかった。竜の時も高かったが、人の姿で高いと感動が違う。背が高いとずっとこの視線なんだと思うと、すこし妬ましかった。

現在、二人で人里に向かっていてるところだ。これでもう三度目になる、アデイスの定期的な顔出しだ。

アデイスは街のそばにある林の中の、少し開けた場所に降り立つ。

「あーあ、もう終わりですか。着替えてきますね」

もう少し堪能したいが、いつでもできる事なので、聖良は元に戻る事にした。

アデイスの背から降りると、着替えのために木の影へと向い、途中で足を止めて振り返る。

「あ、そうだ。覗かないで……アデイス？」

聖良は我が目を疑い、目をこすった。

「どうしました？」

「えっと、なんか、周りが光ってますよ」  
その向こうでも似たような光があった。  
地面が光っている。

「え……げ、召喚じっ」  
アデイスがうつむいた瞬間顔色を変えて翼を動かし、聖良の目の前で彼の姿が消えた。

聖良は考える。  
召喚と言っていた。

聖良はそつと地面を覗き込む。地面には先ほど光っていた場所が焼けこげていた。

「召喚された？」  
どこに？

こんな所で一人で考えても、答えが出るはずがない。

ではなぜ召喚されたのか。  
聖良は荷物を抱え直して、周囲を見回す。

先ほど光っていた別の場所へ走ると、これまた木々の間だが離れていて着地しやすそうな場所に、先ほどと同じような魔法陣の焦げた痕があった。

「……着地しそうな場所に、無差別？」  
他にも探すといくつも見つけた。

この周辺に着地したら、通りそうな場所には手当たり次第だ。

「なんでこんな地道なこと……」  
もちろんアデイスが竜だからだ。考えられる可能性はそれしかない。

聖良の頭は真っ白になる。

「……うあ……ど、どうしよう」  
さすがに、混乱して泣きそうになった。

この世界の警察もよく知らないし、何よりもアデイスは竜で、大っぴらには出来ない。

「……って、私アーネスのまま」

慌てて呪文を唱えるが、いつも感じる力は何も感じない。距離が遠すぎる。

「ちよ、元に戻れないしっ」

聖良は混乱して頭を抱えた。

魔力が無くても元に戻らない。

この魔術はある意味の呪いなのだ。

「あうううう……落ち着け、落ち着け自分っ」

混乱している暇はない。

もしもアデイスに何かあったら、聖良自身にも害が及ぶ。本当に戻れなかったらと思うとぞっとした。

とりあえず、街に行つて何とかしてアデイスの部下二人に接触することが先決だ。頼る相手がいると分かっているだけ知っている。

大丈夫だ。

「頑張れ私っ」

荷物を持ち、とにかく走る。幸い、聖良のときよりも体力やら筋力がある。体格差というものでどれだけ損をしていたのか思い知りながら、とにかく走った。

綺麗なお花を腕一杯に抱えて、彼女は街角に立つ。

男達の値踏みするような視線をかわし、綺麗な花を笑顔で売る。

売り上げは問題ではない。

聞こえてくる話こそ重要だ。情報収集を怠るまっとうでない組織は長くもたない。

「さっきの人格好良かったけど変だったねえ」

格好良いという言葉に彼女は少し反応した。

彼女の主は最高に素敵なハンサムだが、他の素敵なハンサムを否

定するということはない。彼には恩を感じているし、それ以上に愛しているが、なにせひどく特殊な趣味の方だ。

長く安定を維持するには、割り切りの良さも必要である。

女など、どんな男を選んでも、どうせいつかは若い女に取られてしまう。それを今から自覚して、先を見越すことも生きるには必要。有能であると認められていれば捨てられる事はないので、情報収集スキルが上がるに越したことはない。

「話し方がすごかったねえ。呪われそうなの」

どこかで聞いたことがあるような表現。

「うんうん。しかも、私を知っているんですか、だってさあ。記憶喪失かよって」

「ああ、お持ち帰りしたかったなあ」

「仕方ないよ。記憶が無いからって持ち帰れるような雰囲気じゃなかったしさあ」

彼女は考える。

呪われそうな話し方。そんな話し方をする少女を知っていた。どんな姿でも、と言っていた。

半信半疑で彼女はその場を離れ、彼女たちがやって来た方へと歩く。

「……………まさかね」

だが、あの顔の少女が男になって、大人になったらハンサムだろう。お持ち帰りしたいぐらいハンサムだろう。

不安だった。

主の知り合いだからこそ何でもありな気がするのだ。

「自分を知ってるかだとお？ 何なんだてめえは」

「知らないんじゃないです」

知っている声が耳に飛び込んできた。

とてもよく知っている声だ。

いつも耳元で甘く囁かれる、痺れそうなほど色気のある低い声。

それがなぜか、呪文を唱える調子で話している。



「人にぶつかつといて、侘びも無つ」

シファはしばし悩み、とりあえず、その無礼者を背後から手近にあつた角材で殴り倒した。

「昼真つから当たり屋なんて、治安が悪くなつたのかしら。

さ、お兄さんこつち」

かなり無理のある言葉だが、とりあえずこの場を離れないと焦っていた。無理矢理手を引き、少し離れた裏路地に連れ込む。

彼女は記憶喪失のような事になっている主を見上げた。

「アーネス様、昼間から何をなさってるんで……って、な、なぜ泣いて!？」

自分は何かしたのだろうかと、戸惑つた。

短くはない付き合いだが、今まで彼の涙など見たことが無かつた。なのに彼は大粒の涙をぼろぼろとこぼしている。

そんな弱々しいアーネスも素敵だつた。しかも少し可愛いと思つてしまつた。アーネスに母性本能をくすぐられるなど、新境地だ。

「あ、アーネスの愛人さんの……シファさんですよね？」

アーネスは彼女の肩に手を置いて、泣きながら言つた。

「え……アーネス様何を言つて？」

「せ……モリイです」

彼は鼻をすすりながら名乗つた。

モリイは金髪の美少女のはずだ。少なくとも、アーネスと双子のよう似ているなどということとはなかつた。

「何を言つて……」

確かに話し方はモリイそのものだが、顔も手も、間違いなくアーネスだつた。

「色々と事情があるんです。デイさんかジェイさんは？」

「二人は、アーネス様含めて夜にしか姿を見せないじゃ……」

彼は泣きながらため息をついた。

余裕綽々と生きているアーネスでは、絶対にしない余裕の無い表情だ。

演技ではなく、本当にアーネスではない。

アーネスには聞いていたが、とても信じられる事では無かった。

「……………何がどうなっているの？」

「ええと……………入れ替わったんです」

入り替わる。身体をとということだろう。

アーネスは恐ろしい魔術を使ったものである。深く考えると、それはかのハーネスが行っていた魔術並にすごいのではないものだ。あれは乗っ取りだった分、危険が高かった。しかしこれなら失敗しても危険はほとんどない。

つまり、ハーネスの術を越えている。

「入れ替わったって……………本当に？」

「本当です。信じてください」

「……………信じますけど、アーネス様は今モリイの身体で？」

「はい」

「どちらに？」

「たぶん罠に掛かって召喚されました」

「なんで」

理解不能だ。召喚とは何だろう。召喚とは。

「変な魔法陣があつて、消える直前アーネスが召喚って言っていたんです」

「モリイの代わりに？」

「はい。彼もたいがい不幸体質ですから」

そう言われると、数々の奇跡と不運を見てきた彼女は否定できなかった。

なぜかモリイと入れ替わり、モリイの代わりに誘拐された。

「となると相手は魔術師。それだけのことが出来る魔術師なんて限られるわね。だったら調べようがあるわね。女の子を召喚したい魔術師なんて、そういうないもの」

「いや……………あの」

アーネスの姿をしたモリイは、気まずげに視線をそらす。

「ジェイさんとは連絡取れますか。ものすごく急いでるんですけど」  
「無理よ。夜しか来ないもの」

「組織の幹部と夜しか会わず連絡も取れないって問題ないですか？」  
「今初めて問題が生まれたわ。まあ、あの二人がいなくても何とかなるでしょう」

「……………二人は理解してくれると思うけど……………」

「何を？」

彼女は先ほどから端切れ悪い。アーネスはこのような態度は取らない。  
「あ……………」

「だから何が？」

彼女は頭をかきむしる。何か言いにくい事があるのだろう。

「アーネス様の身が危険なんでしょう。あなたの身体にいるなら、なおさら不安だわ。自分の身体が心配でないの？」

彼女は遠い目をして並び立つアパートの隙間から見える晴れた空を見上げる。

「……………ちょっと、前の時の姿と違うんです」

「違う？」

「……………竜の格好しています」

シファは我が耳を疑った。

「は？」

「竜なんです」

泣きながら訴える彼女は、アーネスだから少し不気味だ。いつも無意味に邪悪で影のある爽やかさを身に纏う彼が、弱々しく泣いているのは不気味だった。

しかし弱々しいのもハンサムだからこそ許せてしまう。顔が良いというのは、こういうところでも得をするらしい。

現実から目をそらしかけ、シファははっと我に返る。

「モリイ、あなた竜なの？」

「……………」

彼女はついと視線をそらす。

確かにアーネスは竜を捕獲すると意気込んでいた。しかしその前に行方不明になり、ジェイ達は捕獲に失敗したと言っていた。輸送部隊にいた知り合いが、親が帰ってきたのに偵察に行っていた二人はずいぶんとあっさり無傷で帰ってきて驚いていたのだが、こういう理由があつたのだ。

他の誰でも無い、アーネスだからこそ、あっさりと受け入れる事が出来た。

「どうしてアーネス様があなたの所に？」

「お母さん、恐いんです。赤の魔王とか呼ばれてて、この前は殲滅の悪魔さんと喧嘩していました」

背中に冷たい汗をかいた。

さすがにそれには、アーネスも逆らえないだろう。人間が手を出来る領域ではない。

「で、お母さんに食べられないように、どういう流れだったかでペツトって事になって、ペツトは家族だから、彼は私の弟だって。下手に逃げたらまた人間が誘拐に来たって勘違いして、人里の一つや二つは壊滅すると思うんです」

それで逃げられないのだ。

「……………他の誰かなら笑い飛ばすけど、長だから有り得るし」

「長く隠しておける事じゃないと思うので言いますけど、あまり口外しないでくださいね。体面もありますし」

「できないわよ、そんなこと」

「お願いします。アーネスが信頼している感じだったから話すんですよ。血はもう分けているから問題ないんですけど、どうなるかと思うと恐くって。あの人も大概不運な人だから」

「……………死んじゃったら戻れるの？」

「戻るわけじゃないじゃないですか。私の代わりに死にますよ。

胴体切断されかけてもなんとか生きてましたけど、切断されたらたぶんさすがに死にますし、剥製にされても死にますよ」

「探さないとっ！」

シファはその危険をようやく理解できた。

血を分けてしまった竜など、実験用にひどいことをされるか、剥製にされるか、薬としてパーツをばら売りにされるかのどれかだと聞いた。

そうなったら、シファの明日の生活も危うい。

自分の幸せは自分で築かなければならない。そのためにはアーネスが必要不可欠だ。

もちろんアーネスのことは慕っているが、地位の安定と愛情はまた別の話。

そう教えてくれたのもアーネスだ。

「もしもアーネスと身体に何かあったら、お母さんが怒り狂ってこの街を壊滅させると思うんです」

「ひい……」

アーネスとモリイだけではなく、自分の身にも降りかかる不幸となれば、一刻の猶予もない。赤の魔王が攻めてくるなど、冗談ではない。

「い、行くわよ」

「は、はい」

モリイは涙を拭い、背筋を伸ばしてついてくる。そうしていると、凜々しい雰囲気が出て胸が高鳴る。普段のアーネスはあまり真剣な表情を浮かべない。だからそんな決死の表情は新鮮で、やはり格好いい。

やはりこの人に拾われて良かったと思うのだ。

## 5話 あべこべのヒロイン気分 2

アデイスが目を開くと、暗い場所に横たわっていた。

彼の目は星明かりでも周囲が見えるから、わずかに漏れる明かりで部屋の広さと家具の配置は見えた。

起きあがるうとして、身体が痛くて動かないことに気付いた。血の臭いがする。

「……………なん」

薬を打たれたとかそういう感じではない。身体の奥から、何か違和感を覚えた。

「ご主人様、目覚めました」

女の声が聞こえ、ちらとそちらを見る。あまりにも微動だにしないから置物だと思った人の形をした何かから声がした。意識して見るが相変わらず動かない。人間多少は動いてしまうものだが、彼女は人形のように動かない。気配がない。

「人形……………」

あれは人形だ。動く人形。

足音が近づいて来る。

明かりを手に、階段を上って部屋に入った男を見て息を飲んだ。

人形師。

黒いスーツに黒いマント、顔には仮面の人形師。

その人形は生きたように動き、思考して主に仕える、完全なる恋人であり妻であり娼婦である。

この生きたような人形を手に入れるため、どれだけの人間が彼に挑んだか、アデイスは知らない。

「本当に起きた。あれで死なないとは、竜とは頑丈な生物だ」

どうやら動けないのはかなりの重傷を負ったかららしい。聖良が動けなくなったのは、腰をやられたからだ。アデイスもどこか動けなくなるような怪我をしたのかもしれない。

もしそうであるならば、召喚が失敗でもしたのだろう。

竜でなかったら死んでいる恐ろしい目に合ったようだが、ここはセーラのように軽く流す事にした。

問題は過去ではない。

今まさに身体がろくに動かない事と、竜の姿をしている事と、この究極の変態と有名な男に捕らえられているらしいという揺らぐ事無い事実。

アデイスは人形師を睨み上げた。

彼に召喚されたのだ。

セーラの背後に光るものが見えた。つまりは手当たり次第アデイス達が通りそうな場所に召喚陣を敷いていていた。竜だけに反応するのは難しいが、魔力を持たない動物では反応しないような召喚陣は簡単だ。その簡単は、アデイスにとってはという意味だが。

実際にこうして間近で対面するのは初めてだが、人形師の魔術師としての腕は聞いている。噂は正確だったらしい。

「しかし残念だ。せつかく優れた子供の竜なのに、もう血を分けているとは」

竜が血を分けていることを確かめるのは簡単だ。舐めて、自分を傷つければいい。

つまり分けた相手　セーラの事は気付かれなかったのは幸いだ。

こんな見るからに変人の極みに行くような男が、今更ながら不老不死が欲しいなど信じられない。この男が顔を隠しているのは半悪魔としての模様を隠すためだと言われている、悪魔の血が強かったのか十分すぎるほどの魔力と寿命を持っている。わざわざ竜を捕らえて魔力を得なければならぬほど魔力を必要としているようには思えない。

この男は何を考えているのだろうか。

「どこまでやれば死ぬか試してみたいものだが」

それはつまり、死ぬまで拷問。

冗談ではない。

アデイスは必死に身を起こした。

「ダメよお兄さま。お兄さまの知的好奇心を満たすために捕まえたんじゃないでしょう」

男か女か分からない声が下の階から聞こえた。

階段を上る床のきしみが響き、女性の姿をしたそれが現れる。

「ちゃんと傷を治してからじゃないと」

「分かっている」

それは兄と呼んだ人形師に背後から抱きついて、アデイスへと微笑みを向けた。

華やかな美人だ。丁寧にセットされた巻き毛に、手の込んだ化粧。色気はあるが身体のラインを隠す赤いドレスに、動きやすそうなかとのない靴。

このことも知っている。

フレアと呼ばれている半悪魔。半悪魔としての模様はほんの少し類に掛かる程度の目立たず薄い物で、それも化粧で隠されているため、半悪魔だとはなかなか気付かない。そのため、魔術師としての腕だけで評価されている変人兄弟。

そう、弟だ。

男なのだ。

似合っているのでアデイス的には問題ないが、ぱっと見は女なのでたちが悪いらしい。

「お前が式を間違えたからだろう」

「だって、夜中つてよく見えないんだもの」

「下準備をしたのは昼間だろう。夜にしたのは判を押しだけのような作業だ。竜を欲しがったのもお前だ」

「えへ」

兄の前にいるせいか、噂に聞くよりも可愛らしい印象を受けた。

しかし半悪魔のはずの弟が、なぜ竜を欲しがったのか。

「まったく、本物の竜のぬいぐるみが欲しいとは」

「それぬいぐるみ違うっ」



思わずアデイスは口に出した。

まったくなんと恐ろしい兄弟だろうか。たかが竜が欲しいなどという理由で、あれだけのことをするなどあり得ない。

アデイスは飽きるほど生きているだろう、人外の生物に対して恐怖した。

どこぞの愚かな王族や大富豪の道楽でもここまでではなかなかしいはずだ。

「大丈夫だ。中身を綺麗に取り除いたら、少しだけ縫うことになる」  
アデイスはあまりの台詞に頭を抱えた。

救いといえばセーラがここにいない事。

着替えのためにすぐに離れたから、彼女は巻き込まれなかった。

賢い彼女なら、どうにかして頼れそうな相手を探し、ジェロンとアデイスに助けを求めてくれるだろう。

離れているので元の姿に戻れないかもしれない。

しかし、幸いにも彼の可愛い弟子達には、モリイの事は伝えてある。きつと何とか上手い言い訳を考えてくれているに違いない。

そう信じたかった。

「元気な竜ね。可愛い」

「気に入ったか。良かったな」

「お兄さま、完成にはどれぐらいかかるかしら？」

「数日中に。最終的に内臓は取るが、薬を効かせるためには完全である方がいい。わずかな時間を惜しんで、出来上がりが悪くては意味がない。皮膚がくすんでしまったら台無しだ」

「分かったわ」

フレアは人形師の肩に頬を擦り寄せる。

アデイスはちらとここを見張っていた人形を見た。

人間と見まがう出来の、しかし人間ではあり得ない完璧な状態の人形。さすがにこの暗さでは細部まではよく見えないが、噂ではほんのわずかな色むらなどがあるらしい。『無い』のではなく、『有る』のだ。

彼の人形の材料は、生きた人間だという噂がある。  
どうやら本当だったようだ。

アデイスはふと、食べられた時の事を思い出す。  
あの時は必死だった。

しかし何だろう、今のこの 絶望感は。

セーラはネルフィアに攫われるときに、何も考えないようにして恐怖を紛らわせたと言っていた。彼女は立派だ。人はいざそれをしようと思っても出来るものではない。

「待っててねチビ竜ちゃん。痛くないし、苦しくもないのよ。真っ白な心のまま、永遠の少女になるの」

「これはメスなのか？」

「どちらでもいいけど。可愛いもの」

アデイスはとにかく、この二人が部屋から出て行ってくれるのを待った。

表面に出して混乱して脅えるのは後からでいい。  
今はどうやって逃げるか考えるべきだ。

だから、お願いだから一人にしてくれと願った。

組織のボスの愛人というのは、ものすごかった。

子供だてらに大人に命令し、調査を始めた。

聖良はする事がなくて、もう一人の愛人のロゼ女といっしょにお茶をしている。少しぼっちゃりとした、ふわふわとした金髪の女の子だ。ものすごく子供らしくて可愛らしいが、シファよりも年上の十四歳らしい。フリルをたくさん使ったドレスはお人形のように本当に可愛い。

「モリイ、アーネス様の姿でそんな顔しないで。ドキドキしちゃう」

「……………すみません」

年下の女の子に慰められる自分の弱さが情けない。

「アーネス様ならきつと大丈夫よ。自分で帰ってくるんじゃないかしら」

「魔術使えませんよ。まだ発達途中で舌が回らないから」

「……………」

「力は強いですけど、まだ子供なのでそれだけです。お母さんみたいに強くありません」

「……………大変」

だから落ち込んでいるのだ。自分が何も出来ないから。

「アーネス様は運がないから、今頃危険な目にあってないかしら」

「はづ……………」

「つて、泣かないでっ。落ち着いて。そんなこと出来る人達は限られてるから、今確認取ってるから！ モリイの身体は大丈夫だよっ！」

「生半可な事じゃ死なないのでそれほど心配してないんですけど、彼だと思つともう不安で不安で。私達、出会った頃から不運に付きまとわれて……………」

もし綺麗な尻尾が切れたりしたら……………」

トカゲのように生えてくるかもしれないが、生えてこないかもしれない。

そんなことになったら、聖良の楽しみがなくなる。あの尻尾を見るのは楽しかったのだ。

「お願いだから泣かないで。」

もう日が暮れたから、そろそろジェイさん達が来ると思うわ。だから何とかしてくれると思うから。ね？」

「はい」

「……………ところでモリイ」

「はい？」

聖良は声の調子を変えて顔を寄せてくる口ゼを見つめ返す。

「本当にアーネス様とは何でもないの？」

「は？」

「何もしてないの？」

ナニがナニを指すのか理解して、むすっとして唇を尖らせる。

「しません。するわけないじゃないですか」

「アーネス様って、一度不味そうなものも食べたがるタイプなのよ」

「不味そうって、失礼ですね。けっこう可愛いんですよ」

モリイはもちろん、竜のアデイスもミリアも、セーラの姿が関わらないため、みんな美少女だ。

「ところで、不味そうなものとは具体的に……」

「ああ、気にしないで。モリイの気にするべき事はないから」

「まあ、あの人が何をしてようが構わないんですけどねえ」

「もう少し気にしてあげても……」

気にするなと言ったり、気にしろと言ったり、子供というのは難しい。

「アーネスにはアーネスの生活がありますから。危ない事とか、あり得ないぐらいの悪ささえしなければ、何をしよう」と

安全ならいいのだ。安全でないからため息が漏れる。

「元気出して。きつと身体は無事よ」

「アーネスの事も心配してますよ？」

「もちろん分かってるよ」

身体だけが心配とでも思われているんだろうか。

その他にも心配な事がありすぎて困っているのだ。

元に戻れないかとか、ネルフィアとか。

「ああ、もうなんでこんなに運がないんですか私達はっ！」

八つ当たり君に叫んで立ち上がった瞬間、部屋のドアが開いた。

「長が竜で誘拐されたって!？」

「いるじゃん！」

ジェロンとディアスが混乱極まった様子で入ってきた。聖良は悩み、二人を手招きする。

「こんばんは。モリイです」

「……………どうなってる」

聖良はちらと口ゼを見た。それに気付いはジェロンは、手招きして聖良を隣室に招いた。

「一番初めにシファアさんに見つかってしまい、とりあえず身体を入れ替えて、私が竜だつて事にしておきましたので」

「お前、それでいいの？」

「隠して探せるとも思えませんし、見つけたときに言い訳が……………」  
「確かに、ずっと隠し続けるには無理があるよなあとは思ってたけど。」

「どうやってもあんなのが飛んでたら目撃情報出るからな」

「目撃されたから仕掛けられたんでしょう」

「ディアスとジェロンがため息をついた。」

「遅かれ早かれだ。」

「これからは来る時の方法を考えなければならぬ。」

「あの魔術の事が知られるよりは、良かったでしょう」

「まあ、お前さんの話し方ならな説得力あるしな。血のつながりのある自分達以外は出来ないで通せば良いし。で、お前さんがとつても不器用だから長がいないと何も出来ませんって」

「失礼な……………本当に何も出来ませんけど」

「ま、長のごときはジェイに任せておけ。こいつの探査魔法なら、一晩あればなんとか」

探査魔法。

聖良はふと、自分とアデイスの距離のはかり方を思い出す。  
光を出すための呪文を唱える。

出てきた小さな小さな光は、だいたい半径五キロ以内ぐらいの魔力だ。

「どうした？」

「今思い出したんですけど、私達って血のつながりがあるから、魔力を分け合ってるんですよ。で距離によって届く魔力が変わるんで

す。

彼、今半径五キロ以内にいます」

「そういうことは早く思い出せ」

「計ったはいいけど、いつも一緒だから忘れてたんです。これが出るって事は、生きているんだと思うので急ぎましょう」

聖良はロゼが大人しく待っている部屋へと戻り、微笑みを向ける。年下の女の子に心配をかけて、慰めてもらってしまった。反省せねば。

「アーネスを見つける方法があるから、二人と行ってきます。

必ず連れてきますから、待っていてくださいね」

「わ、わたしも行く」

聖良が行こうとしたら、ロゼが立ち上がった。

「危ないからここにいて下さい。私は行かないと意味がないので行きますけど」

「ダメ。お迎えに上がらないなんて失礼なこと出来ないわ。

シファ、なんか居場所が分かるみたいだよ。おいでっ!」

「ええっ、本当!? さっすがジエイ様」

ここで出てくるのがジエロンの名であるのに、信頼の差を感じた。「あの、いや……危ないですから」

「大丈夫。私達はただアーネス様のお人形をしているわけじゃないのよ。アーネス様は使えない女つてすぐに飽きるから、飽きられたくなければ使える女にならなきゃならないの。努力しているのよ」

聖良はジエロン達に救いを求めるが、彼らは首を横に振る。

「だめだ。言い出したら聞かない」

「子供を好きにさせてどうするんですか。大人の威厳は」

幹部ならビシツと言わないと。

「危険だからここにいなさいってのがまず無理なんだよ。シファはともかく、ロゼの方は下手な部下連れてくよりも役に立つから」

「長は子供の育て方が上手いんですよ」

実に彼らしい特技であるが、そんな特技はこの際邪魔である。

しかし彼女はとつとと進み、馬の手配をしている。

「むしろ一番足手まといはモリイです」

「仕方ないじゃないですか。私でないと術かけられないでしょう」

「あれが私にも出来たら、あなたは安全なところにおいてもらうんですけど」

彼らはため息をつく。

聖良はまた泣きたくなくなった。役立たずなのは彼女のせいではないのになぜ悩まなくてはならないのか。

すべては秘密結社など作っているアデイスが悪いのだ。

見つけたら、可愛いリボンをつけまくってやる。

## 5話 あべこへのヒロイン気分 3

逃げたかった。

しかしなぜかアデイスの目の前で、フレアが元人間らしき人形の髪をといて遊んでいる。

身体が動くようになったか調べたいが、調べたら彼は喜んで人の内蔵をくりぬいてくれるだろう。しかし目立つ傷を残すようなやり方で人形にして、何が楽しいのか。

アデイス自身も変態だ変態だと言われているが、彼らに比べたら、かなりノーマルだとすら思えてくる。

「うふふ。もうすぐお友達が増えるわよ。パミラ、嬉しい?」

「はい、フレア様」

人形は柔らかく澄んだ声を発した。死人の目をした、美しいが不気味な人形だ。

「名前はなんてつけようかしら? パミラはどう思う?」

「いかようにも。フレア様が付けた名であれば、どのような名でも喜びとなります」

「うっん、どうしようかしら。可愛い名前がいいわねえ。」

竜の美醜って分からないけど、きっと美少女だと思うの。声可愛いし」

確かに竜アデイスの声は可愛い。自分自身でも可愛い子供の声だと思っっている。

あのセーラが、この姿でいると可愛いと言って優しくなるほどだ。竜は恐ろしいという先入観さえなければ、幼い竜の姿は可愛く見える。

竜の村に行った時、子供達はとても可愛かった。自分は種族も関係ないのかと少し不安になるほど可愛らしいと思った。

だから他人がアデイスを見てそう思うのは、当然の事である。

「可愛い名前……竜に似合う可愛い名前」



オカマに命と意志を奪われてオカマにされそうになっている、というのがアデイスの現状である。

世の中には大人でもセーラのように可愛い女性がいる。

そのセーラとそれほど年も違わないのに、子供のように無垢で可愛い少年もいる。

いつそ育ちすぎていても、普通の男性や女性だったらいくらよかった。

なぜこの変人兄弟なのか。もう少し御しやすいのでもいいではないか。なぜこの厄介極まりない兄弟なのか。

アデイスは心の中で恨み言を呟く。

檻が開いた瞬間が好機なのだが、この二人を今の状態でどう出抜くか。

人の姿だったらいくらでも手はあるが、今はなにせ無力な子供である。人間のアデイスだったら、簡単に事はなせたのに、なんてついでにないのか。

しかしこんな小さな子供の命を、ぬいぐるみが欲しいなどという馬鹿げた理由で奪おうというのだから、彼らの非道さは底なしだ。

非道な連中が二人でこうして生きているのは、やはり実力が伴っているから。実力がなければ今頃クレアに始末されている。

「それほど悩むなら、本人にうかがってはいかがですか」

アデイスは目を伏せ、眠るふりをした。

アデイスともアーネスとも名乗れるはずがない。

名乗る必要もないし、名前なんて忘れてしまっても知れない。

ストレスで胃が痛い。

セーラの柔らかい頬を舐めたい。殴られてもいいから頬ずりして抱きしめて舐めてしまいたい。

あの時の彼女はとにかく可愛くて可愛くて、嫌がれば嫌がるほど喜んでやっってしまうほど可愛いのだ。最近アデイスはセーラに依存して生きているような気がした。これが血のつながりというものなのかもしれない。

元々一人でいることや、知らない相手と二人きりになることがなかったので、知り合いが以内と不安になり、一緒にいるのが悪意のある赤の他人であるのがストレスになっている。

元気も出ないし、胃が痛い。

このまま死ぬのかなと思うと、キリキリと胃が痛んだ。

ひよつとしたら、まだ内臓にダメージがあるだけかも知れないが。

聖良は口ゼの繰る尻馬に乗り、彼女の腰に手を回して時折呪文を唱える。光が強くなればその方角が正解。変わらなければ左右のどちらかに行く、弱まれば戻る。

そのようにして、大体の方角を掴んだ。徐々に光が強まる方に行き、やがて歓楽街らしき場所に出る。

「意外だな。売られるにしても、地下の連中の所だと思ったのに」  
ディアスの言葉に、聖良はここではないところに居を構える、悪い組織なのだろうと判断した。聖良は知る必要はないことは、知らないままでいることにしている。人間、知らなくていいことは多く、好奇心はいい結果を生むことの方が少ない。

「犯人はワンデルさんでしょうか？」

「それはないだろ。長達がここに戻るようになってまだ三回目。あの慎重な人がするはずがない。あんな無駄な事もしない。あれだけ出来るのは長クラスの魔術師か悪魔かその魔道士か。

それに人里に出入りしている竜なんて血の価値がない可能性も高い。だからあそこまでするとも思えねえ。竜は巢にいるガキを捕まえて、初めて価値があんだからな」

そういうものなのだと半ば感心しながら、聖良はもう一度呪文を唱える。

光はさらに強くなった。

「この道を進んでください」

「ええ」

ロゼは少し振り返り、聖良を見上げてくる。

「大丈夫ですよ。この方法が通じるって事は、ちゃんと生きていますから」

彼女はこくこくと頷いた。そのしぐさがとても可愛い。今の可愛らしさは素の可愛らしさだ。アデイスがするように、抱きしめて慰めたくなる。

「ちよつと、あんた！ さつきから眩しいんだよ！ 子供なんて連れて、何してんのさっ」

突然怒鳴られ、聖良は驚いて唱えていた呪文を中断する。怒鳴ったのはアデイスと同年代の、派手だが綺麗な女の人だった。聖良でも、彼女が何らかの夜の仕事をしているのだと分かった。

「すみません。人を探していて。」

この辺に腕の立つ魔術師がいるのをご存じないですか？」

聖良が出来るだけ穏やかに尋ねると、不機嫌だったはずの彼女は、頬を染めて急にしおらしい態度になった。

世の中とはこうも容姿が物を言うのだと、聖良は空しさを覚えた。このようになるから、アデイスがあんな大人になったのだ。

「魔術師を探しているのかい。腕の良い魔術師は城にいるだろ。そういうお方は身分を隠して来るからねえ」

女性は困ったように首をかしげる。聖良もさすがにこれ以上の絞り込みは難しく、落胆した。

聖良が話しているのを見て、ディアスが寄ってきて女性に尋ねる。「んじゃ、どっかに大きな魔法陣を書けるような場所はないか。それを書ける場所を持っているか、借りた奴。本当にこの周辺なんだ」「半径百メートル以内です」

ディアスと聖良の言葉に、彼女は首をかしげた。

「魔法陣……ひよつとしたら、あの怪しい男なら持っているかもね」

怪しい男。

そんな怪しいと言われているような男が、アデイスを誘拐できたのだろうか。

「最近住み着いたんだけど、いつつも仮面を被った男でさ。時々えらく綺麗な女をつれて歩いてるよ」

「仮面……人形師か。あんなのがこんな所に住み着いてるのか」

ディアスが爪を噛んで苦い顔をした。

「そいつどこにいる？」

「この裏だよ。一つだけ店が閉まってるからすぐ分かるよ。」

お兄さん、用が済んだらうちにおいでよ。あたしはその店で働いてるんだ。特別、うんとサービスするよ」

聖良はお店を見て、少し困った。彼女がどのような店で働いているのか、聖良には判断がつかなかった。お触り禁止でごついお兄さんがいるような店なのか、それこそ日本では違法になるような店なのか。

「あ、ありがとうございます。今日は立て込んでいるので、行けるかどうか分かりませんが」

「ああちょうどいい。馬屋ある？ 後で遊んでくからさ、預かって欲しいんだ。これ、前金で」

ディアスは娼婦に銀貨を手渡し、人なつつこい笑みを浮かべる。

彼もアーネス程ではないが、ハンサムな男性に化けている。

「お兄さんもいい男だねえ。安心して預けてくださいな」

「サンキユ」

場合が場合だし、彼らも年頃の男だから仕方がないが、女の子の前でする話ではない。

聖良は先に馬から下りて、ロゼの腰を掴んで下ろしてやる。必要はないだろうが、彼女はスカートだ。彼女は少し照れた様子で礼を述べ、女性が呼んだ男に馬を任せ、皆は目的の場所へと向かう。

「ディ、何の準備も無しに乗り込むのは無謀じゃないですか？」

「そうは言っても仕方ないだろ。今の長じゃ危なすぎる」

ジェロンとディアスが囁き合う。

先ほど彼は人形師と呟いていた。

「アーネスをさらったのは誰なんです？ 変な人ですか？」

「この国に住み着いている半悪魔だよ。昔からこの国に住み着いている最悪の変人。長がノーマルに見えるぐらいド変態の変人」

アデイスはせいぜい自信家でロリコンなだけである。変態ではあっても、ぎりぎり変人ではない。

「それがなんでまた」

「人形師って呼ばれている男だ。半悪魔ってのは片親が悪魔だから、寿命がハンパ無く長いんだ。

だからあいつは気に入った相手を自分の側に置き続けるために、生人形にするんだよ。

一度殺して、魂を封じ込めて人間のように動いて考える。考えるっていつても、洗脳されて主のためだけに生きる人形になる。そういうのを侍らせて喜ぶ変態なんだよ。

自分の物にならなくても、可愛い子を見てるだけでも満足する長とは正反対のタイプだな」

血の気が引いた。

聖良の可愛い竜のアデイスが洒落にならないほど大変だ。

「その上、そいつが半端なく強いらしい。魔術の腕は長並って考えてもいい。魔力は人間よりもはるかに上。今の長なら魔力でも引けを取らないけど、あいにく無力なお子様の中だ。

俺達じゃさすがに刃が立たない。他に對抗できそうなのは、城にいるクレアとエリオットだが……まさか助けなんて求められないだろ……ってまた泣くなよ。その姿で泣いても、可愛くないからな」

聖良は目尻に滲み出た涙を拭う。

クレアは問題外。エリオットは違う意味で問題外。

あの人と目を合わせられない気の小さな彼の方が、この二人よりも実力が上なのには驚いた。宝の持ち腐れである。実力があるから、あの性格でも生きていけるのだ。

「まあ、長を助け出したらどうにでもなるか。モリイはなんとかして長を人型にしろ。危ないからお前達は待ってる」

「いやよ。シファはともかく、わたしは行くわ」

ロゼは断固拒否する。

「何かあってもそれは自分の責任。分かっているわ」

「そこまでいうんなら、まあ、いいけどさ」

デイはそれから黙って勝手口に戻り、中に侵入する。

暗くてよく見えないが、空気が暖かい。誰かが火を使っていたのだろう。

しかし今は誰もいない。

つばを飲んだ。

アデイスとは嫌でも一心同体。今はお互いがないとダメな関係。何よりも、彼は家族だ。あんな変態でも、聖良には無条件で優しくしてくれる。両親が死んでからずっと一人だった聖良を満たしてくれた、大切な家族だ。彼がいなければ、母のようであるネルフィアとの縁も切れる。

だから、絶対に『五体満足』で助け出させなければならぬ。

## 5話 あべこべのヒロイン気分 4

まあなんだ。

人としての通る欲望の道は一通り体験した。人肉まで味わってしまつたほどだ。自分の肉だが。

アデイスはそう心の中で独りごつ。

紳士的で健康的なのが一番と結論づけて、最近ではゼロ歳児になつてしまつたので驚くべきほど禁欲生活に楽しく浸つていたのにこれとは、過去の罪は罪という事なのだろうか。

幼い頃のような青臭い無茶はもうしないのに、容赦のない事だ。

せめて、このオカマだけでもどこかに行つてくれないだろうか。

ついには名前を「デイシア」などと決めてくれたらしく、かなり浮かれながらアデイスの尻尾を引っ張つて、リボンを付けてくれている。

なぜ尻尾にリボンを付けたがるのか、女心は理解できない。彼は男だが。

身体の方は回復した。セーラのあれが回復したのだから、竜であるアデイスが回復しないわけがない。

それ以外でアデイスに出来ることは、飛ぶこと、火を噴くこと。

火を噴いて火事にしてしまふというのもいいのだが、彼ら相手ではあまり通用しないだろう。子供なのでそれほど広範囲に届かないのだ。

彼らは竜が火を噴くことなど分かっているから、対策ぐらいはしているはずだ。しかし火事を起こすのは簡単にできる。ここは木造建築だ。アデイスの身体は炎の中に立っていてもそれほど苦痛を感じない身体である。

しかし問題は檻だ。出られなければ意味がない。

ここがどこなのかも分からない。条件によっては、火事にするの

もいい。魔力は強いが身体は人間の脆さを持つ彼らは、火事に巻き込まれてはひとたまりもないはずだ。

悩んでいると、階段を上る音が聞こえた。

「フレア」

人形師が顔を出し、道具を引きずって持ってきた。なにやら先のとがった鉄パイプやら、錐のような物やら、怪しげな薬剤やら。

「兄様、それ、どうするの？」

「どう作るか悩んでな。内臓を取り出して剥製のようにするか、人間のようを作るか」

「人間のようになりたいわ。その方が綺麗に出来るもの。竜は服で隠せないのに、傷を作るのはイヤよ」

「しかし、血抜きが大変だ。人間なら吊しやすいが、そのサイズを持ち上げるのは大変だぞ。天井が抜ける」

「じゃあなんでこんな所に召喚したの？」

「この国から出たことがないから、竜の子供を見たのは初めてだ。もっと小さなものを想像していた」

だから檻が窮屈なのか。

「やあねえ。人を乗せてるって言ってたじゃない。お兄さま何を聞いていたの？」

「男の話は聞いていてもつまらない」

「もう、お兄さまったら」

お前の弟も男だろうかと突っ込んでやりたいが、危険だ。寝たふりをして、もう少し近づくのを待つ事にした。

「一階でしましょうか」

「これを移動させるのか？ 人形をもう少し連れてくるか……」。

まずはその前に、薬を打たないと。変色してはせっかく綺麗な色が台無しだ」

「そうね」

薬、と聞いてアデイスは息を飲んだ。変色させないという事は、ろくでもない薬だ。殺す事が前提なので、身体に悪いものでもかま



わないのだ。

二人が近づき、檻の中、アデイスの顔に手を伸ばした。

「っ」

顔を上げて、思い切り息を吐く。

普通に息を吐くときと違い、少し奥の何かを押し出すように息を吐く。

「おっと」

吐き出した炎を、人形師は腕の一振りでかき消してくれた。

「子供の竜よ。ここで火事を起こしたら大変だ。控える。防火術はかけているが、万一のこともある」

顔は見えないが、口元は余裕に笑みを作る。腹立たしいことに、放火すら防がれた。

「デイスアよお兄さま」

「そうか」

おざなりに返事をして、傍らの人形にアデイスをpushさえるように命令した。人形が檻の鍵を開けようとしたので、爪で引き裂いてやるうと構えたが、彼女は手を止め、スカートの下から短銃を取り出した。

「眠らせます」

「いいわよ」

避けられない。

眠ったら何をされるか分からない。

しかしまだ一つだけ手はある。意識がある今なら、一つだけだが、手がある。しかしそれが意味する事を考えると、命が掛かっていると分かっているても躊躇ってしまう。

もう一度炎を吐くか。

「もう少し離れた方が良く。小さいからといっても、十分大きい。

炎は届く」

余計なことを人形師が言う。

人としてやりたいと思っていた一通りの事はしたが、二つ心残り

がある。

いつも人気のない所にこもるエリオットの将来と、セーラの事だ。まだやり残した事はある。助かる方法もまだ一つだけある。しかしこれをしたら、セーラはアデイスを責めはなくても、悲しむだろう。城からどれほど離れているのかだけが気がかりだが

階段がきしむ音がした。

人形が視線をそらしてくれた。

人形の追加かと構えてみれば、開けっ放しのドアから知った顔が覗いた。人形師がそれを確認し、唇を結ぶ。フレアは腰に下げている鞭を取り床を打つ。その光景を見てデイが呟く。

「危機一髪？」

「ええっ!？」

悲鳴を上げて、アーネスの姿をしたセーラが飛び込んできた。鏡以外で見るのは少しだけ不思議な感じがした。

「アーネスっ！」

「アーネス様っ！」

セーラに続き、ロゼまで姿を見せた。

竜の姿の自分をアーネスということは、彼女たちに説明したのだ。何にしても助かったが、相手は人形師とフレアだ。

しかしセーラはともかく、ロゼを連れてくるなど正気とは思えない。あの二人はロゼに逆らえない所があったが、ここまで押しに弱いとは。

「あら、青のアーネスじゃない」

「違います！」

セーラはアーネスの顔で頬を膨らませて怒っていた。いい男はどんな表情も似合うが、イメージが崩れるのでやめて欲しかった。

「ほほほっ、何を言うのこのロリコンのド変態っ！ 変な話し方をしても、そんな声の人間がいくらもいるはずないでしょう」

「なんで人に話しかけながら、ジェイさんに指を突きつけてるんですか」

彼女は目を細めて二人を見比べる。そうとう目が悪いらしい。眼鏡をすればいいのだが、おそらく自慢の顔を無粋なもので隠したくないのだろう。

「とにかく、私のアーネスは返してもらいます」

「あなた、ペットに自分の名前を付けたの」

「ペットじゃありません！ 私です！」

セーラはフレアを睨み付け、その脇を通ってマントを外しながらアデイスの元へと来る。見た目がアーネスのため、手を出しあぐねているようだ。下手に手を出せばしっぺ返しを食らうとも思っているのだろう。乗り込んできたのだから、それなりの準備はしている。

「モリイ？」

「すごく心配したんですから！」

彼女は本来なら冷ややかな美貌を誇るアーネスの顔で涙を浮かべ、アデイスの前に膝をついた。いい男には涙も似合うが、イメージが崩れる。

「すみません。ちょっと相手が悪くて」

「あとで私の身体、返してくださいね」  
返す。

つまり化けたのではなく、入れ替わっていたと説明したようだ。

ジェイとデイだけでここまで早急に探し出すことは不可能だから、仕方がない事だが、今後どうするか考えないといけない。

セーラは檻の隙間からアデイスの頭にマントをかぶせ、それに隠して頭蓋骨を置いて呪文を唱えた。すっかり慣れたらしく、何も見ずにアデイスには到底できない完璧な発音の早口呪文で、あっという間に術を完成させた。ここまで早口だと、誰かに呪文から内容を推測されることもない。羨ましい特技だ。

アデイスの身体が小さくなる。

今ではすっかり慣れた感覚。いつもよりも小さくなって、アデイスは裸の少女の胸を見てため息をつく。

「何を見てるんですか！」

「み、見ているわけじゃないですよ。竜の格好もいいですけど、人間って落ち着くなあと」

「まったく、この非常時に」

近くにある自分の顔を見て、手を伸ばす。

セーラはどんな姿をしていてもセーラだ。仕草の一つ一つが彼女らしい。

自分の中にエリオット以外の心残りが出るとは思ってもみなかったアデイスは、セーラを見つめて笑みを浮かべた。

「また会えて嬉しいですよ」

頬に触れて、そのまま首の後ろに手を回し、引き寄せ、口付ける。女の子が男とする口付けは、アデイスが知るものとは少し違い、新しい発見をしたような気分になる。

アデイスはマントをきつく巻き付けて立ち上がり、呪文を唱えて檻の鍵を破壊する。

自分の姿に助けに来られるのも複雑だが、助かったので良しとした。

アーネスの姿をしたセーラも、中身がセーラだと思えば、締まりの無い顔をしてしまいそうなほど嬉しかった。

「お兄さま、やっぱり女の子だった」

「竜が人化するのも初めて見た。呪文が必要だとは聞いたこともない」

「浮かれる弟と、いらぬ知識がある兄を睨み、アデイスは言う」。

「この身体はまだ幼いから、誰かの手を借りなきゃならないんですよ」

余計な詮索をされないように手を打つと、アデイスはなぜか檻の前で座り込んでいるセーラを見た。

「何してるんですか」

呆けてしまって、こちらを見ない。

「長、不幸慣れしていても自分の顔にキスされれば……」

「そだつて。もつと雰囲気とか、せめて状態とか選ばないと」

「アーネス様、いくら女の子だからって、竜にまで手を……」

ひどい言われようだ。これだけ大切にしている女の子は他にいないというのに。

「ただちよつと、おやすみのキスもさせてもらえないのが心残りだったんですよ。モリイはかたくなで、私との間にはまだ壁がある」「心残りって……」

「やっぱり心残りはしらみつぶしにしたいじゃないですか。私でもうっかりこんな目に遭う事もありますし」

この不運はアデイスだからとも言えるのだが。

「じゃあほつぺたにしてくれればいいじゃないですかっ!」

抗議は呆けていたセーラから上がった。

「檻が邪魔で頬には難しかったんですよ。心のゆとりがないので、つい」

「ついで人のファーストキスを……」。

本気で心配してれば、何くだらない心残りを思い浮かべてたんです!？ もつと他にあるでしょう!」

「くだらなくはないですよ。他人にはしたのに、私にはしてくれないじゃないですか」

「子供じゃないんですから変なこだわりを持たないでください」

感情をむき出しに怒鳴る「アーネス」もいい男だ。

「だって、他に考える事がなかったんです。自分の命と他の命を天秤にかけるのはぎりぎりでも出来ますし。大声でお母さんと呼ぶ以外に手は無かったんですけど、それを考えるとさすがにちよつと余計に暗くなつて」

竜は人間と違い特殊な音を出せる。その音はとくに親子間であればかなり離れていても届き、彼女なら彼らが準備をしている間にやって来たはずだ。薬で多少のダメージは出ていたかもしれないが、殺されるまでには間に合ったはずだ。

「そんなことしたら火の海じゃないですか」

「だから今まで我慢してたんですよ。ちょっと本気で呼びかけましたけど。せ……モリイが来てくれて、本当に助かりました。助かったはいいけど、お母さんの暴走を止めることを考えると、もう……」  
アデイスはセーラへと笑みを向け、それから変態兄弟へと視線を向けた。

兄の方はいつもと変わらぬ様子だが、弟の方は不服そうにアデイスを見ていた。

「中身がアーネス？」

「そうですよ」

「どうやったの？」

「血を分けているからできる事です。他人には出来ません」

「初めから言えばよかったのに。中身が変態だと、ぬいぐるみにしたら変な風になる。私は可愛いぬいぐるみが欲しいのっ！」

「言って信じたんですか」

その上、その後に危険なのはセーラである。

「……じゃあ、何で入れ替わってるわけ？ 女の子の中に男がいるなんて気色悪い。その子の身体をどうする気だったのよ」

「モリイは空を飛ぶのが苦手なんですよ。しかし私は何でも器用にこなす人間ですから」

「じゃあ、さつさと元に戻って。そっちの方がいい。可愛い方がいい」

セーラがぶんぶんと首を横に振ってアデイスを抱きしめる。誰だつて変態の玩具になどされたくはない。

現実を目にした以上、これ以上の手出しはしないだろうが、関わらないに越したことはない二人だ。最近姿を見せるようになったフレアの方とはかく、ハーネスの記憶の初期の頃からすでにこの街に潜んでいたという人形師の方は、関わりを持たないに越したことはない。

「帰りましょう。その前に服を着たいんですけど」

「すぐ近くで馬を預かってもらってます。そこでお着替えさせても

らいましょう。あ、遊んでいってて言われてるんで、遊んでいって下さいね」

遊んでいけという店なら、少なくとも女性が何かサービスするよ  
うな場所なのだろう。馬屋があるということは、可能性は絞られて  
くる。そんな場所で本当に遊んだら、アデイスが楽しんでいなくて  
もセーラが不機嫌になりそうなものだが

「遊んでいくつて、意味分かってるんですか？」

「だからアーネスに言ってるんですよ。大人なんだから、付き合い  
とか我慢してください」

見た目に反して耳年増の彼女は、何をする場所か分かって言っ  
てるらしい。そして大人の女性しかいないと思っ  
ているから、我慢することになると考えているのだ。

「そういうのは、そっちの二人に言ってください。」

あちらの二人は私と違い、少女から熟女まで美人なら来る者拒ま  
ずですからね」

「……………まあ、男の人なんて普通はそうでしょうね」

二人が何か抗議しているが、アデイスは聞く耳持たずにセーラと  
一緒にその商店を出た。

アーネスであることを知ったためか、兄弟は追いかけてこなかつ  
た。

聖良は店の一室を借り、姿を取り替えて服を着ると、部下二人を  
そこに残し、ロゼとシファと一緒に青の箱庭の本部に戻った。

その後、聖良とロゼとシファで一緒にお風呂に入り、色々話を  
した。ロゼは娼婦の娘で、シファはアデイスに助けられたそうだ。

まだ幼く綺麗な二人にも、色々と今の方がマシな過去があるらしい。

風呂上がりで眠い目をこすり、やけに大きなアーネスのベッドに腰掛ける。

当然とばかりにロゼとシファもいて、部屋で待っていたアデイスとイチャイチャしていた。

聖良も少しだけ擦り寄ろうとしていたのだが、その光景を見て我に返った。自分は子供ではないのだから、節度ある態度で臨まなければならぬ。

「どうしたんですか、モリイ。そんな隅の方に座って」

「……………なんか、邪魔っぽいし」

聖良はあの中には混ざれない。恋人でもないし、本物の家族でもない。

付き合いは二人の方がずっと長くて、好意だって二人の方がずっと深い。

「邪魔なはずがないでしょう。おいで」

手招きされるままにふらふらと近づくと、アデイスは聖良の頬に手を添えてこめかみにキスをしてくる。

「おや、抵抗しないんですね」

「……………まあ、なんか今更って感じが。でも、口にはしないで下さい」「恥ずかしがり屋さんですねえ。寂しがり屋のくせに。」

一人でいると、不安でしょう。もっと甘えてくれていいんですよ」抱き寄せられ、膝の上で撫でられる。ロゼとシファが左右からじつと見つめてきて居たたまれない。

「モリイ、子供はもっと甘えるべきよ。アーネス様は普通のお兄さんとしても素敵よ」

「そうよ。子供は素直が一番」

「いやあの……………」

竜の子供が、何歳まで子供というのか分からないので否定しようにも出来ない。

「二人とも。モリイの身体は子供でも、知識的には大人なんですよ。竜は知能の高い生物の知識を一度だけ自分のものにする力がありま



すから」

それはお前だと言ってやりたい衝動に駆られるが、大人しく甘んじる。自分も悪いのだ。

「話半分に聞いてましたけど、こんなにはつきりしてるものなんですわねえ」

二人はまじまじと聖良を見つめてくる。竜なのだと思われながら見つめられているに違いない。竜になったのは、あなたたちの長ですと言ってやりたくてむずむずした。

「モリイ、これからは一人歩きをはいけませんよ」

「一人歩きしたくてするわけじゃありません。私にだって運が良くない自覚はあります。誘拐されるのだって、どちらかというと不注意というよりも不幸な事故だったじゃないですか」

「私と違って自衛方法が少ないから、気をつけるに超したことはありません」

「気をつけていることは別のことで死にかけてるんですよ」

運悪く召還されたり、勘違いで助けていただいたり、感極まって絞め殺されかけたり。

考えれば考えるほど、聖良の不注意とは関係の無い所で、不運になっっている。

「……ひょっとして、モリイって女版アーネス様？」

「出会うべくして出会った雰囲気……」

「だからアーネス様は余計に可愛いのね」

「他人事とは思えないのよ」

美少女二人はアデイス越しに囁き合いながらアデイスに抱きついている。

自分はなぜここにいいのか、聖良はほんの少しばかり疑問に思ったのだが、その夜は大きなベッドを使って、四人仲良く眠った。

慣れた肌の温もりは心地よく、喪失の恐怖を知った後では、一人でなど恐くて眠れそうにもない。

だから今はとても幸せだった。



## 6話 人形師の館 1

「かーえーるーのーうーたーがー」

「かーへーるーのーうーちやが」

「きーこえーてーくーるーよー」

「きーこーへえーくーうーおー」

奇妙な光景を見た。

アデイスとして職場に戻り、色々と溜まっていた仕事を片づけて庭に出ると、セーラと子供達が噴水の周りで歌っていたのだ。その中には滅多に外に出ないエリオットも混じっていて、何とも微笑ましい。

しかしなぜカエルについて歌っているのだろう。

しばらくするといくつかのグループに分かれて輪唱を始める。子供達にとってはいい発音の練習になっているのが理解できた。

「アデイス様、そんなところで身悶えないください」

可愛らしい姿を堪能しているアデイスへと、いつも笑顔で冷静なジエロンが言う。

他人はこの笑顔で勘違いするのだが、彼は意外ときつい性格をしている。

「しっかしエリオットの奴、俺たちに慣れるのに三年もかかったくせに、なんでセーラにはもうなついてるんだ。明らかに現在の俺達によりも懐いてるぞ」

「可愛らしいからでしょう。彼女はどう見てもか弱い女の子で、デイスのような攻撃性はありませんから」

今でこそ丸くなったが、ここに来た当時の二人は刺々しい態度で年少組を泣かしていた。アデイスや、今は地方に行っている彼らにとっての先輩達には、負けるものと反発していたものだ。

あの頃はまだ幼く、二人ともまだ可愛らしかった。

「ああ、なぜこんな大人に育ったんですか」

「突然何を言い出すかと思えば……」。

私達がこうなったのは、すべてアデイス様の教育によるものですよ。いらぬ事を教えられましたからねえ、イロイロと」

二人がまだ十代前半の可愛らしかった頃、早く大人になりたいという言葉をかなえてやるために、夜中に墓荒らしをしたものだ。その中で気に入った姿の頭蓋骨を自分の物として、大人の 人には公に出来ないような遊びを始め、秘密結社など作ってみて、今に至る。本当に人に言えない事ばかりをしていた。セーラに知られるとかなりまずい事をしてきた。嫌われると言うより、軽蔑されそうな事ばかり。

「兄さんっ」

歌っていたエリオットが立ち上がり、長いローブに足を取られながら駆けてくる。度がきついたために分厚い眼鏡を押さえて、その様がまた可愛い。

もしも彼が女の子だったら、ひよっとしたら悪さなどせずになつとくに生きて結婚していたかもしれない。

「兄さんっ、お仕事は終わったの？」

胸に飛び込み甘えながら問うてくる。

アデイスであろうと育ての親であるクリアであろうと、人と目を合わせることが出来ないため、彼はこうして他人の肩に額を押し付けて、視線が合わない位置で甘える。

「珍しいですね。たまには外もいいでしょう」

「うん」

「みんなで歌っていたんですね。楽しかったですか？」

「発音の練習だよ。歌の方が覚えやすいから歌っていただけ。早口言葉が難しくくて」

エリオットの言葉に、子供達がうんと頷いた。

「早口言葉じゃないですよ。代表的な発声練習ですよ」

「どんな？」

「あめんぼ赤いなアイウエオ、浮藻に小蝦もおよいでる、柿の木栗の木カキクケコ、きつつきこつこつかれけやき」

「早口言葉じゃないんですか？」

「早口言葉は、生麦生米生卵、赤巻紙青巻紙黄巻紙、蛙びよこびよこ三びよこびよこ合わせてびよこびよこ六ぺえびよ……間違えた」

昔は言えたのにと渋い顔をするセーラ。

よくもまあ舌が回るものだ、空恐ろしくなった。だからこそ、呪文をすらすらとあの早さで言えるのである。アデイスには遠い次元だ。

「セーラすごい。もいつかい」

「早口言葉は難しいんですよ。気力がいるんです。限界です」

「魔力を使うの？」

「使いませんが、集中しなきゃいけないんです。何度もやると舌がもつれてわけがわからなくなります。ああなるとプロでももうダメなんです」

子供達はセーラに尊敬のまなざしを向けている。彼らも魔術師だ。滑舌の良い人間にはあこがれる。

どれだけ魔力が高くて、舌が回らなければ幼い子供にすら勝てない。

以前出会った使い魔のミラは、ほとんど口を動かさず囁くように呪文を唱えていた。舌を噛みにくく、理想的な呪文の唱え方だった。彼女がセーラ並の発音したら、手の付けられない相手になるだろう。それは将来のアデイスにも言えることだ。

常日頃から話している分、セーラと出会う前よりも発音が良くなったため、人の姿であればかなり術に無駄がなくなり安定した。

エリオットが彼女に懐いたのは無害な外見というのも大きい、一番の理由はその話し方が気になって仕方ないからだだろう。今もアデイスにしがみつきなからセーラを気にしている。

「エリオットはセーラが気に入りましたか？」

「うん。ずっといけばいいのに」

エリオットはアデイスから離れてうつむき、伸びた赤毛の前髪が可愛らしい顔を隠す。その前髪が彼を安心させるらしい。

「だめですよ。彼女の両親はとても怖い方ですから、ちゃんと連れて帰らないと」

「そんなに怖いのか？」

「破滅の悪魔と喧嘩友達です」

「え、あれって実在したの？」

「してみたみたいです。人間というのは、どうしようもないとただぼーっと見ているしかないんだと思います」

「そうなんだ。セーラは親に似なかつたんだね」

親しい魔術師以外の他人とほとんど関わらないエリオットは、そんな言葉でも満足したようで、噴水の縁に座り、水に触れて遊ぶ。

彼は魔術師の寄宿舎隣にある東門の外に捨てられているのを、アデイスが拾ったのだ。なんだ男かと思いつつ、しょうがないという気持ちで育て始めたのだが、自分の手で育てたせいにか、可愛くて仕方が無い。

拾った当初は、やせ細っていて、身体には痣もあり、添えられていた手紙を信じるなら、本当は一歳を超えていたはずなのに、とてもそうは見えなかった。

未だに目も合わせてくれないのは寂しいが、その分行動で愛情を示してくれる。

「アデイス、何成長した娘を見守る父親のような顔してるんですか」

「失礼な。ちゃんと男の子らしく育てましたよ」

「……………」

確かに男らしさとは遠い存在だ。セーラが胡乱な目で見るのも仕方がない。が、立派に心は男の子のエリオットに失礼だ。

「人が苦手なのは、物心ついた頃からです。私がひどい育て方をしたとか、クレアの内に含まれる暗黒にあてられたとか、そういうこととは無いと思いますよ」

確かに女の子の中で育つたために、男の子にしてはかなり大人しい子になったが、アデイスのせいではない。アデイスの周りに女の子ばかりがいたのは多少の影響を与えた可能性もあるが、男の子に任せれば泣いてしまうから仕方がなかった。

「可愛いんだからいいじゃないですか」

「男の子に可愛いって、褒め言葉じゃないですよ。むしろ普通なら嫌がります」

確かに、まっすぐ前を向いて普通に生活を始めたなら可愛いという印象もなくなるだろう。背丈も平均よりも少し低い程度だ。セーラのように全身で可愛いのは違う。

「でも、私でも育ての親には可愛いと言われるよ。自分が手塩にかけて育てれば、なんだって可愛いでしょう」

「それもそうですね」

セーラはそれだけ言って、子供達に手を引かれて再び歌い始めた。

歌の時間を終えると、聖良はアデイスと城下町に出かけた。冬用の服やコートが出来ているはずなのだ。

可愛いデザインの赤いコートで、聖良は少し浮かれていた。動きやすい革のブーツも出来ているはず。あとは牛革の丈夫な鞆も。

「セーラ、時折既視感を覚える服装をした女性がいるんですが、気のせいでしょうか」

周りの女性を眺めていたアデイスの言葉に、彼の視線を追って見ると、可愛い格好をした若い女性が歩いている。言われてみれば、少しだけ印象が違う。

「セーラが着ていた制服に似てますね」

「言われてみれば、襟がそうですね」

セーラー服ほど大げさな襟ではないし、胸当て部分が無く少し色つばいが、ラインの入った所や、大きな襟の下をくぐらせて結ばれたりボンはそれっぽい。別の女性は短めのプリーツスカートをはいている。聖良の世界に行っても、個性的だがそれほどおかしくはない格好だ。

「予想はつきますけどね……」

アデイスは引きつった笑みを浮かべて言った。聖良も一瞬、その顔が頭によぎる。

「まさか」

「目つきが違いましたから。流行を作るのは好きな方ですし、新天地ですし。何よりも民族衣装と教えてしまいましたからね」

聖良は押し黙り、あの時のお針子達を思い浮かべる。そして、先ほど頭によぎったその代表を。

彼女たちは、聖良が着ている物すべてに興味を示していた。

それからずっと嫌な予感はしていたが、東門からほど近い場所にあるその店にたどり着くと、二人はため息をついた。

ディスプレイしてあった。

やたらとレースがついた改造セーラー服が。

「可愛い。セーラ、あれ着ましよう。可愛い」

アデイスはため息ではなく、感嘆のための吐息だったらしい。

「いや、あんなのどこで着るんですか。それに身の程はわきまえますから」

森の中で着ていたら、あつという間にレースがほつれてしまう。

そして似合わない上に、サイズが合わない。

自分の着ていた物がこうなるのかと、少し落ち込みながら店に入り、目が合った店員が慌てた様子で奥へと呼びかけ、とびきりの営業スマイルでこちらに来た。

「お待ちしております、セーラ様」

財布であるアデイスではなく、聖良に声をかけてきた。財布を連れてくる常連は女性の方であり、まずはそちらに声をかけるのは当



然かも知れないが、なんとも複雑な気持ちである。

「アデイス様、ご注文通り、可愛らしく仕上がっております」

「そうですか。楽しみです」

今日もまた奥の部屋に通され、待ち受けるお針子達の歓迎を受けた。お茶とジャムが塗られた焼き菓子が出てくる。

この国では生クリームを菓子には使わないようで、この手の焼き菓子が多い。

「いらっしやいませ、セーラ様、アデイス様」

「ああ、フェネ。良い出来だそうですね。ところで、ディスプレイしてあるあれは？」

「初めてのご来店のさいに、セーラ様のお召し物のデザインの使用を許可いただきましたもので、急遽デザインを起こして生産いたしましたの。そうしたら若い女性の間でちょっとしたブームになってしまいました。ほとんど趣味で作ったシリーズだったんですが、今では一番の売れ筋です」

てっきり下着の事だと思っていた聖良は、少しだけ呆れた。

「すっかり忘れていましたよ。もちろんサービスしてくれるんですよねえ」

「もちろんですわ。行き詰ったところに天よりの滴でしたもの。今日の分はすべてサービスにさせていただきます。セーラ様、こちらです」

キャスター付きのハンガーラックが押されてくる。

コートが二種類。お出かけ用にしか怖くて使えない、カシミアのような手触りのコートに、山歩きも出来そうなしっかりした皮のコート。

その他暖かそうな服が六着。内一着は、なぜか聖良のセーラー服に酷似した、しかし微妙にひらひらさせられたデザイン。スカートが箱ヒダになっている。

「可愛い」

しかも聖良の着ている化学繊維とは違い、高級素材っぽい。ヒダ

スカートは布が必要なため、高そうだ。

「手入れ大変そうですね。お洗濯どうすればいいんでしょう」

「乱暴に絞ったりしなれば、普通にしていただいて構いません。洗濯用の石鹸もプレゼントいたしますわ。風通りの良いところで日陰干ししてください。」

しわになりにくい扱いやすい素材ですので、難しいことはございません。スカートはアイロンをかけてください」

上のセーラーはともかく、下のスカートは可愛い。難しそうな丈だが、これからは冬。ブーツの季節で、合わせやすい。

それから念のために試着をして、どうしても着ていってくれと言われたので、セーラー服もどきに替えて外に出た。

洋服を買うのはこんなに疲れる作業だったかと少し疑問が湧き、特注などするから疲れるのだと自分に言い聞かせる。人としての行動を面倒だと思い始めたら墮落する一方だ。

「昼食時が過ぎてしまいましたね。そろそろ店がすいている時間ですから、私のお気に入りのお店に行きますか？　ときどき子供達を連れてくるお店なんです。女性や子供がいないと入れない雰囲気ですが、可愛くて美味しい料理や菓子が出てくるんですよ」

「行きます」

荷物を抱え直し、聖良はアデイスの後に続く。

アデイスの言うのだから、本当に可愛くて美味しい店なのだろう。彼のような完璧主義者が、女の子を連れて行く。

浮かれて歩いていると、知らない男の人と目が合った。

アデイスよりも青みがかった銀髪の、線の細い綺麗な男の人だ。歳は二十歳前後で、本当に綺麗な男性だった。

気のせいかと思ったが、聖良達の方へと歩いてくる。きっとよくある後ろにいる人が手を挙げるパターンだろうと無視していると、その男性が声をかけてくる。

「セーラ、アデイス、久しぶりだね」

アデイスも足を止めて男性を見る。聖良は知らない人だが、アデ

イスはすぐに分かったらしく、ああと声を上げた。

「ええと……どうしてここに？」

「ちよつと……」

彼の瞳が一瞬そらされ、すぐに笑みを作る。

綺麗で優しそうな人だ。

「セーラは買い物か。出来れば速やかに安全な場所に逃げた方がいい。頑丈な建物内ならさすがに安全だと思う」

「へ？」

まるで聖良を知っているかのような言い方だ。しかし見たことはないし、アデイスの部下二人の仕草とは違う。

この人は誰だろうと考えていた瞬間、聖良は寒気がして振り返る。こちらに走ってくる男性の姿が見えた。

「ミリアアアアア」

聖良は荷物を取り落として迷わず逃げた。

顔もよく見えなかったし、人間の姿をしていたが間違いない。

あれはトロアだ。

逃げなければ。全力で。死ぬほど走らなければ。

記憶もないのに、なぜか逃げる事に頭が支配されていた。

頭の中にもやががかって、他に何も考えられなかった。

「せ、セーラ!？」

アデイスの声が聞こえたような気がしたが、聖良は全力で逃げた。足は勝手に動き、前も見ず、ただひたすら走り、誰かに体当たりをしてようやく足が止まる。

勢い余っていたので反動で尻餅をつき 頭を打って意識を失った。

「お、落ち付けって。恐がって逃げたのが分からないのか」  
「なぜ!？」

「怖いだろ、この前のような目にあつたばかりだろっ」  
銀髪の男が黒髪の男を怒鳴りつけて羽交い締めになっている。

一瞬誰だか分からなかったのだが、なんとなくラゼスとトロアだと分かってしまった。

トロアの方は発言で確信したのだが、ラゼスの方は何となく分かった。親子の絆という奴かもしれない。

彼は親だ。親。孤児のアゼスに父親。

心は赤の他人なのに、その絆が証明されたようで嬉しいのはなぜだろうか。

そんな内心は顔に出さず、いつもの笑顔を浮かべて声をかけてみる。

「あの、お二人はなぜここに」

「トロアがセーラとお近づきになりたいって言うから、まずは人間の女の子の扱い方を覚えさせようと思って。」

落ち着いた？ もう走り出さないでよ」

ラゼスは興奮するトロアを解放する。

「ミリアはどこまで走っていったんだろう。女の子がこんな裏路地に入ったら危ないんじゃないか？」

思った以上に妹が関わらないとまともなのだと驚きながら、セーラの不運っぷりを思い出した。

「しまった! ほつといたらきつと変態に誘拐されるっ」

「へ、変態に!？」

トロアが慌てて走って行くところをラゼスが押さえ込み、アゼスは慌てて聖良が消えた方向へと走る。

人に尋ねながら進むと、どういうわけか袋小路に行き着いた。

少し戻り、匂いを嗅ぐ。犬のような嗅覚はないが、血を分けているせいか彼女のことは匂いで少し前に通った場所くらいは分かるのだ。セーラの匂いは都会にはない清涼な森の香り。人の姿では、他

の人間の匂いの差はまったく分からないが、彼女の匂いはなんとなく分かる。なんとなくの域を出ないが、それでも手がかりになる。

「……あれ？」

アデイスはくんくと鼻を鳴らして匂いをかぐが、少し戻った所、現在彼が立っている場所で少し臭いが強くなり、その先からは綺麗に消えていた。

「何をしているっ、み、ミアアを急いで保護しないとっ！ 立ち止まっている暇はないっ！」

走り出そうとするトロアに足払いをかけて、アデイスは近くにいた浮浪者へと声をかける。

「あの、ここに黒髪の女の子が来ませんでしたか？」

アデイスは銀貨をちらつかせながら問う。金の力は偉大で、知らない誰かを売り払うには十分な効力を持つ。

「ああ、女の子はいたぜ。ただ男に抱えられていったよ。正面からぶつかって、気を失った女の子を保護したって感じだったけどな」  
「どうやら最悪の事態ではないようだ。ひよっとしたら親切な人も知れない。彼女は前にそんな理由で誘拐をされている。」

「ただ、変な仮面を被った男だったから、何されるかわかんねえな」  
仮面。

仮面といえはアデイスの知るに内では一人しかいない。

気が遠くなりかけ、なんとかこらえて浮浪者に詰め寄った。

「か、仮面って、上等なマント羽織った仮面以外は紳士風の！？」

「なんだ知り合いか。良かったな」

「よくないっ  
まずい。」

あの男は女性      とくに年若い少女を永遠にすることを生き甲斐にしている男だ。

「どうしたんだ？」

「女の子を殺して人形にしてしまう変態に捕獲されたようです」

再び走り出そうとするトロアに足払いをかけて、今後の対策を練

る。

「な、なんなんだそれ」

ラゼスはトロアが走り出さないように首根っこをつかんで尋ねてくる。

「この国に唯一定住する半悪魔兄弟の片割れですよ。」

人形にされる前に、イロイロと処置があるはずですよ。毒薬めいたモノも飲まされているでしょうが、彼女なら大丈夫です。急いでいるわけでもないから、少しは余裕があるはずですよ。焦って出来の悪い人形にはしないでしよう」

つい先日、自分が体験したことだ。セーラがどれほど怯えているかと考えると、胸が張り裂けそうである。なにせ他人事ではない。あれはいろいろと精神的にきつい。

しかし今は焦らず、確実に居場所を突き止めないといけない。

「心当たりは？」

「ありません。ですが、探査魔法に優れた知り合いがいますし、幸い人間のアデイスは地位があるので、人海戦術が使えます。ついてくるなら、ちゃんと人間の振りをしてついてきてください。あ、これセーラの荷物ですから持つの手伝ってください。走るので」

アデイスはトロアにセーラの服の一部を持たせ走り出す。

人間の頃と違い、今のアデイスには体力がある。人間の頃の全力を維持し続けられる。ついてくる二人はそれ以上だ。

本当は連れて行きたくないが、知らないところで動かれるよりはいい。

鈍い頭痛を覚えたが、奥歯を噛んで自分を叱咤する。

セーラに何かあったらと考えるだけで背筋が寒くなる。

今は全力を出すことと、無事であることを祈るしかできない。

## 6話 人形師の館 2

ディアスが子供達に勉強を教えていた時だ。

血相を変えたアデイスと、知らない男二人が飛び込んできた。

「アデイス様、どうしたんすか？」

ディアスは膝に抱えていた少年を床に立たせて立ち上がる。

「ジェロンは!？」

「もうすぐ戻ってきますよ。どうしたんすか？」

「セーラが人形師に誘拐されましたっ」

頭の中が真っ白になる。

ついこの前、目の前の男が誘拐された相手に、その連れが誘拐される奇跡的に最悪な偶然。この二人で無ければ、到底信じられなかった。

子供達は誘拐という単語にどよめき、エリオットが立ち上がる。

「に、人形師……」

知識だけは人一倍頭の中にあるこの引きこもり気味の少年は、珍しくセーラがお気に入りだ。

ふらふらと近づき、アデイスに抱きつく。

「誘拐？」

「色々とおつて、目撃証言からしてそう結論づけました。ディアス、ジェロンを呼びなさい。手がかりが一切無いから、ジェロンだけが頼りです」

あれは補助魔法を得意として、その中でも探査という繊細な術を得意としている。細かい事を気にする性格でもないのに、術だけは異様に細かい男だ。

「分かつ……」

ジェロンを呼びに行こうとアデイスが入ってきた図書室玄関とは

逆の、執務室へとつながるドアへと駆け寄ったところ、目の前でドアが開き、目当てのジェロンが立っていた。

「聞こえました」

「なら話は早い」

ジェロンを図書室に迎え入れ、その後を当然とばかりに王子がついて入ってくる。

クレアに似た金髪の美少年で、性格は両親を足して二で割ったような、何とも微妙な少年である。エリオットと同じ歳だが、エリオットとは比べものにならないほど世の中を熟知している。

「レフロ殿下、なぜここに」

アデイスが顔をしかめてそれを隠さぬ態度で言う。

「本を借りに来たなら、面白そうなことになっていたから。探査魔法はお前達よりは僕の方が得意だ。持ち物があれば、手伝おう」

「しかし」

「父様から聞いて、僕も興味があった。それに、どうせ暇だ。自分の女が無事であって欲しいなら、受け入れる事だな」

レフロはテーブルの上に向けて指を動かし、光の魔法陣を書く。

彼は叔母のエイダと同じ、呪文を必要としない光式魔術も使える。声を発する代わりに書くため、正確に綺麗に書く技術が必要で、音式以上に使い手の技術と相性を必要とする。

音式魔術と組み合わせることにより、儀式などの準備を短縮させることが出来て、魔術師にとってはうらやましい特技である。

アデイスなど、あれが出来ればもう少しドラゴンライフも違っていただろう。しかし下手に失敗すると爆発するのだ。爆発覚悟で慣れるまで練習するか、最初から爆発させない才能が必要である。

「兄さん、どうするの？」

エリオットがアデイスに問う。

「私は他の手を打ってきません。エリオットとみんなは、悪いけれどこの部屋から出て行ってくれますか。人の命がかかっているから、二人の邪魔をしてはいけません」



子供達は不服そうに、しかし素直には「い」と言っておく。図書室から出て行く。エリオットも寂しげに俯いたままアデイスから離れ、ふと知らぬ二人に目を合わせぬように顔を向けた。

「誰？」

「セーラの身内の方です」

「似てない」

アデイスにはどこの誰だかは分からなかったが、身内と言うからには竜なのだろう。似ていないのは当然である。

「お、俺は紛れもなくあの子の兄だぞっ」

黒髪の方が憤慨して、銀髪の方に殴られる。さすが竜だけあって、たいしたことのない動作で、かなりどきついパンチだった。

「セーラのお兄さん？」

「そうだ」

「話し方も似てない。それに身内はいないって言ってた」

「少し離れて暮らしていたんだ」

アデイスは黒髪の男の耳を引っ張り、妄想はそれぐらいにしましようにねえと言いながら引きずっていく。

エリオットは困惑した様子でおろおろとすがるものを探し、アデイスへと一瞬視線を止めて、自分が持ってきたぬいぐるみを抱えた。昔、アデイスがプレゼントしたものらしい。それを大切に大切にしているのだ。

「なんかセーラが妹にうり二つだって、変な男に懐かたって話を聞いたぞ」

いつものように死にかけてましたよというアデイスの言葉で、いつも何をしているのだと問い質したくなかったが、聞くのも怖くてその時は話を変えた。だから詳しいことは知らないが、犯人が彼であるのは間違いないだろう。

「……可哀想な人なんだね」

「このままだとセーラがもっと可哀想になるから部屋を出ような。俺も手を打ってくるから、お前は部屋にこもってろ」

「わかった」

彼は素直に頷いて部屋を出て行く。

ディアスは協力してくれそうな顔をいくつか思い浮かべた。

アデイスはクレアの所に行っただろう。レフロに聞かれてしまったため、どうせクレアには筒抜けになる。なら頼った方が賢い。

この前に続いてなりふり構っていられない状態に、ただただ溜息をつくしかない。

本当にあの二人は魂の双子かというほど、いろいろな意味でお似合いである。

カラカラと何かが回る音が響き、聖良の意識が浮上しかけた。

なんだか冷たいところで寝ているなあと思った瞬間、足がどんどん持ち上げられ完全に覚醒した。

「な、何!？」

目を開くと、白い布を身体に巻き付けられ、足首についた枷にながる鎖が引き上げられてどんどん持ち上がる。

一瞬頭が真っ白になる。空白の瞬間も足が持ち上がり引きずられて、はたと我に返り何とかしようと思える。

「何!？ 何なの!？ この、くそっ」

意味が分からない。暴れても鎖がうるさいだけでびくともしない。聖良は何故こうなったのか思い出そうとするか、思い切り走った後の記憶がなかった。

「もう目が覚めたか」

声がる方に目を向けると、聖良は自分の立場を一瞬で悟った。分かりやす過ぎるほど分かりやすい。

仮面の魔術師は腕組みして立ち、その背後では人形が聖良をつる

し上げようと、ハンドルを回している。

分かりたくないが、分かってしまう。

「リアル蠟人形の館っ!？」

「りあるろに?」

聖良は嫌な具合に高鳴る心臓の音を数えて心を落ち着かせる。

大丈夫だ。自分は竜の口で運ばれたときは大丈夫だったと言い聞かせる。

今の聖良はは普通にか弱い女の子ではない。回復力だけはファンタジー的に身につけていめ。あとはこの男が人形遊び以外に興味のない類の変態であることを祈るしかない。

「目が覚めるとは予定外だった……。」

白薬も効かないし、睡眠薬も効かないとは、どんな訓練を受けている」

人形師は、仮面の奥にある灰色の瞳を聖良に向けて言う。

「そんなものは……受けてませんけど」

完全につり下げられ、血が頭に上る嫌な感覚が既に気持ち悪い。

「体質か。毒の効きにくい体質の者がいるというが、あれなのか」

寝ている間に毒を盛られたのだ。考えると悪寒が走った。

普通の身体ならもう死んでいた。

そう考えると、ぞっとすると同時に、それでも死ねないという事実が怯えた。

「あの……これは何してるんですか?」

「白薬が効かないから、眠っている内に処理をすまそうと思って」

「処理……」

「吊して血を抜こうかと」

泣きたくなくなってきた。

アデイスが誘拐されたときは、自分が誘拐されて、アデイスが動いた方がいいような気がしていたのだが、今思うと簡単な搜索法がある聖良が動けた方が正解だった。

全身に鳥肌が立ち、ぎゅっと目を閉じる。

血が出るのは辛い慣れている。頸動脈を切られてもすぐに再生する身体だ。首を切り落とされでもしない限りは大丈夫だろう。彼は人形を作りたいのだから、派手に傷つけたりはしない。聖良が恐いだけで何も問題ないはずだ。

大丈夫だ。

「本当は眠らせた状態でやりたかったのだが……」

彼はストローのような物を手にしていた。

先がとがっていて、大きな注射器の針のようである。

ひよつとして、まずいのではないだろうか。あんなものを刺されれば、再生するしないの問題ではない。

「ひっ」

「少し痛い、あまり痛くないように心がけよう」  
痛い痛くないの問題ではない。

みぞおちあたりからぞわぞわとなにかが全身に広がり、冷えるような感じがした。

身は小刻みに震えるが、縛られて動けない。ただ自分の歯が鳴る音を聞き、鳴らないように噛みしめる。

人形が再びハンドルを回して聖良を高くつり上げ、人形師がストローのようなものを持って近づいてくる。聖良の頭の下に、たらいが置かれた。

仮面はどこまでも無機質で冷ややか。

頭に血は上るし、心拍数は上がるし、怖いし、怖いし、怖いし

「い、いやっ」

「私も恐がらせるつもりはない。しかしあまり身体に傷は付けたくないし、薬も効かないし、麻酔も効きそうにないし、困ったものだ」  
「困ったんならやめてくださいっ」

「大丈夫だ。君は可愛らしいから、その可愛らしさを永遠の物にするだけ。傷もほとんどつけない。首の後ろ、髪で隠れる部分に少しだけ傷を付けるだけだ。これは勝手に動脈にたどり着いて血を吸い出す。傷が見えるようなことはない」

「いやですっ！ 放して帰してっ！」

「騒ぐな。当て身をしてあざを作りたくはない。いつも成功するわけではないから」

「この変態！ サド野郎！ 人殺しっ！」

「いつもこのようにしているわけではない。私だって可愛らしい女の子の顔が歪むのを好みはしない。少女は花のように微笑んでこそ美しい」

アデイスを変態だ変態だと心の中で思っていて、喧嘩をすると罵っていたが、彼は無理強いもしないし、紳士的で、少女愛趣味以外は、ちよつとおしゃべりなだけのごく普通の男性だ。

変態だなんて言っでごめんなさい。

心の中で謝罪して、本人にそれを伝えられない事が悲しかった。今思うと、諸悪の根源ではあるが優しい男性だった。

聖良は幼い頃に見た、優しかった両親の笑顔を思い出す。嫌なことが多かったが、楽しいこともあった。不運だったが幸せもあった。「血を抜いても、代わりに違う液体を入れるから安心する」といい「血の代わりに生命維持出来ないでしょうそれっ！」

「防腐剤代わりだからな。あまり泣くな。泣いた後の顔は醜い」泣かせている男が言う台詞ではない。

何も出来ない自分が情けなくてたまらなく悔しい。

これもすべてはトロアが走ってきたせいだ。

アデイスにはネルフィアを呼べるが、聖良には誰も呼べない。

悲しい。

人形師が聖良の顎から頬をつかみ、口に指を入れて強引に開かせ、猿ぐつわをかます。そして後頭部に触れてきた。

アデイスが触れるのとは違い、気色悪いし乱暴だ。

ストローを刺す場所を決めたのか、髪を乱暴により分け、一点を撫でてくる。

目を伏せ、ネルフィアにくわえられた時を思い出す。

ちくりと、先端が皮膚に触れる感触。突き刺さり、痛みとそれ以

上の恐怖に震える。

即死することはないだろう。この細い管では、時間もかかる。それだけが救いで、それが恐怖だ。

血が流れて、床に置かれたたらいに落ちる。

怖くて怖くて仕方がなかった。

「兄様あ」

男が女がよく分からない声とともに扉が開かれ、赤いドレスに身を包むフレアが部屋に入ってきた。

「アデイスの女を兄様が誘拐したって騒ぎになってるけど、本当？」

「アデイスの女かどうかは知らないが、フレア、それは人形だ」

「あ、そっち」

フレアは笑みを浮かべて人形から人形師へと視線を移して歩く。

それも人形だと指摘され、ようやく人形師の元へと足を向けた。

彼はどこまで目が悪いのだろうか。

変態一味が一人増えただけで、聖良的には何も変わらない。

むしろ鞭を持っていたり、生きた竜をぬいぐるみ扱いといい、悪化していた。

「んんっ」

「って、よく見たらこれ!？」

白い袋がつり下げられているとも思っていたのだろう。フレアは聖良を見て顔に触れてきた。

「それはアデイスの女なのか」

「知らないけど、大騒動よ。魔術師から暗部まで動いてて、それっぽいところはしらみつぶしにされているわよ。うちの近くも通っていったわ」

聖良一人を捜すのに、とんでもない人数が動いているのではないだろうかと怖くなった。

日本の警察も誘拐事件があったら普通に数百人体制になっていたような気がして、とりあえず納得する。

しかし近くを通りながら見つけ出せないとは、なんて無能揃いな

のだろう。血が抜かれるまではどれほど時間がかかるか、どれほどで自分が手遅れになるのか、考えようとしても頭に血が上って何も浮かばない。

「でもこの子、起きてるけど薬使わなかったの？ 起きたまま不完全な状態で人形にしようなんて、兄様らしくないわ」

「薬がまったく効かない」

「あら、そうなの。よかった」

何が良かったというのだろうか。

一人増えて事態は悪化している。アデイスが言っていたことが本当なら、誰かが乗り込んできても太刀打ちできないではないか。

唇を噛み、血抜きされる鶏を思い出し、何も考えたくなくて目を伏せた。

ジェロンは頭を抱えなくなっていた。

「僕は無駄なことはしない主義だ」

かなり頭に来ているらしい様子のレフロが言う。

「いやしかし」

探知は何らかの理由で不可能と悟るや否や、レフロは部屋を出ていってしまっ。

自分の技術に自信があったから、かなり腹を立てている。

ジェロンは慌てて彼を追い、クレアの執務室へと向かっていることを知る。

二人に無理ならば、探査は無理なのだ。

レフロと言えばあのアデイスやエリオットと並び称される存在。

実質国の支配者たる化け物じみたクレアをのぞけば、この魔術大国で三本の指に入る術者。なにせクレアとハロイドの息子である。八

ロイドも元々はハーネスの直弟子であり、腕利きの魔術師だ。クレアがいなければ、彼がハーネスの器となり、今のこの国も無く、アデイスは次のハーネスの器として育てられていた可能性が高い。

探査魔法などはかろうじてジェロンの方が上だが、他は彼の方が上だ。上には上がいると分かっている、歳が近いため悔しさもある。

アデイスのように性癖に欠陥があるわけでもなく、エリオットのように社交性に欠陥があるわけでもない。多少高飛車であろうとも、三人の中では一番まともなのだ。他の二人が極端なだけではあるが、その上に血統もよく、顔もいい。

世の女性達を虜にするまさに理想の王子様である。同じ男としては憎らしい限りだ。

彼等はクレアの部屋の前で足を止め、ノックをするだけして許可も得ずにドアを開けた。

「母上、探査は不可能です」

「ああ、やはり。簡単に見つかるなら、あの殺人鬼はとうに処刑されています」

部屋に入るなり言い放つ息子に、クレアは少しも表情を変えずに言う。彼女は市街地の地図を睨みつけていた。

「誰が誘拐されたか分かっているから、可能性はあるかとも思ったのですが……」

亡くなっている可能性は？」

「探査しようとする、反応はあるのですが広範囲に分散されます。手を伸ばす度にするりと逃げていく。」

下手に隠そうとすると不自然な場所が出来ますが、あのやり方なら今まで見つからなかったのも頷けます。

城下にいることは間違いないのですが、城下全体が探査されると考えてください。ただ、探査は出来るので生きているはず」

こうなるともうお手上げである。どうにかしようと思ったら、数年がかりで大金をかけてそれを打ち破る陣を敷く必要がある。聖良



を助けるといふ目的は忘れてそれをしたとしても、そんな大がかりなことをして彼らが気づかないはずがない。完成した頃には、別の方法で隠れている。イタチごっこのために無駄なことは出来ない。「相手も腕を上げたのですね。昔はもう少しだけ絞れたらしいですが」

伝説の魔術師ハーネスが、狩るのに力を裂くのが馬鹿げていると放置した相手だ。

時折若い娘がさらわれるだけで、それ以上の害はないと、彼は下手な敵を作るより、若い娘を生け贄に差し出す方を選んだ。

「そろそろどうにかしないといけないとは思っていましたが……。気付けばもう一人増えたようです」

なぜあれほどの力を持つ半悪魔がこのような場所にいるかは、様々な説があるが、監視役、というのが、アデイスが語った仮説だ。

悪魔が好みそうな、優秀な魔術師の多いはずのこの国には、悪魔との契約者はいないと断言してもいい。

その理由は、悪魔同士で牽制している可能性が高いと言われている。下手に手を入れれば、あっという間に崩れる可能性もあるため、

悪魔同士で協定を結んでいるのだ。そんな場所にあれだけの半悪魔がいる。悪魔をさしおいて、半悪魔がだ。

だからかれらこそが、悪魔達が用意した監視であるとアデイスは考えた。

悪魔は何かを観察することを好む者が多い。悪魔がいたずらに起こした騒動を、他の悪魔が観察しているということも珍しくない。

悪魔の気持ちなど分からないが、彼らの多くが趣味「人間観察」と言われているほどだから、直接手が出せないから、代わりに彼等を隠れ住まわせている、と。

「私とてあまりあれに手を出したくはないのですが、二人に増えたのなら、一人狩るのは問題ないでしょう」

悪魔が何を考えているのかクレアすら知らない。

新しいのが来たということは、人形師の寿命が近い可能性がある。彼らは半悪魔の中でも優秀なために下級の悪魔よりは強いのだが、悪魔以外の生物の血が混じるため寿命がある。

だから弟の方は、仕事の引き継ぎをしている所では無いかと言われている。

迷惑な性癖がなければ、手を出さず、そっとしておきたい半悪魔達だが、人形師の寿命が尽きるのは、今日か明日か、百年後かも分からない。

「仕方がない。直接行きましょう。目で見れば分かることもあるものですから」

「はい、母上」

行つてきますと二人同時にハロイドへと言う。

彼は悲しげに手を振って妻と息子を見送る。

彼は愛されているが、妻と息子には逆らえない少しダメな一家の大黒柱だった。

## 6話 人形師の館 3

「半悪魔っていうのは、匂いが曖昧なのが特徴なんだ。竜は人間よりは鼻がきくけど、さすがに犬ほどではないからねえ」

ラゼスが複雑そうな顔をして呟く。  
複雑にもなるう。

友人が犬のように地に這って、懸命に匂いをたどっているのだ。手配はしたし、自分たちに来ることに戻ろうとしたら、現場の洗い直しという事になった。

そして妹命の自称兄は、半悪魔の匂いをたどってみようと言い出したのだ。

「周囲の人目が痛いんですが」

「僕だって恥ずかしい。無駄だし」

「無駄だと困るんですが。うう、今まで変な噂なんてなかったのに……」

アデイスは子供好きで優しい魔術師だ。試しに大人の女性とも付き合った事もあるので、ロリコンなどと後ろ指さすのは本当に親しい者だけだ。

元恋人はもう結婚していて、それが忘れられないのではと噂が流れているのは知っている。

ロリコンの噂が流れて子供達に怯えられるよりはずっといい。

ちなみにアデイス達以外の親しい人間は、あの女のせいで大人の女性が苦手になったのだと思っている。本気で小さな女の子が好きだとは思っていないらしい。

しかしロリコン以外の避けたい噂の種が出来るというのは想定外だ。

変人を連れているならまだいい。変態行為を強いているなどが立ったらどうしてくれよう。これもすべてはあの人形師のせいで

ある。

「しかし、人間の町とはいえ、これほど簡単に誘拐されてしまうとはねえ……」

「基本的に無力な子ですから。相手が相手ですし、普通でなくとも抵抗できずに誘拐されます。私一人ではきつかったので、お二人の存在をとて頼もしく思いますよ」

「戦力として当てにされているって事かな。ネルフィみたいな派手な事は出来ないけど」

「お母さんがこの場にいたら、丁重にお引き取り願います。派手にされたらたまりません」

ラゼスは乾いた声で笑う。否定しないという事は、アデイスが想像する通り、彼女に手加減の文字はないのだ。

「なんか、他の方法を探した方が良さそうな気もするよ」

「でも部下の結果報告待ちですからねえ」

少しずつ進むトロアの尻を見ながら、己のふがいなさのため息をつく。

今度からすぐに探せるように手を打たなければいけない。今度があるよう、今は手を尽くす。生きていればきつと今度はまたある。セーラだから。

きつといつかまた誘拐されると確信しているほどだ。

「なあ」

トロアが唐突に立ち上がった。

話しかけないで欲しいと一瞬思う。

「なんか、この周辺一帯に匂いが染みついているんだ」

「染みついて？ 近くにねぐらがあるんでしょうか」

「上じゃなくて、下だ。地面。空気はない。土」

「まあ何百年といますからねえ、染みつくかも知れませんが」

「下にいるんじゃないか。ほら、人間って地下になんか作りたがるだろ？」

アデイスは首をかしげた。

地下。

すっかり忘れていたが、下水道がある。市民はそんな物の存在すら知らない場合も多いほど存在感がない。

しかし下水道は犯罪者が逃げ込む事もあるので、定期的に点検しているはずだ。入り口は魔術で隠していても、知っていれば誰でも入ることが出来るようになってる。犯罪組織ならその地図ぐらいあるだろう。

アデイスは臭い場所になど興味がないので、今まで気にかけてようとも思わなかった。アデイスが通る地下道とも通じているが、下手に迷い込めば迷子になりかねない。

複雑な通路だから、点検がどのように行われているか知らないが、隅々までは見ていないだろう。

破損がないか、誰か人が隠れ住んでいないか、死体が転がっていないか、軽く点検していると予想できた。

「あいつらが下水道……」

人形好きの兄に、自分好きの弟。

とても汚く臭い場所に隠れるとは思えないが、地下にいるという可能性はある。人形師はこの国の生き字引だ。

古くからある下水道を使えば、探査を誤魔化す事も可能かも知れない。

可能性の問題で、アデイスには出来ないが、可能性があるなら調べてみる価値はある。

「下水道の入り口は……」

普段は色が地面と同化している上に幻術で隠されているためわかりにくいだが、実はそこらの路上にある。竜になってからは魔力も強いので、魔力を操り目をこらすだけで見えるのだ。

ただし人間の姿の時だけ。

竜の姿だと、勝手が違うらしくて魔力が扱いにくい。セーラがもらったミリアの姿になっても、化けるには人間の時とは比べものにならない集中力がある。竜が術を使わないのはこのためだろう。彼

らは彼らなりの力の使い方を編み出しているのだ。  
人気がない場所にある入り口に手を当てる。とくに特殊な呪文は  
いらぬ。

「ええと……何だったっけ。簡単な命令だったような……ひらけ？」  
この分かりやすく簡単な命令で地下への入り口は開いた。

小さな頃に教えられていたので知っていたが、実際に開くと少し  
驚く。驚いてもいられないので、深呼吸するとはしごに足をかけて、  
意外と深い地下に降りる。

アデイスがはしごから離れるとトロアが飛び降りてくる。その上  
にラゼスまで飛び降り、トロアを足蹴にする。

さらりとひどいことをしたような気がするが、トロアは大して怒  
らず靴跡のついた肩を気にするだけだった。痛みはあまりないよう  
である。さすがは化けているだけの竜。

「思ったより匂いはないですね」  
アデイスは周囲を見回して言う。

竜の鼻でも苦にならないのだから、人間の鼻では匂いなど分から  
ないだろう。水路を見ると、その両脇に転々と水を浄化するのに使  
う印が刻まれていた。床などとても綺麗である。

恐ろしく気の遠いことを、昔の人はしていたようだ。  
「知らなかった」

クレアは知っているだろう。ではこの下水道にも誰かやって来る  
かもしれない。しかし彼らを見つけられるとも限らない。

「何か変わったものが見えたら教えてください」  
「あれか？」

トロアが天井を指さす。アデイスには何も見えなかった。目をこ  
らして、魔力を巡らせて何となく見えた。これは人間では見つけら  
れない。そこにあると知っていて、これだけやってようやく見つけ  
られるのだ。

「大人になるとあれが常時見えるんですか」

「個人差があるよ。僕はうっすらと見えるだけだけど、トロアは目

が良いから。ネルフィはそういうの苦手。

だからアデイスはあまり繊細な五感を持っているタイプじゃないんだろうね。でもどちらに似ていたとしても魔力はもっと強くなるよ」

「ああ、そうなんですかあ。私は大まかな性格のお母さん似と。なんか複雑な気もします」

「魔力が強くなる前に技術を身につけているから大丈夫だよ。人間の魔術は少ない力を有効利用するものだから、技術なら彼らが一番だ。

竜つてのは普通に育つと先に魔力が強くなるから、魔力の細かい扱いが難しくなって練習しなくなる。だからみいんな大ざっぱになるんだよ。ネルフィのしたことを肯定するつもりもないけど、偶然にしては理想的な配分じゃないかな」

理想の息子を作る試みは、見事に成功したという意味だ。

「逆にアデイスみたいにもう意志のはっきりしている子がトロアみたいなの五感を持っていたら、たぶん気が変になるよ。それが当たり前で育たないと」

だからトロアは変なのだと言いたいのだろうか。

確かに靈感に優れている人間には変わり者が多い。

エリオットの対人恐怖症も、多少なりともそれが原因ではないかとも言われている。彼は夜もふけると絶対に部屋の外には出なくなる。人が来ると何かと混同して怯えて泣くので、そっとしておくのが暗黙の了解だった。

面白い認識だが、今はセーラの方が優先である。

「さて……」

アデイスは目をこらして天井に敷かれた陣を見る。詳細は時間をかけなければ分からないが、数分も考えたとおおよそのことは分かった。

「目くらましと探査魔法の分散か。年寄りならではの気の長い作業……」

普通の人間はこんな馬鹿らしいことしない。仕事ならともかく、隠れ住むためにこんな事をしていたら、それで一生が台無しだ。

「分かるのか、あんな細かいのの意味が」

トロアが感心したように言う。

「詳しい仕組みは分かりませんが、見当を付けるためのコツがあるんですよ。見るべきは四方対角状にある要の印。そのさらに四方の組み合わせ。

さっきお父さんも言っていたとおり、竜は魔力がありすぎて小細工をしません、人間は力がないから小細工をするんですよ。それが脆弱と言って過言でない人間の強さです。あの半悪魔はそれを取り入れてくれているようなのでやっかいです。研究する時間など有り余るような者と丁寧に付き合うのも馬鹿らしい」

最後は愚痴になったが、アデイスは陣の模様から流れを最低限理解し、歩を進める。

時折天井に見える陣の様子を見ながら、周囲の影響を探りながら。

「なあ、ラゼス」

「ん」

「お前のかみさんはこんな人間を誘拐して息子に食わせたのか。こんなに記憶が強烈に出るような人間、聞いたことないぞ」

「ネルフィのことは僕にはわからないよ。まだ結婚もしていないし。来るなって言うしさあ。僕の子でもあるのに」

ラゼスはため息をつく。

ネルフィアと彼は、あまり合わないだろう。その上種馬扱いされただけ。以前はどのような関係だったかは知らないが、彼らは住む世界が違うほど合わないように見える。

しかし人間の夫婦にもたまにいますので、自分の両親としては仲違いしなければそれで良かった。

「……あ、トロアさん。変な入り口とか見つけたら教えてくださいな  
ね」

「たとえばあんなのか？」



トロアが突き当たりを指さす。近づいて目を細めても分からない。「どこですか？」

「ここだ」

彼はなにやら壁に指を差入れ、がちやりと動かして何かを開けるそぶりをし、壁をすり抜け奥へと向かう。

アデイスにはまったく分からない。

彼の目の良さは感動ものである。

他の生物だったら捕獲して解剖していたかもしれない。

そして同時に、彼が見破れなかった術を思い出す。

「うわ……この目を持つ人でも、あの術って見破れないんだ……」

「この術？」

「トロアさんの妹に化けた……私が化けている術です」

「ああ、確かにそう考えると凄いな、人間は」

「人間のアデイスがもう少し幼い頃に作ったんですよ。皆には内緒で」

それがおかしくなるほど五感の優れた竜の目も誤魔化すのだ。自分ってすごいと少し感動した。

「そんな術作って、いたずらでもしていたのか？」

「はい。内緒ですよ」

「かなり壮大ないたずらを。」

「なんか……ちょっと楽しそうだな。僕もやってみたいなあ」

子供のように笑って言うラゼス。

意外とこの男も、真面目ではないのかも知れない。

聖良は頭が痛かった。くらくらするし、これが逆さ吊りのためにこうなっているのか、ストレスからこうなっているのか。しかし出

血はまだ大した事が無い。ネルフィアに腹を刺された時は、もつと血が出た。

フレアが兄とのやり取りに、肩をすくめてから聖良を見つめる。男性だと分かっているにしても、女性のような顔に見える綺麗な人だ。メイクが派手なのでなければいいが、メイクを変えればもつと美人になれるだろう。

「ま、そんなことよりも間に合って良かったわ。パミラ、この子を下ろしてちょうだい」

聖良は耳を疑った。

確かに聖良に手を出せば、アデイスは怒って何としても乗り込んでくる。彼が世間的にどんな風に取りられているかを聖良は知らないが、彼の女という扱いになっているのなら、報復を考える。

彼はそれを恐れるらしい。

「問題ない。ここは見つかからない」

人形師は手を挙げて人形を止める。

「でもダメよ。魔術師に対する必要以上の干渉は禁止されているでしょう。相手が表に出てこれられないならともかく、あのアデイスですもの。何が何でも来るわ。返すの」

救世主だ。

常識がないと思っていたら、以外に常識を持ち合わせていた。疑ってごめんなさいと、その綺麗な人に感謝する。

「しかし、このような逸材は滅多に……」

「可愛くてもダメ」

「珍しい異国の娘なのに」

「だから余計にダメ。外交問題とかになったら、パパに叱られるでしょう」

人形師は名残惜しそうに聖良に刺した管を引き抜き、猿ぐつわを外して、ハンドルのところにいる人形にく嫌々であるが許可を出して下ろしてくれる。

足の枷をはずしてもらおうと、頭に血は上ってくらくらするし、心

臓はまだばくばくしているし、怖いし、鳥肌は立っているし、寒気はするが、助かったという実感がわき起こる。

「ああ、血が」

拘束を解こうとしてくれたフレアが、聖良の頭に触れる。

「あら、傷はどこ？」

「ここに……ここにあつたはずなのだが」

人形師も傷跡があつたらしいところに触れる。

「まずい。」

非常にまずい。

この二人には竜の存在を知られている。竜の血を飲んだのはアーネスでなければならぬ。

「兄様、何をするのっ」

フレアが叫ぶさなか、身体を覆っていた布をはぎ取られ、肩にわずかな痛みが走る。

「再生した」

いつものように治ってしまった。表面をかるく傷ついた場合は、消しゴムをかけたように傷が無くなる。

これは言い訳のしようもない。

「……お前、竜の契約者が」

証拠がある以上違うとも言えないし、違うと言ったら何なのだということになる。まさか体質ですでは通じない。

「だからそんなに小さいの」

「普通に背が低いんです」

フレアの悪気のない言葉に傷つけられ、聖良は悲しくなった。

「ひょっとして、竜に血を分けた？」

「なんでそんなこと……」

なぜそれを、とは言わない方が良さだろう。

竜は食べた相手の知識を得る。それはつまり、血を分けるということだ。彼女が言いたいのは、この話し仕方だろう。モリィの話し方を聞いているから、その結論は当然だった。

「どうなってるのかしら。竜やら竜の関係者がこんなにならわらと。しかもアデイスの女がどうして……」

実はとても単純な話なのだが、頭蓋骨で化けるなどという発想がないのだから。

だから想像をして、ありもしない物語を作り出す。

「あの、帰してください」

「ちょっと待ってね。外がもう少し暗くなってから安全な場所に戻してあげるから」

フレアは聖良にかぶせられていた白い布を完全に取らおうとして、聖良は抵抗した。

「ちょ、待って、やっ」

「え……っと、やだ、裸？」

「血で汚れるだろう」

「パミラ、この子を連れてきて、着替えさせてあげて」

人形に血避けの布ごと抱えられ、聖良は恥ずかしくて顔が熱くなつた。

入り口と思われた場所に入り、ほんの短い通路を通ると目を点にした。

変わっていない景色。もちろん場所は違う。それはつまり、

「ただのショートカットっ」

アデイスは頭を抱えた。

確かに素直に迷路のような場所を行き来するより、このような道があった方が逃亡もしやすい。

「くう、地図を持つてくるべきか……」

近くに青の箱庭の拠点はあるのだが、わざわざアーネスの頭蓋骨

など持つてきていない。服装も私服とはいえ目立つし、色彩が明るくてアーネスの趣味ではない。城に戻ってはいはかなり時間を無駄にする。二人を置いていけばいいのだが、それはそれで不安である。「地図ならありますよ」

女性の声が響き、アデイスの心臓が飛び跳ねる。

「く、クレアっ」

胸を押さえて、こちらに来る女性を見る。離れているのにずいぶんと声が響く。

「人の声が聞こえたって連絡があったと思ったら、あなたが壁から出てくるから驚きました」

「クレアがこんな所に来るなんて、どうしたんですか」

「可能性が高いのはここです。いい機会だから一人狩ることにしました。若い方は女装するだけで害はないと聞くので、古い方を」

彼女が本気で動くというなら心強い。

しかしそうになるとこの竜二人に手を出してもらうと、クレアなら正体を見抜いてしまう可能性がある。

「あの、話が変わったので、出来るだけ人間らしくしていただく  
い」

二人にだけ聞こえる声で囁く。返事はないが、理解したものだと思っ  
つておく。

「アデイス、あなたはどこから出てきたんですか」

クレアがアデイスの出てきた壁を見て言う。その後ろには、レフロ、ディアス、ジェロンがいた。他にも手分けして探しているのだ  
ろう。

「見えないかもしれませんが、ここに隠し扉があるんですよ」

アデイスは開け放たれたままの壁に見える通路へと手を入れる。「そんな物の報告はありません。さすがに壁に穴が空いていたら一人ぐらい手を入れてしまってください」

「扉があるんですよ」

アデイスは取っ手がどこにあるか分からないドアに手をかけて引

き寄せ閉める。

「どうやって見つけたの」

「ええと……」

ちらとトロアを見上げる。

「彼らは？」

「セーラの身内の方です。こちらの方がものすごい目をしていて、私でもさっぱり分からない幻術に惑わされないんですよ」

クレアは目を細めて扉を探す。クレアでも見えないのなら、見えなくて当然である。この男がおかしい。

「地図があるなら貸してください。気づかれて逃げられる前にマツピングしていきます」

アデイスは持ち歩いている？石で、扉の前と両脇に印を付けた。魔術師などやっているのと、どこにでも文字を書ける道具を持ち歩く習慣が出来るのだ。

クレアが壁に向けて地図を広げ、現在地の壁に橋のような印を書いた。

「一人にしか見えないなんてやつかいですね」

「出っ張りとかほとんどないんですよ」

ほんの少し指が沈むだけ。さすがにこれに気づく者はいない。

「とにかく、トロアさん頑張つて。颯爽と助けに来たら、きっとセーラだつてお兄ちゃん大好きつてなりますから」

背中を押すために言った何気ない一言だつたのだが、それでトロアの目つきが変わつた。

走り出し、次々と扉を開けていく。アデイスはそのたびに床に印を付けて追う。体力のないクレアとレフロが悲鳴を上げていた。それを見て、ラゼスが地図とペンを受け取りマツピングを始めていた。

## 6話 人形師の館 4

頭部に触れられるのは案外気持ちがいいものだ。とくに柔らかかなブラシの刺激は、緊張が一気に解けた彼女にとっては眠気を誘うものだった。

セーラーモドキを着て生きた心地を取り戻すと、フレアはぼさぼさになった聖良の髪をといてくれた。人形にするように。

「これ、最近流行っているわよね」

襟を引つ張られ、聖良は覚醒した。

「ふ、ふはい」

変な声を出してしまったが、フレアは気にした様子もない。

元々から聖良は変な発音をしていると認識されているからだろう。

「可愛い」

「そ、そーですか」

彼女 ではなく彼は、赤いワンピースを着ている。肌の露出はないのに、蠱惑的な笑みが色っぽい。顔の模様も、彼の美貌を損なう物では無い。

「綺麗な髪。お肌綺麗。可愛い」

聖良は生きていても人形扱いされている。

複雑な気分だが、生きているので良しとした。

「あの…… どうしてお兄さんはあんなことを？ あんなにいっぱいお人形さんいるのに」

着替えを手伝ってくれた人形数体。すれ違った人形数体。ちらりと見ただけだが、人形が立ち並ぶ部屋もあった。

「兄さま、寂しがり屋だから定期的に新しい人形を欲しがるの」

「生きた人間じゃあダメなんですか」

「生きた人間はすぐに年を取るもの。お兄様は悪魔の血が強いから、とつても長く生きているの。一人ですつといると鬱々となるんじゃない」

ないかしら。でも理解のある人間は少ないし、それが死んでしまつたら傷つくでしょう。だから始めから気に入った相手を連れてきて、永遠に手元に置いておくの。たまつていくだけだけ。

でも、それ以外は普通なのよ」

「やあ、それがあつたら他の普通全部否定できますよ」

「それもそうねえ」

ほほほと彼女は笑う。

髪をといていたと思つたら、何やらリボンを取り出し髪に編み込んでくれて始めた。

「セーラ、小さくて可愛いから、こつこのよく似合つわあ。私には似合わないのよ」

「フレアさんすつごく綺麗だから似合つと思ひますけど」

「あら、嬉しい」

フレアはくすくす笑いながら鏡を見ながら髪に触れて立ち上がった。

「うん、可愛いわ」

頬にキスをされて少し驚いた。

常識は欠けていても、悪い人ではない。

彼女の様子を見ると、人素材の人形作りに関してはあまり好ましく思っていないようだ。アデイスのあれは、彼が人間ではなかったから。

「セーラ、今度機会があつたらいつしよにお買い物しましょうよ」

「お……お買い物ですか？」

「そう。長い付き合いになりそうなもの」

つまりは聖良の身体の問題だ。彼は半悪魔で寿命が長いらしい。

「お人形は口をそろえて何を着ても無難なことを言うの」

「ああ、それは確かにそうでしょうね」

「人間のお友達はいないし、魔女の連中はキライ」

「嫌いなんですか」

「例外もいるけど、大キライ。与えられた力と知識を鵜呑みにして



ふんぞり返っているんだもの。元が魔術師だったりすると本物だから許せるけど、与えられたことだけ鵜呑みにして偉ぶってるのがほとんど。最悪よ」

彼女は子供のように不機嫌を表に出す。

聖良の何が気に入ったのかは知らないが、彼女がどういう女性を嫌いなのかはなんとなく分かった。お高くとまって人を見下しているようなタイプだろう。

「セーラは可愛いから好きよ。話し方も好き」

魔術を使う人達は、聖良の話し方は怖いがうらやましいという。どんな理由であれ、好ましく思ってくれたなら嬉しい。

聖良は皮肉に思いながらリボンをいじり、鏡に映る自分を見てため息をかみ殺す。

アデイスなら、むやみやたらと可愛いと言って褒めるのだろう。

彼はきつと心配してくれている。心配してくれる人がいて良かったと思う。一人で誰にも気にかけてもらえず死んでいた可能性を思うと、それだけで幸せな気がした。

「フレア様」

ドアの向こうから声がかかる。

「侵入者がここを割り出すのは時間の問題です」

「どういう意味？」

「手当たり次第、通路が開かれています」

「どうやって」

「存じません」

聖良は意味が分からず、フレアの横顔を見つめる。先ほどよりも顔の模様が濃くなっている気がした。

「ここまで来るのは少しまずいわね。セーラ、少し目隠しさせてね」  
フレアが聖良の頭に袋をかぶせた。想像よりも大胆な目隠しである。

何も見えず不安に思っていると、ひよいと横抱きにされて悲鳴を上げそうになった。

「以外にパワフルですね」

「あなたが軽いのよ。子供みたいに小さいもの」  
悲しいまでの体格の差。

華奢に見えるのにけっこう筋肉質だ。綺麗に筋肉がついてうらやましかった。

「フレア、行くのか」

「ここまで来たら嫌でしょう。普通にならここまで絶対来られないけど、通路を見つけれられるとなると話は別だもの。上手く追い返したら、処理しなきゃね」

処理とは何をするんだろうか。聖良は二度と関わりを持ちたくないの、知る必要もないし知ってはならない。知らないことは幸せだ。

ああ幸せだ。

生きているのだから、そう思っておく事にした。

トロアの動きが、一つの扉を開いてから止まる。

首を入れ、じっとしている。

「どうした」

声をかけると、彼は奥へと進む。

「何だお前っ！ その子を離せっ」

「何よあんな。何でこの子こんなに脅えてるのよっ」

トロアの罵声に、フレアの声と鞭の音。

竜相手に鞭は無意味だが、竜だとバレるとまずいので、アデイスも中に入る。

睨み合うトロアとフレア。

顔に袋をかぶせられ、フレアにしがみつくと少女。背中まである癖

の無い黒髪と、服装と、小柄な身体から、あれが聖良である可能性は高い。

セーラは誘拐犯よりも、とにかくトロアが怖くて仕方が無いようだ。

「セーラ、怖がらなくても大丈夫ですよ」

「あ、アデイス？」

セーラが頭に被った袋を外そうとしたが、セーラの背中とフレアの腕で挟まって外せず、カづくで取ろうとする姿がまた可愛い。

頑張つて袋を外すと、トロアと目が合い再びフレアにしがみついた。

「ちょっと、その男どけてくれる。この子がこつも脅えるなんて、何をしたのよっ」

フレアがセーラの妙に豪気なところを感じ取れるほどの事があったらしい。それでもフレアにしがみつくほどのトラウマになっているようだ。

「話がややこしくなるから、トロアさんは引っ込んでてください」

「な、なぜっ！？ 助けにきたのにつ！ 颯爽と！」

「もうどうしようもないぐらいトラウマっぽいですから、近づくと嫌われますよ」

「うそつきいいいいい」

ウソつき呼びわりするトロアを、ラゼスの手が伸びてきて引っ張り出す。

仮定の話を真に受ける方が悪い。

「どいてくれる？ 出られないでしょ。この子を返して欲しくないんなら別だけど」

セーラを床に下ろし、手を引いてこちらに近づいてくる。

堂々と歩いてくるから、対策はしている。一人で立ちふさがっているのも危険。

後退し、皆で囲む形に持ち込む事にした。

「あらあらお揃いで」

フレアは背後の見えぬ扉を閉じて、天井を見上げて声を上げる。

「お兄さま、閉じたわ」

フレアは扉のあった場所を見て、満足そうに微笑む。

「消えたっ」

トロアが驚いたように目を見開いた。さすが長く住み着いているだけあり、面妖なことをする。

「さて、処理も終わったし、帰るわね」

フレアはセーラのこめかみにキスをしてセーラだけに手を振った。すっかり気に入られている。助けるまでもなく、自力で乗り切っている。不運なくせに、出会う相手には恵まれている。さらなるトラブルを招きそうな相手との出会いを、恵まれていると評するのもおかしな話だが。

アデイスとしては彼女さえ無事なら他などどうでもいいと考えながらも、少しだけ空しさを覚えた。

ここで終了といきたいのだが、クレアはやる気のようにだ。

「アデイスっ」

セーラがフレアの元を離れて抱きついてくる。

「こ、怖かった」

「怖かったんですか？」

半悪魔には懐かれていたのに。

「こ、怖いですよっ！ 変な薬づけにされるは、逆さづりにされて血を抜かれるは、防腐剤入れられそうになっただんですからっ！」

思い出したのか、泣き出すセーラ。

本人も溢れ出る涙に驚いたのか、手で拭うが、拭っても拭っても後から涙がこぼれる。彼女がこのように泣くのも珍しい。

「怖かったんですね。助けに来るのが遅くなって申し訳ありません。そこまでされればそれは怖いしトラウマにもなる。アデイスが辿る可能性のあった道だ。」

「うっ……………変態だなんて思ってたごめんなさい」

「……………」

理解できてしまう台詞に、アデイスは返す言葉に悩んだ。

「ああいう人が真の変態なんですね。アデイスは意外と普通です」

「猟奇的な人と比べられるのはちよっと……」

傷つく。しかも意外ととか。

「あらあら、安心したのねえ。兄様には道ばたで見つけた可愛い子を、ほいほい攫わないように、よおく言っておくから」

彼の兄が女を攫うのは、まるで犬猫を拾うような感覚なのだろう。弟の方はオカマなところ以外は普通なようで、それだけ言うところだ。ついでにこうとする。

「逃げられると思っていらっしゃるんですか？」

クレアが心外だとばかり言う。

補助が得意なレフロが捕獲用に術を組み立てながら、クレアと挟み込む位置に移動している。

「思ってるわよ。まあ、私をどうこうしても意味ないけど」

フレアは巻き毛を指に絡めて退屈そうに言う。

「私がいないと、兄様寂しがつて人形たくさん作るし。私なんてただの兄様のオマケだし。」

パパには魔術師は殺すなって言われてるし、あんまり無駄な争いはしたくないのよねえ」

彼女は頬に手を当て、考え込むように呟いた。巻き込まれてはたまらない。そして、できればクレアには捕獲されてほしくない。

セーラは血を抜かれたと言っていた。フレアはセーラの身体のことと気付いている可能性がある。ここで捕まってもらうのは、できれば避けたい。

そう思っていたとき、ラゼスが口を開いた。

「君は、双灰の悪魔の身内か」

「何、あんた」

「雰囲気似ている」

双灰の悪魔といえ、時折自分の気に入った美女を攫って、飽きたら返す事で有名な、双子の悪魔だ。

返されない女は魔女として立派にやっているのだろうが、魔女の資質なく返された女は、悪魔の手つきとして悲惨な余生を送る事も多いという。

弟の方はともかく、兄の方は中身も父親似かもしれない。

彼らの親が分かったところで、初めから高位の悪魔の血縁者と分かっていたから、どうなるものでもない。

「パパに似てるなんて、失礼な」

「強かったよ」

「喧嘩したの!？」

「いい魔女も持っていた。仮契約の魔女であれなら、本契約の魔女はさぞ恐ろしいのだろうね」

「それパパじゃないわ。伯父様よ。パパの魔女は見た目重視で、まともなのは一割程度よ。」

でも伯父様に似てるって言うなら、嬉しいわね。でも、あのひと達と喧嘩して良く生きているわね」

いつものように、ネルフィアが喧嘩を売ったのだ。

付き合いされるラゼスは、ずいぶんと不要な苦勞している。

双灰の悪魔と呼ばれるのは、姿が灰色であるのと、逆らう者が灰にされることから来ている。

トロアも思い出したとか言っていることから、彼も被害者の内の一人なのかも知れない。殲滅の悪魔に双灰の悪魔。手を出してはいけない者達ばかりだ。

「その男の子。その術じゃ力不足だよ。下手に刺激しない方がいい。双灰の悪魔は身内に手出しをされると、何をしてでも相手を殺そうとする。」

兄とやらが出てくると厄介なことになる。被害を防ぐために被害を出しては本末転倒だ。逃がした方がいい。

僕らはセーラを取り戻した以上、悪魔関係者に喧嘩を売るつもりしないし」

レフロは器用な術者だが、パワーがない。技術のレフロ。力のエ

リオット。その中間であるアデイス。なんともぱつとしない位置にいたのだが、何でも出来てしまうために一番目立っていた。

今は力があるから、彼を捕獲するのは簡単だ。しかし捕獲はまずい。殺すか、逃がすか。セーラを助けてくれた相手を殺すのも気が引ける。どうせ人間にはあまり関わろうとしない連中。

「この半悪魔、魔力の跡を出さない様にするために、ほとんど力をおさえているぞ。力を出したら、下手な悪魔よりは上になるんじゃないか？」

やるなら俺とセーラが帰ってからにしてくれ」

どうやらセーラの名前を覚えてらしいトロアが、かなり自分本異な、しかし恐ろしいことをさらりと言う。

「トロア、そういう大切なことはもつと早く言ってくれ」

ラゼスは友人の言葉にため息をつく。恐れている様子はないが、あまり相手にしたくないという気持ちは強まったようである。

「仕方が無いだろさすがに一目見てそこまで見抜けない。」

その金髪の女が準備している術なら大丈夫かと思っただけど……半悪魔が破る用意をして気付いた。魔力が桁違いだ」

呪文を唱える前の準備段階の式に宿る魔力すら見えているようだ。恐ろしい眼力である。さすがにフレアも驚いた様子で、クレアに対してよりもトロアに対する警戒心を強めた。

竜の存在を知っている彼は、下手をすると二人の正体も見抜いているだろう。セーラに血を与えた竜がいるはずだ、と。

本格的に二度と関わりたくない。

フレアの顔の模様が化粧で隠しきりないほど濃くなる。

「怖い怖い。この都市で一番怖いのはそのオバサンだけだと思ってたけど、こんなバケモノまで出入りしてるなんて……」。

でも意外と社交的なね。知らなかったわ。出来たらゆっくりお話ししたいけど、オバサンが邪魔でそれも出来そうにないわねえ」

オバサン呼ばわりされたクレアの方が小刻みに震えている。

転生の術を身につけているのに使わないと誓った彼女だが、女性

なので人並みに見た目の若さには気を使っている。

実際に恐ろしいほど若作りだが、中年は中年である。その事実を突きつけられると怒る。アデイスは恐ろしいので、本人を目の前にしては絶対にしない。

「じゃあ、ごきげんよう」

そう言った瞬間、フレアの顔の様子は最も濃くなり、そしてそのまま壁に手を当てて、めり込んでいく。

どこからか「いたぞ」と男の声が響いた事から、ただ壁をすり抜けただけのようだ。それがどれだけ困難で魔力を消費するか考えると、ぞつとした。

理屈では可能だが、悪魔以外には絶対に出来ないことだと言われている。

「すごいな。壁ってすり抜けられるんだ」

トロアが感心したように呟き、暢気な友人の発言にラゼスが頭を抱えた。

アデイスは部屋に戻るとベッドに正面から倒れ込む。  
疲れた。

クレアの尋問を受け、はぐらかすのに疲れた。

あの二人が知らないことを言うから。

上位悪魔とお知り合いな、尋常ではない雰囲気のある二人。どこで知り合った何者だとか紹介しなさい勧誘しなさい。

「クレアさんって、けっこう引かない人なんですね」

ずっとアデイスの側にいたセーラは、ベッドの上にちょこんと座って言う。

仰向けになり、地下で保護してから一度もアデイスから離れな



った、可愛らしいセーラを見る。

よほど怖かったのか、一見平然としているのに、アデイスがトイレに行くのにもついてきて、トイレの前でちょこんと座り、下心丸出しの衛兵にナンパされ、出てきたアデイスに震えながらしがみついていた。

その可愛い事可愛い事 ではなく、かなり重症で痛ましい。平然としているように見えるから、なおのこと痛々しい。一人で堪えることに慣れているためか、頼れる相手がいるので安定が取れないのだろう。

「そうですよ。ヘビのような女です」

手を握ると、彼女もアデイスの隣に枕を抱えてうつぶせになる。

「さすがに竜だとまでは気付いていないでしょうが……フレアは気付きましたね」

セーラはこくりと頷く。

「とぼけておいたけど、モリイとの関係を疑われています」

「あまり人気のないところには行けませんね。こっちに来るときも、両方に顔を出すのもやめた方がいい」

「そうですね」

「ところで……」

アデイスは少し迷い、セーラの綺麗な黒い瞳を見つめて、言った。

「シャワー浴びたいんですけど、いいですか？」

言ったとたん、彼女は固まる。

「一緒に入りますかあ？」

「ええっ!？」

一瞬跳び上がった固まった。

肯定もしないが否定もしない。

このままなし崩しにいけないのでは……などと考え、さすがにそれはまずかろうと笑みを浮かべる。

「冗談ですよ」

そう言うと彼女は真っ赤になって枕で叩いてくる。可愛らしい力

で、潤んだ瞳が可愛くて、またよからぬ事を考える。

幸いといふかなんというか、竜になつてから人間だったときのよ  
うにがつがつしていないというか、むらむらしないというか、発情  
しない。

何と言つても、今のアデイスは本物の子供だ。

「セーラは可愛いなあ」

頬に触れ、ほつれている髪に指を絡める。

「馬鹿なこと言つてないで、入つてこないんなら私が先に入ります  
よ」

分かっているのかいないのか。

強がつてぶいと顔を背ける様かなんともしじらしい。

セーラは着替えを持ってバスルームに向かい、アデイスはため息  
をつく。

セーラに懐かれるのは悪くないし、頼られれば嬉しいのだが……

「竜つて、発情期があるのか？」

季節によつて気分が左右されるのかも知れないと思うと、元人間  
としてはかなり切なくなる。竜の生態など詳しいことを知らないし、  
かといつて本人達に聞くわけにもいかない。ゼロ歳児の息子にそんな  
こと聞かれたら、父親でもショックだろう。聞けるはずがない。

どうしようもないから目をそらし続けているが、もう少し大きくな  
ったら、誰かに聞かないとまずいだろう。

大人になるつて汚いのだなと、アデイスは身を丸めてしみじみと  
感じた。

## 6話 人形師の館 おまけ

美少女誘拐騒動の翌日。

セーラは美少女ということになっている。アデイスが攫ってきた異国の姫君などという噂まで流れているほどだ。

だからアデイスは帰ってこないのだと噂が流れている。あれでも大人だという正しい情報もあるが、間違った情報の方が多い。

そんな噂が膨れあがっていることも知らず、当の本人達はクレアの質問攻めと、あの二人を紹介しなさいという深夜まで続いた拷問に近い拘束のためか、げんなりとして、図書室にやってきた。

昨日からずっとセーラはアデイスに引っ付いている。クレアに拘束されている間もずっと。

平然としているようだが、実はかなり心の傷になっているらしく、自分の安全な位置から離れない。

アデイスをよく知るディアスから見れば、あの位置がもっとも危険なのだが、四六時中一緒にいて何もされないせいか、彼女は安心しきっている。しばらく前のアデイスなら確実に手を出している状況なのだが、本当に何もなし様子だった。

元々我慢強い男だが、我慢しなくていいところではまったく遠慮などしないのに、何を考えているのだから。

「セーラ、ちよつと私は仕事があるからここにいてくれますか？」アデイスは穏やかに穏やかに、ほら知り合いが一杯とディアスを指さす。しかしセーラは不安なのか、アデイス好みの可愛らしい顔を強張らせ、瞳を潤ませて見上げる。

アデイスはたまらないとばかりにぎゅっと抱きしめる。このあたりは我慢していない。

しばらくして、再び意志を固めたのか、セーラをひょいと抱き上げてこちらに近づいてくる。そしてディアスの前を通り越し、エリ

オットのところまで行くと、その膝にセーラを座らせる。

「ちよ、兄さんっ」

突然のことにエリオットが顔を上げ、すぐにうつむいて抗議する。耳まで赤くなっていた。

「どうやらセーラのことは『女性』として認識し、妹分達とは別物と認識しているようだ。」

「そこは城内で一番安全ですよ」

「そういう問題じゃなくてっ」

抗議するのはエリオット。俯き、さらに視線をそらす。胸でも目に入ったのだろう。あの位置からなら谷間ぐらい見えるはずだ。

「お昼には戻ってきますから、我慢してくださいね。お仕事しないと帰れません」

「う……わかりました」

セーラの方は妥協したのか、エリオットの膝の上で頷く。

アデイスよりははるかに安全な男だと皆も認めるだろうが、膝の上に置くのはまた別だ。彼だって男。同年代の女の子とこのように接触したことなどない。人目のある場所では間違いなど起こらないだろうが、刺激するようなことをしなくとも良いだろうに。

彼は人見知りも激しいが、純情無垢だ。

「じゃあ、エリオット、セーラの側にいてあげてくださいね」

アデイスは笑顔でセーラに手を振って、嫌々の様子で図書室を出て行く。

事後処理が山ほど残っているのだろう。ジェロンもデスクワークだ。なぜかアデイスにはいつも声がかからない。アデイスにやらせると手間が増えるかららしいが、失礼な話だ。

「えと……セーラ、昨日からずっとこう？」

堪えかねたのか、エリオットが先に声をかける。

「え……そうですね」

いつもの突き放すような元気がない。エリオットも気付いたのか、どうにかしたくてもどうにも出来ないで悩んでいる。彼は膝に女の

子に乗せているだけで精一杯なのだ。

「……ディアス」

エリオットが珍しくディアスに助けを求めてくる。

助けを求められても、下手に引き離したら後が怖い。

「訓練だと思ってる」

「く、訓練？」

「もう少し他人に慣れるよ。目を合わせとまでは言わないけど、初対面の人間がいても逃げ出さないようにならないと、お前は一生そのままだぞ。セーラで大丈夫になったら、もっと大人の女紹介してやる」

「いいよそんなの。知性のない馬鹿女なんて紹介されてもつまらないし」

この少年は、見た目や気の小ささに反して、言うことは言う男だ。けっこう本人を目の前にして馬鹿は嫌いとかい切る。幸いセーラは元の世界でそれなりに勉強をしていたらしく、かなり気に入られている。

他にも女性官僚の中には、多少は話をする者もいる。

「頭のいい新人との合コンとか」

「絶対嫌」

「っていうか、合コン……ですか」

エリオット以上に、セーラが不機嫌だった。

「アデイス様を連れてくるとすごいぞ。あの人すんげえもてるから」

「そりゃーそうでしょうねえ。行きたがらなそうですけど」

「だからよけいに希少価値が」

「なるほど」

セーラは納得した様子で、腕を組み、ふと顔を上げたエリオットを見た。目が合った瞬間エリオットは再び赤くなつて顔をそらす。

「エリオット君は目を合わせるのが嫌なんですか？」

「う……うん」

「目をつぶっていれば顔を合わせられますか？」

「え……わ、わかんない」

「じゃあ、目をつぶってみますから、顔を合わせられるか試してみます?」

セーラがエリオットの膝の上に座ったまま、目を伏せて少し上向いて顔を向ける。

なんだかおかしな構図だ。

エリオットはそれでもダメなのか照れているのかよく分からない慌てようで、やはり顔を背ける。

「む、無理……なんか目が開きそうぞ」

「うーん、目隠しでもしてみます?」

と、ハンカチで自ら目隠しをする。

ますます何だかおかしな構図だ。

「あ、これなら……」

それでダメだったらもう人として生きていくのも無理だろう。

「う……」

「え、なんですか?」

「手、前にあると……あ、そっか」

と何を思ったか、これまたエリオットもハンカチを取り出してセーラの手首を後ろ手に縛る。

ディアスは頭が痛くなってきた。

それはないだろうそれは。

「……あれ?」

セーラも首をかしげるが、それだけだ。自分で自分の格好を見ていないから、それほどの実感がないらしい。

「これなら平気っ!」

エリオットが嬉しそうに手を叩いた。

そこまですてもこの無力な外見のセーラに脅えていたら、もうみんなお手上げだ。

「他人の顔、はじめてよく見れる」

初めてなのか。

彼の正確な年齢は知らないが、もう十六、十七歳になるはずなのだが、他人の顔をよく見たことがないというのも恐ろしい事実だ。

「セーラの顔小さい」

「あ……ありがとうございます？」

疑問が湧いてくるのか疑問系。

子供達も啞然としている。

もつどのように反応していいのか分からないでいると、図書室のドアが開いた。

「お、お前達、なにをしているっ!？」

選りに選ってアデイスと、レフロだった。

レフロは衝撃を受けた様子でしばし立ちすくみ、我に返るときよんとしているエリオット達の元へとやってくる。セーラは背を向けているからエリオットにもたれるようにして身をねじっている。

「何を子供達の前で卑猥なことをっ!」

「ひわい!？」

二人は驚いたようで慌てふためく。とくにエリオット。

無茶なところが母に似て、真面目なところが父に似た王子様は、頭を抱えたくなるそれを見て怒り心頭に発したご様子だ。

「えと、ディアスが人と顔を合わせる練習をしろっつ」

ええっ!？」

そんなことまでしろとは言っていない。

「ディアス、お前の仕業かっ」

「ただ練習しろっつて言っただけっ! こんな特殊プレイは指示してないっ」

「問答無用! 恥を知れっ!」

レフロの指が動く。呪文よりも早いその光の魔法は、雷を放ってディアスを感じさせた。

「あ……そういえば自分で動けないっ」

足が短いから床に届かずばたばたと動かし、セーラが暴れるので手を出せないエリオット。

それを見て、ディアスは諦めた。これはディアスが口を出すべき事ではなかった。逃げるべきだった。

意識はなんとかあるが、動けない身体を子供達に突かれながら、ディアスは小さな親切心を持ったことに後悔した。

縛られた異国の少女を立たせ、拘束を解き、目隠しを外してやる。  
小さな顔の小さな少女。

噂ほどの美貌はないが、人形師に誘拐される程度には可愛らしい顔立ちをしている。

「セーラ、何きよんとしてるんですか。しっかりしているかと思えば無防備なことを」

「はあ」

彼女は無自覚のようで腕を組む。

「子供とはいえ、女性をあのようにするのは感心しないぞ、エリオット」

「セーラは僕達よりも年上だって」

「はあ？」

レフロはきよんとしている少女を観察する。

「冗談だろう」

確かに肉付きはいいが。

「うーん。アデイスとかエリオット君って、男の人って感じしなくって」

「私も含まれてるんですかそれ」

「いやだって……」

アデイスがくすくすと笑ってセーラの頭を撫でる。完全に子供扱いをしている。



本当に子供相手でも、女性にあのような態度はなかる。この男らしいと言えばそうなのだが。

「ところで、お昼まで帰ってこないんじゃない？」

「ちよつとセーラにもついてきてもらえたらなど。少しは内部を見ていたでしょう？」

「もしも怖かったらいいんですが」

「別に構いませんけど、居住区域からしばらくは目隠しされていたからよく分かりませんよ」

「ええ」

セーラはアデイスにべとりと引っ付く。仲睦まじい様子で手を取っ合い、アデイスは幸せそうだ。

「アデイス、この女性と結婚するというのは本当なのか？」

「結婚……」

アデイスは視線を泳がせ、頷いた。

「しましうか、結婚」

「ええっ!？」

セーラは驚いた様子でアデイスを見上げる。

「け、結婚って……この国に戸籍ないですよ」

「何を言っんですか。それぐらい簡単に手に入ります」

簡単になど手に入れられるものではないが、アデイスの妻となる女性なら、一般市民よりは簡単だ。ハロイドが喜んで迎え入れてくれる。

「それに何で結婚なんですか。するなら他にいっぱい相手いるでしょ」

「いませんよ。」

それにセーラは既婚者ですって目印つけていた方がいいと思うんですよね

「目印？」

「左腕に銀色の腕輪している人がいるでしょう。あれは既婚者の証なんです。夫婦の名前を入れて溶接してあるので、離婚しないか

ぎりは外さないんです」

セーラはへえと感心したように声を出す。

「でも、そんな事のためにわざわざ戸籍汚さなくても。それっぽい腕輪していればいいんじゃないですか？」

「……………そうですなえ」

本当に男として見られていないようで、レフロは衝撃を受けた。

アデイスといえばこの国の女性で憧れを持たない者はいないのではと言われているほど、優れた容姿と魔術の腕で知られている。女性にも紳士的で、夫とするには理想の相手。それをさらりと振っている。

レフロが女でも喜ぶだろう相手からのプロポーズを、慌てる様子もなく流している。

確かにムードも何も無いが、共に暮らしているのだ。あの男と暮らしていればどんな堅物女でもわずかながらに心動かされるだろうに…………

「いくつなんだ、あの女性は」

「十八歳だって」

「十八なら適齢期だろう。なぜ断っているんだ」

「知らない。一緒に寝てるのに何も無いぐらいだから、本当に意識していないんじゃないかな」

「一緒に寝て…………」

目の前が真っ白になる。

責任を取れと言いたいところだが、本当に何も無いのならかえってこの言葉はセーラへの侮辱となる。

しかしアデイスが何を考えているのか、レフロには分からなかった。

一度手ひどく振られてから女性不審になっただけだが、そこまで一緒にいて何もしないというのもそれはそれでおかしい。レフロが女性だったら自信を無くす。

つまりすべてはアデイスが悪い。

あとで一人きりになったときにもはつきりと言ってやらねばならない。女性に恥をかかせるのは、何人たりとも許されるはずがないのだ。

都会も良いけど、自然もいい。

虫はいるし蛇はいるしと最悪だが、聖良は比較的平気な方なので噛んでこなければ大丈夫。

食事の時の衛生と、寝る時に羽音が煩かったり、虫に刺されなければよいのだ。普段いるのは虫が来ない崖の上で、下にいる時もちらった虫除けの薬を持ち歩けば大丈夫だった。冬に向かっているため、徐々に虫も減ってくるはずだから、雪が降るまでは過ごしやさないだろう。

しかし自然にはいろいろと不便がある。

食物の確保が難しい。肉や魚は手に入るが、野菜がなかなか手に入らない。だからいつも遊ぶ湖のそばに、もらったハーブの苗を植えてみた。

強くてどこにでも生えているが、あくの強い毒草と見分けを付けるにいたため自分で安全なものを植えて育てた方が良さそう。似てはいるがさすがに並んで生えていたら分かるらしく、間違つてどこから種が飛んできて大丈夫らしい。聖良にとって毒はすぐに解毒されてしまうが、不味いらしいのでこうするのが一番よい。

春になったら色々な野菜も植えよう。しかし野生動物に食べられてしまうかもしれない。プランターを崖の上に置くのも考えてみる。時間は腐りそうなのであるのだ。

他には香りの強い花を摘み強い酒に入れて香水を作ってみたり、お菓子を作ってみたり、自然にこだわらない色々な試みもしている。最近、少しだけ調理器具も増えた。

かまどを作つて調理して、パンを焼いたりした。

ネルフィアも食べてくれた。甘いお菓子が気に入らしく、作ると小さくなつて食べてくれる。大きなままだと味わえない。これ

は味を楽しむ物だから、腹はふくれなくてもいいと始めに言っと、彼女はとても驚いた顔をしていた。

その表情が、ちよつぱり可愛かった。

今日は少し趣向を変えた物を作っている。

色々と練習した結果、ケーキを焼くのに成功した。電子機器やタイマーの代わりに、魔法によって温度を一定に保つたのだ。少しばかり硬くて膨らみが足りなかったが、素人作品なので許容範囲内だった。

「あのお、これは何ですか？」

「生クリームですよ」

アデイスには、生クリームを冷やししながら泡立ててもらっている。城のコックさんにももらったものだ。菓子にはあまり使わないよう用途を説明したら驚いていた。

採ってきたばかりのブドウほどのサイズの果物を綺麗に洗い、冷めたスポンジを半分に切った。あとはデコレーションだけだ。

アデイスの力強い腕は聖良がするよりもうんとはやく泡立っている。男の人はこういう時に頼りになる。

しかし、成功して少し驚きもあった。

濃い奴を用意してくださいと言ったが、泡立たなかったらどうしようと少し不安があったのだ。当たり前のように必ず泡立つ濃度のクリームが、パックにされて売っている世界にいた彼女は、瓶に入れられていたそれが泡立つのが不思議で、少しばかり感動した。

「あ、ちよつと貸してください」

ほどよい八分立て状態になったのを確認して、聖良はヘラでそれをすくい、スポンジに塗る。果物を置き、上に生クレームをかぶせて、スポンジで挟む。あとは生クリームで全体を包み、デコレーションケーキにする。

アデイスがそれをのぞき込んでじつと見つめてくるのが少し邪魔だったので、ボールを渡してもう少し泡立てるようお願いした。

デコレーション用はもう少し堅くした方がやりやすい。出来上がったら手製の絞り器で、簡単に飾る。

「美味しいですねえこれ」

「私の世界で考え出されたんです」

生クリームの歴史は古いけど、ホイップするようになったのはそれほど前ではないと聞いた。生クリームが菓子のすべてではないが、聖良は生クリームが大好きだった。

ケーキを綺麗に飾ると、冷蔵庫にしている熱を通しにくい素材の箱に入れる。

あとはネルフィアが帰ってくるのを待つだけだ。

アデイスがボールにこびりついた生クリームの残りを指ですくい食べているので、呆れてそれを取り上げて奥の水場へと向かう。

道具を洗ってから戻ると、ちょうどネルフィアが獣をくわえて戻ってきた。

「お母さんおかえりな……」

アデイスが駆け寄り、背から降りる人間達を見て足を止めた。

ユイとミラとハノの三人。

ハノは腰を抜かして地面に座り込み、ユイの心なし顔色が悪い。アデイスの飛行は穏やかだが、ネルフィアの飛行は、事前にお願いをしないと激しい。

「……本当に来たんですか」

アデイスは三人を見て、言った。

しかも途中でネルフィアに出会って背に乗るとは、驚いた。

「セーラ」

ミラが聖良の元へと走ってきて、ひょいと抱き上げる。

気に入られているようだが、人形のような扱いを受けている気がした。

「お、お久しぶりです」

ネルフィアと喧嘩できる女性に持ち上げられていると思うと少し怖いけど、笑顔で挨拶した。

「いい匂い」

「さつきお菓子を作ってたんですよ。甘いのが甘い」

ミラは心なしか嬉しそうにする。聖良は下ろしてもらって、アデイスにお茶を入れるように言い、冷やしていたケーキを六等分に切り分ける。二きれずつ食べられるかとも思っていたが、これでもよく人数分。

「すみませんねえ。陶器はここまで持ち運ぶのに割れてしまうと思うんで、こんなカップしかないんですが」

アウトドアで使うような、スライドさせて組み立てる携帯カップだ。素材はよく分らない物だが重宝している。

「これ何、この白いの。メレンゲかな？」

「生クリームを泡立てたんです。美味しいですよ」

アデイスが作ってくれたテーブルにケーキを置いて、椅子が人数分無いので立って食べる。

ちなみに、ネルフィアは一口だ。

「こんなお菓子初めて食べるよ」

他国を旅するユイが言うのだから、本当に泡立てる使い方はされていないようだ。

「ただし超高カロリーだから、ばくばく食べると太るんですけどね。それが乙女の悩みの種。太らなければいくらでも食べられるのに。度々生死の境を彷徨って復活しているので、太らない可能性もある。しかしそれに賭けるほど、聖良は無謀では無い。」

「セーラ、私これ好きです。チビ達にも食べさせてやりたい」

アデイスも幸せそうに食べながら言う。子供達に行き渡るように作るのは、聖良は嫌だ。腕が死ぬ。ぜひ職人にまかせたい。

「作り方は簡単だから、都に行ったら教えますよ」

コツは冷やししながら、砂糖はいっぺんに入れない。それぐらいだろう。

あとは職人がいくらでもアレンジしてくれる。

食べ終わると聖良は皆の分の食器を片付ける。ユイが手伝って来て少し助かった。食器を拭き終えて、カゴに入れるとユイが持つてくれる。

「ところでユイ君、どうしてここに……っというか、何でお母さんと？」

ひょっとしたら本当に来るかも知れないと思っていたので、ここに来たこと自体はいい。不思議なのは、あの光景だ。

「実はここまで来たの、君に会いに来たわけじゃないんだ。ちょっと獲物を追っかけていて」

「獲物？」

「魔道士だよ。悪魔の契約者。」

悪いことをした彼らを狩るのも僕らの仕事」

「悪いこと？」

「この国への侵入」

「それが悪いことなんですか？」

「悪くはないけど、悪さをする可能性がある。だって悪魔どころか魔道士もない国だよ。なのに魔道士が入ってくるなら、ろくでもない理由があるってね。ミラがいるから僕らに押しつけられたんだ」  
でここまで追ってきたと。

「で、僕らが追っていたら、ネルフィアさんに呼び止められて、目を離したら逃げられた……。」

まさか彼女に文句も言えないし」

言えるわけがない。

気持ちはよく分かる。

「で、なんかこっちの方に逃げてきたから、たぶん山越えをしたいんだと思って、ネルフィアさんにとりあえず見晴らしのいいところがないかって聞いたたら、ここに……。」

「確かにうちは見晴らしはいいですねえ。」

この上に行くのも、ここをロッククライミングするのが一番安全だそうですねよ」



聖良は軽い調子で、現実的ではないことを言う。

見晴らしが良すぎて、この中から一人捜すのは大変だろう。むしろ下から崖を見上げていた方が、見つけやすい

「……噂以上に恐ろしい森だね」

他の道がどう危険なのか、聖良はまだ聞いた事がないが、どんな事をして聖良には越えられない山だという事だけ理解している。

「でも、こんな所でのんびりしていいんですか？」

「相手も動けなくてじっとしているとところだよ。この森じゃあ、休もうにも落ち着いて休めないし、体力は削られる。かといって戻れないから進むしかない。森の外には仲間がいるから。

だから時間の経過は僕らにとって有利になるんだ。もうすぐ日も暮れるし。

出来れば今日は泊めてくれるとありがたいな」

「かまいませんけど、雑魚寝ですよ」

聖良が言うと、ユイは首を横に振る。

「それはかまわないよ。魔物に襲われなくてだけで有り難いから。ミラは見張りに起きているようなタイプじゃないし。襲われたら勝手に起きて一人で対処するから……」

彼女に協調性を求めるのが間違いなのだろう。

入り口付近の広場に戻ると、聖良は食器を棚に戻して階段を上って巢の中に入る。この世界で一番落ち着く場所だ。

「あ、靴脱いでくださいね」

顔を出したミラに言う。

布が敷き詰めてあるから土足禁止である。

裸足で歩くのは日本人である聖良には安心感と安らぎをもたらす。最近はクッションを作ったりして、インテリアも整えた。寝る時に寒いので、毛糸の靴下も編んでいる所だ。

こんな場所でもちゃんと文明人が出来るのである。

初めと違って服もあるし、古くさい感じだが下着の替えもあるし、生活感が出てきた。

ずいぶん改善されて、その事に関してはアデイスに感謝している。

「可愛らしい。こんな所なのに女の子の部屋っぽい」

「セーラが暇しているいろ作るから……」

ユイがクッションを手に取って言う。そのクッションすらぬいぐるみ風。

耳とかつけて可愛いのだ。中には乾燥させた、香りの良い草花を混ぜてあるから、芳香剤代わりにもなっている。ミラが気に入ったようできゅっと抱きかかえている。

「この匂い好き。セトがよく作っていた匂い袋に似ている」

「ポプリを作って混ぜてますから。好きな匂いが混じっていたのなら、余っているのをわけましようか？」

彼女はこくりと頷いた。

なぜこれほど素直な人が、悪魔だと呼ばれているのか、聖良には理解できなかった。

剣を持ち、易々と人を殺せる事さえ気にしなければ、彼女は簡単に他人に害を与える存在ではない。触らぬ神に祟りなしというように、不用意に触れなければいいのだ。

おそらく危害を加えるようなそぶりがいけないのだろう。

「相変わらずミラの扱いの上手い……」

「普通に接しないからいけないんじゃない」

「普通に接すると後で痛い目に合うんだよ」

深く付き合っているとそうなのかも知れない。目は離せないだろう。

「あ、セーラ、さっきお母さんからちよっとお肉わけてもらいましたよ。保冷庫に入れてあります」

「んー、今夜は何を作りましようか」

パン種はアデイスが多めに作ってくれたから今夜の主食は足りる。肉を使った料理は、何がいいだろう。仕入れてきたばかりで、ミルクもバターもあるからシチューでも作るうかと考えた。客が来たと

きぐらひは凝つた物も作らないと失礼である。

前の暮らしは便利すぎるほど便利だったが、慣れてしまつと自分でパンを作るのも慣れた。手抜きサバイバル料理の腕ばかり上がる。ここは一つ、客人にだけでも聖良は料理上手で出来る女の子だと認識していただく事にした。

翌朝、崖がよく見える位置で、皆で一緒に食料集めをした。

この時期は木の実がたくさん落ちていて、それを炒つたり、潰してお焼きにしたり、美味しい季節だ。

聖良は現代つ子だが、幼い頃は田舎暮らしをしていたのでサバイバルスキルはそれなりに高い。食べられる物は何でも潰して焼くか煮込んでしまえばいい。あく抜きは大切だ。天然の植物はあくが強い物が多い。

「これ食べられる」

ミラがキノコや木の実を次々とカゴの中に入れていく。危険なキノコの見分け方も教えてくれる。都会つ子のアデイスよりもよく知っていて、頼りになった。

「アデイスはユイ君と何を話してるんでしょうねえ」

「魔道士の捕獲についてだと思う。見つけるの大変。あれはそのうち森に馴染む。慣れれば生き延びる。弱っているこの数日の間が勝負。ハノは崖と他の道見張る。だから追い詰めるのは私達。」

魔術師にとつてもこの国に魔道士がいるのは不愉快。害ある異端は狩るのは道理。それに逆らえる力を持たない魔道士が悪い」

逆らえる力を持つ異端がミラなのだろう。

同情もしていないようで、弱いその『魔道士』を下に見ている。

何があつたのかは分からないし、分かるうなどとは思わない。彼

女の生き方を否定など出来ないし、否定できるほど聖良は清く正しくない、どこまでも名前負けした人間だ。

だから彼女には何も言わない。言っても無駄だと思っている。

聖人君子のように命を大切にと説いても彼女は理解しないのだから。

「あ、これ芋。食べられる。美味しい。あとで焼いて食べる」

ミラはどこから取り出した幅広の刃物で地面を掘る。引き抜くと、聖良はぱちぱち拍手した。

ころころとした、里芋のようで美味しそうな芋だ。

醤油が恋しい。

さすがにそんなものの作り方など知らないし、大豆や麹もない。

せめて魚醤のような調味料があればいいのだが、醤油と言って通じなければ、説明のしようがない。

ちよつと焦げた味が忘れられない。

その他には、味噌汁と梅干しと納豆が食べたかった。

「……どうした」

「生まれたところを思い出していて」

「なぜ」

「美味しい物があつたんです」

「……」

彼女は同情の目を向ける。食に関してはそれなりに執着があるらしい。

「セーラの作るの、美味しい。どこにある？」

「………何というか……よく分からないんですよね。小さな島国で」

「そうか。残念」

ため息。

帰りたいと思わなくても、連載中の漫画の続きが気になったりとか、あそこのパフェが食べたかったとか、そういう心残りは山ほどある。まだキャビアもフォアグラもトリュフもフカヒレもツバメの

巢も食べた事がなかった。

なんて俗な心残りだろう。心の底から会いたいなと思うのが、新聞屋のご夫婦と従業員だけという体たらく。

「セーラ、いっぱい取れましたね」

カゴの中を見てアデイスが言う。

話は終わったのだろうか。

「私はちよつと周囲を見て回ってくるので、ミラさんといっしょにいてください。ミラさんならセーラを任せても安心ですし。くれぐれも離れたりしないように。少しでも目を離すと、また誘拐されかねません」

どこまで人のことを誘拐されやすい人間だと思っているのだろうか。ここに召喚されたのを含めれば三回だ。アデイスだって二回目だから、人のことは言えないはずである。むしろ次はアデイスが心配だ。「気をつけてくださいね」

「大丈夫ですよ。アルテのところに行くだけです。彼らはこの森に長く住んでいますから、手段も持っているでしょう」

「あ、そか」

彼らは時々湖にやってくるので、釣った魚と引き替えに森の色々を教えてもらっていた。他の知能が高い魔物の知り合いもいるだろう。見返りを与えれば協力してくれる可能性がある。

「いってらっしゃい」

「ええ、行ってきます」

アデイスはしゃがみ込んで聖良の額にキスをする。

よく分からないうちにお休みのキスをするようになり、なぜかこれが日常的になった。

彼は足取りも軽く、浮かれた様子でユイを連れて去っていく。

「どうしたんだろう」

「買収されたんだろう。神子の手口だ」  
手口。

何で買収されたのだろうか。帰ってきたら問いただしてみよう。

聖良は考えながら、木の実を拾う。

「セーラ」

聞き覚えのある　そう、リーザの声に立ち上がる。

アデイス達はなんとタイミングが悪いのだからと思うっていると、リーザと白い狼が姿を見せた。

アデイスはアルテが住まうツリーハウスを見つけ、上向いて声をかける。

「すみませーん。アルテさんいらっしゃいますかあ」

いつも母親は家にいるので、声をかけてみる。すると目当ての少年が顔を出した。彼の母親はどうにも苦手なので助かった。彼女はとにかくテンポが違うのだ。のんびりしすぎていて、話に付き合っているとそれだけで日が暮れる。

「何の用？ セーラの代わりに知らない人間がいるね」

可愛らしい顔をのぞかせて、彼は家から飛び降りる。身軽に着地すると、知らぬ二人を見上げた。

本当に可愛らしい少年で、背丈はセーラよりも少し高い程度。男でもいいかと思う程度に可愛いが、今のアデイスは、心身共に清らかなので口説いたりはしない。

「ちよつと協力してもらいたいですよ」

「どうしたの？ この人間達誰？ セーラ一人にしていいの？」

「セーラはうちの母並みに強い女性と一緒にです」

「怖いよそれ！ 生物の限界を突破してるよ！」

彼は人の母をどんな風に思っているのだろうかと問い詰めても、返ってくる言葉が予想できるので飲み込む。

「この方は神子のユイ。神子って知ってます？」

「知ってるよ。田舎者だからって馬鹿にしないでくれないかな」

アルテは無難に微笑むユイを見て、唇をとがらせた。

「神子なんか何の用？」

「神子嫌いですか？」

「人間以外で好いているのはいないんじゃないかな。だって油断すると一生使役にされるんだよ。いらなくなったら首切られて殺され

る。アデイスなんて竜なんだから、気をつけないと危ないよ」

「この人は大丈夫ですよ。うちのお母さんと喧嘩できる人で容量が埋まってるんで」

「それなら……って、どうやってそんなの使役させたんだよ」

「私が聞きたいですよ」

本当にどうやったのか、落ち着いたら聞いてみよう。疑問を抱いたら、気になってきた。

「で、何の用？」

「この森に魔道士が紛れ込んだらしいんですよ。悪魔の介人がされるようになったらまずいので、引っ捕まえたいんですけど、協力してくれそうな知り合いに声かけてください。というか、妹さんの鼻で」

彼はきょとんとして首をかしげた。

「魔道士って、どんなの？」

アデイスは振り返り、ユイを促す。

「十四、五の姿をしているんだ。銀髪のきつつい顔した褐色肌の綺麗な男の子」

綺麗だけど鋭い雰囲気少年。

アデイスは女の子のような少年は趣味でも、そういうのには興味がない。

「ひよっとして、白い狼を連れた？」

「見たの!？」

アルテの問いにユイが詰め寄った。

「弱ってたから、妹が保護したんだ」

何と間の悪い。エルフなら分かるかと思ったのだが、考えてみれば獣人とつがいになるとぼけたエルフとその子供達だ。はぐれ者なのは間違いない。

「今はどこに？」

「今ちょうどアデイスのところに連れていったところだよ。人間の知識があるから、看病出来るんじゃないかって」



三人は固まった。

湖の側にはセーラがいる。

トラブルを呼び込み、なぜか大けがをするか、変なのに絡まれることが特技といっても過言ではないセーラがいる。そして、悪魔よりも恐れられる女がいる。

「セーラがつ！」

「巻き添えになったらひとたまりもないよ！」

「ひい」

アデイスは荷の中からミリアの頭蓋骨を取りだし、呪文を唱えながら簡単に脱げるようになって服を脱ぐ。竜のアデイスでは呪文を唱えられないが、ミリアならなんとか可能だ。魔力の調整が赤ん坊の竜よりは若干やりやすいことから、竜のアデイスが魔法を使えないのは舌が回らないだけではないことが分かってきた。

荷物の中に破れないよう服をぐしゃぐしゃに突っ込むと身をかがめた。

「特別に乗せてあげます」

ユイがいないとミラを止められないから。

アデイスはミラが怖い。

クレア、ネルフィア、ミラ。アデイスが勝手に決めた世界三大凶女である。

あながち間違っではないだろう。

この中ではクレアだけは比較的大人しめだが、遠慮しなくていいと知ると技術だけでネルフィアとも渡り合えそうだ。影の支配者は伊達ではない。彼女は何でも出来る上、得意は攻撃型の術である。

アデイスも似たようなタイプだが、得意と言いつけるものが何一つなく、平均的に何でも出来た。特技がないというのはコンプレックスだったが、今では何でも万能に出来るのがマイナスにならないほどの魔力を手に入れた。今ならクレアにも勝てる。

そんなくだらないことを考えながら、アデイスは飛び立った。

聖良は色んな移動方法で移動したが、これほど微妙な移動手段は初めてだった。

女の人に小脇に抱えられている。

竜の口やら獣の口やらは怖かったが、これはなんとも情けない。

同じ女性が、信じられない速さで聖良という荷物を持ったまま走っているのだ。

「あの、置いてっていただければっ」

手足を縮め、周囲にぶつけないようにしながら主張する。

前方を必死で逃げる白い狼との距離がなかなか詰まらない。つまり聖良さえ捨てれば追いつける。

「セーラ、置いてくと誘拐される。それはだめ。

問題ない。追いつける」

確かに少しずつ詰まっている。

狼は背中に男の子を乗せているから。

「セーラ軽い。あれは男だから重い。

襲われたり、ユイの攻撃許可が出れば手っ取り早かったけど」

こんな風に話が出るほど余裕なのだ。恐ろしい女性。

「しかしユイは何をしている」

「運のないアデイスなんて連れてきているから。そしてミラさんは同じく運のない私を連れてきているから」

「確かに運のない。ユイがいなければ、命令の解除が出来ない。襲われない限り攻撃できない」

「攻撃できないのに、追いかけてどうするんです？」

「ねじ伏せるぐらいならできる」

暴力行為以外ならできるのだろう。行動に規制がかけられているというのも大変だ。

「あ、このまま真っ直ぐ行くと、いきなり大きな岩があつて足を止めないといけなくなりませう」

「さすが地元民。それを狙おう。タイミングを」  
「だいたいよければ」

周囲の景色はどこも同じに見えるが、先ほど大きなサルスベリのようなつるつるした木が見えた。あの大きさはこの周辺に一本しかない。他の景色も見覚えがある。アデイスが罫を仕掛けた時に、このあたりをよく観察したのだ。

下手すると自分で引つかかる可能性があるから、必死に覚えた。

「あと少し……そろそろ気づいて足を止めます」

ここまで速く走っていると、正確なタイミングなど分からない。唐突に視界に入ってくるから、足を止めるのは確実だ。この速さで走っていれば、へたをするとそのまま岩に突撃してしまう。

待つこと数秒　足を止めた。

わずかにとまどい、右に行く。しかしその先も行き止まり。なにより、その一瞬のとまどいが、ミラにとっては十分な時間だった。

にらみ合う。

相手はミラが怖くて動けない。向き合ってしまった以上、下手に動けば追いつかれる。対するミラはどうしようか悩んでいる。相手から見れば、余裕の態度に見えることだろう。

実力的に有利なのはミラだが、襲ってくれないので手を出しにくいらしい。殺さぬよう、過剰に傷つけぬように捕らえるにはどうしたらいいのかと悩んでいる。

彼女がこういうときどこまで動けるのか知らない聖良は、ようやく地面に降ろされて生きた心地を取り戻して考え始めた。

狼はぐつたりとした少年をかばうように、唸る事もなくミラを睨み続けている。健気な子だ。

「……」  
唐突に、ミラが前に出る。腕を広げ、彼女が前に出た分後ずさる狼を威圧する。

「動くな。お前は始末の対象ではない。動かなければ殺さない」  
しかし狼は後ろに下がる。けっして少年を見捨てようとはしない。健気な忠犬だ。こんな状況でなければ、聖良はなで回していたところだ。

しかしミラはそのような事は考えもしないらしく、広げていた腕を胸の前で合わせた。

「くっ」

狼が地面から出てきた半透明の何かに絡みつかれ、跪く。その拍子に少年が背中から落ちた。

「始めからそれやっていたらよかつたんじゃない」  
「走っている相手、捕縛するの大変。私の魔力では殺してしまう可能性があるから、出来ない」

「ああ、可能性を考えた時点で出来なくなるんですね」  
「そう。确实だと私が思わなければ、出来ない。とても不便」

淡々と語る彼女は、その間にも拘束を強くして狼を地面に押さえつける。しかし落ちた衝撃で少年が目を覚ました。ミラと目が合い、現状を悟ったらしく獣のように低く唸る。

「無駄な抵抗、早死にの元」  
殺すつもりで、殺すことが出来ないだけの人間が言う台詞ではない。少しばかり彼が可哀想だ。

「君、怪我してるんでしょう？ 抵抗しない方がいいですよ。ユイ君は無抵抗で拘束された子を問答無用で殺したりはしないから」  
聖良は説得を試みる。聞き出すために拷問まがいのことはするかも知れないが、殺しはしないだろう。

悪の組織の長などもしているアデイスまでいるし、拷問されない

とは言い切れないのが可哀想。

「本当に、どうしてこの国に来たんですか？ 命令されたの？」

「お前……」

聖良の口調に少年は驚き、ひたと彼女を見つめた。

この反応は間違いなく不気味な発音に驚いているものである。

「とりあえず、大人しくしてくれるなら手当てしますよ。じゃないと出血で死んじゃいます」

落ちた拍子に傷でも開いたのか、少年の肩に新たな赤いシミが出て来ている。

「セーラ、なぜ？ これ、人を捨てた者」

別の意味で人間を捨てているミラが言ってもまったく説得力がない。まさかそんなことも言えないので、濁すための言葉を探す。

「えと……このワンちゃんが健気で可愛いから」

「セーラ、動物好き？」

「大好きですよ。けなげな子は見るときゅんとするんです。心が薄汚れているアデイスと違って」

「よく分からない」

「まあ、けが人追い回すのを見ているのも何ですし。捕まえてしまえば逃げられないでしょうしね」

悪いことをしようとするのはいけませんが、弱々しい姿を見て執拗に踏みつけにするのも、どうかと思った。

どうやって水辺まで連れていこうか悩んでいると、背後に何かが落ちる音が響いた。

ユイも様々な経験をしてきたが、竜の背の上というのは、初めてだった。

感想は怖いの一音である。鞍でもあれば別だろうが、高いところに不安定な状態でいるというのは、とにかく怖い。セーラのように無力な少女が平気で乗っているのだから、恐怖さえ押さえ込めば問題ない。

同僚の中にも竜を支配下に置いている者もいるが、滅多なことでは竜の姿に戻さない。そのため、その背に乗ったことがある者は数えるほど。

以前見たときよりも色が濃いつか、おそらくセーラが化けた竜になっているのだろう。本来の姿だと舌が回らないと言っていた。「アデイスはよくこの姿に？」

「そんな事はないですよ。危ないと思ったとき、セーラがこの姿になれば多少身を守れるようになりますから、普段は彼女が」

竜の姿というだけで身の守りになる。なにせ普通の刃物を玄人が突き立てようとしても刺さらず血すら出ない。簡単に傷つけられるミラが特殊なのだ。

「いた。旋回します」

アデイスは親切に宣言してから旋回する。しがみついて目を伏せる間だ、いつの間にかずいぶんと下に降りていた。

「あ、追い詰めてる」

ミラがセーラを小脇に抱えて移動している。魔力があるから出来るのだが、端から見ると奇妙な光景だ。

「ここに降りられないので飛び降りて下さい」

「とび……」

アデイスの言葉に迷う内、ハノがさして抵抗なく飛び降りる。その手に引かれて、ユイはアデイスの背から落ちた。

高いところが苦手だと知っているのに　いや、だからこそ引張ってくれたらしい。

「ひいっ」

地面に落ちる直前に、身体が一瞬浮いて、落下が緩やかになる。

ハノも半分は悪魔の血を引いているので、悪魔のような魔力の使

い方も出来る。そう分かっているても、怖いものは怖い。ユイは神子なだけでそれ以外は普通の少年である。

着地しようと体制を整えようとした瞬間、浮力が消えてバランスを崩し地面に足をつけるも、もつれて腰から落ちる。

「ユイ君」

聖良が驚いた様子で振り返る。血も出ていないし、服も破れていない。どうやらアデイスを怒らせるような目にはあっていないらしい。

安心すると同時に羞恥を覚えて起き上がる。

「大丈夫だったみたいだ……」

ユイが安心した瞬間、セーラの喉に腕が絡みついた。

ミラが動こうとしたが、顔をゆがめて止まる。殺そうとしたので動きが制限されたらしい。命令の限定解除を忘れていた。

しかしこれは、まさしくアデイスが怒るような場面である。

彼が駆け付ける前に何とかしないとイケないのだが、ミラにセーラを傷つけずに助けることが出来るのか疑問だ。今までのことを振り返ると不安でならない。何よりも、彼女は今ものすごく怒っている。剣を持つ手が震え、ユイを睨んでいる。

「命令を」

「セーラを傷つけないように、魔道師を殺さないように捕らえて」

「なぜ！」

「なんでそんなに怒ってるの」

「いいから命じろ！」

本気で怒っている。あの魔道師はミラに何をしたというのだろう。彼女は常に殺意を持っているが、このように感情を爆発させたりはしない。

「やめた方がいいですよ。ミラさんが怒ってます。このままじゃ殺されますよ」

一方、人質にされているにもかかわらず、セーラは冷静だった。

相手が怪我をして、ユイよりも幼い少年の姿をしているからだろう。

「私は竜の血を飲んでるから、人質にしてもあまり意味はありません」

「うるさいっ」

説得しようとするセーラに、魔道師は甲高い声で怒鳴りつけた。

「落ち着いて下さい」

「動くな」

「多少の傷はすぐに治ります。ミラさんが動くよりも先に首を落とせるのならばかく、そうでないなら人質にする意味はありません。わたしを支えに立っているぐらい弱ってるんですから、投降しましょう。けが人に手出しはさせませんから」

ね、と言う彼女は、恐ろしく冷静だ。

ミラと同じ年だと言っていた。十八歳の女の子達が、なぜこうも肝が据わっているのだろうか。実力のあるミラならばかく、彼女はか弱い女の子だ。傷つけば痛いに決まっているのに、平然としている。

「竜が味方しているんです。逃げても追われます。ね？」

その言葉で、少年はセーラの喉に絡めた腕から力を抜く。

空から追われては逃げ切れないのは必至。

「いい子ですね」

微笑みを向けられ、少年の浅黒い頬に赤みがさす。

外見の年齢的には釣り合っているし、この状態で心が動くのは不思議では無いが、無謀に過ぎる。

「お名前は？」

「あ……アデライト」

「アデライト君。いい子ですね」

セーラは彼を子供を扱いしている。彼女は母性本能が強そうな女性だ。

このミラにまで構ってくれるほどである。

「あ、片がつきましたか」

茂みをかき分けて、服のボタンをはめながらアデイスがやって来



た。彼はセーラが構っているアデライトを見て、驚いた顔をする。

「おや、思ったよりも可愛い子ですねえ。異国の子でしょうか。可愛いですねえ」

予想と違い、セーラがかまうアデライトに笑みさえ向けて近寄る。

「アデイス…… 本当に子供好きなんですね」

アデイス自身が子供のくせに、何を言っているのだろうかと思っ  
思った。

「当たり前です。とはいっても、魔道士なんて見た目が子供でも、  
中身はジジイだったりしますからねえ。」

契約してるってことは、穢れなき少年ってわけでもないですし」

「け、契約はしてない！ 仮契約だ！」

アデライトはまっ赤になって首を横に振る。悪魔との契約は、身  
も心も捧げる 貞操を捧げるといふものだ。

「かり…… 仮契約って？」

口調の割には魔の知識がないセーラが尋ねる。

「限定契約だ。本契約じゃなくて、口約束レベルだから魔力とか特  
殊な能力とか知識は与えられない。だから命令は聞くけど、それ以  
外は捧げたりしていない」

つまり、自分は操を立てているのだと言いたいのだ。

問題は、仮契約などする悪魔など、滅多にいるものではないとい  
うこと。

「アデイス、この子怪我をしてるみたいなんです。」

上に行つて傷口を洗つて手当しましょう」

「そうですね。血の臭いをさせると、魔物が寄ってきますし」

アデイスは着たばかりの服を再び脱いで竜の姿になる。今度は自  
分本来の華奢な姿だ。頭蓋骨の竜は、骨格が大人に近く翼が広いの  
で、飛び立てないと思つたのだろう。

「ひっ」

竜とは思っていなかったのか、アデライトは目を剥いた。セーラ  
はといえば、平然と散らばつたアデイスの服を回収している。

「アデライト君。おいで」

セーラが笑顔で誘い、ミラが狼共々抱えてアデイスの背に乗る。

「あ、この姿だとこれ以上は無理なので先に行きますね。後で迎えに来ますから待っていてください」

アデイスは女の子と魔道士達を乗せて飛び上がり、大きく旋回しながら静かに上へと上って、巣に向かっていく。

よく分からないことになっている。

悪巧みがないのなら良いのだが、半悪魔と何か悪巧みしているなら、手を打たねばならない。

子供に見えても、半分だけでも、魔道士は魔道士、悪魔の使いは悪魔の使いだ。

綺麗な水で傷口を洗い流し、人の姿に戻ったアデイスが軽く治療する。彼は十代の前半までには優しいらしく、十代半ばのユイに対してよりもうんと優しくかった。

顔立ちが綺麗に整っているのもあるだろう。頭が小さくて、目鼻立ちがはっきりしている。

映画の中で見たのなら、うっとりしてしまいそうな異国の美少年だ。服は血で汚れているので、アデイスの服を着せると、ぶかぶかで可愛いらなかった。

「やあ、可愛いですねえ。さすが悪魔はセンスが良い」

「だから、思っても男の子に可愛いって言っちゃ駄目ですって」  
可愛い可愛いと言われて傷ついた様子のアデライトを見ても、可愛いと言いつけるアデイスの後頭部に、ミラにもらった杖を振り下ろす。竜の姿だったら石斧の刑だ。  
「で、元気になったところで、どうしてこの国にいるのか話してくださいね。じゃないとここから下ろしてあげられませんよ。傷も完全に治っていないから、ここから下りる事も登る事も出来ないですよ」

聖良が笑顔で言うと、アデライトは視線をそらし、聖良の膝の上に頭を乗せて撫でられている狼を見つめる。イーザという名前らしい。

「……………くつろいで」

ちら、と主を見たイーザは、聖良に甘えるように擦り寄る。聖良は大きな犬も好きだ。白くて綺麗で、とても愛嬌がある。

「あ、ササミがあるんですよ。いりますか？」

尋ねるとイーザはのそりと起き上がり、尻尾を激しく振った。

「イーザ、お前……………」

アデライトが手を伸ばし、その瞬間、彼の腹が鳴る。顔を赤らめ

る彼を見て、アデイスが容赦なく笑った。

「そろそろ昼食の時間ですね」

聖良は立ち上がり巢の外に出て貯蔵庫の中を見る。

卵と野菜とベーコンが目に入り、マヨネーズも作り置きしてあるので、パンに挟むことにした。

かまどの前で呪文を唱えて持続する炎を入れ、フライパンを温める。バターでささっと卵を炒ってから、焼いたパンに切れ目を入れてサンドにする。卵は使い切ってしまったので、これから野菜は塩かドレッシングの生活に戻る。卵はなかなか手に入らないのだ。

「アデイス」

呼ぶとアデイスが顔を出す。

「これお願いします。プリンがあるんですけど、食後にします？おやつにします？」

「ミラさんに睨まれたので、早めに出してあげるのがよいかと」

「わかりました。先食べていいですよ」

聖良はデザートの準備をはじめ。昨日ホイップした生クリームが保冷庫に残っているの、果物を添えてプリンアラモードにするつもりだった。ネルフィアの分として二つ作っていたので、それをアデライトの分にする。

プリンを少し押しして容器との間に空気を入れ、軽い衝撃を与えるのと器に滑り落ちる。慣れれば一瞬で出来る作業で、果物も準備してあるからあつという間にできあがった。

「アデイス、取りに来てください」

「はいはい」

お盆などないから、手渡しするのが一番早い。終わるとアデイスが作った階段を上って巢の中に戻る。便利なので、これからどんな暇を与えて生活を充実させていきかけた。

空いている場所に座ると、既にミラがプリンを食べていた。好きに食べてもらえばいいのだが、メインを無視しなくても、と思った。「気に入りましたか」

こくりと頷く。

「よかった」

聖良はベーコンタマゴサンドにかぶりつき、空腹を満たす。やはりシンプルな料理は下手に凝るよりも美味しい。

「で、お話しは出来たんですか？」

「なかなか口を割らなくてね」

「どうしてお話しできないんですか？ やっぱ悪いことをしに来たんですか？」

聖良が尋ねると視線をそらす。

「ち、違う」

その様子を見て、アデイスが笑った。

「可愛くて、あんまり強く出るのが可哀相になるんですよえ」

見境のないアデイスは指についたマヨネーズをなめながら言う。

「アデイス、子供のくせに年上を可愛がる？」

ミラが不思議そうにアデイスを見る。外見は子供だが、魔道士だから中身は年上の可能性があるのだ。

「私は年齢とか種族に関係なく可愛い子が好きなんですよ」

「前は若い人間の女の子がいつて言ってたのに、すっかり開き直りましたね」

「可愛いものは可愛いんです。あ、ユイも可愛いですよ」  
本当に見境のない男である。

「でも、話さないと本当に帰れませんよ。魔道士などがこの国に入ったなど、由由しき事態と取られるのが、分かっている入ったのでしょ」

アデライトはまた視線を逸らす。そして、

「俺は仮契約だ」

「仮契約……まさか君は、双灰の悪魔の魔道士か」

ユイの問いに、アデライトは不服そうに唇をとがらせる。正解らしい。

「そういえば、仮契約しかしないし悪魔がいると聞いた事があ

りますが、まさかあの変態兄弟の父親の魔道士だとは……」

「へ……変態？」

アデイスの子供らしくない言葉に、ユイが驚いた。

「うちの国でかなり昔から住み着いている半悪魔ですよ。他国の方は彼らの性癖のことまでは知らないと思いますが、ド変態ですよ。この前、セーラが誘拐されて人形にされそうになったんです。

それ以来、人形を見るとちょっと動きが止まるんですよ。怖かったんでしょうねえ」

「相変わらずトラブルに巻き込まれてるね。厄落としてもした方がいいんじゃないかな」

聖良はこの世界にもそんな物があるのかと驚いた。機会があれば是非してもらいたい。

「しかし、あの兄弟に会うために、わざわざこんな所まで……というのも説得力がありませんね」

「ど、どこが？」

「もちろん、悪魔なら遠方と連絡を取るための手段などいくらでもあるでしょう」

アデライトは目をそらす。分かりやすく、とても可愛らしいと聖良は思った。

「だ、大した用じゃない」

「大した用でないのなら、言ってしまった方がいいですよ。じゃないと頭の中をのぞき見することになります。廃人になりかねませんよ」

聖良は驚いてベーコンサンドを落としそうになった。ミラが興味津々とアデイスを見て、ユイが慌てる。

「この国にはそんな危険な魔術があるのっ!？」

「危険だから禁呪として封じられていますよ」

「禁じられている術をなんで知ってるんだ……」

アデイスは涼しい顔をして、アデライトへと微笑んでいる。その笑顔が実に胡散臭い。

「本当に何をしに来たんです？ 魔術師の研究でも盗みに来たんですか？」

彼はふるふると首を横に振り、一瞬だけ聖良を見た。助けを求めているのだろうが、聖良には助けられない。これがテストの答案を盗みに入ったという程度ならともかく、国が動きかねないような事なのだ。

「だから、大したことじゃない……ない」

「大したことじゃないなら言いなさい」

アデイスが子供を叱るように言う。アデライトはちらりと聖良を見て、うつむく。さつきからちらちらとこちらを見ているが、助けられないものは助けられないのだ。ここで偽善者ぶって口を出さず、可愛くてヒロインらしい、鬱陶しい女になれるほどの空気を読めない善意を、聖良は持っていない。

「あの」

一人で黙々と食べていたハノが呼びかける。

「……ひよっとして、目当ては元々ここだったとか？」

アデライトが顔をそらす。彼はどこまでも素直だ。

「は？ なんでこんな所に用があるんですか」

「ここには生まれたての竜に、珍しい話し方をする女の子がいるから、不思議では無いよ。双灰の悪魔はそういう女の子のコレクターでもあるから、様子見と思えば……」

それはただの予想だ。しかし、アデライトという嘘のつけない少年を見る限り、正解なのだろう。イーザが必死にしつぽで平静を装うように促しているが、もう遅い。

「……じゃあ、ユイ君たちが来なかったら、私また誘拐されていた可能性があつたって事ですか？」

「……セーラさんは、今後も誘拐には気をつけた方がいいね」  
ハノの言葉に少しばかりショックを受けた。

こんな可愛い忠犬と可愛い男の子が誘拐を目論んでいたなんて、これから何を信じていけばいいのだろうか。

「お前、セーラを誘拐する気か。ユイ、双灰の悪魔を狩りに行く」「さらつと恐ろしいことを言うね。そんな大物に喧嘩を売りに行くならそれなりに援護がいるだろ」

「不要。たかが魔女と悪魔二匹。アデイスも手伝う」

アデイスがびくりと震える。さすがに驚いたようだ。

「……いや、でも、セーラは無事ですだから。もしもの時は竜の里にでも避難しますよ。あんまり目立った事をして恨みを買ってもどうかと思いますし」

「悪魔、力があるから簡単に諦めない。難しい方が退屈しのぎになるから力を入れる」

アデイスは腕を組んだ。

「でも、悪魔はこの国に入つてこないでしょう。せいぜい仮契約の魔道士だけ。それならどうともなりません。現にこの子なら返り討ちにしています」

中身が完全に魔術師の竜など誰も予測していないから、戦力を見誤ったのだ。こんな赤ん坊の竜が他にもいたら、聖良はシヨックで寝込みそうだ。赤ん坊なのだ。生後半年にも満たない赤ん坊。せいぜい四、五ヶ月なのだ。本来なら可愛い盛りのはずなのだ。

食べられそうなので、本物の赤ん坊竜を見たいとは思っていないが。

聖良がまだ見ぬ本物チビ竜を想像していると、突然イーザが立ち上がる。

「来た」

ミラの言葉を聞いて、聖良が何気なく立ち上がろうとするとハノに腕を取られた。ミラとユイが巢の外に出て、アデイスがゆったりと階段を上って外に出る。

「私達はここにしよう。どうせ行っても役には立てないし」

「ハノさんは争いとか苦手なんですか？」

「半悪魔というと凶悪なイメージだけど、私は補助の方が得意で。

ここが燃えないように結界を張るから、アデライトさんが変なこ



とをしないように、一緒に見張ってくれめかな？」

聖良はちらりとアデライト達を見る。怪我が完治していないため、動こうとしてまた呻いていた。

「逃げませんよね？ 応急処置しかしてませんし」

自力でこの巢から出るだけで、傷口が開いて大変だろう。聖良なら数時間も放置しておけば完全に治る傷だ。血を直接飲んだ時はもっと早かったが、最近は瞬間に治るのはかすり傷と重症の時だけになった。死んでいるような傷が刺されたぐらいの傷になるまでは早い、そこからは少し時間がかかる。安定したのだとネルフィアが言っていた。

多少治るのに時間がかかっても、医者が目を剥く回復速度には変わりない。

「で、誰が来たんです」

「……危ない女二人」

アデライトは視線を合わせずに言う。

「どんな方です？」

「火器女と、生粋の元魔術師の魔女」

「火器女……」

この世界に火器があるのに驚いた。

魔術があるのにそんな文化が発展したのか。いや、魔術はこの国だけで異常に特化した文化。つまり他の国に鉄砲があってもおかしくない。

聖良は気になって、巢の壁にある隙間から外を見ようと移動した。

「可愛らしいお嬢さんが遠路遙々こんな奥地に来てくれるなんて、嬉しいですねえ」

聖良は石斧を手にして階段を上ろうとしたが、ハノに羽交い締めにされ、イーザが足下に立って邪魔をする。

「セーラさん、冷静に見えて意外に焼き餅焼きなんだね」

「違います。小さな女の子がいるんです。何かする前に殴っておかないとっ！」

「へ？」

彼はアデイスのロリコンとセクハラ癖を知らないのだ。聖良がどんな目に合わされているか。

「ここに色黒の男の子がいるでしょう」

女の子の声だ。まだ幼さの残る可愛い声。

「いますよ。怪我をしているから保護しています」

「返していただけないかしら」

「まだだめですよ。怪我が治ってお話しがすんだら、山向こうまで送って差し上げます」

アデイスの変わらぬ穏やかな声。

見えぬ壁の向こうに、緊張が漂い始めた。

巢を出て迎え入れたのは、二十代半ばほどの女性と、セーラの外見年齢と同じほどの年頃の少女だ。赤い巻き毛が可愛い美しい美少女で、実にアデイス好みの顔立ちだった。

「可愛いとお嬢さんが遠路遙々こんな奥地に来てくれるなんて、嬉しいですねえ」

声をかけると、彼女は瞬き一つせずはこちらを見た。表情は人形のように動かない。まるで人形師の作った人形のように、一定で動かない。しかしあれらと違い生気がある。生きている。

「小さな女の子がいるんですっ。何かする前に殴っておかないとっ！」

巢の中からセーラの声が聞こえた。

自分はそのままで見境がないと思われているのだろうか。心外だ。傷ついた。こんなに優しくして尽くしているのに、こんなに信用がないなんてなぜだ。

アデイスは一瞬気を散らした事に気付いて、再び魔女達に視線を戻す。

「……あれかしら」

「間違いなく」

少女の言葉に女が頷く。

「本当にうちの子が狙いなんですね。悲しいです」

見た目はとても可愛いのだが、中身はかなりの年寄りなのだろう。表情を失うほどには、きつと年寄りだ。そう思うとやりやすい。

「彼女は私のものです。お引き取り下さい」

「別に取って食おうってわけじゃない。ただ面白そうだから連れていくだけ。セシウス様が飽きたら返すさ」

「悪魔なんぞに若い娘を差し出せるものですか。あれは天地がひっくり返っても私の物です。お帰り願えないのなら、殲滅の悪魔が相手です」

こういう時は通った名を出すのが一番だ。さすがに悪魔の城に住まう彼女たちでも知っているはずだ。知らないのなら勉強不足である。派手な事をしすぎて、グリーディアでも知られているぐらいなのだから。

「殲滅の悪魔……あれが？」

独特の口調のせいか、女は巢を見つめた。あの可愛い声を聞いて悪魔とは失礼極まりない。

「これですよ、この方」

ミラがため息をつきながら剣を抜く。

「セーラ狙う。殺すぞ」

それはユイに対する確認だ。

「殺すのはちよつと……」。

魔女に手をかけると、もっと厄介な本体が来るかも知れないよ「だから狩りに行くと言っている。アデイスも手伝うと、きつとネルフィアも手伝う。足と戦力の確保されている」

ユイが頭を抱えた。彼の苦勞は、ほぼこの女性一人にもたらされ

ているのだろう。彼女がいれば、本来は苦悩するはずの厄介ことですら、可愛らしく見えそうだ。

「せ、せめて話し合いを」

「魔女、悪魔の命令に従う。だから追い返す。でも傷つけると悪魔が来る。なら一番の手を打つまで。」

それともユイ、セーラを差し出した方がいいと？

「そうは言っていないよ。ただ、可能な限りは穏便に話し合いで……」  
「話し合い？ なにそれ」

彼女の言うことは正しい。逆らう以上は、徹底的にやらないといけない相手だ。中途半端は相手を刺激するだけ。刺激したと分らせる前に、皆殺しにする。

アデイスはアーネスとして、そうやって敵対者を殺してきた。

アデイスには出来ない、アデイスのためになることを。

「私もミラさんに賛成です。セーラに害があるなら誰であろうと殺します」

いくら見た目が可愛かろうと、大切なのは身内だ。

「話は決まったな。愚かな悪魔どもを殲滅だ」

ミラが生き生きしている。何だかんだと暴れるのが好きなのだろう。

「乱暴な話しではありませんが」

「アデイスとは合わないと思うから、好きなようにやれ」

「補助しろと言われても困りますから、そうさせてもらいますよ」

抜き身の剣を腕にひっさげ、ミラはかき消えるように見えるほど腰を低くして火器を持つ女の元へと動いた。飛び道具を持つ相手だ。狙いをつけさせないことが重要である。

「なら、私とはお嬢さんに遊んでいただきましょうか。生粋の魔女とやらがどれほどのものか、楽しみですね」

以前のアデイスなら悪魔の加護を受けた魔女が相手となると、魔力の差で敵しいと思っていたが、今は溢れんばかりの魔力がある。これがどれほどのものか、今まで試すような機会がなかった。

悪魔を殺すような女では、試すではなく死闘になってしまっし、  
魔女は自分にとって程よい相手だ。

セーラが女の子を殺すなんてと言わないかが心配だが。

「セーラさん、泣きわめけとか、慌てふためけとか言わないけど、よくお茶なんて飲んでられるね」

ハノの言葉にセーラはため息をつく。彼は出ていこうするアデライトを縛り付けている最中だ。

「だって、人外魔境の戦いなんて私には空の彼方の世界ですから、心穏やかにこうしてお茶を飲むのが一番なんです。私は昔からこうやって嫌なことを忘れて過ごしてきました。大丈夫です。問題ありません。例えば天井がまっ赤になっけていても、昼寝できます」

「あなたが言うと、何かとリアルだね」  
人生色々だ。

色々といえは、ふと思いついた。

お茶を置いて立ち上がり、階段を上って巣から頭だけを出す。

なにやら妖怪大戦争のような光景が広がり、巣の前でその力は弾けてこちらまでこないという、まさにこの世の物とは思えない光景が繰り広げられている。それは主にアデイスと対峙する女の子が起こしている。

女の子はやはり可愛い。まさにお人形のように綺麗で、お人形のように表情がない。このような魔法合戦を繰り広げて、顔を歪めもしないとは。

双方狭い場所なので手を抜いているのか、派手な見た目の割には互いに少し汚れているだけで、血は流れていない。

「アデイス」

呪文を唱えているので返事をしない。

「ここであまり血を流すと、お母さん興奮してまた夜中に火を吹きますよ」

アデイスの動きが鈍る。斬り殺されそうになっているもう一人の魔女を見て、顔色を変えた。なかなか善戦していたようだが、さす

がにミラ相手では運がないとしか言えない。

「ミラさんストップ！」

「なぜ」

「殺るならお外に出ましょう」

「なぜ」

「家庭の事情です」

ネルフィアは、いつも現場で獲物を食べるのだが、時々持ち帰り、大きいために少しずつ食べて血が流れ、その血のせいで夜中に寝ぼけて暴れるのだ。

「落とすか」

ぐったりしている女の人を引きずって崖へと向かうミラ。

「ちよ、まって」

イーザに聖良の隣まで連れてきたもらったアデライトが女性へと手を伸ばして言う。縛り方が足りなかったようだ。

「クセラをどうやったらあんな風に……」

火気を持っている相手も問答無用である。食器棚はネルフィアから守るために巢の側にあるので無事だが、物干し竿と洗濯物が破壊されている。作ってもらったばかりの聖良の服に穴が空いていそうだ。

「殲滅の悪魔はただの噂ではありません。本当に街一つどころか、戦場を通りかかれば双方全滅させ、悪魔をくびり殺し、竜を斬首してきたような方です。悪魔本体が来ても、彼女に対抗できるかどうか怪しいところです」

アデイスが怯え混りの、暴れた後のネルフィアを見ている時の目を向けて言う。彼はああいう強い女性が苦手なようだ。母親ならまだしも、ミラの場合は他人である。

「アデイス、その程度も始末できないのか？」

「いや、なかなか楽しくて。楽しいと、技術だけで張り合ってみたくなるでしょう。魔力は有り余ってますから、技術だけで対抗しない」と

「子供だからといって、遊んでばかりではいけない」

「あはは」

アデイスも妙なこだわりを持つ。技術に自信を持つ彼らしいとも言えるが。

「血が流れるのが問題なら燃やせばいい」

「それはそれで臭いが……」

「凍らせて落とすか」

「凍らせるとかは苦手で……ほら、燃やすのが専門じゃないですか  
なるほど。ではユイが」

アデイスはユイを見つめる。

ユイはぶんぶんと首を横に振る。

「今の合戦を見せられた後、僕に何ができると思う？」

「ユイは自分に自信がない。それはよくない。お前は自分で思っているよりは出来るはずだ」

ミラに諭されて複雑そうな表情を浮かべるユイ。頑張る気が起きないのも理解できる。

「ヘレナ、帰ってセシウス様に諦めてもらおうように言った方が……  
うう」

「傷が開いていますよ。安静にしてください」

アデライトはイーザに支えられ、巢の壁からずり落ちそうになるのをなんとか留まる。

「殲滅の悪魔がいたと言えば、ルシウス様も面倒くさがらずに止めてくれると……」

痛むのが脂汗をかいてせいぜいと肩で息をしている。

「貴方は、どうしていつも怪我をするのかしら」

「今はそんなことはどうでも」

「私はけっこう面白かったけど、クセラさんのお相手は面白いとは言えない方そうですね」

ヘレナは目を伏せて言った。面白そうにしているようには見えなかったが、それが顔に出ない人なのだろう。



「クセラさん、意識は？」

「なんとか……。ざっくり真っ二つ。竜殺しと同じ素材なのにどうやったら……」

「あらお気の毒に」

冷静沈着な女の子だ。モリイ並の美少女で、技術がすごいのなら、アデイスが鼻の下を伸ばしても仕方がない。

クセラの方は真っ二つになった、筒を見て涙している。

「神子、その二人は帰してやってくれ」

アデライトは真っ青な顔をしているのに、わざわざまたはい上がってユイへと顔を向けた。

「帰すと思うか」

融通皆無のミラは、突き落とすのをやめるつもりはないらしい。

「セーラを狙っているという事実に変わりはない。帰せば大挙して押し掛けられる。ヒトとはそういうもの」

ミラの言葉は自分を操るユイへと向けられる。ユイは否定できないため、視線を逸らす。

双方の気持ちは理解できるが、これが自分のために起こっているのだと思うと、ミラを支持すべきと言う気持ちもある。そんなときだった。

「ヘレナあ、いるのぉ？」

突然の第三者の声にセーラは硬直した。

「あ、いた……。ん？」

現れたその人は、首を傾げた。

「なぜフレアがここにっ！？」

アデイスは彼を見て声を上げた。

赤いドレスを身に纏う、鞭を腰に引っさげた派手な美人、半悪魔のフレアがそこにいた。

「え……。なんでにっ……」

フレア驚きのあまり足をもつれさせて転ぶ。

セーラも階段から足を滑らせそうになり、イーザに支えられて巢

の壁になっている布にしがみつく。

「……………どうしてアデイスが……………セーラもっ!？」

アデイスが固まっている。しかしはっと我に返り、ヘレナを指さした。

「この人達がセーラを誘拐しようとするからこんな事に」

こんな言葉ですべてをうやむやにしようとしている。誤魔化すに誤魔化せない。いや、前の時に竜の関係者でなのもう知られてしまった。

竜の知り合いという事で通せば、なんとか……………。

アデイスが竜になるのを見たのは、このアデライトだけである。

「……………」

聖良とアデイスに見つめられ、アデライトは脅えて顔を引っ込める。まるで今すぐ始末されると怯えているようだ。

少ししか考えていないのだが、殺意が表に出ただろう。

「セーラを誘拐? ああ、あの変態が? ヘレナ達が来たからおかしいと思ったらっ!」

「変態って、自分の実の父親のように」

「いやよ! あんなの親でも何でもないわ!

それにセーラをあの変態に合わせるなんてダメよ! 絶対にダメ

! どうしてあなた達があの変態のために動いてるの!? ルシウ

ス様は何ておっしゃってるわけ!？」

向こう側のはずのフレアが、仲間を責めている。

聖良は複雑な心境で様子を見つめた。

「自分の魔女が竜の巣なんて怖いと言うから、百年前の賭けを持ち出されたそうです」

「セコい。ジジイって本当に昔の事ほどよく覚えてるわよね」

「アデライトが怪我をして誘拐する予定の方に介抱されていますし、神子はいるし、何をしに来たのだから」

「割に合わない仕事をさせられてるわね。アデイスだけでも厄介でしように」

「アデイス…… ああ、そんな名の魔術師がいましたね」

アデイスがちらと頭を引っ込めたアデライトの方を見た。彼は今ようやく気付いたようで、青ざめている。その様子が見えていないはずのアデイスの顔に、抹殺の二文字が見えた。

もちろん聖良は止めない。

「とにかく、セーラを連れていくなんてダメよ絶対に。許さないわ」「なぜあなたが？」

ヘレナは必死になって反対する半悪魔を見つめて問う。

「とにかくダメなの！ 分かるでしょ！」

「…… ああ。会わせたくないんですね」

「当たり前でしょ！」

よく分からないが、あの人形師の父親だ。恐ろしい変態に違いない。

「変態つて、世の中に溢れてるんですねえ」

「セーラ、なぜ私を見るんですか」

「いえ、他意はないんですよ。ただ、多いなあつて。ミラさんも、きつとそういう人達ばかり見てきたんじゃないかなあつて」

ミラは首をかしげる。変態の定義を理解していない可能性もある。害ある者は皆殺しだから。

「とにかく、帰つて変態に伝えなさい。くだらないことで他人の魔女を殺す気かつて。ここは何とかしておくから」

「分かりました。アデライトはどうしましょう。まだ怪我をしているのですが」

その言葉を聞いて、アデイスが階段を上つて巢の中に入る。

「おやおや、まあ血が出てるじゃないですか。アデライト君、無理はいけません。帰る前に止血しましょうか」

笑顔が怖い。

アデイスはかなりの早口で聞いたことのない呪文を唱えながらアデライトに迫ると見せかけ、イーザの首を掴んだ。

「何をっ」

「エンデール」

最後の言葉と共にイーザが力を失い、アデイスはそれをぽいと捨ててろくに動けないアデライトの頭を掴む。

「エンデール」

仕事を済ませた彼は、満足した様子で本当に治療をしてからアデライトを抱きかかえて外に出る。

「さあ、これで問題ありません。傷はありますが、安静にしていれば治ります。しばらく記憶が混乱しているかもしれませんが、後遺症なので変なことを口走っても何か言っていると軽く受け流してあげてください」

彼は爽やかに微笑んで言う。笑顔の似合う顔をしているから、かえってアーネスの姿でやるよりも腹の中が黒く見える。

「アデイス、記憶を操作したのなら、いつそ全員やればいいのでは？」

「これは負担がかかるからあまりやりたくないですよねえ」

「チビの方はやれ。頭がよい方の記憶はどうにかした方がいい」

ヘレナはアデイスを睨み上げ、頭部を庇う。その仕草が可愛らしい。そのため、アデイスの顔に自然な笑みが浮かぶ。

「見てもいないのに分かるんですか」

「この手の術は頭部に触れなければ効果は薄くなります」

じりじりと後退している。顔に出ていないだけで危機感はあるようだ。

ミラは剣を鞘に収め、それを見たユイが驚く。

「ミラ、殺すのは諦めたの？ 珍しいね」

ユイが話題を変えるように言った。記憶を弄るという事は、殺さないという事だから。

「腑抜け魔女ばかりだというのが本当なら、これ以上は無い。私は必要のない労力を使って、悪魔の巣を殲滅したいとは思わない」

「そうなんだ……」

「悪魔を殺すと、別の悪魔に興味を持たれる。もう来ないように洗

脳すればいい。ウルに一匹借りてくるか？」

「や、それはやめた方が。今度はアデイスが危ないから」  
「そうか」

ミラでも殺せばいいという以外の考えがあるのだ。彼女を今まで誤解していたようである。

「……やっぱり殺すか？」

「いやいやいや、とりあえずもう少し様子を見ようよ。ここまで半悪魔が来たということは、悪魔も状態を察知しているということだよ。様子を見た方がいいよ。」

上にはしばらくこの様子を見ているって伝えてもらうから。

悪魔関係って言ったら許可降りないはずないし」

ミラはしばし考え、笑う。笑った。

「……セーラと一緒にいられるのがそんなに嬉しいんだ」

「うん」

ミラは即答した。

「ウルと一緒にいると神経がすり減るけど、セーラはそれが無い」

ミラにも他に友人がいたようだ。あのミラが神経がすり減ると言うぐらいだから、ろくでもないタイプなのだろうが、彼女の場合は悪友だろうがないよりはいい方がいかに決まっている。

「じゃあ、お前達帰っていいぞ」

急に機嫌良くなったミラは魔女達にしつと手を振る。クセラは傷ついた身体でアデライトを受け取り、

「イーザは？」

「ああ、中ですね」

ハノが抱えて外に連れ出してくれた。

せつかく仲良くなったのに、もう帰ってしまうと知って、聖良は喪失感を覚えた。

「ああ、セーラ、落ち込まないでください。今度、もっと可愛い犬を飼いましょう。小さくて、セーラに似合う可愛い犬を」

「私、大型犬がいいんです。乗れそうなの」

もついるようなものじゃないかと、ハノが小さく言ったが無視をした。

アデイスは可愛いが、ペット扱いしたら怒るに決まっている。

ヘレナはイーザの尻尾を掴んでズルズルと片手で引きずり、挨拶も無しに消えた。一人残ったフレアは、魔女達に手を振って見送る。なぜか彼はこちらで見送っているのだ。

気がすむと、フレアは聖良に向き直る。

「ところで、セーラはやっぱり竜と繋がりがあったのね。モリイチやんだつたかしら。あの子は？」

「お出かけしてます」

「そう。でもモリイチちゃんはアーネスと一緒にいたのよ。どうしてアデイス、あなたがここにいるの？」

「人には色々あるんです」

詮索は無用である。

もう隠すのも空しくなりそうになるが、まだ同一人物だとはまったく気付いていない。

「……まあ、話してくれるとは思っていないけど。」

もう一つ気になるんだけど、どうして洞窟の中にこんな布で出来た大きな鳥の巣みたいなのが

「この高さがあれば、子供の竜は外に出られないからです。自分の大きさを自分で操れない子供は、大きくて重量があるからこういうふうに育てるんだそうです」

「へえ」

「納得したところで、早く帰ってください。もうすぐ家主が帰ってきますよ。」

ミラさんは元々お友達だったけど、フレアさんは半悪魔だから嫌われて食べられてしまうかもしれません」

「ぶっ」

フレアは子供のように頬を膨らませる。

「あ、帰ってきてますよ。ミラさんがいるから獲物を生きたまま持

ち帰ってますね」

振り返り、牛をつり下げた竜を見てさすがにフレアも慌てた様子  
で出ていく。

「セーラ、こちら辺に住んでるんなら、今度遊びに来るわね」

「来なくていいですよ」

アデイスが手を振って言うと、フレアは崖から飛び降りた。

豪快な帰り方である。

ネルファイアが帰ってくると、首を切られて血抜きされた状態の牛  
を差し出した。

聖良が牛だと判断できる程度に首が半分取れかけているのは、う  
ちの中で血を流すのはやめて欲しいとお願いしたため、ちゃんと飛  
んでいる最中に血を抜いてきてくれた。

周りはさぞ迷惑だっただろう。

「今夜は焼き肉ですねえ」

聖良はさすがに牛の解体など無理なので、やってくれるというハ  
ノに任せた。

大きな生き物を相手にミラはたまらず、ばっさばっさと豪快に切  
るので、食べるには向かないらしい。その点、実家が牧場だったと  
いうハノとユイは慣れている。

奥の川で切り分けた肉を、ユイがさらに部位ごとに小さく切る。

聖良とアデイスはそれぞれタレを作り、互いに味見をした。聖良は  
柑橘系のさっぱりとしたタレを作ったが、アデイスが作った物はも  
っと色々な香辛料が混じっている。どちらも美味しそうだ。

それが終わると作ってあったブイヨンのスープに具を入れて暖め、  
肉の筋を取るのを手伝った。アデイスは外で鉄板代わりの石を焼い

ている。

準備が終わると、いよいよ肉を焼く。肉の焼ける香ばしい匂いが食欲をそそる。

アデイスが洞窟の外に向けて風を作っているので、中が臭くなることもない。

肉がほどよく焼けると、タレにつけて口に含む。硬めの肉だが、日本人の好みからしたら硬いだけで、皆文句を言わずに食べている。聖良はもう少し薄く切ったのが好きだが、噛みしめて味わって食べるというのも悪くはない。

「あ、そうだ。アデイス、お家作らないと」

「おうち？」

アデイスが肉を焼く手を止めて顔を上げた。

「ここに住んでるって思われるわけにもいかないじゃないですか、フレアさんに」

「ああ、それもそうですね」

「だから、別の場所に簡単な家を造りませんか？」

アデイスはぼうっと考え込む。その間に焼けた肉をミラに取られる。アデイスは中までしつかり焼いた肉が好きなので、こういう人がいる場合はつきつきりで肉を守らないとなかなかありつけなくなるのに、あまり熱心ではない。

「いいですねえ。なんだか、二人の愛の巣みたいで」

「巣ならあるでしょう。家が欲しいんですよ」

「もう、照れちゃって。いいですね、家。近所の方達にも手伝ってもらいましょか。結界陣を敷けば地上に作っても野生動物に襲われることもないですし、冬の間は壁のないここよりも温かいかも知れませんね。素材は何にしましょかね」

アデイスは計画を立てていく。

フレアのような、ここには来て欲しくない人を通すためだけの場所のつもりだったのだが、アデイスの中では住むことになりつつあるようだ。



「家を造るのかい。なら、うちからデテルとルルトでも連れてこようかね」

残りの肉を大きなままで食べていたネルフィアが首を突っ込んでくる。

「いやいやいや、そんな悪いですよ。あんなところからわざわざ」「悪い？ どうしてだい？」

やってもらうのが当たり前らしいネルフィアの態度に、息子は深く深く息を吐く。言うだけ無駄だ。

「それがいい」

ミラが肉を焼く手は止めずに言う。

「ギセル族なら住みよい家の作り方を心得ている。素人が集まってやるよりは、指示できる者、いた方がいい」

ミラはその間にもステーキサイズの肉を焼きながらナイフで切り分けて半分聖良の皿に入れて、半分自分の皿に入れる。聖良は何もせずに皿に肉が溜まってしまった。

肉はもういいので、野菜を焼くことにした。

「ミラの言うとおりでだよ。あの二人は外に行くのが好きだから、たまにこっちに来れば喜ぶよ」

「そういえば、時々人間の街まで行くって言ってましたね」

人の良い夫婦は、他のギセル族に比べて活発なようだった。この巢に通すのはやはりどうかと思うので、客室的な家は欲しいところだ。

「では、何かお礼がいきますね。ギセル族は何を喜ぶんでしょうか」  
アデイスは真面目に考えながら、聖良の焼いた野菜をさっと奪っていく。仕方がないのでもう一度焼く。

「お礼なんていらさないよ。まあ、大きな街に連れて行ってやれば喜ぶかも知れないけどね」

「うーん。でしたらお願いできたら有り難いですね。さすがに大工も呼べませんし、作るなら見栄えもいい方がいいに決まっています」  
アデイスは家の構想に夢中だ。

アデイスに取られる前にと、焼いた芋に塩を振りかける。しかしバターが存在を思い出し、浮かれながら保冷庫に走った。乳製品は便利である。少し皿にとって帰ると、芋が無くなっていた。アデイスが食べている。

「なんで私の芋を……」

「え？」

「私、野菜好きなのに」

「あ、いや、トイレにでも行ったのかなあって。焦げるかなあって。聖良はふくれて自分の皿のさめた肉をアデイスの皿に移す。」

「アデイスは竜らしく肉でも食べてればいいんです！ お肉食べないと大きくなれないって、ラゼスさんにも言われてるじゃないですかっ！ 何より私のお野菜取らないでくださいっ！」

「ご、ごめんなさい」

アデイスは反省して、まだ少し赤いところのある肉を火が通るまで焼いてから食べた。

生肉が好きではないのは知っているが、焼けば食べられるのだから子供の内はちゃんと食べないといけないと、ネルフィアにも言われている。

竜は大きさを変えられるが、大きくなる限界は自分の素の状態の大きさが関係しているらしい。あまり食べないと小さいままになってしまふと言われている。それでは体力のない子になって、良くないのだそうだ。

こうして怒らないとしつかり食べないこの駄目な中身大人の竜は、ミラに目をつけられてどんどん食べさせられた。

彼もミラには逆らえないらしく、肉ばかり食べ始める。さすがに少しだけ可哀相になり、仕方がないので、焼けた野菜の半分は、アデイスの皿に乗せてやった。

食物繊維を取るのも大切なのは、雑食である以上きつと竜も人も変わらない。

## 8話 グリーディアの魔物 1

家を建てるというのは、案外大変なようで簡単だった。

エルフ達にも力を借りて、湖にほど近い場所の土地を魔術でならし、木材は魔術で器用に加工してしまった。

デルルの指示により、立派なログハウスがさくさくと出来ていく様を見ると、家って簡単にできるのだななどと勘違いしてしまいうだった。

簡単ではなかったのだったが、聖良がしたことと言えば皆に食事を作ったり食料を集めたりと、まさに雑用ばかりだったので、どれほどの苦労があったのか、実はよく知らなかった。

苦労の甲斐あって、冬になる前には寒さを凌ぐに十分なほどには出来上がった。そろそろ外を出歩くにはコートを羽織る時期である。暖炉はまだ完成していないが、本当に寒くなる前にはどうにか出来る上がるだろう。

作業は力も知識もない聖良では役に立たないので、やはり今日もこれから働く面々に朝食を作ることが朝一の仕事だった。

「美味しいわあ。どうしてこんなに美味しいのかしらあ？ 人間ですごくいわねえ」

食事を一緒に食べている、アルテ達の母、変わり者エルフのアルティーサが言う。

彼女には聖良と一緒に食べられる物や薬草の採取をしてもらっている。

とても価値ある薬草を採る事もあるが、その手はとにかく遅い。何か薬草を一つ見つけると、ぱーっと観察を始める。似たような別の植物ではないかと、よくよく、よくよく確かめているらしい。慎重なのはいいのだが、行きすぎるそれを見つめている側は、苛立ちが募るので聖良はなるべく見ないようにしていた。見なければ平気

だ。

あまりにもスローテンポに、そこまで観察しなくても大丈夫だと説得してしまいたくなっただけなのだ。急ぎでもないのだから、他人のペースにとやかく言う筋合いはないので、見ないようにして耐えている。

「別に普通ですよ。あり合わせですし」

海の幸など食べさせたら、彼女はどんな反応をするのだろうか。エルフは森に住むらしいので、きつと食べたことなどないだろう。今は海に行く予定はないのでまた今度の話しだが。

「買い物に行った後に、もっと美味しい物を作りますよ。そろそろ小麦がなくなりますし」

小麦は主食にしてみると減りが早い。最近は何人にも振る舞っているから、たくさんあると思っていたのにもう底をつきそうだ。

「じゃあ、今日は買い物にでも行きますか」

食事の手を止めてアデイスが言う。

「デテルさん達どうします？ 食料の買い出しだと、ろくに案内も出来ませんけど」

彼らが来た当初、いつも行く街とは別のところだが、観光案内を兼ねて二人の私物を買った。しかし今日は食料の買い出しだ。あの部下二人が揃えてくれていただろうが、それを受け取りに行くのも本当ならアーネスの姿の方がいいのだ。だからこそ、観光も別の都市にしたのだ。

「私達はまだ家の方が仕上がっていないから、どうぞ買い物に行ってくださいな」

「ええ、ええ。私達のことには気になさらずに。気持ちだけで十分です」

聖良はアデイスと顔を見合わせた。これならいつものように買い物が出る。そう思った瞬間、今まで黙って朝食を食べていたミラが口を開いた。

「私も行く」

「え？ 買い物にですか？」

「武器を見たい」

実にミラらしい発想だった。ちらとユイを見るが、嫌そうな顔をしながら止めない。

「……………止めないんですか？」

「止めたいのは山々だけど、止めると後々怖いからね。ミラはストレスを溜めると無意識に刃物を触るようになるんだ。無意識だと、僕らは切られる。ストレスはなるべく与えないようにしないと」

それは止められない。買い物でぐらいストレスを発散させてやらないと、落ち着いて眠ることも出来ない。刃物一つで身が安全になるのなら、買わないではいられない。

どうせ元々武器依存症なんだから、一つ二つ増えた所で一緒だ。

「あまり、あなた方のような目立つ人と一緒に街を歩きたくないんですけど」

「別行動でいいよ。セーラを武器屋巡りに付き合わせるわけにもいかないし」

「そうしていただけると。セーラを変なところに連れ込みたくないの。なにせこの容姿とこの話し方ですからね。絡まれたり、からかわれたり、脅えられたりしますよ」

慣れない場所に行くとなんな感じた。武器屋などは聖良も近づきたくないので、何にしても有り難い。

「それはいいですけど、二人までにしてくださいね。いくら何でも三人も乗せられませんよ。荷物を持つんですから」

「ではハノと」

「いやいや、ユイさんと行ってください」

命令できるのはユイだけだが、ミラはハノと行きたいらしい。もちろんユイが鬱陶しいから、ハノの方が穏やかだからという理由だ。

ユイは聖良の目から見ても過保護だ。

「ミラさん、ハノさんよりもユイ君の方が小柄で軽いですから」

「そうか。そうだな。ハノは大きくて邪魔だな」

納得してくれたのはいいのだが、ユイとハノを傷つけたような気がした。しかしミラの説得のためなら、二人も多少のことは我慢してくれる。ユイとハノに身長差があるのは、誰が見ても一目瞭然なのだ。

「あ、普通の服を着てくださいね。あまり目立ちたくないんですよ。神殿色のない普通の服を」

「……うん、そうするよ」

彼は笑顔で言うと、着替えのために隣の部屋に入った。入ったと言っても、ドアはついていないのだが。

本当に形だけが出来上がった状態である。

聖良が手を出せる内装に入るのは、もう少し先だろう。

「ああ、寒かった」

アデイスの背から降りたユイが分厚いコートに身を包んでいるのに震えている。

確かに空を飛ぶと寒いが、彼は最近によくアデイスの背に乗っているのに、この反応は初めてだ。

「いつも薄着なのに、そんなに寒かったんですか？」

「いつもの僕のコートが特別仕様なんだよ。防刃、防火、防寒、防熱。薄手なのに何でも防いでくれる。」

神子だからとにかくお金をかけて守られてるんだ。ミラに切られて骨折ですんだぐらいだし、きつともものすごく高いんだと思う」

それは高いに違いない。ミラが本気なら、竜でも切るのだ。

「神子、神殿の財産。優遇される」

貴重な才能があれば優遇される。当然のことである。それだけのものを背負うのだからと、納得しようとしたらユイが続けた。

「そつだよ。神子なんて、神殿のマスコットであり営業であり現場作業員なんだ。」

死なない程度に酷使するのが神殿のやり方だよ。我慢するか敵対するかどちらかしかないからって足下を見るんだ」

ユイも神殿に不満があるらしい。

ブツブツ言う彼を横目に、聖良はしゃがみ込んだアデイスの頭をマントで包むようにして呪文を唱えた。人の姿になつて着替えると近くにある小屋へと向かう。

以前の経験から色々と反省して、老夫婦を街から外れた場所に住まわせて馬車を預けている。これに乗って1時間ほどで街に着く。

アーネスが手配させたのだが、二人ともアデイスもアーネスも区別がつかないので助かっている。

「この小屋……結界？」

「老夫婦がこんな場所に住んでいたら、万が一と言うこともありません。相応の結界は必要ですよ。私かセーラがいれば入れますから安心してください。いないと入れませんが」

「アデイス、器用」

「私は得手不得手なく何でも器用にこなすタイプですから」

昔は悩んだが、それが今の強みであるらしい。

夫婦が留守だったので自分たちで馬を小屋から出して、馬車につないで出発する。

街にたどり着くと、集合時刻を決めてからミラ達と別れて、とりあえず城に向かった。

城に到着すると相変わらずエイダに説教されて、クレアにラゼス達の姿を探されて、子供達に囲まれた。エリオットは相変わらず顔を合わせず、しかしアデイスによく懐いている。

いつもと変わらないやりとりの間、聖良は厨房に行き料理長と話した。この国の食材について、聖良はまだまだ知らなければならぬ事ばかりだ。

そのついでに、彼にも聖良の知っている技術を教えた。

前回教えた、ホイップクリームを試してみたらしく、さらなる使い方を尋ねられた。

彼が作ったホイップクリームは、少し混ぜ方が足りない状態だったので、それについてのアドバイスをして、実演としてデザートに用意されていた焼菓子を、生クリームで飾って見せた。

料理交流を終えると、再び足の速い食材を譲ってもらい、馬車まで運んでもらった。その間も、色々と料理話に花を咲かせ、各国の料理基本的な本をプレゼントされた。

アデイスに生クリームなどの食材の保冷をしてもらった後、城を出る。

これから生活雑貨を買う予定だ。

食器や大きな温かそうな布など、他にも便利そうな物があつたら買えばいい

「セーラが好きな可愛い雑貨を買うのは、もうしばらく先ですね」「分かってます。生活の方が大切ですもん」

小物があつても、それを飾る棚が無ければ意味がない。たくさん服よりも、それを入れるクローゼットがなければ意味がない。

まずは敷き布を買おうと、少し裏に入った所にある問屋の前に馬車を止めた。盗まれないか不安だが、この国で馬車泥棒は少ないらしい。対策を取っている馬車に当たると悲惨な目に会うからだ。そしてその対策というのは、外観からでは分からない。みすばらしい馬車にも施されていたりするので、博打を打つよりも割に合わない最悪の場合、死ぬからだ。

聖良は手触りが良くて足が冷えないような物が無いかと見回した。その隣で、アデイスが突然「げっ」と声を出した。

「あらあ、セーラじゃない！」

聞き覚えのある声に、聖良の顔面の筋肉が引きつる。

なぜ自分に懐くんだとは思わないでもない。

おそらく話し方が原因だろうとは分かっているが、思わずにはいられない、あの人だ。



「フレアさん……どうしたんですか、こんな所に」

「それはごつちの台詞よお。セーラはカーペットを買いに来たの？」

「はい。温かそうなのを」

「モリイは元気？」

「元気ですよ」

「来ているの？」

「来てませんよ」

ちらとアデイスを見るが、他人の振りをするように布に夢中だ。

「セーラ、色は何色がいいでしょうね」

「落ち着いた色がいいんじゃないですか？ 温かくて変な色でなければいいですよ。どうせすぐに汚れますし」

「そうですね」

「あの洞窟に敷くの？」

「あ、いえ」

会話に入ってきたフレアに、アデイスが嫌そうな顔をしながら彼

を見る。

「家族の会話に他人が入ってこないでください」

「つめたーい。争いを避けてあげたのに」

「……結局、彼等は諦めたんですか？」

「とりあえず諦めたわよ。この国にいる以上は手を出しにくいもの」

店の中に入るとフレアもついてくる。

それを出来るだけ気にしないようにカーペットを選ぶ。リビング

と寝室だ。何枚か欲しい所だが、ミラが武器を买买つもりらしいの

で諦める。

「そつういえば、二人ともどうやって知り合つたの？ アーネスもや

つぱり街にあんまりいないみたいだし」

痛い。そこが痛いのだ。

「どうやってもこうやってありませんよ。アーネスが原因でこん

な事になつてるんですから」

他人ではなくもう一人の自分に責任をなすりつけるといふ人も珍

しい。しかし他人ではないから、いくらでも可能だ。口裏を合わせ

る必要がないのだから、口にしたそれは真実になる。

アデイスがどうするつもりか分からないので、聖良は大人しく御者台に座る。アデイスの横の方が安心する。

「アーネスが原因って？」

荷台に乗り込んだフレアが追求してくる。アデイスは諦めたのか、肩を落とした。

「私も立場がありますから、あまりあの男との繋がりなど持ちたくないんですよ」

「そりやそうでしょうけど……で、どうして繋がったの？」

「生まれたてでしたから、色々あつたんですよ」

「アーネスが何か狙ってたって噂があつたけど、やっぱり竜だったのね？」

「そうなります」

「セーラは？」

「餌ですよ。色々あつたんですよ。とても公には出来ない色々がね。他人には言わないでくださいよ。これ以上狙われるようになったら、セーラが可哀相です」

色々な関係を目撃されまくったため、聖良のことだけは言ってしまった方がややこしくなくていいと判断したようだ。問題は、アデイスが竜になっっている事なのだ。

「アデイスはどうして巻き込まれたの？ 一人だけ腑に落ちないんだけど」

「アデイスはただの不幸な巻き込まれですよ」

「あー、なんかそれっぽい」

彼の不運っぷりは有名らしい。

宮廷では華やかな雰囲気なのに、有名になるほどの不運っぷりを日頃から見せつけるアデイスを想像する。

「アーネスもけっこうついてないとこのある人だから、似たもの同士なんじゃない？」

「冗談でしょう。胸くそ悪いからやめてください」

自分の事なのに、胸くそ悪くなるような人物だと思っているようだ。少女趣味の男を嫌うというポーズは、子供に好かれるアデイスにとってはかなり重要なのだ。

「嫌ってるのね。まあ、分からなくもないけど」

聖良は実は本人だと暴露したくなる。もちろんしないが、いつもしたくなる。

しかし、遊びに来たとして、その度にアーネスはと聞かれたらどうするのだろうか。

最悪の場合は部下二人のどちらかがアーネスに化ければなんとか誤魔化せるかもしれない。化けられるという前提がなければ、同一人物にはならない。だからきつと大丈夫。

だんだんと崩れていつている気がしないでもないが、フレアー人なので……………なんとかしないと。

「ああ、もうあの男のことは話したくありません。せつかく二人きりのデートしていたのに、どうして貴方が嗅ぎつけてくるんですかねえ」

「いつも一緒なんじゃないの？」

「最近、まわりに色々いるんですよ。二人きりの時なんて滅多にならないうつに。もうほつといてください」

拗ねている。付きまとわれたくないのに、向こうが興味を持ってくるのが不愉快なのだろう。

「……………ああ、もう一組の問題が戻ってきましたよ」

アデイスの視線を追うと、静かに立つミラと普通の格好のユイがいた。集合場所でも時間でもないのに、わざわざ探しに来たようだ。アデイスは二人の姿を見て、顔を輝かせた。

「買い物は終わったんですか？」

「終わった。いいものが買えた。この国入りにくいけど、好き」

ミラは幌付きの荷台に乗り、先客に気付いた。

「……………この前のオカマ」

「ちょ、ミラさん!」

ミラが抜刀して構えるので、聖良は驚いて身を乗り出した。

「ミラさん、そういう時は分かっているても女の人扱いしないっ！」

「そうなのか？」

「そうです。あと、町中で刃物扱いちゃダメですよ。フレアさんに攻撃する意志はないですし」

ミラは大人しく剣を鞘に収めた。

「相変わらず見事なミラ使いっぷりだねえ」

ユイも馬車に乗り大きく伸びをする。疲れた顔から、やはり振り回されていたようである。ユイはミラに関わろうと努力しすぎているから疲れるのだ。

彼女のようなタイプはほとほどの距離を置くのが一番である。

「買った物は終わった？」

「あとは日用品をと思って。食器とか、最近はお客さんも多いですから。あ、ハサミも欲しいですね。ミラさんの髪も切りそろえなくちゃ」

前よりは幾分かよくなっているが、毛先が痛んでいる。自分の前髪ぐらいは自分で切りたいし、さすがに裁ちバサミで髪を切りたくない。

「そういえば、あなた女の子なのになんて女らしくないの。若いのが救いだけど、年を取ったら悲惨よ」

フレアがミラの髪に顔を寄せ、目を細めて全身を見た。

「男に言われたくない」

フレアの言葉に、ミラは少し怒った。フレアの言葉で怒るという事は、少しは女らしさを気にしているのかもしれない。

「男よりも身汚い人に言われたくないわ。セーラみたいな清潔な子と並んでると浮くわよ」

無知とは恐ろしい。知らないとは恐ろしい。

ミラが不機嫌そうにしている。

「髪を巻けとは言わないけど、せめてまとめなさいよ」

「まとめると帰りが寒い」

「着飾るとか」

「動くのに邪魔」

「着飾ってたって動けるわ。それに邪魔になったらその時に取ればいいのよ」

フレアはおそらくオシヤレな女の子が好きなのだ。人形を飾っていたし、聖良も飾っていた。

「ハサミは必要ね。服も男みたいじゃない。どうせ男装するならもつと徹底しないと。中途半端は嫌いよ」

ミラが怯んでいる。自分の理解がない分野で強く出られると言いつ負かされるタイプなのかも知れない。

この雰囲気の彼女に誰もそれをしないだけで。

「アデイスも、買ってあげればいいじゃない」

「そっちの保護者に言ってくださいよ。私は喜びもしない相手に何でも買ってやるほど心の広い人間じゃありません。セーラは可愛いから買うんです」

ミラに買っても感謝があまり見えないのは確かで、アデイスは分かりやすい方が好きだから、つまらなそうにする相手には買いたくないのだ。

大袈裟な喜び方はしないで、それが伝わってくるような、可愛らしさが彼の財布の紐を緩くする。

「そうだ。せっかくだから色々店を回りましょう。男物にしても、もつとセンスのいい物を着なくちゃ」

確かにそれは聖良も思う。ミラはせっかく美人なのだ。しかし、今日はショッピングのために来たのではない。

「アデイス、大丈夫？」

「三時ぐらいまでなら。日が暮れる前に帰らないと、最悪の場合は心配して見に来ますからね。都はパニックですよ」

想像するだけで恐ろしい。時間だけは厳守しなければ。

## 8話 グリーディアの魔物 2

街に一番詳しいアデイスは、仕方がないのでいつものブティックに連れてきた。幸いミラは平均的な体格をしていて、既製品が着られる。

かなり大きな財布があるので、店員達もカモにする。髪も簡単に鉄を入れて整えてもらい、カジュアルで動きやすい服を見繕ってくれた。

ミラノ財布であるユイは、店ごと買われてもいいという顔だ。神子は有能な魔物狩りなので、金は腐るほど手に入る。

「ミラ、こういうのは？」

ユイは気に入ったらしい、色気のある女性に似合いそうなワンピースを差し出し、ミラの顔に不機嫌の色が浮かぶ。すぐに諦めて、今度はセーラに似合いそうな可愛らしい上着を見せて同じことを繰り返す。

どうやら二人の趣味に大きな差があるようだ。その差が埋まらず、こうやって今の関係が出来てきたのだろう。

「ユイ、こういう時、男は意見を求められるまでは黙っているものですよ。そして黙って財布を出す。それがいい男ってもんです」

アデイスは見かねて口を出した。

「それって、財布だけの存在になれってこと？」

「もちろん、試着後には感想を述べるべきです。女性との買い物とは、そんなものですよ」

だから子供との買い物の方がまだ楽しい。可愛いし、無邪気だし。セーラは何を着ても可愛いので楽しいが、大人の女との買い物は口にはしないが嫌いだ。

不満など言ったら自分が不幸になる。ただでさえ不運体質なのに、自分から墓穴を掘るような真似はしない。

「セーラ、このリボン可愛いわ。きつとセーラに似合うわ」

「フレアさん、今日はミラさんの……」

「つけましょつけましょ、ああ、可愛いわ。買いね。私が出してあげる」

「……………ありがとうございます」

セーラがフレアに押し負けた。そんなセーラも可愛い。

人形遊びの感覚で選ぶだけあり、フレアが似合うと言ったりリボンも可愛いらしい。数種類のレースが使われていて、彼女の黒髪によく似合う。

そんな可愛いセーラを見られるだけでアデイスは幸せだった。

ミラの方も女の子らしい服に着替えたなら、前よりも若返り、年相応に見えた。数年前に出会えていたらと惜しく思う。もちろん手を出そうなどという無謀な考えは無い。

「ミラさん、格好良い」

足が長いので、足のラインが出るパンツがよく似合う。

「やはりどんな女性でも、可愛くしていた方がいいですね」

「ミラが女物を……」

「いや、泣かないでください、恥ずかしい。別にドレスを着たわけじゃないんですから」

セーラのように可愛い服を着たら、アデイスも少くない感動を覚えるだろうが、彼女はボーイッシュな雰囲気服しか身につけていない。

「次はスカートはいてみましょうよ。これなんか動きやすいですよ。下にユイ君みたいに短いズボンはいてればいつもみたいに動いても大丈夫ですし」

ミラはこくと頷いた。動きやすければいいらしい。

ユイの事はもう完全に無視して、アデイスは店長と話しをする。

最近街で何か変わった事はないか調べる時は、城下で聞いた方がいい。こういう店は、それなりにうわさ話が舞い込む。飲み屋はゲスな話題だが、この店は上流階級の噂も入ってくる。

女性というのは、とにかくおしゃべりが好きなので、情報はデマが誇張されて話されている事も多いが、それを見極めるのが聞き手に必要な技能だ。

その中で、気になる話を一つ仕入れた。

この都の近くで魔物が出たらしい。この国は魔物自体が少ないのに、人里付近というのは珍しい。

この国に神子が進出できない理由は、悪魔がいない事、魔物が出てても人間の魔術で仕留めてしまう事が原因だ。

神子いらすの国。

そのため、神殿を作ってもお布施は少ない。だから神子は国の体制が崩れるきっかけになる、悪魔でも出ない限りはこの国に手を出さない。

「その魔物は仕留められたんですか？」

「軍が探してるんですが、先日も街から出た商人の親子が……」

老夫婦がいなかったのが気になった。食料は定期的に届けられているし、薪も十分なほど用意してあった。しかし、どうして離れていたのか。

しかし、今更焦っても仕方がない。帰り際に探す事にした。

最悪の場合、アデイスは先に戻ってネルフィアを説得して、三人に探してもらうことになる。

便利な夫婦だったから、死んでいてもらっては困る。あと五年はこれで問題ないと思っていただけに、困るのだ。

この国に住み着くような、知性もないケダモノ如きに計画を壊されるなど、実に腹立たしい。

ミラの身なりがかなり良くなったところで荷物が増えてしまい、



食器は今度にして帰ることにした。フレアも一緒に行きたがったが、来てどうするとアデイスに冷たくあしらわれ、泣く泣くといった雰囲気です。手を振ってお別れした。

都を出てからアデイスが急ぐと言いだした。

最近では魔物が出るらしく、姿が見えなかったあの老夫婦がアデイスは心配らしい。だったらもっと早く帰れとも思ったが、あの時点でさらわれていたのだとしたら手遅れで、急いで帰っても早すぎればまだ帰っていない可能性もある。

馬車を飛ばして小屋にたどり着くと、やはり人の気配はなかった。家の中は生活感があり、長く開けていた雰囲気はない。来た時に馬達の様子も普通だったし、今朝まではいたのだと思われる。

ユイが馬を小屋に戻してくれている間に、アデイスは空を飛んで周囲を見回り、聖良は小屋の周辺で、夫婦で仲良くうたた寝でもしていないかを確認し、見つけられなかったので外に置いてあるベンチでアデイスを待つことにした。

一回しか会ったことのない人達だが、その時はめんこいねえと言ってお菓子をくれた。いいおじいちゃんとおばあちゃんだった。

アデイスが戻ってくると、彼は首を横に振った。

いつものように人型に化けると、木の影で着替えをして出て来る。「どうしましょう」

「二人は見つけられませんでしたが、怪しい屋敷がありましたよ。

隠されていますが、さすがに屋敷一つともなれば私の目は誤魔化せません。並のレベルでは誤魔化されます。

魔物よりもあそこの方が怪しいかも知れませんね」

「そうなんですか？」

「魔物にさらわれたにしては血の跡もない。あの夫婦はこの小屋からそれほど離れないように言っていますから、血が出たのなら私の鼻で多少はかぎ取れるですよ。しかしなんの違和感もない。あるのは花の香りだけ」

確かに、寝室にポプリが飾ってあった。アデイスは声をかけてか

らすぐに飛び立ったので、そこまでは行っていない。竜の姿だと、やはり鼻はきくようだ。

「その屋敷に行く?」

「ええ。私が降り立つと目立つから、馬で行きましょう。働き通しで悪いですが」

アデイスは馬小屋に戻した、水を飲んでまったりとしている馬をなだめすかして背にまたがる。

「僕も行くよ。ミラ、セーラとここに」

「わかった。アデイス、ユイを頼む」

「ミラ……あのね」

ユイは何か言いたそうだったが、アデイスが行くのでついていく。あの人はミラに比べれば弱いのは確実だが、世間に比べるとどうなのだろうか。彼が実力を発揮するのはミラを止める時以外に見たことがないので、素人とか以前に何も分からない。

「ミラさん、ユイ君って普通レベルから見て実力はどうなんですか?」

「ユイ、神子なのに魔術使える。とても珍しい。魔術師としては悪魔が欲しがる程度には実力がある。しかし私から見たら子供だまし。彼女から見たら、ほとんどの達人が子供だましなのではないだろうか。」

「ミラさんは突き抜けているから……」

「ユイ、神殿の神子の中では一番。でしゃばらないから皆気付いていないが」

ミラがユイを褒めるなど珍しい。本人がいないからだろうか。「認めてるんですね」

「神殿に属さないすごい神子がいる。それが自分ほどではないが、自分の次だと言っていた。神子としての実力は私には分からないが、神子の頂点から見ても認められるものらしい」

ミラが褒めているということは、その頂点に立つ神子はどこまでもすごい人物なのだろう。

「その人は、どうしてユ君の知り合いなんですか？」

神子はすべて神殿に属していると言っていた。属さなければ、死  
と。

「私の知り合い」

「ミラさんの？ お友達ですか？」

「違う。知り合い。私を育てた男とは友人だったが私は違う」

「男の人なんですか」

「分からない」

「え……………」

「皆知らないらしい。知らなくても問題ない。距離を置きすぎても、  
近づきすぎても危ない。だから知り合い」

赤の他人ならその他大勢として殺しそうなミラを見てみると、距  
離を置きすぎるのも危険というのは理解できる。それが悲しい。

「ユイ、会うといつも脅えている。怯えさえしなければ、もっとマ  
シになるのに」

ミラに駄目な男だと思われているなど、彼は知らないのだろう。

後でこっそり教えてやろう。知らなければ何に不満を持たれている  
のか分からないから。不満を言わないで不満を持たれるのが一番対  
応が難しい。

ベンチに座って、そんな取り留めもない話しを続けた。少し日が  
落ちて、もしも上空をネルフィアが飛ぶようなことがあったら止め  
るための相談を始めた時だ。

ミラが立ち上がり、剣に手をかける。

「人の気配。セーラ下がれ」

言われるがままにミラの後方に隠れ、様子を見る。

「誰だ」

問われ木々の間から姿を見せたのは、異様な姿 仮面をつけた  
魔術師だった。

目をつぶって回れ右して昼寝をしたい気分である。しかしそれを  
しては前に進まない。

「人形師さん、なんでここに……」

腕に鳥肌が立っている気がするのだが、長袖なので確認は出来ない。また服が汚れたり破れたりしそうで恐ろしいが、今日はミラという盾兼矛がある。一人相手なら彼女は最強だ。問題は人形であるのだが、彼は結界の外、聖良は結界の中。破られそうになったら騒がしくなるのでアデイスには分かるらしい。

彼とはそれほど離れていないだろうから、習った呪文を唱えて補強もできる。完璧だ。

「近くを散歩していたら、女の子の声が聞こえた。セーラ、今日も愛らしい。その女性も美しい」

人形師はミラにまで目をつけた。

なんて無差別で無謀な男だろう。

確かに今日のミラはボーイッシュで綺麗だが、聖良が子供扱いとこのも腹が立った。

「この人、殲滅の悪魔です。手を出そうとしたら即殺です。あと、私達同年なんですけど」

「セーラは竜の血を飲んでいたな」

「肉体年齢が同じなんですけど」

彼は二人を見比べる。

凸凹だろう。

聖良から見ればミラはモデルのような体型の美人だ。長身で細くてうらやましい。

「セーラは小さい。小さいものは可愛い」

誰の受け売りか知らないが、ミラは慰めているつもりようだ。「……まあ、いいんですけど。」

で、人形師さんは今この付近に住んでいるんですか？

近所というか、アデイスが見つけた屋敷に住んでいるのだろう。確信しているが、念のために確認した。

「それは言えない」

「別にいいですけど……ご老人に興味は？」

「ない」

あつたらそれはそれで怖い。

「ですよねえ。ここに住んでいるおじいさんとおばあさん、知りませんよね？」

「すまないが、興味のないことは頭に残らない」

「都合のいい頭ですね」

「長く生きていると身につく」

そんなのは彼だけだろう。セーラは身につけたくないし、最近出会った相手を忘れるような風にはなりたくない。

「セーラ、そこから出てこないか？」

人形師が結界の外から手招きした。

「出ません」

「甘い物でも馳走しよう」

「アデイスを待つているんです」

「あの男はいらない」

寒気がして腕をさする。やはり怖くて気持ちが悪い。

「い……いるいらないの問題じゃないでしょう。そろそろフレアさんが帰ってくると思いますよ。さっきまで一緒にいましたから」

「フレアは別の所に住んでいる。帰らない」

意外だとも思ったが、確かに彼と同居したらこちらまで病んでしまいそうだと納得もした。フレアがそれを理由に同居していないのだとは限らないが、常に共にいないのは彼のためにもいいだろう。

「ん」

人形師が空を見上げる。つられて見るが何もいない。

「どうしました」

「客が来たらしい」

「ひよつとして、近くの屋敷に住んでいませんか？」

「それは言えない」

「アデイスが行ってるんですけど」

「そうか。一緒に来るか？」

「いいんですか？」

言えないと言った矢先に。

「人形を見られたら同じ事」

確かにそうだ。普通の人から見たら元気のない人に見えるが、ア  
デイスは見破るだろう。

時間は、まだ大丈夫だ。

「……………ミラさんどうします？」

「退屈。行く」

ミラは結界から出る。もちろん警戒はしているようだ。仕方がない  
ので聖良も出た。一度は帰してくれたのだから、危害はもう加え  
ないのだろう。

きつと。

## 8話 グリーディアの魔物 3

案の定にらみ合うアデイスと人形師。

夫婦は見つかっていない。

今は聖良のためにと、人形達に周囲を探してもらっている。なのに二人は睨み合っている。

その間にフレアも来て、話がますますややこしくなった。

「もう、二人ともいつまで見つめ合ってるの？ 気色悪いわ」

二人は目をそらして、それでも意識は互いに向いていた。趣味が被っているところがあるから、同族嫌悪的する部分があるのだ。

「でもどうしてさつき別れたばかりのセーラ達がここにいるのよ」

「ご近所さんだ」

どんな説明だそれは、と、アデイスは思い切り顔を顰めて首を横に振る。

「この近所にアーネス所有の家があります。飛んできたら目立つから」

アデイスは苛立った様子で腕を組みながら言う。

「考えることは一緒ねえ」

「さすがに屋敷一つ隠すような事をしていたら、見つかった時に怪しまれるからやりませんけどね」

「やっぱり怪しいかしら？」

「そりゃ怪しいですよ。あまりにも怪しかったから試しに様子を見に来たんですから」

「普通は分からないわよ。あなたどうして分かったの？」

「天才に不可能はないんです」

フレアの顔つきが険しくなる。

「嫌な男ね。こんなに性格悪いなんて思わなかったわ。遠くから見たらいい男なのに」

「どうして連続殺人鬼の弟に愛想を売らなきゃいけないんですか」  
ユイが驚いて後ずさる。変な男というだけの認識だったのに、殺人鬼に塗り替えられたのだから驚くのは当然だ。

「それに、その近眼で遠くから見えるんですか？」

「なんとなくよ」

フレアは胸を張って言う。

「しかし、殺人の結果に捜索を手伝ってもらっているのですから、複雑な思いですね。セーラがそのうちの一人にならなくて本当に良かったですよ」

まったくだと聖良も頷いた。

想像するだけで治まった鳥肌が復活する。

トロアの事といい、自分が肝の小さい人間なのだと思い知った。

トラウマなどに気付いていられる余裕は、自分の人生においてなかったのに、気付く事が出来るようになった。

いつの間にか心にゆとりが出来ていたらしい。

いい事なのだろう。

少しだけ贅沢をしている気分だ。

しかし、もしこの世界に召喚されず、遺産を取り戻して進学して一人になっていたら、どんな風に暮らしていたのだろうか。

きつと今よりも昔の事を思いだして、ウジウジしていたに違いなし。今はアデイスがいるから寂しくても擦り寄っていけばいいが、一人だったらどうだったのだろうか。

一人ではないから分からない。

「でも、何を搜索しているの？」

ぼーっとしていたら、フレアに尋ねられた。

「老夫婦ですよ。管理を任されていたんですが、姿が見えなくて。最近目が悪くなったらしくて心配なんですよ。魔物の噂も聞きます」  
フレアはこくりと首をかしげた。そして目を泳がせる。

「心当たりがあるなら言いなさい」

アデイスが冷たく言う。冷たくもなるような、明らかに怪しい反



応だった。

「そのご夫婦のことは知らないわ」

「ではなぜ動揺したんですか」

「その魔物の方は、心当たりがあるかも」

「かも？」

曖昧な言葉にアデイスの声にはさらに怒気が混じる。可愛いと思わない男性相手だと容赦がない。ユイは可愛い男の子の範疇に入らしく多少の事なら快く許すが、これが彼の男性に対する本来の態度なのだろう。

「この前、ヘレナ達が来た時の帰りに、ちょっと可愛い子を見つけて、持って帰ってきたのよ」

アデイスが掴みかかろうとしたので聖良が袖を掴んで止める。

「いい子なのよ。賢いのよ。お手とかするし。ちょっと反抗期になって数日帰ってこない時があるけど、パミラには懐いてるわ」

パミラは人形の事だ。きっと世話をしたのだろう。動物は餌をくれる人にある程度なつく。

「可愛い子って、話しでは大型の猫のような姿をしていると聞いたのですが」

「可愛いじゃない。ふかふかで、大きくて。時々噛むけど、愛情表現の一種だし」

人形やフレアなら良いだろうが、その愛情表現は一般人だと死ぬ。本当に遊びのつもりだとしても、運が良くて重症。

「たぶん、魔物はパミラのところに戻ってくるわ。老人なんて食べないだろうし。けっこういいもの食べさせてるから。あの子がいるから最近は大きな野生動物も見あたらなから、野犬にやられたって可能性も薄いわ」

だといいいのだが、高齢なので心配でならなかった。

「なんだったら、パティを探しに行きましょうか。見つけたら安心でしょう」

「でも、一度戻らないと……あの人」

あの赤い破壊神が心配して動き出す。その様は格好良いが恐ろしい。彼女の動きを止めるのは、彼らを捜すよりももっと重要だ。

アデイスがセーラを見て悩んでいると、殺人鬼から距離を置いたユイが言った。

「ああ、それなら八ノに僕から伝えようか。彼は短距離なら空を飛べるから、すぐにも止めるために上に行けるよ」

「伝える？」

「繋がってるから。本当は中に入れておけるんだけど、僕は二人とも配下にしてくれてしたわけじゃないからね。」

ミラの場合は出した時に無意識に切り掛かられそうだし、絶対にやりたくないからやらないんだけど」

入れておけるとは何だろう。よく分からないが、連絡を取る手段があるだけは分かった。

「ちよつと難しいけど……むっ」

目を伏せて力む。端から見るとそれ以外の変化はないので変な人に見える。

「ユイ、不器用」

「ミラは送っても無視するだろう」

「あれは雑音」

ユイが落ち込んだ。

「ウルは自然に出来る。他の連中も出来ている。ユイは器だけ。ただの足手まといの弱点。魔術使えなかつたら心配で寝る間も離れられない」

ユイはため息をついて、無理をして笑う。

「じゃあ、おじいさん達を探しに行こう。人手は多い方が良いし」  
心配ではないから離れられるという意味もあるのだが、気付いて  
いるだろうか。ユイの命はミラの命なのだから。

聖良はふと、疑問に思う。

なぜ自分は一人で先頭を歩いているのだろうか。

かなり緊張するのだが。

というか、なぜ先頭なのだろう。

アデイスがなぜか先を歩けと言うから歩いているのだ。

何があっても痛い思いはさせないと。

「私、生き餌なんですよーか。それともトラブルほいほい？」

背後をついてきているはずのアデイス達に声をかける。

さほど離れてはいないが、いつもこれぐらいの距離があれば被害

を受けているので、不安があった。だから声をかける。

明らかに何かが起こるのを待たれると、いつも自分だけが何かに

巻き込まれているようで不満だ。

「違いますよ。ただ、効率を考えると、この配置が」

「一緒じゃないですか」

「離れていても、お母さん並のが突っ込んでような事がなければ大

丈夫ですって」

そんな事態は死ぬ。問題外。むしろ死ぬなくて苦しむ事になるの

だ。

また一つトラウマが増えそうな気がした。それとも、そのうち慣

れるのだろうか。

ネルフィアになら突っ込まれて痛い思いをしても、仕方が無い事

だと割り切れそうだが、問題なのは予想外な事が起こる場合だ。ネ

ルフィアの突撃は予想範囲内であり、意外性もない。問題なのは意

外性のあるトラブルである。

「……………」

不安を口にしたなら、現実になりそうで怖かったので口をつぐむ。

怖い、背後にはなぜかフレア達も一緒についてくる。だから大丈

夫だ。

目を伏せ、歩く。

いつもの森の中よりも、木々は間隔を開けて生えていて、歩きやすい。いつもの森が歩きにくいだけが、逃げやすそうなので安心できる。ここは手入れされた森なのだ。

自分の身は自分が守ろう、そう誓った。

セーラは気付いている。気付いているが、健気に一人前を歩いている。

すまないと思うが、アデイスを越える不運発生率を持つ彼女は、この距離さえあればそれが発生する。そしてこの距離なら取り返しのつかないような不幸にはならない。何だかんだといつも最後にはけろりとしているのだ。そんな姿がどんな人生を歩んできたのだと、健気に思えてたまらなくなる。

アデイスは、セーラであろうが利用できるものは利用する男だ。相手によって利用する方法を変えればいいのだ。

「ねえ、本当にこんなんでどうにかなると思ってるの？」

フレアが不服そうに言う。

「セーラは一緒になってもう何回も目の前から忽然と消えています」

「それだめじゃない！」

「常に警戒するのと、消えると思って今だけ全神経を集中させて警戒するのでは話が違いますよ」

と言っている間にセーラが何かに躓いて転けた。

「パティだわっ」

「は!？」

疑問を口にする前にセーラが鷲のようなもので宙づりにされた。こんな事が出来るならなぜ言わない。

「ちよ、なに!? きゃああ、落ちるう、助けてっ」

逆さ吊りになったセーラが、悲鳴を上げて騒いだ。アデイスは自称飼主を睨み、怒鳴り付けようとした時、

「こらっ、ちよっと何してるの!?!」

フレアが止めるよりも前に、聞き覚えのある女の子の声が響いた。

「こら、ロヴァン! ちよっと何してるの!?! おろしなさいっ!」

「っていうか、なんでこんな所に女の子が!?!」

そう言っただけで近づいてくるのは、見覚えのあるどころではない少女達、ロゼとシファの二人だった。彼女たちが向かう先から、茂みに隠れていた魔物が出てくる。確かに大きな猫といった雰囲気だ。セーラも好きそうな、見た目だけなら可愛い巨大猫。

「ロヴァン、イタズラしちゃダメでしょ! そんな小さな子を苛めちゃだめっ!」

「って、ちよっと! なんでアデイスと人形師がいつしよに!?!」

シファとロゼがこちらを見て驚いて後ずさる。

自分自身の顔はそこそこ知られているのは理解していたが、顔を合わせたことがないはずの二人がしつかりと知っているのには驚いた。気付かないうちにこちらを見ていたのだろう。

「パティ! どこに行ってたの?」

やはりあの生物がパティらしく、それはじつとフレアを見つめる。

「そんなことよりも、私また宙づりなんですけど……って、男の人は見ないでくださいっ!」

セーラはスカートを抑えながらこちらを睨んでくる。信用がないものだ。

「アデイス受け止める。私が切る」

ミラに言われるがままにかまえて、落ちてきたセーラを受け止める。子供サイズとはいえ、この高さから落ちてくれば普通の人間だと負荷が大きいのだが、竜になってからは肉体派になっているため苦もない。人の姿をしても、力がすべてなりを潜めるわけではなく、いろいろと助かっている。

「あんまり見ないでください！」

セーラがめくれ上がったスカートを手で押さえているので、そつと地面におろしてやる。セーラを宙づりにしていたような植物が地面に落ちると、うねうねと周囲を這い、不気味な光景だった。

「パティ、そんなに威嚇してどうしたの？」

その威嚇対象は間違いなくアデイスである。フレアはあの森であれを捕獲したのだ。アデイスの匂いに敏感になっていてもおかしくない。しかし相手は魔物。

「フレア、嫌われているんじゃないですか」

「失礼ね！ 飼い主は私なのよっ」

アデイスは鬱陶しい蔦を蹴散らし、パティだかロヴァンだか知らないが、その大きな猫と犬の中間のような生物へと笑顔で近寄る。それは逃げない。逃げられないと分かっている。竜を前にして、存在の差を思い知っているのだ。

魔獣だから。

「可愛いですね」

手を伸ばすと大人しく触れさせた。

「ほら、セーラも好きでしょう」

呼ぶと彼女は幼女のように無邪気な顔をして寄ってくる。女の子にはこういう動物がよく効く。機嫌は直ったようだ。

「パティ、もうどこに行ってたの。ダメでしょうこの子は」

フレアが脅えているパティを抱きしめた。

彼も半悪魔。魔物が脅える気配を生まれ持っている。

「ちょっと、この子はロヴァンよ。ロヴァンでなくても、男の子よ。どうしてそんな可愛い名前つけてるのよ」

フレアは固まった。知らなかったようだ。そういえばアデイスのことも雌だと思っ込んでいた。

「何でもかんでも可愛い名前をつければいいってもんじゃないでしょう」

「う、うるさいわねっ。どうして知ってるの！？ アーネスに聞い

たの!？」

今度はアデイスが固まった。

赤の他人の振りをする予定だったのに、アーネスなどの名を出したらこの二人は確実に食い付いて来るではないか。

「ちよつと、どうしてアデイスがアーネス様を……」

「え?」

案の定食ってかかってこようとしたのでとぼけてみる。

「それにモリイと同じ話し方してたわ」

セーラの話し方も聞かれていた。

「ひよつとして、あなたがモリイに血を分けた人?」

何か言われる前にユイとミラを睨む。彼らも馬鹿ではないので、こくりと頷く。二人はアーネスなど知らないが、誰だそれとは言われるのが一番怖い。最後まで馬鹿でないことを祈りながら、ここは退散することにした。

「……オチが分かってきたので帰りましょうか」

「そ、そうですねえ」

きつと散歩か何かだったのだろう。この二人がいるということは、他にもう一人二人誰かがいて、あの夫婦は彼らと一緒にいる。

だったら心配する事はない。まさか新しくペットを作って散歩をしているとは思わなかった。人生、もつと予想外な事も予想して生きないといけないらしい。

「ちよつと!」

変な詮索はされたくない。言い訳ならアーネスの時の方が良い。うっかりアデイスが知らないはずの変なことを口走ってはたまらない。

そう思ってセーラを抱き上げようとした時、

「二人とも、そろそろ日が暮れるから帰った方が良いですよ」

「え……?」

セーラのまっとうな言葉に、毒気が多い二人は面食らった顔をした。

「女の子二人でいると危ないです」

と、人形師を見る。二人も危機感を持ったのか、追求しようとする姿勢がゆるんだ。

アデイスはほっとして、ロヴァンの首を撫でる。

「あと、この子は危ないから元の森に返しておきます。可愛がってくれたのにごめんさい」

フレアが何やら文句を言っているが、セーラはこれを持ち帰ると聞き、嬉しそうにロヴァンの背を撫でる。

「ほら、ロヴァン君、お家に帰ろうか。ここにいると街で騒ぎになるからね」

セーラが歩くと、匂いが染みついているせいか素直に従う。

「この大きさなら、セーラー一人ぐらい余裕で乗れるんじゃないですか」

アデイスはセーラ腰を掴み、ロヴァンの背に乗せてやる。これでセーラの足は確保されたので、これ以上何か聞かれる前にと走った。走るのが嫌だったのか、半悪魔の二人は少し目を離れた隙に姿を消した。どうやったのか、アデイスにも分からない。きっと次に来た時、屋敷はもぬけの殻になっているのだろう。

が、とにかく今は逃げよう。問題は後回しだ。きつとあのジェロイン達が困ることになるので、アーネスとして行くよりも先にアデイスとしてまた行かなければならない。

言い訳はいくらでも考えられるが

「……なんか、最近、なし崩し的にばれていつてる気がするんですけど、どうなってるんでしょうねえ」

ロヴァンにしがみつくセーラは無言だ。

もしも彼女が地面に立っていても何も答えなかっただろう。

きつと運の問題だと考えているだろうから。

それが言えるのがアデイス達だけではなく、人形師達にも言えることだというのが、少しだけ慰めになった。



## 9話 家族旅行1

薪ストーブに火がともる、暖かい部屋から外を見る。

短期間で作ったのに、すきま風が吹き込むこともない部屋に感動しながら、膝に頭を乗せるロヴァンの背を撫でる。

すっかり懐かれた。

いつもは外にいるのだが、暖かい場所の方がよいらしく、しとめた獲物をくわえては遊びに来る。飼い猫ではないが、ノラを家に入りさせている半飼い主といったところか。文句を言うご近所さんもないので手懐けても問題ないのがよい。

とても賢い子で、ネルフィアが来る直前になると、察して帰る。

ミラにも脅えているが、まだ人間の気配がするためか逃げ出さない。噛まなければ切られないと本能で悟っているのか、雰囲気で分かるのかもしれない。

ロヴァンが脅えるネルフィアは、狭い住居が好きではないらしく、寝るときは上に帰る。しかし食事の時には小さくなってここに来る。ここもそれほど広い家ではないので、聖良とミラが同じベッドで寝て、男達はリビング兼ダイニングのカーペットとクッションで好きなように寝ている。

そんな日が続いて、ふと思いついた。

「ユイ君達が来てけっこう経ちましたけど、まだ神殿に戻らなくてもいいんですか？」

たまには帰らないといけないと言っていた気がする。そのたまには、月単位帰らなくても問題ないのだろうかと言う意味だ。魔法で超短縮したとはいえ、家が一軒建ってしまったている。

「帰れって意味じゃないですよ。なんか敵しそうな感じなのに立場は本当に大丈夫なんですか？」

「ユイ、肩身狭いから神殿が嫌い」

黙々と木彫りの人形を作っていたミラが顔を上げて言う。刃物をいじっていると落ち着くらしい。かなり器用で、そのまま土産物屋にでも並べたい出来である。

「ミラさんの事ですか？」

「ユイ魔術師。魔術師、この国以外では嫌われる。自分たちにはない力を持つから」

「なるほど」

「この国以外は例外なく魔術師であることは隠す。恐怖もあるけど、妬みが大きい。」

ユイの場合、上層部の一部しか知らないけど、それが周囲に伝わる。上に期待もされているから、やっかみの対象になる。半悪魔と私を連れているのも原因の一つ。帰りたい場所ではない」

「なるほど。でもどうやって魔術の勉強を？」

滅多に教えてくれる人などいないと聞いている。しかしそこでハノの存在に気づいた。彼はへらりと曖昧に笑った。

「複雑な家庭環境ですね」

「セーラほどじゃないよ」

「そんな事ありません」

聖良の家庭は複雑なのではない。ありふれた環境で、複雑ではない。ただ少し突飛なだけだ。

アデイスの方がよほど複雑である。

「僕もいつそのことこの国で生まれてたらなあ」

「何言うんですかユイ。ちよつと前までハーネスの悪夢がありましたよ。神子でそれだけの魔力なんて、絶対に狙われます。それだけ器が大きければ、滅多な事じゃ身体を変える必要もなくなるし……この国に神子が生まれにくいのは良かったのか悪かったのか。」

「そういえば逆に生まれやすい地域もありますよね」

「ああ、神殿の周辺は多いから、そこに神殿が出来たぐらいだし、地域性ってあるみたいだね。たまに近い身内で神子が何人が産まれることもあるし、遺伝がまったく関係ないって事もないみたい。た

だし魔力を持つている人はあまりいないよ」

そんな会話を聞きながら、聖良は蔦のかごを編む。ルルトに教えてもらったのだ。勉強したり、端切れを縫い合わせてパッチワークにしたり、やりたい事はたくさんあるが、今はルルトに教わった事を身につけるのが先決だ。

ルルト達が竜の村に帰る前に、簡単なことは教えてもらわないと後々困るのは自分なのだ。

竹のように切れる植物があり、それをデテルが細かくしている。

少し教わったが、自分でやっていたら少量で日が暮れる。人生は長いので、余裕がある時に練習する予定だ。明日はデテルが用意したそれで、別の籠を作る。

「セーラ、そういう作業は楽しい？」

ユイに問われて、聖良は考える。

「そうですね。昔からこういうのはよくやってたので。もらい物のセーターをほどいて作り直したり」

「やっぱり国でも……」

隣にいたアデイスが呟き、聖良はその膝を叩いた。

「失礼ですね。叔母さんが男物しかくれなかつたんです。他人にプレゼントする手編みのマフラーを編まされたりもしましたし」

「……………そんな思い出があるのに楽しいんですか？」

「強制されなかつたら楽しいですよ。自分の好きな素材で、自分の好きな物を作るってとっても素敵なことですよ」

アデイスは押し黙る。彼には一生分らないだろう。

「セーラ、細かい作業好きだな。私は刃物を使う作業が好きだ」

「ミラさんは、お魚とかお肉さばくのお上手ですよ。私、そういうのは得意じゃないから羨ましいです」

細かく指示しなければ大ざっぱにぶつ切りをするが、教えれば綺麗に切ってくれるようになった。兎ぐらいならともかく、規模が違う動物を捌くのは、聖良には無理だ。しかしミラは大小関係なく、一度教えてしまえば言われた通りに、綺麗に解体してしまう。

どう頑張っても、聖良が彼女のように巨大生物を切るのは不可能なので、自分に可能な範囲で出来ることを増やしていく事にした。

かこが一つ出来上がると、可愛い布を敷いて果物を入れる。

木の家に、手作りの家具に、手作りの小物。

昔からこのような可愛い、別荘のような場所に憧れていたのだ。聖良はうつとりと可愛い果物籠を眺めた。

「ああ、普通の女の子ってやっぱりこうなんだよね。可愛いなあ」  
ユイがため息をついて言う。

普通という言葉がひっかかる。普通でないのはミラであり、彼女に比べたらどんな女性も可愛いだろう。

「神殿は女性が少ないんですけどっけ」

「普段いるところは未婚の女性は子供だけだよ。隣には逆パターンの女性ばかりの都と、両方住んでいる都があるんだ。だから三角っぽい形をしたところだよ。三つの都が、高い塀越しに並んでるって感じかな。その三つで一つの国なんだ。男街、女街、夫婦街、みんな合わせて聖都って言われてる。ちゃんと地名あるけど、住んでる人でも覚えてなかったりするから、俗称の方が有名かも」

「面白そうな所ですね」

「セーラならどこの区域でも出入り自由だよ」

「それは私に子供を演じると」

「いやいやいや、小柄な人が子供のふりをするのは時々あるよ。十二歳まではいていいから、少しぐらい誤魔化しても見た目が幼かったら問題ないらしいし、やたらと大人っぽい十二歳もいるし」

どのみち子供の振りをするという事だ。

むくれているとアデイスがにじり寄ってきて、いきなり聖良を抱きしめて頬ずりしてきた。

聖良には、彼の考えることはよく分からない。振り払うと寂しがつてそれはそれで鬱陶しいから、しばらくは我慢する。もう少し大人の女性に対する扱いだったら怒ったりしないのに、本当に学ばないというか、常識がないというか。

「あの〜」

堪えていると、知らない声と、こんこんとノックする音。聖良が動けないのでルルトが玄関を開けると、知らない女の人が入ってきた。二十代半ばの金髪の美女である。

その人を見るなり、ミラが剣に手をかけ、ロヴァンが聖良のというよりも、アデイスの後ろに隠れる。懐く相手と頼れる相手と同位置ではないと、魔物ですら思っているようだ。

「なんでレファリアさんが……」

ユイが立ち上がり、笑顔で彼女を迎え入れた。いい笑顔だ。いい作り物の笑顔だ。

「その女性はどこのだたですか」

アデイスの愛想の良い質問に、ユイは笑顔を崩さずに答えた。

「同僚の使い魔だよ。悪魔のレファリアさん」

悪魔が使い魔。

彼らはずごい存在のように言われているのに、神子達はあっさり支配してしまうようだ。

「下級ですが、本物のようですね」

アデイスの言葉にレファリアの顔が引きつる。

みな刺々しい。アデイスはどんな種族でも女の人には優しいはずなのだが、刺々しい。

「そうだとすると、この国に悪魔を送り付けるなんて、神殿は安定を崩してこの国を壊そうというつもりなんでしょうかねえ」

単純作業で頭がぼーっとしていたが、言われてみればその通り。

使い魔と言えども一番来てはいけない種族ではないか。この国の住人であるアデイスがピリピリしない方が危ない傾向だ。

「そ、その人を……」

レファリアはミラを見ないようにしようとおどしながら押す仕草をする。ハノがミラの肩に手をかけて下がらせると、彼女は正面を向いた。

「ウインデル様からの言付けです。すぐに戻ってこられるようにと」

「どうして？」

「理由までは存じません。神殿全体の意志です」

ユイは思い切り顔を顰めた。帰りたくないと話していた所だからそうなるのも至極当然。

噂をすれば影がさすというが、なぜこつも言葉にすると嫌なことを引き寄せるのだろうか。一瞬聖良が悪いのかも考えたが、ことわざになるほどよくあることなので、きっと違うはずだ。聖良ばかりがついてないとは限らないのだから。

「なぜ」

ミラが剣の柄を握りしめたまま問うと、レファリアはひいと後ずさる。顔面は蒼白。震えは止まらず、理由や種族を知らなければ心配していたところだ。

「私は、知らない」

「悪魔のくせに使えない。情報の収集もしていないとは、悪魔と呼ぶのも他の連中に悪い。並の悪魔、使い魔でも、もっとしっかりしている」

どうやら彼女、ミラに嫌われているらしい。

「ミラ、無駄に威嚇しなくていいよ。レファリア、長老達の意向ってこと？」

「はい」

「それは新しい服作ったから戻ってきなさいレベルか、手に負えない魔物が暴れているから戻ってきなさいレベルか、どちら寄り？」

「おそらく後者かと」

「そう……」

ユイは深いため息をついて、ミラへと向き直る。

先ほどまで、ミラは上機嫌だった。その機嫌が、下降している。冷えている。

「じゅめんミラ。一回戻るよ」

「……………」

「いや、むくれられても」

「長老のところ嫌。呼ばれると連れてかれる。嫌い。行きたくない」  
「えっと……長老のところに……行かないやダメかな？」

ユイはレファリアに問う。彼女は明らかに問いを発したユイではなく、ふくれ面のミラを見ている。

「お、おおおお、おそらく……は……そ、そおなる、かっつ」

最後の方は声が裏返っていた。

「ミラさん本気で脅えられてますね。神殿の皆さん、ミラさんを見るとああなんですか？」

「あれは極端」

「そうですね。なにかあつたんですね……」

「昔の男を殺したとかで食ってかかってきたから木の枝を折って串刺しにただけ。しぶといから全身を壁に縫いつけてやったらああなった。ユイが身を守ってもいいけど、殺すなって言うから仕方なくやったのに」

「そうですね。殺さないように押さえつけたんですね」

脅えて当然だ。しかし、なまじ力がある相手だと、半端な事をすれば危険なのはミラだろう。反撃が不可能なほどに押さえ込むというのは、間違っていない。

例えば、変質者などには、中途半端な反撃はかえって危険だ、やるなら徹底的にやれ、と、テレビの護身術コーナーで誰かが言っていた。

ミラは間違っていないし、その方法が一番彼女自身も安全なのだが……やられた本人にしてみればたまったものではない。ミラはやられそうになったら百倍返し以上なので、自然と恨みも恐れも買いやすい。

実際にやらないと殺される場面もあるだろうから、彼女を責めるのはお門違いだろう。他人に悪意を持つというのは、そういうことだ。

いつものように自分のいいように結論づけていると、聖良はミラに抱きしめられた。日本人の感覚だと、その抱擁は鬱陶しいと頭に

よぎることもあるのだが、まさかミラには言えまい。

「セーラは言わなくても分かる。賢い。好き」

賢いのではなく、過剰な自己防衛の結果だが、それもまさかミラには言えまい。

好かれていれば、裏切らなければ、あっさり殺されることはない。関わり合いにならないのが一番なのだが、こうなってしまった以上は関係を続ける必要がある。

暴力的な所がなければ、面白いし元の世界の友人達よりも好感が持てるので、この環境は元の世界よりはいいと思っている。

つまり、意外にみんな好きなのだ。

「ミラ、セーラが好きなのは分かったから、荷物をまとめてくれると有り難いな。悪魔が長くいるとまずいし」

「……………」

ミラはしぶしぶといった様子で、寝室に向かう。荷物などほとんどないからあつという間にまとめて戻ってくる。

「洗濯物は生乾きですから、乾いたら大切にしまっておきますね」

「ありがとう。ジジイ達が呼ぶと時間がかかるから、雪が積もり始めたら来られないと思う」

確かに雪山越えをして戻ってくると言われても困る。そろそろ上の方は積もっているだろう。そういう場所は避けて行くとしても、春を過ぎてからの方がいい。

その言葉を聞いて、アデイスは首を傾げた。

「でも来る時は船だったのに、次は山越えするんですか？ 旅客船はないですが、神殿の権限でどうにでもなるでしょう。うちからも定期的に使者を派遣してますよ。」

人間のアデイスは、先輩に一回連れてかれそうになりましたよ。むさい男どもと一緒にいるよりも、可愛い子供達に勉強教えてる方が楽しいって断りましたけど」

誘った人が少し可哀相だ。アデイスのアデイスらしさ満載の断り文句を吐かれたら、聖良ならもう口をきいてやらない。



「グリーディアからはそんなに使者が来てるの？ 知らなかった」

「他にもたくさん来ているでしょうから、仕方がないですね。魔術師だから、慎重な扱いされているみたいですし」

魔術師の外交官がいるのだ。

言語の問題もなくなるし、自分の身も自分で守れる。考えてみれば自分の身も守れないようでは、風当たりのきつそうな国の使者などやっていられないだろう。

「それって、壁に囲まれた三角形の変な国のことかしら？」

興味津々といった顔のルルトが口を挟む。彼女もかごを編んでいたのだが、すっかり手が止まっている。

「ルルトさん、知ってるんですか？」

「あっちの方が、私やラゼスの母親の出身地なのよ。だから一度だけ見たことがあるわ。今度ラゼスが来た時に言えば、連れていってもらえるんじゃないかしらねえ」

ルルトは嫁に来る竜についてきたようだ。ラゼスの母親である普通のお嫁さんな竜と、可愛いギセル族を想像すると、可愛らしくて胸が高鳴った。

「でも、せっかく小屋を造ったのに……」

「何を言うの。子供がわざわざ寒い場所で冬を過ごすことなんてありませんよ。遠慮せずにおねだりなさいな。あちらは都会だからきっと楽しいよ」

聖良はちら、とミラを見る。

不機嫌な顔が治っている。いつもの冷静なミラだ。

「聖都か……一度行ってみたいと思ってたんですね」

アデイスの言葉を聞いて、ユイは気が変わらないうちにとばかりに、希望を持ったミラの手を取った。

「じゃあ、行きますね。デテルさん、ルルトさん、お世話になりました。ネルフィアさんにもお伝え下さい」

「ご丁寧にどうも。またいらしてください」

「お元気で」

二人は小さな手を小さく振り、聖良達もそれに倣う。  
神子ご一行は、速やかに本拠地に帰っていった。

## 9話 家族旅行2

「母さんの実家に行きたいの？」

「いや、その途中にある聖都に行く予定なんです」

ラゼスは首をかしげる。

ミラ達が帰った翌日に遊びに来たラゼスに、アデイスは旅行の予定を説明をした。

聖良にとって問題はトロアだ。また暴走して死の抱擁を受けるかも知れないので、恐怖が抜けない。そのトロアは、指で三角を作る。

「それってこういう街だろ」

「そうそう、それですよ。ご存じでしたか」

「神子がうじゃうじゃいるところだ」

聞いてラゼスはげつと身を引いた。

彼も支配される側なので、苦手意識を持っているらしい。

「大丈夫ですよ。支配するまでには手順があるんです。まず始めに身体の一部を輪になる状態で掴む必要があるんですよ。手で掴むにしてもちやんと指が引っ付いて、隙間ない輪になっていなきゃいけないんです。その後、相手の力量に応じた時間が必要になります。

振り払う間もないほどの実力者となると、本当に数百年に一人くらゐらしいので、今は空きがある人がいないそうです。そういう神子よりは竜や悪魔の方が多いですからね」

つまり実力者はさっさと強い魔物を支配して、別の強力な魔物を支配する容量を残していないということだ。

「強い魔物を支配するためには、何人も強い魔物を持つ神子と協力し、念入りに計画を練ります。動きを止めないといけませんから、町中にいきなり現れた竜を支配しようとするなんて馬鹿なまねはしませんよ」

「そうなのかあ……」

ちやんと考えれば当たり前前のことである。

人間だつて熊を動物園の檻に入れてるが、山から下りてきた熊を動物園に入れるわけではない。山に返すか処分する。

この場合、処分なのだろう。

「でも、今の時期だと子供連れて山越えは無理だぞ。セーラなんか凍死するよ。自然は厳しいからね。海を越えるにしても、子供を連れて休める場所がなあ……」

考えてみれば当たり前だ。上の方はただでさえ寒いのに、かなりの速度で飛ぶのだ。もっと脂肪をつけないと無理だ。聖良は最近脂肪ではなく筋肉が増えた。舗装のない道は足を鍛えてくれる。

「まあ、空から行つたら危ないでしょうから、私達は船で行こうと思つてるんですよ。この国の魔術師は、他の国に行つても手を出されにくいですから」

「そうなのか？」

「よその人間から見ると、この国は魔界のようだそうです」

「な……なるほど」

「悪名高い王妃の笑顔を見て、手の平を返す方も多いようですが」

「ああ、あの時の。ネルフィとは真逆のタイプの女性なんだろうね」  
乱暴だが腹の中は真っ白なネルフィアと、楚々としているが腹の中は黒い物を抱えているクレア。ネルフィアの方が分かりやすいが、人間としてはクレアの方が付き合いやすいだろう。何事もない日々が続くというのは、人間にとっては意義のあることだ。

しかし、聖良のような人間にはどちらも変わらない。

「ネルフィには？」

「言いましたよ。ここよりは温かい場所に、社会見学がてら出かけるって」

「お前、ネルフィの扱い上手いなあ」

「何だかんだと、母性本能が強いですし、女性的なところがありますから。誠意を込めて説明すれば、ちゃんと分かってくれますよ」

この男は女なんてちよろいとも思っているに違いない。

「お前、大人になつても女の子を泣かすなよ」

「やだなあ、泣かしませんよ。ねえ、セーラ」

聖良は泣かないが、アデイスの知り合いの女性には、泣いている人が多そうだ。

今は婿に行ってしまったとすら言われているらしいし、こっそり泣いている女性はいるに違いない。元々可能性などなかったのだ。早めに諦められて良かった。

「アデイス、この国の船って、船のくせに妙に速いあれだよな？」

聖良にじりじりと寄ってきていたトロアが、動きを止めて問う。  
「たぶんそれです。知り合いに便乗させてもらっつもりですから。数日で出発なんですよ」

「あれ、俺も乗りたい！」

トロアの主張にアデイスは目を丸くする。

「……………竜なのに、船に乗りたいたんですか？ さすがに空を飛ぶ方が速いでしょう」

「それはそれ、これはこれ。前に乗りたいなあって行ったら、ネルフィが強奪しようとするから諦めたけど、正規に乗れるんなら乗りたい！」

まるで好奇心旺盛な少年のようである。男性にはああいうのが好きな人が多いが、竜の気まで引くのだ。そしてネルフィアは昔からネルフィアだ。

ラゼスが遠い目をして壁の飾りを見ている。嫌な記憶と共に思い出したのだ。

「でも、ネルフィには言ったんだよね。ついてきたりしないよね？」

「ついてきて欲しくないのかいっ!？」

ばんつ、とドアが開き、大きな顔が突っ込まれた。彼女はその状態で家には入れるまで小さくなっていく。

本当にこの生物たちはどんな身体をしているのだろうか。解剖図でもあるのなら、一度見てみたい。

震えるラゼスを見て、アデイスが愛想良く笑ってフォローした。

「お母さんにはきつと小さな船は退屈ですからね。」

人の姿になるのも好きじゃないみたいですし、三日間も知らない誰かと閉じこめられるのもいやでしょう？

途中で降りられないし、飛んだり出来ないし、元の姿にも戻れませんが。それを心配しているんですよ」

「そうなのかい」

ネルフィアは機嫌を直して部屋に入ってくる。父は口達者な息子を口を開いて見つめ、ため息をついた。

「でも大丈夫だよ。あたしは好きじゃないだけで、飛べないと苛立つなんて大人気ないことはしないよ」

ついてくる気のようにだ。ラゼスの顔が引きつっている。

「海を休み休み飛んでいこうか？」

「セーラの体力が持ちませんよ」

「そっか。じゃあ、セーラとは別行動っていうのは」

「人間として行くために船に乗るんですよ。密入国じゃ意味がないんです。同行してないとごまかしが付きません」

「お前は賢いよなあ」

アーネスとして行くのなら密入国ぐらいしそっだが、今回はアデイスなのだ。下手なことをしてもらっては困ると顔に書いてある。

ラゼスが口にした『賢い』の言葉にネルフィアはますます上機嫌だ。

「あらあら、大変だわ。ネルフィアが人間の姿で行くなんて大丈夫かしら。私もついて行ってあげたいけど、人間じゃないからねえ。お洋服は上にあつたわね。虫に食われてないかしら」

布の一部かと思っていたが、あれはちゃんと着るのだ。ネルフィアの陣地にあるから手を出さなかったが、手を出さなくてよかった。……ネルフィ、本当に大人しくしていられる？ 前に人間の振りして外に出た時、町中でド派手な喧嘩して、人間じゃあり得ないこととしてたような気がするんだけどさあ」

「それはあんた達がしっかりしてないからだろ！」

「いや、まさかネルフィに言い寄ってくる人間がいるとは思わなか

「だから」

「失礼だね」

「だって、ネルフィ、女の人にしてはワイルドだから」  
物は言いようだ。

しかし、そんな話を聞くとますます不安になる。ちらとアデイスを見ると、腕を組んで悩んでいる。父はいいのに、まさか母に来るなどは、言えない。

相手はネルフィアだ。

何か上手い言い訳でも考えないといけないのだが、何を言っても問題ないと思いきそうだ。そう思っているからこそ、アデイスも目を伏せているのだろう。

しばらくすると目を開き、とびきりの笑顔を浮かべる。

「お父さん、ちゃんと妻は守らないとダメですよ」

「だって、二人勝手にずかずか進んでくんだもん。どっちか一人に注意していると、片方が何かして、僕が二人いたらいいのって状態だったんだよ」

子供のような口調で言い、深いため息をつく。

二人の片割れはトロアなのだろう。そのトロアが問題だ。いつ何をされるかと思うと、胃の調子がおかしくなる。

「あ、そうだ。お母さん、行くなら私と手をつないでいて欲しいです。私よく誘拐されそうになるから、お母さんがいたらとっても安心です」

ネルフィアだけが、トロアを冷静にさせるだろう。

「セーラは小さいものねえ。あたしが守ってあげるよ」

ネルフィアと一緒にいて、ラゼスにトロアを見てもらえば安心だ。

「……………セーラ」

アデイスが青ざめた様子で手を伸ばしてくる。

その視線を受けて、自分の首を絞めている気がしてきた。

「……………た……………楽しい、家族旅行になりそうですね」

「そういえば旅行は初めてだねえ。アデイスがこんなに早く大きくなるとは思わなかったからねえ。お前は竜としても十歳で通じるよ」「わあ、セーラと似たようなもんですね」

呆けたことを言うアデイスの足に、いつものように杖を伸ばす。この男はいつまで人を見た目十歳児だと言いつもりだろうか。

この世界の海を初めて見たが、海外旅行に来たと思えば大して変わらない。

ただ、船が予想とは大きく違った。

「帆船じゃないんですね……」

ファンタジーな世界なので、ファンタジーな帆船を思い浮かべていた。それがだ、聖良が知るような船に近いのだ。デザイン的にも少し珍しいが、あつちの世界で走っていても不思議がられる事はないような物で、ファンタジー世界の船に、少しときめきを覚えていた聖良は脱力した。

「国の所有で帆船はありませんよ。非効率的ですからね。この国の海には化け物が多いので、普通の船だと沈むんですよ。他の国でも研究が進められているらしいですけど、これやるにはうちの国から輸入しないと材料も手に入らないようなパーツが多くって、儲けるみたいですよ」

「そういう技術って、盗まれたりしないんですか？ 魔術って他の国にも無くはないんでしょう？ 分解して似たようなのを作る人が出てきてもおかしくないような気がします」

「まあ、難しいでしょうが、その時は、そうなるのも仕方がないんじゃないですか？ 私には関係ありませんし」

「それもそうですね」

彼はもう人間ではない。アデイスでいられる時間はそう多くない。もって十年。その後はさすがに年を取らないと怪しまれる。



アーネスならともかく、アデイスは短い。だからその時には関係なくなっている。

「アデイス」

呼ばれて振り向くと、知らない男性が二人こちらに向かってくる。歳はよく分らないが、五十台ぐらいに見えた。格好いいおじさんだ。

「クインシー、ヘクセン、久しぶりですね。この度は世話になりました」

アデイスの知り合いの魔術師のようだ。聖良はぺこりと頭を下げた。二人は不思議そうに聖良からトロアまで見回し、アデイスへと笑いかける。

「なんの団体だ？」

「妻とご家族です」

「妻？」

と、隣にいる聖良ではなく、離れている人間の姿をしたネルフィアを見た。

顔立ちだけ見れば美人なのだが、逞しいという印象が強く、アデイスのようなたくましさや縁のない男の妻と思うと違和感があるのだろう。

それから聖良を見る。

「アデイス……国外逃亡でもするつもりか？　そういうのに手を貸すのは……」

「違いますよ。この子はちゃんと結婚できる年齢ですし、クレアとも面識があります」

偽装結婚をするという発想は、アデイスの中ではかなり本気で進行していたのかもしれない。

「……………本当に年齢詐称じゃないのか？」

「殿下よりも年上ですよ」

「……………本当に？」

「嘘についてどうするんですか。人の幸せに水を差さないでくださ

い。幸せの絶頂なんです」

と言いつつ人の頭を撫でていては説得力がない。

何度もやめてくれと言っているのだが、この男の身長ではここが一番触れやすいらしくすぐに忘れる。

「だから、その頭撫でるのはやめてくださいって」

「っ!？」

今まで顔をしかめていた二人の目が見開かれる。

しゃべったからだろう。しゃべらない方がいいのだろうが、無言を通すのは不自然である。そのうち分かっていった事だ。

「魔女か？」

「違いますよ。外国の方でこんなような発音の地域に生まれたそうです」

「聞いたことがないぞ」

当たり前だ。異世界の話なのだから。

「色々な言語が混じってこうなったっばいですよ。だいたい魔女だからって、こんな独特の発音で話すはずがないでしょう」

最近はこちらの言葉と日本語が入り交じった奇妙な話し方をしている。日本語では正確に伝わらない単語もあるし、アデイス達相手に練習していた。

「……………」

「童顔で小柄な子ですけど、ちゃんと体つきは大人の女性ですよ？」

「……………まあ、なあ」

そういう言葉を発するときには、だいたい胸の辺りを見られている。嫌でたまらない。

「さあ、そろそろ船に乗りましょう。皆、楽しみにしているそうですから」

一番つきつきしているのはトロアだ。アデイスの催促を聞いてこくくくと頷いている。

「……………家族旅行に利用してないか？」

「まさか。この前出会った神子の方に招かれているんですよ」

「それは聞いたが……」  
クインシーはため息をつく。心配されているのだろう。  
駆け落ちめいたことを口にしたから、アデイスの趣味も知っている可能性は高い。

「……お世話になります」  
無駄に気苦労していそうな男にぺこりと頭を下げた。

船室に入ると荷物を降ろす。

聖良と同室はアデイスとトロア。

ネルフィアとラゼスは別の部屋。

この部屋割りにはトロアが提案し、アデイスが承諾した。  
いい機会だからゆっくり話し合わせてやろうと言うことだ。友人から見ても二人はほっとけないらしい。二人の関係は、竜の中でも特殊なのだ。

トロアはここにつるんでいる友人がいないせいか、彼の注意はセララに向けられた。聖良が緊張で汗を掻いてきた頃、トロアは言った。

「セララ、外を見に行こう」

拳を作り、音が立つほど力強く足を踏み出す。その迫力に聖良の顔が引きつった。

「は……はあ」

「じゃあ行こう」

「ちよっ」

有無を言わず手を引かれ、アデイスがその後をゆっくりついてくる。

不安はあるが、手を握る力は普通だ。痛くはない。変に刺激しな

ければ、拳が潰されることもないだろう。逆を言えば、下手に刺激したら潰される。

情緒不安定なこの男相手では不安だが、ようは彼を不安にさせたりしなければよいのだ。

「トロアさん、セーラが怯えているからもう少し紳士的にエスコートしてあげて下さい」

アデイスが見かねて後ろから声をかけると、トロアは足を止めて聖良を見る。笑ってみるが、顔が引きつる。

トロアはしゅんとして聖良の前に膝をつき、顔をのぞき込んでくる。

「あの時は本当にごめんな。もうしないから、怯えないでくれ」

「は……はあ」

故意に身体を潰してくるような事はしないだろう。それは疑っていない。他人を傷つけて喜ぶ竜でないのだけは分かっている。聖良に嫌われたくないというのも本心だと分かる。

暴走しやすい性格の問題だ。

「セーラは最近痛い目にはかりあっていますからね。少しずつ慣れるようにしましょう」

「そ、そうだな。少しずつ」

そうしてもらえれば、聖良も助かる。そうすれば、いつかは妹では無いと気付いてくれるだろう。

「客船ではないから遊技場はないけれど、身内ばかりだからどこにでも案内しますよ。トロアさん、セーラは私の妻ということになっているので、返していただけますか？」

「あ、ああ」

トロアは名残惜しそうに手を離れた。

聖良はほっとしてアデイスの手を掴んだ。トロアには可哀相だが、彼の側にいるとろくな目に合わない。

アデイスに手を引かれて甲板に出ると、既視感を覚える光景にため息をついた。やはり帆は、欲しかった。

ただ、聖良の知る船と違い静かだ。魔力で動いているので、とてつもないエコシップである。揺れも少ないのに修学旅行の時に乗った船よりもずつと速い気がする。これだけ速いのに揺れないのだ。トロアが乗りたがった理由も分かる。

「乗っていると迫力が違うなあ。水があるのにこんなに速く走るなんて、すごい船だ」

彼は素直な男性だ。子供っぽさが抜けておらず、あんな事がなければ、ただ可愛い男性だと思っていただろう。

聖良はアデイスに手を引かれ、船首へと向かう。

船酔いしたらどうしようかと悩んでいたのが、これだけ揺れないと大丈夫そうだ。

これで明後日の午後には到着するらしい。アデイスが知っているよりも速くなっているとの事だ。

「アデイス、あれ何ですか？」

前方で跳ねる魚がいた。イルカのようなのであるが、何かが違う気がする。

「ただのトビウオですよ」

「……………大きいトビウオですね」

確かにそれ系のキラキラが見えるのだが、見えるのはイルカとまではないかなくとも、小さなマグロサイズはあるように思える。

「あれ、美味しいのか？」

「あまり美味しくはないかと」

「そか」

トロアが残念そうに肩を落とした。

淡泊で大味そうだ。調理法によっては美味しいのだろうが、本物を食べてみない事には調理法は思いつかない。

現状ではどうでもいい事だ。

「でも、今夜は美味しい海の幸ですよ。乗っているのはそこそ身分の高い連中ですから、食事はしっかりしています」

「楽しみです」

外は気持ちいいし海は綺麗だが、それだけだ。三十分もここにいれば、浮かれていたトロアも飽きてしまっただろう。景色とは一瞬心を動かすが、見慣れるとただそれだけだ。

「セーラ」

アデイスが名を呼びながら肩を抱いてくる。人形扱いでない分マシか。

「せっかく聖都に行くんですから、腕輪作りましょうか。取り外しできるタイプの」

アデイスが前に話していた、偽装結婚のための腕輪の事だ。

そうでない困るのはアデイスだ。結婚の言い訳と、竜になった時壊れるから、そういった外せる物でないと使い捨てになっってしまう。

「今はいろんなのがあるみたいですよ。デザインも昔ながらのシンブルな物だけでなく、彫りが入ったりするんです」

アデイスは楽しそうだ。彼はおそろいのような物が、すごく好きそう。

「そんなに結婚したってアピールしたいんですか？」

「セーラは嫌なんですか？ ああ、結婚式をしたいんですね。女の子はそういうのに憧れるものですから。せっかく聖都に行くんですから結婚式しましょうか。セーラの花嫁姿は………あ、レンタルにサイズが無いですね。ドレスが完成するまで待つてくれますか？」

「いやいやいや、そうじゃなくて」

勝手に夢膨らませるアデイスに、呆れ半分手を振った。

恋愛結婚の末とかならまだしも、彼は異世界に来て不死身にされて一緒に暮らし始めただけの男だ。むしろ一番の加害者だ。結婚式などされても困る。

「セーラは私の事、好きじゃないんですか？ 私はセーラの花嫁姿が見たいです」

「好き嫌いの問題じゃないでしょう」

「私はセーラの事をこんなに思っているのに」

エセ幼女とか言ったくせによく言う。あれさえなければ、聖良も少しはこの顔に騙されていただろうが、信頼とは崩す事だけは簡単なのだ。

「アデイスはほんとにセーラ一筋だな。刷り込みってやつか？」

「いや、先にお母さんいたから刷り込みって言いませんよ。普通に可愛く思ってるんですよ」

「ほら、ネルフィアはあんまりだから」

「確かにお母さんは可愛いつて感じじゃないですが」

「段段と手が頭に移動していくのはなぜだろう。」

「エルフとなら俺も知ってるから、血を分けた相手ならそれほど問題ないけどな、やっぱベタベタしていると嫌味な事言う奴もいるんだぞ」

「セーラを苛める方はぶっ飛ばしますよ」

「その意気なら大丈夫だな」

ひょっとして、二人の交際を認める兄の気分になっているのだろうか。

てっきり反対されるのだと思っていたのだが、竜も意外と寛容らしい。

大きな勘違いなのだが。

「よかったですねえ、セーラ」

「……害はないからいいですけど」

せいぜい抱きつかれて擦り寄られて頬やら額やらにキスされるだけ。聖良はもう慣れてきていた。

それ以上はされないのだから、アデイスがどう考えているかもよく分からない。妹に対する扱いというのとも違うような気はするし、完全な子供扱いでもないし、彼の言う好きが何なのか、想像もつかない。

友情とか、そういうものだろうか。

しかしアデイス相手にそれもなんだかおかしい感じだと、振り出しに戻る。

「セーラ、聖都に行ったら他に何を買いましようか。うちの国は他国の物があまり入ってきませんが、聖都は色々な物が入ってくるそうですよ。楽しみですね」

アデイスも行った事がない場所というのは、少し緊張する。言葉が通じなければ、押し黙ってアデイスの背に隠れていただけだろう。

「ああ、スリとか、通り魔とか、人さらいには気をつけましようね」「聖都なのに、そんなのが出るんですか!？」

「なにぶん観光地ですから」と、結局撫でられる。

ぶくうとぶくれると、何を思ったのか頬をつついて頬ずりしてくる。

ひよっとして、怒らせて遊んでいるのだろうか。この男の事だから拗ねた顔が可愛いかという理由で嫌がらせしそうだ。ではもう無表情を貫くか。

「俺にも、俺にも」

順番待ちを始めるトロアを睨み上げ、一人で拗ねて船尾へと向かった。



## 9話 家族旅行3

甲板に出ると、船尾でアデイスが妻だと紹介した女の子の機嫌取りをしていた。どうやら怒らせたらしい。先ほどのやりとりを見る限り、子供扱いをするアデイスが悪い。

そしてそれでもアデイスは子供扱いしている。彼はどうやら認めたくはないのだが、幼めの少女が趣味のようだから、子供扱いこそ彼の愛なのだろう。

クレアが認めているというのなら、彼が愛する妹たちのためにも、彼女には犠牲になってもらわなければならない。あれで成長が止まっているなら、十年してもアデイスの好みの容姿は保っているはずだ。

とても相思相愛には見えないが、素直になれない女性というのも世の中には多くいる。問題ない。

「アデイス、船上はどうだ」

「クインシー」

アデイスがセーラを抱えて満足げに微笑む。彼女の服装もアデイス好みで可愛らしい。

本当に恵まれた男だ。運がないくせに、肝心なところには恵まれている。しかもその目に見える不運のせいで恵まれているのにあまり妬まれていないのだ。あいつは恵まれているけど運がない、と。

「赤毛のご婦人ともう一人の男性は？」

「部屋にいますよ」

「せっかくだから中も案内しようかと思っていたんだが」

「今日の所はほつといてあげてください」

「そっか。じゃあ、三人だけでも下を見るか？」

「ええ」

アデイスがセーラへと笑みを向けると、彼女が落ち着いた表情で頷いた。もう一人の男の方がはしゃいでいる。

彼女は確かに見た目の年齢よりは落ち着いている。

「よろしく願います」

「若い女性を乗せる事はあまりないから、皆も喜ぶよ」

娘ぐらいの年齢に見えるから、皆が彼女の事を気にしている。可愛いな、可愛いなと上の空だ。実際に娘はいなくとも、娘でもおかしくない年齢と思うと周囲にも伝染するらしく、手が出せない大人の女性が乗るよりも浮かれている。

「じゃあついてこい」

三人を誘い、部外者が見て面白いところを回る。やはり一番人気は操舵室。普通の船の舵と違って、半球体に手をかざして言葉でコントロールする。風向きも考えなくていいし、子供でも動かせる楽な船だ。もちろん緊急時には高度な作業を要求されるので、魔術師はかならず一人必要だ。グリーディアならではの船である。

次に興味を持つのは主機室だ。魔動の技術が使われているから、慣れぬ者が見たら驚く。荒事の方が得意なクインシーには専門外の分野なので、見ても何が何だかよく分からない。かろうじて冷却用の式だとか、増幅用の式だというのが分かる。アデイスはこの手のことは好きだから、元々構造を知っている。解説は彼が勝手にするが、聞き手の二人はほとんど聞き流している。趣味人の理解できない言葉は聞き流すのがよいということをしつかり理解しているようだ。

大きめの船とはいえ、見て回る分には狭い。あつという間に一通り終え、最後の厨房へと案内する。

こればかりはどこにでもある厨房だ。もうすぐ昼食だから、メニューを聞くついでに来た。

「お台所だあ。いいなあ」

なぜかセーラは今までの中で一番喜んだ。

「おや、可愛らしいお嬢さんだ。俺の部屋は気に入ったかい？」

「素敵ですね。狭いのに、オープンまでちゃんとあるんですね。動線に無駄が無いですね」

賄いは狭い自分の城を褒められて上機嫌だ。セーラはオーブンを見つめる。料理が好きなのだろうか。

「セーラ、オーブンが欲しいんですか？」

アデイスが食い付くように尋ねた。

「窯もいいですけど、やっぱりちゃんとしたオーブンは魅力ですよ」「じゃあ、今度見に行きましょうか。窯の温度調整は面倒ですしね」

セーラがアデイスに不満を持たせないという事は、料理の腕はあり、高価な器具は使用していないようだ。彼は舌が肥えているから、合格点が出るだけでも、嫁としては上出来である。

本当に、アデイスは運がいいのか悪いのか分からない。

「これはお昼ご飯ですか？ お魚のスープですね。海のお魚久しぶりです」

「セーラはほんとういうの好きですねえ」

「それしか趣味がないんですよ」

「素敵な趣味ですよ。美味しいですし」

頭を撫でて、また怒らせている。

本当に可愛い嫁だ。結婚など出来るのかと心配していたのだが、子供は大人が知らないうちに大人になっているのだ。感慨深い。

「クインシー、来たついでに食堂に運んで、他の連中呼んでくれよ」

「お手伝いします」

セーラが食堂側に回ってカウンター越しに料理を受け取りはじめたので、クインシーは皆に知らせることにした。

広くはない食堂の隅にあるマイクに向かう。手をかざして言葉を紡げば各所にそれが響き渡る。終わると、暇そうにしているアデイスへと呼びかけた。

「アデイス、連れの二人を呼んできてくれ。船室に音を入れるのは緊急時だけだから、聞こえてないだろうからな」

夜に仕事をして、数時間前に寝たばかりの船員もいるため、船室には音を届けていないのだ。

「あー……トロアさんも来てください」

「なんでだ？」

「ほら、あの二人の話し合いに私だけで行くの気まずいじゃないですか。空気を読まないトロアさんの方がいいんですよ」

ひどい言いようだ。しかし彼は怒りもせずにセーラに別れを告げて二人で出ていく。

残されたクインシーは、改めて可愛らしいアデイスの嫁を見る。

見た目よりも年齢が上なのは本当だろう。だからといって、あり得ないほど上という事もないだろう。

笑顔が可愛らしくて、よく動く子だ。賄いの鼻の下が伸びている。確か彼の娘も黒髪で、年齢も近い。

「セーラちゃんはいいい子だねえ。将来はきっといいお嫁さんになるよー」

彼は娘の婿を吟味していると言っていた。賄いなどしているが、彼もグリーディアの軍人。かなり厳しい目をしている。花嫁姿は望みだが、娘が男を見つけてきたら、例に漏れずその男は苦勞するのだろう。

「この子はもうアデイスの嫁らしいぞ」

「は！？ アディ坊の！？ 女嫌いじゃなかったのか！？」

セーラの顔が引きつる。あの反応は、彼女もアデイスの趣味を知っているのだろう。アデイスにとっても二度と出会えない理想的な相手だからこそ、押しの強さで納得させたに違いない。いまいち納得し切れていないようだが、一緒にいるので愛はあるのだろう。

男の目から見てもアデイスの条件はいいのだ。

彼は誰よりも美しかった母親似だから。

「セーラ、君はアデイスとどこで出会ったんだ？」

「えと……アデイスに聞いてください。私には説明が難しいです。

お互い、人生最悪の不幸に見舞われていたので」

「最悪って……」

「人間、頭が真っ白になって記憶にないこともあるんですよ」

聞いてはいけない事だったのだろうか。この国の人間ではない者

がアデイスと出会うのだ。彼女も苦勞しているはず。

「じゃあ、アデイスのどこが好きになつたんだ？」

「……………ええと」

彼女は悩む。

普通なら性格とか容姿とか全部とか、そういう言葉が聞けるのだから

「親近感があります」

「親近感？」

「ほら、世の中には下には下がいるとか、ついてないのは自分一人じゃないとか」

アデイスの同類だと思い知る。

不幸な人間二人も乗せて、この船は沈まないだろうかと、やや不安になった。

両親を迎えに行くと、同じベッドで仲良く眠っていた。もちろんただ寝ているだけで、それ以上ではない。

いかにも事後といった様子であれば、アデイスも少し動揺していた所である。

「あの、昼食を食べませんか？」

揺り起こすと、ラゼスは顔を身体にこすりつけようとして固まる。自分の姿を見て、周囲を見回して、伸びをした。

「ネルフィ、昼食だつて」

「ちゅう……………」

ラゼスはベッドから降りてネルフィアを眺め、もう一度ベッドに乗り手足を押さえつけてから声をかける。

「ネルフィ、食事だよ」

起きないネルフィアの顔をなめ始める。竜の姿を思い浮かべるとおかしくはないが、人間の姿だと卑猥だ。息子の前で何をしてくれるんだろう。

「ラゼス、アデイスが引いてるぞ」

「ん、ああ……じゃあ頬をはたいてくれないかな。手足抑えてないと、ネルフィは壁に穴開けるかも」

自分の母の寝起きの悪さを思い出し、頷いた。

すぐに離れられるように警戒しながら、母の名を呼びかけつつ頬を叩く。

「お母さん、起きてください。食事ですよ」

ぴたぴた叩き、ぱしぱしになり、次第にビンタになってく。

セーラはアデイスを石斧で起こしてくれる。その気持ちが分かるほど、力を入れても起きない。

「お母さん、食事です！ セーラが待つてますっ！」

脳天に手刀を入れると、ネルフィアの目が開く。

「……………ぬ？」

「起きた？」

「ラゼス、何してるんだい」

「ここは狭いから、押さえてないと壊れるからね」

「ああ、そっか。船の中。すまないね」

あの体勢をそれで納得する事が、日常的にあるようだ。

どこまで色気のない夫婦なのか。

「えと、そういえばお話しはすみましたか？」

「おはなし？」

ネルフィアはこくと首をかしげる。ラゼスの気持ちも理解できるが、こちらとちがって大人の男女なのだ。遠慮しないでやる事をさっさとやっつけてしまえばいいのに。

両親をまともな夫婦にするにはどうするべきか

「私、妹が欲しいんです」

「妹？」

「はい」

「でも弟でも可愛いです」

ネルフィアは腕を組んで考え込む。ラゼスの顔が引きつっている。「私がもう少し大きくなったら、作ってくださいね」

今すぐ作れとは言わない。竜の出産方法など知らないが、個体数から考えて容易ではないだろう。

「妹か……アデイスがもう少し大きくなったら考えるよ」

子供に言い聞かせるようにネルフィアが言う。

兄弟が欲しいなど、子供の無邪気な言葉だ。アデイスは伸ばされたネルフィアの手に頬をすり寄せ、にこにここと笑う。

今度、もっと幼い少年の頭蓋骨も用意した方がいいだろうか。子供の姿の方が、子供のおねだりっぽいだろう。

「そうだ、食事ですよ。あと、みんなの前では息子とか言ってはダメですよ。寝ぼけているとすっかり口にしてしまいますからね」

「ああ、分かっているよ。お前こそお母さんじゃだめだよ」

「はい、ネルフィアさん」

名前で呼ぶと、ネルフィアが白い歯を見せて笑う。立ち上がり、船室を出ようとした時、船が揺れた。

揺れて、音が響いた。

『なんかでけえのが体当たりしてきた。迎撃用意！』

全部屋への要請に、アデイスはため息をついて甲板へと向かった。アデイスが呼び寄せたのだと言われかねないから、彼が始末しなければならぬ。

いつものことだが、いつものことなので、どこまでもいつも通りで切ない。

二度目の揺れに、聖良は壁に手をつけて身体を支える。不安になつて小さな窓から外をうかがうが、ここからではよく分からない。

「大丈夫だ。結界が揺らいただけだ。大きいのに体当たりされるとどうしても揺れるんだ」

揺れるのは当たり前だが、普通の揺れとは意味が違うらしい。

「こんな大きな船を襲う生き物がいるんですか？」

「ああ。この船の倍ぐらいある生き物とかもいるな。元気よく走ってるから大きな生き物に見えるんだろう」

異世界の生き物は、生態もサイズも聖良の常識では計れなかった。竜などという、サイズが変わる生物がいる以上、船よりも大きな生き物がいてもおかしくない。

聖良は戦闘員にもならないので、ここで大人しく震えているのが正解だろう。

「どうやって迎撃つてのをするんですか？」

「船にいくつか武器がついてるんだ」

「武器？」

「大砲とか魚雷とか」

それは聖良の知る大砲や魚雷なのか、都合の良い翻訳なのか、どちらだろう。他の国の船なら、大砲は火薬で飛ばすだろう。黒色火薬なら聖良でも作り方ぐらい知っている。しかしこの船は想像もつかない。

「魚雷でどうにかなるだろうが、たまに電気を浴びせても平然としているのがいるからな。」

やはり聖良の想像する魚雷とは、大きく異なるのだろう。ファンタジーな方向に想像したら正しいのかも知れない。

「ま、最悪はアデイスがどうにかするだろ」

「アデイスがですか？」

「あいつ器用だから。つか、その方が安くすむ」

向こうの世界でもミサイルはとて高価な物である。そのファンタジックな魚雷も高いのだろう。人間兵器は人件費のみ。今はただ



乗りしているからタダでこき使える。確かに安い。

「また揺れるだろうけど、この船はそういう船だから気にせず座っておけばいい」

「はい」

揺れ、と言っても立つていられないほどではない。船だと思えば当たり前前の揺れだ。揺れないから気になるだけで、慣れてしまえば料理だって作れるだろう。

とりあえず、言われた通りに、壁際に座っている事にした。

船外に出ての母の一声に、アデイスは頭を抱えた。

「美味しそうだね。大きくて食いがいいがあるよ」

側にいる船員がぎよっとしてネルフィアを見る。色々な意味で厄介なので甲板にいた船員を船内に避難させる。多少の魔術も扱えるかもしれないが、アデイスがいる以上は足手まといにしかない。しかも、もしもの時の目撃者になってしまう。ネルフィアがうっかり火でも吐いてくれたら困るのだ。

人目がなくなると、船内から見えない位置に立ち、それを睨んだ。比較的人の手で迎撃しやすい位置にいるが、大きい。

「あれ何？ ネルフィアじゃないけど、焼いたら美味そうだね」

「何でしょうね。船よりも大きい生物は魔力が無くても魔物とひとくりしているので、海の魔物図鑑を調べれば見つけられるかも知れませんが、海の生物って多すぎて載っているかどうかも分かりませんよ」

「でっかいタコ……かな？ 僕、あれを焼いたの好きなんだ」

「じゃあ、足の一本でももぎ取りますか」

結果に阻まれて何も無いように見える位置で止まっている足を見

上げ、アデイスは弓を構えた。武器の中ではこれが一番得意である。札が貼られた矢に力を込め、放つ。

空気が足を切り裂き、半分ほど切断する。立て続けに二本の矢を放ち、切り離す。それは結界に張り付いて離れない。力がなくなったらゆっくり落ちてくるはずなので、必要な分だけ切つて残りは捨てればいい。ネルフィアなら完食しそうだが。

「よし、残りは引き離しますか」

こういうのは息の根を止めるよりも剥がす事を考えた方が早い。本体は海の中にあるから、伸ばされた足に刺激を与えるしかない。しかし海の生物は痛みには鈍いので厄介だ。

「何本切れば逃げますかねえ」

「大漁だねえ」

「いや、危機感持ちましようよ。うっかりすると竜でも獲物にされますよ」

「確かに、捕まったら最期だね。引き込まれる」

「船の浮力は強いですから、船体が壊れるのが先ですね。魔力で安定しているから、尽きるまではないですけど」

問題は引きはがすことだ。ぎゅうぎゅう締め付けているから、普通の船では沈没している。

だからこの国は他国との交流が難しい。もちろんこんな事が毎回あるわけではない。十回に一回あれば十分脅威である。その十回に一回を引き当てるのが自分らしいと、独りごつ。

だからこうして自分でけりをつけようとしているのだ。

「火で脅しますか」

今度は別の種類の矢を手にする。足に一本、わずかだが水面に出ている胴体に近い部分へと一本。突き刺さると同時に炎を発し、それに驚き一度船から離れて海に引つ込む。

これで諦めればいいが、中には諦めの悪い生物もいる。この生き物は、警戒しながらそれでも船の下に隠れている。この位置に胴体があるなら、先ほど船内を歩いた感覚から、ちょうど良い位置にい

ると言えた。

船外に取り付けられたマイクに向かう。

「クインシー、船の真下にいます。電撃でも食らわせてやってください」

「わかった。おい、聞いてたな。電針出せ。アデイス、そこから魔力送れるから。式の書かれた取っ手あるだろ。握って送れ」

周囲を見回し、すぐ右手に一般人が見たらただの手すりにしか見えない金属がついている。魔力を込めて手を近づけると光って模様が浮かび上がる。

トロアが興奮してそれをつつく。

「あの、加減が必要ですから」

「ええっ」

トロアがやったら、強度によっては魔力が大きすぎて爆発が起これりかねない。少ない魔力を増幅して増幅して放つようになっていなのだ。手加減が出来るならともかく、彼では不安だ。

取っ手に触れ、感触を確かめて魔力を送る。

しばらくの後、一瞬手にばちりと静電気程度の痛みが走る。

「おお、浮いてきた！」

船の後方にグロテスクな物体が浮かび上がっている。

本当に大きい。しかしすぐに遠くなり、沈んで姿が消えた。

「沈んだ？」

死骸が簡単に沈むだろうかと首を傾げた。

「アデイス」

ラゼスが手招きしながら海面を指す。

「なんか、増えてる」

さっきまではいなかったのだが、いつの間にか増えたというのだらう。

「っていつか、囲まれてないか？ 海の生き物って気配が分かりづらいけど、ここまで集まるとよく分かるな。さっきのが死に際に助けても呼んだか？」

頭が痛い。見たくないが、目視する。確かに、ちらほらいる。目を凝らすと増えていく。

「ちよつとヤバくないかい」

ネルフィアですら不安げな様子を見せる事態に、耳鳴りまで始まった。

「クインシー、なんか囲われました」

『だろうなあ』

「だろうなって」

『普通はあんな大きな生き物じゃないんだ。まったく、海はこれだから』

「どうするんです?」

『どすつかなあ』

「ちよ、対策ないんですか!?!」

後ろを振り向くのが怖い。まだ攻撃されていないが、何がきつかけで襲ってくるか分からないのだ。

『いろいろと考えたけど、ちよつと浮かせて殲滅が一番可能性があるけど、下手に落ちたら船が壊れるからなあ』

「ちよつと浮かせるって、飛ぶんですかこの船!?!」

『設計者がほとんど趣味で付けたらしいけど、飛ぶための形とか重量を考慮してないから、全員でかかっても十秒持たないから、攻撃手が足りなくなるんだよな。かといって、浮かせないでやるとこれはこれで船がもたないし』

技術者には趣味人が多いのは確かだ。理論上では飛ぶのだから。

魔術師全員が力を注いで十秒だとしても、役に立つ事もあるかも知れない。自爆しかねない兵器を備え付けるのも同じだ。

成功はこうした不慣れた不成功から生み出されるのだ。

国家予算を使って、彼らも何をしているのだから、とは思わないようにする。その中には、アデイスの弟や妹たちがいるのだ。

「……………そういえば、この船の増幅炉やケーブルはどの程度の強度ですか?」

『数百人規模の術に堪えられるって言うてたけど、ここにはそんなにいないからな。様子を見ながら対応していくしか……』

「こつちで増幅した魔力を流しても壊れないんですね？」

『ああ、大丈夫だろ。そんなのあるのか？』

「今から大量の魔力流すので、様子を見て作戦を実行してください」  
『……分かった。指示を出す』

音が途切れる。その間に指示が出ているのだろう。

しばらく待ち、アデイスはラゼスを手招きした。

「ここを握って、私の合図で魔力を放出してください。とくに小細工は必要ないですから出来ますよね？」

「僕は出来るよ」

ネルフィアがやるのは危険と暗に言っている。だからこそ彼を選んだのだ。

「お、俺もっ」

「トロアさんは、魔力が足りなさそうだったらあつちのこれと同じ物掴んで頑張ってください。まず大丈夫ですけど」

彼らは竜の魔力が並の魔術師の何十倍もある事を、あまり自覚していない。

「あたしは？」

「お母さんは……なにかが甲板まで来たら引っぺがしててください」  
「分かった」

一番の危険要素は排除した。本当はもつと近くて負荷のかからない場所でやるべきなのだろうが、目撃者無しですむここが一番だ。

別の取っ手を見つけて掴むと、魔力を込める。

しばらくすると、本当に浮いた。

浮いて、立っている場所からでは水面が見えなくなって、浮いて、浮いて……かなり高い場所まで浮いた。魔力が流れすぎているかと思つた瞬間、目映い光に包まれた。

## 9話 家族旅行4

聖良は話を聞いていて我が耳を疑い、しばらくすると本当に船が浮き上がり目を見張った。

「けっこう簡単に浮くんだなあ」

クインシーがガラスのはまった小さな窓から外を見て呟く。

甲板にはアデイス達しかいないので、ドラゴンパワーで飛ばしているのだろう。他の皆は各所で攻撃準備に忙しい。

空を飛ぶのは珍しくないが、やはり船が飛ぶというのは珍しく、好奇心から外を見ているとクインシーに腕を引かれた。

「そろそろ来るか」

言い終わる前に窓の外が光った。真っ白だ。雷が落ちた時よりもすごくて、目が眩んだ。

外にいたアデイス達は目が大変な事になっているだろう。魔力を提供したのに災難な目に合っているのだ、絶対に。光源に目を向けているに違いない。目が、目がああとか悶絶している。これは確信だ。

「なんですか……今の」

「この船の最終兵器だよ。周囲の生物を死滅させる。この場合は船の結界の外だな。」

ただ、海中で使うとその効果が船にも及ぶから今まで使った事がなかったんだ。馬鹿みたいだろ」

クインシーは嬉しそうに話す。アデイスや城で出会った子供達も、技術の事を話す時は嬉しそうだ。魔術師とはこういう人種なのだろう。

「なんて意味のない事を思ってたけど、本当に浮かせられるならいいよな。うん。あとでアデイスにどうやったか聞かないと」

アデイスは、今度はどんな嘘を並べ立てるのだろうか。

いつもいつも彼の口から出る、後が大変な嘘には呆れさせられる。

上手い嘘など聖良も思いつきはしないが、もう少し後々が楽な嘘もあるだろう。合わせるのも、覚えておかなくてはならないのも聖良なのだ。

知識もないから変な事を言いそうでもいつも脅えているのを彼は知らないのだろう。

適当に合わせて、で大丈夫だと思っっているのだ。そんな何でもかんでも悟って対応できる賢い女だったら、もっと幸せになれていてここにもいなかっただろう。

アデイスは自分を基準にするから無茶苦茶なのだ。

「あ、降りるな」

クインシーの言葉で窓の外を見ると、ゆっくりと海面が近づいてくる。かなり慎重に降りている。海面が近づくと、先ほどまでいたような気がする、タコのようにもクラゲのようにも見える生物が、もういない事に気付いた。

「あの子達どうなったんですか？」

「消し炭になったんだと思う。そういう兵器だから」

「……………」

「アデイスは害虫駆除にも使ってたから、使い方間違えなければいいんだよ」

なんて恐ろしい方法を選ぶのだろうか。一瞬で毒性はなくなるが、即死するような毒をまいて害虫駆除するようなものである。後には残らないが、恐ろしい。

「クインシー様、もう揺れませんか？」

調理師の男性が身を乗り出しておたまを振る。

「ああ、もう問題ない。この区域を早々に離れるために速度を上げるから多少は揺れる事もあるが」

「そうですか。揚げ物は控えた方がいいでしょうかね」

「フライヤーの中身が飛び出る事はないだろう。問題ない」

クインシーは揚げ物が食べたらしい。調理師はまったく言いながら調理を再開している。

聖良も手伝いを再開しようかと思ったが、それよりも先に男の人達がたくさん食堂に駆け込んできた。

「クインシー様、こわかったああああ」

「なんだったんすかあれはっ！　しかも本当に飛んだっ！　飛んだっ！！　飛んだっ！！！！」

「今日まで技術連中の誇大妄想だと思ってましたよ」

脅えて泣く者、混乱している者、ただ驚いている者、様々だ。冷静な人達は持ち場にいろのだろう。

しかし、身内にも誇大妄想とされていた技術者達が哀れだ。魔力があれば可能だと証明されなければ、この先ずっとそう思われていたのだろう。

この先人間だけを乗せているのでは二度と飛ばないだろうが。

「セーラ、セーラ」

アデイスの声がまた届く。

無線機のような物の前まで行き悩むと、クインシーが操作してくれる。

「何ですか」

「おかつ……ネルフィアさんが、海鮮焼きを食いたいそうなんですけど」

「はあ」

「この足、どうすればいいかなあって」

「足？」

「最初の奴の足があるんですよ」

聖良はこめかみを押さえる。

あんなのを見て、食べたいと思うのか。どういう趣味をしているのだろう。アデイスもゲテモノ食いなのだろうか。いつも聖良が美味しいという物を美味しいと言うから味覚や食べ物に対する趣味はそこまで離れていないと思っていたのに。

「あんな大きな生き物、大味で美味しくないですよ」

「でも食べたがってるんですけど」



「じゃあ、ミンチにして練り物にしましょうか。そのまま食べても美味しくない魚だって、酒ぶっ込んですり身にすれば美味しくなりますから」

『任せます。一部切り取って持っていきますね』

皆、拍手喝采。

海の男の食指が聖良には理解できなかった。

ベッドに座り、もらったばかりの温かいお茶を、両手に包んでため息をつく。

今日は疲れた。

昼頃はアデイスが疲れていたが、午後は聖良が疲れた。

あのイカタコ、アンモニア臭いのだ。固いのだ。試しに味見をしたら泣きそうになった。

聖良が手動フードプロセッサーでミンチにし、調理師の男が頑張っ  
て臭みを抜いた。その手動というのが、手で回すとかではなく、  
手で魔力を注ぎ込むという、すごいのだかしょぼいのだか分からない  
物である。

アデイスが側にいるので聖良でも動かせたが、大量にあるから大  
変だった。団子にするのも大変だった。ネルフィアのためにハンバ  
ーグにもした。大変だった。

アデイスはアデイスで大変だったようで、ベッドで呆けている。  
クインシーに説明を求められ、アイテムをうっかり海に落とすしち  
やっただと言いついていたのは聞こえた。そんな貴重なものを落とす  
とはと首を絞められたり大変そうだった。

「二人とも若いのに疲れた顔を……」

二段ベッドの上にいるトローアが暇そうにしながら言う。

「三人はぼーっとしてたじゃないですか」

「セーラを手伝ったぞ」

「ラゼスさん以外は邪魔だったんですよ」

「ああ、あれは邪魔そうでした」

団子を丸めさせればサイズがめっちゃくちゃで、玩具にするし、最後の方はまた変なのが出てこないか海を見張っていると言いついた。明日も船の上だと思つと、少しうんざりする。

「港についたらどうするんですか？ 聖都までどれくらい掛かります？」

「手続きをしてそのまま一泊してどんちゃん騒ぎをして、悪朝出発して、夕方までには到着ですね」

「……騒ぐんですか？」

「船だとしても何人かは見張りとか舵取りが必要ですから、全員で騒げないですし、仕事で浮く聖都では騒ぐ事も出来ませんし。」

船員の半分は港に残りますしね」

「どこの世界も国も騒ぐのは好きですねえ」

酒を飲んだ事がない聖良は、わいわいと飲み食いするのが苦手だ。食事は落ち着いて静かにしたい。

「そういえば隣は静かですけど、お母さん達、仲良くしてるかな…」

「仲良くはしてると思うよ。幼馴染みだからな。ガキ大将と首に縄つけられた子分って感じだけど」

トロアが二段ベッドの上の段でごろごろしながら言う。

ラゼスが少し情けない。確かに人間でもそんな感じの男女はいる。大人の夫婦にもいる。

それが情けない。

「アデイスは母親似だな」

「そうですね？」

アデイスは少し嫌そうだ。ラゼスのようにはつきりしないタイプではないので、その点ではネルフィア寄りだろう。

「見た目と知的なところはそりゃラゼスだけど、乱暴さを抜きにしたら、性格はネルフィだろ」

「確かにそうなんですけど、お母さんは乱暴でなければお母さんではないというような気がします」

「その通りだけどな、お前にまでそれを言われるような生活してるのか、ネルフィ」

「私達には乱暴はしませんよ。それ以外に対する攻撃性やがさつさは見ていれば分かります。セーラの方がよほど母親らしいですし」

里の竜達も普通に料理を食べていた。人間よりははるかに食べるが、身体に見合う程ではなく、日本にいた時に見た大食い選手の方がよほど食べていたような気がする。ネルフィアはその中でもたくさん食べるらしく、毎日のように狩りに行くが、それは好き嫌いがあり美味しい部位しか食べていないからという事もある。捨てるならくれと一部をもらっているが、それでも食べきれないため、他の動物が食べそうな場所に捨てている。野生動物はきつと綺麗に食べてくれているだろう。

帰ったら自分もフードプロセッサー他の便利な道具が欲しいなと思いつながら、お茶を飲んでいると、ドアがノックされた。

「アデイス、起きているか？」

「クインシー………ったく」

アデイスが嫌そうな顔をしてドアに向かい、ドアノブに手をかけると笑顔になった。とても作り笑いには見えない、爽やかな笑顔だ。「何ですか？ 今、大切な話をしていたんですけど。将来の事とか、色々」

「いや、ちょっと聞きたい事が出来て」

出来たという事は、増幅がどのといったアイテムとは別だろう。もしも続きだったらアデイスの機嫌がますます悪くなるのでやめてほしい。彼は機嫌が悪くなると癒しを求めて聖良に悪戯をしてくるから嫌なのだ。撫でられるだけならともかく、口も出てくる。気色悪いほど褒めて褒めてキスをしてくる。そう、完全に小動物扱いだ。

「さつき港に連絡入れたらさ、お前達を乗せているかって聞かれて、乗せてるって答えたら迎えに来るってさ」

アデイスが振り返って聖良を見る。

可能性は一つしかない。

ミラが不機嫌なのだ。

不機嫌すぎて、聖良という手綱をユイ以外が求めているのだ。基本的に命令に縛られて、襲われなければ暴力は振るえないので、他の人間がミラノ不機嫌な様子を見て、勝手に脅えているだけだろう。「着いたら分かると思うんですけど、殲滅の悪魔がセーラの事を気に入ったらしくって」

「はっ!? 殲滅って、あのいつも不機嫌そうなピリピリした女だろ!?!」

「私は生き生きと喧嘩したり、セーラにデレデレしているところを見るのがほとんどで、そういう姿はあまり見てませんよ。ちょっと強すぎて乱暴だから怖いですけど、極端に素直な子という印象です」  
クインシーが後ずさる。

「マジで?」

「何かされたんですか?」

「何もされなかったのか?」

「……………肩を刺されて踏みつけにされただけですな」

「お前、それを笑って流せるほど。俺の知らない所で怪我してるのか?」

アデイスは笑って誤魔化す。

あれは怖いが後腐れのない怪我だった。本人に悪気がないのだ。むしろ聖良を助けようとしてのこと。ミラを恨むには相手が強すぎるから、笑って受け流すしかない。

「どうやってあれを懐柔したんだ? あれは女子供も関係なく殺すぞ」

「でもペットを愛でる気持ちとかもちやんとありますよ。」

皆が腫れ物扱いするのが悪いんですよ。普通に接して、変な事を

しなければいいんです。そうしたら、甘い物が好きな、オシヤレをしてはにかむような可愛い女性ですよ」

「嘘だ。あの女がそんな……」

「どうせ変な風に声をかけたんでしよう。ああいう人は係わらないのが一番なんですよ」

「お前、さつきと言っている事が……」

「彼女が恐れるのは極端に言えば注目される事です。敵意を持たれば身を守るために殺して、恨みを買われるから目撃者も殺す。でも恨みを持たない相手と分かれば何もしません。」

私達のように世間や他人に振り回されて多少の事は水に流すようなタイプなら、安心して側にいられるようですよ。

つまり、恐れをもってして気をかけている以上は、いつまでたっても殺害対象なんですよ」

クインシーが悩み始めた。

きっとアデイスに対してそれでいいのかと思っているのだろう。聖良ですら聞いていてそれでいいのかと思わなくもないのだから。

「天災は避けられない事です。死んでも仕方が無いぐらいに考えると、案外死なないものですから、見つけてもあからさまに警戒しないで、普通に通り過ぎればいいんですよ」

「その年で悟りきるなよ。まだ早いだろう」

「私よりもセーラの方が悟ってますよ。ああいう方に懐かれていますぐらいですから」

けなされているような気がするのだ。

我慢などしたくないし、忘れて目をつぶって水に流したくもないのだが、やられた事を直視して怒ったりするのは苦手なのだ。

「しかし猛獣使い扱いで勝手に予定を変えられるのは不本意ですね。あとでこちらを利用できない厄介な人材だって分からせないと……」

「何をする気だ」

「そちらには迷惑をかけませんよ。いつそ、ずっと新婚気分でない

「やいちゃしてましようか？」

「やめてくれ頼むから」

「冗談なのに……」。

「まっ、適当に危険人物扱いを受けますよ。セーラは話しているだけでもう危険人物っぽいですし」

「危険人物だと思っただけの発音なのだろうが、話すだけで気味悪がられるというのも悲しい。」

「頼むから、普通にしてくれよ」

「もちろんですよ」

「嘘くさい言葉だ。ミラに会うだけで既に珍獣扱いされそうなのに、本当に珍獣四匹と異世界の人間一人なのだ。まともな人間がいないという事実がある。」

「クインシーに心配をかけている事が、とにかく心苦しかったが、きつと騒がしくしてしまうのだろう。」

「それでも、怪我と誘拐だけはされないように気をつけるつもりだ。本当に、怪我だけはしないように気をつけよう。」

港に着いた翌朝、本当に神殿からの迎えがやって来て、朝食も食べる間もなく連行された。途中で買った魚の揚げ物とパンと水を、朝食件昼食として、馬車の中で取った。クインシーが文句を言わなければ、これさえなかったかもしれない。

日が傾いた頃によくやく神殿に到着し、未婚の女性は出入り禁止のはずの男街に普通に入り、普通に男神殿に到着した。

ネルフィアは人妻として。聖良は子供として。  
なんだかとても腹が立った。

それを察しているのか、アデイスが気にしている様子だが、その態度がいつものごとく腹が立つ。

男神殿は、白が基調の石の建物だ。どこその大聖堂とギリシャ神話に出てくるような神殿を足して割ったような立派で見物しがいがある建造物だ。

柱の一本一本に細かな彫刻が施され、天井まで続いている。質素とはほど遠い、絢爛豪華な造りはいかにも宗教関係の建物である。

緊張した様子の中年神官に案内されどこかに向かっていると、アデイスが足を止めて聖良の肩を抱いた。何事かと思うと、上から声が降ってきた。

「セーラ！」

ミラの声だった。間違いなく、彼女の声。

上向くと、梁に隠れていたらしきミラが降ってくるのが見えた。視界からあつという間に消え、気がつけば後ろから抱き上げられていた。

人形の気分である。

「セーラ」

まだ別れてそれほど経っていないのだが、そんなに浮かれるほど

待ち遠しかったのだろうか。

「ミラさん、セーラが困って回りが脅えているので落ち着いてください。セーラは持ち上げられるのがいつぞやの変態のせいで苦手ですから」

アデイスの説得でミラはおろしてくれる。

おろして、頭を撫で始める。

みんな同じだ。それほど撫でやすい位置にこの頭はあるのだろうかと内心で愚痴りながらも、そんな事はおくびにも出さず振り返る。ミラ相手に、アデイスのようにには怒れない。怖いから。

「こんにちはミラさん」

「こんにちは」

「ずっとあそこで待ってたんですか？」

「そう」

「退屈だったんですね」

「そう」

彼女は上機嫌だ。周囲はかなり引いている。彼女の上機嫌が珍しいのだろう。

「途中で美味しいお菓子を買ってもらったから、ユイ君達と食べましょう」

「ユイ、いない。仕事」

「ミラさんは行かなかったんですか？」

「悪魔殺してすぐに戻ってきた。事後処理、一緒にいても退屈」

ひよっとして、希望を持たせたからご丁寧に待っていてくれたのだろうか。それに恐怖を覚えた神殿の男達が焦っていたと、そういうことだろう。聞いてみない事にははっきりしないが、そんな空気が。ユイと一緒にいれば違ったのだろうか、今は彼女が一人で、ユイが不在。

皆が脅える気持ちだけは理解できる。

「ユイ君達はいつ戻ってくるんですか？」

「知らない」



「じゃあ、先に食べましようか」

ミラはごくごくと頷き、聖良の手を取って歩く。

アデイスが顔を引きつらせるクインシーに別れの言葉を述べて、ネルフィア達を促し付いていく。

前方にいた案内の神官が壁にびたつと引つ付いて道を空ける。行く道を塞ぐ人間、魔物は皆その調子だ。

普通に魔物がうろろしているのに少し驚いたが、神子とやらがうじゃうじゃいる場所なので当たり前の光景なのだろう。彼らにこの反応をさせるミラが当たり前でないだけだ。

「なんか、ユイが大袈裟なのかと思っていたら、みんな大袈裟に恐怖しながら感動してますね。普通の女の子みたいだって」

アデイスが皆の様子を見て言った。

「彼らにしてみたらきつとネルフィがしおらしいぐらい珍しい事なんだよ。ネルフィが乙女チックになったら、僕だってビックリするよ」

「あたしもびつくりだね」

本人も認めるほどだから、ネルフィアに『女らしさ』などはないのだろう。ミラは周囲の言葉などに気にせず、浮かれた調子で他人を壁に張り付かせながら進み、ある部屋の前で止まり、ポケットから鍵を取り出した。

鍵というものが、あまりにもミラには似合わなくて意外だった。

鍵を開けて中に入ると、立派なりビングだった。

「ここは？」

「ユイの部屋。部屋が五つある」

「い、五つ？　なんでそんなに!？」

「神子、普通はペットがたくさんいる。だから一人一人の居住区広い。力が強くなるとどんどん広くなる」

扉の間隔が長いとは思っていたが、まさかそんな事になっているとは。

「ユイ、三人しかいない割には広い部屋使ってやっかまれている。

「一部屋余っているし、ユイ達いないから好きに使い」

ユイが帰ってきたらどうするのだろうか。聖良は間違はなくミラに拘束されるように部屋に連れ込まれるのだろう。森でもそんな感じと一緒だった。だから少しだけアデイスが拗ねていた。

ミラはあまりべらべらと話すタイプでもないのに一緒にいても苦痛はないが、すっかり迎えにきた神官の思惑通りになっているのだと思うと、少し腹が立つ。彼等の安心のために、聖良は馬車で尻を痛めたのだ。

しかしここは目の前の事をどうにかしなければならぬ。

「お茶を淹れますか？」

「お茶淹れる」

珍しい事を言いながら、ミラがキッチンへと向かう。

食材を持ち込めば立てこもれそうな、立派なキッチンだ。ミラが湯沸かしポットのような物を操作しており、聖良は驚いた。

「あれなんですか？」

「うちの国の特産物ですよ。湯を沸かして保温できるんです」  
アデイスが答える。

まさしく湯沸かしポット。どんなにファンタジーな世界でも、やはり技術は生活に便利なように、機械で出来る事と同じ方向性に発達していくのだと感心した。

おかげで聖良は大して混乱もなく過ごしている。理解に苦しむような効率の悪い方向に技術が発展し、理解できない事を理解してもらえなかったらノイローゼになっていたかもしれない。

「このお茶、美味しい。セーラのために用意した」

「ありがとうございます」

退屈なので買い物でもしたのだろうか。お茶を買うとは成長したものである。

「なあなあ、お茶もいいけどあとで探険したい！」

トロアが浮かれた様子で他人の部屋を見て回りながら言う。

「これを食べたなら案内する」

ミラは得意げに言うが、絶対に行く先々で嫌がられるだろう。パニックにならなければいいのだが、ミラも普通に接すれば普通の女の子だと理解してもらえる可能性もある。ここに友達の一人でも作れば、聖良も必要なくなる。しかし、なかなか難しい話だ。彼女と向き合うには、いろいろなものに堪え忍ぶ必要がある。目の前で凶悪そうな魔物や人間が、片手でひねり潰されても、笑っていられるような忍耐力が必要なのだ。これを他人に求めるのはなかなか難しい。止めるにしても言葉を選ばなければならぬから、ストレスが溜まる。聖良は、彼女の扱いには慣れたが、切られても簡単には死なず、普通の人間ほどの彼女に対する恐怖がない事が要因だろう。

「じゃあ、食べましようか」

おやつの中には少し遅いが、小さな焼き菓子がぐらいなら、夕飯前に食べても問題ないだろう。

街の観光は明日という事になりそうだ。

すべての人が自然に道を空けてくれるという光景を、聖良はここに来て生まれて初めて目の当たりにした。皆が壁に張り付くから、それは見事な道っぷりだ。

その道を譲ってくれる人々は、ミラに対して恐怖し、手をつないで歩いている聖良には驚愕する。

ミラは珍獣扱いなのだろう。怖がりながらそれでも見ている。道を作られ、ひたすら背中を見つめられる。ついでに聖良と、その後にくく竜達も。

「ここ、聖堂。一般人は休日しか入れない。あの扉の向こうまで」  
外は礼拝堂にでもなっているのだろう。お布施を回収する所はあるはずだ。宗教とはつまり金である。少なくとも、聖良はそう思っ

ている。教主とは金銀財宝に埋もれているのだ。しかもここだとほとんど不老に近い。

金持ちめ、憎らしい。

「立派ですねぇ」

立派すぎて腹立たしいのだが、そんなことはおくびにも出さないそれが大人の女というものだろう。

「あそこの壁をくりぬいて彫られた像の顔がありませんけど、何か意味があるんですか？」

「あれ、私が壊した。壊れやすいから無駄が多い。どうせ形だけのくせに」

光景が目には浮かぶ。壊して、ユイ以外誰も叱れないのだ。仕方がないからユイが厳しいとは言えない調子で叱る。もちろんミラは反省しない。

「でも、こうやって立派な聖堂があるからこそ、がっぽりとお布施を落としていくんですよ。権威は見た目からです」

「なるほど。見せ物小屋と同じか」

「そうです。宗教なんて、それらしい見た目と洗脳とパフォーマンスです。金目の物は壊しちゃいけませんよ。ミラさんも今はそれでご飯食べるんですから。」

苦勞して職人が作った刃物を、用途以外で壊したらもったいないでしょう」

「わかった」

納得してくれた。食べ物か刃物を引き合いに出すと彼女は納得してくれるのだ。ちなみに彼女は鍬や斧でもこれを通じる。

こんな事を理解していくから、猛獣使い扱いされているのだろう。この連中もミラに刃物を買えばいいのだ。きつと機嫌がよくなり、くれた相手に好意を持つ。刃物を持たせるのは怖いだろうが、どうせ初めから持っているのだ。数が増えても持てる限界は変わらないので、危険が増えるという事もない。

「セーラは面白いこと言うなあ」

壊された石像をこんこん叩いていたトロアが振り返って言う。

「相手による言葉の選び方がなんとも絶妙なんですよね」

「ネルフィの扱いも上手いよな。こういうタイプの女の扱い方をラゼスも見習えよ」

「ははは」

トロアとアデイスが気楽に言う。ミラの説得はさすがに聖良だつて緊張するのに、暢気なものだ。

ミラに手を引かれ、聖良はさらに奥へと進む。

「セーラ、あれが、神様」

神様で思い浮かぶような像ではなく、もっと抽象的な、前衛的な、像と言うよりもオブジェのような物体である。

そう、まさに物体という感じだ。

「こんな偶像は初めて見ます」

「神、形ない。いろいろ。各地で神と崇められているのはすべて同じ神。名前と姿が違うだけ。だから定まった形のないものを表現している。」

と、ユイが言っていた。どうせなら美人の女神像にすれば人がもっと人が来るのにつて」

ユイでもそのような事を言うのだ。少しショックである。男はどんなに真面目そうに見えても、考える事は同じなのだ。なぜだか無性に悲しく、裏切られた気分になった。脅える姿と泣いて喜ぶ姿と無邪気な姿に騙された。

もちろんそんな事は口にしない。ミラに変な事を植え付けてはいけないから。

「確かにこの前衛的な芸術系のオブジェをわざわざ拝みに来るのも何だかなあですね」

「セーラ、聞こえてますよ」

アデイスに言われて、遠くからこちらをのぞき見ている男達を見た。目が合った瞬間に引つ込む。

聖堂なものには彼女たちだけだ。ミラが現れた瞬間、人々は壁

伝いに逃げたから。

だから心おきなく話していた。

「あの人達は何がしたいんでしょうか」

「怖いけど心配だから見たい、見たいけど怖いって事じゃないですか」

「あんな距離、ミラさんなら一瞬で追いつくから離れるだけ無駄なのに」

「あの位置は壁とかの関係で心が安まるんですよ。そつとしいて差し上げましょう」

思い切り避けても、普通に避けても同じと分かっているが思いきり避けているような情けない連中だ。聖良はそれ以上は視界に入れないように心がけた。

「ミラさんは取って食うわけでもないのに」

「扱い方を間違えなければ危なくない、むしろ便利な道具も、危ないという印象が先走って嫌われる事がありますから」

いきなり肩を抱いたり、後ろからそつと忍び寄れば殺されるだろうが、すれ違うぐらいで怒るはずもないとは思わないのだろうか。

恐怖は伝染する。皆が脅えるから脅えるのだ。

「セーラ、こつち食堂」

食堂の次はいきなり食堂。実にミラらしい。

「食堂かい。あれはいいね」

船の中の食堂が気に入ったネルフィアは乗り気だ。手を引かれて行くと、食堂ではなく厨房へと案内された。いつも食べ物を作っているから、キッチンが好きなのだと思われるようだ。聖良は料理が好きなわけではない。自分がやらないうるくな食生活が望めないから料理をしているのだ。もしも彼女自身が一攫千金で大金持ちになったら、使用人を雇って炊事洗濯をしてもらう。

料理など、しなくていいならしない生活の方がいいに決まっている。アデイスに我が儘を言えばそれぐらいは可能だろうが、それは聖良の力ではないので肩身が狭くなる。

「ん、なんだミラか。今日はもう切る物ないぞ」

ユイは、ミラのストレスが溜まると厨房にやって肉や野菜を切らせてもらっていると言っていた。比喻でも冗談でもなく、本当の事だったようだ。

「つて、その女の子はどうしたんだ」

「友達」

「友達？ そっか、女の子の友達が出来たのか。よかったな」

にっと笑う厨房の男性達。

ユイに心配されていた割には、ちゃんと知り合いはいるらしい。彼らも聖良に近い気持ちなのだろうか。あんまり近づくと怖いけど、あまりにも生き方が不器用でほっておくことも出来ない。扱いを心得れば危険でもないし、役にも立つ。

「じゃあ、今夜は祝いに偉いさん用につくったデザートのアまりをやるな。形はあんま綺麗じゃないけど、味はかわらねえしな。特別だぜ」

ミラはこくと頷く。

このコック、やはりミラの扱い方の基本を心得ている。聖良の存在がこれほど珍しがられるのに、彼はそうでないのだろうか。同性であり、友人であるのが彼らにとっては大切なのだとしたら、見る目がない。

「ところでユイ様はどうした？」

「ユイ、事務処理。置いてきた」

「ははっ、相変わらずだな」

ミラは薄く笑い、聖良の手を引いて厨房から出る。

連れ回すのが楽しそうなので黙ってついていくが、そろそろアデイスが飽きてきている。口にはしないが、聖良の髪に触れたり、退屈している時の行動を取っているのだ。しかし他の竜達は大きな建物の中をうろつろするだけでも楽しいらしい。

ミラとネルフィアさえ満足してくれていれば危険はないので、ここはどこまでも付き合っしかないのだろう。

新しく手に入れたペットを見せて回っている雰囲気はあるが、相手はミラ。聖良もアデイスも甘んじるしかない。

神殿に帰つてくると、まるで初めてミラが来て数日後ぐらいの状態に戻ったかのような混乱状態であった。あの時は神子の中でもかなり上位クラスの男が使役する悪魔を、ミラが殺さない程度に串刺しにしていた。人間なら確実に死んでいる、悲惨な姿だった。

今日は何だろうと恐る恐る聞くと、ミラが神殿中を数人の人間を引き連れて歩き回っているのだという。しかも手をつないで上機嫌で。それが恐ろしいらしい。この世の終わりだと脅えている者もいるそうだ。いくら何でも失礼である。

「セーラだね」

「この世でミラさんにその反応をさせられるのは彼女だけじゃないかな」

「混乱が大きくなる前に回収しないと……」

「もう大きいよ」

皆の行方を聞きながら走る。疲れているが走る。セーラが可哀相だ。アデイスもいるだろうが、あの二人の不運っぷりをしばらく目の当たりにし続けてきた身としては、とてもではないが放置できない。

森の中で暮らしていた頃、ミラが仕掛けた罠に、二人はことごとく引つかかっていた。そのため事前にどこに仕掛けたか聞いて、その方角には行かないように気をつけていたのに、風で飛ばされた洗濯物を追って罠にかかるという、そんな人達だ。

落とし穴の中で身動きできずに「何が悲しいかって、自分の間抜けさが悲しいんですっ」と泣いていたセーラを思い出す。あれは切



なくなつた。

ユイはセーラを助けるべく、様子のおかしい神官を見つけては声をかけた。

「あの、ミラを見なかった？」

「あ、あつちに」

「この先つて、宝物庫があるような気がするんだけど……」

ここに立っているという事は、彼等は許可がない者を追い返すためにいるはずなのだが。

「だだだ、だつて、止められるはずがっ！」

それはそうだが、他に見知らぬ者もいたというのになぜ通すのか。ユイが攻撃されない限りは危害を加えてはいけないという命令をしている事は有名だ。

「部外者がいたのに、何を考えているんだっ！ ミラも悪いが、君も悪いぞ！」

ユイは舌打ちして男の脇を通り抜け先に進む。

行く先々で同じやりとりをして血管が切れるかと思つた。

確かにミラは強い。悪魔や竜も殺すというのは、神子にとつても脅威だ。しかし彼女は鞘に収まつた剣。抜く許可を出していない。許可を与えるのは襲う馬鹿だ。皆知っているのに恐れる。

「意気地のないっ」

セーラを見ていてつくづく思うのだ。

不死身に近いからだとはいえ中身は普通の女の子だ。痛みはある。すぐに抜く事も、剣を振るう事に躊躇がない事も、人を殺す事も、竜とまともにやり合える事も知つている。

実際に目の前で人を殺すところを見た事はないので実感がないのかもしれないが、それはこの者達も同じだ。ミラがここで殺した数など、片手で足りる。その殺された者は殺されるだけの事をしたから殺された。

恐れる者達はただ意気地がないだけなのだ。

「まったく」

宝物庫にたどり着き、脅えて中の様子を見ているだけの守衛を睨み付けた後に中に入る。

ミラがいた。セーラがいた。アデイスがいた。その他の竜達もいた。内一人の女性は知らない。

赤毛の大柄な女性だ。なかなかの美人だが、どうにも誰かを思い出す。

彼らは何とかという昔の偉い人の甲冑で、無邪気に遊んでいる。誰だろう。

いや、考えるまでもない。

「……………ネルフィアさん？」

名を呼ばれて彼女はユイを見た。

「おや、帰ってきたのかい！」

にっと笑う。人の姿でもワイルドで逞しい。

「……………なんでネルフィアさん達までっ」

この世の恐ろしい女の上位二人が揃っている。ミラには首輪があるが、赤の魔王にはそれが無い。中には本能的に悟って逃げまどっていた者もいただろう。そういう者には、悪い事をしたような気分になる。竜がこれだけいては正体を見抜くまでは無理でも、冷静ではいられないのも頷ける。

「いちゃ悪いのかい？」

「いや、てつきり二人で来ると思ってたから」

まさか、このトラブルの元を連れてくるとは思わなかったのだ。

なぜ来たかは、聞くまでもなく理解できるが。

「子供達だけで遠出なんてさせられるはずないだろ。常識を考えな普通の子供だけよりもネルフィア込みの旅行の方が心配だ。その上、二人は普通の子供ではない。セーラは普通かもしれないが、アデイスは普通ではない。世慣れしすぎている子供だ。」

「……………でも、なんで宝物庫に」

「ミラが案内してくれたんだよ」

ちらとミラを見ると、彼女は大好きな聖剣を見つめていた。彼女

はこれが好きで、時折これを見に来ている。八ノに連れてきてもらっているので守衛は知らないだろうが。

それでいいのかともたまに思う。

「ミラ、ここは部外者は立ち入り禁止なんだよ」

「なぜ？ 取らないのに」

「壊れたら洒落にならないからね。神殿の宝物庫なんて、僕には価値が分からないけどすごい物ばかり置いてあるんだよ、きつと」

目の前にしても価値は分からないので、曖昧に言葉を濁す。

しかしアデイスは内の一つの皿を叩いた。

「大したことのない物ばかりですよ。これなんて、多少の金持ちなら簡単に買える物です。一晩カジノで遊べば簡単にお買い上げ出来ます」

アデイスはとても子供とは思えない発言をする。

「その聖剣とやらも偽物でしょう。剣自体は業物ですが、肝心の石が偽物です」

アデイスは大人びた表情で、皮肉るように笑う。

彼が知り合いでなければ、きつととてつもなく怪しく、何か企んでいるように見えた事だろう。

彼はごく稀に、黒幕めいたやたらと黒いヴェールに包まれているように見える気がするのだ。何かと知りすぎているからそれが余計に目立つ。

魔術師アデイスとは、これ以上に黒い物を腹に抱え込むような人物だったのだ。竜のアデイスはまだ子供だから、それが透けて見えるので多少は安心できるのだが、それが透けなくなつた頃が心配だ。「たぶんここ、多少高い物とよくできた偽物が置かれている場所ですよ。きつと本物は別の場所にある」

「ええっ!？」

そんな場所があるなど聞いた事がない。ユイはまだ若いから信用がないので教えられていないだけかもしれないが、それらしき場所も知らない。

「ここが神殿で、クインシー達に連れられたのでなければ探し出していたところですが 敵に回しても厄介ですからね」

ネルフィア達が興味津々なのだが、アデイスは気付いていない。あの好奇心の強い竜の前でろくでもない事を言ってくれる。気を逸らさなくては。

「そ、そうだ。夕飯を食べたら街に行く？ 遊ぶところも多いんだよ。さつきアデイスが言っていたカジノとかは、男街が一番多いんだ」

ネルフィアがきよとんとしてユイを見る。

竜には無縁の場所だった。彼女では存在自体知らないだろう。知っているアデイスがおかしいのだ。

「ネルフィ知らないの？ お金をかけてゲームをすることでよ。やった事ないからよくかわらないけど、お金を増やす事も、破産する事も出来るんだって」

ラゼスは知っていてくれたようで、自分なりに説明を始めた。「楽しいの？」

「さあ。そういう場所があるって事以外はよく知らないよ」

ラゼスですら存在しか知らないのだから、ネルフィアが知らなくて当然だ。他に何か彼女が食い付きそうな楽しいことはないだろうかと考える。

「カジノですか。資金を稼ぐのにいいですね」  
アデイスが皿を元に戻しながら言う。

「し、資金？」

「国では出入り禁止扱いなんですよね」

「出入り禁止？」  
「セーラ、たつぷり稼げたら、君の欲しがっていたもの全部プレゼントしますよ」  
ユイと似たような表情で固まっていたセーラは、額を押さえて首

を振る。

「私が欲しいって言った物、覚えてます？」

「オーブンに圧力鍋に食器に……調理器具ばかりですね」

「お金の問題と言うよりも、運ぶのが大変だから買わない物ばかりですよ。食器なんて、まだ自分で木で作ったり、土器でも焼いた方がいいですよ」

竜の背中を持ち帰るなど、どれだけ割れるか分からない。オーブンなど、くくり付けるのも大変だ。セーラが乗れなくなる。

「宝石とか、ドレスとか」

「いりませんよ。あ、オイルとかは欲しいです。お化粧水に入れるオイルとか、いい香りの精油とか」

彼女はハーブを煮出して肌に塗っている。どんなに見た目が幼くとも女の人なのだと感心したものだ。あの肌の美しさも、そんな努力の賜なのかも知れないと。

ミラにも見習って欲しい物だ。

「このカジノにドレスコードはないんですか？」

「場所によるよ」

「セーラの服は正装でも通用するでしょうか」

セーラの服を見る。

きつと高い服だろう。彼女の髪に合わせてか、黒が基調の可愛いワンピースだ。子供のよそ行きの服としてなら、十分だろう。

「問題ないと思うよ。ただ、入れるかどうかが問題で。子供を預かる場所もあるからひよっとしたら……」

ひよっとしたらそこに押し込められる可能性もある、という言葉を飲み込んだ。

セーラが先ほどから瞬き一つせずに睨み付けてくる。彼女のコンプレックスは理解しているが、子供に見える事実は覆らない。

「でも、セーラぐらいの子だと、大人について見ていたいということも可能だと思うよ」

子供扱いだと認識されているらしく、じとつと睨まれる。諦めと憤怒が入り交じった、複雑な視線。彼女のこれは気にしていても仕方がない部類の恨み言だ。彼女自身も理解している。

「その前に軽く夕飯食べようか」

「……そうですね」

セーラが視線を前に向け、宝物庫を出ていった。不機嫌だ。彼女を不機嫌にさせるとミラまで不機嫌になる。

「明日はトワナ……夫婦街に行こうか。あっちならもつとセーラが喜びそうな可愛い店もあるからね。本当は女街に行ければいいんだけど」

行けない事もないのだが、子供と女性と隠れ住むようにしているその伴侶がいるようなところに、行って落ち着けるはずがない。

「ユイ、明日は暇なのか」

「僕以外に出来る事は他人に押しつけたよ」

捕獲出来れば有り難かった魔物がいたのだが、抵抗されて神子が一人殺された。その場に、それを使役できる人材がいないので殺した。

ただそれだけだから、ユイがしなければならぬ事は少ない。殺されたのは気を抜く馬鹿が悪い。

「だから、しばらくはゆっくり出来るよ」

ミラが嬉しそうに笑う。

セーラがいると、彼女は本当によく笑う。笑う彼女はとても魅力的だと、脅えるだけの皆にも知らしめたいのだが、難しそうだ。

カジノ、というのは聖良が想像していたのとは少し違った。

彼女の知るカジノはゲーム内にあるようなもの、映画に出てくるようなもの。はっきり言えばラスベガス。

しかし始めに足を踏み入れたのは、賭博場といった雰囲気のない狭いところだった。

テーブルでさいころを振っている。ルールを知らないのので何をしているのかさっぱり分からなかったが、やはり想像と違う。

「しよっぱなから違法賭博に……」

私服姿のユイが隣でブツブツ言っている。ここを選んだのはアデイスだ。彼は「お金が私を呼んでいます」と、ここに入った。

彼が、初めての場所で、自らここを選んだ。

「違法なんですか？」

「神殿で許可されないダメなんだよ」

「ほつといていいんですか？ 問題ないですか？ 後で大変な事になりませんか？」

「いいんだよ。ここは違法って言ってもまともなところだから。素人がやってたら通報するけど、薬を売り始めたりしない限りは面倒だから見て見ぬふりが一番だね」

ゲームの内容もよく分からないので、隠れ蓑であるバーでジュースをもらって飲む。

そうしていると、アデイスはにんまりと笑いながらすぐに戻ってきて、明らかに多めの代金を支払って店を出た。

「勝ったんですか？」

「ええ」

「奇跡ですね」

ついてない人間の代表のような彼でも、ギャンブルに勝つ事がある

るのだ。

「奇跡だなんて……私は金運と悪運はいいですよ。お金に困っていたりしないでしょう?」

そういえば彼は裕福だ。組織も私設して潰れていない。聖良と違って、お金がある。聖良はお金が一番なかったのだから、この差は大きい。

いや、違う。

アデイスには才能もあつた。聖良よりもよほど恵まれた金運と才能。この二つがあるのだから、十分だろう。本当に運のない人は、完璧な条件がありながら、夭折してしまうタイプの人だ。

しかし人間のアデイスは死んでいるから、それも当てはまるとも言える。

どこまで奇妙な生き方をしている男だろう。

「アデイス、そんなことに運を使っているのか? 運を使いすぎる、後でしつぺ返し来ないか?」

女性だからと顔を隠す格好をしたミラが言う。ネルフィアも神殿の外に出るならと、同じヴェールをつけており、時折鬱陶しそうにしている。

「ミラさんが迷信めいた事を言うなんて珍しいですね」

「猪を避けた先にあつたくほみに足を取られて崖から落ちる奴、反動で死なないか心配」

それはミラにすら心配されるほど異常な光景なのだ。聖良が知らない所で、アデイスがそんな目にあつていたとは思わなかった。聖良が外に出ると危ないからと、薪を拾いに行く程度だと留守番している事も多かったのだ。

「大丈夫ですよ。賭け事をしてもしなくても私生活は変わりませんから。だつたらお金は稼いだ方がいじやないですか。美味しい物はそれで大概食べられます」

アデイスは小さく笑って懐を叩く。

大概とつのが、金を出したのに美味しくなかった場合か、何か



トラブルがあつて台無しになつた場合か、彼の場合は判断がつかない。

アデイスに手を引かれて、今度はもつとまともそうな店に入った。白いテーブルが並ぶ明るいカジノだった。とても明るい。カジノと言つたら派手な雰囲気を想像するので、上品で綺麗でやけに明るいこの店に驚いた。白いテーブルに、白いツボに白い花。そのまま服が並んでいてもいいぐらいなのに、カジノなのだ。

「なんて白い」

アデイスも驚いた様子で、壁やら天井やらを見る。天井に張り付いている照明は、グリーディアの物だろう。炎の明かりではなく、魔法の明かりだ。この白さは、あの蛍光灯のような白い光を放つあれでないと生かせないだろう。

「セーラ、一緒に遊びますか？」

「私は金運もないのでいいです」

「……………そうですね」

一緒にいたら大負けしそうだと思つたのだろう。肯定され、聖良は少しいじけてミラと手をつないだ。

「ユイ君達と一緒にいます。どうせルールを一つも知りませんし」

「そうですね。ユイ、セーラをお願いしますね。これで遊ばせてください。なくなつたらこちらに来てください。チップをわけますから」

アデイスは手を振って行つてしまふ。初めての国で初めての場所のはずなのに、なぜこつも慣れた様子なのか理解できない。聖良が元の世界のカジノに行つても、出来そうなのがスロットだけだ。このように人と対面して行つような場所は無理である。それでも人見知りが激しいのだ。

「アデイス、楽しそうだな。あの子があんなに浮かれるなんて珍しい」

「子供らしくていいじゃないかい」

竜の夫婦が暢気な事を言うが、子供らしい遊びではないのを理解

していない。人間が持つ金銭への執着も理解していないのだから仕方がない。

大金を渡されたユイは、ため息をついた後、聖良に向き直った。

「低レートで簡単に遊べるところにいこうか」

「はい」

現金をチップに替えて、ガラス製の、球体に近いダイスを転がすテーブルに来た。

無色、青、赤、紫のダイス。とても綺麗で高そうだ。

「一番大きな目が出るダイスはどれかをかけるんだ。単純でしょ」

四分の一確率。それなら大丈夫かも知れない。すつても、長く遊べればいいのだ。

「セーラ、どれにかけるといい？」

ネルフィアに聞かれて、うーんと悩む。

「じゃあ、青」

「紫あたりだね」

四つのダイスの内、聖良が指定した青の対角線上に置かれたダイスを選ぶネルフィア。従うユイ。本当に紫が一番高い数になるダイス。

「で、セーラ、次は？」

「透明」

「赤だね」

と、再び繰り返される悪夢。

ネルフィアにまで聖良の不運っぷりは理解されていたらしい。選ぶ道に何かがあると確信させる程度には。

聖良の選ぶダイスはハズレの確率が高く、それ以外から選ぶので二度に一度は当たった。低レートなのでチップは大して増えていないが、減つてもいない。損はしていないのに悲しい。

「ネルフィ、単調すぎて飽きない？ セーラがそろそろ立ち直れなくなるから別の所に行こう」

ラゼスが親切に止めてくれる。泣きそうになりながら別のはけ口

を探そうと振り返ると、遠くに人だかりが出来ていた。

「何でしょうか」

「あれはアデイスがいるところだな」

トロアの言葉に聖良はぎょっとした。

あの不運の申し子の事だ。とんでもない人に不幸な事故でとんでもない事をしている可能性がある。つまみ出されるだけならともかく、大きな問題になってはたまらない。

ミラが手を引くのでおそろおそろそちらに向かう。

「彼は見た事がないが何者だ？」

「さあ。いかさまでもしているんじゃない？」

「上着も脱いでいるし、袖もまくっている。隠す場所はないだろう」  
ミラと手を離し、人だかりをすり抜けて前に行くと、アデイスが  
囲まれていた。

普通にゲームをしている。

しかし異様なほどチップを巻き上げている。

「おや、セーラ。どうしました？」

「ネルフィアさんが私に選ばせてそれ以外を選んで稼ぐので飽きました。私が近くにいるとよくないと思うので他所に行ってます」

「……………ちよ、セーラ!？」

自分には向かない世界だ。子供扱いだし、気落ちする。

アデイスはああやって稼いで聖良に服も買ってくれているから、  
せめて邪魔だけはほしくないようにしないといけない。今でも十分すぎるほど世話になっているのだ。邪魔はしていけない

「ふきゅ!？」

誰かの足が引っかかり、バランスを崩して前のめりに倒れた。倒れて手をついた瞬間、背中に衝撃が走った。痛みと冷たさ。

顔が濡れた。酒臭い。

倒れたところにグラスを落とされたようだ。落としても仕方がない。突然目の前に誰かが倒れてきたら、驚いてグラスも手放す。人もたたくさんいたから、不注意から足が引っかかることもある。

今回はついていないと言うよりも、ただの不注意だ。運がないのと、うっかりは違う。

情けない。情けなくて涙が出てきそうだった。

自力で起きると、髪も服も濡れていてげんなりした。酒臭い。高い服なのに汚してしまった。悲しい。背中は見えないが、どうやら色のきつそうな酒だ。手にとって分かるほど赤黒い。ワインよりも強烈な色。

悲しくて涙が溢れそうになった。

聖良は自分が世界一ついてない女なのではないかと思いつくなる。そんなことはないのだ。世の中には可哀相な人がたくさんいるし、今のは自業自得でしかない。

情けなく、悲しくなるのはいいが、勘違いな悲嘆にくれる資格はない。

「お前、わざと足を出したな」

ミラの声が耳に響いた。響くような声ではないが、それが聞こえて何度も頭の中で繰り返される。

「ミラ、落ち着いてっ」

聖良が顔を上げると、ミラが若い男と向き合っていて、ユイがしがみついていた。聖良が止める必要もない。気力がないから、説得も面倒だ。

「こいつ、わざと転ばせた。殺す」

「ミラ、ミラっ！ どうして刃物なんて持ってきたの！？ 連れてって欲しかったら置いていけって言ったのに！」

「これ、ペーパーナイフ。刃物違う」

確かに刃がなければ刃物ではない。しかしペーパーナイフでも、ミラにかかれば十分殺傷能力がある。

ユイはミラがそこまでして聖良と遊びたいのだと思っていたらしいが、ミラはミラなりの妥協点を見つけただけだということを、予測できていなかった。

「ミラさん、落ち着いてください。殺すなんてとんでもない」

アデイスが人をかき分けてやって来ると、聖良の手を取って起こしてくれた。

「すったからと、女性に八つ当たりとは情けない。どれだけしたと思っているんですか」

アデイスは白いレース部分に酒がしみこんだのを見て顔を顰めた。聖良が首を少し回しただけでその有り様分かる。基本は黒なのだが、レースやら刺繍などは白いのだ。その部分が一部赤黒く染まっている。いつそレースを染めてしまった方が早そうだと思うような色である。これはプロに頼んで洗濯してもらった方がいい。それでも綺麗には落ちないだろうが。

「それも金で買ったのか。やはり天才ギャンブラー様は違うなあ」  
「高かったのはこの服ですよ。怪我をしないように、グリーディアの最高級品を揃えているんです。その上私の大切な妻に足をかけるなど、どうしてくれましょう。」

「いつそ呪い殺してくれましょうか」  
その言葉でアデイスが魔術師である事を察したのか、その男は小さく息を飲んだ。

彼はまだ妻とか言っている。だったらいかにも少女趣味なデザインの服ばかり着せるべきではないが、彼は自分の趣味だと、聖良が何を言っても押し通すのだ。

「支払いがまだ済んでいないおろし立てですから、弁償はしていただきます。あちらでお話しをしましょう。」

あと、誰か彼女をシャワーのあるところに。服の替えも。ユイ、ミラさんのことは頼みます。

私は彼とお話しをしてきますから」

アデイスはにっこりと笑って、ボーイに案内されて去っていく。聖良を転ばせた男性の背を押すようにして。

聖良は仕方がないので、別のボーイに案内された部屋でシャワーを浴びた。

テレビで見たような、ホテルのスイートルームのように広い部屋

で、部屋にはシャワーがついていた。グリーンディアでは魔動技術を利用したポンプを使って屋根の上に水をためているらしいが、ここがどうなのかは分からない。

酒臭いので、香りのよい石鹸で身体と頭を洗う。高い物だろう。使うのが躊躇われたが、アデイスも儲けていたし、請求は普通先ほどの男に行くだろう。できれば持って帰りたいぐらいの石鹸を、贅沢に使った。

そろそろ小さくなってきたので、明日は石鹸を買ってもらう事にした。

他にもかさばらない、グリーンディアにはなかった便利な物を買うつもりだ。

ふわふわの、ちゃんとしたタオル地のバスタオルで身体を拭いてアデイスに習った呪文を唱えて髪を乾かす。聖良が着ていたアデイス好みの可愛いワンピースは選択を頼んであるので、代わりの服を用意してもらった。子供服では胸が入らないので、やはり大人の女性の服だ。袖まくりをしなければならぬが、酒臭い服を着ているよりはいい。

風呂場から出ると、案内してくれたボーイとは違い、女性が待っていた。先ほどのボーイには仕事人としての気品があったのだが、彼女にはそれがない。服装や部屋の片隅にあるシーツを入れるようなリネンワゴンからして、ルームキーパーのようだが、気配が違った。

そう、彼女は場違いなのだ。

彼女は美人だった。仕事人ではなく、貴婦人のような凛とした美人が、なぜか使用人の服を着ている。

元がそれなりのデザインなので似合うが、明らかに違うのだ。間違っていると感じさせたのだ。

彼女にこのような仕事は似合わない。

「……どうも」

挨拶すると、彼女は笑みを浮かべた。

「災難でしたね。お茶はいかがですか？ あちらはまだ時間がかかるようですわ」

やはり穏やかで、気品がある。男街で女性の従業員など珍しいだろうに、その上これだけの美人。こんな美人が、ルームキーパーとは、とても信じられない。文化の差だとしても、意味が分からない。少なくとも、彼女は受付など、人のいる場所にいるべき人で、もしも聖良が支配人なら、間違いなく異動させる。

「お嬢様、お茶をどうぞ」

「あ、どうも」

日本人の癖で、ついついぺこぺこしてしまう。

アデイスはこの仕草が可愛いと気に入っている。あの男は小柄な女性なら、怒っても転んでも泣いてもドジしても可愛いというに違いない。事実、子供達に対してはすべてが可愛いと言い切っている。お茶を淹れてもらったので、椅子に座りそれを受け取る。いい匂いだ。味も少し甘みがあつて美味しい。

お風呂に入ったせいか、リラックスするハーブだったのか、急に眠くなった。頭がふわふわする。

きつと疲れていたのだろう。こんなところで眠ってはいけない。

帰って、用意してもらっているはずの客間に ……

アデイスは今まで、報復する時は相手のすべてを奪うつもりでやっている。

それで相手が自ら命を絶ったとしても、欠片も同情などしない。

彼のもう一つの名前、アーネスとはそういう男だ。国に仕える魔術師としての自分との差をつけるためにも、そうするように心がけた。

しかし今はアデイス。グリーディアの魔術師。あのまま十年もしたら筆頭となっていただろう、子供が好きで、温厚な男。だから今は下手な事が出来ない。この男を追い詰めるために、過ぎた事は出来ないのが悔しかった。

国とは関係なく自分の組織の船でも使ってくればよかったかと少し後悔している。しかし、アーネスの船は遅いのだ。それでも立派には立派だが、さすがに国が金を惜しまずに作った船には遠く及ばない。あの船の半分ほどの装備しかない。もちろん飛ばない。

ミラの事もあるからアデイスで来たのを忘れてはならない。アデイスで来たのは間違った選択ではなかった。

そう自分に言い聞かせるが、暗い衝動に駆られるのだ。

だから派手で下手な事は出来ないが、下手な事を可能な限りしよと心に誓った。

この男はそれだけの事をしたのだ。

人垣のせいで現場は見えていなかったが、ミラが転ばせたというならそうなのだろう。彼女は異常なほどに周囲の動きに鋭い。悪意は逃さない。

その上、わざと酒までかけてくれたのだ。

落ち込んだセーラの背中に漂うあの哀愁。おそらく、また自分が悪かったのだと我慢していたのだろう。

アデイスのちょっとかいや子供扱いされる事以外は何もかも飲み込んで吐かないから、またため込んでいないか心配でならない。

あの抵抗やらふくれ面やら諦めた遠い目やらがまた可愛いのだが、落ち込まれると、どうにもまいる。そんな可愛い彼女に、またあの顔をさせたこの男は、どうしても許せない。許されるのはセーラが許容しているミラだけだ。

しかもあの暴言。

確かに珍しい人種の女性を着飾らせて連れ歩くような男は、金で買っている場合も多いが、そうでない事は見れば分かるだろう。

この男の愚かさ、あの発言に現れているのだ。



「ざつと計算してこれだけです。レースの汚れは落ちないでしょうから、作り直しが必要になります。しかし何せグリーディアでも数少ない職人の技ですから」

きつと作り手の彼女たちも怒るだろう。自分達の仕事の結果をくだらない理由で汚されたのだ。生地も特殊だが、グリーディア独自の特殊な縫製だ。あの仕立屋ですら二人しか職人がいない。だから人手を優先的に買い取る金額が高かった。

あの酒の汚れを落とそうと思うなら、せつかくのレースが痛んでしまう。あのレースというのは高い物は本当に高い。どんな職人の手で、どれほどこだわった物か切々と語ってやりたい気持ちになる。セーラだからこそ贅沢をしたのだ。

加害者の彼は大きっぱに書かれた内訳を見てふるふると震えている。いい年してギャンブルで負けて喧嘩を売り、その連れの少女に悪戯をした報いだ。ギャンブルは誰かが負けるからこそ儲ける者がいるのである。

「だからといって、この値段はないだろうー！」

「何を言っているんですか。物は神子が着ている物とほとんど同じですよ。あれはもつと戦闘に特化しているのですが、こちらはデザイン的に高いものですから、似たような値段でしょう。襟の白いラインも、魔術的に意味のある物ですからね」

神子が着ているのは服の生地などは、グリーディアから品輸入したものである。セーラの服は可愛く可愛くとにかく可愛く仕上げてあるので言われても信じられないだろうが真実だ。案を練る内に楽しくなり、必要ないデザインにしてしまったが、レースは汚れやすいのでつけるべきではなかったのだと少し反省した。血や泥は簡単に落とす方法があるのだが、それ以外を考えていなかった。食事の時はソースが飛ぶような位置は隠されるから、問題ないと。

今度はもう少し考えないといけない。レースや刺繍にも完全防汚加工をしてもらう事にする。かなり値は上がるが、今回のもつけがあれば何着か作れるはずだ。

が、それは汚してくれた男には関係ないので、責任を追及する手は抜かない。本来なら、あのワンピースは汚れていなかったのだから。

「奥様を大切にされているのですね」

空気の険悪さを和らげるためか、支配人が口を挟んだ。

「そう、大切な方ですよ。まだ背が伸びるかもしれないと、もう何年も成長していないのに、なかなか腕輪を作るのを良しとてくれなくて、ようやく説得したのに……」。

へそを曲げる姿は子供のようで可愛いのですが、呪文を唱えたりと実害があつて苦勞するんですよ。グリーディア以外で育っていたら、魔女になつていただろう人ですから、なかなかおつかないんですよねえ」

一般人は魔術師という物に対して、未知に対する恐怖を持つている。悪魔の使いになつてしまふ彼らを、人々は偏見を持つて接する。だから人材が育たない。悪魔の使いっ走りになるなど冗談ではないという魔術師もいただろうに、偏見があるから大きな事は出来ない。人目を気にしてろくな研究がされないから、魔術に偏見が持たれ続ける。

少ない資源とコストと手間でも半永久的に稼働するものを作る事が出来ることをほとんどの人間が知らない。

地下にあつた人形師のあれがまさにその手本のような出来具合だった。後にそれを見に行つた専門の研究者は、その美しさとやたらに涙を流して魔術の可能性は無限大だと叫びながら走り回つたらしい。研究棟の半引きこもり達、興味のある分野になると、とたんに活発的になつて外に出て走り回る、不思議なタイプの人間が多いため、よくそういつた奇行話はよくネタにされる。

「さて、私はそろそろ彼女のところに行かないと。」

支配人、後の事はよろしくお願いします。妻はどちらに？」

ちらと固まつている男を見てからアデイスは立ち上がった。アデイスの待遇が妙によいので呆けている。支配人まで出てきているの

は、側にユイがいたからだろう。ひよつとしたら、この部屋に来る前にユイが声をかけたのかも知れない。ただたんにグリーディアの魔術師だから恐れているのかも知れない。店が呪われるなど、偏見に満ちた事は考えてそつだ。

「ご案内いたします」

アデイスはセーラの機嫌をどうやって取るうか悩みながら部屋を出ると、ミラが走って駆け寄るのが見えた。

セーラが怒って愚痴でも吐いたのだろうか。ミラにだけは言わないと思うのだが、誰かに漏らしたのを聞いていて、怒って脅しに来たのかも知れない。

「アデイス、セーラ、いない」

「は？ 一人でうるついでるんですか？」

人の世話を受けるのが苦手らしいので、一人で戻って来ようとして迷っている。そう考えると笑顔で迎えに行つてやりたくなる。

「違う。部屋、カップが割れていた。セーラ、そのままに行かない。欠片は拾ってから掃除道具探しに行く」

まさしくその通りだ。

「トロア、匂いが途切れていると。部屋にある石鹸の匂い、外に出た形跡ない」

トロアが言うならその通りだろう。彼なら犬のようにセーラが歩いた道を探し当てかねない。

「誘拐されたかもしれないとユイが」

「またですか……」

口から出たのは「なぜこんな所で」とか「一体誰が」とかではなく、それだった。

彼女ならどんな理由でどんな事件に巻き込まれてもおかしなところなどこれっぽっちもないのだ。

「アデイス、探せるか？ 探せないなら使えそうなのを神殿で捕まえてくる」

「大丈夫ですよ。前回の事で反省しました。彼女には常に目標とな

るペンダントをつけているようにと……」

ミラが差し出したのは、髪留めとペンダント。

「シャワー浴びたから」

アデイスは支配人に掴みかかってやろうと思ったが、それを聞いた瞬間に控えていた使用人に命令を始めたのを見て我慢する。

「では、別の方法で探しましょう。外国人の旅行者の誘拐なんてどうせ身代金目当てです。私が荒稼ぎしていましたし、傷つけられる事はないでしょう。ここに人形師はいないので探査も難しくはないはずです」

しかし、本当にまた誘拐されるとは思いもしなかった。

目を覚ますと、そこはまさしく『お茶会』だった。

「うおっ!？」

聖良はここはどこだと見回す。

知らないが、やたらとゴージャスな部屋で、高そうなレースのテーブルクロスの上には、高そうな透かし彫りの花瓶に、高そうな花が生けてある。目の前には花柄の高そうなティーセットに、数々の手の込んだ高級そうなデザートが並べられている。それを取って談笑する美しい貴婦人達がまた現実離れしており、耽美でハイソな世界を作り出している。

聖良はお茶会に参加しているかのように、テーブルの前にある椅子に縛り付けられていた。

この縄さえなければ夢だと思って好き勝手に始めていたところである。これのせいで、現実的だと思い知らされた。

「……………」

状況がさっぱり分からなかった。

美人の使用人にお茶をもらって、気付いたら縛られて目の前でお茶会だ。意味が分からない。

記憶を辿ると、薬か何かで眠らされたのだと推測出来たが、生半可な薬がなぜ聖良に効いたのか疑問だった。

「あら、起きたのね。起きたらますます可愛いわ」

「お茶はいかが？ 美味しいクッキーもあるのよ」

「お着替えを先にします？ その服は身体に合わないわ。始めに着ていた服が可愛かったけど、汚されてしまって残念ね。とつてもとつても可愛かったのに」

最後の言葉は先ほどお茶を入れてくれた女性だった。誘拐実行犯である。先ほどの掃除婦めいた服装では無く、このお茶会に参加す

るに相応しい、ベージュのドレスを身につけていた。

この耽美な世界を作り出す絶世の美女達は誰だろうか、聖良は首を傾げた。

誘拐されているはずだが、そのような気分にならない、不思議な空間だった。

「……あら、起きたのですね。ごきげんよう」

背後から、手が伸びて目の前にティーカップが置かれた。

「あ……」

女の子だ。十代前半の、とても綺麗な女の子。赤毛が印象的な、

魔女の……

「ええと」

「お久し振り。ルシウス様の魔女、ヘレナよ」

微笑みの一つ浮かべる事もなく淡々と言う。無表情な子だ。

「……………ええと、ここは？」

「私達が借りている宿よ」

「こんな所にいていいんですか？ この前、神子に追っかけられていたのに」

「グリーディアならともかく、ここは来たければ来てもいい場所よ。ただ、支配される恐れがあるから来ないだけであり、それさえ気にならなければ誰だって来るわ。今は悪魔を支配できる器が埋まってしまったから悪さをしなれば安全なものよ。自分を埋めるほどの使い魔を殺して、支配できなかつたら馬鹿らしいもの。そんな冒険心を持つ気骨のある神子など滅多にいなそうよ」

聖良は納得する。

してはいけないのだろうか、納得する。

神子が埋まってしまった自分の器に空きを作るには、今いる使いた間を殺さなくてはならないのだ。

戦力を殺して、悪魔に立ち向かうなど不可能である。神殿も町中に悪魔が侵入している状況を信者達に知られるとか、町中で悪魔退治が始まるなど、決して望まないだろう。ミラの怯え方を見ての、

聖良の勝手な判断だが、あながち外れてはいないはずだ。

「でも、国を出てきたから、これ幸いと誘拐つて、何を考えているんですか？」

「さあ」

「私なんてただ人種と話し方が珍しいだけでしょくに、こんな美人だらけの所に連れてこられても腹が立つだけなんですが」

「セシウス様は一定レベル以上の女性なら誰でもいいから。特に他人に嫁ごうとしている女性をさらうのがお好みのおうね」

「……………」

略奪好きというのは、人間の中にもいる。他人の幸せを奪つて、壊し尽くして、それで飽きてしまつたらポイと捨てるのだ。

「前、飽きたら帰すとか言つてましたけど、最悪なんですが」

「悪質極まりないという事は否定は出来ないわね」

まさか肯定の言葉が返つてくるとは思いもしていなかった。

「そうねえ、子供には分からないかも知れないわね。セシウス様は、力も内面も磨かない女には興味がないだけなのよ」

美女の一人が、うっとりしながら言う。

やはり飽きたら捨てるという事だ。大人になつたら興味を無くすアデイスと、どちらがマシなのか分からない。

そう考えると、やはりアデイスも最悪だ。

今は生まれ変わつて清らかだと言い張っているが、大人になつたらどうなることかと考えると、少しうんざりした。今のまま聖良べつたりでも、それはそれで鬱陶しいし、不特定多数の少女に手を伸ばすのも阻止しなければならぬ。

身体が子供で行動範囲が限定されている今が、一番気楽だった。彼の将来の事は考えたくもない。

それでもアデイスは安全なので、今は目の前の危機をどうにかしなければならぬ。女性ばかりというのはある意味安心できるのだが、縛られているのには変わりない。

「ああ、縛られていてはお茶が飲めませんね」

しゅるりと音を立てて、勝手に縄が外れた。

お茶を飲みたくてヒモを見ていたわけではないのだが、ほどいてくれた事には感謝する。あっさり懸念が払拭されて、ほっと息をつく。もしもの時は、窓から飛び降りればいい。

「今度は薬など入っていません。どうぞ。その間に着替えを用意します」

やはり薬を盛られたのだ。フレア経由で、生半可な薬は効かないと聞いているだろうから、すごい薬を用意したのだろう。死ななくてよかったと胸をなで下ろす。

「さあ、美味しいのよ。食べて」

勧められ、しぶしぶ手にする。今更毒など入れないだろうと信じて。

聖良は遠慮がちにクッキーを一つ手に取った。二つに割ると、断面から乾燥した果物らしきつぶつぶが見えた。口に含むと、バターの風味が口に広がる。

「あ……なんか懐かしい」

学校の休み時間、こんなようなクッキーをもらって食べた。

知り合いはやたらと聖良に物を食べさせてくれた。

人は可哀相な相手に施すのが好きなものだが、あれは何かきっかけがあつたはずだ。

確か、隣のクラスの男子生徒に告白されて、無理と即答した時、友人達にとつては条件のいい男子だったらしく、振った理由を聞かれたのだ。

その時は困った挙げ句、素直に『金を持っていない学生と付き合いなくても自分にはマイナスにしかならないから、あの家にいる限り無理。連れ出してくれるような大人の男の人ならともかく、彼氏なんて作ったら食事の制限も受けるかも。デートできる服もないし、お金かかるし絶対やだ』というような内容を言ったら、そのうち話が大きくなって皆がお菓子をたくさんくれるようになったのだ。

おかげで太った。



今思えば、彼もアデイスのような人間だったのかもしれない。好きでもないのに告白されたときめきに身を任せて、なんとなく付き合うような事をしなくてよかったと、今更思った。

バイトと家事と勉強の忙しさでイライラしていたからか、まったくときめかなかったのがよかったのだ。あの時聖良が求めていたのは、あしながおじさんの存在だったから。

「ど、どうしたの？ 何か辛い事を思い出したの？」

「いえ、故郷の友人の事を。よくこれに似た菓子を頂きました。なんだか懐かしいです」

「まあ……」

この容姿だから、色々想像するところがあつたのか魔女達に抱きしめられる。

「可哀相に」

「こんなに小さいのに、苦勞をしたのね」

彼女たちの脳内では、聖良がとんでもない苦勞をしている事になつているらしく、悲しむ振りをして楽しげだ。

人というのは他人の不幸が大好きなのである。そういう不幸な人間に暇つぶし程度にかまうのも大好きなのだ。

この人達は、凡人ではただ見上げることしか出来ないような高みから見下ろしているタイプだ。高い位置にすぎで、腹も立たない。

「お着替えを用意しましたが、身体に合うか見てください」

戻ってきたらしいヘレナが声をかけてくるが、彼女も小柄な子なので魔女達に阻まれて見えない。もがいているとようやく放してもらい、今度は服を押し当てられたが、魔女達によってそれは投げ捨てられる。

「どうしてこんな灰色のドレスなのっ。灰色はご主人様達だけで十分よっ」

「私が持っている胸回りが大きめの服はこれだけです。今の服よりはいいと思うのですが。色は地味ですが、生地はいいし、飾りも可愛らしいと思います」

捨てられたドレスが拾われて、改めてあてがわれる。

確かに灰色っぽいが、淡い色なので十分可愛い。切り返しがついていたり、レースがついていたりするので、地味だが高い服だ。

「まあ、この服よりはいいわね」

魔女が諦めた。

問題があるとすれば、ウエストが合うかどうかだ。この手の服はぶかぶかに見えてウエストが細いのが可愛いのである。身体は入っても、見苦しい事にならないか不安があった。

「では、どうぞこちらに」

手を引かれ、隣の部屋に連れ連れて行かれる。やたらと広い部屋に何人用だという大きなベッドが鎮座していた。

「……………」

「お着替えを手伝います」

聖良は灰色のドレスの、背中にあるたくさんのボタンを見てげんなりした。

一人で着られない服の多い事多い事。普段着はとくかも、よそ行きの服はアデイスに手伝ってもらおう事もある。もちろん、限界までは自分で頑張るが、限界がある。

今聖良が着ている、肩がずり下がるような、余りすぎの服を着るよりはいいので、渋々と着替えた。

案の定、手は届くがボタンなど指に挟むぐらいしかできない部分があり、控えていたヘレナに手伝ってもらおう。

伸ばしっぱなしの髪を手櫛で整え、自分を見下ろしてげんなりした。このような服は、華奢な女の子が来た方が似合う。

アデイスならやたらと褒めるのだろうが、彼は幼い容姿なら何でもいい傾向にある。

「お似合いよ」

感情一切なしの棒読みで言われると逆に清々しかった。店員の心にもない笑顔よりはずっといい。

「ところで、私はいつ帰してもらえるんでしょう」

「……………さあ」

「さあって」

「私が部屋に戻ってきていたら縛られていたもの。」

話を聞いたら、可愛かったから薬で眠らせて連れてきたそうよ」

「……………」

「おそらく、ただの好奇心や退屈しすぎでしょう。大人しくお茶の相手をしていれば、セシウス様に見つかからない限りすぐに帰していただけるわ」

「……………ああ、変態の方の……………いえ、フレアさんのお父さんですね」

「ええ、変態の方」

ヘレナはさらりと肯定する。この少女の表情には出ない性格が見えたような気がした。

そんな事を考えていると、唐突にドアが開いた。

「誰が変態だつて?」

男性が顔を出す。

フレアに似たその顔立ちを見れば、言われるまでもなく件の悪魔なのだと判断できる。

「セシウス様、もう戻られたのですか」

「ああ、退屈だからね。」

でも、知らないうちに可愛い子を連れ込んでいるね」

聖良は後ずさる。

「背丈が同じぐらいなのに、ずいぶんと印象の違う子だ。可愛いね」  
にこにこ微笑む様は、フレアがもしもまともだった時の姿そのもので……………

「あれ?」

首をひねる。

フレア以外の誰かが思い浮かぶような気がした。

「どうかした?」

「いや……………さすがにフレアさんは似てるんだなと」

彼は一瞬きよとんとした。

「君がフレアのお気に入りの子か。聞いた通りの話し方だね。

フレアは多少僕に似ているかもしれないが、僕の方がいい男だろ？」

聖良は呆れた。

息子よりもいい男だと主張する場合、そのすべては冗談だと思っ  
ていたのだが、彼の場合は本気だ。

「まあ……男らしいですねえ」

彼は女装しているから、女らしいのだ。いい男と言われれば、男  
の格好をしている彼の方がいい男に決まっている。比べるのが間違  
っている。

「ふふ、面白い子だね」

セシウスが手を伸ばしてくる。後退して、小さなガラスが埋め込  
まれた窓の外を見てぎよつとした。

光が遠い。下の方にある。かなり高い。さすがに、これは高くて  
飛び降りれない。

「綺麗な髪だね」

窓の外に気をとられている内に、セシウスが近づき頭部に触れて  
きた。

「綺麗な肌だ」

「そりゃ、どーも」

間近で見ると、うめぼれるだけあり綺麗な顔だ。アデイスよりも  
整った、左右対称の歪みの無い顔立ちだ。しかしぱつと見の雰囲気  
を含めると、優しいアデイスの顔の方が好みだった。もちろんア  
デイスには口が裂けても言えないが。

「おいで、一緒にお茶にしよう。美味しい菓子を買ってきたから」  
手を引かれる。かなり嫌なのだが、相手は悪魔。抵抗するだけ無  
駄だ。

もとの席に座らされ、聖良はため息をついた。

本当に菓子が増えており、お茶には花が浮かんでいる。

魔女がこれだけいて、悪魔もいて、高すぎる場所。いくらなんでも、逃げ出すには条件が悪すぎた。

最後の手段とアデイスが手にしたのは、セーラが身につけていたペンダントだった。

それをぶら下げて、歩くだけ。

ユイはどんな大魔術が見られるのかと期待していたので、少しばかりがっかりした。アデイスの魔術は繊細で参考になるのだ。ゼロ歳児の竜から学ぶというのも、悲しいものがあるが、中身が名高い魔術師なので気に病む必要はないと自分に言い聞かせた。

「それでセーラ、見つかるのか？」

真っ先に暴れそうなミラだが、アデイスがまだ手段があるというので落ち着いていた。その方法にも興味津々だ。

同じく真っ先に暴れそうなネルフィアは、現在ホテルの部屋でぐっすりと眠っている。怒りで喉が渴いたらしく、部屋にあった冷めた茶を一気のみしたら眠ってしまったのだ。心配の種が寝てくれたので、アデイスはトロアに暴走しないようくどくどと言いつつ含めてから、心おきなく活動を始めた。

「なんとなく、ですが」

「ダウジング、人も探せるのか？」

鉱山を見つけるといふ話は聞くが、人を探せるとは聞かない。

「さあ他人のする事は分かりませんね。」

私の場合はセーラ限定ですよ。これは私の魔力を追っているんです。セーラと私の魔力は繋がっていますから、それを探っているんですよ。

道具などなくとも普段からなんとなく分かるんですが、かなり漠

然とした事しか分かりません。ある程度の距離があれば方向は定めやすいですが、近づくとどうしても曖昧になるんですよ。それにここは、魔力のある生物が多い。道具を使って方向を定めないと、一人の人間を探すのは時間が掛かります」

「ずかずかと進むアデイスは、ホテルの廊下の突き当たりに差し掛かり足を止めた。窓を開き、人々が行き交う通りを眺め　飛び降りた。」

「ここは三階だが、魔術師であり竜であるアデイスにとっては高さなど関係ないのだろう。」

「追えないって」

「それはユイだけ。安心しろ、抱えてやる」

理解する前に、ミラがユイを肩に担ぎ上げる。

窓枠に足をかける。

ハノが神殿で留守番をしている以上、この場にいるまともに人間なのが自分一人しかないのだと、ユイは今更ながら気付いた。

「ちょ、ちょちょちょっ」

言葉が上手く出ない。上半身が外に出ていた。腰よりも頭の方が低い位置に来て、人々が行き交う地面が見えた。悲鳴を上げる間もなく、ミラは窓から飛び出る。

「ひいひいひいっ」

肩に垂らしていた三つ編みが顔面を打つ。

一瞬、意識が飛び、気付けば地面に下ろされていた。

足が震えて立てないでいると、ミラが再び肩に担ぎ上げて歩く。

「ミラ、持とうか？　女の子がわざわざ重いもの持つ事ないよ」

トロアは日頃から女性には優しくする、という聖良の言葉を実行するべく、ユイを荷物扱いした。竜の中でもまっとうな常識を持つラゼスは、一番危険なネルフィアが起きた時、暴走しないように見張ってくれているのでここにいないことが悔やまれた。できれば逆の役割の方が心穏やかでいられたのだが、夫婦を引き離して役割を交代しろなどは、言えない。とても言えない。

「自分で歩くよ。震え、治まったから」

羞恥というのは、恐怖をかき消してくれる事もある。とにかく、女性の肩に担がれるという恥ずかしい姿を晒し続けたくなどない。

ユイは自分の足で走ってアデイスを追う。

突然空から降ってきた彼らは目立っているが、セーラの事となると周りが見えなくなるアデイスは、気にもとめずに歩いている。

「恥ずかしいから、さっさと退散しよう」

「退散？ セーラを捜すのだろう」

「探すよ。さっさと探すよっ！」

アデイスを追ってその場を離れ、進行方向に道がなくなるとユイが先を予測して道を探し、やがて街壁に突き当たる。

「この向こうは夫婦街だね。男女入り乱れているから厄介だ」

「荷物扱いできる小さな人だから、男女も関係ありませんよ。あれだけ軽いと女性でも持てます。脂肪は軽いですからね」

それが何を意味しているも、本人が聞いたら彼は殴られているだろう。その一言がなければ、セーラだっていつか彼の望むように心を開くのだろうが、まだまだ道程は遠そうだ。

「回り道は面倒くさいですね」

アデイスは何を思ったか、壁をよじ登り始めた。竜の握力で凹凸とも思えない部分に手をかけてすると登る。

「た、確かに門まで行くと遠いけどっ！」

「アデイス、面白い事をする」

と言いながら、ミラは縄を振り回し上へと投げる。がしゃ、と音がして、何かが引っかかるとするすると登っていく。

「だから、何でそんなもの持ち歩いているの！？ ダメって言っただけだろ！」

「刃物ではない」

「凶器になるような物なら一緒だろ！」

「ユイ、我が儘。だったらそう言えればいい。道具は便利。私は人間だから、道具を使う」

ミラとはこの事に関して、話していてもわかり合える事はないだろう。そんな日が来たらとても嬉しいのだが、想像できない。

「トロア、ユイ、頼む」

「わかった」

トロアはユイを担ぎ、ミラに続いて縄を登っていく。ユイが自力で登っていたら、歩くような速度で上がっていく彼らには到底及ばないので、助かった。

トロアが上まで来ると、上で待っていたミラはフックを回収して夫婦街側に飛び降りる。また、飛び降りるのだ。

高いところは怖いのに、なぜこうも飛び降りるのだと文句を言いたい、緊急時に言えるはずもない。

人気もない所なのでいいが、見つかったら完全に不審者である。

神子のユイがいるから見つかっても言い訳できるし、別に隠密行動でもないので問題ないのだが、なぜか隠れたくてたまらないのだ。

「もう……飛び降りないよね。これがラストだよね」

「高いところ嫌いなのか？ 人間には多いらしいな。立てるか？」

「たて……る」

自信はなかったが、下ろされると自分の足で立てた。ふらついているので手を引かれる。トロアに関してはセーラを半殺しにした時の姿が印象的だったが、落ち着いているといい竜なのが分かる。セーラを殺しかけてからはずっと脅えられ続けたいらしいので、他人の扱いには気を使うようになったのだろう。ミラよりも物わかりがいいとは、どういう事だろうか。

「あっちの方は何かあるんでしょう」

アデイスが指さした方は、街の中心地だった。

「神殿とか、デパートとか、ホテル街かな。三都の中で一番金があるタイプがいる場所だね」

つまりは金が目当てとは限らない。

また難儀な目にあって、彼女はなぜこうも不運なのだろうか。

「まさか、セーラの可愛いさと珍しさに目をつけた金持ちの変態が



っ!？」

「うう……否定できないところが、セーラというか」

「せーらああああ」

アデイスが走り出した。普段は余裕綽々で小生意気なぐらいのアデイスが混乱している。

大人の知能を持っていても、やはり子供なのだ。大人の知識を持っているからこそ焦り始めたのだろうか、セーラがいる時に比べると落ち着きが無い。

ネルフィアよりはよほど保護者をしているセーラがいないと不安でたまらないのだ。彼女と結婚したいというのは、優しい年上のお姉さんに将来結婚すると言い張る、子供独特のあれだろう。

そんな彼は混乱して忘れている。

彼の心配は否定は出来ないが、案外けろりとしていそ那样的もセーラなのだ。

それを忘れて走る竜の子供は、とても足が速く、人間の足では追いつけず、またトロアに荷物よろしく抱えられた。

人が増えてきて恥ずかしいのだが、今下ろせと言う勇氣は、彼になかった。

「可愛いわ。ヘレナと違って灰色でも沈み込まないのね。あの子が着ると、どうにも似合わないのよ」

何に沈み込むというのだろうか。意味が分からなかった。

「嫌そうな顔が可愛いわ。ヘレナじゃ何をしても無視するもの。あなた可愛いわ」

ヘレナは聖良と違い、本当に人形のようなのである。本当の意味で、人形師の人形に混じっていても生きていたとは気付けなさそうなほ

ど人形らしい。

その人形師の父親は、先ほどからセーラの髪を弄って遊んでいる。アデイスといい、この男といい、フレアといい、この手の男は髪を弄くり回すのが好きらしい。

「服を汚されたんだってね。かわいそうに。君のような可愛い子を傷つける男は、死んでしまえばいいんだよ」

さすが悪魔だけあり、人の命は服よりも安いようだ。

「いやあ、連れが適度なお仕置きをしているはずなので問題ありません」

「連れ、というのは、アデイスとかいう男のことかい」

「まあ」

お仕置きしているのは彼だろう。

「人間にしてはなかなかの力を持っているようだけど、私には遠く及ばないよ」

「そうですねえ」

狭い場所な上、楽しんで手加減していたから、ヘレナも彼の本気は知らない。姿が見えないアデライトも、竜の記憶はないはずだ。

竜に関しての情報が漏れていたら、もっと別の言い方をするだろう。だから、彼はまだ知らない。それを確認出来たのはいいが、ここから逃げられなければ何の意味もない。

「小さいのに冷めているね。ヘレナとは違った意味で冷静だ」  
頬を指先で撫でられる。

アデイスにされるのは慣れたが、知らない相手にされると気持ち悪い。

「そんなに嫌がられると傷つくな」

「嫌がっているのが分かるならやめてください」

「嫌がる顔も可愛いよ」

アデイスと言っている事は似ているが、タイプが違う事に気付いた。アデイスのアレは愛玩動物に対するものに似ているが、この男のはとにかくいやらしいのだ。聖良が今まで出会った事のないタイ

プである。思わずキモイ、と面と向かって言いたくなかった。

まさか言えるはずもないので無視して飲み食いする。アデイス達と一緒にわいわい食べたなら美味しいのだろうが、じっと見られると美味しいとも感じなかった。

「そういえば、今は何時ですか？」

「十二時だよ」

「そろそろ帰らないと」

「泊まっていけばいいよ」

「いえ、帰らないと叱られますし、たぶんものすごい騒ぎになりますから」

アデイスがきつと　そこまで考えて、ネルフィアとトロアの存在を思い出した。

血の気が引いた。

炎を吐く二人は、聖良の脳内で大怪獣的な姿で描かれる。

「……ほ、ほんとに帰らないとっ！」

「穢滅の悪魔は神子に支配されて、大人しいものよ」

ヘレナの言葉に首を横に振る。

「と、とにかく帰らないと、火の海にっ」

「火の海？」

「うっかりそんな事をしそうな人を連れてきてしまっただんですよ！

っていうか、ここどこですか！？　神殿どこですか！？」

アデイスとラゼスがきつと大変な目に合っている。ひよっとしたら上手く説得できているかも知れないが、また匂いを追ったりと無駄な事をしているかもしれない。

「焦る顔も可愛いね。しかし、焦る理由が身内の事とは、剛胆なのか気が小さいのか」

綺麗な顔に微笑を浮かべ、髪に触れてくる。やっている事はアデイスとほぼ同じのだが、やはりアデイスのは思い切り抱きしめて、擦り寄って、弄って、たまらなくなりキスをして来るといふ、動物相手の反応であり、この男とは違う。

「セシウス様、本当に気色悪いぐらいは思われているので諦めては  
いかがでしょう」

「ヘレナ、お前はもつと歪曲な表現が出来ないのかい？」

「事実を述べたままでです」

ヘレナが聖良の気持ちを代弁してくれた。彼女の主はこの変態の  
方ではなく、兄の方だ。主でないから逆らえるのだろう。

「セーラだったかな。君はこんないい男に見つめられて、何も思わ  
ない？」

見つめられる。

いい男には違いないが、こんな美女に囲まれているような男にと  
うやったらときめくというのだろう。聖良はけっこうロマンチスト  
だ。他人も見ている男の視線など、毛ほども感じない。どうにもフ  
レアを思い起こす顔をしているから、余計に別の事を考えてしまう。  
「とくに何も。帰していただければ感謝しますが」

セシウスは少しむっとした。

自分に惚れない女を嫌悪するタイプだろうか。

「まだ小さいから、セシウス様の魅力が分からないのね」

「子供にはルシウス様の方が懐かれるもの」

「子供は無邪気で可愛いわ」

「身も心ももう十八歳です」

子供扱いされるのだけは心外なので、慰める魔女達をうっかり遮  
ってしまった。言わない方がよかったのだが、言ってしまった。

セシウスと魔女達が一斉に聖良を見た。

「まさか、誰かのお手つき？」

「真正銘普通に年をとってます。失礼な」

今更隠しても仕方がないので、変な詮索をされるよりは事実を言  
った方がいい。

「まあ……………病気がしら」

「栄養状態が悪かったの？ 小さなころに必要なだけ食べないと、  
あまり育たないというものね」

「なんて可哀相なのっ」

魔女達に同情され、自分が作ったのに自分だけ少なくて貧相な食事だったのを思い出し、あまり否定できなくなった。

「きつとそうに違いありません！」

普通に背が伸びなかったと思うより、その方がまだいい気がした。

「まあ。たくさんお食べなさいな」

「いや、今食べると太るんじゃないかと。これ以上太るのは……」  
腹が出てきたら、最悪だ。

「そうね。今はちょうどいいものね」

「そうだわ。明日はもっと美味しいものを食べましょう」

彼女たちは明日まで聖良をここに拘束するつもり満々らしい。  
とにかく、今夜を無事に乗り切る事を考えようと思った。

近い。

近いが、決定打がない。

「この辺りです」

アデイスは焦り、苛立った。今は夜だ。本当に変態に捕まっていたら危険すぎる。

あれは自分の物なのにと、怒りで魔力が渦巻きそうになる。竜は魔力だけでも風を作れてしまう種族だ。抑えて、人間の振りをしなければならぬ。

自然と『振りをする』などと思うほど、アデイスは竜になってしまったことに気付いて、ため息をつく。

「ホテルの中にしても、探しにくいっ」

「大丈夫。もうすぐハノ達が来ると思うから。ここまで場所が特定されていたら、たぶんやりやすいと思うから」

ユイも焦りを見せている。

彼自身がセーラをどのように思っているのか分からないが、ミラの友人としてのセーラは大切なはずだ。

「来た」

ミラが呟き、その瞬間、見慣れたハノと、いつぞや見た女悪魔と知らぬ男が現れる。男は悪魔を支配する神子だろう。

人が突然現れたというのに、さすが聖都だけあって通行人達は驚きはしても騒ぎはしない。

「ハノ、レファリア。この周辺にいることまでは分かった。あとは正確な場所だけだから、お願い」

「はい。準備は出来ています」

悪魔と半悪魔がそれぞれ勝手に探査を始める。仲良く手分けしてなどということはありません。悪魔であるレファリアは半悪魔を見

下しているはずだ。勝手にやらせた方がよほど効率がいい。

「方向としてはまだ向こうです。上の方に感じます」

アデイスの言葉に二人は上を見て、似たような顔をした。

「ない」

「上の方なのだけは確実です」

悪魔に否定され、アデイスはむっとして言う。

セーラとの絆はそんなに薄いものではない。他の種族のような誓いだけの絆などより、はるかに濃く影響のある絆だ。

「いないって意味じゃなくて、ないんです」

「ない？」

「そこだけすり抜けるというか、あると思って手を伸ばして、ないかのようにすり抜けるような」

「逸らされているとか、そこだけ触れられないということですか？」

「違うけど、そう受け取ってくださいでもかまいません。正確な位置は掴みにくいのですが、上の方です。あれだけ上の方となると、あのホテルです」

レファリアはこのあたりで一番背の高い建造物を指さした。

アデイスは言葉を待たずにそこへと駆け込み、フロントにいた客を押しのける。

「支配人を呼びなさい！」

「お客様！？ 困りますっ！」

困るだろう。アデイスも同じ立場なら困るし、凶々しさに腹を立てていたところだ。

「大きな声では言えません。今すぐ、支配人でなくとも責任者を呼びなさい。何を置いても、一番に！」

アデイスの形相がよほど鬼気迫っていたのか、別の客を応対していたフロントの男が奥へと走る。その間ですら、待つには長すぎた。

「ちよつと失礼します」

カウンターを飛び越え、奥へと消えた男を追う。

「お客様！？」

「アデイス！」

戸惑う受付嬢の横をミラも飛び越えてくる。  
とにかく、急がなくてはならない。

「女の子が誘拐されて監禁されています！ 手遅れになる前に上階のキーを！」

「アデイス、これ」

ミラが戸棚を破壊して取り出し、受け取ったアデイスは外で待つレファリアの手を取った。

「上！」

「はいっ」

なぜか脅えたように頷く。相手は下級と言えども悪魔だ。漏れている魔力を感じ取っているのかも知れない。

この手には鍵がある。しかし時間がない。

こうなれば手は一つしかない。

片っ端から開けて確かめるのだ。もちろん中に確認はとらず、ノックもせずに。

悪魔の力で次々と部屋に侵入した方が早いのだが、さすがにそれは色々と問題になる。

色々と見たくない物を見るだろうし、苦情が来るだろうし、外交問題の可能性もあるだろうが、アデイスの知った事ではないと切り捨てた。悪魔の力を使って部屋に侵入するよりは幾分かましなはずだ。

彼女さえ無事なら、たとえ何があるうがかまわない。今の、人間ではない彼には切り捨てられる程度のものだ。

便利だが、なくてはならない物ではない。

今の彼に大切なのは、たった一人だ。



聖良は困っている。

どれくらい困っているかというのと、見知らぬ男に抱きしめられるくらいには困っている。

なにせ、知らぬ相手だから反撃していいのかいけないのか、判断つかないのだ。トロアなら慣れたのでどうにでも出来るが、相手は初対面の悪魔だ。息子の言い分を思い出すと、ろくでなしである。

膝の上に載せられて、自分の魔女になれと勧誘を受けている。

いきなりひどい事をされないのは、彼がアデイスと同じで無理強いは意味がないと思うタイプだからと推測した。だから拒否している限りは問題ない。

問題は、その拒否だ。

下手な事は出来ないし、もしもマインドコントロールのような事が出来たとしたら、とても危険である。これだけ多くの美女が集まっているのだから、そんな力がないとは言いい切れない。

とりあえずは、無難に流す事にした。流す事には慣れている。幸い聖良は、色気とかそういう物とは縁遠い外見だ。アデイスのような特殊な性癖の者や、とにかく見境がない者以外は、聖良に悪戯以上の事をしないと、理解している。

いつものように指で髪をすかれ、頬を撫でられる。

こういう男がする事は、なぜ決まってこれなのかと疑問に思った。「可愛い服も、美味しい料理も、快適な環境もある。いつも綺麗にして、私が可愛がってあげるよ」

「いや、全部間に合ってます」

自分の料理は自分の口に合うし、生活費を出してくれているアデイスは裕福だし、着飾るのは最近飽きてきた。凝った服は疲れるのだ。ただでさえ胸のせいで肩が凝るのに、疲れるような事はしたくない。

だから彼の提案に用は無い。

「山奥に住んでいるんだらう」

「自然に囲まれていい所です」  
「私の城も自然には囲まれているよ。可愛い動物もいる」  
「可愛い動物ならうちには二匹もペットがいます。可愛いですよ」  
「もちろん、アデイスを含む」  
「犬とか、猫かい」  
「中間ぐらいです」  
「中間？」  
「フレアさんからいただきました」  
「……ああ、あの子か」  
息子の友人に手を出そうというのだから、暇人である。長く生きて  
いるから、本当に退屈で、これはただの退屈しのぎなのだろう。  
飽きるから新しい玩具を欲しがるのだ。  
美人は三日で飽きるというから、間違いはないはずだ。そうでな  
ければ、この美女の一人がいて、わざわざ聖良にかまうはずもない。  
「あの人見知りが入るなんて、優しい子なんだね」  
「人見知りなんですか、あの人か」  
「人見知りだよ。たまに会っても兄の背に隠れて目も合わせない」  
「嫌われてるだけじゃ……」  
また、つい本音を口にしてしまった。  
「ええ、どう見ても嫌われていますね」  
ヘレナが肯定する。  
「少なくとも、私にはそれなりに話をしてくださいますもの」  
大した関わりがない聖良ですら分かる事実だ。聖良よりも付き合  
いはあるだろうヘレナと話すのは当然である。  
「まったく、親に懐かないとは可愛くない子だ」  
「あの病んでる兄と一緒に暮らさせているのがそもそも間違いだ  
と思いますよ」  
「育てたのはあれではないよ。そもそも、男を育てるはずがない。  
顔を合わせるようになったのは大きくなって、女の格好を始めた頃  
かららしい」

あまり突っ込んだ事は聞きたくないので聞かないが、フレアも色々と苦労しているようだ。それでもあの男に育てられたわけではないというのは、せめてもの救いである。

しかし育ての親が関係なくとも、あのように個性的になるのだから、二人の性格については親が悪いのだ。親が。

やはりこの男に係わってはいけない。聖良は普通に生きたいのだ。君は可愛いから、何かされなかつたかい」

「逆さづりにされて殺されかけました」

「可哀相に。グリーディアに戻っても、あの子がいるから不安だろう。ここにいるといい」

「いや、今はもう大丈夫なので問題ありません」

二人きりになったら危険だろうが、そんな事のないように気を使っている。このように眠らされて誘拐されない限りは大丈夫だ。フレアの目もあり、もう誘拐などしないはずである。

「つんけんしたところが、また可愛いね」

こめかみにキスをされた。

最近よくされる。膝に座らせているとキスしやすい位置なのだろう。この世界に来た当初は恥ずかしくて抵抗したのだが、キス魔のアデイスと天然のネルフィアのせいですっかり慣れていた。最近はトロアも加わり、フレアにもされる。

この程度なら、流せる。

「唇に菓子のクズがついているね」

耳元で囁かれて、さすがに慌てた。美人ばかりのこの場所で、いい年してみつともない。顔があつくなり、手の甲で拭おうと動くが、その手を止められる。

「僕が取ってあげるよ」

「いえいえいえ」

「赤くなつて、可愛い」

なぜか顔が近づいてくる。

本気で嫌がっているのだが、嫌がるのも楽しんでいる。アデイス

もそういつところがある。ちょっとした意地悪をして、聖良が嫌がるのを見て楽しむらしい。一般の人間も、ペットにそんな事をして喜んだり悶えたりしているの、それと同じだ。

つくづく、行動パターンが似ている。

顔を背けるが、くすりと笑って続けている。

とても鬱陶しいのだが、口に出すのも躊躇われる。しかし、そのままでは危険だ。アデイスにされる分にはまだいいが、悪魔なぞにこれ以上触れられたくもない。だが、嫌がるのを見てもますます楽しげに嫌がらせを続けてくる。顔に手を添えられて、首を回せないようにされた。

危険だ。

さすがに、許容できない。

「嫌だと言ってるんです」

「困る顔が可愛いからいけないんだよ」

自信家らしき彼は、聖良の言葉など軽く流す。顔がさらに寄る。だめだ。

「無理です。とてもウザイです」

動きが止まった。やや顔が引きつっている。しかし再び動き出した。

この男は駄目だ。

「ぶっちゃけ好みのタイプじゃありません。とても受け付けません」  
素直に告白すると、セシウスの頬がひくひくと引きつった。

大きな音を立ててドアが開いたようだが、必死な聖良はそれどころではなく、首が横に動かせないならばと、うつむくように前に動かした。

結果的に頭突きなどしてしまったのだが、悪いのはこの悪魔だ。

「セーラ!？」

アデイスの声が耳に響く。

遅い。自分で対処したところだ。

しかし、軟禁されている場所を嗅ぎつけてくるとは、さすがはア

デイスだ。信じてはいたが、思ったよりも早かった。

「てめっ、うちの妹になにしてんだああああ」

トロアの罵声が部屋に響いた。

聖良の身体が浮き上がり、セシウスの身体が吹っ飛んでいくのが見えた。セシウスのいたところに、トロアの左足がある。蹴り飛ばされたようだ。

「きゃあああっ」

「セシウス様っ」

魔女達が騒ぐが、聖良はそれどころではなかった。

抱きしめられている。トロアに。

「ちよ、まってまってまってっ」

混乱して、手足をじたばたさせるが、抱えられているので力も出ない。

幸いにも本人は反省していたらしく、少し苦しい程度の方だったが、記憶にないはずの恐怖のために暴れた。

「セーラ、かわいそうにっ」

これにアデイスまで加わった。

彼の力が加わり、苦しさは増したが、肩の力は抜けた。寄りかかるとトロアの腕の中からアデイスの腕の中に移動させられた。

「こんな変態親父に監禁されて、さぞ恐かったでしょうね。何もされていませんか？」

擦り寄られ、撫でられ、先ほどまでされていた事なのに、アデイスがそれをするだけで気が抜ける。

少しばかり温度の低い彼の抱擁は、冬場は冷えるのでやめて欲しいと思っていたが、こういう時には良いものだ。思わずしがみつくのと、アデイスの腕に力がこもる。

気持ち悪い性癖の男のはずだが、この腕の中にいると安堵する。

「あのセーラがこんなに怖がっているなんて……かわいそうにっ」

「いや、怖がつているんじゃないよ、安心してらるんですよ」

知らない人ばかりに囲まれるのは疲れる。知っている者に抱きし

められれば、誰だって安心する。

セシウスが起き上がり、腰をさすって立ち上がる。蹴られたところよりも、床で打った腰を気にしている。

「せ、セシウス！？ 双灰のセシウス！？」

聖良の記憶に薄い女性が入り口で叫んでいる。どこかで会ったかも知れないが、今日、大量の美人と出会い、この世界の人間の顔の区別があまりついていない聖良はどこで出会ったのか思い出せなかった。

「セシウス……セーラを連れていこうとしていた悪魔ですね。まだ諦めていなかったとは……すみませんセーラ。私が目を離れたばかりに」

ぎゅうと力を込められ、足をじたばたさせてもがく。

「アデイス、苦しいですって」

「ああ、すみません。でも、もう離れませんから、安心してくださいね。ちゃんと憂いも始末しますから」

憂いとは、じつと聖良達を見ているセシウスの事だろう。怒るかとも思ったが、大人しい。

「なかなかいい男達だね。私にははるかに劣るが」

「ええ、いい男ね。本当にいい男だわ」

セシウスの言葉に魔女が続いたため、彼の頬がぴくりと引きつった。

「愛されてるのね」

「いい男が二人もいたら満足ね」

「ええ、満足ね」

魔女達は納得してくれたようだ。納得してしまうのが、なんとも自由な魔女達である。魔女は主を立てるものだと思っていたので意外だった。

「一途に愛されるのも、いいわよねえ」

セシウスに一途さが欠ける事は、誰が見ても明らかである。魔女達は気にしていないのかとも思っていたが、実は気にしているのだ。

それはそうだろう。魔女になることが目当てだとしても、やはりその他大勢というのは、聖良なら嫌だ。目的と感情を切り離して、こんな所には参加しない。

「ずいぶんと、和やかですね。セーラは可愛い格好をしていますし」「ただ珍しい子と話をしたかったからだから、当然だわ。この件に關しては、セシウス様は後からいらしただけよ」

ヘレナが前に進み出た。アデイスではなく、果物ナイフを手に入れて嬉々とするミラを睨み付けながら。

この中で一番危険なのは彼女だ。

「あの時の……」

「お久し振り。ルシウス様の魔女、ヘレナよ」

彼女は『ルシウス』を強調して言う。

「明日にもお返ししようと思ったのだけれど、自分から探し当てるとは……さすがはグリーディアの魔術師」

「何がお返ししようと思った、ですか。用が済んだら捨てるみたい  
に、よくもまあ」

「セシウス様は外泊の予定だったの。あなた方が来なくとも、間もなく戻られるルシウス様が、返してこいとおっしゃったでしょう。常識を持ち合わせたお方だから」

アデイスはじとつとセシウスを見る。

彼も常識のなさで、アデイスにとやかくいわれたくないだろう。

「できれば、そちらの女性から凶器を取り上げていただきたいのだけれど。私達は喧嘩はしない主義なの。もう、誘拐まがいの事はしないと思うわ」

「紛いではなく、紛う方なく誘拐です」

「セシウス様は誘拐のプロだから、やっぱり誘拐はするかも……」

「いやなプロだ。見習いたくもない」。

「プロとはなんだい。僕はただ言葉を解する美しい花を摘むだけだ。甘言に惑わされ、手を取った者を連れてきているだけだよ。今回は、帰ってきたら自分の部屋にいたのだから、自分の主義には反しない

さ。お前も可愛い小動物を見たら、触れたくなるだろう」

「いいえ、まったく」

ヘレナは子供の姿をしているのにずいぶん冷めている。聖良も自分が情熱的だとか、直情的だとかは思いもしていないが、ここまですべて冷めてはいない。

「まったく、お前は冷たいね。愛らしい物を愛でる心も大切だよ」

「ルシウス様の命令であれば従います」

「命令は関係ないだろう。せつかく年の近い女の子がいるのだから、楽しそうに話をしたり出来ないのか」

「さあ」

年は、近いらしい。どのレベルで近いのか分からないが、近いらしい。

「というか、途中からセシウス様が独占していたじゃないですかあ」

「私達もまだ遊んでいないのに」

「地味な服を華やかにするために、いろいろとする予定だったのに」  
悪魔は魔女達に責められ始めた。

聖良の想像する悪魔と魔女の関係とは違うらしい。

「お客様！？ 一体何を！？」

ホテルの従業員が入り口に駆けつけてきた。これだけ騒げば当然だが、これだけにしては外が騒がしい。

助かったのでもいいのだが、アデイスは何をしたのだろう。

「おやおや、騒がしいと思えば、やはりうちが原因か」

人をかき分け、セシウスによく似た男と、見た事のある女と、知り合い程度には面識のある少年が入ってきた。

「あれ……あれ？ 頭が……」

アデライトは記憶障害を起こしているらしく、頭を抱えている。聖良の事も忘れているのだろう。知り合った相手に忘れられるというのは悲しい事だ。

「セシウス、何の騒ぎだ。誰かが上階の部屋をしらみつぶしにしていると聞いたんだけど」



「それは僕の知るところではないよ。僕の魔女が可愛い女の子を連れ込んでいただけだからね。息子のお友達だから、もてなしていたんだよ」

「どんなもてなし方だと殴り倒したい。」

「保護者の了解も得ずにか。そりやあ怒って無茶もするだろう。そんな小さな子じゃ、心配にならない方がおかしいだろ」

未だに抱きかかえられている聖良を見て、セシウスそっくりの男が言う。そっくりだが、表情が違うので見分けはつきそう。セシウスが格好つけてすまし顔なのに対して、彼は皮肉げに唇を歪める。性格の差が顔に出ると、同じパーツでもちゃんと見分けがつくのだと感心した。

「ルシウス様、お帰りなさいませ」

ヘレナが主の胸に飛び込んだ。今まで人形のようにだと思っていた彼女が、少しばかり笑っていた。

「彼女は心から主を慕っているらしい。」

「ただいま。クセラのおかげでずいぶんと遅くなってしまった。すまなかつたな。無駄に苦労しただろう」

「いいえ」

悪魔に甘える彼女はとてみ可愛らしかった。

可愛いからアデイスがじっと見つめている。

いつもの事だが、少しばかり腹立たしい。

「アデイス」

「はい、何ですか。ああ、こんな所には長居をしたくないと言う事ですね。ここはミラさん達に任せて帰りましょう。悪魔が入り込んだのは、私達の責任ではありませんし、その尻ぬぐいをさせられた私達は被害者ですから」

「……………」

他人の部屋に押し入ったと言っていた。この時間では、寝ていたり、色々あるだろう。

「…………その前に、謝って回った方が」

「いいんですよ。悪魔が入り込んでいたとなれば、誰も文句は言わないでしょう。寝ている横に悪魔がいたかもしれないですよ。

グリーディアの魔術師は悪魔の天敵だと思われていますからね。私達は救い主なんですよ。

「じゃあ、あとは任せます」

聖良を抱き上げたまま、出ていこうとするアデイス。その腕に女の人がしがみついた。

「ちょ、任せるって、これだけ騒ぎを大きくして、ほっとくの!?! 双灰相手に!」

「あなたも悪魔でしょう」

「位が違う! 三人だけ先に帰ってずるい! あの連中と残していないですよ!」

彼女の言う三人には、トロアも含まれている。聖良さえ無事なら、竜の彼は本当にここには用がない。帰るのは当然である。

残る連中で恐ろしいのは悪魔とミラしかない。悪魔とミラがいれば普通に考えれば恐怖で身がすぐみ上がる。

「悪魔のくせに、気が小さいですね」

アデイスは彼女を悪魔だと口にした。彼女はミラに脅えていた女悪魔だ。つまり、彼女とアデイスは顔見知り程度の面識である。

「アデイス、いつの間にか懐かれましたか?」

「知りませんよ。大方、まともでない連中と違って、私はまともでいて、ここにいる実力があると踏んだのでしょう」

「なるほど」

異常な所にいた後では、聖良ですらアデイスが普通に見えて、一緒にいると安心する。それに近い感情だ。

「ほんと、騒がしいな。ヘレナ、俺達も帰るか。買い物も済んだし」

「はい。いいものは見つかりました?」

「さあ。浮かれているからそれなりなんだろう。武器の事は俺は分からないから、帰ったらクセラに見せてもらえ」

「はい」

どうやらクセラの武器を買いに行っていたようだ。前の時に破壊されたから、その関係かもしれない。

「騒がせて悪かったな。」

逃がしてしまうが、双灰の悪魔の名を出せば叱られる事もないだろう。馬鹿な弟のせいで、知名度は高いみたいだからな」

その言葉はミラの腕を押さえているユイに向けられていた。

聖良が誘拐などされたばかりに、彼は悪魔を逃がしたと叱られるかもしれないのだ。

「ユイ、閉じこめて殺せばいい。一匹なら、出来ない事もない」

「怖い怖い。さすがに人で有りながら殲滅の悪魔と呼ばれるだけはある。」

確かに、こちらには役にも立たない魔女もどきが半分ほど混じっているから不利だな」

ルシウスはセシウスの魔女達を見る。

魔道士とは、魔の道に落ちた悪魔の手駒であり、魔術などの能力がある事が前提だという。セシウスは、おそらく好み重視で実力は二の次で集めているに違いない。

聖良の事もよく知りもせず、気軽に声をかけていた。

ただのナンパ男なのだ。

「俺の方は、俺はヘレナさえ守っていれば問題ないからいいけどな」

「私達は見捨てるんですか」

クセラがアデライトの頭に手を乗せて言う。

「お前達とヘレナは違うだろう。か弱い女の子だ。叩いても壊れないお前等とは違う」

「失礼な。私だってか弱くはないが女……だぞ」

クセラは女の子、とは言えなかったようである。いい年して自分を『女の子』などというのは厚かましい。聖良ですら、そろそろ女の子は卒業だと思っているのだ。

「じゃあ、弟よ。俺は先に帰って寝る。子供は寝る時間だからな。お嬢ちゃん、これからもうちの甥っ子と仲良くしてやってくれな」

ルシウスとその魔道士達が消える。

「仕方が無い。帰るか」

「はい」

セシウスもそう言うのと、魔女達を伴い姿を消した。

ミラは不服そうに果物ナイフを握りしめ「結界を張れば逃げられなかったのに」と文句を言った。

アデイスも縫り付いたままの女悪魔を振り払って部屋を出る。

抱き上げられたままの聖良は、ゆっくりと歩く揺れが心地よくてうとうとと瞼が落ちそうになる。

薬が抜けていないわけではないだろう。いつもはとっくに眠っている時間だからだ。昔から、早寝早起きの習慣がついているから夜は弱い。

「あ、そうだ。アデイス、探しに来てくれてありがとう」

「セーラだって、探しに来てくれたでしょう」  
それもそうだ。

探しに来てもらって、お互い様とかそう言う気持ちよりも、それが当然という気持ちの方が大きい。手間を取らせたという気持ちよりも、感謝の方が大きい。もちろん前から感謝はあったが、感謝にも色々の違いがあるのだ。

久しく忘れていた感覚だ。

家族が生きていた頃は、こんな感情があった。

「ん」

アデイスの肩に頬を乗せる。大人と子供状態だ。

「眠いんですか。寝ていいですよ。ずっと一緒にいますから」  
「ん」

起きたら、きつといつものように、アデイスに抱え込まれて寝ているのだろう。その時になれば鬱陶しいと抜け出すために苦労しそうだ、安心してよく眠れる。

暗い部屋でも、よくも眠れる。

「予想と違う……」

起きた彼女はそう呟いた。

それはそうだろう。

彼女を抱きかかえるのはアデイスとミラ。そのアデイスを抱きかかえるトロア。

一つのベッドを四人で使っているのだ。隣のベッドには、竜の夫婦が仲良く眠っている。

ネルフィアが熟睡しているので、カジノの上階にあるホテルの部屋をそのまま借りたのだ。

「ハノさん……おはようございます」

気を取り直した彼女は周囲を無視し、首だけ上げて挨拶する。彼女のそういうところが、異様な順応性の高さを生んでいるのだろう。ハノは彼女のそんなところを好ましく思っている。ミラとは全く違う意味だが、強い子だ。

「おはよう」

「えーと……昨日はお世話になりました」

「いや、いいんだよ。あんな悪魔がいては、遅かれ早かれ被害が出ていたから。」

知り合いだっただからこそ、被害が未然に防げたんだしね」

「でも、どうしてそんな所に寝てるんです？ ユイ君は？」

ソファで身を丸めているハノは、笑いながらミラを指さす。

「ユイは神殿に。私は彼女が心配で」

万が一の事があつてはならない。多少刺されても死なない面々なので監視だけですんでいるが、普通の人間であれば、見ているが側が心配で眠れない。

「……………そういえば、うちでも近いところで寝ていましたね。い

つもすみません」

子供のような幼い顔に、可愛らしい笑みを浮かべる。

幼いこの顔に騙されそうになるが、彼女は外見ほど幼くはない、聡い女性だ。

監視も気付かれないようにしているつもりだったが、しっかりと気付いていたようである。

「ハノさんは、本当にミラさんが好きなんですね」

「どうしてそれで『好き』が出てくるだい？」

「だって、監視をするのはミラさんのためじゃないですか。私達なんて、ほついても大丈夫なのに」

「まあ……そうですね」

突き詰めれば、ミラの為だ。セーラの言葉は正しい。セーラの心配よりも、ミラの自由のためという意味合いが強い。万が一の事があつたら、ミラの今よりも行動が制限されてしまう。

ミラの事が好きだから、監視しているのだ。

ハノにとって、まともに話が出る人間の女性は、ミラとセーラだけと言ってもいい。とても話やすい。

だからセーラを心配しているというのも間違いでない。

「他の人に言われたら否定するけど、あなたの場合は純粋な気持ちだから、否定しなくてもいいのが楽だな」

「じゅ、純粋？」

「はやし立てるような勘ぐりが好きではないから。好きにも、いろいろとあるし」

「ああ、そういうことですか」

この好意を勘違いするような連中は、下世話すぎて苦手だ。とくに女性にはそういう傾向が強い。

「同じ意味で、あなたの事も好きかな」

「そうですね。私もハノさんの事好きですね。いいひとだし」

「そう言う人は、珍しいんだよ。私は半分悪魔だから。寿命も違うし」

実のところ、寿命の違いはまだ分からない。ここまでは普通に成長してきた。ここから先、歳を取って初めてそれを感じ取るのだ。そしてその長いか短いかまだ分からない寿命を、神子たるユイにも分ける事になる。分配ではないので、分けたとしても減りはしない。ただ、共有するだけだ。

この寿命でも足りないほど生きられたら、寿命だけは長そうな魔物を捕らえることになる。その時のために、ユイは使い魔を増やさない。

「ところで、助けていただけるとありがたいんですが」

しっかりと抱きしめられている彼女は、上半身をわずかに起こすだけで、それ以上動けないでいるようだ。

「愛されてるね」

「ほんと、アデイスと会ってからは……」

決して嫌そうではない。夫婦になると張り切る子供の竜を、彼女は彼女なりに愛しているのだろう。

「愛は重いと言うけれど、私は今、物理的に重いです」

三人がかりだ。ミラと竜二匹。

助けてやりたかったが、寝ている彼等に近寄るのは無謀。ミラの場合、眠る前に抱えているならともかく、寝た後に手の届く範囲に近寄ると、言葉には言い表せないひどい目に合う。

半悪魔のハノでも、生きていられるかどうか分からない。

「……………力及ばず申し訳ないけど、それに命を賭けるのはちょっと……………」

せめて寝ぼけて殺そうとしてからでないと、動く気にはなれない。止めるのも命がけなのだ。

「いや、助けを求めてから、自分でも無理かなあって思ったんで」

彼女はため息をついて枕に頭を預け、まずはアデイスを起こす事から始めた。

夫婦街のとある雑貨屋。女性が好む可愛い小物やアクセサリーが売られるその店で、聖良がしゅんとして肩を落としていた。

欲しい物が手に入らずに落ち込んでいるのだ。あまり物を欲しがらないセーラにしては珍しい事だった

その姿を見て、アデイスは抱きしめたい衝動に駆られる。

「セーラ、それがいいのか？」

落ち込むセーラにミラが声をかける。セーラが見ているのは、これまた珍しくイヤリングだ。片耳がなくなり、たたき売られている物である。

悪魔騒動はまだ昨日の出来事だが、相手が双灰の悪魔という事で一騒動があった。神子が侵入した悪魔を追い払い、少女が毒牙にかかる前に救い出したと、噂が広まったため、逃がした事に対しておとがめは無かった。

アデイスが部屋に押し入ってしまった者達も黙らせてもらった。

あのホテルに泊まる以上は旅行者であるが、神殿がどうにかしてくれたらしい。

だからこうして予定通りに買い物に来た。セーラが好む小物をいくつか買って帰るためだ。服も中にはセーラが着られる物がある。

魔女にもらった灰色のドレスも、あれはあれで可愛い。

「いえ、小さな頃に、母がくれた物に似ていたから、懐かしいなつて」

彼女は親の形見もないのだ。アデイスと違い、記憶があるからこそ辛い事もあるだろう。

「そっかあ。それじゃあ、欲しいねえ」

若い店員も幼い姿のセーラが寂しげに言うものだから、胸を打たれて見切り品のそれを手に取る。



「ちょっとまってね。在庫の事を聞いてみるから」

膝丈のスカートを翻し、店の奥へと走っていく。可愛い女の子だ。もう少し幼いぐらいがアデイスの好みだが、あれぐらいでもまだ可愛いと思う。自分がセーラよりも年下だとは思ってもせずに子供扱いしているところも可愛らしい。

「何を見ているんですか」

セーラに髪を引っ張られ、そのまましゃがんで彼女を抱き上げる。こうやって嫉妬するセーラも可愛らしい。

「在庫があるといいな、と。セーラが日用品以外のものを欲しがるなんて、初めてですから。一つだけでも買って、真似て作らせるのもいいですね」

「アデイスが作らせると高くなるでしょう。身に着けたいわけじゃないから、子供に与えられる程度のものがいいですよ。なければ、必要ありません」

寂しいことを言う。物は物だと割り切っているのだ。

「セーラ、男ってというのは、愛しい女性のがままに振り回されて幸せを感じるものなんですよ。もっと我が儘を言ってください」

頬にキスをすると、彼女はむうと唇を尖らせた。

「アデイス、子供のくせに男を語るか。ユイより男らしい」

ミラが腕を組んで頷く。

ゼロ歳児以下と言われたユイは固まった。中身は魔術師とはいえ……などと思っているのだろう。

それを見て、女街に入るための覆面で顔を隠したハノがくすくすと笑う。ここは夫婦街だが、女街にいる習慣で、覆面をしている者もたまにいる。顔に模様がある半悪魔なので、顔を隠すのに都合がいいのだ。

「本当に、ユイよりもずっとしつかりしているよね。」

セーラさんが姉と妹と母親と恋人を一人でこなしているから、早熟にもなるよ」

もしもアデイスが乗っ取りに失敗していたとしても、セーラが一

緒であれば早熟になっていただろう。その時は彼女もアデイスと一緒に竜の子供の栄養になるだけだが。

「私にとってはそれがユイの母なんだけど……」

彼は曖昧に笑う。

ハノは親もなく、人に蔑まれ、赤の他人に育てられたのだ。まっすぐ育っているのは、ユイの母親の人柄だろう。そんな立派な家族と、ユイは幼くして引き離されたのだ。この神子というシステムの残酷さは、何百年も変わっていないという。

「お客さん、お客さん」

店の奥から女の子が出てくる。その顔には笑みが浮かんでいて、希望はあるようだ。

「うちにはないんですけど、女街にある本店の方ならたぶんあるって」

「女街……ですか」

セーラはちらちらと面々を見て、ため息をついた。

「無理ですね」

「気持ちには理解できませんが、即答しなくても」

女はミラとネルフィア。他は男である。既婚者なら入れるが、本当の意味で既婚者はいない。

「大丈夫、入れないのはトロアさんだけだから」

「えっ」

ハノの言葉に、トロアは自分だけ入れないと言われて固まった。

「そんな事ないですよ。まあ神子様がいらっしゃるから、顔さえ隠せば一人ぐらい半端だって昼間の内は大丈夫ですよ」

店員の少女が言うと、トロアは顔を輝かせた。

セーラは不安げにアデイスを見上げてくる。提案は有り難いが、夫婦ごっこを続けなければならぬのに嫌気が差しているのだろう。アデイスは寂しくてセーラの頭をぐちゃぐちゃとかき回す。

「これ、本店の地図です。覆面はお持ちですか？ まだでしたら、うちでも売ってますよ」

「じゃあ、それをください」

「はい」

抱き上げられたままのセーラはため息をついて肩を落とす。  
そんなすべての仕草が可愛らしくて愛おしいのだ。

「え、入れない？」

店の入り口で、店員の中年女性の言葉を聞いたアデイスが愕然とした。

聖良はそんなアデイスを無視して店に入るが、彼は諦めずに何やら騒いでいた。もちろん無視して可愛くて広々とした店内を堪能する。可愛い雑貨に、可愛いアクセサリ。こういう店が嫌いな女性も珍しいだろう。聖良の世界にあったような物もあるが、異国風の珍しい小物がたくさんある。グリーディアともかなり違う雰囲気新鮮だ。こちらの方がごろごろとした無駄に可愛い雰囲気の小物が多い。グリーディアは魔術国家だから、生活の中にもそれが含まれていて、それっぽい小物が多いため、よけいにそう感じてしまう。

「可愛いです」

「セーラ、これ何だ？」

「ただの鞆でしょう」

「子供が遊ぶ奴か」

「って、ゴムですね。ゴムなんてあるんだ」

てんてんとよく弾む。可愛い鞆で、飾っておくだけでもいいようなものだ。ミラが遊んでいるというのも、見ていて安らぐ。ああ普通だ、と。

「ロヴァンが喜んで追いかけそうですね。お土産の候補として考え  
ておきましようか」

「ロヴァン、猫。よく動く玩具は喜ぶ。あと、いい匂いのする物も好き」

ミラもたまに遊びに来るロヴァンの事は可愛がっていた。懐いてくるからだ。

ネルフィアは、彼女にとっては用途不明の道具を見て首をかしげて、これはこれで楽しそうにしていた。

女だけで店に入ったとは思えないテンションだ。気楽でいいが、少し違うような気もするのだ。他の客はもったきゃぴきゃぴしている。

「セーラ、これ可愛いですよ」

知らない声で呼ばれて、肩を叩かれ、振り返って目を点にした。

金髪の美少女がいた。

見覚えがある。

鏡の中で見た事がある。

それが聖良を見てニコニコと笑っている。

「……………アデイス？」

「モリイですよ」

アデイスが用意した女の子の頭蓋骨、聖良の苗字からとってつけた名を仮に与えられている姿をしたアデイスは、聖良よりも背が低いため上目づかいで見つめてきた。

改めて見ると本当に可愛い。

「ほら、可愛い」

首に何かを当てられて、聖良は一步後退する。

「な、なんで……………そんな格好を」

周囲を気にして声を潜めて問う。

「女の子なら、お店に入れるからですよ。人気のないところに走っていつて着替えてきました。いけませんか？」

「わざわざ持ってきてたんですか。服まで」

服もちゃんとモリイのために買った物だ。ようは聖良が着られない、普通の子供服である。ベロア生地が温かい、袖が大きく広がっ

た赤色のドレスである。とても可愛い。

それはいいのだが、先ほどから聖良には、アデイスの話し方が変に聞こえる。

なんというか、いつもと話し方が違う印象を受けるのだ。聞こえるというか、印象だ。聖良はこの耳で聞いた言葉そのものを理解しているのではない。だから印象があるだけで、普通に聞こえている。翻訳の調子がおかしいのだろうか。

「アデイス、さっきから」  
「モリイです」

唇に指を当てられてため息をつく。そんな二人を見てミラが不思議そうに言う。

「セーラみたいな話し方をしている。どうした？」  
「は？」

聖良は意味が変わらず、間の抜けた声を出した。

「いつもはセーラが化けてますから、可能な限り合わせないと」  
聖良にも変に聞こえたのは、聖良の口調を真似ているつもりだったからのようだ。

「今で……私の話し方っぽく聞こえるんですか？」  
「セーラほど発音よくない。でも、発音いい」

他国語の発音など、生まれた時から住んでいないと明確な差を聞き取れなかったりするものだ。英語だって、癖があるのかないのか、聞いてもよく分からなかった。どうせ教材レベルの発音でないとまともに聞き取れないのだから。

それにしてもショックだ。

「そんなに悲壮感出さなくても……」  
それよりもセーラ、目当ての物は見つかりましたか？」

「いえ、まだ……」

他に可愛い物があるから、つい見てしまうのだ。欲しいかどうかと聞かれたら別にいらないと答えるが、見ているのは楽しい。

「お店の方に聞いてみましょうか。セーラ、耳飾りを出してください」

い  
」

片耳だけのそれは安かったので買ってきた。アデイスに渡すと、始めにアデイス達に注意していた中年だがとても可愛い店員に、事情を説明して商品を見せてもらう。本当に可愛いらしいおばさんで、布が重ねられたふりふりのエプロンがよく似合う。

「似たようなのがたくさんありますね。セーラ、どれがいいですか」  
アデイスに並んで覗き込む。片方だけの物とほぼ同じデザインの物を見つけた。だが、その隣にあった違う石がついたイヤリングの方が記憶の中の物に近い気がした。手に取ってみると、石の感じが似ている。つけられた値札を見るが、それほど高くない。貨幣が違うので、まず船の中で教えてもらった方法でおおよそのグリーディアの貨幣価値に直し、さらに今までの経験からおおよそで日本円に直してみる。おそらく、1万円ぐらいだ。

アデイスがお金を払うと耳につけてくれた。鞆の中から百均で買った鏡を取りだして見る。この世界では鏡は高い物らしく、これがキャベツ以下の値段だと言ったら驚愕された。粗悪品だが、多少乱暴にしても割れないので便利だ。

童顔の聖良には、アデイスが無闇に買い与えようとする高い宝石に比べればずっと似合っている。髪を上げる手を離せばすんとした髪に隠れてしまうが、首を振ってちらりと見えるのがいい。

「可愛いですよ」

満足していたのだが、目の前で飾る必要もないほど可愛い女の子に言われると空しくなった。

それでも、このイヤリングが可愛らしいのは間違いない。聖良が今着ている黒みがかった緑色のワンピースとよく合う。大人の女性がつけたら安っぽいのが、童顔の聖良にはちょうどよい。

「モリイにはこういうの似合いますよ」

気になっていた赤い花のついた髪留めで『モリイ』の髪を結って見せると、彼は満足そうに頷いた。

「アデイス、すつきりだ」

ミラが首回りが涼しげになったアデイスに言う。

「ミラさん、モリイです」

「モリイ？」

「その方が可愛いでしょう」

「うん」

ミラは小さい物は可愛いとと思っている節がある。だからモリイが小さいから可愛いとか、小さい髪飾りが可愛いとか、そういう小さいからという理由で頷いていそうだった。

「今日はいっぱいお買い物しましょうね。甘い物も女街が一番いいそうですよ。普段はミラさんもこっちは来ないでしょう。女同士、食べ歩きしましょうね」

「アデイスは面白い」

「モリイです。」

ミラさんは大人の女性だから、ファンシーな装飾品よりも、ちゃんとした物の方がいいでしょうか。宝石店は夫婦街のほうが良さげなんですけど。まあこちらは女性が自分を買うためデザインが充実しているそうですから、好みの物を探しましょうか」

夫婦街の宝石店に高い物が多いのは、男にねだるためだろう。

それよりも、同年代なのに明らかに年代が違う扱いは腹立たしい。ミラには大人っぽいアクセサリーが似合うのは、聖良にだって分かっている。フォーマルだったら高そうな石がついていても似合うだろうし、普段ならシルバーアクセサリーとか、格好良くてシンプルな物が似合う。聖良にはあまり似合わない物も、彼女には似合うと分かっているが、目の前で言われると腹が立った。

「セーラも他に欲しい物がありますか。なければ私が選んじやいますよ」

「……………」

聖良はため息をつく。理解されるのは難しいのだろう。もしくは、こうやってふてくされているところを構うのが楽しいのか。

アデイスがまた可愛すぎる物を手にしているので、ぎょっとして

真剣に選ぶ。

特別欲しいとも思わないが、いらないわけでもない。アデイスが選ぶよりは、自分の好みで選んだ方がいい。持っている服との相性を考えながら、いくつか髪留めとブローチを買った。元の世界ではした事が無いけど、スナップボタンもないこの世界では、ブローチはけっこう役に立つ。髪留めの一つはミラの頭につけてやる。ただのヘアピンだが、ミラにでも簡単につけられて、髪が邪魔になるのを防いでくれる。他にいいのがなかったら戻ってきて買って買う事にして、男達が待つ店の外へと出た。

「ミラさん、買ってもらったんだ。似合ってるよ」

ハノがいつものように穏やかに言う。

「髪、邪魔にならない」

「そうか。よかったね」

アデイスも基本的には穏やかだが、ハノのような穏やかさはない。穏やかさの質が違うのだ。アデイスは「エセ」と付くタイプである。

「甘い物買ってもらう。ハノも食べる？」

「何を食べるの？」

「甘い」

「そうだね」

まるで、幼稚園児と保父さんのようである。話が微妙にかみ合わないところが特に。

「アデイス、腹が空いたね」

朝食をたくさん食べ、道すがら買った物も食べたはずのネルフィアが言う。昼時とは言え、ラゼス達の食欲を考えると、彼女の食欲はとても旺盛だ。

「だから、この格好の時はモリイって読んでください。変装なんですから。あ、でもこの格好ならお母さんって呼んでも違和感ないですね。今度、男の子の用意しましょうか」

「男の子なら、自分で化ければいいだろ。お前なら今でも多少は出来るだろうからね」



アデイスはきよとんとしてネルフィアをじつと見上げる。

「そうなんですか？」

「形やサイズの人間の子供になるぐらいはね。余計な物が付きっぱなしになるだろうから、人前には出られないけど」

聖良はその姿を想像した。

尻尾と角と竜っぽい耳付き翼付きで、幼いらゼスの美少年。

「いいっ！ それいいですねっ！」

「は？ 何ですか!？」

聖良の真似をするのをやめて素で聞き返してくるアデイス。

「だって、可愛いですよ、絶対に」

「ええ!？ 不気味ですよ！」

どうやら、想像している物は一致していないらしい。

もう一つの可能性を考える。

人形の竜肌。

「どうせなら、尻尾付き美少年の方向で」

「セーラ……そんなに尻尾が好きなんですか」

「角も翼も好きですよ」

「……………色々、今までの自分を全否定されてきた気分です」

「何ですか？」

人間としてのアデイスよりも、現在の竜としてのアデイスの方が好きだと言っているのだが、人間のアデイスも顔は綺麗だと思うと伝えている。ただ、半分竜の美少年の前では劣ってしまう。

「小さいと可愛い。アデイス、可愛い方がセーラ喜ぶ。何が不満？」

「私が可愛くなくても意味がないんですよ。私は可愛い物を愛でるのが好きなんですから」

「セーラも同じ。趣味が一緒。何がいけない？」

ミラの言葉にアデイスは目頭を押さえてため息をついた。

ここには、本当の意味で理解し合えそうな者同士がいないと、今更ながらに気付いたようだ。

クレープに似たデザートを受け取り、はむりと噛みつく。生地は甘い、中身に少しヨーグルトと果物が入っていて、酸味が甘味を上手く中和して、とても美味しい。

「ヨーグルトもいいですけど、生クリーム入れたいですね」

「ああ、それは美味しそうですね。帰ったら作りましょう。甘い生クリーム好きです」

アデイスはモリイの姿で浮かれて言う。容姿というのはかなり威力を持つもので、中身がロリコンの変態だと知っていても、聖良はうっかり可愛いとってしまうのだ。

今なら厄介な相手 例えばフレアなんかに出会ったとしても、きつとアデイスでありアーネスである存在が化けているとは説明しても信じないだろう。

「ああ、街中を歩いててもオカマやら殺人鬼と出会わないのって、いいですね」

ふと、そんな事を思いついて口にした。グリーディアは何と会うか分からないので安心して外を出歩けない。

「何を唐突に。ここでもセーラを狙う悪魔には出会ったじゃないですか」

「でも悪魔はインパクト薄かったですし。それよりも普通に人を縛り付けてお茶会してた魔女のお姉さん達の方がよっぽど存在感が…」

あの悪魔は、ただ自信に満ち溢れていて、ハーレム作っていただけだ。よくある男の野望を実現しただけである。大した印象はない。「なんて言うか、よくいるじゃないですか、ああいう勘違い男。アデイスもその気があるけど、個性は断然アデイスの方が上です」

「失礼な意味の個性でしょう、それは。」

あとモリイです」

「モリイ……っていうか、自分の苗字なのに、変な気分です」

一口クレープを食べる。美味しい。幸せだ。ネルフィアがあつという間に食べて別の物を物色し始めた。大食い選手並の彼女にとつて、クレープ一つなど何の腹の足しにもならなかつたのだろう。

「お母さんはいい食べっぷりですね。おごりがありますよ。今度から二つ三つ買わないといけま……」

アデイスが固まった。いきなり前にいたアデイスが足を止めたので、背後にいたラゼスがつんのめる。

「アデイ……モリイ、どうした？」

息子の望み通り、聖良の苗字で呼ぶラゼス。

そのアデイスは震える指先を、とある店に向けた。

聖良もあまりの事に愕然となる。

見覚えのあるのが四人が出てくる。

昨日見た仮契約の魔女二人とおそらくまともな方の悪魔と、そして

「あ、昨日の……セーラさん」

「え、セーラっ!? やだ、こんな所で会えるなんて!」

相変わらず女装しているフレアがいた。フレアがいた。グリーディアにいるはずのフレアがいた。

「セーラ……」

アデイスが横目で睨んでくる。聖良が何をしたというのだとにらみ返す。

なぜか皆の視線を感じる。理解できない。

そんな中、トロアだけが後ろから頭を撫でてくる。

「セーラ、今度から、迂闊に会いたくない奴の名前を口にしたりしない方がいいぞ。にーちゃんも、最近お前が心配だ。ここまで来ると普通じゃないな」

トロアにまで言われると、聖良は自分の運命とはそこまでののかと落ち込んでうつむいた。

聖良には見えないが、皆は呆れ顔をしている。そうに違いないと、聖良は被害妄想混じりの怒りを燃やす。それを外に出しても意味はない。フレアがどこにいても彼の勝手だ。偶然、居合わせただけなのだ。

悪意の無い彼を一方的な八つ当たりで恨んでは、人として終わってしまおう。

「……………なんでいるんですか、こんな遠いところに」  
怒りはぶつけないように、疑問をぶつける。

「みんなにセーラの事を聞いたのよ。あと、アデイスが暴れ回ったつて。じゃあ、たまには聖都にでもショッピングに来ようかしらつて。まさか会えるなんて…………。」

「あら、アデイスがいない？ 男街に置いてきたの？」  
フレアが目を細めてアデイスを探した。

「あなたは女の人として入ってるんですね…………。」

コートを着て男だと分かるラインが隠れている。顔の模様も濃い化粧で隠れているし、見た目は女性にしか見えない。

「あら、モリイも一緒なのね。二人一緒のところは始めて見るわ。二人とも可愛いわ」

アデイスは聖良の背に隠れるようにしている。誘拐されて殺されたかたの竜の子供だ。脅えて当然である。口数が減ってもおかしくはない。

「この子が脅えているから、失礼します」

「ええ、なんでえ？ お兄さまはいないわよ。お話ししましょうよ」

「この子にとってはフレアさんもお兄さんも大した違いはないんですよ。竜のぬいぐるみが欲しいとか無茶苦茶言ってたんでしょう」

「でも、いたのはアーネスでしょ。ちょっとビツクリしてるだけよ。なんて前向きなのだろうか。人が嫌がっているのが楽しいのだろうか。鞭を持っているような相手だから、可能性は高い。」

「フレア、無理強いはするなよ。」

お嬢さん、昨日はどうも。弟が失礼をしたな。今日はお友達と一

緒か」

かがみ込んで微笑みかけてくる悪魔は、気さくに笑って優しくに見えた。フレアが慕うだけあり、弟よりもこっちの方が好感度は高い。

「今日は弟はいないから安心していい」

それは安心だ。

「ごめんねセーラ。あの変態親父に監禁されたんだって。兄さんと違って下心しかないから、もうどうしようもない人なの。本当にごめんなさいね。私も本当は縁を切りたいんだけど、切ったら切ったで別の子が被害を被るだけだし。」

弟が私みたいにされるなんて可哀相だわ」

一斉にため息をつく悪魔一同。立場は違うが、聖良もこんなため息をいつもついている。

「……………話していても暗くなりそうですし、行きましようか。モリイが脅えてますし」

「そんなに嫌わなくても。私は恐くないのよ」

「いや、誘拐したのあなたでしょう」

「……………ううん……………こっちの方も可愛いから好きよ」

竜と人の姿とどちらが可愛いかなど聞いてはいない。

ある意味前向きな発言に、聖良は呆れてそれ以上の言葉を失った。

「……………そういえば、そっちはアデライト君がいませんね」

いるのはヘレナとクセラの二人だけ。一番よく知っている彼がいない。

「あの子は頭が痛いつて家にいるみたいよ。」

記憶操作の後遺症で苦しんでいるようだ。可哀相だが仕方がない。しかし、あの大きな犬に会えないのは残念だ。

「そのアデライトから今連絡が来た」

ルシウスが舌打ちして言う。

「また何かあったのか」

「そうだな。謹慎を命じたはずの愚弟が逃げた」

落ち着きのない弟だ。それに有害な実力が伴うと、巻き込まれる側がとて不幸である。そして身内も不幸だ。

「ちよつと俺は行つてくるから、適当に遊んでおけ。金はほら」  
重そうな財布を渡し、裏路地へと走り込むルシウス。人目を気にする程度には常識があるらしい。

「うわつ、金貨じゃない。ホント、下々の生活を知らない悪魔ときたら、こんなの渡されても両替しなきゃならないじゃないの」

フレアが数枚金貨を取り出し、太陽の光を当てて眼前で見る。見上げていると、彼女は視線に気付いて目を逸らした。

「そうだわ。お騒がせしたお礼に、何かおごりましようか。昼食はまだでしょ?」

「けっこうですつて。お金はアデイスのおかげで不必要なほどありますから。それに、神子の混じつた相手を誘うなんて変ですよ」

「いいじゃない。私を支配する余裕がない相手なんて恐くないわよ。半悪魔は悪魔よりも容量を食うらしいから、私を支配する馬鹿なんてそついないわよ。神子よりもミラの方がよっぽど恐いわ」

その割には笑っている。

「なんでそんなに楽しそうなんですか」

「楽しいもの。ここの街つて、私みたいなのでも女扱いしてくれて好きよ。それにセーラとモリイもいるんだもの。ついでにミラも。楽しいわよ」

聖良は、その笑顔を見て脱力する。

アデイスに目で訴えかけると、彼は肩をすくめて首を横に振る。念のためか言葉は発しないが、彼も諦めたらしい。

「昼食だけですよ。ただ甘い物食べようとしてただけですから」

「デザート美味しいところね。いいところがあるわ」

「ヘレナさん達引いてますよ」

なぜこうもテンションが高いのか、聖良には理解できなかった。

ヘレナ達も引いているように見えたが、実際のところ分からない。手を引かれ、アデイスの手を引いて、連れて行かれた。

その夜は疲れ果て、夕食も取らずに泥のように眠った。

「立派な観光地でも、ど真ん中で寝泊まりしていると、ありがたみ  
つてあつという間になくなりますよね」

聖良の言葉に隣に座るアデイスが無言で頷いた。

二人で中庭が見えるベンチに並び、神殿の庭園美を眺める。

かなり透明度の高い大きめの板ガラスが使われた温室まである。  
透明のガラスはとても高価な物らしい。普通は透明度の低いガラス  
を細かく組み合わせるらしいが、温室は大きめの板ガラス  
が使われている。聖良からすれば、大きなガラスかと言われると首  
を傾げるほどだが、おおよその値段を聞いて、さすがは神殿だと感  
心してしまった。

「つくづく、宗教つて儲かるんだなあつて思いますよね」

「聖都は神子を抱えてますからね。寄付しないと、普通の人間では  
手のつけられない魔物が出た時に、邪教徒として見捨てられますか  
ら貢がれるんですよ。」

並の人間では束になつても敵わない魔物つて、意外と多いですか  
らね。私とか」

聖良はアデイスを見つめる。

彼も、世間からすればその一匹だと、自覚はしているらしい。

「セーラ、腕輪、慣れましたか？」

女街の観光の翌日、結婚腕輪を買いに行った。本来は外せないも  
ののだが、職業上、どうしても外さなくてはならない者のために、  
外せるタイプのが売っている。神殿で溶接したもらうための継ぎ目  
と、反対側に外すための継ぎ目があるのだ。溶接といっても、装着  
者にはほとんど影響が無い。杖を腕輪に当てられて、少し熱を感じ  
たら取れなくなっていたのだ。

聖良は一番細いのを買った。それでも余裕がある事から、この世



界の人間との体格差を思い知った。アデイスが細い細いとよく手首を握るのだが、からかいでもなく本当に細く、子供のような腕であつたらしい。

「慣れましたよ。軽いですし、外せますし」

この揃いの腕輪をアデイスはたいそう気に入ったようで、外しているとなぜ外すのかとしつこい。

「ところで、化ける練習はいつから本格的に始めるんですか？」

「まだ尻尾人間を諦めてないんですか……」

「だって、可愛いですよ。お膝の上に載せて一日中撫でてあげますいつもされている事を、アデイスにやり返してやるのだ。考えるだけで楽しくなり、胸が躍った。

「セーラの中では、一体どんな完成図が……」

「なんで伝わらないんです？ こんな感じですよ」

聖良は地面に小枝でデフォルメされた小さな子供を描き、そこに尻尾やら角やら書き足して見せる。

「……確かに可愛いですが、どんな発想してるんですか……」

「こうでなくても、アデイスはまだ子供だからきつと小さいですよ。膝の上に乗せられる、一歳から五歳ぐらいまでの大きさが希望です。絶対に可愛いです」

聖良は落書きを丹念に足で消しながら夢見て話す。

「確かに可愛い盛りの年齢ですが」

「色々可愛いパーツが生えてたらすごく可愛いですよ。可愛ければいいんです」

「そう言われると可愛く思えてくるのが不思議ですねえ」

そこで会話が途切れる。

気まずい雰囲気はない。

いつも一緒にいるから、会話が無くても苦痛はない。ぼーっとしているのは楽しい。

庭を神官が通り、こちらに微笑み挨拶の意味で胸の前で指を組む。「そういえば、ここって本当に敵対者じゃなかったら寛容ですねえ。」

「神教なのに、他の宗教っぽい弾圧したことないんですよ」

お布施が無いと助けられないようだが、それは弾圧とは言わない。自分に無関係な相手を助けられないのは当然の事だ。

「リシア教はそういう弾圧は表向きはないですよ。元々、宗教団体ってわけでもなかったですからね。リシアっていうのは、昔の神子、英雄の名前なんです。つまり英雄集団が宗教団体になったんです。名は変われど神は一つ。万能たる神は、奇蹟を地上に落とす度、人が勝手に名付けて呼び始めた。だから神は多くの名を持つと言われている」

「つまり神様が何人もいるかも知れないのを、それは全部自分の神様の事だからって扱いをし続けているってことですか」

「つまりそういうことです」

「宗教戦争を起こさないのはいいですね」

「目に見えるシンボルがある強みです。それで金は巻き上げてるみたいですよ」

「安全対策に必要な税金みたいなものだと思います」

「そうですね。安全のためですからね」

グリーディアの町中に住んでいると平和ボケして、他所の国では街の中でも安全とは言え切れない事を忘れるんですね。

クレアが支配者になってからはいろんな意味で平和だそうです」

「支配者って……」

まあ、支配者っぽいんですけど」

国王である夫が妻に支配されている。クレアは優しげで笑顔の綺麗な女性だが、ああいう人が一番腹黒いのである。

「平和はいいですねえ」

アデイスが聖良の肩を抱いて言う。払いのけようかどうか悩みなから、温かいのでいいかとそれを許した。

「そんなこと言っていると、何かが来て平和を壊していくんですよ」

「この平和が壊れるなんて、悪魔や竜が堂々と攻め込んでこない限りはないですよ」

さすがにそれはないだろう。竜は強いが人間の常識と大して差のない常識を持っているし、悪魔は紛れ込んでも暴れたりはしないだろう。悪魔は群れないらしいから。

「おや、ミラさんの気配が寄ってきますね」

「そんなものが分かるんですか」

「ミラさん限定ですけど、最近分かるようになりました。きっと野生の本能的なものでしょう」

彼はしみじみと言う。もう竜なので人間ではないが、ますます人間離れが進んでいる。人間の聖良は生温かい目で見守るしかない。生暖かくなるのは、仕方がない。

「ほら、来た」

アデイスが空を見上げ、聖良がつられて上を向くと前方の地面に何かに着地する。

「セーラ、行く」

ミラの唐突な言葉はいつものことで、理解するには問いかねばならない。

「どこにですか？」

「竜が出た」

聖良は頭を抱えた。

今さっき否定した考えがまさにここに現れた。

だから余計なことを言わない思わないと決めたのに、どうしても思考がそちらに行ってしまうのだ。

「竜が街を荒らした」

「いや、あの、そういうのは……」

聖良はちらとアデイスを見た。彼にとってはもう同族だ。

「ネルフィア達は狩ってもいいと言っている」

「いいんですか？」

「人間が犯罪者を取り締まるのは同じだそうだ。何かを要求するだけならともかく、壊滅したのなら里に戻っても追い出されるらしい」  
ネルフィアは一人で小さな街で生贄を賢い人間を一人だけ要求し

た。それをアデイスの部下が聞きつけ、口車に乗せて、その結果聖良がいる。考えると切ないのでそれを放棄する。

「それはいいですけど、どうしてセーラまで？ 神子の仕事でしょう。ついていくのはまずいんじゃない？」

「行かないのか？」

アデイスの突き放す言葉にミラは少し寂しそうな顔をする。

女性のこういう顔は、同性から見ても卑怯だと思ふのだ。

「でも、行ってどうなるんですか？ お仕事なのに、私は何も出来ないから邪魔になっちゃいます」

聖良は戦力外である。竜を狩るのについて行く意味が一片もない。

「ラゼスが竜の里に行くと言っている。あの里は神子と不可侵協定を結んでいるから、竜が招いてなら入れる」

「不可侵協定？」

「竜の里の者に手を出したら可能な限りの人間を殺す。人間を意味なく殺したらその時は可能な限りの竜を殺す。それを防ぎたかったら、犯人を残らず差し出す。」

一般人には内緒の協定」

物騒な協定である。

神子に支配されないため、報復を防ぐための自己防衛だが、ミラの言い方は恐ろしい。

「明らかな罪を犯した竜は狩っていい。」

人間が先に手を出したなら話は別。子供は狙われる。子供を狙っていったら誰であつても殺していい。たまに権力者が竜を欲しがつて、神殿に粛正される。

竜に手を出すと報復で死者が出るから、大量殺人と同じ扱いになる」

聖良は隣のアデイスを見た。

今思えば、成功しなくて本当によかった。もしも成功していたら、ネルフィアがどれだけ暴れていた事か。

迎え撃つ準備さえ整えていれば、親ぐらいなら殺せると思つていたのだろう。

「グリーディアと竜の里は離れすぎているというか、竜の里からグリーディアまでは難所のため、魔術師も手が出せないんですよ。

もつと行き来がしやすかったら、そんな風になつていたでしょうね。だからお父さん達も遊ぶ時は近いグリーディア側よりこちら側の方に来ていたみたいですし」

アデイスは自分のしたことを誤魔化すようによくしゃべった。罪を自覚していると、人は妙に饒舌になるものだ。

「ユイ達は、竜の里に行つて、その竜を狩つていいかどうか聞くんですか？ 大変ですね」

「面倒な手続き」

お互い、全面戦争は避けたい。妥協点を探す。まどろっこしい。切ればいいのに」

ミラは竜と喧嘩をしたくてうずうずしているのだろうか。さすがは強者。強い者を求めているのだろうか。刃物を使いたくて仕方がないだけという可能性も捨てきれない。

「でも、またたくさん竜に会えますね。お友達出来るといいですねえ、アデイス」

「そうですね。お友達を作りに行くぐらいの気持ちで行きましょうねえ、ミラさん」

のほほんとしていた朝の一時だったが、まさかこのような形で崩れるとは。

これ以上遠回しに拒否しても、ミラの機嫌が悪くなるだけだ。

「セーラ、今度は誘拐されないように。アデイス以外の子供、危険」アデイスは子供の竜に食べられたのだ。そういうつもりでないかと危険である。聖良は噛まれないように注意しないといけない。竜が日本の女子高生レベルの知識など得ても何の意味もないし、害しかないだろう。

神子の女の子というのは想像と違った。聖職者然とした、楚々とした女性を思い浮かべていたのだ。

男の方を見て気付くべきだったが、まるでゲームのキャラのように露出度が高かった。

冬なのにコートの中はビキニのトップスのようなものであった。

その格好の理由は簡単。肩から腹にかけてアザがあるから。それ以外の理由はないだろう。ユイと同じだ。彼女のためにしつらえられた特別衣装である。

「あんな所に出るなど、女性なのにかわいそうですね」

「そうですね。見ているだけで寒そう……」

聖良は見た目から暖かい革のコートを着ているので、あんな格好をしたらと思うとぞっとする。見た目が恥ずかしい事は、触れるのも可哀相だ。

「神子のコート、防寒機能がすごい。寒くない」

ミラが声を潜めずに教えてくれる。それに気付いたユイと同年齢の神子の少女は身体を隠した。やはり本人達もまだ抵抗があるらしい。

「レファリア、移動を」

神子のウインデルは悪魔のレファリアへと命令した。彼は比較的まともな格好をしている。片袖がないだけだ。マントを羽織っているので一見おかしな所はない。

もしもユイと現れる場所が逆だったら、いい年した大人の半ズボンという見たくもない物が出来上がるので、これでいいだろう。

「本当に部外者がついてつていいんですか？」

アデイスはついて行きたくないのだろう。ユイ達だけならともかく、その他がいるのだ。

「いいどころか、ついてきてくれるとむしろ有り難いから。今回は彼女に竜を支配させるのが目的だし、ミラだと生け捕りが苦手だから」

「手伝わせる気ですか」

「まあまあ。堅いこと言わずに。竜相手だとミラも手加減が難しいらしくて、殺しちゃう可能性が高いんだあ」

「竜を単身で殺せるっていうのも……ほんと人間離れしてますよね」  
アデイスは首を横に振ってため息をつく。

話がまとまったので、レファリアが集まるように言い、『移動』をした。

目の前が歪んだかと思うと景色が変わり、知らぬ山の中にいた。傾斜があるから、山の中だと判断した。

「こちらです。少し歩きますが、これ以上先に転移すると、即座に攻撃されかねませんので」

「こつちの竜は攻撃的ですね」  
もちろんネルフィアのような攻撃性ではなく、もっと知的さを感じる攻撃性だ。

アデイスに手を引かれて歩く。皆の足が長いので、ついて行くのは大変だ。アデイスが抱き上げようかと提案してきたが、断って元気に歩く。足に合った特注のブーツのおかげで山道でもそれほど辛くない。

「セーラ、見えてきましたよ」

身長差のためか聖良には見えない。ぴよんぴよんと飛び跳ねると、ちよこつと屋根が見えた。

「セーラ、可愛いからやめてください」

「意味分かりません」

「あんまり可愛い事をするとう抱きしめちゃいますよ」

この男はどこまでダメ男なんだろう。

渋谷と大人しく歩き、竜の村が見えるところまで来た。やっぱり木造の家だ。ギセル族が作る、素朴な木の家。

「可愛い村……」

神子が呟いた。

サイズも竜のイメージからすると小さく、予想よりもはるかに可愛いかっただろう。いや、グリーディアの竜の家よりもさらに可愛い。デテル達が造ってくれた、聖良達の小屋はこちらに近い。

「あ、人間だ！」

アデイスぐらいのサイズの竜が警戒しながらもこちらを見て、他の子と呼ぶ。

グリーディアには子供はけっこういたが、ここには三頭だけだ。

警戒心が強くて家にいるのか、本当に子供が少ないのか。

ラゼスのように青白っぽい子達だ。一頭は角にリースのような物をつけているから女の子だと思われる。

いきなり食べてきそうな子は混じっていない。

「あれは子供ですか」

巫女がユイに尋ねる。

「子供みたいだね。全体的に丸っこいラインだろ。頭が大きくて丸々している」

子供は大人に比べて同じサイズでも頭身が低い。それが可愛いのだ。

「あ、ラゼスさんじゃないか。なんで人間と一緒に!？」

ラゼスの知り合いが混じっていたようだ。アデイスが困ったような顔をして、ぐいぐいと父の服を引っ張った。

「分かってるから」

どんどん知られていく可能性があるから、アデイスが竜だとバレていくのが嫌なのだろう。念には念を押ししたいのだ。

神子達が驚いたようにラゼスを見ているから不安でならない。

「こんにちは。今日は神子が一緒なんだ。長に挨拶をしに行くから、家にお帰り」

「神子? どうしてそんなのと」

「大人には色々と事情があるんだよ」



「ハトラを狩りに来たのか？」

「ハトラか。変わった子だったけど、なんでまた」

「知らない。でも、人間とは仲がよかったのに……」

「そっか。ちょっと長と話してくるよ。ネルフィ達はここに残ってくれ。関係あるのは神子だけだしね」

余分なのを連れていってくれるらしい。のんびりと交流を深めていなさいという意味だろう。

ついでにミラとネルフィアを見ていってくれと言う意味もありそうだ。どこに置いていても心配になるのがこの二人である。

手を振って見送ると、ラゼスと話していた子供がこちらに近づいてくる。子供と言っても一匹はだいぶ大人に近い気がする。

「あんたたちは神子の付き人か？」

「私達はラゼスさんの知り合いです」

アデイスの代わりに聖良が答える。彼が自己紹介するのはまた今度でいい。自分の姿で来た時だ。

彼らはくんと匂いを嗅いで、やがて聖良の鞆に鼻頭が当たり、くんと鼻を鳴らす。

「いい匂い」

確かにこの中には菓子類が入っている。なんて鼻ざとい子だろう。「お菓子、食べますか」

先日買った菓子だ。小腹が空いたら食べようと思っていたが、気付かてしまったのは仕方がない。子供相手に隠すのも大人げないというものだ。

ミラとネルフィアの分さえ確保しておけば平和である。逆を言えば、二人には食べさせないと不機嫌になって危ない。

鞆から取り出して見せると、他の子達も寄ってくる。アデイスぐらいのようにも見える小さな子もいて可愛いらしかった。

聖良にはまだ子供、少年、大人、という大きな区分しか分けられないのだ。話しかけてきたのは竜は少年に見える。中ぐらいの子は、女の子だろう。一番小さな子の性別すら分からない。

「ほら、手を出して」

彼らは手の甲を差し出す。アデイスも言っていたが、手の平側に置かれても脆い物は食べにくいらしい。

そこに一つづつクッキーを置く。ミラとネルフィアにも渡す。人数が少なくてよかった。

「美味しい。おばちゃんの作るお菓子よりも美味しい！」

「人気のあるお店で買ってきたんですよ」

「もっと」

「アメもありますよ」

「アメ！？ 食べたことない！」

砂糖はけっこうな高級品だ。人里離れると手に入れにくくなる。彼等が食べる甘味ははちみつ程度だろう。

聖良の知っている砂糖が使われたケーキなどの菓子類もかなり贅沢な物だ。

だから竜の彼らが『飴』という存在を口にすることも滅多にないだろう。

「噛んじゃダメですよ。舐めて味わってくださいね」

一粒ずつあげると大人しく舐める。

ミラとネルフィアにも一粒ずつ。この二人の時は、大きな子供を相手にしている気分になる。

「ところで」

今まで傍観していたアデイスが竜達に声をかけた。

「ハトラさんという方は強いんですか？」

「ハトラは強いけど、神子の方が強いよ。神子は怖いんだ」

神子は怖いと教えられて育ったのだろう。

死ぬまで支配されてしまうのだから、大人達が子供達をそんな目に遭わせないように、小さな頃から脅しているに違いない。

神子が来たということは、実際にそれが出来る可能性のある人材がいるという事なのだから、彼等はけっして悪さをしてはならない。聖良はアデイスを心配したが、ユイが言うには、魔術を使いこな

すほどの竜を支配できる人物はユイ以外にはいないらしい。そのユイには空気がないから、安心していいのだそう。

子供達から見て強い竜を支配できるかもしれないと連れてこられる巫女でも、アデイスが支配されないとユイが評価するのだから、魔術とは特別なようだ。

それとも、あの巫女はまだ若いから、ユイが実力を知らなかっただけなのかもしれない。服装を見られて恥ずかしかがっていたと、まだ慣れていないということだ。見た目が若いだけではなく、経験も浅いのだ。

だとしたら、ユイの予想が外れて、アデイスを支配できるかもしれない。

アデイスもそれは考えているだろうから、彼女がどれだけ可愛くても、それなりの警戒しているだろう。

「ハトラ、どうなるのかな……」

「仲が良かったんですか」

「ううん。いつも一人だったよ。人間には手を出さなって言われてたのに、よく人間と遊んでた」

「人間？」

「あんまりよくない人間。悪党だ。だから祝い事のある日にしか戻ってこないんだ」

悪党。マフィアとか、密猟者とか、山賊とか、そういうやつだろうか。

何が楽しいのかは理解できないが、悪い人間にでも利用されたのだろうか。

「頭の痛い話ですね。それで狩られるなら自業自得ですが……なぜ街を火の海などに……」

「よくわからないよ。人間の世界の事は人間の方が詳しいから、オレ達の方が聞きたいよ」

まだ子供だから、怖い神子がいる外には出たこともないのだろう。不安そうにしている。

「まあまあ、暗い話は大人に任せておけばいいんだよ。

それよりもセーラ、近くを歩いて回らないか。街の中よりは気楽に歩けるし、初めての所はわくわくするだろ」

トロアがセーラを人形のように抱き上げて、頬をすりすり寄せた。

じたばたしていると、むすつとしたミラがトロアから聖良を取り上げてしっかりと手を掴む。トロアはあからさまにしょんぼりとうなだれる。

彼もミラには何も言えないらしい。

子供達よりも子供の相手をしている気分になる。

子供達に連れられて、里から少しだけ離れた高台に来た。

きっと彼らも、この大人達ダメだと思ったのだろう。迷子になるといけないからと、案内してくれたのだ。とつてもいい子達だ。

ここからは遥か遠くに、小さく街が見えた。城壁が囲われ、中央には高い尖塔がある。

「あれ、聖都ですか」

「そのようですね。竜はもつと高所にすんでいるのかと思ってましたけど、意外と近い場所なんです」

竜の村は木々に隠れて見えない位置にあるが、竜の翼ならそれほど時間をかけずに往復できそうだ。もちろん竜なら。高さも距離も、人間の感覚では低いとか近いとは思わないだろう。

「今日は天気がいいからよく見える。夏だとあんまり見えないんだ」  
最年長の子供の竜が、目を細めて言う。

聖良は地面に敷物を敷いて腰を下ろした。景色もいいし、ハイキング気分になる。

「トロアさん、お茶でも飲んでみましょうか。話がすぐに終わるとも限りませんし」

トロアに持つてもらった荷物の中から、携帯用のカップと鍋を取り出し。三脚を組み立て、水筒の水を鍋に入れてから、携帯バーナーに火をつけた。ティーポットなどという洒落た物はないので、湯が沸くと火を止めてから、お手製ティーバッグに入った茶葉を入れて蓋をして数分待つ。

携帯鍋は底が浅めで、三つ重なり蓋がある便利な物だ。フライパン代わりにもなる。

「今気付いたんですけど、カップ足り無いどころか、竜の手だとこのカップ持てないんじゃないか」と

子供達にもあげようと思っていたのだが、このカップじゃ口に流し込むようにしか出来ないと気付いた。

「鍋のほうならいいんじゃないか」

「あ、そうですね。でも、これじゃ足りそうにないですね。近くに水場ってありませんか？」

「井戸があるよ」

井戸水なら綺麗だろう。火も通すので大丈夫だ。

「じゃあ、アデイスお茶を入れておいてください。くんできます」

「水くみなんて私が行きますよ。セーラは座っていてください」

「俺も行く」

肩を叩いてアデイスと少年竜が行ってしまうので、聖良はお茶を用意する。

ミラとネルフィアと子供達にお茶を渡すと、やはりなくなってしまう。鍋は少し入れたつもりでも、けっこうな量になってしまった。かといって、少ししか入れないと見栄えが悪い。

「いい匂い。お茶なのに果物の匂いがする」

中ぐらいの子が味わって飲み、一番下の子があつという間に飲み干す。やはり、物を食べる時は、サイズ的にも人型がいいようである。

「そろそろお昼の時間ですよ。ユイ君達遅くなるんじゃないか」  
小腹は空いているが、昼食を早めに取れるなら菓子は食べたくない。遅くなりそうなら食べたい。

「すぐに戻れると思う。ユイ、私と離れると挙動不審になる」

「そうですね。ハノさんも一緒に行っちゃったから、心配しているでしょうね」

ミラの事だ。何かを見つけて襲いかかる可能性もある。

「ところでアデイスが戻ってきませんが、井戸って遠いんですか？」

「そんなに遠くは……」

ばさばさと、耳慣れた竜の風切り音がするので視線を上げた。

木々上にアデイスを案内してくれた男の子の姿が見える。

「大変だよ！ あの人間、ハトラにつれてかれちゃった！」

聖良はあまりの事に脱力した。

「またか。本当に誘拐が流行っている」

ミラは腕を組んで、あまり心配していない風に言う。

「セーラ、何回目だっけ」

トロアに問われ、思い出して数える。

「ええと……アデイスはまだ三回目ぐらいです」

「まだって、もう三回も？ 兄ちゃんはお前達の将来が心配だぞ」

人間だったアデイスの頃もカウントしたが、どうでもいいだろう。

いい大人が誘拐されまくっているのは事実なのだ。

「ええつ、あれ、誘拐だったのか！？」

男の子が驚いて仰け反った。

「え、違うんですか？」

「知り合いつぼかったから、ちょっと強引なだけかと」

聖良は頭を抱えた。

アデイスは一体どこで竜などと知り合いになったのだ。

「ハトラさんって、グリーディアには？」

「さあ。旅が好きだからよくわかんない。とくに海が好きだから、

グリーディアにも行ってると思う」

幸いにも今のアデイスは人間の姿で、魔術が使える。それほど強引でもなかったらしいので、食べられるとか、変な薬を入れられるとか、そういうのはないんだろう。

これは誘拐ではなく、ただ黙って行ってしまった不誠実なだけの行動。そう思えばいいのだろう。

きっと大丈夫だと自分に言い聞かせながら、聖良は深く深くため息をついた。

## 11話 狩り 2

イライラしながら目の前の少女を見る。

アデイスが彼女について知っている事といえば、彼女がハーティという偽名を名乗り、魔力が高くせに不器用で覚えが悪いという、それだけだった。

「長、なんですかその格好。変装……にしては背丈も違うし」

赤の他人ですと言い切るのは今更無理だ。彼女はアーネスの弟子の一人なのに、ついアデイスの姿で名を呼んでしまった。

頭が痛い。

なぜこうも行く先々で知り合いに会うのだろうと、自問する。

住んでいるのは陸の孤島と言われるグリーディアなのに。

「長だからどんな手段で化けても不思議はないですね」

幸いな事に、彼女はアデイスの姿を知らない。

ではどうして彼女はアデイスがアーネスであるか見抜いたのか。

匂いで見分けるのは、トロアの個人スキルらしいので、普通の竜では個人特定までは難しいらしい。

しかし彼女はトロア系の不思議な少女なので、完全に否定も出来ない。二年ほど前から箱庭に出入りしているが、数ヶ月顔を出さない事もあるので、変わった子だとは思っていた。

まさか竜だとは思いつかなかった。竜の子供の話が来たときは、とりあえず誘拐してみようと話をしていたのに、反対をしていたいう話も聞いていない。

ここで始末をすべきか、悩むところだ。

「お前はなぜこんな所に？ 神子が来ていますよ」

「知ってます……。どうして長がそんな格好で神子と？」

「それはひとまず置いておきなさい。なぜお前がここにいるんですか。しかも町を襲ったそうですね」

話を逸らし、始末すべきかどうかの材料を収集することにした。



「あたしじゃありません！ 確かに、その場にいましたけど、やったのはあたしじゃないんです！」

「じゃあ誰がやったというんですか」

「よその奴です。悪魔と一緒にいました」

「竜が悪魔と？」

あまり聞かない組み合わせだ。互いに興味を持たないというか、何でも自分の退屈を紛れさせる道具扱いする悪魔を、竜はあまり好いていない。悪魔は魔女は作るが、それは格下の存在であり、同族や同等の相手とは群れない。竜は基本的に群れる。この違いも大きいだろう。

「あたしじゃあないんです！ 信じてください！」

ハーティはじつとアデイスを見る。涙を浮かべ、それをこらえるような姿は可愛らしい。なかなか老けないは思っていたが、竜なら当然である。

「で、様子を見に来たと」

「はい。あの悪魔ども、女子供も皆殺しにしていたんです！ それで止めようと思って出て行ったら、あいつらすぐにいなくなって、気付いたらあたしのせいになってました……」

その不運っぷりには同情する。彼女がここでこんな言い訳をする意味もないから、その流れに偽りはないだろう。本当に犯人だったら、さつさとグリーディアに逃げ帰ればいいだけだ。

分からないのは、悪魔と竜。分からないのでしばらく考えは保留にする。

ハーティは神子達には突き出せないから匿う必要がある。しかし匿っていると思われるでもいいけない。厄介だ。始末して厄介払いしたい気持ちもあるが、使い道もたくさんある。

彼女は魔力が高くて不器用な人間では無く、勤勉で魔術が使える器用な竜だ。

「まったく、厄介なことに」

「申し訳ございません。まさか長に迷惑をかけてしまうとは……」。

なんとお詫び申し上げればいいか」

「俺びはいりません。私も神子達には正体を知られたくありません。長と呼ぶのはやめなさい。誰かに見られても呼びかけないでください」

「は、はい」

女の子にしゅんとされると胸が痛む。

こんな場面をもしも聖良に見られたら、何も言わないだろうが、白い目で見られていただろう。彼女の目は口以上に饒舌だ。何も言わないところが、彼女は怖い。彼女は腹にため込むタイプだ。きつと黙って離れたから、今ごろ怒っているだろう。

「いいですか。とりあえず、グリーンディアに戻っていなさい。あそこに潜伏してしまえば、神子も無茶な追跡をしません」

「はい……」

「気になるのは理解できませんが、お前が支配されるようなことがあるなら、その時には私の手で殺さなければなりません」

「覚悟しています」

「何があっても冷静でありなさい。お前が賢くあるならば、私はお前の味方であられます」

「こう言っておくのが無難だろう。信頼されていると思えば口も堅くなる。」

「そうだ。問題の悪魔はどのような特徴でしたか。覚えている限りを話なさい」

「あ……えと、悪魔の方は金髪で、執事のような格好をしてました」「し……執事？」

悪魔は長く生きすぎて、趣味が前衛的になり、他者には理解できない格好をするようになる場合があると聞く。だが執事の悪魔など、知っているのは一例だけ。

「名前は聞きましたか」

「竜が『ろばっさん』と呼んでいました」

「ろばっさ……ロバ……」

もしもそれが『ロバスさん』が正解であれば厄介だ。

アデイスも悪魔に詳しいわけではないが、読む本に度々出てくる悪魔のことは記憶している。その中でもロバスという悪魔は変わり者で、執事のような使用人の姿で人々の前に現れ、時に破滅を、時に幸運をもたらす都市伝説的な悪魔だ。契約者ではない他種族を連れていくことも多い事から、悪魔のくせに交友範囲が広いと言われている。

一番の問題は、その悪魔が使用人の姿をしている理由が『人間』に使用しているからというものである。悪魔を服従させる人間。つまり神子。

人を殺させてのうのと自由に生き続ける神子が主という事から、主だと言われている人物は、実在し、現在も健勝で、噂通りの人物像である証拠になる。

「これは、係わらない方がいいようですね。神子に支配されたくないければ逃げなさい。私も早急に逃げます」

「逃げるって」

「墮落のウルなど相手に出来ませんか。聞いたことがあるでしょう。

歴史上最悪の神子ですよ」

ミラが数少ない『殺しにくい』知人として名を挙げた、伝説の人物だ。

以前は眉唾物だと思っていたが、ミラどころかユイまでもが出会ったことのあると言っているの、実在するのは確かである。そしてあのミラが「殺すのは難しい」と感じるならば、今のアデイスでは無理なのだ。十年ほど時間があればもっと竜の力を使いこなして太刀打ちできる可能性もあるが、今は無理だ。この身体では、ミラと喧嘩をしても勝てる気が全くないのだから。

「お前、ウルに何かしたんじゃないでしょうね」

「い、いいえ。あそこに向かっていたのも偶然ですし。ほとんど争うこともなく消えてしまったので」

消えてしまったから、一人残った彼女が犯人になってしまったよ

うだ。竜は飛べるが、転移は出来ない。

その街が何をしたかは知らないが、墮落のウルに繋がるのは極力避けたい。現在のアデイスは、目をつけられても抵抗するのが難しい、狙われやすそうな素材だからだ。アデイスがウルだとして、魔術を扱える生まれただけの竜などがいたら、空きを作っても手に入れたいと思える。

だからとてもまずい事態だ。

「そういえばお前、魔術を使える竜ですね。まさか魔術など使っていませんよね？」

「え、まずかったですか？ 消火するために使いましたけど」

「まずいに決まっていますでしょう。神子は喉から手が出るほど欲しがりますよ。」

それじゃあ一人で逃げるのは危険ですね」

箱庭独自の魔術の知識を持ったまま、破滅のウルの元へなど行ってもらっては困る。

ユイだけならともかく、他の神子がいては説得も難しい。神殿にとっては竜を手に入れるチャンスなのだ。彼等には、本当は誰が犯人で、どのような事情があるかなど関係ないだろう。

「アデイス」

名を呼ばれ、飛び上がりそうなほど驚いた。

ミラだった。問題なのはミラではない。アデイスの名を呼んだ事である。

「アデイス、セーラ、心配している。アデイス、何をしている？」

なぜこういう時に限って名前を連呼するのだこの女は。

「アデイス………って、あつ！ ああつ！ あああつ！？」

「何だこの女。頭でも打ったか？」

アデイスを指さしてわめくハーティを見て、ミラが首をかしげる。この反応は気付いてしまったのだらう。この姿はよくも悪くも目立つのだ。アーネスなら若干地味なので、逆なら覚えられていなかったかもしれない。しかし、アデイスは目立つのだ。国仕えなどし

ているから、それなりに目立つことをしてきたのだ。

「な、なんでそんな格好!？」

「落ち着きなさい。だからお前は成長しないんです。私の言うことは理解できませんでしたか？」

「は、はい。申し訳ありません」

ハーティは頭を垂れて黙る。これでもう黙っているだろう。混乱して当然だが、今は黙っていてもらうしかない。さすがにアーネスの事まで知られたくない。

「アデイス、どうした？ その女、殺さないのか」

「殺してどうするんですか。生け捕りにする予定だったんじゃないんですか？」

「あの女、その竜は無理。器が足りない」

「分かるんですか？」

「分からないのか？」

そう言うミラは本気だった。

「私には分かりません」

「竜でも分からないか」

また余計なことを言う。

「竜を支配できる神子を見分けるなんて出来ませんよ。魔力とは違いますし」

「そうか」

無理矢理誤魔化す。ごまかし切れたか分からないが、アデイスは流すためにも話を続けた。

「それよりも、ミラさんのお友達に墮落のウルがいますよね」

「友達違う。ただの知り合い」

「何でもいいですけど、その悪魔と竜が犯人らしいんですけど」

無駄と知りながらも、アデイスは試しに進言した。

「神殿は犯人が誰とか関係ない。機会があるかないか。機会がある限り、犯人捜しなど面倒なことは後回し」

「そうだとは思っていましたが」

ため息をついてアデイスは考える。

どちらにしても、神殿は犯人を彼女にでっち上げてとりあえず支配を試みたいと考えるはずだ。それはアデイスが困る。

一番アデイスに被害がなくて簡単な方法は、あの巫女を殺してしまふこと。

「そつだミラさん、あの巫女さん殺しませんか」

「人殺す、ユイに禁止されている。おびき出すとか、手伝えない」

「そつですよねえ」

「アデイス、その竜、知り合い？」

「グリーディアに魔術を学びに来ているんですよ」

「魔術使えるか。なら、ますます支配無理。ユイなら出来ただろうけど、空かない。どうせ無理なら差し出せばいい。私達が殺さないなら、それ、殺されることない。あいつら、殺せない。ユイは無抵抗の者を私に殺させない」

アデイスは自分の頑丈さと再生能力を思い出す。

殺せないだろう。首でも切り落とさないと、簡単に復活する。

「ミラさん、悪いんですが、こつそりユイ……よりも主にハノとセラに相談してきてください」

「ユイではなくハノか。賢明だ」

「ユイはなかなか殺せないタイプですからねえ。内緒にする必要はありませんけど、相談するだけ無駄というか」

ハノはユイのために必要があればするタイプだ。

ユイがあまり考えた行動を取らないから。

取れないのではなく、取らない。

彼は考えた選択肢が気に入らなければ捨ててしまふのだ。偽善的でない子で、あまり頼りにならない。

「人としてはそれが正常なんでしょうが。」

まあ、穏便に済めば私もそれが一番ですし、お願いします。墮落のウルなどに関わり合いになりたくありません」

「それがいい。アデイス、狙われる」

ミラが言うと、寒気が走る。冗談ではない。

「本人が来る前に帰るのがいい。グリーディアまでは来ない」  
「なぜですか」

「海とか空は酔う。ウルは乗り物酔いに弱い。ロバスが行ける所が  
ウルの活動範囲」

「納得しました」

人間、やはり欠点があつてくれた方がいい。完全無敵ではかわい  
げがないし、助かる。

「ウルの事で脅せば神殿は手を引く。ユイにウルと関わり持たせた  
がらない。もう手遅れだが」

あちら側に行かれては、手に負えないミラまでもが敵に加わる。  
アデイスが神殿側でも、ぞっとする。

「とりあえず私は適当にこれを目立たないようにしてますから、お  
願います」

「分かった」

ミラは来た時と同じく、気配を感じさせない速さで去っていく。  
それを確認すると、ハーティが口を開いた。

「……長、その姿、ハーネスの生まれ変わりとか言われている魔術  
師の姿では？ なぜ身体を入れ替えていらつしやるんです？ 血を  
分けてもらった竜としか出来ないんじゃない……」

その言葉でようやくアデイスは、セーラが苦し紛れについた嘘を  
思い出す。

「黙っていなさい。今はそんなことはどうでもいいんです。自分の  
身だけを案じなさい」

嘘を嘘で塗り固めるか、いつそ長い付き合いになる可能性も考え  
て正直に話して口を固めるか、どちらかに決めたとしても、それが  
裏目に出るのがアデイスの体質である。

ため息をついて考える。

聖良が子供達と遊んでいるとミラが戻ってきた。彼女が居ない間にユイ達が戻ってきており、ミラの落ち着いた様子を見てほっと息をつく。

しかしミラは戻ってくるなり、セーラとハノの手を引いて人気のない場所に連れていった。普通なら不審に思っただけにつけられてもおかしくないが、相手は恐怖の権化。殲滅の悪魔。主以外にそんな勇氣は無い。ミラには呼ばれていないが、ユイだけは付いてきた。ミラは不服そうにしていたが、命令には逆らえないので彼が話を聞くのを許可した。

「どうしたんですか？」

「アデイス、問題の竜といた。知り合い。アデイスが魔術教えていたと言っていた」

聖良は悩む。ミラの言葉は理解するのに時間がかかる。

「つまり、竜はグリーディアでアデイスに魔術を習ってたの？」

「そう。人の姿化けてたから、アデイスは知らなかったと」

聖良の理解を超えていて、言えることはただ一つ。

「さすがはアデイス。数奇な人生歩んでますねえ」

頭を抱えている姿が容易に想像できる。

「それで、捕獲を中止してほしいって言ってるんですか？ 切り捨てるか自分で殺しそうなものなのに」

「犯人はウル。犯人でない上に、ウルはあの竜が魔術を使うことを知った可能性ある。支配したり殺したりしたら八つ当たりする」

ユイの顔色が変わった。

「ウルさんが……来る！？ あのウルさんが！？」

「アデイスがそう言っていた。アデイスだからたぶん来る」

「……………」

不吉な予感ほどよく当たるものだ。アデイスの場合は特に。



「アデイス危ない。さつさと二人で帰すといい。アデイス、竜だから私よりは支配できる可能性がある。ウルなら今いる竜を殺しても欲しがら」

「なんて恐ろしいつ。とにかくアデイスを保護しないとっ！ アデイスとウルさんが組んだらよけいに怖いよ！」

「セーラも持つて行かれる」

聖良には彼らの話が何のことだかさっぱり理解できなかった。

「そのウルさんって、そんなに危険人物なんですか？ 何度かミラさんに聞いたような気がしますけど」

聖良はユイよりも器の大きい、アウトローな神子だと聞いている。しかしそれがどう危険なのか分からなかった。

「墮落のウルといえば、最悪の神子だよ。欲しい物は何をしてでも献上しろと命令して、逆らう者は一族郎党皆殺しにさせる。」

ミラはただ殺すだけだけど、ウルは恐怖させ、苦痛を長引かせ、親の前で子を惨殺させるようなタイプなんだ」

想像して、聖良はぞっとした。聖良の想像する暴君そのものである。

「恐ろしい事に、ウルさんはそれを実行して生きていけるだけの魔物を抱えているんだよ。」

しかも僕なんかと違って、悪魔に竜にその他数十、下手すれば百近い数の魔物抱えて、まだ六から七割程度しか容量が埋まってないんだ。ミラも欲しがってたみたいだけど、当時は人間相手にどこまで空きを作ればいいか分からなかったから諦めたらしいけど……。

あれだけ巧みに魔術を使える竜、欲しがるに決まっているよ！

ミラと違って予想も付かないわけじゃ無いしね」

必死の力説に聖良はこくこくと頷く。

「つまり、感覚としては、ミラさんぐらい強くって、ミラさんよりも容赦なく残忍に人殺しする人が、アデイスを狙うって事ですね？」

猟奇殺人系の最悪なタイプ。

人の命など軽く思っているアデイスでも、猟奇系は嫌がる。薄情

なところはあっても、アデイスは残虐なタイプではない。ミラだつて殺すなら一撃でという慈悲は持っている。

惨殺するような人間は、聖良の理解の範疇に無い。

「自分では手を汚さないところがまた夕チが悪いんだよ。

神殿の事なんてどうでもいいから、ミラ、そこに連れて行って」

「珍しく積極的だ。そんなにウル嫌い？」

「好き嫌いの問題じゃなくて、彼はあんなでもまだ子供なんだよ。

大人だったら自分の身ぐらい自分で守れって言っけどさ。

アデイスはちゃんと両親揃って、愛されてるんだ。離れる必要もないんだ。

なのに親から離れたら可哀相だろ」

「……………うん」

ユイは親から引き離された子供なのだ。今でさえまだ幼さがあるのだから、当時は親と一緒にいたい年頃だっただろう。

ミラも育ての親を殺されたような事を言っていた。だから親を殺す時は子供も殺すらしい。間違った方向に歪んでいるが、子供が親と離れるのはよくないと思っているようだ。

「じゃあ、ユイくんが神殿の人達に話をして、アデイス達は可及的速やかに帰国ってことでいいですか」

「そうだね。空でも海でもいいから出て行って、ほとぼりが冷めるまでグリーディアにこもっていた方がいい」

「じゃあ、アデイス達のところに行きましようか」

そう言ったとたん、ミラに担がれた。

「ミラ、落としたらダメだよ」

「分かっている。お前はさっさと神子達をどうにかしてこい」

ミラは自分が言いたい事を言い終えると、聖良に疑問を口にする間も与えられず走り出した。

聖良は舌を嚙まないように口を閉ざす。

この扱い、もう二度目だ。手足を縮めて、ただ恐怖に堪える。

そうしていると、意外に早く足が止まり、ミラは周囲を見回す。

「アデイス」

「はい」

木陰から出てきたアデイス。その後ろから、女の子が付いてくる。女の子だ。

可愛い女の子だ。

しかも十代半ばと、まだアデイスの守備範囲内。

「……………親切にしていると思ったら、女の子ですか。そおですか」「ち、違いますよ。これは箱庭に出入りしているからっ」

「へえ、箱庭。分かってましたけど、ロゼとシファだけじゃなかったんですねえ」

「だから、違うんですって。どこまで聞いたんです!？」

「魔術を教えていたそうですねえ」

「いつも私が直接教えていたわけではありません。覚えが悪いから、他の者が教えていました」

「いいんじゃないですかあ。竜でしょう。可愛いじゃないですか」  
将来を考えたら、彼女のように竜で魔術に興味のある女の子の方が、一緒にいるメリットは高い。

ロリコンといっても、彼女ならぎりぎり世間から後ろ指を指されない年齢だ。

アデイスにとってはメリットばかりだろう。

「妬いてるんですか。冷たいセーラも可愛いですねえ」

「そうですね。で、逃げないとヤバイ人に気付かれたかもしれないですよ。彼女を連れてさっさと山越えて帰ったらどうですか？

私は船に乗せてもらいますけど」

雪山の上空など絶対に飛びたくない。聖良は人間なのだ。

それを聞いたハトラは、首をぶんぶんと横に振る。

「雪山の上を飛ぶなんてとんでもない!」

「無理なんですか?」

「無理って言うか、人間をつれてなんて……………」

どうやら、まだ肝心なことはかろうじて秘密に出来ているようだ。

聖良はじつとアデイスを見つめてみる。

「ど、どうしましょつかねえ」

「なんで私に聞くんですかあ？」

尋ねてくるアデイスに聖良は笑みを向けた。

「いや、ほら、私達は夫婦だし」

「腕輪は買ったけど、夫婦になつた覚えはないですけど」

自分に都合のいい男である。

「祝福してもらったじゃないですか」

「は？」

聖良は顔をしかめた。観光客気分でもらつた儀式が、祝福とか呼ばれていた。

「あのぴかつと光る溶接の事ですか？」

神官が杖で腕輪のつなぎ目を撫でて、それだけで『溶接』されたのだ。あつさりと終わったので、珍しかったがそれほど特別だとは思わなかった。

「ええ。それです。あれが夫婦の誓いなんですよ。正式な夫婦として登録されました」

聖良はアデイスの腹に、丈夫なブーツで蹴りを入れた。

「人の了解も得ずに勝手に正式に結婚させるなんて何考えてるんですっ！？」

「え、言ってますでしたっけ？」

「聞いてません」

「ほ、ほら、自分の中の常識って、相手も知っているものってイメージがあるじゃないですか」

「見苦しい言い訳をしないで下さい。帰るんならさっさと帰ってください」

「そんな。一緒に船で帰ります。どうせ悪魔がいるんですから、港まで送ってもらって、船で待機してればいいんですよ」

「そーですか。まあ好きにしたらいいんじゃないですか」

「もう、ヤキモチ焼きさんですね」

「私は勝手に籍を入れた事の方に怒ってるんです」

「どうせ形式だけですよ。私達はグリーディアに住んでるんですから、正式なのは向こうでしましょう。ぱーっと。」

セーラがそんなに結婚に夢を持っていたなんて意外でした。可愛いウエディングドレスを作りましょう」

「そうやってすぐ誤魔化すのやめてください。まあ、話し合いは後でいくらでも出来るから、とにかく移動しましょう。」

危ない人だからって、お母さんでもあるまいし、大きな街で大暴れたりほしくないでしょう」

話を聞く感じでは、ネルフィアやミラと違い、知能犯っぽい。小さな街とは違うのだ。しかも神子の本拠地。

「そうですね。とりあえず戻りましょう。先に帰るにしても、荷物取りに戻らないと」

アデイスは聖良の手を握り、ご機嫌伺いをするような笑みを向ける。

彼に振り回されているが、もう心の中では仕方がないと諦めていた。

慣れとは実に恐ろしい。

「……………で、彼女はどうするんですか」

「うーん。とりあえずウチに連れて帰りますか。一番に狙われているのは彼女です。私の事はウルにはばれてませんし」

「……………」

「彼女とは本当に何でもありませんよ。本人にも訊いてください」

「まあ、それだけは信じてあげますが。そういうのを、アデイスはあんまり隠してないですし」

「大切なのは過去ではなくこれからです」

「で、そのこれからはどうするのか決めたんですか？」

「……………うーん」

悩むのは当然だが、思い切りが足りなくても見ているとイライラするものだ。

聖良はあまり関係ないから口を挟むつもりはないのに、挟んで欲しそうにしているところが鬱陶しい。

「じゃあ、帰ってから好きなだけ考えてください」

アデイスは不服そうな顔をして聖良の髪をいじくる。文句はたくさんあるが、早く帰らないと、アデイスの事だから、不幸な目にあうに違いない。不幸な目にあってしまえと思うには、不幸の度合いが他人と違うし、何よりもそう思うほど情は薄くない。

「アデイス、セーラ」

ミラが足を止めて振り返る。

「今、ユイから連絡があった」

「説得できそうです？」

ユイは珍しく凜々しかったから、頑張ったのかも知れない。

「違う。今、真犯人が来たからこっちに来るなど。外れたところにいて良かった。たまには運がいいな」

ミラが嬉しそうに言うが、ちっとも嬉しいことではないし、運がいいとは言えない。

「本当に運がいい。ウルが来ていない」

ウルは来ていないが、その他は来ているという意味になる。

「ならいいんですが」

「アデイス心配性」

「見つからないようにじっとしていますか」

「じっとする」

下手に逃げるとそれはそれで見つかりそうなので、じっとしているのが一番だ。

聖良は空腹を覚え、弁当を持っていることを思い出す。

こんな時に何だが、何があるか分からないので腹ごしらえをしておくとしよつ。

## 11話 狩り 3

甘いお菓子を食べると落ち着く。

癒し効果があるとは聞いていたが、本当に落ち着く。普段は質素な生活なので、他人が作った甘味は贅沢だ。

木々の間、茂みに隠れるようにして座っていると、とても落ち着く。

昔から狭い場所が好きだった。ベッドと壁の隙間にはまって寝るのも好きだった。

「はあ、落ち着く」

「セーラ、本気で落ち着き払わないでくださいよ。ハラハラしているこちらが馬鹿みたいじゃないですか」

「ハラハラしてるより、落ち着いてた方がいいですよ。甘い物は癒しです。お茶が淹れられないのが残念ですね。お水を下さい」

アデイスは水筒を差し出してくる。カップについて、こくこくと飲む。一息つくくとさらに落ち着く。

「これで例え空から槍が降ってきても動じませんよ」

「動じましょうよ。十八の身空で悟ってどうするんですか。動じて継り付いてきた方が可愛いですよ」

「だから、私に可愛さ求めないでくださいって。他に探してください」

可愛いのは背丈だけと言われ続けて何年か。

最近、アデイスのせいでそれに磨きがかけられている。

色々あった。本当に、まだそれほど長くない異世界生活で、色々あった。

もうトロアもそれほど苦手ではなくなった。今でも走り寄られると恐いが、普通に顔を合わせるだけなら問題ない。

人は必要があれば短期間で順応するのだ。

「アデイスはセーラに頼られたいのか？　びゃーびゃーとうるさくなくていいのに」

ミラは窮地に立った時にわめき散らす女性が苦手なようだ。彼女の苦手は相手の死を意味していただろう。

だから窮地で落ち着いていられるのはいい事だ。

「そりゃあ、依存してくるような女性はこっちから願い下げですけど、緊急時に少しか頼りたいのは男の性です。不安そうに見つめられたりするのがいいんじゃないですか」

「そうか？」

「ミラさんは女性なので違うでしょうが」

ミラは頼ってくるような相手がいたら鬱陶しいと思うだろう。聖良も自分でやれと思う。自主的にやってやるうという気持ちになるような態度を取り、それを感謝することが大切なのだ。

人というのは、好意を持っている相手に感謝してもらえれば、ちゃんと相応のことはする。より頑張るのだ。稀にいる、ぐうたらすぎてる気のない人は除いて。

「あの……ええと」

ハトラがアデイスに声をかける。

「アデイスと」

「あ、アデイス様は、この後どうなさるんですか？」

「なるようになるでしょう。船で帰るので、港に行きますが、もしもの時はお前も自分で帰りなさい」

「はい」

彼女は静かに応える。ああいうのが、少しぐらいは頼る態度というのではないだろうか。

しかしアデイスはどこか冷たい。

「せっかく可愛い人が頼ってくれてるんですから、もう少し確かなアドバイスとか」

「この件に関してはありません。私の手には余りません」

「じゃあ、私が慌てても仕方がないじゃないですか。なるようにし



かならないんです。心穏やかにして、もしもの時に動けるよう備えるのが一番ですよ」

「そうですが、男としては寂しいんですが」

「はいはい。暇だからって私にからまないでください。無心でいるのがいいですよ」

水を入れたコップを渡す。彼はそれを口に含んで、ぶつ、と吹き出した。幸い聖良にはほとんどかからなかったが、かかるにはかかった。文句を言おうと彼を見ると、彼は口をぽかんと開けていた。何をそんなに驚いたのかと視線を追うと、男の子がいた。

場違いに可愛い男の子だ。ベロアの上着に、同じ素材の羽で飾られた可愛い帽子。短い赤い巻き毛で、笑顔がとても可愛い。可愛い、綺麗な笑顔が嘘くさい。

「ウルだ」

抜き身の剣を手に提げてミラが言う。

知り合いなのに、挨拶よりも先に剣を抜くほど危険な存在。

「セーラはさすがだな。二人揃うと確実だ。すごいな」

さすがとは、離れていたのに呼び寄せてしまった事だろう。

ウルはミラの言葉を理解できずに、可愛らしくきよとんととしている。

アデイスは聖良を抱えて、茂みの中から抜け出し、しっかりとした足場を確保する。

「何がすごいのかは分からないけど、久しぶりだね、ミラ。君がユイと離れて、別の人と仲良くしているなんて珍しい」

「ウルには関係ない」

「そうだね。僕は偶然、あの里の身内が、こんな外れた所にいるのを感じたから来ただけだよ。」

「一体どういう関係なのかな。ミラ以外、全員同じ血を感じるけど、ちっとも似ていないね」

感じる。

血を感じるとは何だ。

「そういえば、ウルは身内なら分かる。どこにいるかも」

「は？」

「血縁者の見分けが出来る」

「そ、そういうことは早く言ってくださいっ！」

「忘れていた」

慌てるアデイスと冷静なミラ。ミラがアデイスのように慌てるなど、世界の終わりが来てもないだろう。

聖良はアデイスの腕から抜け出して少し下がる。

「その女の子は人間みたいだね。竜の血を飲んだのかな。」

お兄さんはなんだろう。人間みただけど、竜みたい。混じり物ってわけでもないし、変なの」

彼はアデイスをじっと見つめている。興味を持たれた彼は先ほどと打って変わって落ち着いた態度だ。

緊急事態では、ちゃんと落ち着ける男なので、大丈夫だろう。

足を引つ張りそうなのが聖良ぐらいしかいないので、聖良が少し離れば、どうにかなりそうだ。

「そっちの子が魔法を使える竜なのかな」

今度はハトラを見る。二人は外見だけならちょうど同年代だ。

片方はにこにここと、片方は威嚇するように背を丸めている。

ウルは夜会にでも出るような、少しレースのついたジャケットを  
はおり、装飾的な意味しか感じられないステッキを持っている。猫  
のような、くりっとしたやや吊り上がり気味の、ぱっちり二重の目  
元がとても可愛らしい。

ミラも彼は男か女か分からないと言っていたが、ボーイッシュな  
美少女にも見えた。

もしもの事があっても、アデイスには救いがあるなあと無責任な  
ことを考えながら、少しずつ後退し 背中から誰かに抱きつかれ  
た。

「どこに行くんだい？」

吐息が耳にかかるほど、近い位置から男の低い声が聞こえた。

「……チカッ痴漢っ!？」

つい、いつもの癖でアデイスにするように足を踏み、身をひねってミラにもらった棒を向けて伸ばす。誰かに当たった衝撃で、手からすっぽ抜けて痛かったが、慌てて拾って離れると、金髪の男が股間を押さえてひくひくとうずくまっていた。

身長差とか、不安定な姿勢とか、理由は色々あるだろう。狙ったつもりもなかった咄嗟の行動の結果だった。

ウルがなぜか楽しそうにぱちぱちと拍手する。

「い、いきなり抱きつくなんてっ、驚くじゃないですかっ」

そう言い捨てて、アデイスの元に逃げ帰る。息がかかった耳が気持ち悪く、赤くなるまで掻きむしった。

「ロバス、どうした？」

「悪魔でも金的は痛いんですね」

ミラが切っ先で苦しむ男を突き、アデイスが視線をウルに戻しながら呟く。

「面白い女の子だね。実に面白い話し方をする」

聖良はびくりと震えた。

さつきはあんまり驚いたので、うっかり言い訳の言葉を口走ってしまった。

「これは私の。ウルはだめ」

ウルの見線から聖良を守るように、ミラが立ちふさがった。

「ミラの？　じゃあ、ミラごとおいだよ。ユイも連れて」

「ユイ、気が弱いから発狂する。血とか肉とか、拷問がだめ。親のせいで、家族が皆殺されるの、とても嫌がる。ユイ、子供、家族が好きだから」

血と肉、家族が皆殺しにされる。

それが日常茶飯事なら、聖良でも発狂するだろう。ユイが特別繊細なのではなく、平気な方がおかしい。そんなことをする人間もおかしければ、それを見て気にもしないのもおかしい。

「ロバス、まだ立ち直れないの？　悪魔のくせに女の子に一撃でや

られるなんて情けないな」

「この……件に関しては……悪魔も人間も……関係」

近くの木にすがって立ち上がるが、まだ調子がおかしいよう一言葉が続かず直立できない。

「やっぱり、痴漢には急所攻撃がいいんですね。下手に外すと逆上されるから、時と場合って聞きましたけど」

恨まれたかもしれないが、それを気に病んでいては聖良に明日は無い。聖良は意図しない所で意図しないトラブルに巻き込まれるからだ。

「いきなり抱きついてきたり、何の用ですか？」

「いきなり抱きついたその馬鹿の事はごめんね。あとで痴漢行為はやめるようにお仕置きしておくから」

ウルに謝罪され、ロボスの頬が引きつった。

「今日来たのは、その子がロボス達のせいで疑われて大変だって聞いて、誤解を解きに来たんだよ。君と勘違いされたトロが向こうにいるから、疑いは完全に晴れるよ」

その言葉だけだと、まるでいい人のようである。

「仲良くなりたいたからね」

「それはそれはご丁寧に。じゃあ、ちょっと帰ってみますので今日はこれにて」

「まあまあ。そんなに焦らなくてもいいよ。まだ話は付いていないから。君ともお話ししたいな。君達の事にとっても興味があるな」

にこにこしながら、ウルは近くに寄ってくる。

神子は無力な存在だ。他者の力が神子の力。他者がいなければ意味がない。その他者はどこにいるのか、聖良には分からない。

「ウルと喧嘩したくないが、聖良をとるならする」

「本当にお気に入りなんだ。何をそんなに気に入ったの？ 話し方ぐらいでは気に入らないよね」

「……………警戒しなくていいから」

「子供にも警戒する君が？」

「子供だから警戒する。子供は大きくなる。でもセーラ、もう大きくなる。同じ年。大人」

「……同じ年なの？」

ミラがこくと頷く。少し嬉しそうに。彼女が喜ぶ基準が理解できない。元々理解を超越した人間なので、理解しようとする努力もまったくの無駄。

「……ふうん。お友達なんだ」

「うん」

「で、どうしてそのお友達も一緒にこんな所にいるの？」

「これの知り合いだったから。これ、アデイスの。だからだめ」

これとは、ハトラの事である。ハトラは剣を向けられて、枯れ草を踏み鳴らして下がる。

「アデイスってそのお兄さん？」

「うん。この前セーラと偽装結婚したセーラの夫」

「偽装なんだ」

素直に偽装とつける。こういう場合はつけなくていいのに、彼女は素直だからつけてしまう。

「ミラさん、そんな風に言うつと悪さでもするみたいで人間が悪いです。ただ、この馬鹿がしてみたかったから式を勝手に挙げただけです」

「なら……なんちゃって結婚!」

「……否定できませんね」

ミラが満足そうにしているので、良しとした。

彼女の満足は珍しいのだ。

「ミラがその子を好きなのはよく分かった。気が合うんだね」

僕はその旦那さんも、気になるなあ。どうして竜のようで人の気配がするんだらう。君のお友達との血のつながりも強いし、まるで血を交わした竜のような気配がするんだ」

不用意には近づかないが、くすくすと笑いながらアデイスを観察する。ハトラよりも、アデイスに対する興味の方が大きそうだ。

「グリーディアの魔術師だよね。あの国、行ってみたいけどなかなか行けなくって。」

セーラの服も可愛いねえ。僕、着る物好きだからとっても行ってみたいなあ」

「鎖国してるわけじゃないんで、好きに来てください。来る時に魔物に囲まれて沈没しかけたので、今は危険だと思いますが」

アデイスが腕を組み、皮肉げに言う。

「グリーディアの船って速いんだよね」

「そこそこ揺れますよ」

「ふうん。今、長距離用の揺れない乗り物を造らせているけど、やっぱり最先端の技術でも無理なんだ。やっぱり二年じゃ変わらないか」

「二年……って、そういえば二年前、聖都に来ていた技術者が一人行方不明になったんですけど、あなたの仕業だったんですか」

「とつても元気にしてるよ」

「そりゃあ残念」

「アデイスっていったね。グリーディアでアデイスといえば、かの有名な大魔術師ハーネスの生まれ変わりとも言われている人が有名なんだって？ 条件に合うから間違いないね。懐かしがっているよ」  
神子のテレパシーはそれほどまでに万能なのだろうか。

ユイはそんなにはつきりした物ではないと言っていたが、明らかに向こうにいる人物と会話している。

「グリーディアは拾った子供に何をしていたんだろうね」

まったく関係のないところで、怒濤の不運が押し寄せた結果こんな形でここにいるのに、国の巨悪的な何かせいにされかけている。

過去形なので、悪さをしていたハーネスという魔術師がすべてかぶってくれている形になっているのだろう。

負けて過去の人物になると、ある事無い事言われても仕方がないのだ。勝てば官軍、負ければ賊軍である。

「気になるなあ」

ウルが前に出る。

「近づくな」

「別に何もしないよ。ただ、近くで見たいんだ。正直なところ、魔術を使う竜なんてどうでもいい。グリーディアの魔術師が教え込んだんでしょ？ だったら、竜つてのは物覚えが悪いだけで、教えればちゃんと覚えるって事だから、明日から厳しく教育すればいいんだ」

技術者というのも、魔術は使えるだろう。やろつと思えば、コツさえ掴めば、本を読めば魔術は理解できるし使えるらしい。ただし、根底を理解していなければ本来の力は引き出せない。だから聖良はアデイスの強大な魔力を大量に分けてもらわなければ、光を放つことも出来ない。強引なやり方をしなければ、聖良個人の魔力でも光を出すぐらいは出来るらしいので、聖良はまず言葉を覚えているところだ。

「聞きたい事がいっぱいあるって。どれから聞いたらいいかわかんないや」

ウルがまた一歩近づく。

ミラが剣を振り下ろした。

「皮一枚。さすがだね」

ウルの頬に当たるか当たらないから位置で止められた剣。ミラが剣を引くと、血が流れる。

綺麗に切れているのに、なぜか血が飛んだ。

ミラが聖良を後ろ手に庇いように立つ。

「お前、ウルじゃないな」

「ウル様だと名乗った覚えはないよ」

傷ついた頬から、何か出てきた。皮膚の下でうごめき、肉片のような細長い物が出てきて、頬の上をのたうつ。

「ひっ」

聖良は息を飲んで身を引いた。

鳥肌が立った。

最近、血には慣れてきたつもりだった。ウサギの死体も解体できる。内臓はまだ気持ち悪いが、嫌悪感はない。

だが、あれは寒気がした。悪寒が後ろ頭から背中へと下り、腰を抜けていく。

ぶるりと震え聖良はアデイスにしがみついた。

「ミラさん、なんですか、それは」

聖良の頭を撫でながら、アデイスは落ち着いた調子で問う。

「あれ、ウルの影武者。竜以上の再生力」

「そんな人型の生物が存在するんですか？」

「寄生型。元は人間。傷つければ、足りなくなる分、人を食う」

ウルの影武者はにっこりと笑う。ミラが傷つけて確認するくらいだから、見た目はうり二つなのだ。

意味する所は、神子でないならアデイスを支配出来ない。神子でないから、戦闘力は高いと思っただ方がいい。

「ミラはボクが食べなければならぬようなことはしないよね？」

そうしなければ、ボクはそれほど害のない存在だ。君と一緒にだね」

「傷つけずとも自傷すればいい」

「あははっ、おかしな事を言うねえ。」

どうしてそうまでしてミラを傷つけなきゃいけないの？ 君はウル様のお友達なのに。

私はただの影武者だけど、あなたはウル様と対等の人なのに、私が傷つけるはずがないじゃないですか」

声音が変わる。少年めいた声から、少女の物へ。それが本来の彼女の声か。

「ウル様がここにいないから、接触する意味はないんですよ。見るだけです。分かるでしょう？」

ミラは舌打ちする。

そのミラを見て、ウルの影武者は微笑んだ。

「あなたはどこの国から来たの？ 変わった顔立ちに話し方」

「誘拐されてきたので分かりません」



誘拐首謀者の背に隠れながら言う。影武者との距離は、三步も歩けば触れられる程度まで詰まっていた。

「そうなんだ。今度、うちに遊びにおいでってウル様がおっしゃってるよ。ミラといっしょにおいでよ。ミラのお友達なら、ウル様のお友達になる資格があるから」

友人になる資格と聞いて、聖良はため息をついた。

支配されないと知ったアデイスは強気になったのか、先ほどよりも軽い口調で言った。

「申し訳ないが、グリーディアの魔術師ですから無理ですね。仕事についてきてここにいますけど、もう帰らないといけないんです。グリーディアに来るのは止めませんが」

影武者の彼女ならそれほど問題はいないし、ウルが船酔いせずに来るには、まだ時間がかかりそうだ。その頃にはアデイスはもっと大きくなって、力も使いこなしている。そうならば自衛も出来る。

「……残念だね」

彼女は空を見上げた。

竜の羽ばたきが聞こえる。

「トロが戻って来ちゃった。逃げないと。ロバス」

「はいはい。」

さようなら、可愛いらしいお嬢さん。今度会う時はもう少し優しくしてくださいね」

背後から近づいてきた悪魔に頭を撫でられた。聖良はむっとしてその手を払う。

影武者は悪魔に抱き上げられ、手を振って消える。そして頭上の竜も姿を消した。

「帰ったら、また悪魔が戻ってきて竜を狙いませんかね」

アデイスは聖良の頭を撫でながら問う。他人に自分の手の置き場を触れられたのが嫌なのだろう。

「ない。それするなら、もうしている。ウル、行動は早い。ロバスが出てくる前に、少し手を伸ばすだけですむ」

「本当にハーティには興味がなかったと？」

「私いなかったら、生け捕りにして持ち帰った。あの二人なら出来る。」

ウル来なかったの、体調が悪いとか、たぶんそういう理由。人間だから体調の悪い時もある。低血圧の偏頭痛持ち。風邪もひくし、死病にもかかる」

「ほんと、人間らしいですね」

人間、天寿を全うできる者は少ない。子供の身体のままでも、長く生きれば死ぬような病気になる。とてもとても人間らしい死に方だ。

「……………さつさとグリーディアに戻りますか」

アデイスが空を見上げながら呟いた。

聖良は目の前の問題が、何の被害もなく片付いて安心したが、これからハトラの事があると思うと、アデイスを哀れんだ。

聖良には関係のない事だから。

日頃の行いが悪いと、こういう時に苦労するのだ。そう、すべてはアデイスの日頃の行いが悪いからこうなった。日頃の行いに関係ないのは、アデイスがネルフィアに誘拐されたことだけである。

本当に自業自得から始まった生活だ。その自業自得に巻き込まれた聖良も、今ではすっかり現状に慣れて、完全に受け入れている。入籍まで勝手にさせられてしまった。

この国に来て被害を受けたのは、やはり聖良だけなのではないだろうかと、悲しくて涙が出そうになった。

一足先に戻った船の船室の中にアデイスはいた。

セーラが話し方の珍しさからウルに勧誘された事と、消えた技術

者がウルの仕事だったことを話すと、皆は先に船に戻っていると勧めてくれた。

船酔いしない乗り物を造られたら、グリーディアにも出沒する可能性があると云ったら、皆が怯えた。彼らは人間なので基本的に怯える必要はないが、グリーディアは惨劇に対して過剰反応するところがある。

ハーネスが逆らう者を、自分が飼っている魔物の餌にしていたから、その頃を知るアデイスよりも年上の者達は、性格的に同系統の強者に対して、恐怖心を抱くようだ。だから帰れ、自分達も終わったらすぐ帰る、逃げる準備をしていると急かされた。

そしてミラは、ユイに護衛の許可を強引に取らせた。

神殿はウルがグリーディアの魔術師などを捕まえれば、戦力強化されてしまうと恐れてすぐに許可を出したらしい。

ウルという名は、神殿の重い尻を蹴り上げる効果があるとユイは言っていた。

そして現在、アデイス達は船内で落ち着いた。落ち着いてしまったので、アデイスは目の前の女と向き合わなければならない。

ハーティの姿ではなく、まったく別人に化けさせた。女だが、本来の彼女よりは少し年上だ。

あの術を他人にかけるのは、本当に難しいのだが、セーラの声と自分の魔力を合わせれば、やってやれない事はない。血のつながりがあるからこそその合わせ技だ。愛の共同作業と言ったらセーラに足を踏まれた。セーラは男慣れしていなさすぎて、そういった事を言われると、どうしていいのかわからずに反発する傾向にある。

「さて、何から話したのか……」

ちらとセーラを見る。彼女はお茶を淹れている最中だ。食べてストレスを発散するので、菓子を大量に買い込んでいる。

ハーティは拳を握りしめて、何も言わずにじっとアデイスを見ていた。余計なことは言わないという命令を守り続けている。必要以上に真面目だから余計に話しぶらない。彼女にとっては同族の赤ん坊の

身体を乗っ取つとられた事になるのだ。

「セーラー」

「うるさいですね。下手に隠すより、全部話せばいいじゃないですか。ミラさん達は釣りしてますし」

これからの事を話し合う間、暇をしている彼等に釣りを勧めた。たくさん釣れたらセーラーが自分の故郷の料理を作ると言いくるめたのだ。

「元に戻るのが一目瞭然でいいんじゃないですか？」

セーラーが砂糖壺をテーブルに置いて言う。

「それもそうですね。しばらく戻っていないからか、身体の調子がおかしいんですよ」

「おかしくなるんですか」

「羽伸ばしをしたいですよ。腕を回したいのに、その腕がないみたいな違和感があります」

ハーティ、向こうを向いてなさい」

二人に背を向けさせ、アデイスは服を脱ぐ。

ため息をついて、少しばかり気合いを入れて元に戻る。尻尾やら翼があると落ち着く自分が嫌だった。

「いいですよ」

二人は振り返り、セーラーが頭の上にある頭蓋骨を受け取る。問題のハーティは固まっている。

「まあ、いろいろあって、こんなことに」

「いろいろ!？」

「私は真正正銘、アデイスなんです。ある時あの母に誘拐されて、この生まれたばかりのチビに食べられかけ、身体を乗っ取りました」  
彼女には全部話した方がいいだろう。竜を捕らえる計画には反対しなかったし、事情が事情だ。理解されなければ殺せばいい。

「捕まえに行つて捕まつたんですか？」

「いいえ。散歩していたら連れて行かれました。どうやって私のことを知つたのかはまだ聞いてませんけど」

「なんで……？」

「賢い子が欲しかったそうです。昔から歩いていては上から物が降ってきたり、不運な日々を過ごしてきましたが、まさか竜に連れて行かれるとは」

「……でも、乗っ取るって……それはクレアだけが知っているんじゃない」

「私は天才ですからね。少ない情報から、術を組み立てる事はそう難しくありませんでした。問題なのは相手の意志が自分よりも弱くなければならない事と、実験が出来ないぶっつけ本番だという事だけです。」

ハーネスが竜を捕まえる事を選ばなかったのは、簡単に捕まえられる所にいなかったのと、群れているからリスクが高すぎたからです。無駄に死ぬより、万が一の時も自分に乗っ取れるような者に知識と技術を残すため、彼はああやって生きていたと、クレアが言っていました。

それでも、まさか成功するとは思いませんでしたよ。成功してからの方が困りましたからね」

ハーティは馬鹿ではない。

ミラが近くににいる以上、暴れはしないだろう。ウルに同等とまで言わせる意味を、理解できないほど馬鹿ではない。

馬鹿ではないから、どうすれば自分にとって有益かも理解できている。

「あの、アーネス様の姿は……」

「あれはずいぶん前の、俳優の頭蓋骨を使用しました。アデイスではハーネスがしていたような研究など、大っぴらに出来ないでしょう」  
彼女はアデイスを見ないで頷く。

アーネスの姿が好みだったのだろうかと疑問に思う。

「私はクレアの教え子です。彼女の知識はハーネスの知識。」

大人達にハーネスと呼ばれるようになり、ハーネスという長く生きた大魔術師をより深く研究したいという衝動に駆られ、手っ取り

早く組織を作りました。

第二の彼になるつもりはありませんでしたが、研究対象としてはとても魅力的なのは理解できるでしょう」

彼女は再度こくりと頷く。視線を逸らしているのは、葛藤しているからか。

セーラがテーブルに菓子を置き、ティーポットを片手にハーティの顔を覗き込む。

「小さな子がこまっしやくれたような事を話して戸惑うのは分かりますけど、これ飲んで落ち着いてください」

セーラがお茶をカップについて、飲め飲めと押しつけながら言った。ハーティは否定しないでそれを受け取り、一気飲みする。

失礼な女達だ。

「長、できれば、さっきの姿に戻って話すというのは」

「本当に失礼ですね」

尻尾でびしりと床を打つ。

「だって、長、もし人間のこんぐらいのちっさい赤ちゃんが今の台詞口にしてたら、不気味じゃないですか？」

「人間とはサイズから何から違うでしょう」

「そりゃ、竜は子供でも他の種族ほど子供供してませんが、やっぱり違和感あるんですよ」

仕方がないとばかりに聖良がマントをかぶせて、頭蓋骨を乗せ、呪文を唱えてくれる。人の姿に戻るとまた着替え、椅子に座る。

「竜の姿だと自分ではかけられないんですね……」

「舌のまわりが違うんですよ。魔力も扱いにくいですし」

「そういえば、私も人化した方が魔術使いやすいです。竜って、やっぱり身体の問題があるんですね」

彼女は自分の魔術が未熟な理由が分かったからか、嬉しそうにうんうんと頷いた。

「まあ、帰ったら手ほどきしましょう。お前は未熟すぎる。」

こうして私達の事を話してしまった以上、誰かに捕まってもらっ

ても困ります。竜は魔力がありますからね。多少不器用でも力で押せばいいんですよ。

今までは竜だと知らない者が教えていたから、あまり効率が良くなかったのでしょうか。これからは竜向きの、効率の良い方法を教えます」

アデイスは苦笑いしながら彼女の頭部を撫でた。本来の彼女ならもう少し可愛いと思えるのだが、この頭蓋骨を選んだのはアデイスだ。仕方がない。自分の好みすぎる姿を選んで聖良に嫉妬されるのも楽しいが、後が気まずい。

「長……あ、アデイス様？」

「様はいりません。両親が不審に思うでしょう」

自分の息子が親戚の女の子に様付けされていたらおかしく思われる。何をしたのか聞かれても困るのだ。

「アデイス……」

「それでいい」

彼女は照れくさそうに笑う。なかなか可愛い反応だ。

「肝心な話はすんだようですから、私はミラさんとお母さんの様子を見てきますね」

セーラがポットを持ったまま立ち上がる。

「セーラ、わざわざ危険に飛び込む必要はないでしょう」

「危険とか言わないでください」

「危険ですよ。とくに込み入った話しはもうありませんから、一緒に行きます。」

セーラの事だから、海に落ちたり、海の生物に海中に引きずり込まれたりするんですよ」

セーラはアデイスの言葉で目を伏せる。否定はしない。できないはずだ。深刻な顔をして悩み、やがて呆けたようなため息をついて、何も言わずに狭い部屋を出る。

それをハーティが顔を引きつらせて見送った。

「お……アデイスがあの人と仲がいいのって」

「似たもの同士なところがあるのは、大きいですよ。

ハーティも、彼女と二人きりになるような事があつたら、くれぐれも目を離さないようにお願いします。この数ヶ月で何度か誘拐されているので」

彼女は引きつった笑顔のままこくりこくりと頷いた。



## 12話 恋する乙女1

アデイスはハーティの横に並んで座り、同じノートに向き合いながら、魔道理論を説明する。彼女は素直に、真剣に話を聞いている。その向こうでは、セーラが夕飯の準備をしている。

とてもいい匂いがするせいか、ハーティの腹がぐうと鳴った。

慌てて腹を抱え、彼女はちらとアデイスを見る。顔が熱く、可愛らしい。

「空腹は集中を妨げますからね」

「申し訳ありません」

「いいんですよ。この匂いを嗅いでいると、腹は空きますからね」  
今日の料理は香りが強い。

猛烈に食欲をそそる独特の香りだ。山の中にある物を取ってくるギセル族では、この香りの出る物は作れないから、これほど近距離でこのような香を嗅ぐのは、ハーティは初めてだろう。

ギセル族の二人は、本格的に雪が降り始める前に帰ってしまった。向こうの冬準備もまだ完璧ではないらしい。だからセーラが一人で料理しているのだが、調理器具を新しく買ってトロアに運んでもらったため、嬉々として料理している。

今は『お母さんの寝室』と呼ばれている洞窟にネルフィア達がいるので、この小屋にいるのは、アデイス達と神子達だけだ。人口密度は減ったが、それでも二人が過ごすにはちょうどいいサイズの可愛い小屋なので、狭苦しい。夕飯時になると、美味しい物があると分かっているので竜達も上から下りてくるからもつと狭くなる。そのため、床に座って使うテーブルをもう一つ作ったほどだ。

夕飯まではハーティの勉強を見て、食後はセーラの勉強を見る約束になっている。ハーティはそれを聞きながら自習をする。彼女にとってはセーラの声を聞くだけでも勉強になるはずだ。ハーティの発音は、少し舌っ足らずで滑舌が悪い。セーラほどでなく、アデイ

スほどになるにもどれだけかかるか分からない。だからセーラの声を聞かせるのは、彼女にとってはどんな本を読むよりも彼女のためになる。

ぐう、と再びハーティの腹が鳴り、アデイスは思わず小さく笑った。

「……………つくづく、私は駄目ですね。物覚えは悪いし、いい年して舌は回らないし、ろくに家事も出来ないし」

彼女はセーラに対してかなりコンプレックスを持っているらしい。彼女に出来ない事ほどセーラは得意だ。自分の悪い部分ばかり見えて嫌になるのだろう。

「これから覚えていけばいいですよ。洗濯と掃除ぐらいなら誰にでも出来ます。料理は……向き不向きが激しいですが、食べられる物程度なら私にでも作れますよ」

竜にとって魔術よりも向いていない事は、料理だとトロアが言っていた。料理をする竜など見た事がないし聞いた事もないという。文明的な生活力がないから、小人と対等に住むというおかしな生活が成り立っているのだ。

「セーラは小さいから細々としたことが好きなようです。彼女には向いてるんでしょうね」

食料調達、散歩、勉強をしていない時は、小物を作ったり、編み物をしている。料理上手なもの、作れと言われて作っていたら身に付いたらしい。

どんな理不尽な扱いをされてきたのかと考えると、涙ぐましい。

「セーラ、今夜は何ですか」

「魚の煮付けです。ちよつと和風に頑張ってみました」

セーラは魚が好きらしく、魚を開いて天日干しにしている。米も仕入れて、彼女はとても満足そうだ。

米は彼女の知る米とかなり違うらしいが、炊くのは上手くできたらしい。

調味料も見本を味見しまくって、近い味の物を探したらしく、

彼女は生き生きしている。慣れた味が食べられないと苦痛だということ、アデイスもよく知っている。生まれ変わってから嫌と言うほど経験した。セーラはもう二度と、その味そのものは味わえないのだ。それだけは悪いと思っている。

「長は」

「アデイスです」

ハーティの呼びかけに訂正を入れる。

「アデイスさ……アデイスは……」

何かを言いかけて言葉を止め、彼女が顔を上げると、玄関のドアが開いた。

外にいたミラ達が帰ってきたようだ。

「いい匂いだね。セーラ、何か手伝おうか？」

「もう出来たから大丈夫です。何かありましたか？」

「香草を取ってきたんだ。肉の臭みが取れるよ。たくさんあるから、乾燥させて備蓄しておこう」

「ありがとうございます」

ユイがえへへと笑う。可愛い女の子に笑みを向けられて、悪い気分になる男はいないだろう。ミラのような女を連れ歩いていたら、セーラで癒される気持ちも理解できる。

ミラが鍋の中をのぞき込み、不思議そうに鼻をくんくんと鳴らす。「ルルトさんと一緒に作ったベーコンでスープも作りましたよ。味噌みtainのがあったら良かったけど、さすがにないですし、口に慣れない物ばかりでも何ですし」

セーラは楽しそうだ。

実に平和な夕暮れ時。

アデイスはせめて神殿の三人組がいなければと思いつながらも、幸せを噛みしめた。

もちろん、もっと二人きりの時間が欲しいなどは、ミラが怖いので言えないが。

聖良の最近の趣味。

手芸、勉強、散歩、釣り。

それぐらいいしかやることがないのだが、釣りは大好きな魚を食べられるのでとくに好きだ。

川魚を塩焼きにするのは胸が躍る。塩があるからこそ美味しく食べられる。

なんて贅沢なのだろうか。

ダシに使えそうな海草も買ってきたし、充実している。

それはいいとして、最近、釣りについてくるアデイスが鬱陶しい。座りながら竿を操る聖良の背後に、抱きかかえるようにして座るのだ。身動きしづらいいし、セクハラを受けるし、嫌だと言っているのだが、持ち前の強引さでどかないし離れない。

だからひたすら無視して、疑似餌をびよこひよこことはねさせる。

投げては戻し、投げては戻す。釣り道具一式は港で買ってきた新品だ。アデイスも暇なら釣りでもすればいいのに、誘うと断るのだ。

「セーラ、そんなに楽しいですか？」

「釣ったあと食べるまでが楽しいんです」

「私はセーラとこうしているのが楽しいですよ」

頭頂部にキスされる。

「それに、最近はどうした二人きりの時間が少ないですし」

髪に触れられ、頭を振る。それが面白いのか髪をまとめようとしてくれ。

確かに、最近は二人きりの時間が少ない。こうしている時か、寝ているときぐらいだろう。ミラと一緒に寝るよりは落ち着いて寝られるので文句は言わないが。

なぜ一緒に寝たがるのかと今更ながら思うが、今更過ぎて言った

らきよとんとされるだろう。

「もう、セーラ可愛い」

不必要に強く抱きしめられて、首筋にキスをされる。吸われる。

「っひわわわっ」

釣り竿の柄でアデイスを殴る。この体勢で拳では力が入らない。

「この変態っ！ 頭のとっぺんだけでもヤなのに、気持ちの悪いことをしないでくださいっ！」

「変態だなんて……」

「変態以外の何だっって言うんですか」

「ただ、こういう跡もすぐに消えるのかなあと、好奇心から」

跡。聖良は考えて、キスマークとか呼ばれているものの存在を思  
い出す。

「私の国だと傷害罪ですよ。内出血させてるだけですからね。暴力  
です」

「セーラがあんまりつれないから、私はつい過激なことをしたくな  
るんです。セーラに可愛い反応してもらいたいんです」

アデイスは聖良の首筋を撫でながら言う。

人の羞恥する姿を見て喜ぶのは変態だ。

「とりあえず跡はまだあります」

「そうですかそうですか」

「自分の身体を知るのは大切な事です。どういった怪我ならすぐに  
治り、どういった怪我なら治りにくいかな。セーラはすぐに怪我をす  
るから知っておく必要があります」

またいい加減なことを言っているが、いつもの事なので慣れた。

キスされた辺りを、鼻歌を歌いながらアデイスが撫でる。キスは  
ともかく、撫でられるのは気持ちがいい。穏やかに頭や髪に触れら  
れると落ち着く。

そんなことを言ったら穏やかさが消え去るほど撫でられそうなの  
で言わないが、撫でているだけならやってもいいと思うようになって  
きた。

こつして流されていくのもどうかと思っただが、嫌だと思わないのに抵抗し続けるのも疲れる。それでも少しだけは抵抗しなければ、流されすぎてしまいそうで怖かった。

「そういう事は私じゃなくて、ハーティさんにしてきたらどうですか」

「妬いてるんですか。可愛いな」

「って、また何をしようとするんですか」

首筋に顔を寄せるアデイスの頭にてを向けた。

抵抗しようにも、言っても言わなくても同じなのだという事を少し忘れていた。

「消えたから今度はもう少し強くと思ひまして」

「だからセクハラの上に立派な傷害です」

「セーラ可愛い」

「私が血管の弱い人だったらぶち切れて倒れてますよっ」

「短気なセーラ可愛い」

「もうウザイっ！ 木の実でも拾っててください！」

「やあです。離れたらセーラが寒くて風邪をひきますよ」

「私は雪の日も元気に新聞配達してたんです！」

そろそろ怒るのにも疲れた。

変な事さえしてこなければ、膝の上で抱きかかえられるぐらいなら、もう何も言わないのに、彼は色々と余計な事をする。

「アデイスも趣味を持った方がいいですよ」

「趣味というと……魔術関係じゃないですね」

「じゃあ、好きなだけやって下さい」

「人生長いんですから、本当に暇なときでいいんですよ。最近、勉強を教えるので、自分の事をする意欲がなかなか湧きません。だからセーラが生き甲斐なんです。セーラが可愛くて可愛くて仕方がないんです。セーラに教えてる方が楽しんです」

なでなですりすりされる。

「私は愛玩動物ですか」

言ってから、大して違わないような気がしてため息をつく。

飼い犬に、お前は世界一可愛いと言う飼い主そのものの行動だ。

「そんな風に思っていますよ。愛玩動物なんて、可愛がるだけで、いつでも切り捨てられる物のことを言うんです。」

人でも動物でも、切り捨てられないほど大切なら、家族とか恋人になるんです。」

アデイスの言う切り捨てられる物というのは何だろうか。人間のアデイスの地位、アーネスの地位はどこまで大切なのだろうか。あの愛人二人、部下二人。どこまでが大切なのだろうか。

この男のおかしな所は、そんな大層なことを言った直後にも、撫でるのをやめない事だ。

「その撫で方はやめてください。子供じゃないんですから。」

猫かわいがりする時は、いつもよりも激しく、ハゲそうなほど撫でる。アデイスだって、さすがに聖良が禿げたら嫌だろうから、もう少し考えた撫で方をして欲しい。

「じゃあ、どんな事ならしていいですか？」

「出来れば適度な距離を置いてください。」

「これが私にとっては適度な距離ですよ。」

「私がむっさいおっさんだった時ぐらいの距離をお願いします。」

「無理ですよ。セーラはこんなに可愛いのに。おひげをつけても可愛いですよ。」

「じゃあ、せめて大人の女性の扱いを。」

彼はセーラの頭にあごを載せてうーん唸る。

この体勢、竜の姿でやれると食べられそうで怖い。人の姿ではそういう恐怖はないが、別のもやもやが生まれる。もちろん両方とも口にしないし態度にも出さない。

「セーラ、そういう事はあんまり言わない方がいいですよ。勘違いする男は勘違いしますから。」

「勘違いって……。」

「大人扱って、こつこついう事ですよ。」

頭の上に顎を載せていたアデイスは、聖良の顎を持ち上げて覆い被さってきた。

「ちよっ」

唇が一瞬触れるとすぐに離れる。

「なっ、ちよ、あっ、もうっ……馬鹿っ！」

言葉が出ずにどもってしまっ。出たのが言いやすい馬鹿だった。

「赤くなって可愛いですね。セーラ、大人の女性扱いって、こういう事ですよ」

「バカっ」

「なんなら、もっともっと大人のキスでもしてみましようか？」

「アデイスのバカっ」

「バカって、言われる状況によっては、すごく胸がときめくんですよ」

この男のこういうところは理解不能だ。

聖良は深く深くため息をついた。

こんな男がときめくとか本当に馬鹿だ。これで不細工だったら殴り倒したくなるだろうが、微笑んで言うとなんな台詞も似合ってしまっから、馬鹿らしくなるのだ。

「もう、反省しないなら竜の姿に戻ってて下さい」

セーラは嫌がるアデイスにしがみついて、服を脱がせながら呪文を唱えた。脱ぎやすい前あわせの服だから、ベルトを外して袖さえ腕から外してしまえば服に損害は出ない。

この姿よりも、竜の姿の方がもたれかかって気持ちいいのだ。

ハーティは腹ばいになり沈んでいた。

隣には同じく腹ばいになった神子達と、アデイスの身内達。



なぜこんな事になっているのか、彼女にはもう思い出せない。偶然二人を見かけて、こうしていたらいつの間にか、わらわらと集まって『子供達』の戯れを観察していたのだけは確かだ。

二人はひたすらイチャイチャしている。抱きしめて、撫でて、なにされている本人はほぼ無視しているという奇妙なイチャつき方だ。

「……セーラはよくあれが平気だね。アデイスのあの姿、男から見ても格好いいのに」

ユイが呟く。

まったくだ。なぜ平気なのだろうか。なぜ平気を通り越して無關心なのだろうか。

「いいなあ……」

呟き、ため息をつく。

遠い存在だった。それがこんなに近くににいるのに、腕の中にいるのは人間の女の子だ。これが何も出来ないイヤな女なら怒りも沸くが、手先が器用で、甲斐甲斐しく家事をして、アデイスの好みだ。さらさらの黒髪がとても綺麗で、ハーティのくせっ毛とは触り心地がまるで違う。

太刀打ちできないので諦めるしかない。

「ハトラはアデイスに気があるのかい。シヨタコンってやつか？」

ネルフィアがひどいことを言う。

「違うよネルフィ。彼女はあの姿の人間が好きだったんだよ。中身も似てるから引きずってるんだって」

「そうなのかい。うちの子の方がいいのにねえ」

「いや、アデイスだけ見るとまだ子供だろ。言動が大人びてるから忘れそうになるけど」

実の親は、息子の中身についてまだ気付いていないようだ。

実際の所、本当にアデイスが乗っ取ったのか、幼い童がすべてを取り込んだのか、分からない。アデイスもそれは認めているし、どちらでも今があるのだから同じだと。

「しっかし、どうしてあんなになつたんだらうな。あの人間の我が強くて、ラゼス似の私の弱い子だったとしても」

トロアが呆れ半分に言う。

アデイスが一番恐いのは、このトロアだと言っていた。話を聞いた限りでは、神官に向いた男らしい。竜にも神はあると言ったら、アデイスは少し驚いていた。

「というか、ネルフィ、彼をどこで見つけたの？ よく生きたまま連れてこられたよね。本当に有名で偉い魔術師らしいよ」

有名も有名。ハーネスが死んでからの魔術師再編で一番頭角を現したのが彼だ。ハーネスの再来やら、ハーネスが生まれ変わって善人になったとか言われている。ハーネスと比べられるというのがどれだけ凄いことなのか、彼らには説明しても理解できないだろう。

グリーディアから悪魔を追い出し、魔術師の国を作り上げ、維持してきた、功績だけを見れば奇跡のような英雄だ。

「町に行って聞き込みをしたんだよ。偶然城から出てきた所を教えてもらったんだ。人里離れたところに自分から向かってくれたからやりやすかったよ」

相変わらずの不運さ。自爆ぶり。これこそ彼の愛すべき欠点。あれだけ優れた人間相手に、まわりはいつもそわそわしている。すごいけどほっておけない人と言われているほど愛されている。彼を見ていると、努力や才能ではどうしようもないことがあるのだと、下端達を慰めてくれる。

「それで本当に国一番の魔術師を連れてくるところが、ネルフィらしいというか。

しかも、プレイボーイそうだよ。うちの子の将来が心配だよ」それはそうだろう。もう既にまっとうな竜ではない。

「というか、人間のアデイスはどんな人間だったんだ？ 人望はあるみたいだったけど」

トロアはひたすらセーラをいじる彼を見て呟く。両親は何かを猛烈に愛でるタイプではない。人間のアデイスの影響だと思っている

のだ。

「アデイスは命令に慣れてたね。強い意志を持って、優秀だったんだろっね。まだ若かったのに……」

ラゼスは罪悪感を持ってしているらしい。なまじ息子がそれに似てしまったから。しかも生肉を嫌っているらしく、その理由を聞くと目が泳いで気持ち悪そうにするのだ。彼は昔、レアステーキは普通に食べていた。むしろさつと炙っただけの肉が好きだった。今ではじゅじゅと少し焦げても中までしっかり火が通るように焼いている。セーラもアデイスに出す肉には気をつけている。

それで理解できないほど、竜というのは馬鹿ばかりではない。少なくともラゼスは理解している。

「セーラ、噛みつかれて暴れている」

「ミラさん、あれはキスされただけだよ。噛んだはしていないから」  
ミラの発言で、ハノが穏やかに微笑みながら訂正する。

この半悪魔はよく分からない男だ。半悪魔にありがちな粗暴さがなく、穏やかで、暇があれば木を彫って女神など作っている。神殿に飼われているくせに、だ。すべての神は自分の神の別称と言い切る神殿で、明らかに自分たちの神ではなく、特定の神を意識した女神像を彫るのだ。それが神殿の者にとってどういう意味か、はつきりとは分からないが、あまり良くないことだけが分かる。

ミラも己の道を行くタイプだが、彼もそれに負けず劣らずといったところがある。

一番自分というものが弱いのは、主であるユイだ。

こういふ男だから、神子でも恐ろしくない。

「私じゃなくて、ハーティさんにしてきたらどうですか」

セーラがしばしとアデイスを叩きながら主張する。ハーティは顔が熱くなるのを感じた。

「妬いてるんですか。可愛いな」

「って、また何をしようとするんですか」

少しときめいたのに、アデイスはさらっと無視されて悲しい。

「傷の治り具合を見ていると言ってる。アデイスは子供なのに危機感があるな」

ミラは感心したように言う。

「アデイスはセーラをからかっているだけだよ。キスすると跡が残るらしいから。彼は最近セーラの反応が悪いから、退屈なんだよ」

ハノはミラに教えるように分かりやすく説明する。その推測はかなりの確率で正しいだろう。彼はかわいい女の子の反応を見て楽しむ傾向がある。

ハノは浮世離れたミラに、そういう感覚の存在を教えたいのだ。そう思わせるほどミラは常識がない。

「どっちにしても、マセガキって奴だよな。僕らなんて、恋人もいないのに」

一瞬、ユイはちらとミラを見る。

近くにいる女はこれだからとでも言いたげに。

支配していても、手を出す勇氣はないのだろう。ミラは怖い。竜の目から見ても怖い。とにかく怖い。常識がないからより怖い。普通に接しているセーラが異様なのだ。

考えれば考えるほど、ハーティに勝算が見つからず、ただ見ているしかない。

あれで性格が悪かったり、偽善者だったりしたら嫌えるのに、彼女は悪い人間ではないし、アデイスを必要以上に咎めたりもしない悪いことはやめると言って改心させようとする偽善者なら嫌えたのに、彼女は適度な言葉しか挟まない。

涙目で二人を見てみると、今度はアデイスがセーラに覆い被さる。一瞬で離れたが、キスでもしたのだろう。セーラが馬鹿と罵る。

それですますアデイスが喜んで彼女を抱きしめる。

「アデイス、なぜ馬鹿言われて喜ぶ」

「反応してくれるからだよ。それにセーラは、本気で嫌がっていないからね。嫌だったらセーラでもずっと膝の上になんていないよ。

私はミラさんがぶすつとしながらも抵抗せずに、髪にクシをい

れさせてもらえた時は嬉しかったよ。ミラさんは警戒している相手には、物を持って近寄られると絶対に抵抗するでしょう」

ハノやセーラと話しているときのミラは、少しだけ怖くなくなる。不思議だ。ミラと二人きりになると気が遠くなるほど恐ろしいのに、ハノやセーラがいると、まるで別人のように穏やかな空気が生まれる。

「なんか、僕たちだけ残り物っぽい疎外感を覚えるんだけど」

ユイがハーティとトロアに目を向けた。

「なんで俺を見るんだ。俺は彼女ぐらいいるぞ」

トロアの主張に皆驚く。

意外だった。女心を理解できずに、すぐに振られるタイプだと思っていたのに、ついでに行ける女性がいたのだ。

「じゃあなんてこんな所に入り浸ってるんですか。恋人さんほっといていいんですか？」

ハーティは不安になって問う。

彼はセーラを妹だと言い張って可愛がっている。もちろんアデイスのような下心はないだろうが、アデイスと同じぐらいの激しさで可愛がっている。

その上、竜の女が人間の女よりも気が長いとはいえ、友人夫婦にひつついて長居しても許してくれるなど信じられない。

「ほら、女って旅行好きだろ。もう五年ぐらい旅に出てる」

「それって……振られたんじゃない」

ユイが言いにくそうに、わざわざ言った。

「……まあ、どっちでもいいや。セーラがいるし」

あまり好きでもなかったのだろう。恋人よりも妹の方がいいなど、女に逃げられても仕方がない。

「それよりお前達、年齢的にちょうどいいんじゃないか。ユイは神子で年取らないし」

トロアがハーティとユイを見て言う。

「私は俺についてこいってタイプの方が」

「いやあの、僕は種族の壁を越えるのはちょっと。というか、トリアさんはいいの、あの二人が超えても」

ユイはアデイス達を指さして問う。

二人にとってそれが一番の問題だ。心は人間でも身体は竜。大きすぎる壁である。

珍しいが、たまに他種族と結婚する竜はいるが。

考えると、あまり大きな壁でなくなった。

「アデイスもまだ子供だからな。ひつついて喜んでるだけだから、そこまで考えるのは早いだろ。そういう事は大きくなったときに考えればいい」

「確かにそうだけど」

「まあ、アデイスが大人になったときに『セーラが欲しければ俺を倒してみる』とか言ってみたいなあ」

「はは……楽しそうだね」

暢気な自称兄である。

ハーティがため息をついて前を向くと、いつの間にか竜に戻っているアデイスがこちらをじっと見ていた。

人の姿をやめて、こちらの会話が聞こえるようになったらしい。

「皆さん揃って何してるんですか。そんな格好でお見合いなんて斬新な」

「お、お見合いなんかじゃありませんっ」

「そんなに一生懸命拒否したら、ユイが可哀相でしょう」

「拒否というか、私は……」

アデイスが好きなのだとは、言えない。

身の程ぐらい知っている。少なくとも、今のハーティには資格がない。

「アデイス、なんか凹んでますよ。そんなに叱らないであげてください」

セーラがアデイスの翼を引っ張って言う。

「うーん。責めてるんじゃないって、せめてもっと遠回しに言いなさい」

いと言いたいただけなんです」

「危険人物から逃げるために故郷を離れば、誰だって打たれ弱くなりますよ。もつと優しくしてあげないと」

「セーラは故郷を離れて時がたつにつれ、打たれ強くなってる気がするんですが」

「慣れさせられたんですよ、アデイスに。」

普通なら死んでるような怪我をよくするから、小さな事なんてどうでも良くなつたんです。濃すぎる人生経験のせいです」

「そういえば、最近死にかけるとような怪我はないですね。誘拐も殺されるようなタイプにはされてませんし。強気になって運氣上昇してきたんでしょうか」

今までハーティが見たセーラの不安を思い出す。

あれで運氣が上がってきたのだ。今までどんな可哀相な生活を送ってきたのだろう。アデイスが彼女を好きになつた理由の一つは、まさか自分に近い物を感じてのことだったりするのだろうか。

「……………私は、やっぱりセーラには勝てない」

「いや、勝つてどうするの。勝つて」

不幸なところで勝つてもなんの意味もないとユイが手を振る。

「セーラ、魚、釣れたか？」

食べることは好きなミラがセーラに問う。

「今日はぜんぜんダメです」

「セーラ、魚好きなのに、残念」

「ミラさんが好きなお肉は私も好きですから大丈夫です。釣りはただの趣味です」

男の心を掴むには胃袋からだとか誰かが言っていた。実際にアデイスは菓子を焼いてくる女の子がいると可愛かった。

「自分でとつた食べ物を自分で調理すると美味しく感じるんですよ。ミラさんも本格的にお料理してみますか？」

「料理、したことある。神殿でした。包丁で」

「野菜とか肉とか切ってたんでしたっけ。味付けも面白いですよ」

「塩、胡椒かける」

「塩はこの世で最も優れた調味料ですからね。塩が使いこなせる人は料理上手になれるんですよ。ミラさんみたいによく食べる人は、自分で何でも出来ると困らなくていいですね。でも、塩胡椒だけだと飽きてしまいますよ」

「そうなのか」

セーラはミラを上手く乗せている。

誰かが言っていた。

本当に賢い人間というのは、口先で人を動かす。

手を出すタイミングを見極め、必要な時は迷わず手を出し、引くべき時には引けるのだ。

「ミラさんは野菜を上手に切れるから、きっと料理上手になりますよ」

神子以上のミラ使いは、ミラの手を引いて小屋へと向かった。

彼女のこういうところが、凄いのだ。



## 12話 恋する乙女2

ハーティは勉強が好きだ。

人間の賢さが好きだ。

竜は長生きするため、文字というものを滅多に使わない。人間の寿命が短いからこそ、考えるからこそ、弱いからこそ、文字というものは進化していく。

人の存在価値はこの賢さと不便を解消していく器用さにある。そうでなければ人は他種族に駆逐されていただろう。

この国の凄いところは、突出してしまったため、悪魔に観察対象とされている所だ。悪魔達の間には協定のようなものが出て、悪魔は入ることを許されない。それを許すと壊される可能性があるからだ。

そこまでさせる価値があるこの国は徳辺だ。その中でもアデイスは凄い。

彼が丁寧に教えてくれるだけで、今まで細かな操作ができなかったのに、今日は小さな炎を九つ維持して、等間隔に並べられている。「お前もやれば出来るじゃないですか。竜だから不器用で出来ないなんて事はないんですよ。ようは、やれるまでやるか、出来ない諦めてやらないかです。」

私だつていきなり縫い物をしろと言われたら惨敗ですからね」

やらないから慣れない。慣れないからやらない。切迫していない、必要がないからやらない。

それを繰り返しているのは竜も悪魔も同じだ。

「セーラがあの話し方なのは、元々そう発音する地域で育ったからです。同じ育ち方をすれば誰もがああります。才能よりも環境、慣れが大切なんですよ。お前は魔力が高いんですから、最低限の事が身につけば、他者を圧倒できるでしょう」

アデイスに褒められ、くらくらした。

竜の姿でなくて、人間の姿だからよけいに嬉しい。

もしアーネスの姿だったら気を失っていたかも知れない。今は外にいるので、倒れればアデイスに借りた服を汚してしまうので何とかこらえた。

「私も、頑張れば口ゼ達みたになれますか」

「あの子達は人間ですから、元々竜には届きません」

「そうじゃなくて……」

「あの子達のように器用なのは、必要があるからそうなる努力をしただけです。生まれついて器用なのはあるでしょうが、数十年も頑張れば追いつけます。」

努力して、時間を費やせば、誰だって上達します。

もちろん効率の良いやり方があります。だらしなく繰り返してもなかなか身につきません。

やり方は私が教えます」

ハーティは小さく頷いた。

一人でやるより、教えを乞う方がずっと早い。竜はあまりそういうことをしないから彼女は嬉しかった。竜は始めに食べた知能の高い生物の知識を得ることが出来る。本当は初めだけではないのだが、初めに食べた者の知識が強烈に残る。

だから教育の必要がないのだ。最低限は持っているから。

「アデイス、それやって何の役に立つ？」

「なんでも普通に出来るミラさんには意味は無いでしょうね」

彼女は天才だ。アデイスですら自分では届かないと言い切るほどの天才だ。術の多様さではアデイスの方が勝っているが、息を吸うのと同じように使う彼女のやり方は、まさに才能が物を言っている。

「私はアデイスの骸骨変装、欲しい」

「同等の術と引き替えならともかく、こんな術の存在を世間に知られるリスクを抱えてまで教えられませんか。セーラは私から離れないからいいですけど」

「ハーティはいいのか？」

「この子はまあ、身内ですしね。それに部下に教えるのは投資です。もちろん口が軽い者には教えませんが。」

ミラさんは身内でも部下でもないでしょう。

お友達は別枠です」

ミラは不服そうだ。

しかしそれ以上は言わない。慈悲なき殲滅の悪魔でも、頭はいいので言葉による説得は可能らしい。その強さで噂ばかりが誇張されていたのだろう。

「アデイス、ちょっといいですか？」

雨戸を開けて、セーラが外に顔を出す。

「何ですか」

「ユイ君も分からないそうだから教えて欲しいんですけど、手は空いていますか？」

「ええ、ちょうど手が空きました。ハーティ、さっきの調子で繰り返しなさい。増やさず繰り返し返すんです。数よりも速さと精密さが大切です。ミラさんならあれの数十倍の規模を一瞬で行えます。それが彼女の強さです」

ミラがこくりと頷く。セーラに凄いですねと褒められてミラは嬉しそうに笑った。

繰り返し返せば上手くなる。不器用なら人一倍の練習を。

そうすれば、少しはアデイスの近くに行く事が出来る。

隣ですやすよと可愛いらしい寝息をたてるセーラの髪を払い、可愛い顔を眺める。朝までだって眺めていられるくらい可愛いのだが、さすがに時間の無駄である。

アデイスは起こさないようそつと起き上がり、旅行をしている間にドアが付いていた部屋を出る。台所で水を飲み、上着を羽織ると庭へ出た。セーラが買ってきたハーブの苗が植わっているので、以前よりもずいぶんと庭らしくなった。春になったらもつと植えるつもりらしい。

可愛らしい草木に埋もれる彼女は、きつと可愛らしい。しかしハーブは立派に大きく成長して、きつとセーラは埋もれるだろう。背丈のことを気にする彼女は、ハーブより小さな自分に思い悩む姿が容易に想像できる。今から楽しみでならなかった。

アデイスは伸びびをして空を見上げる。

寒いが、いい天気だ。人の姿だと寒いが、とてもいい天気だ。

「アーネス様、何をされてるんですか？」

庭の片隅にある丸太を椅子代わりにしていたハーティが立ち上がる。

「そちらこそ何をしているんです」

「練習を……」

一気に上達して、褒めてもらいたいでも思っていたのだろう。こういうタイプには多い。

「根を詰めても精度が落ちます。睡眠は大切にしなさい」

「はい。申し訳ありません」

「責めているのではないんですよ。そうやってすぐに気にするのはお前の悪いところです。人の言葉を無視して続けるなら話しは別ですが、忠告に耳を貸すのと、反省するのは別です。怒っているわけでもないのに謝られるのは好きません」

叱るのと怒るのを区別できないだけならともかく、忠告まで同じにされるのは好かない。

「す、すみません」

「まあいいです」

謝罪の言葉は使い勝手が広い。口にしたくなるものだ。

「アーネス様は……じゃなくて、アデイスはどうしてこんな時間に

「？」

「眠れないので、練習でもしようかと」

「練習？」

「セーラが人の姿に化けられるようになって欲しいそうです」

「今の姿ではダメなんですか？」

「子供の姿というのがいいのではありませんか。セーラも可愛いものが好きですから、その気持ちはよく理解できます」

膝の上でだっこする予定らしい。素晴らしい予定だ。小さくなるのも悪くない。

「うう……難しいと思いますよ。火を吐いたり飛んだりするのは人間が歩くぐらい当たり前の事ですけど」

「大きくなるのはまた違うんですか？」

「ちよつと違います。魔術でいうと、火を出すのと霧を出すのぐらい違います」

魔術で火を出すのは単純だ。しかし魔術で霧を出すのは、複数の要素が混じり難しい。もちろんハーティにはまだ無理だ。

「一朝一夕で出来る物だとは思っていませんよ。やり方すら分からないんですから。両親に聞いてもそのうち出来るで終わりですし」

「確かに、そのうち出来るって言うしかないんですね。大きくなるなら土台は整っているから、そう遠くはないと思いますけど……」

「まあ、セーラより小さいうちに出来れば問題ありません。変身してセーラより大きかったら、しばらく口をきいてもらえないでしょう」

八つ当たりするタイプではないが、ショックが大きいと自分の殻に引きこもるのだ。

「それって、急がないとあつという間に抜かしてしまうのでは？」

「……………そんなに成長が早いものですか？」

「個人差が大きいですが……セーラだとどうなるか」

彼女は小さい。ぐずぐずしていると、膝の上には乗れないかもしれない。

「まあ、その時はその時でしょう」

セーラの楽しみが一つ減って、少ししょんぼりするだけだ。  
何にしても可愛い。

「そういえば、せっかく本当の意味で二人きりになれたことですし、いくつか確認したいことがあります」

「はいっ」

話し合いの相手になれることが嬉しいのだ。純粋な眼差しが、このような場合はとても痛い。

「とても聞きにくいことなのですがいいですか？」

「私に答えられることでしたら、何なりとっ」

全力で好かれるのは分かっている。そんな相手、しかもまだ少女に聞くことではないと分かっているが、他に聞く相手もない。  
ため息をつく。

「私は竜という物をほとんど知りません。両親に聞ける事にも限度があります」

「……竜と人間の夫婦とかそういうのは……珍しいですがいたそうです。人間にも、伝説みたいのであるんですよね」

おとぎ話だ。竜と人のお姫様の子供の話。

そういう事を聞きたかったのではないが、それも聞きたかったことの一つではある。

「竜と人間の子が魔王を倒したとかいうあれが一番有名ですが」  
「半分ぐらいは本当です」

半分。大袈裟にされているだけで、肝心の部分は本当のようだ。  
「ただの悪魔を倒したというところですか」

「そう聞いています。老衰で亡くなった村のおじいちゃんが言っていました。当時、子供だったそうです」

竜が老衰するほど昔の話。千年は前の事だろう。アデイスは竜が千年以上生きることが知っていても、上限がどこまでかは知らない。これは聞きやすいので、経験の多いラゼスに聞いた方がいい。

「その竜人はどうなったんですか？」

「神子に捕まえられて、意外と早くに亡くなったそうです。」

竜の間では、そういった人間に捕まった話を子供に聞かせて、自分がどれだけ強くても、人間を侮るなって教えています。昔のことだから誇張もあるだろうけど、そういう竜と人の子がいたのは本当だと思います。」

アデイスはため息をついた。

傷ついたような顔をして、我慢して話されるのも気分が悪い。

彼女はアデイスの子供好きを知っているから、将来は子供ぐらい欲しがると思いついで話したのだろう。

セーラの事を気にしているのに、極力普通にしようとしている。

セーラもそれに気付いているから、二人きりにしようなどとしている時もある。

彼女からすれば、年下に見える女の子が痛々しい事をしているから、可能な分は手を出してやりたいと思ったただけだ。

セーラがしている事はアデイスが傷つくのだが、本人に他意がないのだ。ハーティを傷つけるような事を市内という信頼があるからこそ、遊んでいなさいという親心的な物である。

「まあ、そんなことはどうでもいいんですが」

「どうでもいいんですか!？」

ハーティは目を丸くする。自分の子供が欲しかったら、とっくに作っている。

「私はまだ若いですから、子供を作る気はありません。それに自分の子だろつが、他人の子だろつが、可愛ければいいんですよ、可愛ければ。でなかったら、もうとっくに私は子持ちですよ」

「そういえば、アデイスも未婚でしたね」

子供は可愛い。だが、自分で作る必要はない。結婚して女に縛られるなど冗談ではないと思っていた。セーラは特別だ。彼女は大人でも可愛いから。

「私の母のネルフィアなんて、子供が欲しくて父を襲った方です。作ろつと思えば身体さえ出来てればいいんですよ」

「え……あの人ラゼスさんにそんな事っ」

「そういえば、ラゼスにも憧れているようでしたね」

彼女はラゼスに子供が出来たと聞いて、少しがっかりしていたのだ。

「……………まあ、その……普通に格好いいですから、年頃の女の子はだいたい……………」

「彼はそんなにいい男ですか？　まあ、人の姿は満足できるものですが」

「あんな感じですよ。竜にはああいう知的な男性があまりいませんから。」

てつきり、自分にはない物を持っているネルフィアさんを好きになったのかと……………」

「うちの父は手順は逆になってますが、母のことはそれなりに好きだよですよ。何だかんだと、私が生まれる前から一緒にいますし。母の言葉と常識が足りないだけです」

遅かれ速かれ、ああなっていた可能性が高い。ラゼスはネルフィアに怯えながらも、今も一緒にいるのだ。まさしく典型的な幼馴染みである。

「ハーティには親しい竜はいなかったんですか？」

「いなくもないですが、私は人間の街の方が好きですから」

人間の中にも、たまに虫や動物が好きすぎて、人としてのまっとうな生活を放棄している学者もいる。あの手のタイプなのだ。

好かれているのは、悪くはない。虫と違って、話し合える。愛し合う者もいる。

「お前に執着する相手がないのなら問題ありません。

好きなだけ私に執着していなさい」

彼女の頬に触れる。セーラほど小さくはないが、彼女も小柄なタイプだ。

「……………」

「独占欲の強いストーカータイプは迷惑ですが、賢いお前は違うで



しょう」

「はい」

「前にも言いましたね。いい子にしていたら、悪くはしません」

「はい」

セーラにするように頭を撫でる。セーラの細くてまっすぐな髪と違い、硬くて癖のある髪だ。

「ところで、聞いたかった肝心のことを聞いてもいいですか？」

「はいっ」

これが男の子だったら、もっと参考になつたのだが、女の子だと思つと今でも少し悩むが、聞かねばならないと覚悟を決めた。

「竜つて、どれぐらいで大人……少年になるものですか？」

「えと……」

「つまり、子供が出来るかどうかよりも、まず子供を作れる身体になるまでが問題なんですよ」

「……………ああ。そっか」

彼女はようやくそれを思い出したようだ。

人間の女の子のように、はっきりとここからですよという合図がないため、本当に見当も付かない。

人間だつたら歳が二桁に達するほどからだだが、竜の生態など知るはずがない。そして親にはさすがに聞けない。

「けっこう真剣な疑問なんですよ」

「そ、そうですねっ！ あはっ、あはははっ」

子供は出来る真剣に語つた直後のくせに、思わぬ質問に赤くなるハーティ。頭を撫でると次第に落ち着き、ちらちらとアデイスを仰ぎ見る。

「ご、ごめんなさい。私、男の子のことはよく……」

「そうですね。そうですね。人間みたいに学問として考えられているわけでもないし、仕方がないか」

ハーティはぎゅっと目をつぶる。この覚悟をするような仕草は、始めは可愛いと思つたが、いつまでも持つ続くとやるせない。

「でも、竜って本当に個人差が大きいんです。例えばアデイスが今、人化できるとして、その時の姿が年齢通りの赤ちゃんになるわけでもないんです。竜は子供時代と老人の時代が短くて、人間のように見た目で分かりやすい歳の取り方はしません」

「そうですか……」

「まずまず理解できない生物である。捕獲が可能だったら、人間の手でもっと調べられていただろうが。」

「お役に立てず、申し訳ありません」

「そういうのをやめなさい。私にだって分からないから聞いているんです。お前が知らなくても責めはしません。ハーティは一応、家族枠なんですよ。親戚ですし。」

「箱庭にも、親戚だったと説明します」

「ええっ!?!」

意外だったらしく、彼女は再び混乱する。あわあわと言葉にならない音を発し、言葉にならない主張を繰り返す。

「落ち着きなさい。何を言っているのか分かりません」

「は、はいっ」

「これから、この姿はアデイス、黒髪の方はアーネスと呼び分けるんです。出来ますか?」

「はい」

「よくできたらご褒美を上げますよ。何か欲しいものはありますか?」

「いえ、そんな。術を見てくださるだけで十分すぎるほどです」

「セーラの不必要な物いらぬ病と違い、彼女のは遠慮だろう。可愛い物だ。セーラなど、買わせてくれと言っても、値札を見ていらぬというのだ。最近、貨幣価値を理解してきたせいでよけいにその傾向が強い。元の世界で虐げられて、骨の髄まで貧乏性が染みついてしまっているのだ。」

「お前は可愛いですね」

「ええっ!?!」

焦る姿も可愛い。

逃げ腰になる彼女を抱き寄せて頬に触れる。セーラだとうしろう思うとつい抱き上げてしまう。小さいと可愛いが、それが欠点だらう。

「お前も可愛いですよ」

「ほ、本当に？」

「ええ、本当です。お前はとても可愛い。竜の姿もとても可愛いですよ」

常に人の姿を保つ彼女の為の言葉でもある。

少しでも嫌われたくないとも思っているのだろう。人の姿の方が好きだが、ずっとそのままでは大人のラゼス達ですからストレスがたまるらしい。まだ発展途上の彼女に、無理をしなくていいところで無理をさせる必要はない。

「私は可愛い物は人でなくても好きですからね」

「あ……あの」

「お前はもう少し力を抜きなさい。せつかく可愛いんだから、普通にしていればいいんです」

「はい……」

頬をまっ赤に染める女の子は本当に可愛い。

そう思うながらアデイスは彼女腰に手を回した瞬間、側頭部にぐすりとかかぶつかった。

「おい、その変態」

窓から顔を出す、寝ぼけ眼のセーラが、手を伸ばしていた。アデイスの足下には、セーラがミラにもらった杖。

短い距離とはいえ、よくこんなものが上手く当たったものだ。

「純粋な女の子に何悪さしてるんですか。怒りますよ」

「悪さなんて。」

ただ、ちよつとお話を」

「アデイスのお話は、抱きしめるんですか？ あれが普通ですか？ 誰にも出ますか？ ぜひミラさんにもしてみてください」

「もう、寝ぼけてますね。早く寝ないと朝に起きられませんか」

「寝ぼけてないですっ」

絶対に寝ぼけている。

セーラは寝ぼけると少し凶悪だ。予定の時間に起きる場合はしゃきつとしているのだが、それ以外に起こすと少し恐い。

近づき、さらさらの髪を手で梳く。

「暗いから一人では寂しいんですね。今戻りますよ。ハーティもいつしよに寝ましようか。三人なら寂しくないでしょう」

「……うん」

セーラは虚ろな目をしてアデイスの手に身を委ねる。寝ぼけている時は、少し凶悪化するが、少し素直で可愛い。

「お休み、セーラ」

頬をキスをすると、彼女はベッドに戻る。

すぐにいつもの寝息を立てて、可愛く眠り始める。

「あの……大丈夫ですか？」

「いつものことですよ。セーラは普段は大人しい子ですが、突然起こす時は気をつけてくださいね。まあ、私限定の態度だと思いますけど」

起こされた時の状況やら色々要素はあるのだろうが、アデイスに対してはかなりの確率で殴っている。それもまた可愛い。もちろんあの態度はセーラだからこそ許されるのだ。

「お前のおかげで、セーラから珍しい反応が出ました。気分がいいです」

寝ぼけていてとはいえ、嫉妬らしき反応が見えた。嫉妬深い女は本来嫌いなのだが、こういうのはとても可愛い。

可愛い子が、可愛い反応を見せてくれるだけで、今のアデイスは満足なのだ。それをセーラもハーティも、おそらく理解していない。

## 12話 恋する乙女3

ハーティは眠い目をこすり、朝食を食べた。

卵に生クリームを入れてオムレツにしたらしい。パンも美味しい。朝、ハーティが起きた時には、ベッドの真ん中にいたセーラがいないくて、アデイスにのし掛かられて驚いた。そこに悟りきった顔をしたセーラが来て殴り起こしたのにも驚いた。

思い出して顔を赤くしながら、朝食を終え、テーブルの上を片付けた。

他の皆は、それぞれ食料や薪を集めるの仕事があるので、小屋から出て行く。

だからこの小屋に残ったのは、ハーティとセーラだけだ。

テーブルは片付いたので、セーラは食器の入ったカゴを抱えて裏の水場へ行く。ハーティは床を雑巾掛けし、別の雑巾で棚を拭く。洗い物を手伝えればいいのだが、割れ物に触れるのは怖いのだ。

掃除が終わった頃に、セーラがカゴを抱えて戻ってきた。

「そろそろ誰か戻ってきてそうですし、お茶でも飲みましょうか。今日は冷えますからね」

そう言ってセーラはストーブの上に置いたヤカンの湯で、お茶を淹れ始める。

人間は寒さに弱いから、水の冷たさが堪えるらしい。肌も弱いのですぐに荒れてしまう。竜は爬虫類と同じで寒さに弱いと思われるらしいが、そんな種族は山の上で暮らしたりしない。むしろ熱さを苦手とする竜の方が多い。

「聖都で買ってきたんですけど、いい匂いなんですよ」

セーラは小さな身体でテキパキ動き、赤くなった手をカップで温める。小さくて可愛いのに、彼女はよく働く。

「あのセーラ、昨夜はごめんなさい」

「え？」

「朝早いのに、起こしてしまつて」

「ああ……別にハーティのせいじゃないですよ。早く起きてるのは習慣です」

「それに……」

アデイスがハーティにかまうのを、本当は不愉快に思っているのではないかと恐れた。

「ハーティは気にしすぎですよ。気にしなさ過ぎるミラさんみたいな人もどうかと思いますけど」

気にしすぎているのだろうかとハーティは悩む。

「でもあんまりアデイスのことを気にしてちゃダメですよ。人を振り回すタイプですから。」

気負っているより、少し力を抜いた方がいいです」

「力を抜く……ですか？」

セーラはカップを両手で握りしめたまま笑いながら頷く。彼女は冷静な女性だが、笑うと本当に小さな子供のようで可愛い。

「ハーティは私から見ても、アデイスに尽くそうって気負いが見えるから。」

寝ぼけてたからあんまり覚えてませんが、アデイスが昨日言いたかった事も遠回しにそういう事ですよ」

「え？」

竜の姿になつてもいいという事だと思っていた。

「ハーティは自分の里では竜の姿でしょう？　ここではずっと人の姿だから、他所様つてくくりが出来ているって感じです。それが寂しいんですよ。アデイスは親がないから、他人である家族に囲まれて過ごしたでしょう。だからすごく寂しがり屋なんですよ。アデイスが欲しいのは、恋人よりも家族ですから。」

ハーティが部下と上司を続けたいならこのままでもいいですけど、なんだかすれ違っている気がするんで」

気付かなかつたハーティは肩を落とした。よく考えれば、まさし

く彼女の言つとおりだった。

「ど、どうすればいいんでしょうか……」

「普通にしたらどうですか？ ハーティは実家の方やデデルさん達には普通に話していたから、今の堅苦しいのは普通じゃないんでしょう？」

ハーティの方がアデイスよりも年上なんだから、その力んだ丁寧語をやめればいいと思います」

「……り、力んでますか？」

「かなりガチガチです。アデイスなんてロリコンの変態で、大きくなったら捨てる生きる価値も無い最低のクズ野郎です。敬つてやる必要などありません」

「そ、そこまで……」

ここまで言つても許されるのは、彼女だからだ。これが身内の気安さなのだ。

「アデイスには難しいかも知れないけど、せめて私やミラさんには普通にしていたらどうでしょう。そういう警戒は、ミラさんの側にいると危ないですよ。うっかり切られます」

「ええっ!？」

うっかり切られるとは何だろうか。うっかりとは。

「ミラさんはそういう気配に敏感らしいです。万が一後ろから驚かせてやるうなんて思ったら、離れていても気配を察知して痛い目にありますよ。アデイスが一回やりました」

悪意ではなく軽い悪戯心でも、優れた剣士は感づくのだ。ハーティはミラを思い出し、恐怖で身を竦めた。

「ハーティはなんでか居着いているミラさん達と違って、招かれて来たんだから堂々としてればいいんですよ。食っちゃ寝してたら嫌われるでしょうけど、やる事をやったら普通にしていればいいんです。」

それともやつぱりアデイスがいると緊張しますか？」

少し悩んで小さく頷いた。

アデイスにそれが他人行儀ととられるなら、直さないといけない。  
「私はハーティのそういう真面目なところ好きですし、アデイスも好意的に思ってますよ」

「本当に、そうでしょうか」

「逆に考えると、アデイスがハーティを嫌う理由がありません。可愛い女の子だから好かれていきますよ。」

例えばですけど、可愛がっているペットに警戒されてたら寂しいでしょう」

ペットといえば、たまにくる魔物だ。撫でようとしたり、毛を逆立てて警戒された。それが少し寂しくて、落ち込んだものだ。

「拾ってきた野生の動物ならともかく、元々自分のところにいた子だと、もつと寂しいですよ。」

まあ、何をされてもいって態度も、可愛いと思えますけど」

可愛い人間に可愛いと言われて、ハーティは戸惑う。女の子は何にでも可愛いと言うのを知っているが、それでも焦りは募る。

「いきなりは無理でも、だらだらすればそのうち自然になっけますよ」

「なれるでしょうか……」

「時間って、そういう力がありますから」

セーラがカップに唇をつける。熱かったのか、ふうふうと息を掛けていると、玄関のドアが開いた。

「セーラっ、町に行きましょう」

アデイスが入ってくるなり、輝かんばかりの笑顔で言った。アーンネスよりも整った顔立ちだから、アーンネスで無くとも胸が高鳴る。

「ええっ？ 帰ってきたばかりなのに？ まだ食料はありますよ」

「そろそろ頼んでいた物が準備されているはずなので」

「急ぎですか？」

「ほら、ハーティ用の頭蓋骨を用意させているんですよ。素顔の方は箱庭の者が知っているから、私達の姿の時に歩き回れる、うんと可愛いやつ。」



やっぱりそこら辺にあつたのじゃイマイチですからね。その時は本名のハトラを名乗りなさい。で、可愛い洋服を買いましょう。帰りには箱庭に挨拶に行きましょう。

母の了解は取ってきましたから、数日滞在しますよ」

アデイスが出かけていたのは、ネルフィアの所だったようだ。

「……………ほら、こういう人だから、てきとーでいいんですよ。勝手に自分の趣味を押しつけてきますから、嫌なら嫌だと言わなきゃならないんです」

「は、はい……………」

アデイスがハーティのためだけに何かを用意してくれているというのが、たまらなく嬉しかった。嫌だなどとは少しも思わない。

「ミラさん達は？」

「置いてきます。箱庭にも顔を出さなくてはならないから連れて行けません。ユイには伝えておいたので」

「ならいいですけど。」

あ、そうだ。今日はハーティの背に乗るってのはどうです。ハーティはしばらく元の姿に戻ってないし、アデイスよりも飛ぶのに慣れてそうだし」

「ああ、それはいいですね。降りて呪文唱えるのも面倒ですし」

ハーティは指名されて、緊張が全身を駆けめぐる。

人間を背に乗せて飛ぶなど初めてで、墜落したらと

「行きますか」

「はい」

先に出ていったアデイスに、荷物を手にしたセーラが続く。

「いや、あのっ」

マイペースに外に出て、ハーティを待つ二人。

ひゅーひゅーと息を吐き、意を決する。

初めてでも、アデイスやネルフィアにも出来ていることだ。ハーティに出来ないはずもない。ぐつと力を入れて、気合いを入れる。

大切なのは、出来る事をする事だ。出来る事を出来ないと言い

張る無能を、きつとアデイスは嫌うだろう。  
だから恐いが、頑張ることにした。

着地後のハーティは緊張で身体がガチガチだったので、聖良はいつもの別荘で、ハーティのために準備をした。クローゼットに隠してあった頭蓋骨でハーティを変身させ、同じクローゼットにしまつてあつた服を選んだ。

現在のハーティの姿は、年の頃はやはり十代半ばで、この国では小柄な方だが、それでも聖良よりだいぶ背が高い。きりりとした眉の、活発そうな女の子だ。

完全に別人となつたハーティを連れて、三人は城にやつて来た。聖良の親戚と紹介された彼女は、以前聖良が子供達と遊んだ庭で、子供達の興味を一身に引きつけていた。

聖良と違い、ごく普通の美少女だから当然だ。

「よお、ハーティが来たつて？」

「ハトラです」

聖良は背後から突然声を掛けてきたディアスへと、即座に訂正を入れた。

「え、ああ、ハトラだったつて。」

「まあいいや。二人とも元気そうだな」

「ひえっ」

後ろから肩をがしりと掴まれてハーティが飛び上がる。

「だれ！？」

「誰つて、ディアスだよ。忘れたか？」

「ディ……ああっ」

気付いたようで彼女は縮こまる。彼が箱庭の幹部だからだ。彼女

は地位や名譽に弱い所があるらしい。

「ハトラさあ、ちよつと二人で話さないか？」

「ええっ!？」

「ちよつと頼みがさあ」

聖良は立ち上がり、ディアスの腕に手を置いた。

「セクハラ禁止です。二人きりなんてとんでもない。さすがに怒りますよ」

「せ……セーラは大袈裟だなあ……はははっ」

睨み上げると彼は笑いながらハーティから離れる。

彼は竜だと知って、下心が出てきたのだ。

「ハトラも、こういう悪い人にこのこ付いていたらダメですよ。危ないですから」

「あ……危ないの？」

「とても危険です。私が保証します」

「……………」

怯えの眼差しを向けられて、ディアスはほんの少し傷ついた様子だ。

「ディアス、危険なの？」

近くにいたエリオットが、聖良の腰を抱いて持ち上げた。

「おまつ、何年俺と一緒にいるんだ。俺よりセーラを信じるのか？」

つか、目が合わないと意外と大胆な事するんだな」

聖良は安全なところに下ろされる。

思った以上に好かれていられるらしいと実感した。

「まあ、アデイス様に殴られるような事はしねーよ」

「じゃあ二人きりになる必要ないじゃないですか」

「実行するのと、話し合うのは別だろ」

「ダメです。私達はアデイスを待ってるだけなんですから、アデイスに話を通してください」

「そこから行ったら殴られて終わんだろ。馬鹿だなあ」

「……………考えは分かりました。賛同はしませんけど」

「ひつでえなあ」

聖良はため息をついて、ハーティに目を向けながらディアスを指さした。

「こういう人達だから、気負わなくていいけど警戒はしてくださいね？」

「わ、わかった」

彼女はこくこくと頷く。

さっそく努力して、普通に接しようとしてくれているのだが、言葉遣いが少しばかり硬い。

いつか悪い男にいいように使われそうで不安になる子だ。

「ディアスにーちゃん、しつこいと嫌われるぜ」

「それよりも前みたいに歌いたい！」

「セーラちゃん、歌おう」

「ハトラちゃんも歌おう！」

ハトラの容姿がアディアス好みの美少女なものだから、年齢の近い男の子も珍しく混じっている。男というのは素直なものだ。元の姿でも可愛いので、結果は同じだっただろう。とにかく美人が好きなのだ。

「じゃあない。んじゃ、後でな」

ディアスは渋々と手を振って去っていく。仕事中だったのだろう。これからが大変そうだ。大切なのは、彼女の意志の尊重である。

子供達にさんざん歌わされ、昼になった頃にようやくアディアスが戻ってきた。

こんな事をしていて、よく首にならないものだと感心する。普通の企業だったらもう首になっているだろう。

空腹でへそが曲がった聖良の機嫌を取ろうと、いい店があるというので街に出た。

「お腹がすきましたよね。すみませんね、遅れて。そういえば、ハトラは何か好き嫌いがありますか？」

「とくに好き嫌いはありませんが、あえて言うなら肉が好きです」「そりゃそうでしょうね」

聖良に好き嫌いはない。よほど不味かったり、こつてりしていない限りは食べる。アデイスも生肉以外は平気なようだ。

「あの店です。ランチはお得になっているんですよ」

アデイスに手を引かれ、お得だというレストランに連れて行かれた。聖良とハーティの手をしっかりと握っていることが、少し不服だった。毛色の違う三人が、どんな風に見えているのか不安で。

「ほら、ここです。デザートも美味しいんですよ」

外観は素朴な雰囲気のレストランでほっとした。中に入れば清潔な制服を着たウェイターが出迎えてくれたので、安い店ではないはずだが、高すぎることもないだろう。

ほっとしたのもつかの間、ウェイターが深々と頭を下げた。

「申し訳ございません。本日は満席となっております」

聖良の腹がぐうと鳴る。食べる気だったのに食べられないと知ると、人はより空腹を覚える物だ。

「やっぱりこうなるのか……」

「残念でしたね。じゃあ、別の……」

「あら、セーラにアデイスじゃない」

聞き覚えのありすぎる声に二人は身を震わせた。

「ここよ、ここ」

相変わらず、綺麗に着飾る女装男、半悪魔のフレアが手を振っていた。

「私は今来たばかりだから、こつちにいらつしやい」

「どうして一緒に食事をするなんて思えるんですか？」

「いいじゃない。あの子の様子も聞きたいし。私があげた猫ちゃん

は元気にしてる？ あ、相席するから三人分、準備してちょうだい」  
ネコとはロヴァンの事だろう。

確かに一番始め飼っていたのは彼だ。気になるのも当然だ。

「どうします、セーラ」

「ここで回れ右しても……」

知られすぎているし、食事なんて放置して追ってきそつだ。

「そうですね」

フレアはなぜか聖良の事を気に入っている。なぜか聖良は異色系美人に好かれる。普通の人に好かれないという願いは、あまり叶わない。

「えっと……どなたですか？」

「この前の誘拐犯弟です」

「半悪っ」

ハーティはフレアを見て口を押さえて硬直する。彼女は少し繊細で多感なのだ。

聖良は空腹なので席に着いて注文をアデイスに任せる。料理名を理解できるほど、こちらの言語に慣れていない。

「セーラったら、相変わらず可愛いわ」

「ありがとうございます」

「相変わらずクールね」

「ありがとうございます」

「もう少し違う反応もして！」

「どうせろくに見えてないでしょう」

「目を細めればだいたいは見えるわよ」

「じゃあ……フレアさんも相変わらず綺麗です。やっぱり赤が似合いますね」

「いやん、セーラったら」

違う反応をしたら変な返答が返ってきたが、喜んでいるようなので良しとした。

「あの、アデイス……この方は男性なんですか？ 女性なんで

すか？ 女性に見えるんですが……」

ハーティが真剣に悩みながらアデイスに問う。

「オカマですよ」

「これがっ！」

ハーティは驚いた様子で顔を引きつらせるフレアを見た。

「ハトラは変なところですね」

「だっ、だっ……田舎者だから」

竜にはいないか、いても竜の姿だったらこのようにはならないだろう。周りの目を気にして、出来ないのもありそうだ。

「オカマなんて失礼よ。私はただ、綺麗な格好をするのが好きだけ！ 女になれるものならりたいけどね。女の子の身体の方が綺麗だし、お兄さまも優しいし」

好みの女の子を集めている男なら、弟よりも妹の方が可愛いはずだ。

彼は想像を絶する苦勞をして育ったのだろう。

「今思えば、フレアさんも被害者の一人ですよ……」

「あの兄でさえなければ普通の男だった可能性があったのでしょ  
うに……」

聖良とアデイスでしみじみと彼を見つめた。

綺麗な男性だ。メイクを落として普通の格好をすれば、普通に綺麗な男性になるだろう。

「……どこかでお会いしませんでした？」

唐突に、ハーティがフレアに尋ねる。

「そ、そう？ 私に覚えはないわ」

「そうですか。どこかで嗅いだような……」

嗅覚で人を覚えているのが実に竜らしい。フレアは理解できないらしくきょとんとしている。

「まあ、この街に住んでれば気付かないうちに顔も合わすでしょう  
アデイスが水の入ったグラスを片手に言う。

「住んでるの？ 見たことがないわ。今までよく無事でいたわね。」

絶対にお兄さまの好みのタイプなのに！」

「え？」

彼女は首をかしげる。誰しも、自分が変態に狙われる可能性があるなど思いたくないものだ。

「あ、お料理が来たわ」

「美味しそうですね。フレアさんもこの店にはよく来るんですか？」

「今日が初めてよ」

「ほんつと、偶然ですね」

ここまで会いたくない相手を引き当てられるという事実が、本当に恐ろしい。

「本当に偶然ね。いつもセーラに会いたって思ってたからかしら。運命的だわあ。」

「これからお買い物？」

「はあ、彼女の服とか」

「ステキ。だったらいい店があるわよ。セーラの着られる服はあまりないけど。うちは等身大のお人形さんがたくさんあるから、お洋服の店はたくさん知っているの」

等身大。

物はいいようだ。

「だから、なぜ私達に係わりたがるんですか。いい加減にしないとクレアに突き出しますよ？」

「そんな事していいのお？ 色々と話しちゃうわよお。アーネスと一緒にいるっただけでヤバイでしょ？」

同一人物だというのが一番ヤバイのだが、そこはバレていないのが救いだ。もしも知られたら、アデイスはさぞ落ち込むだろう。聖良は面倒なことにさえならなければどうでもいいというのが本音だ。今でも十分面倒なのだから。

「で、この子どもから拾ってきたの？」

「拾ってきたとは失敬なことを。」

「親戚になった子です。私達、正式に結婚してきましたから」



アデイスは聖良の手をあげる。フレアはそれを見て、シヨックを受けたらしく青ざめて固まった。ずっとしていたが、袖で見えにくいから気付かなかったのだらう。いつでも外せるし、隠れてしまうから、付けている意味がない気がしている。

「そんな……」

「なぜシヨックを受けているのかは知りませんが、アデイスが一度やってみたかったからという理由で結婚させられましたけど、それだけです」

「何よそれ！ 女の子にとってお嫁さんになるのは憧れなのよ！

そんないい加減な気持ちで結婚するなんて、何考えてるの！？ サイテーねっ！」

シヨックを受けたり怒ったり、感情の激しい人だ。

女性らしい怒り方なのが可愛い。

「そうですね。やっぱり怒りますよね。アデイスがあんまり人の話を聞かないから、最近どうでもいいような気がしてたんですけど」「話は聞いてますよ。聞けるお願いと聞けないお願いがあるだけです。」

今回の事はただ、腕輪を作ると、式を挙げるのはセットだと言い忘れていただけで。

セーラが望むなら、盛大でロマンティックな披露宴をしてもいいですよ」

「いいですね。ただ同居してるだけですし、式を挙げたのがよけいだったんです。ただの変態除けに付けただけです」

「セーラは本当にどうしてそんなにドライなんですか？ もう少し少女らしい夢を持ちましょうよ。せっかく私ほどの男を捕まえてるんですから」

「自分で言っんですね……」。

私が夢見て恋する乙女になったらウザいでしょう」

「ぜんぜんそんなことないですよ。セーラだったら何でも可愛いですし、嬉しいです。っていうか、セーラは私に恋してませんか？」

「ぜんぜん」

アデイスが肩を落とす。大の男が落ち込んででも可愛くない。

「色男もセーラにかかると台無しねえ。セーラ、アデイスがダメなら私とはどう？」

「フレアさんも人形扱いしただけでしょう。動機がアデイスとほぼ同じです」

「そんな事ないわ。お嫁さんになってくれたら、一緒に可愛く着飾って、一緒にお料理して、一緒にお兄さまを止めたりするの」

「最後のは私には荷が重いので遠慮します。しかも前二つはやっぱりお人形扱いつぽいです」

好き好んであの人形師と関わり合いになりたくは無い。聖良のトラウマその2なのだから。

「でも、私そういうのよく分からないのよねえ。小さい頃から、普通の家庭って体験したことないし」

「まあ、そりゃあ、あのお姉さま達の中じゃ……」

「お姉さま？」

「魔女のお姉さま方ですよ。人に薬を盛って椅子に縛り付けてくれましたよ」

「ごめんなさいね」

フレアは頬に手を当てて言う。

「でもセーラ、私が言うのも何だけど、もう少し気をつけた方がいいわ。あっさりと捕まってしまうなんて、危ないでしょう。」

「セーラはしっかりしているように見えて、隙だらけだから心配よ」  
「気を抜いてるつもりは無いんですが」

「私、本当にセーラが心配なのよ。アデイスが不運なのは有名だけど、男だからまだいいわ。でも、セーラはか弱い女の子なんだからいくら身体のことであっても、心配だわ。世の中、お兄さま以上の変態は少ないけど、いるにはいるの。ロリコンとか多いらしいじゃない。そういえば、アーネスもロリコンで有名ね。セーラ、近くに

いるんでしょっ?」

聖良は視線を逸らす。その変態は目の前にいる男と同一人物である。

何よりも驚いたのは、そんなことをフレアが知っているほど変態振りが有名だったのだ。シヨックだった。

「ハトラだったかしら。あなたも気をつけなさいね」

「あ……うん」

ハトラはこくこくと頷く。

彼女も混乱している。どこまで知っているのか、自分がボロを出さないか心配なのだ。

「あら、みんなの分の料理も来たわ。お腹がすいたわね。食べましょっ」

本当に美味しそうな料理が運ばれてくる。スープとサラダとハンバーグのような料理と、パスタとうどんの中間ぐらいのニョッキのような付け合わせ。

オススメなだけあり、とても美味しかった。

## 12話 恋する乙女4

昼食後、皆で女の子が好む店各種を渡り歩いた。

ハーティはこのような場所にはあまり縁がなかったので、色々付けられて目を白黒させた。アクセサリーの店では、フレアがあれもこれもと手にとって大変だ。

「やっぱり女の子は生き生きしている方が可愛いわあ」

フレアが手に取ったアクセサリーは、ほとんどがセーラに合わせられた。それを見て、アデイスがイライラしている。イライラしているが、自分達の事を少し知られているため強くも出られない。少なくともアーネス達を別の人間として捉えているらしく、すべてではないのだ。下手に口を出して、全て知られてしまう結果になるようなことだけは避けたいようだった。

「っていうか、それ全部買うんですか？」

セーラが首を傾げて問うと、フレアがけらけらと笑った。

「いやねえ、半分ぐらいよ」

「前から思ってたんですけど、そのお金って、どこから出てくるんですか……」

「どこからって、ちゃんと働いてるのよ。アーネスじゃあるまいし、悪さなんてしないわ」

「そうなんですか？」

「お兄さまの事は知らないけど」

「知らないんですか？」

「一緒に暮らしてるわけじゃないもの。私、男だし。普段はある程度の距離を保つのが、仲良し兄弟になる秘訣なの。お兄さまって気分屋だし」

彼の兄というのは、半悪魔の人形師。仮面を身につけ、人間を人

形にしてしまう。身体は生きていないが、最低限の人格は残り、自分で考えることも出来るお人形を作る男。

あの悪名高いハーネスとはタイプは違うが、同等ではないかと言われている魔術師だ。その弟なら、半悪魔の魔力もありすごい魔術師なのだ。

「フレア、セーラにそんなに買い与えてどうするつもりですか。身につけてくれませんか」

「いいの。うちに置いておくから。セーラが来たら付け替えるの。うちにもセーラみたいな可愛い黒髪の子がいるし。私、黒髪って大好きよ」

フレアの赤毛も綺麗だ。この国には茶から赤毛の人間が多いので、黒髪や銀髪の方が珍しく、アデイスとセーラが並ぶととても目立つのだ。

幸いにもハーティは赤毛なので目立たない。ハーティという人間としての名前と、目立たない姿が好きだった。もしもラゼスのような目立つ髪色だったら、ここにはいなかったかもしれない。

「じゃあ、買う物を選んでください。私は喉が乾いたので、何か買ってきます。セーラも手伝って下さい」

「はい」

セーラはアデイスについて店を出て行く。

ついていきたいが、邪魔だと分かっているのでやめた。フレアも一瞬だけ寂しそうな顔をした。

彼は女性の姿をしているが、綺麗になるのが好きただけだと言っていた。

「さて、どうしようかしら。ハトラは欲しい物決まった？」

「あ、私は……」

似合わないと言おうとしたが、それではいけないと言えなくとも唇を引き結ぶ。今は可愛い小物が似合う、可愛い女の子の姿なのだ。断つてばかりでは、本当に可愛い女の子にはなれない。

「これを」

アデイスに選んだもらった、可愛い髪飾り。自分で付けられないだろうが、彼に選んでもらった事に意味がある。宝物だ。

「あなた、アデイスが好きなの？ 不毛ね」

「ふ……不毛」

他人に言われると胸を刺されたような気持ちになった。理解している。どうやっても今の彼の一番はセーラで、ハーティ自身がそれを認めて諦めるのが当たり前だと、自分自身で思っているのだ。

こうなる前は、いつも遠くから見ているだけだった。誰と一緒にいてもただ見ているだけだった。近づいただけで、変わらない。

「だって、彼は誰かをあんな風に扱う事なんてなかったもの」

「そ、それは、よく分かってるつもり」

シファ達ですら、アーネスはあんな風には連れ歩かなかった。

「でも、あなたは、セーラのことを好きなんじゃ……」

「好きよ。だからどうしたの？」

「いや、その」

開き直っている。これほど前向きになるには、どれほど力を付ければいいたらうと悩む。

「ははん。さては私にセーラをさらって行って欲しいのね」

「そ、そんなことは。セーラが連れて行かれたら、心配で夜も眠れないっ」

さらっていったらアデイスが死にもの狂いで探すだろう。もちろんハーティも探す。彼女は目を離せない。小さくて弱い、守らなければならぬ存在だ。

「言葉の綾なんだけど……」。

私とセーラが付き合ったら嬉しいとか思ってるでしょって事」

「……」

意味を知って、ハーティは赤くなつてうつむいた。浅ましい考えだが、全くないわけではない。それでも、その時はアデイスに見向きもされないのは分かっているの、本気ではない。

「でも嫌よ。私はアデイスの事も好きなんだもの」

「は……………」

アデイスのことに詳しいとは思った。しかし、理解できない。彼は女装が趣味なだけで、女性が好きなのだと思っていた。セーラが好きなのだから、それは間違いないはずだ。

「二人とも好きだから、一緒にいると嬉しいの。結婚したとか、ちよつとシヨックだけど」

「え……………えと……………えと……………」

以前、どちらでもいいという女の人がいたのを思い出した。彼はきつと、どちらでもいいのだ。

「深いことは抜きにして、とにかく、私は心が広くないの。だからアデイスもあげない。セーラだから我慢できるの。セーラも、アデイスだから任せておけるの。」

乙女心は複雑なのよ」

「……………乙女……………複雑……………」

本当に複雑だ。

こんな男に好かれるあの二人の、何とも言い難い運命も。

ハーティの魔術の腕は、この男にも劣るのだろうか、アデイスにとつての重要度は、彼以下になるのだ。

「そんなに悲観しないの。あなた可愛いんだから、他にいい男が見つかるわ。十は年上の男よりも、年下を狙ってみたら？」

一瞬何のことか分からなかったが、人間のアデイスと、現在のハーティの姿は、十歳ほど年の差がある。

しかしハーティはこれでも百年近く生きている。人間相手ではみんな年下だ。

「……………フレアさん、決まりました？」

店の窓からセーラが顔を出した。背伸びをして覗き込む姿がとても可愛い。

「決まったわ」

いつの間にかフレアは選り分けていたらしく、会計を済ませて店を出た。

「フレアさんはフルーツと野菜どちらがいいですか？」

「フルーツ」

「はい」

セーラがジュースを手渡すと、彼女は野菜ジュースを飲む。ハーティは赤色のジュースをアデイスからもらった。酸っぱくて美味しい。ハーティが好む味を知ってくれたのだ。おそらくそれを知っていたのは、セーラだろうが、誰かに気に掛けてもらえて嬉しかった。

「よくそんなの飲めるわね。臭くない？」

「だって、最近は野菜不足なんですよ。この国のトマト美味しいです」

「そう？」

セーラがこくりと頷き、飲み終わると木の皮のような素材で出来た器をくしゃりと丸める。ハーティはこれが昔から不思議だったのだが、セーラは普通に受け入れているらしい。なぜこんなに薄いのに中身が長時間漏れないのか、今でも不思議だ。そして魔術が使える人間は、それをその場で燃やしてしまう。セーラ以外も潰して燃やしている。

「あの……セーラは、慣れない国の習慣に戸惑ったりしないの？」

「いきなりどうしたの？」

「えと……ふと気になって」

人間だから、人間の文化には馴染みやすいのだろうか。それとも彼女が特別冷静沈着なのだろうか。

「私の住んでいたところの方が無茶でしたからね。驚いたのは魔法とか、住んでいる生物とか、住人に関してです。こんなに誘拐が多いなんて」

「いや、誘拐は多くないと思うけど。私、されたことないし。変なところに入らなければ、治安はとていいはず……だよ。組織になったら、よけいに素人には手を出さないし」

普通に話せと言われているが、なかなか切り替えが難しい。



この国の犯罪者は滅多なことでは誘拐というリスクの高いことはしない。

見た目では相手の実力や守りを判断できない国で、誘拐を続けていれば自滅するのを誰もが知っている。例えば、小さな頃のアデイスなら、誘拐しようとした方が返り討ちになっただろう。探査魔法でもかけられたら、下手をすれば住処が割れてしまう。

この国で誘拐は殺人よりも珍しい犯罪だ。

「セーラ、かわいそう。やっぱり、アデイスといえるからそんな目に合うんじゃないかしら」

「……………それはあるかもしれませんが」

二人が好きと言った口で、フレアが二人を引き裂きたいようなことを言い、セーラは同意し、アデイスがショックを受けている。

ハーティも、そんな二人を見ているのは好きだ。

まだ緊張するが、楽しくて、一緒にいられるだけで嬉しい。

買い物を終えてフレアと別れた後、いつもの別荘でセーラはモリイへと、アデイスはアーネスへと、ハーティは元の姿になり、着替えてからもう一度都に戻ってきた。

バーの廊下、箱庭の入り口に立つと、可愛らしいワンピースを身につけたハーティは、足を止めてアデイスのコートを引っ張った。「アデイス……お、長、本当にこんな上等な服を私が着てここに入ってもいいんですか？」

ハーティは別荘のクローゼットに用意されていたワンピースを着ている。緊張した面持ちでアデイスに恐る恐るといった様子でアデイスを見上げて、アデイスはふつと笑った。アーネスではなくアデイスの姿なら、だらしなく相好を崩していただろう。

ハーティは派手でなく、落ち着いた暖かそうな、聖良では似合わない少し大人びたデザインのワンピースを着ている。少し背伸びをしている女の子という感じで、よく似合っている。

「いいに決まってんだろ。俺からのプレゼント」

「ええっ!？」

突然ディアスが背後から声をかけてきた。彼はアデイスの予定を知っていたから、来ていてもおかしくはない。

ディアスに色目を使われて、ハーティは萎縮した。今はハーティにとってはなじみ深いデイの姿をしている。昼間よりも緊張するだろう。

「デイ、パワハラは許しませんよ」

「しないって。普通に口説いてるだけ。元からけっこう可愛いと思ってたし。長の趣味の範疇の女には手を出さないだけで、出たら口説いてみようと思ってたし」

下心が見え見えだ。ここまで下心しかない、ハーティも呆れているかと思いきや、可愛らしいほど真っ赤になっている。聖良はアデイスにしか口説かれたことがないので気持ちは理解できない。アデイスは出会い方等が特殊すぎて、恥じらうよりも呆れが先に来るので、聖良自身と比べることが間違っている。

「さあさあ、みんなに顔を見せよう。ほら進め」

ディアスがハーティの背を押し、聖良はアデイスに手を引かれて奥へと進む。見られるのが恥ずかしいらしく、ハーティは真っ赤になっている。彼女はとても照れ屋なのだ。

いつもの広間に入ると、皆の視線が集まった。

「長、その子ハーティじゃないか。とうとう手を出したんですか!」

「違います」

「ハーティ! ななな、何やってんだ!? 長、何したんすか!？」

「長ああああ!」

「何を言うんです。ただ一緒に歩いてるだけですよ」

「ちょ、ハーティ、長に気を許したらダメだつて」

冷やかされ、ショックを受けられ、忠告される。誰も信用していない。

「アーネス、どこまで信用ないんですか」

「そ、そんなことは。長は皆から信頼されています」

聖良の呟きに、ハーティが首を横に振って応えた。

「いいですか、ハーティ。その『信頼』とこの『信用』は全く別物です」

ハーティはかばうが、彼女以外の誰も信用していないのだ。アデイスが人間の頃、どれだけだらしなかつたからよく分かる。

アデイスはさらに奥に進み、階段を上って別の部屋に入る。

「やだつ、本当にハーティ」

「ちょっと、アーネス様っ！　いくらなんでもそんな純情そうな子に！」

たくさんの本がある部屋で、勉強していた面々が顔を上げ、その中のロゼとシファアがアデイスに突撃してきた。

「誤解ですよ」

アデイスは穏やかな声で否定する。

「誤解？」

「またそんないい加減なことを。前にちょっと可愛いとか言ってたじゃないですか。いくら成長が遅いとはいえ、無責任ですよ！」

言いつのるシファアに、聖良とハーティで一生懸命首を横に振る。

「そうじゃなくて。私と長は本当にそんなんじゃないよ」

「今回は本当に違うんです。ハーティに対して失礼な憶測をしないで下さい」

シファアとロゼはきよとんとして聖良達を見る。アデイスは肩をすくめた。

「疑り深い子達ですね。そんなに寂しかったんですか？」

笑顔で頭を撫でられると、とたんに大人しくなる。

「最近知ったことですが、実は彼女とは親戚だったんですよ」



「……………まあ、いろいろといます。たまにエルフや獣人も来ますね。もちろん大人や男ですよ」

「エルフ！ やっぱり美人なんですか？」

「マイペース過ぎてイライラしますがなかなかの美人です。薬草の事はよく知ってますが、マイペースすぎて結論が出るのをその場で待つと、忍耐力が身に付きます」

彼女に付き合うには、何かしながらでないと感じる。あれで生きていられるのは、子供達がしっかりしているからだ。

「そんな事よりも、私達はハーティのために本を取りに来たんです。シファとロゼはちらとハーティを見た。」

「ハーティは魔力が多いのですが、それゆえに制御しきれれていません。基礎の基礎からもう一度教え直すことにしました」

ハーティは知らなかったようできよろきよろと周りを見回した。

アデイスは竜がろくに魔術を使えないのは、力任せにするからだと言っていた。ハーティのやっているのも力任せで、本当の意味では魔術ではない。聖良が発音の良さで発動させてしまっているものもある意味では同じだ、と。

「アーネス様が教えるんなら、きつと覚えが早いわね。厳しいけど」「ええ、とつても厳しいけど、出来たら優しくしてくれるものね」

アデイスは聖良に対して厳しくした事は一度もない。叩き込む対象である生徒ではなく、覚えれば生活に便利になるだけなので、彼は熱心に教える気がないという意味だ。

聖良が無力でも、アデイスが常にいるので問題ないと、彼はそう思っている。どうせアデイスがいなければ魔力がないのだ。詳しいことは教えても無駄、呪文を丸暗記して、口さえ動けばいいとも思っているはずだ。

もちろん、聖良が頼めば教えてくれるが、頼まなければ教えてくれない。

森の中で生きる分には必要なく、買物物はアデイスが払うから何も不自由はないとはいえ、必死に勉強しているのに、必要がないと

思っていることを隠しもしないのに、少し腹を立てていた。

それが意地悪ではなく、自然な発想であることが、一番腹立たしい。

だがハーティは甘やかされるだけの対象ではなく、教えがいがある対象として見られている。

聖良は少しだけ、つまらないと思った。才能がないのは重々承知しているが、普段はくだらない理由で構ってくるのに、肝心な事では真剣になってもらえないのだから。

「でも、身内なのにちつとも似てないわ」

「遠縁ですからね。」

でも魔力は高いですよ。可愛らしいですし」

「可愛らしいのはそれこそ関係ないと思います。長は可愛らしくないもの」

「クールで格好良くてたまに不幸」

二人にとって、不幸は最後に付けられる言葉のようだ。

しかし聖良から見ると、いつも不幸でたまに格好いい、となる。

組織の長などしているから、ここで聖良の前ほどだらけたことがないとしても、彼女達との間にはかなり深い溝があるようだ。

「シファ、モリイに何か子供用の本を用意しなさい。この子はまだ読み書きの練習中です」

「あら、読み書きは出来ないのね」

「絵本ぐらいは読めるようになりましたよ。モリイはとても覚えが早いので」

「そうなの。すごいのね」

シファは聖良の頭を撫でてから、本棚へと向かう。

「モリイ、どんな本がいい？ 絵本？ それとも教科書の方がいい？」

シファが振り返り尋ねてきた。彼女からすれば、モリイは竜であり、アーネスのペットなのだ。主のペットは可愛がるのは当然だ。

「簡単に常識的な本なら何でも」

「常識的？」

「彼の側にいると、世間の常識が分かりません」

「長……………いつも何してるの……………」

聖良は難しくして題名すら読めない本の数々を見上げる。

魔術の本は難しいのだ。

「まあいいわ。モリイ、こっちに来て」

シファがこっちと言うので付いていく。地震の多い日本では考えられない作りの図書室だ。地震があれば本で生き埋めになり、本棚で蓋をされ、脱出不可能なぐらい高く密集した本棚だ。

「ここは子供向けよ。モリイが好きな本を選んで」

「ありがとうございます」

「分からなかったら何でも聞いてね。あ、お菓子もあるのよ」

「ありがとうございます。でも、夜食べると太るからいいです」

「小さいのに、そんなこと気にして！ やっぱり女の子なのね」

撫でられる。竜だと思い込んでいるからこそその扱いなのだ、これは。アデイス以上の愛玩動物扱い。

モリイの時は、これでもいい。竜だと思われているのだから、甘受することに決めていた。聖良の時ではないのだから、寛容に受け入れられた。

適当にニコニコして、愛想を振りまいておけばいい。

まだ幼い竜と言うことになっているのだから、それで皆が可愛いと思ってくれる。

## 12話 恋する乙女5

聖良は気がつくともベッドの中で朝を迎えていた。暗くてよく見えないが、知らない寝室だ。この部屋に入った記憶すらない。

いつもなら同じベッドに入ってくるアデイスの姿も見当たらない。いつものなら、聖良が叩き起こさないと起きないのに。

それよりも、今、モリイの姿をしている聖良が着ている、ゆつたりとしたネグリジェは誰が着せたのか、あとで尋問しなければならぬ。

壁には木の窓があるらしく、隙間から光が差し込んでいる。開くと外が見えた。ここは二階建ての二階部分のようだ。

窓を開けて室内が明るくなったところで、テーブルに用意してあった服に着替え、部屋を出た。どうやらここは集合住宅か宿のような場所らしく、いくつもドアが並んでいる。一階に下りると、見覚えのある酒場。

「やあ、おはよう」

掃除をしていた男が手を振ってきた。いつものバーテンだ。

「おはようございます」

「今日はアーネス様は少しお出かけだよ。シファとロゼに遊んでもらいなさい」

「お出かけですか？ 聞いてません」

「少々トラブルがあつてね。たまには長に動いてもらわないと。」

君がよく眠っていたから、起こせなかったそうだよ」

昨夜は勉強していたはずだ。なのに眠ってしまい、着替えさせられても起きなかったようである。

「ハーティは？」

「彼女は起きてたから長と一緒に」



「私、そんなに寝てました？」

「いや、君はお寝坊したんじゃないよ。明け方だったんだ」

本当に熟睡していたらしい。二人なら問題ないだろうから、聖良は先に朝食について考えた。すると急に空腹を覚え、腹に手を当てた。

「お腹がすいたかい？ みんなの所に持っていったのが残っているから、食べなさい」

「はい」

朝食の問題はクリアした。バーテンはカウンターに入って手を洗うと、パンに茹でた野菜とベーコンを挟んだ物を皿に乗せてくれた。

「美味しいです」

「そりゃよかった」

何の肉か知らないが、美味しかったのでぺろりと食べた。指に付いたソースを舐めて、グラスを手に取り唇をつけた時、入り口のドアが開いて冷たい風が入ってきた。

「モリイ！」

どう聞いてもフレアの呼び声に、飲んでいた水を吹き出した。

「ひよっとしたらと思って来てみたら、本当にいたわ！」

後ろから抱きつかれ、聖良はこれ以上水を吹かないように必死に口の中の水を飲み込む。

「ちっちゃくて可愛い」

頬をすりすりされる。動こうとしたバーテンの男を手で制し、身をよじりながら問う。

「なんでこんな所に」

「昨日、セーラ達に会ったの。箱庭の本拠地は知ってたから、ひよっとしたらと思って」

「っていうか、誘拐騒動起こして喧嘩売った組織だって忘れてませんか？」

「大丈夫よ。アーネスはきつと気にしないわ。だって弱味は握ってるもの」

確かに弱味だ。一番の弱味だ。

「モリイ、アーネスは？」

「お仕事です」

「じゃあ、今日はお姉さんが遊んであげるわ。何でも買ってあげる」

「お姉さん……ですか」

「お兄さんでもいいわよ。でも今は女の子の格好だから」

「今日は勉強を見てもらう予定なので」

「勉強？ あ、そっか。セーラの知識が元だから、読み書きは出来ないのね。」

「だったら、実際に街に出た方が役に立つ単語を覚えられるわよ。」

「アーネスがいないなら行きましょう」

「フレアは聖良をひょいと抱えた。」

「あの、なんで抱えるんですか」

「お兄さまの事は心配しないでいいのよ。日が暮れる前にはここに帰ってくるから。」

「そこのお兄さん、アーネスによろしくね」

「フレアはバーテンに投げキッスをして店を出て行く。」

「聖良は無言で手を振った。」

「ふざけた『お姉さん』だが、聖良にはこの腕から抜け出す力はないので、害があるまではされるがままになる事にした。どうせ昨日のように、ただ飾り付けて遊びたいだけだ。」

「モリイは元の姿もとっても可愛かったけど、その姿も小さくて可愛いわ。セーラみたいなの話しか方も大好きよ」

「そうですか」

「オシャレなカフェで、彼はニコニコと笑って言う。」

男の格好をしていたらさぞかしの美男子だろうに、もったいない。「でも、フレアさん目が悪いでしょう。よく後ろ姿で分かりましたね」

以前、コテコテの見間違いをした事のある彼が、よく無言で食べていた『モリイ』を見分けたと、少し不思議だった。

「モリイが小さくて可愛いから見えるわ」

「意味が分かりません」

「それっぽい後ろ姿だったから、とりあえず声を掛けたのよ」

「偶然だったんですか……」

その偶然に当てはまってしまふのは、いつもの自分の運の悪さなのだ。と聖良はため息をつく。

「人違いだったらどうする気だったんですか。せめて眼鏡をすればいいのに」

「眼鏡なんてしたら、私の美貌が隠れるもの。それに、よく見えないう方がいい事もあるのよ」

彼なら眼鏡でも美形であることは変わらず、色気が増すような気がしたが、本人が嫌なのであれば仕方がない。

「見えない方がいい事って、例えばどんなことですか？」

「例えば、人形達の虚ろな目を見なくてよかったり」

「それもそうですね」

精神衛生上、見えない方がいい事もたくさんある。フレアはそれが特に多いのだ。割り切れない部分も飲み込まなければやっていけない。その手段として、自分の目の悪さをそのままにしているのだ。

眼鏡をしない理由に納得して、聖良はため息をついた。

「フレアさんも大変ですねえ」

「モリイほどじゃないわ。どうしてモリイはアーネスなんかと一緒にいるの？ セーラと血を分け合ったんでしょ？」

普通に考えたら、そうなるのだろう。言葉遣いや言語は誤魔化せないで、隠しようがない。両方の姿を知っていて、聖良との繋がりを思いつかない方がどうかしている。

「そうですね」

「アーネスはロリコンの変態って有名よ。何かされてからじゃ遅いの。アデイスの方がずっといいわよ」

同一人物なのに、ずいぶんと評価が違うものだ。半悪魔ですらアデイスの外面の良さに騙されるのだから、普段どれだけ聖良の前で本性を見せているのかよく分かる。

「嫌がる事は　抱きついてくるぐらいしかしませんよ」

「十分ダメじゃない。危ないわ」

「そう悪い人じゃないですよ。本当の嫌がる女の子には何もしないらしいですから。あの人、顔はいいですからもてるんですよ。もてる人はそんな切羽詰まった事はしません」

「そりゃあ、顔はいいわね。アデイスほどじゃないけど」

「フレアさん、アデイスは評価しているんですね」

「そりゃあ」

少し照れくさそうに、まるで恋する乙女のように身をよじる。

彼はノーマルだと思っていた。思っていたが……

「フレアさん、アデイスの肩を持ちますね」

聖良が不気味に思っというと、彼女は頬に手を当てる。

聖良は少しだけぞっとした。他人が誰を好きになろうとも関係ないが、アデイスが知ったら許してはおかないだろう。

しかしなぜアデイスなのか。接点はあれが初めてのはずである。

どこでどう惹かれたのか、聖良には分からなかった。

「アデイスは人気なのよ」

「そーなんですか」

本当にどこまで外面がいいのだろう。それを家においても発揮してくれと思った。

「でも、モリイの事も大好きよ」

「どうしてですか？」

「どっちの姿でも可愛いもの。それに人間じゃないし」

寿命の問題だろう。だからこそ彼の兄は人形を作るのだ。

いつかアデイスやアーネスという人間を捨てる日が来たら、モリイも消えてしまつかも知れない存在なのにと、少し後ろめたく思った。

「でも、アデイスがセーラと結婚しちゃったのはショックだわ。私、セーラの事も好きだったの。女の子だからお嫁さんに欲しかったの」「そうですか……」

理由が理由なので、美形にお嫁さんに欲しがられても嬉しくない。しかも女装癖がある変態だ。

「あの二人はいいとして、モリイは変な男に捕まって欲しくないの。端から見れば、捕まっているのだ。ずるずると引きずられて生きている。」

「モリイはまだ小さいから分からないのね。」

モリイが言うようにアーネスが本当に嫌がる子に何もしないとしても、絶対に気を許してはダメよ。男なんてろくでもないんだから。アデイスは別だけど」

「本当にアデイスは信用しているんですね」

それほど有名なのだ。ロリコン本性さえ隠せば、彼はこういう見方をされる。

実際に普段はただの子供好きの格好いいお兄さんである。勘違いしても仕方がない。いや、勘違いされるように生きてきたのだ。その鬱憤を、アーネスになって晴らしていた。勘違いされて当然なのである。

「どっちもどっちですよ」

「そう、モリイにはロリコンなんて分からないのね。確かに、それがなければアーネスも出来るいい男だもの。秘密結社の長だけど……それもモリイには分からないか……。よく言えば研究熱心なだけだものねえ」

「そういうのはわかりますよ」

大人びた子供のふりをして、分かっているような顔をする。子供の言う事だから、フレアはクスクスと笑うだけ。本気にはしていない

い。

「ところでモリイ、セーラって異世界から召喚した生贄でしょう」  
聖良は持っていたカップを落としかけた。

「なんですか？」

「ふふふ、動揺してる」

するに決まっている。他の事ならともかく、それは予想外だった。  
「竜について調べていたら、古い……すっごく古い本にあったのよ。  
とっても複雑な儀式が必要な召喚術で、魔術のない世界から生贄  
を召喚して、それを食べさせるの。竜は魔術が苦手だけど、魔術の  
使い方を覚えると子供でも身体の動かし方を覚えてしまうのですっ  
て。」

神殿が介入してくる前は、昔は今ほど魔術は発展していなかった  
けど、使える人はよその国にもたくさんいたのよ。

餌渡部させて、間違っただけでもそういう知識があつたら厄介で  
しょ。だから魔術のない世界から呼ぶの。こちらの言葉も、思想も、  
何も知らないまっさらで、見た目ではそうと分からない人間。きつ  
と自分の腕を試したかったのもあるんでしょうね。一度はやってみ  
たい気持ちは理解できるわ」

聖良は見た目だけなら子供に見えるから、明らかな人選ミスのは  
ずだ。しかしネルフィアはあっさり騙されてしまったから、騙さ  
れる竜は他にもいたのだろう。

アデイスは人間としての本能が邪魔をして竜の動きを妨げている  
が、火を吐いたりするのはほとんど始めから出来たらしい。

あの身体で火を吐かれるだけでも、十分危険な生物である。

「う……よく分かりません」

こういう時、とにかく分からないと言うのが一番だ。本当に分か  
らない分野の事なのだから。

「アーネスが呼び出したのよね」

「よく分かりません」

おそらくはジェロンだろう。彼は器用に魔術を使うタイプだと言

っていた。

「アーネスが呼び出したのっ。すっごく考えた末の結論なんだからね。」

それはいいんだけど、やっぱりアデイスが係わっているのが不思議で仕方がないの。どうやっても、アデイスの存在が理解できないのよ」

「ああ、アデイスはお散歩しているところを、お母さんに誘拐されたって言っていました。人生で一番ついてない日だったそうです。いっつもついてませんけど」

「……………そうなの」

これで矛盾はないだろう。

そこまで調べ上げて推理してくるとは、よほど関係が気になったらしい。

「そういえば、アーネスも金運以外には見放された男だって聞いたわ。この前だって誘拐されたし」

「だから似たもの同士なんですよ」

あんな不運な男が世の中に二人もいる事が不自然なのだ。

「そういう意味だったの？」

そういう意味にしておいて欲しい。

「でもあの術何なの？ 入れ替わりなんて」

「私はよくわかりません」

フレアのいう通りなら、モリイは魔術の知識がない、魔術師に育てられているだけの竜だ。分からないで通しておくのが無難である。

「そうよねえ。見て分かったら勉強する必要もないものね」

その通りだ。分からなくて当たり前なのだ。

本当にただ葉っぱの代わりに、頭蓋骨を頭に乘せて化ける術という事以外は分らない。

「あ、そうそう。アデイスの知り合いで、セーラの兄だって言い張る人もいるでしょう」

聖良は首をかしげた。

彼は確かにトロアには会っていたが、気にされるほどの時間ではなかったはずだ。

「それが？」

「あの人はなあに？ どうしてセーラの兄なの？」

「無くなった妹に似ているんだそうです」

「セーラが？ どうやったら」

見た目からして人種すら違うのに、似ているというのはおかしい話だ。

「さあ。変人の考えることは分かりません」

「そうね。変人の考えることは分からないわね。それは仕方がないわ」

聖良はあっさり納得する彼の様子に少し同情を覚えた。

変人、変態の頂点に立ちそうな男の弟なのだ。そして本人も世間から見たら女装の変態である。それが、兄が男に興味を持たないために始めたことだとしても。

「私からも質問していいですか？」

「なあに？」

「フレアさんは普段何をしていますか？」

「お仕事よ」

「どんなお仕事です？」

「な・い・しよ」

聖良の時とほとんど変わらない。

「でも、モリイが大きくなって、私の所にお嫁さんに来てくれたら教えてあげるわ」

「そうですか」

「もう、そんな反応までセーラそっくりね」

そんなに特徴のある反応だろうかと聖良は考える。普通に、これ以外に何を言えばいいのか分からない。子供らしくお嫁になるとでも言えばいいのだろうか。アーネスの嫁になるもんと逃げるのも手か。



「もう少し真剣に考えてくれてもいいのに。」

私達、長命種同士だからすぐに老けて死んじゃうアーネスよりもいいわよ」

アデイスのようなロリコンのではなく、将来を考えての話らしい。兄を見ているから、一緒にいてくれる女の子が欲しいと思うのは仕方がないだろう。

「でも、お嫁に行くなんて言ったら、この街、火の海になりますよ」  
「……………そうねえ。ちゃんと独り立ちしてから、ご挨拶に行つてからじゃないと危ないわね。でも、モリイのためなら頑張るわよ？」  
「頑張ると危ないですよ」

子供ならではの少しずれたことを言ったみた。

彼との会話は、うっかり変なことを言っではまずいので、少し疲れる。

## 12話 恋する乙女6

「ただいま」

フレアに手を引かれて戻ってきた、モリイに化けたセーラの姿を見て、アデイスは脱力した。

連れ出されたと聞いた時は血の気が引いたが、無事だし、普通にアメやら色々と買ってもらったらしい。髪型も弄られている。

「何を考えて、また彼女を連れ出した」

あまり口外してほしくない秘密を知られているので、セーラは素直に従っていたのだ。フレアなら危害を加えてこない。分かっているが問わずにはいられなかった。

「何って、可愛いからよ。あと、アーネスがどれだけ非道い男かたつぷりと聞かせておいたから」

「私は女性に対しては紳士です。」

まあいい。話があるから付いてきて下さい」

アデイスは身を翻して奥へと向かう。地下のアジトではなく、店の個室だ。こんな男を下には入れられない。ここを知っているだけで胸くそ悪いのだ。

彼の兄がいつからこの街にいたかを思えば、ここを知っていて当然で、場所を移しても同じ事になる可能性がある。

だったら直接口を封じておく方がいい。

「ああ、モリイ、手伝って下さい」

ハーティとフレアだけを先に部屋に入れ、部屋のドアを閉める。

密談用の部屋なので、普通にしゃべる分には中に会話の内容は漏れない。

「何か言われましたか」

「セーラが生贄として召喚された事に気付いてて、モリイの血を飲んだと思っています。アーネスは竜の血を飲んでいないと思って、アデイスのことはすごくよく思われています。だからお母さんに誘拐されて一緒に住むことになったって言うておきました」

「どうして生贄のことを……」

「古い本を読んだそうです。あと、アデイスの方が安全なのに、どうしてアーネスと一緒にいるんだって。子供っぽく分かりませんで通しておいたけど」

「分かりました」

アデイスはバーに戻り、用意されていた飲み物を持った。聖良は菓子が盛られた皿を抱えて、個室に入る。

「ハーティ、喉が渴いたでしょう」

「あ、はい」

彼女はアーネスの姿の方が好きらしく、いつも以上に緊張していた。憧れの長なのだから当然だ。

「しかし、お前が何を考えて私の可愛いモリイを連れ回したんですか。散々怖がらせておいて、まだ足りないのですか」

「怖がったのはあなたでしょ？」

「この子も怖がっていましたよ。よくもぬけぬけと」

アデイスはハーティに温かいお茶を出す。仕方がないから、フレアにも。

「何が目的です」

「目的なんてないわよ。モリイの事がちよつと心配だっただけ。あんたみたいなロリコンで有名な男に連れ回させるなんて」

「何もしませんよ。貴方の兄と同じように見ないで下さい。知識の苑である青の箱庭では、誘拐などの一般的な犯罪は禁じられています。知識の探求を阻む者を排除した結果、必要な物を手に入れるために手段を選ばなかった結果が、たまたま違法である場合を含んでいるだけです」

そこがマフィアとは違う点だ。基本的に自分達以外には興味がないのである。

「お兄様は、綺麗な花を手折っている感覚なのよ。長く生きると命は花と同じほどの価値になるみたいよ」

フレアはまだ若いらしい。だから人間の命は尊重している。竜はしていなかったが、今はしているだろう。少なくとも、モリイという少女の姿をした竜は。

「それに、人間となれ合っただって、そのうち辛い思いをするだけだわ。みんな死んでしまっんですもの」

だから人間であるアーネスは、モリイに相応しくないとはいいたいのだ。

「その心配には及びません。竜は他にいて、私も血を飲んでいきます。竜の里には、子供が他にもいるんですよ」

アデイスは自らの手の甲にナイフを当て、証拠を見せてやった。

「……………そう」

フレアは眼を細めて手の甲を見る。

「アデイスも？」

「ええ」

「そう……………」

「アデイスが死んだら、セーラを手に入れられるとも思っていましたか？ 愚かな」

「そんなことないわ。アデイスとセーラはお似合いだもの」

意外な言葉に驚いた。邪魔者扱いならともかく、お似合いとは予想もしていなかった。お似合いだと言われたのに、当のセーラはちつとも気にしている様子がない。彼女が気にしなければ、誰に何を言われても同じだ。

「それでモリイを狙ってきたんですか。気が多い男ですね」

セーラも呆れているだろう。驚いていないという事は、彼女は似たようなことを言われ済みなのだ。

同じ言葉遣いで同じ性格。それは見た目で判断していないという

意味にもなる。セーラの中身が気に入っているのだから。

セーラの方はそれに気付いているのか、気付いた上で呆れているのか。

フレアに惹かれてもしない限りは、どうでもいいことだが。

「なぜアデイスの肩は持つんですか。接点などないでしょう」

「いいじゃない。あなたと違って普通にいい男だもの」

彼も見た目に騙されるミーハーのようだ。

普段は働いていると言った。ひよっとしたら、普段はまともな格好をしているのではと想像する。女装さえしなければ、綺麗な男だろう。化粧で大人びて見えるが、まだ少年なのかもしれない。どこかで接点があつて、アデイスを間近で見た可能性はある。

予測しても意味のないことはどうでもいい。セーラの話から出てきた疑問を解決しなければならぬ。

「ところで、お前はどうかやって竜の捕らえ方など知ったのですか？ あれは千年前に行われていた狩りです。資料もそこらにあるものではない」

フレアの目が一瞬泳ぐ。

あの資料はハーネスの遺産だ。ハーネスの時代には、竜は人を恐れて手出しの出来ない場所に移動していたため、不可能だった方法あの資料以外では忘れられている方法。

アデイスはこっそりと侵入できる立場にいるが、フレアがそんな事を知っているのはおかしいのだ。

「そ、そちらこそどこ知ったの？」

「人を使えば方法はいくらでもある。しかしお前は人間を動かせるような立場にはない。私と違って半悪魔なんですから」

「私は……半悪魔だもの。壁抜けぐらいできるわ」

「侵入者が入ると、どんな方法でも警報がなるはずなんですがね」  
アデイスは管理する側だ。悪用しているが、そうと分かるようなやり方はしない。

しかし半悪魔には常識は通用しない。正規の手順さえ踏めば、警

報は鳴らないが、どこか抜け道があったのかもしれない。

アデイスが睨み付けていると、フレアは急に余裕たつぷりといった顔をして笑う。強がりだ。最近、自分がその調子だから、彼の内心はなんとなく読める。今、必死で探している。

「……………フレア、お前は普段男の格好をしていますか？」

「な……………なんでそんなこと？」

「男、と試ってみると、どこかで見たことがあるような無いような「あるわけないでしょ。あんたなんか見たらすぐに分かるもの」ひよつとしたら、変装して城に出入りしている可能性がある。顔の傷を消せるような化粧品も売られているのだ。今でも分かりにくい半悪魔の模様は、本気で化粧でもすればまったく分からない可能性はある。」

「ああ、だからアデイスと接点か。」

本気でアデイスのことが好きなんだ……………」

ハーティが呟いた。

好き、とは何だろうか。好きとは。しかも本気で好きとは何なんだ。

「そういえばどうしてハトラはここにいるの？ アデイス達と一緒にじゃなかったの？」

「え……………」

フレアの言葉に、ハーティが固まった。フレアは首をかしげて、あら、と呟いた。

「よく見たら、毛色が違うわね。声も違う気がする」

ハーティの顔が引きつっている。

顔立ちは似ていないのに、どんな目をしているのだろうか。雰囲気だけで見分けているのか知らないが、ここで慌てたら怪しまれるだけだ。

「別人ですよ。どこをどう見たら同一人物に見えるんですか」

「ハトラじゃないの？ でも、さっきハーティって言ってたじゃない。それに昨日、ハトラに話したことどうして知ってるの？」

ハトラとハーティ。確かに似ている名だが、目が悪いにしても、なぜ同一人物だと思うのだ。

ハトラを連れてきたのは昨日が初めてで、アデイスが見ていたところでは、ハーティなどと呼んでいない。

ちらとセーラを見ると、眼球がせわしなく動いている。心当たりがあるようだ。見ていなかったのは、子供達と一緒に遊ばせていた時しかない。あそこは魔術師専用の図書室の前。一般人では入れない。

「フレアさん、ちょっと目をつぶって下さい」

セーラがモリイの大きな瞳でフレアを見上げた。

「え、何？」

「耳も塞いで下さい」

「ど、どうして？」

「だめですか？」

「なんでっ!？」

「いいから!」

セーラはフレアの膝の上に乗し、頭部に触れた。

「え、ちょ」

髪を乱し、脇に流されて固められていた長い前髪を前に垂らし、後ろの髪は首の後ろに束ねる。

アデイスはその姿を見て首をかしげる。

見たことがある気がした。

ある気がするのだが、分からない。

「あっ」

ハーティが声を上げた。

「眼鏡の俯いてた人っ」

眼鏡の俯いて……………

アデイスの知り合いには一人しかいない。

そして、言われてみれば、顎のラインやら体格やら、誤魔化せない部分が……………。

思考が停止する。

「え……………エリオット!?!」

アデイスは考えるよりも先に、そう叫んでいた。



## 12話 恋する乙女7

「エリオット!？」

叫んで、アデイスが倒れた。

「アデイス……アーネスっ」

混乱していた聖良は、つい本名を呼ぼうとして言い直す。  
フレアの視線が痛い。

「長、しつかり」

「アーネス、お茶飲む？」

起き上がった彼にカップを渡すと、口に含み、熱いと言って取り落とす。慌ててハンカチで拭くが、アデイスに止められた。

「ちよつと、どういふことかしら、セーラ」

「いえ、あの、その」

「セーラ？」

聖良は己のミスに気付いて、しかしすぐに首をかしげた。子供の振りをしておく。

アデイスはようやく少し落ち着き、椅子に座り直して濡れた上着を脱いだ。

皆、かなり混乱している。

聖良も思いついた時は半信半疑だった。なにせ、エリオットはいつも顔を隠している。アデイスでさえまともに顔を見たことがないと言っただ。それでも聖良は背が低いので、アデイスよりは見えている部分が大きかった。

覗き込むと顔を逸らしたが、ほっそりとした綺麗な顎のラインや、色は少しだけ赤っぽく染めているが髪の毛の長さがちょうど同じくらいだと気付いた。

そして、彼の近眼さ。眼鏡を掛けなければ生活は難しいだろうと、男の格好で眼鏡を掛けたのを想像して、思い出したのが彼だった。

あまりにも雰囲気が違うから、自分でその考えを否定して、否定しきれず。

「セーラ……まさか、セーラ？」

「いやだな。違いますよ」

フレアも同じ事を思ったのか、そう聞いてきた。

「じゃあ、セーラは今どこにいるのかしら？」

「さあ」

フレアはアデイスを見た。

「兄さん？」

「私は女装する弟を持ったおぼえはありませんが」

「じゃあ、アデイス」

「あんな男と一緒にしないで頂きたい」

余裕ぶっているが、目がどこか虚ろだ。

「見た目とロリコン以外と態度以外は、似ているとは思ったの。実力はあるのについてない所なんて、本当に似ているとは思っていたの」

フレアがアデイスの襟を掴んだ。

「中身が入れ替わると考えるより、この場合は姿を変えた、と考えた方が自然だわ。中身を交換するなんて、ハーネスがしていたことよりも高度なもの」

アデイスはため息をついて詰め寄るフレアを見た。その瞬間、自然な動作でアデイスから手を離し、身を引くフレア。

「もう意味分かんないっ！」

「こつちだつて分かりませんよ！ 人と顔も会わせられないのは、ずっと演技していたんですか!？」

「違うわよ」

フレアの目に涙が溢れかかっている。

「違いますよ。ただ目が悪いだけで、距離があつたら目が合っても分からないだけだと思います」

アデイスのために、聖良は予想される答えを教えた。

「え……………」

「フレアさん、人と置物を間違えるくらい近眼で、エリオット君は目線さえ合わなければ平気みたいでした。眼鏡をしていないと、人と目が合わないから気が大きくなってたんじゃないですか？」

前に膝の上に載せられた時、聖良が目を隠すと彼は落ち着くことはなくとも顔を見ることは出来ていた。手が自由だといつ視線が戻るか分からないから不安だっただけで、相手の目が見えなければ、普通にしていられるのだ。

「こんな格好に走った理由は確実に人形師さんのせいですが……………なんでこんなに弾けたのかまでは分かりませんが…」

エリオットは内気だが、臆病ではない。好奇心は旺盛で、聖良に話しかけていた。しかし、なぜこんなになったのか、聖良には理解できなかった。

「人形師……………しかし、確かに赤ん坊の頃に私が拾ったんですよ。それに模様もあります。風呂に入れたのは私だから、化粧をしていたら気付きますし……………」

そこまでしていれば、エリオットの事が可愛いはずだ。本当に弟のように育てていたのだ。

「模様を消すのは難しくないわ。お兄さまは幻術が得意なもの。自分でももつと薄くできるわ。あそこは魔術に溢れていて、些細な幻術なんて珍しくないから誰も気付かないのよ。とくにお兄さまは隠匿させるのが得意だから」

これで、お互いがお互いの正体を確信にしまった。

ハーティは椅子の上で固まってしまっている。自分のせいだと思っっているのだ。ハーティがいなければ、きっかけは作られなかったから。

「まあ、バレちゃったんなら、お互い素直に事情を話した方がいいんじゃないですか？ よく考えれば、これから長い、ながああいお付き合いになるんです。アデイスも、あの二人が知ってる程度のこととはぶっちゃけたらどうです？」

あの部下二人も共犯だと知ったら、彼は驚くか傷つくかするだろう。

「セーラはなんでそんなに落ち着いているんですか」

「だって、私は元々部外者ですから、シヨックはそれほど大きくありません。驚きましたけど」

親しいわけではないから、驚きもシヨックも大きい二人の胸の内は理解できない。辛いのだろうと想像するだけだ。

「私、冷たい飲み物取ってきます」

頭を冷やすには、うんと冷たい飲み物がいだろう。あの部屋は暖房が効きすぎて、頭は冷えない。

部屋を出てバーのカウンターへ向かうと、先ほど話題を口にした部下二人がいた。

言わなければならぬとは思っていたが、いざ目の前にすると少し困った。

「フレアが来てるんだって？」

「フレアさんのことでも大切で人には聞かせられない話があるんですけど」

聖良が言つと、二人は顔を見合わせた。

「まさか、何かされたの？」

「女に変な事をするような野郎には見えなかったんだが……」  
連れて行かれたせい、二人は本気で心配してくれた。

「いえ、アーネスがシヨックを受けてます」

「なんだ長かよ。お前より打たれ弱いからな、あの人」

バーテンの代わりに店番をしていたシファとロゼは、気を利かせて仕込みしなくちゃと奥へ行く。それでも周囲を気にしながら、二人を手招きして屈ませる。

「大声出さないでくださいね」

「そんなに大事があつたんですか」

ジェロンが微笑みながら言う。

「フレアさん、知り合いだつたんですよ」

「そりゃ、知り合いだろ」

「城で働いてる魔術師だったんですよ」

「は……………？」

「十七歳」

二人は顔を見合わせる。

いきなり教えるとアデイスのように騒ぐ可能性があるから、遠回しに遠回しに教える。

「アデイスがいつも可愛がってる人だから、パニックで」

「は？」

顔をしかめ、混乱し、その言葉しか出てこない様子だ。条件に合致する人間は、あまり多くはないはずだ。

「化粧して髪型変えたエリオット君だったんですよ」

二人は同時に個室へと走った。聖良はそれを見送ると、奥に引込んだシファ達に声を掛ける。

「すみませーん。頭がすつきりしそうな冷たい飲み物下さい」

「あら、話は終わった？」

「ちょっと込み入った話になっていて。たぶん落ち込むと思うから、慰めてあげてくださいね」

「そんなに大変なこと？」

「ロゼが実は男の子だった、ぐらい天地がひっくり返るような事です」

「なあにそれ」

「あるんですよ、見た目は女で胸もあるのに、遺伝子上は男とか、その逆とか」

「？ モリイは難しいことを知ってるのね。そういうのはよく分からないわ」

ロゼは笑いながらグラスを用意する。聖良の知らない柑橘類をしばらく、炭酸水に混ぜる。

「ほら、出来たわよ。あのお二人もいるかし……………」

ロゼは言葉を止めて、部屋から飛び出てきたディアスを見る。彼

はトレイに置いた炭酸飲料を勝手に一気に飲みして、地下のある奥へと走った。ロゼは無言で人数分のジュースを用意する。

聖良はそれを持って奥の個室に向かい、足でドアをノックして、ハーティにドアを開けてもらう。

「あらら」

フレアとアデイスが泣いている。男のくせにみつともない。

「泣かないで下さいよ。いい歳なんですから」

「もう少し可愛い慰め方を」

「ほら、ロゼが作ってくれたジュースです。すっきりするから飲みましょう。」

「ほら、フレアさんも」

トレイをテーブルに置くと、泣いている彼にジュースを差し出し、涙で濡れた顔をハンカチで拭いてやる。

フレアは手で涙を拭い、ジュースを飲む。少し化粧が崩れているが、見苦しいほどではない。

「落ち着きました?」

「うん」

聖良はアデイスにもジュースを突きつける。

「こんな事で泣かないで下さい。ちょっとグレただけだと思いますよ」といいですよ」

「思い込めませんよっ」

「心が狭い!」

「うっ……」

「ほら、落ち着きましょう。話し合わなきゃ何も解決しません」

アデイスが慰める聖良を抱き寄せて頬ずりする。彼なりの現実逃避なので、今回は我慢した。

「おーい」

黙ってされるがままになっていると、満面の笑みを浮かべたアデイスが戻ってきた。泣いていたアデイスとは正反対だ。彼は笑いながらフレアに接近する。手には誰かから借りてきたらしい眼鏡があ

り、視力の悪いフレアはそれに気づけない。

「ほれ」

気づかれる前に眼鏡を掛けると、フレアは悲鳴を上げて俯いた。

「おおっ、エリオットっばい！」

「何を苛めてるんですか」

聖良が止めようとすると、フレアは自分で眼鏡を外して床に叩きつける。

「ああ、借り物の眼鏡っ」

「眼鏡、嫌い！」

フレアがディアスを睨み付ける。ただし、視線は少しずれている。

「嫌いつて、お前、毎日してるじゃねーか」

「しないと本が読めないじゃない。小さな子が多いから、廊下を歩くどぶつかって危ないし」

「まあ……眼鏡が嫌いなのは分かった。でもなんで女装なんだ」

「男の子の格好よりも似合うもの」

フレアは当たり前じゃないと言いたげに胸を張る。

「似合ってはいるけどな……格好というか、なんでそんな態度がでかいんだ？ いつも小さくなってるくせによ」

「見えると動くのが恐いんだから仕方がないじゃない。小さな子も多いし」

アデイスが唸りながら聖良の頭に頬ずりし続ける。

気が弱くて可愛いエリオットの本性は、フレアなのだ気付いて泣いている。

「アデイス、そろそろウザイです」

「ひどいです。もう私にはセーラしかないのに。でもそんな所も大好きです」

アデイスの言葉を聞いて、フレアが立ち上がった。アデイスは彼の視線に気付き睨み付け、挟まれた格好の聖良は居心地悪く、逃げ出そうともがいた。

「セーラを離してっ」

抜けだそうとしていたところに腕を引っ張られ、勢い余ってフレアの胸に飛び込んでしまう。

これはどんな修羅場だと首を傾げた。

「兄さん、小さな女の子とよく遊んでるとは思ったけど、本性がロリコンだったなんてっ」

先ほど、切々とロリコン男に気をつけると言き伏せていたのは、フレアがいつも子供達の中にいるからだ。彼は彼なりに小さな子を心配しているのだ。聖良の方が年上だったとしても、アデイスに関してなら間違いではない。

「女装の変態に言われる筋合いはありません！」

「女になれるものならなりたいわよっ！ 男に生まれたから捨てられたのにつ！」

フレアが再び泣き出すので、顔をふいてやる。男だが、美人は泣いても美人だ。聖良が泣いてもただ汚いだけである。

「アデイス、言い過ぎです。女装は迷惑を掛けませんが、ロリコンは犯罪です」

「セーラは子供ではありません」

「私は関係ないでしょう。外にいる二人とか、その他大勢がいるんですからね。」

本人達が割り切ってるようだから文句は言いませんけど、言われなくなったら人にも言わないでください。

実の兄がアレで、義理の兄がコレなんて、グレても仕方がないです。可哀相です」

これは一種の非行だ。実の兄がアレでなければ、女装まではしていなかった。普段は普通の格好で、目を合わせなかったら人ともそれなりに話す。実の兄が悪い。

義理の兄がコレでは、この上さらにロリータになりかねない。さすがにこの身長で子供っぽいファッションはあんまりだ。

「現実逃避するよりも、お互いに納得出来るように話し合ってください。二人きりがいいなら出ていきますし」



フレアは聖良を抱きしめたままふるふると首を振り、先ほどアデイスがしていたように彼女を抱えて座った。

挟まれている構図に変わりがない。

「どうして……こんなこと」

「こんなことというのは、箱庭のことですか」

フレアの言葉にアデイスが答えた。

「そう」

「クレアの監視があったらろくな研究が出来ないからですよ。

私の部屋には遙か昔、ハーネスが使っていた隠し通路があったんですよ。ハーネスが忘れたのか、クレアも知らないような、ね。だから他のジジイ共も知りません」

「そんなもの、クレアが忘れるの？」

「クレアが覚えているのは魔術関係がほとんどで、その他の細かい記憶は欠落しているんですよ。必要のない知識は切り捨てられるんです。」

そこからクレアが禁書として封じている図書室にも繋がっていたんですよ。

面白かったから元々薄汚れてたこの二人を誘って、色々と内緒でやっていたのですが、限界を感じて、姿を変えることに成功してからは外に出ました。

これでほとんど理解できるでしょう」

頭の上でフレアが頷く気配がした。

「でも、どうしてセーラと？ セーラは兄さんが召喚したんじゃない」

「実行したのはその二人です。私はその頃にはもう散歩途中偶然誘拐されました」

「……………それは本当だったの」

フレアが聖良の頭の上に顎を置く。さすが義理でも兄弟。行動がそっくりだ。アデイスがいつもやっているから、下が真似するのである。

「私としても聞きたいことは色々ありますが、エリオット……………フ

レアが本名ですか。

なぜそんなに性格が違うんですか」

フレアは首をかしげた。

「そんなに違うかしら？」

「前を見て、声も大きくてハキハキして、顔も見せて、人の背に隠れないでしょう。」

まあ、大きな違いなんて、声が大きくてハキハキしてるぐらいですが」

「相手の視線が分からなかったら前を向けないし、眼鏡を掛けて大きな声で話したら見られて嫌だし、見えにくかったら髪を上げても恐くないし、見えにくかったら壁を作らなくてもいいわ」

簡単に説明が終わった。可哀相なアデイス。

「本当に見えなきゃいいんですか」

「そうよ。どうしてかよく分からないけど、半悪魔は人間よりも赤ん坊の頃を覚えているからじゃないかって、ヘレナが言ってた」

聖良はいつぞやの魔女を思い出す。綺麗で小さな賢い女の子。何があったのか知っての言葉であれば、フレアは拾われる前にかなりひどい目にあつたのだ。

「言葉遣いは女っぽくしたかったからよ。その方がお兄さまが可愛がってくれたから。」

お兄さまも父には殺さない程度に面倒を見ていると言われたから、自分で面倒を見られそうにないって悟ったら、教育もしてくれそうな所に預けたんですって。

小さな頃は私が生きているかどうか、たまに様子だけは見に来てたの。でもお兄さま、気に入った女の子がいると見境ないから、恐くなって私が出向くようになったの。知り合いがコレクションになつてたら立ち直れなさそうだったから」

魔術師には女性も多い。もしも実の兄の所に遊びに行つて、知り合いが人形になっていたら、聖良なら二度とそこには行かない。

むしろその前段階で、そんな兄のことは忘れて、他人として生き

ている。

「最初はお兄さまの所へ行くのを、誰かに見つかったら嫌だったから、クレアの部屋の服を借りたの。女の子の服を着て変装したらお兄さまが女の子みたいにお化粧して可愛がってくれたから続けただけよ」

アデイスは頭を抱えた。

悩みは人それぞれだ。

「これでもいい話は終ったかな」

今まで傍観していたジエロンが口を開いた。

「長、納得しましたか？」

「していないが、理解はしました」

「可愛がっていたとはいえ、大人気ないですよ。」

それより、一番大切なことは言わなくていいんですか？ 遅かれ

早かれ、エリオットが半悪魔ならバレますよ」

アデイスはグラスに残っていたジュースを一気飲みする。コースターを置いていないから、テーブルが濡れている。

「まだ何かあるの？」

「あるある。俺達もビツクリなありえねえ不幸っぷりの結果が」

アデイスも十分驚き済んでいるので、気楽な明るい調子で言う。

言いふらしたくても言いふらせない内容であり、言える相手が出てきて喜んでいいる。

「長、長、元に戻ってみてくれよ」

「嫌ですね。見せ物ではないんです」

「口で言っても分からないだろ。見せるのが速い」

「口で言っただけ分からないほど馬鹿な子ではないはずですよ」

アデイスはため息をついて聖良に促す仕草をした。

説明を丸投げされても困る。

「セーラ、何があるの？」

「うーん。」

見て分かるとおり、私達は他人の姿になる術を使ってこんな姿に

なってるんですけど」

聖良は言葉に迷った。

「やっぱり見た方が理解しやすいですよ。いいから脱いでください」  
アデイスが顔をしかめ、後ろを向いて服を脱ぎ始めた。聖良は目を逸らし、呪文を唱え終わるのを待つ。

「え、脱いだの？　なんで？　え？」

「服が破れるからですよ」

「え、でもアーネスよりも兄さんの方が小柄なの……う……あうううううう」

フレアの言葉が途切れた。可愛い竜のアデイスになったのを確認してから、力が抜けたフレアの腕から抜けだす。あっさり静かになった彼を確認すると、気を失っていた。人間とはこれほど簡単に気を失うのかと首をかしげた。聖良が気絶したのは、胴を真つ二つにされかかった時とか、分かりやすい理由がある時だけだ。

つまり気の大きなフレアも嘘ではないが、気の小さなエリオットも嘘ではないのだ。

「ほら、やはりショックが大きかった。どうするんですか、これ。」

そろそろ暗くなってきたから帰る予定なんですが」

「起きなかつたらスタ袋にでも入れて、荷物のように持ち帰ったらいいんじゃないですか？」

「さらつと言いますね。さらつと」

聖良は落ちたマントと頭蓋骨を拾い、後ろからかぶせて呪文を唱える。

それが終わると、ディアスが本当に誘拐に使いそうなスタ袋を用意して、少し呆れた。

## 12話 恋する乙女8

目を開くと暗い部屋にいた。知らない部屋。  
いや、彼の知っている部屋だ。

「……兄さんの部屋だ」

エリオットは周囲を見回し呟いた。

自分は天才という態度を隠そうとしない性格のためか、アデイスは優遇されてリビングと寝室がある広い部屋を使っている。

エリオットは自分の格好を見ると、服も化粧もフレアのままだった。

アデイスがアーネスというのは、夢ではない。では、突然竜に化けたのも現実か。

再び気が遠くなり、彼は頭を振って起き上がる。

隣の部屋からは、セーラがキャンキャンと吼えるように、子供扱にするなどアデイスに怒鳴っている。

いつもの二人だ。

ベッドから抜けだして、そっと覗く。

「ん、エリオット、起きたのか」

すぐアデイスに見つかってしまった。

先ほどと同じ面子が、彼の知る姿に戻って並んでいた。セーラはアデイスに抱えられている。彼女の定位置は、あそこなのだ。

「さすがに野郎一人は重かったんだぜ。」

さっきのは現実だけど、覚えてるか？」

アデイスに問われ、エリオットは無言で頷き、ドアの陰に隠れながらアデイスを見る。

目が悪いので、裸眼では顔の作りが分からない。幸い、ここは明るいので背丈と髪型と色と雰囲気から分かる。

「兄さんがアーネスで、竜に化けてたの？」

「合ってるけど、化けたんじゃない」

先ほどは知らない男の姿をしていたから緊張したが、今はいつものディアスだ。ただ、いつものディアスをこのぼやけた視界で見ると事など滅多にないから違和感がある。

「化けたんじゃない？」

「元の姿に戻ったんだ」

倒れそうになると、ジェロンが支えてくれた。

「とにかく座ろうか」

珍しく優しい言葉をかけられ、素直に従う。ハトラに椅子を勧められて、彼は沈み込むように座った。

アデイスは相変わらずセーラで遊んでいる。しかしエリオットがアデイスを見ると、すぐに顔を上げて、綺麗な銀の髪をかき上げた。「ハーネスの術の中で、一番有名なのは？」

有名と聞いて、さすがに思いついた。

「りゅ……竜を乗っ取ったの？ どうして!？」

「竜の前足で掴まれて、無傷の人間なんていませんよ。身体を捨てなければなくなる傷を、簡単に負います」

不運な彼は、誘拐されて、瀕死で、一か八かの賭に出た。

普通の相手なら否定したが、否定できないのがアデイスという男だ。実力的にも、不運っぷりにも。

「自分が誘拐しようと思っていた竜に食べられかけて仕方なく乗っ取った!？」

「……そうです」

「自業自得すぎ」

「ほっといてください。そのおかげでセーラはこうして生きているんです。彼女も連れてこられた時には瀕死でした」

「セーラは何もしてないのに、かわいそう」

セーラはどこをどう見ても善良な一般市民だ。召喚されるのは、世間からの必要性が薄く、いなくなっても不審がられない存在だ。その設定に異世界に澄んでいたセーラがたまたま引つかかってしまっただけで、彼女に罪はない。性別や能力まで設定できるのなら、

ハーネスは役に立ちそうな人間をたくさん召喚していたはずだ。しかし実際の所は、高度な設定をすれば間違いなく失敗し、何が出てくるか分らない。

ハーネスのように生き延びることに慎重な男は、国を滅ぼしかねない事はしなかつただろう。

「ずっと疑問だったの。普通、女の子が兄さんにここまでされて素直になれないなんてって。」

素直になる以前の問題だったのね。

ロリコンの拳げ句に諸悪の根源だったなんて」

どれだけ優しくされても、反発してしまうのは無理もない。ロリコンに、子供のように扱われれば、どれだけ顔が良くて、どれだけ優れていても、どれだけ愛されていても、無理なものは無理なのだ。

「そ、そんなこと、セーラはもう気にしてません。ねえ、セーラ」

「気にしてます。私はそれを我慢出来ますが、忘れません。執念深いですから」

「うつつ」

冷やかな声音にアデイスは低く唸る。

「まあ、それはいいとして、お前はとりあえず化粧を落として、着替えなさい。髪は染めているんですか？」

「違う」

髪に掛けていた幻術を顔に移す。それで顔の様子が完全に隠れる。「お兄さまの幻術。私の魔力で維持しているから、隠す場所も変えられる」

気を失っても、兄が生きている限りは解けない。自力でも出来るけど、やっぱり兄は長く生きていてだけあって上手いので任せている。

洗面台を借りて化粧を落とし、髪をといて後ろで一つに結び、前髪で顔を隠す。服もアデイスの物に着替える。昔は身長差がかなりあったのに、今ではアデイスの服をほとんど違和感なく着られる。

部屋に戻るとセーラがお茶とバスケットに入った軽食らしき物を出していた。

「夕食食べていないから、お腹すきませんか？ これ美味しいですよ」

「セーラが作ったの？」

「違います。あのバーにいた女の子達です。今日は食堂に行く気力もなさそうだから、作ってもらいました」

眼を細め、食べにくいので眼鏡を掛ける。女の子らしい綺麗に飾られた朝食だ。

「眼鏡、嫌いなんじゃないんですか？」

「外するのが嫌いなだけ。この眼鏡は兄さんが……」

アデイスにももらったものだ。レンズも高い物らしい。外に出たがらない彼のために、視力を調べたり、レンズの度を調べる道具をわざわざ一式借りてきてくれた。

秘密結社のボスでロリコンで竜になった不運な人だとしても、嫌いになれるほど浅い関係ではない。

「まったく。」

エリオットに戻ったとたん、可愛いことを

アデイスが苦笑いしながらセーラの髪を弄っている。

「私はそろそろ戻らないと、母が心配して探しに来るので、明日には帰りますが」

「母!？」

「母はいるに決まっているでしょう。私はこの姿をしています、本当はゼロ歳児なんですから」

「そつえば……」

中身が二十四歳のゼロ歳児なのだ。

「ロリコンロリコンと言われますが、セーラよりも年下なんで、何の問題もありません」

それは事実なのだが、エリオットには納得できなかった。セーラもそう思っているようで、無表情でアデイスの手を払う。



原因が分かると、彼女の行動は無理のないことばかりだった。

「まあ、それはともかく」

アデイスは払われた手を寂しそうに見つめながら言葉を続ける。

「ばれてしまったものは仕方がないですから、遊びに来たいなら好きに来なさい」

「え……いいの？」

「人形師さえ連れてこなければ。ロヴァンも元気になっていますよ。

最近は寒くてずっとうちのリビングで丸くなっています」

「うん」

やはり、アデイスは好きだ。

セーラも好きだ。

どちらに対して、どんな好意なのか、よくわからない。

アデイスは格好良く、セーラは可愛くて、男とか女とか、大人とか子供とか関係なく、アデイスとセーラが同じほど好きなのだ。

これも恋と呼んでもいいのだろうかとエリオットは首を傾げた。

「恋するって、複雑ね」

「何か言いましたか？」

「美味しい」

アデイスには適当な言葉で返し、よく知らない女の子……下手をしたらアデイスの愛人が作った夕食を目の前にして、ため息をついた。

複雑だけど単純で、単純だけど複雑。

楽しいけど辛いけどやっぱり楽しい。

楽しいと思っているのは、この二人の組み合わせだからだ。

「あ、遊びに来る時は、新鮮なミルクとか生クリームも持ってきてください。ミルクは日持ちしないから、少ししか持って帰れないんです」

「いいよ」

セーラらしい発言が、とても楽しい。

アデイスが竜になったのはショックだが、すぐに死んでしまわな

いと思えば嬉しい。

物事を捉える向きにより、楽しくも辛くもなるのだ。

エリオットは明るい部屋で目を覚ました。しかし自分の部屋では無い事に気付き、横を見ると、セーラの顔が目の前にあった。

驚きのあまりベッドから落ちる。

「そつだ。あのまま兄さんの部屋に泊まったんだつた」

セーラとアデイスが同じベッドで寝ていることを知って心配になり、別々の部屋で寝るべきだと言ったらなぜかお泊まりが決定していた。

アデイスを挟んでいたのだが、彼は寝相が悪いのか、丸まって寝ているため、セーラの腕に抱え込まれている。

少しうらやましい体勢だ。

今日はずいぶんと冷えているので、冷えてしまう前に慌ててベッドに戻る。部屋は火石を置いているので外よりははるかに暖かいはずだが、それでもパジャマだけでは寒い。

エリオットは手を伸ばして眼鏡取り、よく眠るセーラを見る。

寝ていると安心して顔を見られる。こんなにはつきりと間近で彼女の顔を見るのは初めてだ。静かな寝息がとても可愛らしい。ぷつくりとした唇が少し開いて前歯が見えている。

片肘について上半身を起こし、彼女に手を伸ばす。

頬に触れるとぶくぶくでつるつるだ。生きた女の子の温かい肌だ。フレアの時に、勇気を出してキスをした柔らかいほっぺだ。

「こおら」

肩を掴まれ、気付けば仰向けに押さえつけられていた。寝起きで半眼閉じて視線の定まらないアデイスの顔が目の前にある。

「おは、おはよう、兄さん」

セーラに抱えられていた彼は、あっさりと抜けだしてエリオットに馬乗りになつていた。

自分で聞こえるほど、心臓が暴れている。

いきなりだったから驚いた。しかもこんな体勢と距離。

「なあにを悪さしようとしていたんですか」

「悪さなんて」

頬に触れていただけだ。それ以上しようとしたわけではない。起こしてしまつたら、せつかくの幸せな時間が台無しになるから。

「そんなに欲求不満が溜まつているなら、この兄が相手をしましよ  
うか」

アデイスはエリオットの頬を両手で挟み込み、目の前で笑う。必死で目を逸らすのが、ちらちらと『男』の顔をしているアデイスが見えてしまう。兄ではなく、大人の男の顔。

昨日の朝までは、彼がこんな顔をするなど知らなかったのに。

「きよへっ」

隣から、素っ頓狂な声が上がった。

セーラが起きて、二人を見比べる。

アデイスに押し倒され、キスでもされそうなエリオット。

それを見てセーラは頬を赤く染めた。

「どうぞ、続けてください。向こうから見守ってますから！」

セーラはいそいそとベッドから抜けだして、椅子にかけてあつたぶかぶかのガウンを羽織りながら隣の部屋に向かおうとする。

「セーラっ、待って！」

「そうです。向こうに行っているだけならともかく、なぜ見守るんですか!？」

エリオットとアデイス、二人の感情には大きな差があるようだ。

「え、だって、ちょっとだけ興味が」

「そんなものに持たないでください」

「いいんです。偏見はありません。ロリコンよりずっとマシです。」

好きなだけどうぞ。エリオット君なら、本気で女装すれば同性カッブルに見えませんか、とつてもお似合いです！」

彼女は親指を立てて見せ、それから再び部屋を出て行くこととする。「待って セーラ、助けてっ」

セーラが足を止めた。

「た、助けてっ」

彼女は振り返る。

「アデイス、無理矢理はダメですよ。無理矢理は。ああ、泣いてるじゃないですか」

セーラが意外に遅しくアデイスの脇腹を蹴り転がす。

「冗談なのに」

「冗談で泣かせてどうするんですか」

エリオットは眼鏡を外して鼻をすする。

アデイスのことはまだ好きだが、それとこれは別だ。

「顔を合わせただけで泣くななんて、人生はこの先長いのにどうするんですか」

「い、いいもん。大人になったらここにはいられないし、フレアとして生活するから」

大人になつて、年を取れなくなつたら、さすがにここにはいられない。悪魔関係者は本来ここにいるのは避けた方がいいのだ。彼の兄は元からここに住んで、ほとんど魔術師になつているから黙認されているのだ。親に捨てられ、兄を頼つて来たということになつてはいるはずなのに、こんな悪魔が近づいてはいけな場所の中枢で生活している彼の今が間違っている。

「えと、人形師さんと一緒に？」

「そ……そうなる」

「人と会うだけで怯えるようになりませんか？ 人に触るのも恐くないたりとかしません？ 本当に大丈夫ですか？」

「たぶん、大丈夫」

セーラは心配して見つめてくる。

「……………」

彼女はため息をついて、顔を上げて窓を見て固まった。この部屋はアーネスのものだったため、贅沢な透明度の高いガラス窓だ。それをじっと見つめて、窓を開ける。

「雪降ってますよ!」

「げっ」

アデイスもベッドから這い出て窓のことは見る。

「うっ、火石を置いてるのに寒いと思ったら……」。

「んー、すぐに止みそうな雰囲気ですね」

「でもさすがに帰れません。私、寒いのいやです」

「昼まで待って、晴れなかったらもう一泊しましょう。あまり遅くなくてもお母さんが心配して様子を見に来そうですねから、最悪の場合私だけで先に帰ります」

セーラが頷いてまだ空を睨んでいる。

「セーラは雪が嫌い?」

「嫌いです。新聞配達するとき、台風と雪は最悪です」

「そんなことしてたの?」

「学費を稼いでたんです」

セーラは小さな身体に似合わず、高学歴だ。学者に聞くと、女性でそれだけ学んでいるのは珍しいと言われた。学ぶことに恵まれていても、女性は買い物に必要な計算しか覚えず、別のことを学びたがるのだ。この国では魔術があるが、他の国では本を読む程度のことしか覚ええない。

自発的に勉強するセーラは、とても熱心なのだ。

「二人とも、今日はどうするの?」

「そうですねえ」

アデイスはつるつるの綺麗なあごに触れる。いつもなら寝起きはヒゲが生えているのに、今日はまったく生えていない。それが生々しく現実を突き付けてくる。

「大人しくしているつもりですが」

「どこにもいかないの？」

「雪が降っているんですよ。寒いじゃないですか。止むとも限りませんし」

雪が嫌いなセーラを寒い中、歩かせるなどとてもないと気付いた。

「しかし憂鬱ですね。対策はしてありますが、森が雪景色になっていたらと思うと、今すぐ帰りたいぐらいですよ」

アデイスも空をにらみ付ける。もしも降り続けたら大変なことになるそうだ。

「……じゃあ、僕が送っていいこうか？」

屋敷の付近に彼らがいたのも、人目の付かない場所から飛び立つためだったのだ。わざわざ人に見られる危険を冒すよりも、その方がずっといい。

「送るって……出来るんですか、転移」

「できるよ。建物の中に入り込むなんてのは無理だけど、ひらけた場所になら出来る。ちょっと遠いけど、国内だったらまだ大丈夫。

前に行ったとき、立地の確認はしているからお兄様がいなくても往復できる」

「ここに戻る時は、どこに出るんですか？」

「僕の部屋の前にある庭。あそこは暗いし広いから。それにあそこなら突然現れても結界に反応しない」

城は結界が張り巡らされているが、庭までもすべて覆っているかと言えば、違うのだ。そこに窓から足で向かい、人目のない場所へ転移する。戻ってきたときも同じ場所に出て、足で窓から部屋に入れば誰にも気付かれない。

窓から入るのを見られても、寝付けなかったから散歩していたとも言えればいい。

「そうですね。ではお願いしましょうか。場所はどこまで移動しますか？」

「暗くなつた頃に街の外まで出ればいいと思うよ。いきなり消えた

りしなければいいんだし。僕は頃合いを見て転移するから」

「エリオットはただ送るだけで、一緒に外に出てはまずい。半引きこもりなので、外に出るだけで目立ってしまう。」

「分かりました。じゃあ、夕方にお願ひしますね」

「アデイスがいつものように微笑む。これが実は竜など、誰も思わない。思う方がどうにかしている。」

「エリオット君、重量制限とかありますか？」

「どうして？ セーラぐらいなら軽いよ」

「暖かい服とか毛糸とか布とかできれば小麦とか牛乳とか少し多めに欲しいです」

「セーラが真剣な表情で、現実的な物を欲しがる。」

「……………食べ物は今度、持って行ってあげるから」

「本当ですか？ 嬉しいですよ」

「セーラはとても可愛いのが、口を開けば神秘性が崩れる生活感を放っているのが、少しだけ惜しいと思った。」

アデイスは魔術師達のための食堂で朝食を食べた。食べると魔力が増えると言われている食材などもあり、魔術師には一見普通だが、特殊なメニューがある。牛乳を飲めば胸が大きくなるという俗説並に胡散臭いが、伝統なのだ。

その後、セーラがエリオットの部屋を見たいというので、複雑な胸の内を抱えながら皆を案内した。

他人を部屋に入れるなんて、女装を始めてから始めてのことだ。

しかも女の子を二人も。

「なんか想像と違います」

セーラの言葉にエリオットは首をかしげた。

けっこう広い部屋をもらっているが、身体を鍛える道具がたくさん置かれているので狭く感じる。

男の部屋としては、それほどおかしくないはずだ。

「この子は引きこもりですから、太らないように室内で運動出来る物を集めているのは有名ですよ。だから入れてもらえないんだと思っていました」

アデイスは鏡台に触れる。人形師と会うときは、いつもあれの前に座り化粧をする。

「色々ありますね」

「うん。お化粧はどうしても眼鏡を外してするから、あんまり使いこなせていないけど」

「ああ、だから化粧が濃くなるのか……」

アデイスがいくつもある紅を取り出す。

「そんなに濃い？」

「濃いというか、ケバイですね。すっぴんの方が可愛いですよ、お



前は」

先ほど、押し倒されたときのことを思い出し顔が熱くなる。

さらりと可愛いと言われて、嬉しかった。誰かに見破られるのが嫌で、化粧が薄いと怖かったから、ケバいという言葉は否定できなかった。

だから可愛いという言葉の方は嬉しい。

「そついえば、なぜあのようなオカマのような格好を？ 胸に詰めるとか、腰回りを誤魔化すとか、女らしくする方法はあったでしょう」

「んー……似合って男っぽくなければ別によかったし。あれぐらいの方が、僕とつながらないと思って」

怖いのはフレアがエリオットだとばれたときだ。アデイスさえ誤魔化せるのだから大丈夫だと思っていたら、気付いたのはセーラだった。

気付かれたことはショックだが、好きな子に気付いてもらえたのは少し嬉しい。

「エリオット、私は中途半端が嫌いです。どうせ女装するならきちりと女装しなさい」

完璧主義者のアデイスらしい発言だった。

「んん、でも今更方向性を変えようと思っても、どうしたらいいか……」

「まずは服装です。女物の服はどこに入ってるんですか」

「ここに」

クローゼットを開けて、しゃがみ込んでその奥の小さな扉を開く。

「クレアの衣装部屋に隠してるの」

「……………」

「下の方に入り口を作れば、服のおかげで出入りするところは見られないし」

「クレアの衣装部屋は、離れていませんか？」

「少しの距離ならどうにか歪められるよ。お兄様に手伝ってもらっ

たの」

エリオットは衣装部屋に這い出て、自分が勝手に服を置いている所まで行く。

「な、なにここ」

ハーティが目を丸くして周囲を見回している。

「こんなに服がいっぱいあるの初めて見た……」

「クレアの……」というか、ハーネスが作った部屋です。物を捨てられないタイプだったそうです。人間を捨てるのは躊躇いなかったようですかね」

アデイスは皮肉げに笑う。

育てたものを壊すのに躊躇いはなかったと、大人達はそれはもう恐ろしげに、しつこいほど語りたがるのだ。

肉体を奪い取られかけたクレアが記憶ごと取り込んだ、クレアとは似ても似つかない冷酷非道な男。

しかし、あのハロイドは彼のことが好きだと言っていた。クレアが何と言おうが、彼のことが好きだったと。だから彼らはアデイスを特別扱いしていた。

「兄さんは、やっぱりハーネスに憧れてあんなことしてたの？」

「なぜそう思うんです？」

「親子だから？」

アデイスが首をかしげた。

沈黙が落ちる。

まるで、寝耳に水のような

「え、まさか、知らずにあんなことしてたり、あんな術を身につけたりしてたの？」

問うと、彼は唇を痙攣させ、言葉を発しない。代わりに声を出したのはセーラだった。

「え、アデイスのお父さんって、ハーネスさんって人なんですか？」

「お兄さまが言ってたから間違いないよ。てっきり知ってるからだと思ってた」

「へえ。じゃあ捨て子じゃなかったんですね。でも、そんな父親だったらいろいろ……アデイス？」

固まっている彼の前でセーラが手を振る。背伸びをする後ろ姿がとても可愛い。

「人並みにシヨックを受けてるんですか？」

アデイスの服を引っ張るようにしがみつく。

「人並みって……セーラ、もう少し優しい言葉を……」

「立ち直りました？」

「まあ、少し驚いただけですから」

声一つ漏らさず立ちつくしたのが、少し。

エリオットは肩をすくめる。

「言わなかった方がよかったかな……」。

「ごめんなさい、兄さん」

「かまいません。父親とはいっても、どうせ彼の使い捨ての身体の一つに過ぎません。」

やたらとハーネスと比べられた理由がようやく理解できたので良しとします

修羅場をくぐっているだけ有り、既に落ち着いていた。エリオットがフレアだと知った時に比べて、取り乱した様子がない。

「父親が分かっているのなら……母親は？」

「クインシーの死んだ奥さんだって」

今は外交官だが、昔はハーネスの部下だった男だ。この前、聖都に行くために一緒に船に乗っていたからセーラも彼を知っている。

アデイスを特別可愛がるうちの一人だ。

「……………はあ？」

「兄さんはクインシーの息子として育てられる可能性もあったらしいよ」

「はああ？ な、なな、何を言って……クインシー……が？」

ハーネスが父親と言った時よりも動揺していた。

どうでもいいハーネスと、どうでもよくないクインシーの差だ。

「それはその……妻の浮気相手の息子って事ですか？」

「そう。ただ、クインシーも成行で従っていたとはいえ、ハーネスのことは嫌いじゃなかったみたいだね」

「よく分からない世代ですね」

ハーネスはこの国の悪魔であり、英雄でもあつた男だ。だから信者も多い。

ハーネスを直接知らないから、長く生きる彼の実の兄である人形師が、なぜハーネスに対して尊敬の念を持っているのか、本当の意味では理解できなかった。

エリオットは兄に、ハーネスの何に惹かれたのか分からないと告げたら、お前が兄と慕っている男の父親だと、教えてくれた。

「つまり、血は争えないってことですか？」

「セーラって、たまにきついことを言うよね」

「あ、いや、でも……そんなに偉くなつて長生きした人に似てたら、アデイスはもつと運がいい人になって、こんな所にいないかなあつて、思うんです」

そこだけは誰かに似てどうにかなるところではない。

しかし彼女の言っていることは少し間違っている。

ハーネスは竜の身体を得ることが出来るなら、その方がよかつたはずだ。彼は自分が死んだ後、自分の物が壊れるのを恐れていたのだから、アデイスのような身体になることは、望まない結果ではなかつた。

竜を狙わなかつたのは、リスクが高いからだ。自分が死んでは意味が無い。

「でも、ネコをかぶってるからいいものの、バレたら蛙の子は蛙とか言われる典型的なタイプですよね」

セーラはアデイスをひたと見つめて言った。アデイスは反論すら出来ずに視線を逸らす。

全然違つと思いつけてきたエリオットでさえ、昨日からそう思い始めてきたのだから、セーラがそう思うのも、アデイスが何も言え

ないのも、仕方の無いことだと思った。

「でも、ハーネスは男になったり女になったりするから、男女構わず気に入った相手には全部手を出すタイプだったらしいから、そういうところは違うよ」

「でもこの人、前に可愛ければ男でもいいって」

可愛いセーラの可愛い口から、とんでもない言葉が出てきた。

あまりにもものショックで、エリオットは手で顔を覆ってしゃがみ込んだ。

フレアだと知られている今はともかくとして、昔の、小さな頃の彼自身がどのように見られていたのかと想像し、顔が熱くなる。

「セーラ、言わなくてもいいことを……」

それに私には彼ほどこの国に対する執着はありませんし、育てた部下を簡単に切り捨てたりしません。

アデイスとして接してきた子供達とは、十年もしない内にお別れですが」

十年たってもまったく変わらないのはおかしい。クレアに気づかれれば、ややこしいことになる。クレアは身体を乗っ取ったアデイスを許しはしない。かといって竜の血を飲んだことにすると、アーネスが竜の血を飲んだことは、遅かれ早かれクレアの耳にも届くから、同一人物である疑いを持たれる可能性もある。クレアはなまじ知識が頭の中に眠っているので、下手に突けば藪蛇だ。

逆にアーネスだけに絞ることにすれば、竜がいることを組織の間が知っているため、どれだけ老けなくてもおかしいとは思われない。

それはつまり、この町にもう一人、置いて死なない手の付けられない魔術師が増えるだけ。人形師のようにさらって殺さないため、警戒されても敵対まではされない。

「でも、クレアさんもよくアデイスがたまにしか帰ってこないのを許してますよねえ。私だったら許しませんよ？」

「色々と言いつけてますから」

「どんな言い訳してるんですか？」

「まあ、色々」

アデイスはセーラを理由にしている。結婚までしたのは、そのためだ。そうでなければ、クインシー達という証人まで作って、人間社会だけでしか通用しない形骸的な儀式はしないはずだ。

「そういえばエリオット、秘密の通路はこれだけですか」

「うん、ここだけだよ。まだ小さな頃、お兄様が作ってくれた道だから。あとはもう自分で壁抜けして行けるし」

地下の隠し通路を見つけたのは、アデイスの知人だった。人形師が言うには、今まで彼以外には見つかったことがないらしい。しかし竜であると思えば、それも納得出来た。

逆に彼らも半悪魔は便利だと思っっているようで、皆に見られて恥ずかしくなり、話を逸らすことにした。

「でも、こんなにあると逆に迷いますねえ」

エリオットは、ふと自分の服を選ぶために来たのだと思い出す。寒いのかセーラが手近にあった毛皮のコートを着込み、膨大な数の服をあさる。

化の所は可愛らしい服を何枚か持ってきて、エリオットの身体にあてがい、内の一枚を着るといふ。

「僕が着るの？」

「きつと似合いますよ」

服の影で着替え、セーラに見せようとしたが彼女の姿が見えない。小さすぎて埋もれてしまっているのかと思ったとき、左側から服をかき分けて出てきた。

「エリオット君の部屋にあった、鏡とクシとか持ってきました」

エリオットは眼鏡を外して、部屋の隅にある椅子に座る。

大きな姿見があり、背後に誰かが立つ。よく見えないが、背の高さからして女の子ではない。

「兄さん？」

「んん、なかなか可愛い。変な化粧をしてなければ、可愛い服

も似合いますね」

「奇抜を狙うなら、可愛らしい方向でも意外といけるかもしれませ  
んね」

アデイスに髪をいじられ、それにセーラも加わり遊ばれる。

「つ、ツインテールにしたいですっ」

「いや、ここは清楚に三つ編みを」

「巻きましよう。縦巻ロール」

「それは時間がかかりますよ」

「でも、男の子が女装をするとき、あごのラインを隠すのは定石で  
す。まきまきすると女っぽくなつてぱつと見男には見えないですよ」  
「いやいや、この子の顔は元々女の子のような雰囲気だから、出し  
ても問題ありません。アップにしてもいけます」

二人は楽しんでいて、弄られているだけのエリオットは緊張した。  
顔も近いし、声も近い。

しばらくすると、二人は気が済んだらしくエリオットに眼鏡をか  
けるように促す。

服と髪型を変えたただだが、それだけでも女の子っぽい。

自分は綺麗で可愛らしい男だと知っていたが、服装と髪型だけ  
も、ずいぶん代わることを初めて知った。

「エリオット君、これも羽織ってください」

ベストを着ると、胸と腰が隠れますます女の子のようになった。

「これで可愛いお化粧したら、男の子なんて気付かれませんよ！」

「問題はそこでしょう。目が悪いから」

「この世界の鏡って、なんかぼやけてますから、余計にお化粧しに  
くそうですね」

セーラが持っている鏡はとても映りがいいのだ。

「繰り返し手で覚えるしかないのでは？ さすがに化粧までこん  
なところでやって、誰かに見られたら洒落になりませんが」

「まあ、でもこれはこれでこのままでも可愛いですし」

「そうですね。可愛ければいいですね」

二人は納得し合い、エリオットは複雑な心境だった。

「あの、これは可愛らしいけど、変装になってないような気が……」  
今まで黙っていたハーティが、もっともな意見を言った。

「それは後でいいんですよ。まずは女の子らしくなるところが大切なんです。慣れてきたら別人のような女の子になる練習をします」

本当にアデイスは変なところで完璧主義だ。

彼が熱心に何か始めると、日が暮れるまで続けるため、話を逸らした方がいい。

「ああ、そうだ。そういえばここ、布も大量にあるよ。セーラ、布好きみたいだからもらっていったら？」

エリオットは縛られた髪を元に戻しながら言った。髪をほどいてアデイスが不機嫌そうだが、このままではトイレにも行けない。

「布って、なんでそんなものまで」

「仕立てるためだよ。ただ、クレアはドレスとかあんまり好きじゃないから、ハーネスの頃に買った布が余ってるみたい。流行遅れになった布とかもあるから、持っていても構わないと思うよ。こっち」

セーラの子供のような手を引いて、布が置いてある方へと向かう。ここはダンスホールに出来るほどの広さがあつて、何か隠れていても見えないのだ。

布類は一番角の棚に並べてあり、毛糸類もあつて、たまにクレアや魔道師の女の子が編み物をしたり服を作っている。

「こんなにあるなら、寄付するか売ればいいのに」

「ハーネスの遺産なんて、どんな呪いがかかっているか分からないから、喜んで買い取る人はいないよ。寄付するにしても、イヤな物を押しつけるようなものだしね。」

あ、僕らはけっこう使ってるから、呪われる事なんて絶対はないよ」

フォローするまでもなく、セーラはまったく気にせず物色を始めた。



セーラは少し悩んで、暖かそうな布を控え目に裂いて胸に抱える。  
「それだけでいいの？」

「布はたくさんありますから。布よりも、ミルクと砂糖を持って帰っておやつを作りたいですし」

セーラは本気で嬉しそうに笑う。彼女には、物を贈るよりも食べ物の方が喜びそうだ。

アデイスがセーラらしいとくすくす笑っている。

セーラは可愛い。だから微笑ましい。

「そうだセーラ。今日は生クリームをもらわなくていいんですか？  
聞いておかないとなくなってしまうかも知れませんよ」

「あ、そうですね。今日帰れるんなら、あるかどうか聞いておかないと」

アデイスはセーラが羽織っていた毛皮のコートを受け取り、別の可愛いコートに羽織らせた。

「じゃあ、ハーティ、エリオットをよろしくお願いします。エリオットは人の多い厨房は嫌いでしょう？」

アデイスはセーラの肩を押すようにして、部屋の正規のドアから出て行く。

エリオットは人が行き交う厨房が特に苦手だった。大人数で押しかけては邪魔になる場所でもある。だからといって、ハーティと二人きりにする必要など……。

「兄さんは何を考えてるんだろう」

「長……アデイスはセーラと二人きりになりたかったのかも」

「それとは違うと思うよ。こんな人目の多いところで二人きりになるより、森の中で二人きりになった方がよっぽど邪魔が入らない。

兄さんは僕がセーラを好きなのは気付いてると思うから、ひよつとしたら君と僕を仲良くさせたかったのかも知れないね」

「へ？」

意味が理解できないらしく、ハーティは口を開けて間抜け面をしてエリオットを見上げた。

セーラを好いているエリオットに、アデイスを好いているハーティ。

心のどこかで邪魔だと思われても仕方がない。

しかし嫌っているわけではないから、邪険にするつもりもないだろう。

「君の考えたことの逆だよ」

「あ……そうか」

ハーティは落ち込んだ。好きな相手に誰かをあてがわれるなど、悔しいのもあるが、それよりも虚しくて気が滅入る。

「嫌われたわけではないよ。兄さんはそれだけセーラの事が好きなだけで」

二人とも好きだから、複雑な気持ちだ。

セーラも好きだが、アデイスも好きだ。

二人とも、人間よりもずっと長生きすると知って、もっと好きになった。好きになってもいい相手だと分かって、歯止めしなくなってきた。

「お兄様みたいに人形集めする必要がなくなる相手って意味では、君も当てはまるみたいだからね」

彼女も竜だという。

だから仲良くするのは構わない。早く死んでしまわないから、ずっと友達でいられる。いい子のようにだし、努力家でもあるし、可愛いらしい。

しかし、それとこれとは別だ。

アデイスとセーラを並べることが出来ても、彼女を並べることが出来ない。

「やっぱり、こういうのは自分がやられるとイヤだから、人にもやっちゃだめだね」

「私もそう思う。ごめんなさい」

腹は立つが、人をいつまでも子供だとまだ思っている証拠だ。

「でもエリオットさん、ちょっと嬉しそうに見えるんですけど」

「そう?」

他の誰かならともかく、幼い方が好きなアデイスなら、子供だと  
思われている方がいい。

子供扱いされているうちは、可愛がってもらえる。

本当に男でもいいなら、なおさらだ。

これからはいつでも会いに行ける。

部屋に引きこもるふりをして、部屋から転移すればいい。

本当に、いつでも会いに行ける。

### 13話 森の一日

爽やかな朝だ。

動物達が活発に動き、襲ってきたので痺れさせ、爽やかな朝の爽やかな散歩を楽しむ。

バスケットをのぞき込み、美味しそうな朝食に満足して笑みを浮かべる。

「たまには自然の中もいいものねえ」

都会と違って人はいないし、変な人もいないし、安心して歩く事が出来る。それでもこんな場所に引きこもらないのは、そんなことをしたら寂しくてたまらなくなるからだ。

綺麗な湖から離れ、ゆつたりと歩く。

「まだ寝ているかしら？」

まだ周囲は薄暗い。仕事があるわけではない彼らは、きつとまだ寝ている。

だから、こっそり入って、驚かせてやろう。

「うん、そうしましょう」

きつと二人の寝顔は可愛らしいから。

朝、気がつけばフレアが竜のアデイスにしがみついていた。

「可愛い！ 可愛い！ 可愛いっつー！」

寝ていると思って眼鏡をかけていたはいいが、アデイスのあまりにも可愛らしさに我を忘れてしがみついている。そんな図だ。

人間相手ではないからよけいに大胆になっている。

聖良は迷い、普通に接する事にした。

「おはようございます」

「おはよう、セーラ」

目を逸らしつつ、眼鏡を外すフレア。女装しているからフレアだ。壁側で寝ているアデイスに壁側からのし掛かっているから、壁抜けして侵入したと分かる。

「あの、土足ですけど」

「あら、ごめんなさい」

彼はアデイスから離れてベッドから下りる。

「うち、家の中は土足禁止です」

「え、そうなの？」

「土足だとすぐに汚れますから。床は拭き掃除してるからキレイですよ」

彼は素直に靴を脱いだ。温かそうな靴下を穿いている。

「で、何してるんですか？」

「ちよつと寝顔を見に来たの。そうしたら兄さんとセーラが可愛くって。ちつさな竜と、さらにちつさなセーラが、寄り添って寝てるから！」

興奮して拳を作り力説する。彼女は竜を欲しがっていたし、ロヴァンを一番始めに飼っていた。つまり、適度に大きくて可愛い生き物が好きなのだ。

そのロヴァンが声を聞きつけて部屋に入ってくる。最近はずいから、家の中で眠る。昼間は好きなように狩りをして、獲物を自慢するように分けてくれる。

野生の動物のせいとか、遠吠えや威嚇する時以外は鳴かないのでも静かな子で可愛い。

「フレアさん、ロヴァンが来ましたよ。フレアさんのこと覚えてたんですね」

「えっ、やだ、本当！ おいでっ」

フレアが手を伸ばすと、ロヴァンはベッドの前でちょこんと座る。

「お行儀がいいわね」

「アデイスの方が上だから、ベッドに乗らないんですよ。動物の本能ってやつですね」

「なるほど。いい子ね！」

フレアはロヴァンにもしがみつき、騒がしさで起きてきたミラに気付いて大人しくなる。

ミラは部外者が悪意を持って玄関や窓から侵入したら殺しに来たが、フレアが壁を抜けていきなりアデイスに抱きつきに行ったから無事だった。

玄関から入らなくてよかったね、などと言える家でいいのだろうかと、いつまでも居候する三人を思いたため息をつく。

「朝から何をしている」

「遊びに来たようです」

「いい匂い」

ミラはくんくと匂いを嗅ぐ。

フレアはベッドの上に置いていた荷物をそつと持ち上げ、聖良に渡した。お菓子屋さんで見た包みと、いい匂いのお重のような物がバケットに入っていた。

「朝食にと思って、美味しそうなのを買ってきたの。お菓子はセラが好きだと思って」

ミラが聖良に渡されたお菓子の包みを奪い取るようにして持ち上げ、包みを開けて嬉しそうに見つめた。

「それはおやつに食べましょうね」

「うん」

よっほど嬉しいのか、ミラが包みを抱えて部屋を出て行く。

そして二人でまだ寝ているアデイスを見た。

「よく起きないわね。兄さんはけっこう寝起きはよかったのに。やっぱり身体が違つと生活習慣も変わっちゃうんだ……」

フレアが寂しそうにするので、聖良はいつものようにアデイスを起こすことにした。ここまでされて起きないとは、さすがはネルフイアの息子。前はまだ緊張感があったから起きたけど、今はすっかりだらけきって起きない。だから仕方がない。

「ちよっ、セーラ!? 何その石！」

「これで叩き起こすんです」

まだ少し早い。客が来たのだから起こすべきだと、持ち上げた石斧を振り下ろす。

一撃では起きない。何度か繰り返すと、もぞもぞ動いて目を覚ます。

「痛いです」

「おはようございます。お客さんです」

聖良はフレアを指した。アデイスは寝ぼけ眼で彼を見ると何度か尻尾を動かして起き上がる。

「兄さん、平気なの？」

「いつもの事です」

心配するフレアと、軽く受け流すアデイス。

「それよりもどうしてこんな朝早くに？」

「今日はお休みの日だから」

「いつも自由に休んでいるくせに……」

好き勝手してもクビにならない人材だからこそだ。これで無能だったら、まず今の仕事はない。十七にもなった何もしない男をそのまま囲っておく国などないと信じている。

「セーラ、お願いします」

「はいはい」

アデイスは毛布の下に潜り込み、頭を出してじっとする。そこに頭蓋骨をのせて呪文を唱えれば、可愛かった竜が、ただの男に成り下がる。

「どうして化けるの？ 可愛かったのに！」

「うるさい。生活するにはあの格好は不便なんですよ。着替えるから出て行きなさい」

聖良はフレアの背を押して部屋を出た。寝起きのアデイスはいつもよりも少しだけ機嫌が悪い。

やはり叩き起こすのがよくないのだろうか。

聖良が朝食の片付けを終え、昨夜朝食用に仕込んでおいたパンを、  
昼食にしようとバスケットに詰め込んでいた時だ。

「兄さん、ご飯も食べたし、竜の姿で遊ぼう?」

女言葉で何度も失敗したので、最終手段、可愛い弟の顔でおねだりするフレア。

単純な作戦ほど、アデイスにはよく効く。可愛いものに目がない彼は、弟のおねだりには弱い。弱すぎる。

「どうして竜の姿なんですか」

「だって可愛いもの。それに、私も背中に乗ってみたい! 飛んでみたい!」

「どうせ自分で飛べるでしょう」

「あんまり飛べないの。壁抜けとか転移は出来るけど、飛ぶのは少し苦手なの」

ハノは転移が苦手だが、空を飛ぶのは得意だ。だから転移も出来る彼は、空を飛ぶぐらい簡単だと思っていた。

人間の姿をしたアデイスは嫌そうに腕を組む。

竜の姿ばかり可愛がられるのが、彼はあまり好きではない。

「いいじゃないですか。背中ぐらい乗せてあげれば」

「また元に戻るのに、セーラの邪魔をしてお願いですよ。嫌そうな顔をされて、私は落ち込まなくてはならないんです」

「ご飯作ってる時に言うからです」

便利な器具があまりないから、料理一つでも大変だ。火は簡単に熾せるが、調節は難しい。ガスコンロでは出来たチヨ口火など不可能である。

「飛びたかったら、頭蓋骨を貸すから自分で飛びなさい」

アデイスは帽子掛けに刺さっているミリアの頭蓋骨を指す。万が一の時の聖良用なのだが、他人が使って怒るのはトロアくらいだ。

彼は今、実家に帰っているのだれも何も言わない。



フレアは頭蓋骨を見て一瞬だけ驚いたが、すぐに気を取り直して手を叩いた。

「面白そう!」

フレアは喜んで飾られる頭蓋骨を手にした。

「でも、飛ぶのには練習がいりますよ」

「いいじゃない。時間はたくさんあるもの。人形を作って話し相手にし出すぐらいには」

「それもそうですね。無趣味とか悪趣味はよくありません」

アデイスにも趣味を持たせないと、そのうち幼い少女を誘惑しに町に繰り出すのではないかと不安になる。

今はのほほんとストーブの前で寝ころんだり、魔術の研究をしているアデイスだが、魔術に飽きたらどうなるか。

だから同志はいた方がいい。フレアはそれが可能である。

些細なことできくしゃくした関係のままでもいいさせるのはよくない事だ。

「アデイスが教えてあげればいいんですよ」

「こういうことは自分で覚えるものです。私だって一人で覚えまして」

「私も一緒にいますから」

「なら……」

アデイスは渋々と立ち上がり、伸びをして服を脱ぎながら部屋に戻る。

「でも、あれって裸よね? なんだか寒そうだわ」

「いえ、竜の姿の方が寒くないんだそうです」

聖良が言うと、フレアは目を見開いた。

「ええっ!? あんな冬眠しそうな外観なのに!」

「そうじゃなかったら、寒い山の上でなんて暮らせませんよ」

聖良も驚いた事だ。冬になって冬眠されたら嫌だなと、密かに思っていたのだ。夏は夏で火を吐かなければそれほど暑くないとラゼスが言っていた。

アデイスが言うには、魔力が無駄にあるから無意識に体温調節に使っているのでは、と。

必要な事だけは高度な技術も身につける、腹の立つ種族だと彼は言っていた。今は彼も竜なのに。

アデイスが竜の姿で出てくると、フレアが飛び上がって喜んだ。

「動くとますます可愛い！」

「眼鏡もかけないで何を言っているんですか」

その言葉に、彼は眼鏡を掛ける。じっと見つめ、すぐに外す。

「やっぱり可愛かった！」

確認したらそれでいいようだ。

彼は浮かれた調子で外に行こうとしたので、アデイスが止めた。

「服を脱ぎなさい」

「ええっ！？　ここから！？」

「竜に化けてみたいのでしょうか。服が破れますよ。毛布でも羽織つてきなさい」

彼は納得して寝室で服を脱いで戻ってきた。外に出ると、フレアの頭に頭蓋骨を乗せて、聖良は呪文を唱える。

アデイスよりも一回り大きな竜に化けさせると、聖良はその姿をよくよく観察する。

「うん、可愛いです」

いつもは自分になるからなかなか実感湧かないが、ミアはとても可愛らしい竜だ。

「セーラ、ずるい、私も」

ミアがアーネスの頭蓋骨を持って聖良の髪を引っ張った。それを見てアデイスがぴゅっとうめく。

「ミアさんはダメです。セーラを見てるだけならともかく、掛けたら下手すれば覚えるでしょう。それだけはダメです。絶対に」

ミアは新しく作り出すのは苦手だが、覚えの速さと応用力が高く、それが彼女を殲滅の悪魔たらしめる。

アデイスが警戒するのも無理はない。

「どうしてダメ？」

ミラが不服そうにアデイスを睨み上げる。

「く……クレアが死……老衰するまでは。何が何でもダメです」

途中で老衰と言い直したのは、彼がクレアを好いている証拠だ。

ミラ相手だからこそ。

「いつ死ぬ？」

「さあ。まだ五十年は生きるでしょうね」

「五十年か。ウルはあっという間だと言っていた」

ミラが嬉しそうに言う。

彼女だから仕方がない。三つ子の魂百までというように、幼少期に形成された根本的な性格はまず治らない。

アデイスが目を逸らしてこそそと湖の方へと歩き出す。

アデイスは今、この人達はいつまでいるのだろう、と思っている。恐いし不愉快ではないのでそんな事は言わないが、たまに不思議そうに見るのだ。聖良もそう思うのだから、彼が思わないはずがない。食事の準備が大変だというのが聖良の本音だが、手伝ってくれるので良しとしている。

竜の姿をしたフレアは、まず普通に動き回る練習をした。

人間の感覚が抜けないと、飛ぶどころか普通に動く事すらままならない。

竜としては一番経験の多いハーティは、人の姿で不思議そうにその様子を見ていた。

「アデイス様、飛ぶ練習じゃ？」

「だいたい、一日はこれをやらないと危ないですからね」

「一日も？」

声を上げたのはフレアだった。

「気長にやるんでしょう？ セーラは気長にやりましたよ。ご近所

をお散歩したり」

「ロヴァンみたいな子はたくさんいるかしら？」

「いますが、寄ってきません。竜は魔物の頂点ですからね」

フレアは不服そうに尻尾を動かす。

やはり、あれは自然に動いてしまうのだ。

「フレアさん可愛い」

「え、可愛い？」

「可愛いです」

「自分じゃ自分が見られないわっ」

彼は尻尾を動かして悔しがる。可愛すぎるので思わず撫でると、フレアがアデイスのように眼を細めて擦り寄ってくる。

さすがは兄弟。

「そういえば、ハーティもこの近所しか散歩なんてした事がありませんでしたね。今日はあのエルフ達の家ぐらいまで行ってみますか？」

「そうですね。寒くなってから、あまり見てませんし、元気なのか気になります」

アルティーサが天然過ぎて少し心配だ。その分二人の子供達がつかりしているが、心配だ。彼女の魔法の腕前はかなりのものだが、心配だ。人間の使うような学問でもある魔法と違い、彼らの使うのは竜が火を吐くのに近い、考え無しで行える技だ。だから聖良の一人歩きよりはよほど心配ないはずなのだが、心配でならない。

「じゃあ決まりですね。ミラさん達はどうします？」

「行く。あのエルフの薬、好き」

珍しく彼女が他人を認めている。彼女が竜の里に来たのも、薬のためだった。彼女が認めるのは、鍛冶屋と武器屋と菓子屋と薬屋まで判明。服屋が一番どうでもいいだろう。着られればいい。それでも、一緒に買い物したから少しは興味を持つようになった。素晴らしい進歩だ。このまま女に目覚めて、オシヤレで今時な簡単に殺さない女の子になってくれればいいのだが……無理だ。

ミラが行くのでユイ達が行かないはずもなく、皆はぞろぞろと歩き出す。ハーティが並んで歩く竜二人をじっと見つめていたから、竜の姿になつたらどうだと言ってみたが、彼女は顔を赤くして首を横に振った。年頃の女の子は扱いが難しい。

「この周辺で迷つたら、木に登ればあの崖が見えるから分かりやすいですよ。出っ張っているように見える部分には、前に来たうちの巣があります。下からじゃ少し分かりにくい位置にあります」

その辺りの事はちゃんと考えたらしい。子供を守るのは母親の勤めだ。

足場の悪い森を進んで行くと、茂みの中から『へくしゅ』とくしゅやみが聞こえた。皆は一斉に立ち止まり、代表してハノが茂みを覗いた。

「アルティーサさんじゃないですか」

聖良は目を丸くした。そんなところで、彼女が一人でいるなど考えられない。あの兄妹がほっとくはずがない。

「ああ、ハノさん。ごきげんよう」

「これからうかがおうと思つていたんですよ」

彼女はカゴを片手に立ち上がる。薬草を探していたらしく、綺麗な顔が土で汚れていた。

フレアがすごい美人だとはしゃいでいる。さすがにそういうところは『男の子』だ。

「こんな時期に薬草生えてるんですね」

「ええ。ちよつとあの子達、熱があつてえ」

熱がある。

あの二人に熱がある。

アルティーサを一人でほっとくほど熱がある。

つまり重病。

「大変じゃないですか。あそこ、寒いでしょ!？」

「うーん。ちよつと寒いかも知れないわねえ」

ストーブもないのだ。彼らは寒い地域の生まれで、これぐらい平

気だと言っていたが、熱があるならいいはずがない。

「と、とりあえず様子を見て、やばそうだったらうちに連れていきましょう？　うちにはストローブがありますし、熱がある時は温かくしないと危ないです。悪化して肺炎とか、大変ですよ」

「そうねえ。温かい部屋があつたら、治りもはやいかも？」

彼女の言葉はまつたりしているが、わざわざ一人でこんな所まで薬草を探しに来た事から、本気で心配しているのは伝わってくる。

その行動に、あの二人から生きた心地を奪うのだと、彼女は気付いていないが。

「ごめんなさいねえ、心配をおかけして」

「いつも心配させているのは私達の方ですから」

アルティーサがもう一人増えたような気分だとすら言われるほどに。

お裾分けももらうし、こういう時は助け合いが大切である。

綺麗な兄妹をベッドに寝かせたフレアは、その顔を覗き込む。かなり熱が高そうで、苦しそうに眠っている。

本当に綺麗な男の子と綺麗な女の子。

背負って帰ったり、空を飛んで帰るよりはと、フレアが変身をして近所まで連れて轉移したのだ。着替えはセーラが運んでくれたので、裸でうるついたわけではない。

看護のために、セーラとアルティーサ。あと運ぶためにアデイスも轉移で連れてきた。他の四人は悪いが自分の足で帰ってもらう事になった。あまり大人数では轉移しにくいからだ。

「フレアさん、二人にこの濡れ布巾を額に乗せてあげてください。氷のうがあればいいんですが、浮かせておくやつないですもんね」

セーラはストローブで部屋を暖め布と水桶を準備すると、すぐに湯を沸かし出した。アルティーサが薬を作るためだ。

「セーラ、私は何をしましょうか」

アデイスが退屈なのか聖良に指示を仰ぐ。

「えと……じゃあ、今夜は上で寝てください。アデイスが寝るところがありません。最近上で暮らしてないから、ちゃんと整えた方が良いでしょう」

アデイスは小さく頂垂れ、セーラに言われるがまま、しぶしぶと家を出て行く。彼は幼い少年が熱にうなされているのに、邪魔だと言われた程度で怒る小さな男ではない。

先ほど見たエルフ達の寢床に比べれば、この家の環境はずいぶんといい。もちろん、都会の家ほどではないが、魔物が跋扈する森の奥と思えば、天国のような場所だ。その場所を二人が治るまで譲るのは、やぶさかではないはずだ。

フレアは水の中に氷を作り、よく冷えた布を額に置いてやる。冷たかったからか、妹だという女性が目を開けた。

「大丈夫？」

「うん」

「寒くない？」

「うん？」

彼女は身動きし、身を丸める。するとつるりとしていた肌にわさわさと毛が生え、獣の姿になった。

「え？ ええっ!？」

眼鏡を掛ける。

見間違いではない。

「どうしたん……ああ、リーザさんは獣人とのハーフなんだそうです。可愛いでしょう」

「すっごく可愛いわ。可愛いわ。でも、どうやって乗せればいいのか？」

彼女が動いてずり落ちた布。

「リーザさんはアルテ君よりは丈夫ですから、温かくしてれば大丈夫だと思いますよ。私も犬の看病の仕方は分かりません」

「そうよねえ」

犬の看病、まさにそれだ。さらりと迷い無く犬と言い切ってしまうセーラが可愛い。

しかしリーザは本当に可愛い。元気に走り回る姿はさぞ可愛らしいに違いないと、想像して身が震える。

「あ、みんな帰ってきましたね」

羽ばたきの音が聞こえ、セーラが窓を少し開けて確認した。

綺麗な少し赤っぽい竜が見えたので、フレアはアルテの額に濡らした布を置いて家の外へと走った。外履きのサンダルを足に引っかけ、竜の姿をしたハーティを見上げる。

「可愛い！ ハーティ、ハーティよね！？ 可愛いわ！ すっごく可愛い！」

彼女は複雑そうに顔を歪めた。

竜に竜の姿を褒めたのに、あんな表情をされるのは心外だ。アデイスが好きで、人のようになりたいと思っているにしても、彼女は竜である。

彼女の背からミラ達が下りると、セーラが玄関から顔を出した。

「ハーティ、せっかくだからフレアさんを背中に乗せてあげてくださいませんか？ アデイスはなんか割り切れてないっばいですから。」

楽しそうに遊んでいる二人の姿を見たら、寂しがり屋だから混ぜて欲しがりますよ？」

彼女の言うとおりだ。

少し拗ねていても、ほつといて遊んでいるとすぐに機嫌を直して混ざりたがるタイプだ。彼は一人では生きていけない、賑やかなのが好きな男だから。

「ハーティ、乗せて！」

「まあ……断る理由もないけど」

「ハーティ大好きっ」

「人の姿の時と、態度が……」

「可愛いもの！ 綺麗だし」



彼女はため息をついて身をかがめる。

「お昼ご飯までには帰ってきてくださいね。で、出来ればアデイスが不必要に帰ってこないようにしてくださいね。ほっとくと寂しがるんですよ」

まるで鬱陶しいから面倒を見ていても言いたげで、少しだけ彼に同情した。

家の中に戻るセララに手を振り、ハーティはため息をつく。

「ハーティ、ため息ばかりついていると可愛くないわよ」

「それはほつといて……」

「せつかく可愛いのに」

「この姿で言われてもあまり嬉しくない」

「人の姿の時も可愛いわよ？ 女の子は何もしなくても可愛くていいわね」

彼女は再びため息をついてから、空に飛び上がった。

森の中というのも、存外騒がしくて面白い。

1

聖良はいつものように釣りをしながら、編み物をしていた。

隣ではよほど退屈なのか、ハーティどころか、ユイとハノも編み物をしている。本来なら寒いはずだが、ミラが一定範囲を温かくする魔法を使っているため、山おろしも恐くない。

聖良は今、自分の靴下を編んでいる。もちろん編み物の本を読みながらだ。さすがに何も見ずにさくさく編めるのは模様無しのマフラーだけだ。書いてある事はあまり分からないが、編み図の意味を覚えれば関係ない。

ミラはそれをじっと見ているだけで、自分でする気はないようだった。

「よし、出来た」

聖良の足は小さいから、男性二人に比べると簡単だ。ハーティは細かい事が苦手らしく、その二人よりもさらに苦戦している。大ざっぱな性格になりがちな竜なので仕方がない。

「これで寝る時も暖かいです」

聖良は冷え性なので、寝る時、足の冷えが辛い。アデイスは温かく無いどころか、聖良の熱を奪っていく。

「次はミラさんのも作りますね」

彼女が無言で頷いた時、ばしゃんと湖の中にフレアが落ちた。竜になつて飛行練習をしていたのだが、まだ完全には飛べないでいる。少しだけ水しぶきが飛んできたが、被害はない。

「だいじょーぶですかあ？」

声を掛けると、フレアは可愛らしく泳いで岸に向かう。竜の犬かきはとても可愛い。岸にたどり着くと、ぷるぷると身を震わせて水を飛ばし、掛かったアデイスが文句を言う。

その様子を見て聖良は呟いた。



そして茫然としているフレア。

近くにいたから、間違えられてアデイスが抱きしめられているのだ。

「トロアさん！ 力抜いてください！」

前ほどの力はこもっていないようだが、アデイスはじたばたするのをやめてしまった。

「落ちたから！ 落ちたから！」

聖良が駆け寄って止めると、彼はきよとんとして聖良を見る。そしてフレアを見る。

「あ、間違えた」

「私にそんな事するつもりだったんですか！？」

アデイスはぐったりと倒れたかと思うと、すぐに起きた。せいぜいと荒い息をついて、死ぬかと思ったと呟く。

「セーラが二人？ このミリアは誰だ？」

「それはフレアさんです」

「なんでセーラじゃないんだ！？」

「もしもの時のためです！」

「そうか。もしもの時のためか。なるほど」

トロアは納得する。彼目のに聖良がどのように見えるのかが知れた。

「兄さん、平気？」

「な、なんとか」

フレアが心配して顔を覗き込むと、アデイスは背中をさすりながら立ち上がり、トロアを睨み付けた。

「セーラだったらどうするんですっ！」

「いや、ごめんごめん」

「ごめんですんだら、セーラはトロアさんに対して怯えてませんよ。また逃げられるようになりたいんですか！？」

「う……っい」

妹の事となると見境がなくなるのは相変わらずだ。

あそこに聖良がいたら、被害を受けていたのは聖良である。そう考えると、背筋が凍る。

「この二人はともかく、セーラはこんな所で何をしてたんだ？」

「え……編み物です」

「編み物？」

「毛糸で靴下を作っていました。トロアさんは何しに突撃してきたんですか？」

「家の方に誰もいなかったから、探したんだ」

彼はいつもアデイスがするように尻尾を振る。浮かれている時、彼らはぺしぺしと尻尾を輪を描くように上下に振るのだ。

「反省してください」

「……もうしない」

嘘だ、と聖良は直感する。もちろん彼に嘘をつくつもりはない。

しかし彼はミリアの姿を見ると理解がどこかに行ってしまうのだ。

ミリアの格好は、万が一の時以外にしないと心に決めた。

「で、アデイス達はミリアで何を遊んでたんだ？ あんまり感心しないぞ」

「飛ぶ練習をしてたんです」

「そっか。セーラがやると、また変な事が起こるからな」

そんなつもりはないし、もう飛べるようになっていたのだが、頷いておく事にした。

「で、結局何をしに来たんです？ しばらく来ないみたいなお事言ってますでした？」

雪が降ってきたら、一冬は大人しくしていると彼は言った。さすがに竜も雪山を飛ぶのはキツイらしい。

「いやな、なんかあつちからこつちの方に変なのが飛んできてるらしいんだ。セーラ達についてないから、変な事に巻き込まれないように注意しておこうと思って」

変な物が飛んでくるとは、的を射ない言葉だ。彼が変というからには、よほど変なのだ。

円盤形の未確認飛行物体が聖良の脳裏をよぎり、薄ら笑った。

あつちと指さした方角は聖都のある大陸内部の方角ではなく、海のある方角だ。この国は大陸の端にある半島だ。海から飛んでくる物となると、かなりの距離を飛んでいる事になる。

「あちらは、ランドア大陸の方ですね。確かまっすぐ行くと竜がいる島があると聞いています」

「アデイスは本当に物知りだなあ。そつから一人知らせに飛んできたんだ。飛んでる変なのは竜の翼よりもずいぶん遅いから、到着するのは明日だろうつて。だから町には行かない方がいいぞ」

皆は顔を合わせる。

トロアは運悪く聖良達が町に行き、巻き込まれるのを危惧したのだ。フレアが遊びに来ているので、何かの流れで町に行く事になっていた可能性は、否定できない。

「で、その変なのとはどんな物なんですか？」

トロアは首をかしげ、手で楕円を作る。

「こんななんだつて」

アデイス達は首をかしげるが、聖良はそれを見てぴんと来た。

この世界の文明レベルで、飛行が可能なその形。

「飛行船かもしれませんね」

「なんだ、それ」

「空気よりも軽い気体を大きな風船に入れて空を飛ぶ乗り物です」

皆は首をかしげる。

「軽い気体？」

元の世界では軽い気体というものがあることだけは、子供でも理解できる事だ。それを証明する方法など、聖良は知らない。

「空気には重さがあるんですよ。なんていうか、気体は目に見えないけど、重さがあるんです。」

どう説明していいのか分からないから、知りたければ後でじっくり教えますけど、その中でも軽い気体を集めるんです。

ほら、水の中でも軽いと浮くでしょう。空気の中でも軽いと浮く

んです。とにかく浮くんです」

「浮く物だという認識さえあればそれでいいのだ。」

「空気で空を飛ぶのか？」

「そうですね、ミラさん。他には熱を使った熱気球とかありますけど、形が明らかに飛行船なんです。空飛ぶ楕円型の風船につり下がった船を思い浮かべれば、それほど的外れじゃないと思います」

「理解しているのかしていないのか、聖良が地面に描いた落書きを見て困惑している。」

「そんな気体があるとして、どこにそんなものがあるんですか？」

「普通はヘリウムですけど、ガスって使います？」

「ガス？」

「地面の中にある、燃えたり臭ったり毒があつたりする気体です」  
ガスの存在は知っているらしく、皆ああ、ああと納得し合う。

「元の世界では古くから知られていて、軍事利用もされていたから、この世界でも似たような事に使われているはずだ。」

「そういう物の中に含まれていたりするんです。取り出せる技術があればの話ですけど」

「どうやって取り出すんですか？」

「セーラは首をかしげた。」

「アデイス、空を飛ぶ魔術があると知っているのと、それを身につけている事にどれだけ大きな差があるか分かりますか？」

「一介の女子高生が、ヘリウムの存在と利用価値はともかく、扱い方など知るはずがない。せいぜい、吸うと声が変わる、酸素ボンベにも入れられるとか、その程度の知識しかない。」

「まあ、空飛ぶ大きな物体は、怖がるような物ではないってことですよ。軍事利用でもしなければ」

沈黙が落ちる。

それが問題なのかと聖良は気付いて、微笑んで見せた。

「とはいっても、重いと飛べませんから、人もそれほど乗せられませんが、せいぜい金持ち用の移動手段とか、宣伝とか、偵察用です」

よ。落とすだけで爆発するような兵器なんてないでしょうから大丈夫です」

「なるほど」

「……ないといいですね」

人に対して圧倒的な兵器があると、戦争は大きくなる。もっと世界は動いているはずだ。

「どっちなんですか？」

「可能だということです。それに、その大陸の事情は全く知りませんし、グリーディアには戦争とかの噂も入って来ないですし」

テレビもネットもない世界では、他の国の情報など、簡単には入らない。

「まあ、大きな争いはないようですね」

国仕えをしながら結社のボスをしているアデイスが言う。彼が知らないのだから、簡単に知れるような革命は起こっていないのだ。

「じゃあいきなり他の大陸を襲う可能性はないでしょうから、可能性はないと思いますよ。少なくともいきなりグリーディアには来ないでしょう」

グリーディアは鎖国に近い状態だ。しかも交通の要地にあるわけでもないし、資源が特別豊かなわけでもない。

「神子の間ではなんの噂もありませんよ。世界中どこにでもいる存在ですから、その手の話だけはあつという間に回ってきます。とくに私達は居場所の確認ついでに情報をもらっています」

ハノは微笑み、話しながらも手は靴下を編んでいた。彼はとても器用な男性なのだ。聖良よりも器用に編み物をする、器用な男性。

「わざわざこの国に向かって来るのも、聖都に向かう途中でただ通りすぎるだけって可能性もあります。失礼ですが、この国はよく分からない不気味な国という印象が強いですからね」

こんな無茶苦茶なファンタジー世界の中でも浮いているのだから、魔術というのは面白い。

「で、その飛行船が来た方にある国って、どんな国なんですか？」



「がめつい商人の国」

「じゃあ、あるとしたら売り込みと技術目当てですねえ。戦争があるとしたらその後です。というか、戦争を煽るんじゃないですか？ 軍用品を売るのが一番金になりますからね」

戦争があると景気が良くなると言われるほどだ。がめつくなくてもそれぐらいやるのが商人である。

「じゃあクレアに言った方が良いのかしら？」

「どう説明するんですか？」

「セーラ、説明してよ」

「私はなんでそんな事を知っているのかって言われますよ？」

この程度の事でも、機密扱いの可能性だってある。

下手な事は漏らせない。

「当面の間は様子を見るしか無いんじゃないですか？ 何をしようとしているかも分かりませんし」

「そうねえ。戻ったらちよつと様子を見てみるわ」

フレアは少しだけ不意そうに言う。見るならエリオットとしてであり、眼鏡有りであり動き回りたくないのだ。

「あ、フレアさんもあんまり運が良い方じゃないから気をつけてくださいね」

「どういう意味？」

「爆発するかもしれないから火気厳禁です」

「は？」

「いや、入手しやすい気体を使ったら、爆発したって聞いた事があります」

「どうしてそんな危険なことするの！？」

「よっぽど運が悪くなければ爆発しませんし、空を飛ぶのにまったくリスク無しなんてありえませんかよ」

「そ、そうね」

魔術文化があり、それを利用した道具もある。神殿が魔法の元になる魔術を育たないようになっているとはいえ、そういった力の存在

がある」と知っているからこそ、科学に向かなかつたと聖良は思っていた。

彼女のいた世界は、魔物もいなければ、魔法なんて物は迷信ではないから、錬金術師達は危ない実験を繰り返し、聖良の知る技術へと繋がるものを発明した。だが、考え方を変えれば、別の答えが出てくる。そんな科学者達の当たり前の好奇心も神殿が潰してしまっている可能性が高いのだ。錬金術師達も異端との戦いだったが、王侯貴族のパトロンがいた。

金と時間の掛かる研究を行いやすい環境の差というのは、グリーディアとその他の国にも出ている。

それでも魔術は他国にもあるのだから、育ちにくい環境である可能性が高いだけで、科学技術が他国に無いとは言い切れない。

問題はどこまで育っているかだ。

素晴らしいな技術は軍用にされ、強力な兵器があれば人はそれを使って戦争をしたがるものだ。お互いに同じ程の力があると分かっていたら、そうそう戦争にはならないが、完全に下であると分かっていたら、力を振るいたくなるものだ。この国に来たなら、それを確かめる意味があるかもしれない。それも簡単にはいかないだろう。この世界には悪魔や竜、それを操る神子がいるのだ。竜など、どれほどの破壊兵器を用意しなければならぬかを考えると、聖良程度では分からない。

大人の竜は、ミサイルの一発程度では死にそうもない。

悪魔なら、勝手に世界を壊し始めたら怒るか、面白がるかして介入したがる。

そして人間は超越した存在である彼らを恐れている。

何も行動を起こしていなかった今の時点では、彼らのようなバケモノを相手に出来る兵器など出来ていない。悪魔を恐れてこの国に関する干渉は彼らも避ける。だから悪さはされないだろう。

もちろん聖良の想像でしかないが。

「でもやっぱり恐いわねえ。兄さん達もちょっと見に来てよ」

「いや、俺は止めに来ただけだ……」

トロアがおろおろしながら聖良を後ろ手に庇う。しかし、ミリアの姿をしたフレアに見つめられ、少し折れそうになっていた。

そんな中、いつもマイペースなミラがアデイスの翼を引っ張った。

「アデイス、私も行く」

「へ？」

珍しい積極的な態度に皆は目を丸くした。

「空飛ぶ丸いの、私も見たい」

「ミラさんにもそんな野次馬根性がっ!？」

アデイスはミラが武器や魔術意外に興味を持った事に驚いて後ずさる。しかし手を離さずにミラは追う。

「見たい」

「み、見たいんですか」

「爆発も見たい」

「爆発はするかしないか分かりませんから!」

ミラは首をかしげた。

「でも空飛ぶのは見たい。見えるところに行く。連れていけ」

アデイスはユイに助けを求めるが、ユイまで靴下編みに戻っていた。諦めきつたこの態度から、止める来はない事がよく分かる。

アデイスは苛立つミラを見て、言葉を詰まらせた。

「……………つく……………」

まあ、いいか。そう毎回毎回、不安が現実の物になるはずもありませんし、不用意に近づかなければ良いんですよ。爆発するなら、結界でも張って見物していればいいですしね」

アデイスも実は見たかったらしく、押されてしまつと決意は早かった。

しかも最後には爆発するとはかりの事を口にしていた。

「ちよ、本当に行くのか？」

「トロアさんは見たくないんですか？」

彼は顔を逸らし、尻尾を揺らす。そして、

「……………い、行く」

結局、全員で行く事になった。

心配よりも、好奇心が打ち勝つ年頃なのだ。好奇心は猫をも殺す  
というのに、ダメな大人達である。 好奇心は猫をも殺す

## 14話 空からの訪問者 2

翌日の昼過ぎ、そけは本当に来た。

凝ったデザインの飛行船だ。文字が書いてあり、どう見ても企業の宣伝用飛行船だった。

「商用ですねえ」

「エンザは商人の国だからね……。あ、ほら、この大陸で使われている文字とは違う文字が使われているのが見える？ その下にこの大陸の文字で訳が書かれている」

ユイの指摘を受けて、聖良は文字をしっかりと見た。知らない文字と、聖良にも分かる簡単な文字が書かれていた。

「何でも揃う、エンザ商会？」

「ここら辺の言葉は、他の大陸でも理解できる人がけっこういるからね。世界を飛ぶつもりなんだよ」

空とは世界だ。世界中を回れる。

船以上に、飛行機という存在は世界を変える。

「でも、みなさん暢気ですよ。こんな郊外にまで見に来るなんて危ない物だったらどうするんでしょう。見に来ている私達が言うのも何ですけど」

セーラの周りは人だらけで、アデイスの腕に座るようにして、人形のように抱き上げられていた。国仕えしている役人という特権があるアデイスとエリオットのおかげで前に進めるが、聖良が歩くと危ないからと、抱き上げてくれているのだ。

エリオットが外に出る事を知った時、子供達は驚いたが、空飛ぶ物体と聞いて納得もしていた。他人は恐いが、好奇心も旺盛なのだと皆にはよく知られているのだ。

子供達も来たがっていたが、危ないからと置いてきたのに、街人

達が大挙していたため、後々に文句を言われるだろうとアデイスは渋い顔をした。

危機感がなく、普通ならこの世の終わりだと騒いでもおかしくないのにと、聖良はこの国の感覚が理解できなかった。

「みんな退屈なようです。先に来ている兵士が押しとどめているから良いんですよ」

日本でも、事件があると人が集まる。ここまで出てくるというのもどうかと思ったが、他にめぼしい娯楽もないので仕方がない。

「あ、下りてくる。突いて良いか？」

ミラは突くどころか、刃物を投げようとしていた。

「ミラさん、じっとしていると約束をしたのを覚えてますか？ 落とすのはいつでも出来るでしょう」

アデイスに窘められ、ミラは不服そうにする。風船を叩き割るのを楽しいと思う子供もいるから、彼女がそれをしてみたいと思うのは、それ程おかしい事ではない。殲滅の悪魔と呼ばれる理由は、彼女の好戦的な性格もあるが、こういう好奇心の強さも原因だろう。首を突っ込んだ先で暴れるから被害が増える。

「アデイス」

聖良達から少し離れた、一般人を排除している場所に立っていたクレアが振り返る。

アデイスは苦勞して彼女の元まで進んだ。

「どこでアレの事を知ったのですか？」

「聞こえてたんですか。地獄耳ですね」

「私はすべての性能が良くできています。」

それよりも、着陸許可を事前に寄越してはいましたが、若い子には教えてはいけません。人が集まるだけならともかく、知っているとはどういうことですか」

「私の情報網を舐めないでください。そちらとは関係ない方から情報が入ってきたんですよ」

竜が心配して教えに来た、とは言えない。意味深な事を言って誤

魔化すしかないのだ。

「あれが何かも分かっているようですね」

「なんの事やら」

軽いと浮くということだけは理解してくれたが、重力とか空気に重さがある意味は理解してくれなかった。だから分かっているというよりも、知っているという方が正しい。

クレアが再び仕事に戻ったので、聖良はアデイスに問う。

「でも、普通に着地しようとしてるんですけど、どうやってるんでしょう。飛行船って、普通は人力で下ろす物なんですけど」

「ああ、それなら中で水でも作って重くしてるんじゃないですか？ そういう道具があるんですよ。うちからの輸出品です」

「なるほど」

こういうことがぼろつと出てくるのは、さすがは優秀な魔術師だ。重いと飛べないという言葉覚えていてくれた。

「アデイス、分かってるんじゃないですか」

「どこまで地獄耳なんですか」

アデイスとクレアが言い合い、聖良を地面に下ろした。ここは安全だがよく見える位置だ。

飛行船は徐々に下降して、難なく着地すると、中から人が下りてきた。

中心にいるのは小柄な人だ。女性かと思ったが、顔立ちからして男性であった。一六〇センチ半ばと、今まで見た男性の中で一番小柄である。

真っ黒な癖っ毛で、小さな眼鏡を掛けて、商人らしい笑みを浮かべていた。

人種はアデイス達よりも聖良の方が近いような雰囲気だ。もちろん、日本人に見える、などという事はないが、アジア人では通る。彼らは何かを話し合った後、迷わず聖良達の方へと向かってきた。クレアがいるからだ。

「これはこれは美しいお嬢さん方、歓迎ありがとうございます」

意味は分かるが、アクセントが少しだけおかしく聞こえた。彼が慣れないこの国の言葉を不完全な発音で話しているためだと、雰囲気から分かった。それでも意味としてははっきりと理解できて、魔術とは本当に面白いと聖良は感心する。

「始めまして、エンザ商会グリーディア支部代表を就任いたしました、レンファと申します。あなたがクレア様ですね。噂に違わぬ美しき、一目で分かりました」

男はにこにここと笑いながら、彼よりも少し背の高いクレアに笑みを向けた。

女の聖良でも身長差が気になるのだ。男の彼ではさぞ気になる事だろうと、聖良は勝手に同情した。

王妃と知っての挨拶にしては、始めましてとは失礼な気がしたが、耳に入る言葉はカタコトなのでさして違和感はなかった。言葉が不自由な外国人なら、首をひねるような少し失礼な言葉を、爽やかな笑顔で悪気もなく使っているなら許してしまうものだ。

「始めまして、レンファ。面白い乗り物ですね」

「そうですね。我がエンザ国が開発した飛行船です」

エンザ国のエンザ商会。

日本何とかという会社名があるのだから、そのまま国の名前でもおかしくはないだろう。ただ、何を扱っているのかさっぱり分からない。

「どうやって飛んでいるのかしら」

「それは企業秘密です。推進力に関しては、御国の技術も使用しております」

エンジンがないのなら魔法資源を使うしかない。魔具を動かすための動力は、意外と身近にあるらしく、水で動く物も多い。これはこれで制限があつて面倒らしいが、資源の枯渇知らずなエコ燃料である。

そのやりとりを見て、アデイスが不敵に笑いながらクレアの背後に近づいた。



「ガスですよ」

アデイスがクレアに囁くふりをして、あまり声を潜めずに言う。「軽い気体を入れていただけです。水の中で軽い物が浮くように、空気の中でも軽い物は浮くのです」

クレアは理解できないらしく、きょとんとした。

アデイスは最終的にこの説明で理解してくれたが、いきなり言われても混乱するだけだ。クレアは風船も見た事がないのだから。

「……魔術ばかりの国だと思っていたのですが、よくご存じで」

レンファは笑顔を崩さずに言う。それでも一瞬だけ息を飲んだのを聖良は見た。

「グリーディアは鉱石は豊富にありますが、ガスは出ませんから、あまり使われていないだけです。それに入っているのが安全でない気体だしたら、私の思い違いになりますよ」

聖良は傍らでため息をつきそうになった。

もちろん、この国の人間が牽制することに意味はあるのは理解できる。

全く知りませんでしたと、知っているけどやらないよ、とでは全く違う。相手の技術を過小評価しているのと、知らないと思っっているのではかなり違う。過小評価ももちろん悪い印象には違いないが、資源がないからやらないとも言ったので、これから先、相手を悩ませるはずだ。

しかもこんなに若い、見栄え重視のようにも見える男の発言であるからより考える。アデイスはレンファと目が合つと、ますますいい笑みを浮かべた。

「どうぞご安心ください。エンザ王の名にかけて我が社の商品に危険はありません。墜落の危険もなく、世界一安全な乗り物である事は保証します。我が社以外の粗悪品は別ですが」

一番大切なのは、存在を知るよりも、作れる技術の有無だから彼も笑みを返す。

それから彼は聖良を見た。人種が他の者達と近いから、気になる

のは仕方がない。

「ひよつとして、こちらの技術者が亡命でも？」

「いいえ。彼女はそちらの生まれではありませんが」

聖良はこくこくと頷く。

「可愛らしいお嬢さんですね。おいつつですか」

「え……十八ですけど」

聖良が素直に答えると、彼は驚いたように目を見開いた。

普通に見上げる程度の身長差しかないから、とても楽だ。

彼はすぐに微笑みに戻し、聖良の手を取った。

「お嬢さん、結婚を前提にお付き合いつ」

唐突に馬鹿な事を言うレンファは、聖良が何かする前に自分自身の連れに殴られて手を離れた。

「支店長！いきなり馬鹿な事をしないでください！その方は既婚者ですよ！」

「うるさい！生涯に一度の恋を邪魔するなっ！」

「だから人妻だと言っているじゃないですかっ！よくご覧なさい」

聞いた事のない言葉だが、魔術で理解できた。アデイスも外国人相手なので、自分で術を掛けているから聞こえているはずだった。

「残念ですが彼女は私の妻ですので、別の方を探して下さい。当国は美女の多い国ですから、きっとレンファ殿の気に入る女性が他にもいるでしょう」

アデイスは変わらぬ笑顔でレンファへと牽制する。しかもいるはずがないと思いつながらだ。

聖良はただ呆れて見ているしかなかった。

レンファは明らかに背丈を見ていた。この一段の中で一番小柄なのは彼だから、人種的にあれが普通というわけではない。他の人達を見る限り、日本人よりはずっと平均が高い。

「申し訳ございません。この方はまだこちらの言葉に慣れていませんので」

「ファシャ、魔術師は言語の差など魔術で乗り越えらると言っぞ」

フォローした部下に、レンファがすかさず言い返す。

聖良達は引きつり笑いを浮かべるしかない。

「爆発はしなかったが、変な人は乗っていた。」

変な人と、爆発、どちらが良かったのか、今のところはまだ分からない。

## 14話 空からの訪問者 3

3

郊外から場所を移して、王宮の一室。

「我らの女王陛下は、魔術そのものではなく、その知識を生かした副産物にとっても興味をお持ちです。

魔法よりもよほど応用が利き、物に封じれば劣化がない限りは半永久的に続く力は、魔術以外にはあり得ません」

レンファが目を細めて満面の笑みを浮かべる。いかにも商人といった男性だ。

彼はその際、ちらりと聖良に視線を向けた。聖良はどうしたものかと困惑している。

彼らは商人といっても、社長は国王という国営会社の社員らしい。聖良がアデイスからこっそりと彼らの事を聞くと、地獄の沙汰も金次第という国だと教えてくれた。反面、詐欺まがいの商売は絶対に行わず、もらう金に見合う物を提供するという絶対的な信頼があるのだという。

今まではたまに船が来るだけだったが、最近では支店が出来たらしい。

どこの世界も海外から進出してくる企業は驚異であり、便利でもあるが、この国に関しては何からの市場破壊という脅威はない。脅威があるとすれば、引き抜きだ。彼らの一番の狙いは技術者の引き抜きだろうとアデイスは睨んでいる。

その事をレンファは隠す様子もなく、目につく魔術師達を品定めしている。

「もちろん、私たちも命は惜しいので魔術そのものを国外に持ち出すつもりはありません。しかし御国の魔導具は出回る数が少なく、手に入れられるのは王侯貴族か神殿のみとなっています。」

私たちはただ、この国の優れた商品を一般市民の手が届く場所に適正な価格で販売させていただければと」

「確かに、国内と比べて、下手をすれば数十倍の値段で売られていると聞きます。高い物でもないのに高く売られるのは不本意ですね」

クレアもお茶のカップを片手にレンファへと微笑む。国王の八口イドは空気と化していた。夫婦関係がこれだけで分かる構図だ。

「ええ、元の値段が高いにしても、異常な値段です」

「しかしそれは仕方ありません。山越え出来るのは神子ぐらいですし、普通の船では十に二つは魔物に沈められてしまいます。安全なほど武装した船など、人件費だけでも大変でしょう。私たちグリーディアの船でしたら、少人数でも滅多なことでは沈められません。あれは魔術師がいなければ何の意味もありません。それでも運が悪ければ襲われます。」

あの空を飛ぶ船も、大型化出来ないのは同じでしょう」  
アデイスは穏やかな口調で牽制した。

命をかければ値段が高くなるのは当然だ。

ツバメの巣が高級食材なのは、命がけになる場所にあるからである。

「あれは移動、宣伝用で、商業用の大型船も開発中です。魔導具はそれほど重い物ではありませんから、飛行船で運んでも通常の船便に比べて割高といった程度になります。ここに船を送り込むのに比べれば価格破壊と言っているいい安価な輸送方法です。」

輸出の際に御国で高い関税をかけられたとしても、今までよりはずっと安全に、安価に運べます。グリーディアにとっても、損はないかと」

「そうですね。魔導具の異常な希少性が下がる程度の損しかありません」

「それに見合う益はございましょう。」

かの有名なハーネス殿亡き今、いつまでクレア様お一人の権威で

支えられるかを考えれば。

もしもあなたが病で倒れられたら、台無しになるのではありませんか。なにせ佳人薄命ともうしますから」

この世界にも、佳人薄命という言葉があるらしい。

だんだんと興味も関係もない話になってきたので、聖良は出されていたジュースを飲む。一人だけ子供扱いされている気がしたが、さっぱりして美味しいので我慢した。

そもそも、なぜ聖良がこの席にいるかが、まず一番の疑問である。「若いお嬢さんには退屈な話でしたね」

レンファが聖良を見て微笑ましいモノを見るような目を向けた。背が小さいと子供扱いされてよく向けられる目だが、それとは少しだけ違う気がした。

ロリコンの気色悪い視線とも違うから、少し困った。

「そうだ。もしお時間がございましたら、ぜひ当社の商品をご覧ください。ただきたく存じます。こういった物と同じ扱いをされるかご覧いただければ、私たちの考えもご理解いただけるでしょう。クレア様のような美女にこそ相応しい一級品ばかりです」

クレアの目の色が変わった。

彼女はアデイスに荷物持ちをさせるほど買い物が好きだと、聖良は思い出した。

美人で、華やかで、聖良とは正反対の女性である。彼女のような人が身につけてこそ、高い物も意味を持つのだ。

聖良が着ても高級な子供服になっってしまう。だから高い物とは縁がなくてもいいが、美人が綺麗に飾るのを見ているのは楽しそうだった。

レンファが合図をすれば、部屋に次々と煌びやかな品々が運び込まれていった。

しかし贈り物ではなく商品らしい。

部屋の外からその煌びやかな宝石や服や布を見ているエリオットには、それを羨むしかできなかった。

眼鏡をかけているため、それらが何であるかは見えた。フレアの時であつたら飛びついていたような品ばかりだが、今はエリオットだ。ここからこうして眺めているだけしか出来ない。

手にとってはしゃいでもいいはずのセーラが、何の関心も示していないのが救いだ。彼女がはしゃいでいたら、きつと一緒に彼もはしゃぎたくなるはずだ。

エリオットの後ろには、ハーティとトロアと聞きつけてやって来た数人の子供達。

セーラをじつと見つめていると、視線に気づいて微笑みかけてくる。今日はワインレッドのかわいらしいワンピースを着ている。癖のない黒髪とワンピースの赤は彼女をとて可愛らしく見せた。

「エリオット君」

手招きされた。ふらふらと近寄ると、彼女に手を取られる。

「アデイスが何でも買ってくれるそうです」

さして嬉しくなさそうに言う。

「よかったね」

「私はいらないから」

彼女はそれを小さな声で、半悪魔の耳でようやく聞き取れるほどの小さな声でつぶやいた。意図を計りかね、エリオットは彼女のつむじを見つめた。

「エリオット君が選んでください。アデイスが口を挟むと、いつとも子供っぽい感じになるんです。ひどいでしょう」

彼女はエリオットを見上げ、手を引いた。エリオットは目が合わぬように、視線を逸らした。

「可愛いのが好きだもんね、兄さんは」

セーラは本当に興味がないから、興味を示した『フレア』のため  
に選ぶ機会をくれた。男であるエリオットが自分に選ぶのではなく、  
セーラに選んであげるといふ形を取ってくれた。

商品を近くで見ると、自分には着られない変わったドレスや、手  
が出ない高そうな装身具が並べられている。

さすがに一国の王妃に買わせようという品ばかりだ。

エリオットはフレアに似合う耳飾りを手にした。

「大人っぽいですね」

大きな物だから小柄で可愛いセーラが身につけていたら浮いてし  
まうが、フレアなら似合う。

この前、新しく仕立てた服に似合いそうだ。

アデイスに渡すと、仕方がないですねと言いながら、包んでもら  
った。

セーラは満足げに頷いて、きらびやかな商品を眺める。

「生半可な人だと、付けてるだけでみっともないというか……」。

こういうのを着けていく場所がある人は大変ですよね」

「セーラは本当に興味ないの？ この大きな宝石とか、この髪飾り  
とか。女の人は光る物が好きなものなのに」

「こんなに金属や宝石がついていたら、肩がこりますよ、これ。た  
だでさえ万年肩こり抱えてるのに」

それは竜の血でも直らないらしい。この小さな体だから無理もな  
い。新しい形の下着を作ってもらったらいいが、それでも元の世界  
の物に比べて質が落ちるらしく、たまに辛そうに肩や首を揉んでい  
る。

「セーラさん、こちらなどがでしょうか。可憐で清楚なあなた  
にぴったりの品です」

レンファが差し出したのは、少し変わった髪留め。セーラの気を  
引こうと必死のようだ。

「いえ、つける機会ありませんから」

「あなたの美しい黒髪でしたら、普段使いでもお似合いです。シン



ブルでどんな場所でも使える便利な品です。しかも乱暴に扱っても壊れません」

レンファはセーラの後ろに回り込み、驚くほどの器用さでささっと髪をまとめてしまった。全部まとめたらかつちりしすぎるから、適度に髪を残して垂らしている。幼すぎる顔立ちが大人びてよく似合う。セーラも鏡を見せられ驚いている。

「ほら、このお召し物にもよくお似合いです。

よろしければ、こちらは私の好意として受け取ってください」

セーラはさらに驚き、レンファを見上げた。

レンファも小柄だが、セーラはそれに釣り合う身長だ。アデイスと並んでいるよりはずっと恋人として釣り合う身長差である。

セーラは茫然と彼を見上げている。

「支店長、給料から天引きしておきますね」

秘書らしき青年、ファシヤが手帳にメモをした。それをアデイスがのぞき込み、顔をしかめる。思った以上に高かったのだ。

「やっぱりこういうのはもらうわけには」

それに気づいたセーラが、首を振って髪飾りを取ろうとする。

「ファシヤ、女性の前で金の話はするな。

セーラさん、たいした物ではありませんが、どうか受け取ってください」

「初対面の女性に送るのに、これが大した物でないとは、よっぽど給料がいいんですねえ」

アデイスの言葉を聞いて、セーラが顔を引きつらせてやはり返そうとする。

男には見返りを要求する者とならない者がいる。高すぎる物を遠慮しない女は、贈られるのに慣れているか、覚悟があるか、浮かれた馬鹿だ。

「ええ、私はとても裕福です。ですから、どうか気にせず受け取ってください。私の富があなたを飾るために多少削られようとも、私には喜びしかありません」

エリオットはセーラを挟んで火花を散らすアデイスとレンファを遠目で見ると見る。

人妻でもかまわないというレンファもレンファだが、大人げのないアデイスもアデイスだ。あのセーラが、贈り物一つ、甘い言葉一つで心動かすような女かどうか、考えれば分かる。

しかもセーラはアデイスのせいではほぼ不死身の身体を手に入れているのに、普通の男になびくはずもない。

セーラは人形師の孤独を見ているのだ。老いる者と老いない者が供にある事の意味を知っている。

その不毛なやりとりを見て、宝石を合わせてもらっていたクレアが立ち上がった。

「セーラ、せつかくだからもらっておくといいわ」  
「でも……」

「男性の贈り物を平等に受け取るのはいい女の特権です。プレゼントを贈って、見返りを超越さない女性を悪く思うほど、狭量な方ではありませんよ、きつと。ねえ、レンファ殿」

クレアはいやらしい笑みをレンファに向けた。

昔からハロイド一筋だった彼女も、他人から贈られる物はきつちり貰っていた。今でも彼女の美貌に熱を浮かせた男が、贈り物をする。それをハロイドはまったく気にしていない。嫉妬して欲しいのに嫉妬してもらえなくてクレアはますますハロイドに夢中になる。

二人はそんな夫婦だ。

「アデイス」

ミラがアデイスの肩をつついた。珍しく彼女は困ったような顔をしていた。そうしているとまるで普通の少女のようである。

「これ欲しい」

と剣を持って、アデイスを見上げた。

おねだりされて、アデイスは困った。ミラはアデイスの趣味ではない。しかし、アデイスはミラを恐れている。

「そういうのはユイに聞いた方がいいですよ」

「買ってくれない」

ミラがむくれた。

アデイスは困ってユイを見るが、彼は頑なに首を横に振った。しかし、それを見て商人が放置するはずもない。

動いたのはファシヤだった。

「いやいや、お嬢さんは実にお目が高い。こちらは百年ほど前にハーネス殿から譲り受けた逸品でございます。魔術師以外には扱えぬ少々物騒な物ですので、ぜひ優れた魔術師の方にといいお持ちした物です」

ファシヤが手をもみミラの興味を引こうとする。

ハーネスの名を聞き、さすがにクレアも興味を持ってそれを確かめる。

「あら、本物ですね。どこに行ったのかと思っていたら、よその国にあつたなんて」

クレアが驚いて剣を手にした。

ハーネスから受け継いだ知識は魔術のものがほとんどで、私生活についてはあまり記憶がないらしい。まったくないのでなく、知識の奥に眠っているのだ。

見ただけで思いつく程度には濃い記憶ということは、ハーネスにとって優先順位がそれなりに高かった事を意味する。

おそらく本当にいい物なのだ。ますますミラが物欲しげに剣を見る。

「ユイ、ダメか？」

「ダメ。そんな物騒なのダメ」

「ケチ」

「今でも十分持つてるのに、これ以上持つてどうするの!？」

「ケチ」

買ってもらおうとする者の態度ではないが、それだけの言葉でユイはひどくおびえた。

彼女が殲滅の悪魔と呼ばれているらしいとは聞いている。噂も知

っている。

それでも神子である彼が、支配対象におびえる理由が理解できない。

「これ、儀式用。他のと違う。持ってない」

「え？ 違うの？」

「違う。すごい呪い」

「呪われてる！？」

「制御すれば、便利。こういうの、好き。でも今は持ってない。壊された」

ハーネスの噂からすると、ろくでもない事に使われた剣だ。

黒魔術と呼ばれるたぐいの魔術を制御するのに有効なのだろう。

完全な人間ではないエリオットには扱えない類である。半悪魔は一部の優れた人間のように、繊細な制御を続ける事が出来ない。だからああいった物を使うのはリスクが高すぎる。

何かを思いついたのか、アデイスが手を打った。

「ああ、そういうことですか。クレア、これを扱えますか？」

アデイスは念のためクレアに問う。

「無理ですね。というか、合わない者が使うと死ぬ類の剣です。よく売りつけようと思いましたが」

ミラは物欲しげに剣を抜いて眺める。威力を知っているエンザ人達は青ざめたが、専門家がそろっているため騒ぎ立てはしなかった。「私が持っていては騒がれそうですし、ミラさんが持っているのが一番いいかもしれませんね。どうせ何を持っても人を殺す凶器になるんですから」

アデイスはさわやかに笑いながら言う。ミラは喜び、顔を少し赤くして何度も頷いた。

「ユイ、買ってあげなさい」

「僕！？」

「そりゃあ、君が飼い主ですから」

「あんまりミラを強化したくないんだけど……」

「使役を強化したくない神子というのも、あなたぐらいですよ。

あつてもなくても発動が早いか遅いかの違いです。ミラさんならハーネス以上にこれを使いこなせるでしょうね。彼女の制御力は世界一と言つていい水準です」

「でも……すごいものなんだよね。適切に、嚴重に保管していませんの？」

「道具は使える者が持つてこそ意味がある、というのが私の考えです。クレアに買われる前に買つておきなさい。どうせお金は余つてあるんでしょ」

ユイはため息をついて頷いた。

ミラが喜んで剣を抱きしめている。喜んでいる姿だけなら綺麗な女の子だ。

「アデイス、彼女の事は報告を受けていますが、この国の外の者があなたにそこまで言わせる術者なのですか」

クレアに問われ、アデイスは腕を組んだ。

「なんというか……知識は外の魔術師よりはマシ程度で大したことないんですけど、基礎がとにかくしっかりしているんですよ。彼女にとって魔術は手足を動かすようなほど当たり前に出る事なんです。

彼女がやるのはほとんど補助系だけなんです、私の結界を一撃で打ち破りましたよ。速くて安定して強力。つまり持つて生まれた才能です。たぶんこの剣も本能的に使うんでしょう。才能とは恐ろしいものです」

ミラはセーラにそれはどう使うのか尋ねられて、この場で実践している。アデイスがよくやる火を並べる基礎の練習に、寒気がするような力を纏わせた。視覚的には、黒い炎となるため、一般人にも分かりやすい。

入り口で子供達と見ているだけだったハーティが、少しでもその技を参考にしようと子供達を引き連れて、よく見える位置に移動していた。

セーラは視覚的な効果が分かりやすかったのか、パチパチと手を叩いた。

「育ててはいないのね」

「いませんよ。彼女には必要ないでしょう。今のスタイルで最強なんです。彼女は竜も悪魔もナイフ一本あれば単身で殺しますよ」

恐ろしいものですとアデイスは一人で自分の言葉に納得して頷いた。

「ならいいのです。気に入られてしまったものは仕方ありません。神殿に対する大きな貸しになりました」

クレアはアデイスが勝手にやっている事に目をつぶっているのは、害にならないからだ。利益になるなら、止める必要もない。

彼がいなくて困るとしたら、子供達を熱心に教育する者がいないという点だけだ。

老人達はハーネスの血を引いたアデイスを危険視しているから、目の届かないところにいる不安はあれど、いなくて安心してている。彼はとても複雑な立場だ。先日までの彼なら、自分であれを買っていた。しかし今の彼は自分の立場を理解している。だからミラに買わせた。

アデイスのそんな駆け引きをする様は、エリオットをときめかせた。

兄の格好良さは、見た目や力だけではない。すべてが格好いいのだ。

ロリコンなところを除いて。

どうしてロリコンなのだろうと、知ったばかりの頃のように悩んだが、それでもアデイスは格好いいのだ。

それから聖良は、いいように使われた。

レンファは商人であると同時に、外交官でもある。むしろここでは外交官的意味の方が強い。それでも商売するのだから、彼は根っからの商人だ。

そんな彼が聖良にはほいほいと物を買ひ与えるのだから、クレアが聖良を利用しようとするのは当然だ。

食事にもアデイスと神子一行が誘われ、残ったハーティとトロアはエリオットと一緒にいる事になった。ハーティはともかく、トロアはなんとか『手で食べない』事を知っているレベルだから、連れるのは危険だ。

聖良は王様との夕食に戸惑っていたが、それ以上に戸惑っているユイを見て落ち着く。

彼は必死にミラを抑えていた。聖良以上にマナー知らずというか、マナー無視の彼女に、最低限の事をさせるのは大変だ。ただしミラはマナーを知っているの、無意識に変な事をしないかどうかが問題なのだ。彼女は無意識に何かをする事が多い。給仕には、彼女の後ろに立つなと言っているが、ユイは恐ろしくて目を離せない様子であった。

「でも美味しいです。さすがはプロですね」

「っていうか、これ、セーラのレシピじゃないですか」

聖良は驚いてアデイスを見上げた。

「え、そうなんですか？」

「そうですね……自分で作った物でしょう」

「いや、マヨネーズが使ってあるだけです。かなりアレンジされていますし、もう別の料理ですよ」

聖良が作ったのはタルタルソースをかけたムニエルだ。しかしこの料理には、この国の調味料が混ぜられて、食べた事のない魚に使われていた。聖良の中ではまったく別の料理である。

色は白っぽいものの、味はマヨネーズとオーロラソースぐらいの違いがある。それでもアデイスにとっては聖良のレシピと言ってしまうほど、祖国の味とはかけ離れているのだ。

聖良にとっては珍しくもなく簡単に作れる料理だけでも、この国で創作料理の店を出せそうだが、

カレーはきつと珍しがられそうだが、材料が足りない。

「あー……スパイスが山ほど欲しいです」

ターメリックがあるかどうかも分からない。スパイスの種類が違うから、全部味見して試行錯誤が必要だ。本格カレーなら、スパイスから作るカレーセットで何度か作った事があるが、未知のスパイスからは作った事がない。時間と失敗と努力が必要である。

「セーラさんはお料理が趣味で？ 素晴らしい。」

よければ、当社のスパイスをお見せいたしましょうか」

レンファが二人の会話を聞いて口を挟んできた。

この国だけで聖良の求めるスパイスを揃えるのは無理だ。だから有り難い申し出であった。

「本当ですか？」

「ええ。この国で価値のある商品となるかどうかを見るために用意した物です。近い内にクレア様を会食にご招待しようと思っていたのですが、この国に合う使い方を模索中でして、ぜひご意見を頂ければ、と」

商売に絡めて、協力してくれと言いう言い方なら断られにくい。

上手い口実に、アデイスがレンファを睨み付けている。

アデイスにも自覚はあるのだ。ロリコンと小柄な女性が好きという意味の差を。

聖良だって、ロリコンだから気に入られたよりは、小さいから気に入られる方がまだ良かった。聖良だって、こうだから好き、とい



う異性に対する趣味はある。ペットのロヴァンの事だって、可愛いから好きなのだ。恐かったり、不細工だったりしたら好きにはならない。

つまり聖良の中で、人間としては今のところ、レンファの方が上の位置にいる。それをアデイスが理解している。

この差は大きいから、睨み付けずにはいられないのだ。

「私も行きたい」

突然、ミラが主張した。

「ミラ、食べ物と武器だけに反応するのやめて」

ユイが顔をまっ赤に染めてミラの手を握る。

「もちろん、美しいお嬢さんなら大歓迎ですよ。ユイ殿も是非おいでください」

レンファはニコニコと笑っているが、獲物を狙う蛇のような印象を受けた。

空まで飛ぶ彼らなら、情報網はしっかりしている。神子のユイとミラの事を耳にした可能性もある。

自分よりも背がうんと低いという意味で、聖良に好意を持ったのは本当だろう。しかし聖良の事も何に利用しようとしている。問題は、何に利用使用としているかだ。

出来るだけ客観的に見ているつもりだが、当事者としてのひいき目も出ている。だから聖良は自分の直感信じない事にしてきた。

「アデイスはどう思いますか？」

「まあ、いいのでは？ この国のスパイスだけでは物足りないでしょう。セーラが私のために料理をしてくれるのは、私の一番の楽しみですからね」

アデイスがいいと言うなら、行くだけなら問題ない。

他に考慮すべき点があるかも知れないが、それを恐れてはどこにも行けない。

ハーティはいつものように落ち込んでいた。

己は劣等感の固まりだと投げやりになって、心の内で小さく丸まっ  
つていじけている。それを現実でも行う度胸はないが、憂鬱な雰  
囲気は出ているのか、子供達が腹痛かと心配してくる。

「ハトラ、何落ち込んでるんだよ」

仕事から戻ってきたディアスがハーティに話しかけてくる。

複雑な心境だ。

ここには男の子の格好をしたフレアに、本来の姿をしたディとジ  
エイがいる。

そして彼らと夕食を食べている。

「アデイス様と一緒にいられないからって、落ち込んでるのか。俺  
がいるだろ」

「はあ」

「セーラも向こうにいるから落ち込んでるのか？」

「そ、そういう……わけでは」

二人が一緒にいるのは当然の事だ。アデイスはセーラを愛してい  
て、セーラはアデイスの血を飲んだのだから。

「神子連中も一緒だもんな。同居してる中で一人外れてるのが嫌な  
んだろ」

ディ　ディアスの言う通りだった。一人だけ、外れている。ト  
ロアも一緒だが、彼は暴走しやすいし、一緒に住んでいるわけでも  
ない。

「でもさ、こっちのメシも美味いだろ。食材のランクが低くて、見  
た目に凝ってないだけで、味付けは似たようなモンだ。なあ、おば  
ちゃん」

「そうだね。メニューはほとんど一緒だよ。ソースは同じ物使って  
るしね。今日はセーラちゃんに教わったソースだって、張り切って

たよ。やっぱ若い女の子が相手だと浮かれてねえ」

言われてみればセーラがたまにアデイスに作らせているソースと似ていた。やや辛味があり、どろっとしていて美味しい。でも油だらけだから、たくさん食べると太ると聖良は言っていた。ハーティは竜なので、この程度では太らない。むしろもつと食べなければならぬ。

一緒に食事をしていたトロアが、頬杖を突いてため息をついた。

「セーラ、あのちびに嫌な事されてないかな」

「さすがに商人がそんな空気読めてない事しないって。あれでも『人妻』って事になってるから」

よほどおかしいのか、アデイスが肩を震わせて笑いながら言う。

「でもおおっぴらに髪を触ってたんだ。セーラは嫌がらないし」

「本人が触られ慣れてるからだろ。ベタベタしすぎのアデイス様が基準だったらしやーねーって」

「アデイスと他人は違うだろ」

自ら血を飲ませた相手というのは特別だ。トロアのような常識外れの竜でも、その事に代わりはない。

「似たようなもんだって。セクハラまがいのことをされたら、いつものように抵抗するだろ、あの子は」

セーラは小柄で華奢で上目がちだから、気が小さそうに見えるが、実際のところはまったく逆だ。

彼女は滅多に怒らないが、怒るときは怒るし、剛胆である。

「そうだな。セーラはキツイところあるもんな」

「アデイス様もいるし、ただ食事してるだけだろ。心配すんなって。もうそうそう会わないだろうし」

ケラっケラと笑いながら彼はデザートを口に含む。

箱庭で食べるものよりも美味しい。

「やっぱりセーラの味に似ている……」

「そりゃ、ここの料理人達がセーラの味にはまってるから。」

メシと服にけっこう影響与えてるんだ。下手な外国より目新しい

から。

これからはエンザのものが流行るかもしれないねえな。あつちは痩せた奴が多いから、ダイエット食としてもう一部で少し出回ってるんだ」

人間の女性は体形を気にする。くびれたウエスト、豊満な胸と尻。細くありたいのに太くもありたい矛盾は、竜の中にはない。

それよりも、生まれ持った翼の形や角の形が重要だ。

「ハトラ、これから暇か？」

デザートを食べ終えたディアスは、テーブルに手をつき身を乗り出してくる。

「え……はい」

「じゃあ付き合え」

「え、どこに？」

「あそこか」

あそこ。箱庭。

「は、はい」

反射的に頷いてしまったが、幹部につられて箱庭に行くなど、人々に注目され、緊張する。アデイスの時も緊張するが、まだセーラがいるから良かった。

でも今回は二人きりだ。

「おかわり欲しかったら言えよ」

「こ、これでいいです」

「んじゃ、行くぞ。トロアさんは大人しくしてくれよ。セーラが困らないように。エリオット、トロアさんを見張ってるように」

彼は立ち上がってテーブルを迂回し、ハーティの前まで来て手を差し出した。恐る恐るその手の上に指先を置くと、やんわりと手を掴まれた。

食事に夢中になっていたエリオットが行ってらっしやいと手を振った。そして再び食事に戻る。

アデイス達がいらないから、彼は動かない。

ハーティのことなどどうでもよく、動く意味がないから。

きつとあの二人も、帰ってきた頃にはいつものように二人で眠っているのだろう。

だからやきもきする意味はない。意味はないが、むなしさを覚える。

5

招かれたそこは、聖良に恐怖をもたらす光景が広がっていた。

「どうです、セーラさん。今夜の準備でごたごたしていますが、置かれていた品は美しいでしょう」

並べられたグラス、食器。それらを女性がチェックして回っている。

「ごたごたしているというのは本当だ。それが聖良には恐ろしい。全部高そうなのだ。」

通路には高そうな壺が置いてあるし、床にはこれから飾るのである。絵のような包みが壁に立てかけて置いてある。

それらの間を抜けるため、聖良は緊張した。

「こ、恐くて足が震えます」

聖良は運が悪い。少し動いただけで皿を割ってしまうなどという事は珍しくない。

「セーラ、これだけ距離があるのに何を言っているんですか。セーラが転んだとしても、小さなあなたがテーブルまで飛んでいく事はありませんよ」

それはそうだ。大男なら危ないが、聖良は小柄だ。届くはずがないと分かっている。

「でも、私、昔から食器屋さんが恐いんです。壊しそうで。弁償も出来ないし。ああ、なんか気持ちが悪く……」

「セーラ……だっこしてあげますから、怯えないで下さい」

アデイスに抱き上げられて、聖良は大人しく彼にしがみつく。

イヤな事はかり思い出す。

そんな聖良を、アデイスの後ろに立ったミラが、不思議そうに覗き込む。

「セーラ、心配しすぎ」

「でも、うっかり転んだら思うと」

「私の方が壊すの得意」

それはそうだ。彼女は破壊神で死神のようなものである。殲滅の悪魔なのだから、彼女ほど破壊が得意な人間はそうそういない。

「うっかり壊すならともかく、わざと壊すのはご遠慮くださいね、ミラさん。ミラさんの事は、しっかりと監督をお願いいたしますよ、ユイ様」

レンファがユイに釘を刺す。

彼女が危険人物だということは調べればすぐ分かる。もちろんユイとハノは彼女が反射的に暴れないよう、常に彼女の手を握っている。ミラは両手を握られ、間違っても暴れないようにされているのでストレスが溜まっている。それでも我慢するのは、美味しい物を食べさせてくれるからに過ぎない。

もう一人心配なトロアだが、出会い頭以外では暴れないので、ミラよりは信頼できた。聖良が言い聞かせたせいか、割れ物に興味は持っても、触ろうとはしていない。

昨日まで一緒にいたハーティは、ディアスとどこかに行って帰ってこない。箱庭だろうと、アデイスは気にしていない。聖良はハーティが無理矢理何かされそうになるのを恐れたのだが、アデイスはその点でもディアスを信頼している。

万が一の時、さすがのハーティも無抵抗ということは無い、抵抗したら人間の力では勝てない腕力があると分かっているから心配する必要はない。

「手、邪魔。暴れない。離せ」

ミラは両脇の二人に文句を言い、聖良は苦笑した。自分の力で人間にとけ込んだしっかり者のハーティよりも、目の前にいるミラの方がずっと心配だ。

ミラがいなくなったのなら半狂乱になって探さなければならぬが、ハーティなら大丈夫だ。

「セーラさんは前に何か壊した事があるんですか」  
レンファがくすくすと笑いながら問う。

「……………とりあえず、まだ取り返しのつかない壊し方はしていません」

「今日を取り返しのつかない日にしないように気をつけましょうね」  
アデイスはレンファが何か言う前に話に切りをつけた。

人の事を言えないくせに笑っている。

彼は才能と金運にすべての運を持っていかれているため、物を壊して破産なんて事にはならない。だからこそ彼は余裕を持っている。レンファが笑みを顔に貼り付けながらも、不思議そうに見ているが、勝手に想像していればいい。彼の中に『ただ運が悪いだけ』という発想は出てこないだろう。

危険地帯を抜けて別の部屋に案内されると、聖良は生きた心地を取り戻す。ただし、壁には高そうな絵があつたり、高そうな壺に豪華な花が生けられたりと、危険はまだ存在する。

薦められるがままに椅子に座ると、さらに落ち着く。

「セーラ大袈裟。たかがガラス」

「たかがガラスが高いんですよ。あんな安いガラスなんてありませんよ」

聖良が言つと、ミラは首をかしげた。

壊れやすく役に立たない物だと思っているのだ。

安物の焼き物と同列に考えているのだ。

聖良の生まれ育つた日本では、安いガラス製品はたくさんあつたが、いいものになるとやはり高かった。この国ではもっと高い。

「誰か、お客様がいらっしゃった。あれをお持ちしろ」

レンファが手を叩いて命令する。

聖良達が入ってきたのとは別のドアから、カートを押した女性が入ってくる。化粧は濃いが見栄えのいい女性だった。背は高く、すらりとしている。この国の好みに合わせて連れてきているのだ。

アデイスは彼女には目も向けず、並べられた香辛料を眺める。



原型をとどめた物と、粉にした物がセットで置いてあった。

それらをすべて並べ終えると、今度は別の男性が料理を運んできた。試食用なのに、飾り付けはしっかりとされている。料理のほとんどはシンプルな前菜風や炒め物だ。

「他に人はいないんですね。もつとたくさん人が来るのかと思っていました。」

「はい。皆様方ももう何組かは商談のためにお早めにお招きしていますが、本番は夜ですので。ああ、他の客人達は部下が応対しています。」

部下に丸投げしてまで聖良の気を引きたかつたと。

好かれるのは悪い気はしなかったが、人妻でも諦めないのは少し重い。

「こちらの料理は、この国にはない物で作られたものです。少し癖があるかもしれませんが、宮殿の料理長はあなたなら斬新な方法で口に合う物にするだろうと推していましたよ。」

城の料理人達とは親しくしている。色々な料理を教えてもらったり、教えたり。知り合いだから大袈裟に話したのだろうが、それが聖良を招く立派な口実になってしまったようだ。

戸惑っていると、レンファは聖良のために料理を皿に分けてくれた。

料理にはまったく罪はないし、料理長が恥をかかないためにも、恥ずかしい事は出来ない。

香辛料の掛かった肉を口に入れる。

肉は美味しい。それ以上に、驚いた。

「ぴりぴりします。美味しい」

「それはこの香辛料ですね」

さじを受け取り、手に乗せて舐める。

胡椒と唐辛子の中間の辛みが美味しい。水を飲んで、他の香辛料も味見をした。同じ辛い香辛料が使われた料理を他にももらい、嬉しくなる。

「何にでも合いそうですね。これ、凄く好きです」

「ええ、こちらは貴重な香辛料で、この国では国王陛下のような方の口にしか入らないでしょう」

「どうりで見たことがないと思いました」

喜んだつかの間だ。

胡椒のような物はあるが、唐辛子のような物がなかったため期待したのだが、高いならだめだ。安価でなければ、新作料理を作るのも恐い。聖良は貧乏性なので、ケチってるくなく料理にはならない。

「辛みが強くてお安い調味料はありませんか？」

「セーラさんは珍しい方ですね。辛い物がお好きですか。この大陸ではこういった辛味のおいしさを理解する方は少ないですよ」

「慣れていないからですよ。慣れれば半分ぐらいの人は好きになりますよ、きつと」

中華やカレーはどの国でも、ある程度受け入れられるはずだ。

「そうでしょうか」

「だから徐々に慣れていかないと」

アデイスは高い香辛料を舐めて顔をしかめている。

「ほんと、辛い物は慣れていないみたいですね。お料理の方は控え目で美味しいですよ」

アデイスもトロアも料理は普通に食べれたので、やはり控え目なら食べられる。トロアなどは刺激が気に入ったらしく、ミラと料理の奪い合いを始めたので、聖良は慌てて二人を止めた。

均等に分けていたとき、くすくすと女性の笑い声が聞こえた。

「良い匂いがすると思ったら、アデイス様、お楽しみの方ですね」  
水を飲んでいたアデイスは、女性に名を呼ばれて振り返り、少し驚いた。

聖良も皿を置いて振り返ってみると、いつものブティックの支配人の女性のエリータがいて驚いた。

「どうしたんですか、こんなところで」

「わたくし、生地を見せて頂に参りましたの。晚餐会に招かれてい

ましたし、運んでもらうより、こちらに出向いた方が早いでしょう。生地よりも、デザイン画の方が軽いんですもの」

「商売熱心ですね」

エリータはええ、と笑みを返した。

いつもの仕事着ではなく、仕立てのいいスーツだ。スカートは長いが、動きやすそうで彼女に似合っている。

「そちらは本当に食べるのが好きですね。今食べ過ぎると、せっかくのディナーを食べられなくなるのでは？」

「私は底なしなので大丈夫ですよ。セーラは調味料目当てですからそれほど食べません。残る人たちは知りません」

「まあ、相変わらずですこと」

彼女は口元に手を当てて笑い、それから聖良に向き直る。

「セーラ様、お試しいただいているあれの調子はいかがですか」

あれとは、下着の事だ。

「えと、やっぱり素材とか織り方の差かホールド感がなくて肩が凝りますけど、今まで売っていた奴や、していないよりはずっといいです」

今までブラジャーらしきものがなかったわけではない。あの形がなかったのだ。

パーツごとに織り方を変えるのは理解してもらった。

合成繊維ほどのストレッチを持つ素材はないだろうが、それでもストレッチ素材が無いわけではない。

「セーラは小柄だから、よけいに苦しいようです。たくさん儲けて、開発資金を作ってくださいね」

「ええ、もちろんですわ。これでファスナーの量産も出来ます」

試しに作ってみたことは知っていたが、量産するのだ。

「アデイス様も、これで懐に入ったお金はたっぷりうちの商品につぎ込んで下さいね」

「これで？」

今まで黙っていたレンファが疑うような目をアデイスに向けた。

「セーラさんの発案だと聞きましたが、なぜ夫でしかないあなたが？」

彼の国は、お金の事に関する男女差別があまりないようだ。日本でも、配偶者の物は自分のものと思いきこんでいる人はいるが。

「発案者はセーラ様の身内の方だそうですね。その方はもうお亡くなりになっているらしくて、代わりにアデイス様との契約になりました」

「なぜセーラさんとの契約ではないのですか？」

レンファは疑わしげにアデイスを見ている。

ロイヤルティをもらっている事は知っていたし、身内が発明家とか言っておいたとも言っていたが、事前説明とか詳しい事をまったく聞いていないのは本当だ。

疑われても仕方がない。

「セーラは私と結婚するまではこの国に戸籍がありませんでしたからね。契約は婚前の事でしたから。今は役所にも届けたので彼女も立派なグリーンディア人ですが」

婚前の事だ。

結婚したという自覚が全くないので忘れそうになるが、婚前の事だった。

結婚していたことにメリットはあった。デメリットはまだない。

だから結婚したのは間違いではないはずだ。

「まあ、それがなくとも私はセーラの我が儘なら何でも聞きますが、悲しい事に最近のお願いは食べ物の事ばかりで、私が無理矢理用意しないと、可愛い服も着てくれません」

「だって、汚れるじゃないですか。本当は町中で着るのも嫌なんです。とくに雨とか、雨上がりは馬車から出たところで水を引っかけられるに違いないんですから」

今日も雨が降っている。本当は外に出たくなかったが、幸いにもブーツと靴下に水がかかっただけだった。

「セーラ、汚されるの上手い。私がいても汚される、不思議」

「ミラ、そういうのを上手いとか……。

本人が一番気にしているんだから、そういう事言っちゃだめ」  
哀れまれる方が嫌だったので、聖良は気にせず試食を続けた。  
とくに辛い香辛料を試した。試食を食べて香辛料を試す。

「あ、これいい」

豆板醤のようなものがあつた。炒めものに使われていて、辛くて美味しい。うまみもあつて、コクがある。

「辛い」

ミラは気に入つたようでもう一口食べる。先ほどトロアと取り合つていたのも、辛味のある料理だつた。

「甘党の辛党なんですね。私と一緒にです」

「セーラと一緒に」

ミラは満足げに頷いた。

味覚に差がないのは良い事だ。ただ、子供舌のアデイスがいるから、辛くないのも作らなきゃならないだが、自分だけのために特別な味を作るよりはやりがいがある。

「今度、これで美味しいもの作つてあげますね」

「うん」

こういつ時のミラは可愛い。楽しみにされると聖良も嬉しくなる。とろみを付ける片栗粉らしきものと、豆板醤みたいなのと甘みのある味噌がある。豆腐っぽいものはこの国にあるので、これだけあれば麻婆豆腐に近い物が出来る。

いつかカレーも作りたいと思つたが、それにはウコンっぽい物が必要だ。あとクミン、コリアンダー、唐辛子。それ以外は分からない。同じ材料があつてもハードルは高いのに、記憶が薄れかけた今、再現は困難だ。

忘れたなら忘れたでいいのだが、いつか似たような物を作りたいと思つた。

「そつえば、レンファさんの住んでいるエンザは、どんな気候なんですか？」

「エンザは南北に延びた菱形の島国で、北と南では大きく違います。都だけなら、この国とそれほど違いはありませんが、漁業が盛んで食文化は全く異なります」

「お魚。美味しいですよ。赤身のお魚大好きなんです。そういえば、醤油とかあるんでしょうか」

日本風の醤油があつたら、完璧だ。この国にも似たような物はあ  
るが、高いし魚醤なので臭みがある。

「ええ、あります。次に用意してあります。種類が多いですから  
カートに別の皿が用意してある。あれだ。」

「本当ですか？ 嬉しい」  
これほど嬉しい事が他に有ろうか。

醤油こそ日本人の味。あの素材の味を引き立てる旨味を再び味わ  
えるのかと考えると、聖良の胸は熱くなる。

「この国には滅多に出回っていないのに、よくご存じでした。セ  
ーラさんは本当に食通でいらっしゃる。独創的な料理を作られると  
聞きました。何かよいアイデアでも浮かびましたか？」

「え、まあ、はい。試してみたいことがたくさんあります」

輸入品なら高価だ。無駄には出来ない。無難な料理ばかりになる  
が、それでも煮物を食べられるかと思うだけで、喜びだ。

「セーラ、今度は何を作るんです？」

「この前作った魚の節でお出汁をとって、お野菜を醤油と砂糖で味  
付けして煮込むんです。旨味が出て美味しいんですよ。そういえば、  
料理長にお願いされて節を持ってきたから、ここでも食べられるよ  
うになるかも知れませんね。ただ、魚になれていないと臭いかもし  
れませんけど」

手前味噌の下手くそな節だが、それでも十分美味しかった。

「へえ。それは楽しみです」

「おこちやま舌のアイスには、旨味なんて分からないでしょう  
けど」

「夫の味覚は母が育て、妻が育てるんです。私には味覚を育ててく

れる母がいなかったから、セーラが育てるんですよ

聖良は肩をすくめた。

竜の味覚を育てる。

何を食べても美味しいと思ってくれるなら、別に育っていても育っていなくてもいいのだ。

鈍感なぐらいの方が、楽で良い。

それでも育ったら育ったで、可愛いものだと思えるかも知れない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2509s/>

---

青色吐息

2011年12月11日21時48分発行